高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第150集

東野土居遺跡Ⅳ

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅹ

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ）

2018.2

高　知　県　教　育　委　員　会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

東野土居遺跡Ⅳ

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅹ

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ）

2018.2

高　知　県　教　育　委　員　会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

東野土居遺跡の発掘調査は，国土交通省が建設している高規格幹線道路南国安芸道路建設に伴い実施されました。本遺跡の調査は平成 21 年度から平成 23 年度までが発掘調査，平成 24 年度から平成 28 年度までが整理作業と計 8 ヵ年にわたります。東野土居遺跡の所在する香南市野市町では東側に流れる香宗川と西側に流れる物部川沿いに多くの遺跡が存在しており，これまで多くの発掘調査が行われてきました。特に物部川流域と香宗川上流域では考古資料を通して地域の歴史を復元することが可能となっていましたが，香宗川下流域においてはこれまでにあまり発掘事例がなく，地域の様相を把握できていませんでした。

8 年にわたる東野土居遺跡の発掘調査と整理作業から，本遺跡は弥生時代前期末から人々の営みがはじまり弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて最初の盛行期を迎え，次に古墳時代後期から古代・中世・近世と継続して繁栄した遺跡であることが明らかとなりました。100 軒を超える弥生時代と古墳時代の竪穴建物跡や古代の掘立柱建物跡群，溝に囲まれた中近世の屋敷跡群の存在は今後高知平野の歴史を語る上で貴重な資料になると思われます。

今回の報告書は，東野土居遺跡の東部に広がる弥生時代と古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物跡群を中心としたものです。弥生時代前期末から始まる東野土居遺跡の変遷をたどるうえにおいて貴重なものと考えられ，本書が地域の歴史や文化の解明に役立つことができれば幸いです。

高規格道路南国安芸道路建設に伴う東野土居遺跡の発掘調査は本書をもって最後となりますが，これまで国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所や香南市教育委員会をはじめ地元の皆様には多大なご理解とご協力を得ることができました。また，発掘作業と整理作業に従事していただきました作業員の皆様に対しましても厚く御礼を申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人高知県文化財団　埋蔵文化財センター
所長　松田直則

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い，平成 22・23 年度に発掘調査を実施した東野土居遺跡調査第ⅣＢ－２区及び調査第ⅣＣ区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は，高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 東野土居遺跡は香宗川右岸に広がる野市台地の縁辺部に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で，弥生時代及び古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物跡群，中世の屋敷跡群，近世の屋敷跡など多くの遺構・遺物が確認されている。調査面積は調査第ⅣＢ－２区が 1,848 ㎡，調査第ⅣＣ区が 1,394 ㎡で，発掘調査延べ面積は 3,242 ㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成 22 年度

総　　括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　小笠原孝夫
総　　務：同次長　森田尚宏，同総務課長　里見敦典，同主任　弘末節子
調 査 総 括：同調査課長兼企画調整班長　廣田佳久
調 査 担 当：同調査第四班長　出原恵三，同専門調査員　安岡猛・鍵山真一，同主任調査員　筒井三菜・下村裕，測量補助員　都築愛・秋山英洋
事務補助員：友永可奈

平成 23 年度

総　　括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　森田尚宏
総　　務：同次長　嶋崎るり子，同総務課長　里見敦典，同主任　黒岩千恵
調 査 総 括：同調査課長兼企画調整班長　廣田佳久
調 査 担 当：同調査第四班長　出原恵三，同主任調査員　筒井三菜，同調査員　菊池直樹・下村裕，測量補助員　岩原明美・矢野雅子・大賀幸子・都築愛・秋山英洋
事務補助員：友永可奈

平成 28 年度

総　　括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　松田直則
総　　務：同次長兼総務課長　東勝彦，同総務係長　吉森和子，同主幹　三谷有紀
整 理 総 括：同調査課長兼調査第一班長　吉成承三
整 理 担 当：同主任調査員　筒井三菜・下村裕，同調査員　矢野雅子，調査補助員　大賀幸子・前田早苗
事務補助員：笹野女怜

平成 29 年度

総　　括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　松田直則
総　　務：同次長兼総務課長　和田安弘，同総務係長　吉森和子，同主幹　三谷有紀
整 理 総 括：同調査課長兼調査第一班長　吉成承三
整 理 担 当：同調査第三班長　坂本裕一，同主任調査員　下村裕
事務補助員：谷幸絵

5. 本書の執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章1と2の(1)・第Ⅵ章1の(2)と2を下村，第Ⅱ章2の(2)と第Ⅵ章1の(3)・3の(4)・5を矢野，第Ⅲ章，第Ⅵ章3の(1)～(3)と4を筒井，第Ⅵ章1の(1)を久家が行い，編集は下村が行った。現場写真は調査第ⅣＢ－2区・調査第ⅣＣ区とも筒井と下村が撮影し，遺物写真は下村が撮影した。また，遺物観察表については整理作業員の方に指定した設定で変換作成して頂いた。
6. 遺構についてはST（竪穴建物跡），SB（掘立柱建物跡），SK（土坑），SD（溝跡），SG（土器棺墓），P（柱穴），SX（性格不明遺構）で表記した。なお，ST（竪穴建物跡）に関しては東野土居遺跡全体で通し番号としている。また，掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Ｎは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として弥生土器は縮尺1/4，その他は縮尺1/3で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表記している。また，遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。
8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては，下記の方々のご指導及び貴重なご教示，ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

   公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏
9. 調査にあたっては，国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また，地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き，厚く感謝の意を表したい。
10. 発掘調査及び整理作業については，多くの方々に労を厭わず作業に従事して頂き，感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は「10－1KH」と「11－1KH」と注記し，高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　序章

1. はじめに 1

2. 調査の契機と経過 1

3. 調査の概要 3

⑴ 遺跡の概要 3

⑵ 調査の方法 3

第Ⅱ章 ⅣＢ－2区

1. 調査の概要と基本層位 5

⑴ 調査の概要 5

⑵ 基本層位 5

2. 検出遺構と遺物 7

⑴ 調査区北側 7

① 竪穴建物跡 7

② 掘立柱建物跡 52

③ 土坑 58

④ 溝跡 62

⑤ 土器棺墓 65

⑥ ピット 69

⑦ 性格不明遺構 76

⑧ 遺物包含層 77

⑵ 調査区南側 120

① 竪穴建物跡 120

② 土坑 141

③ 溝跡 147

④ 土器棺墓 151

⑤ ピット 151

⑥ 性格不明遺構 153

⑦ 遺物包含層 154

第Ⅲ章 ⅣＣ区

1. 調査の概要と基本層位 159

⑴ 調査の概要 159

⑵ 基本層位 159

2. 検出遺構と遺物 160

⑴ 竪穴建物跡 160

⑵ 掘立柱建物跡 166

⑶ 柵列跡 172

(4) 土坑 172
(5) 溝跡 182
(6) 性格不明遺構 186
(7) ピット 190
(8) 遺物包含層 195
第Ⅳ章　東野土居遺跡Ⅲ・Ⅳ区の自然科学分析
1. はじめに 201
2. 試料 201
3. 分析方法 202
(1) 放射性炭素年代測定 202
(2) テフラ分析 202
(3) 植物珪酸体分析 202
(4) 微細物分析 203
(5) 炭化材同定 204
4. 結果 204
(1) 放射性炭素年代測定 204
(2) テフラ分析 205
(3) 植物珪酸体分析 206
(4) 微細物分析 207
(5) 炭化材同定 210
5. 考察 211
(1) テフラ分析結果 211
(2) 古植生 213
第Ⅴ章　東野土居遺跡出土土器の胎土分析
1. はじめに 217
2. 分析方法と試料 217
3. 分析結果 218
4. 考察 219
第Ⅵ章　考察
1. 弥生時代 221
(1) 弥生時代後期後葉から古墳時代前期の集落(久家) 221
(2) 弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器(下村) 232
(3) 土器棺墓(矢野) 244
2. 古墳時代 261
(1) 遺構(下村) 261
(2) 遺物(下村) 261
3. 古代 262
(1) 東野土居遺跡において検出された古代の遺構(筒井) 262

(2) 東野土居遺跡と周辺の古代遺跡(筒井) 269
(3) 遺物(筒井) 272
(4) 古代の瓦について(矢野) 273
4. 中世 275
(1) 東野土居遺跡で検出された主な屋敷跡(筒井) 276
(2) 東野土居遺跡出土の遺物について(筒井) 286
(3) 東野土居遺跡出土の手づくね皿について(筒井) 287
5. 近世 290
(1) 遺構(矢野) 290
(2) 遺物(矢野) 291

挿図目次

図1－ 1 東野土居遺跡位置図 1
図1－ 2 調査区配置図(S=1/8,000) 2
図1－ 3 グリッド設定図(S=1/13,000) 3
図2－ 1 調査区北壁セクション図 5
図2－ 2 ST69・70 6
図2－ 3 ST69上層出土遺物実測図 7
図2－ 4 ST69中層出土遺物実測図 8
図2－ 5 ST69下層出土遺物実測図 9
図2－ 6 ST69床面出土遺物実測図 9
図2－ 7 ST70上層出土遺物実測図 10
図2－ 8 ST70中層出土遺物実測図 11
図2－ 9 ST70下層出土遺物実測図 11
図2－ 10 ST71 12
図2－ 11 ST71・72出土遺物実測図 13
図2－ 12 ST73 14
図2－ 13 ST73埋土出土遺物実測図 15
図2－ 14 ST73床面・ピット出土遺物実測図 16
図2－ 15 ST74 17
図2－ 16 ST74埋土出土遺物実測図1 18
図2－ 17 ST74埋土出土遺物実測図2 19
図2－ 18 ST74中央ピット出土遺物実測図 20
図2－ 19 ST75埋土出土遺物実測図1 22
図2－ 20 ST75埋土出土遺物実測図2 23
図2－ 21 ST75埋土出土遺物実測図3 24
図2－ 22 ST75埋土出土遺物実測図4 25

図2－ 23　ST75埋土出土遺物実測図5 …… 26
図2－ 24　ST75埋土出土遺物実測図6 …… 27
図2－ 25　ST75床面・ピット出土遺物実測図 …… 28
図2－ 26　ST76埋土出土遺物実測図1 …… 30
図2－ 27　ST76埋土出土遺物実測図2 …… 31
図2－ 28　ST76床面出土遺物実測図 …… 31
図2－ 29　ST77埋土出土遺物実測図 …… 32
図2－ 30　ST78 …… 32
図2－ 31　ST78埋土出土遺物実測図 …… 33
図2－ 32　ST79 …… 34
図2－ 33　ST79埋土出土遺物実測図1 …… 35
図2－ 34　ST79埋土出土遺物実測図2 …… 36
図2－ 35　ST79埋土出土遺物実測図3 …… 37
図2－ 36　ST79埋土出土遺物実測図4 …… 38
図2－ 37　ST79埋土出土遺物実測図5 …… 40
図2－ 38　ST79埋土出土遺物実測図6 …… 41
図2－ 39　ST79床面出土遺物実測図 …… 42
図2－ 40　ST79床面・中央ピット出土遺物実測図 …… 43
図2－ 41　ST80 …… 44
図2－ 42　ST80埋土出土遺物実測図 …… 44
図2－ 43　ST81 …… 45
図2－ 44　ST81埋土出土遺物実測図1 …… 45
図2－ 45　ST81埋土出土遺物実測図2 …… 46
図2－ 46　ST82 …… 47
図2－ 47　ST82埋土出土遺物実測図 …… 47
図2－ 48　ST83埋土出土遺物実測図 …… 48
図2－ 49　ST84 …… 49
図2－ 50　ST84埋土出土遺物実測図 …… 50
図2－ 51　ST86埋土出土遺物実測図 …… 51
図2－ 52　ST86床面出土遺物実測図 …… 52
図2－ 53　ST87床面・ST88埋土出土遺物実測図 …… 52
図2－ 54　SB1 …… 53
図2－ 55　SB1出土遺物実測図 …… 53
図2－ 56　SB2 …… 54
図2－ 57　SB2出土遺物実測図 …… 55
図2－ 58　SB3 …… 56
図2－ 59　SB3出土遺物実測図 …… 57
図2－ 60　SK5出土遺物実測図 …… 58

図2－ 61　SK7 …… 58
図2－ 62　SK7出土遺物実測図 …… 59
図2－ 63　SK8 …… 59
図2－ 64　SK8・10出土遺物実測図 …… 60
図2－ 65　SK14出土遺物実測図 …… 61
図2－ 66　SK16出土遺物実測図 …… 62
図2－ 67　SD1・3出土遺物実測図 …… 63
図2－ 68　SD6出土遺物実測図 …… 64
図2－ 69　SG1 …… 65
図2－ 70　SG1出土遺物実測図 …… 66
図2－ 71　SG2 …… 67
図2－ 72　SG2出土遺物実測図1 …… 67
図2－ 73　SG2出土遺物実測図2 …… 68
図2－ 74　SG3 …… 69
図2－ 75　SG3出土遺物実測図 …… 69
図2－ 76　SG4 …… 70
図2－ 77　SG4出土遺物実測図 …… 71
図2－ 78　SG5 …… 72
図2－ 79　SG5出土遺物実測図1 …… 73
図2－ 80　SG5出土遺物実測図2 …… 74
図2－ 81　ピット出土遺物実測図 …… 75
図2－ 82　P16～18 …… 76
図2－ 83　SX1出土遺物実測図 …… 76
図2－ 84　第Ⅰ層出土遺物実測図1 …… 77
図2－ 85　第Ⅰ層出土遺物実測図2 …… 78
図2－ 86　第Ⅱ層出土遺物実測図1 …… 79
図2－ 87　第Ⅱ層出土遺物実測図2 …… 80
図2－ 88　第Ⅱ層出土遺物実測図3 …… 81
図2－ 89　第Ⅲ層出土遺物実測図1 …… 83
図2－ 90　第Ⅲ層出土遺物実測図2 …… 84
図2－ 91　第Ⅲ層出土遺物実測図3 …… 85
図2－ 92　第Ⅲ層出土遺物実測図4 …… 85
図2－ 93　第Ⅲ層出土遺物実測図5 …… 86
図2－ 94　第Ⅲ層出土遺物実測図6 …… 87
図2－ 95　第Ⅳ層出土遺物実測図1 …… 89
図2－ 96　第Ⅳ層出土遺物実測図2 …… 90
図2－ 97　第Ⅳ層出土遺物実測図3 …… 91
図2－ 98　第Ⅳ層出土遺物実測図4 …… 92

図２－ 99　第Ⅳ層出土遺物実測図５……93
図２－100　第Ⅳ層出土遺物実測図６……94
図２－101　第Ⅳ層出土遺物実測図７……96
図２－102　第Ⅳ層出土遺物実測図８……97
図２－103　第Ⅳ層出土遺物実測図９……98
図２－104　第Ⅳ層出土遺物実測図10……99
図２－105　第Ⅳ層出土遺物実測図11……100
図２－106　第Ⅳ層出土遺物実測図12……101
図２－107　第Ⅳ層出土遺物実測図13……102
図２－108　第Ⅳ層出土遺物実測図14……103
図２－109　第Ⅴ層出土遺物実測図１……104
図２－110　第Ⅴ層出土遺物実測図２……105
図２－111　第Ⅴ層出土遺物実測図３……106
図２－112　第Ⅴ層出土遺物実測図４……107
図２－113　第Ⅴ層出土遺物実測図５……108
図２－114　第Ⅴ層出土遺物実測図６……108
図２－115　第Ⅴ層出土遺物実測図７……109
図２－116　第Ⅴ層出土遺物実測図８……110
図２－117　第Ⅴ－１層出土遺物実測図１……112
図２－118　第Ⅴ－１層出土遺物実測図２……113
図２－119　第Ⅴ－１層出土遺物実測図３……114
図２－120　第Ⅴ－１層出土遺物実測図４……115
図２－121　第Ⅴ－２層出土遺物実測図……116
図２－122　第Ⅴ－３層出土遺物実測図……117
図２－123　第Ⅴ－４層出土遺物実測図……118
図２－124　第Ⅴ－５層出土遺物実測図……119
図２－125　ST89・90埋土出土遺物実測図……120
図２－126　ST91・92出土遺物実測図……122
図２－127　ST93埋土出土遺物実測図……124
図２－128　ST94埋土出土遺物実測図……124
図２－129　ST95……125
図２－130　ST95埋土出土遺物実測図……125
図２－131　ST96埋土出土遺物実測図……125
図２－132　ST97……126
図２－133　ST97上・中層出土遺物実測図……127
図２－134　ST97下層・ST98中層出土遺物実測図……128
図２－135　ST97床面出土遺物実測図……129
図２－136　ST97埋土・P2出土遺物実測図……130

図2－137　ST98上層出土遺物実測図 130
図2－138　ST99埋土出土遺物実測図 131
図2－139　ST100埋土出土遺物実測図 132
図2－140　ST101 132
図2－141　ST101上層出土遺物実測図 133
図2－142　ST101中層出土遺物実測図 134
図2－143　ST101床面・埋土出土遺物実測図 135
図2－144　ST101埋土出土遺物実測図 136
図2－145　ST102・103埋土出土遺物実測図 137
図2－146　ST104埋土出土遺物実測図 138
図2－147　ST105・SD24埋土出土遺物実測図 139
図2－148　ST106埋土出土遺物実測図 140
図2－149　SK18出土遺物実測図 141
図2－150　SK23出土遺物実測図 142
図2－151　SK27 142
図2－152　SK29 142
図2－153　SK29出土遺物実測図 143
図2－154　SK32出土遺物実測図 143
図2－155　SK33 143
図2－156　SK34 144
図2－157　SK36出土遺物実測図 144
図2－158　SK38出土遺物実測図 145
図2－159　SK47 146
図2－160　SD14 147
図2－161　SD15出土遺物実測図 147
図2－162　SD24 148
図2－163　SD24出土遺物実測図 148
図2－164　SG6 149
図2－165　SG6出土遺物実測図 149
図2－166　SG7 150
図2－167　SG7出土遺物実測図1 151
図2－168　SG7出土遺物実測図2 152
図2－169　ピット出土遺物実測図 153
図2－170　SX2出土遺物実測図 154
図2－171　トレンチ出土遺物実測図 154
図2－172　第Ⅱ層出土遺物実測図 155
図2－173　第Ⅲ層出土遺物実測図1 156
図2－174　第Ⅲ層出土遺物実測図2 157

図2－175　第Ⅳ層出土遺物実測図 158
図3－ 1　調査区北壁セクション 159
図3－ 2　ST107 160
図3－ 3　ST107出土遺物実測図 160
図3－ 4　ST108 161
図3－ 5　ST108出土遺物実測図1 163
図3－ 6　ST108出土遺物実測図2 164
図3－ 7　ST108出土遺物実測図3 165
図3－ 8　ST109・110 166
図3－ 9　ST109出土遺物実測図 167
図3－ 10　SB1 167
図3－ 11　SB1出土遺物実測図 168
図3－ 12　SB2 169
図3－ 13　SB2出土遺物実測図 169
図3－ 14　SB3～6 170
図3－ 15　SB6出土遺物実測図 171
図3－ 16　SB7・8 171
図3－ 17　SB7出土遺物実測図 171
図3－ 18　SA1 172
図3－ 19　SA1出土遺物実測図 172
図3－ 20　SK1～5 173
図3－ 21　SK4出土遺物実測図 173
図3－ 22　SK6 174
図3－ 23　SK6出土遺物実測図 174
図3－ 24　SK11出土遺物実測図 174
図3－ 25　SK13 175
図3－ 26　SK13出土遺物実測図 175
図3－ 27　SK15・18 176
図3－ 28　SK15出土遺物実測図 176
図3－ 29　SK18出土遺物実測図 177
図3－ 30　SK24・28 177
図3－ 31　SK24出土遺物実測図 178
図3－ 32　SK25出土遺物実測図 178
図3－ 33　SK29・30 178
図3－ 34　SK29出土遺物実測図 179
図3－ 35　SK30出土遺物実測図 179
図3－ 36　SK31出土遺物実測図 179
図3－ 37　SK33 179

図3－ 38　SK33出土遺物実測図 180
図3－ 39　ハンダ土坑1～4 181
図3－ 40　SD2出土遺物実測図 182
図3－ 41　SD7・14 182
図3－ 42　SD7・14出土遺物実測図 182
図3－ 43　SD11 183
図3－ 44　SD11出土遺物実測図 184
図3－ 45　SD13 185
図3－ 46　SD13出土遺物実測図 185
図3－ 47　SD15出土遺物実測図 186
図3－ 48　SD16出土遺物実測図 186
図3－ 49　SX1 187
図3－ 50　SX1出土遺物実測図1 188
図3－ 51　SX1出土遺物実測図2 189
図3－ 52　SX2 190
図3－ 53　SX2出土遺物実測図 190
図3－ 54　SX3出土遺物実測図1 191
図3－ 55　SX3出土遺物実測図2 192
図3－ 56　SX4出土遺物実測図 193
図3－ 57　ピット出土遺物実測図 193
図3－ 58　第Ⅱ層出土遺物実測図 195
図3－ 59　第Ⅲ層出土遺物実測図 196
図3－ 60　第Ⅳ層出土遺物実測図 197
図3－ 61　包含層出土遺物実測図1 198
図3－ 62　包含層出土遺物実測図2 199
図4－ 1　ⅣB－1区重鉱物及び火山ガラス比較分析結果 204
図4－ 2　ⅣB－1区火山ガラスの屈曲率 205
図4－ 3　植物珪酸体分析結果 207
図4－ 4　東野土居遺跡テフラ分析地点層所対比図 212
図4－ 5　遺跡周辺の地形分類図 213
図4－ 6　遺跡の位置図と自然科学分析を実施した周辺遺跡 215
図5－ 1　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較1 218
図5－ 2　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較2 218
図5－ 3　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較3 219
図5－ 4　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較4 219
図6－ 1　弥生時代の最大居住域 221
図6－ 2　時期別の竪穴建物跡分布図 226
図6－ 3　時期別の竪穴建物跡群模式図 227

図6－ 4　徳王子広本遺跡調査区配置図 229
図6－ 5　時期別の動向模式図 230
図6－ 6　燃焼施設分類図 231
図6－ 7　各形態の出現頻度 235
図6－ 8　各調整の出現頻度 236
図6－ 9　甕形土器の編年試案(S=1/12) 238
図6－ 10　壺形土器の編年試案(S=1/12) 240
図6－ 11　鉢形土器の編年試案(S=1/8) 241
図6－ 12　高杯・器台形土器の編年試案(S=1/8) 242
図6－ 13　搬入土器の編年試案(甕・壺形土器:S=1/12, 高杯・器台形土器:S=1/8) 243
図6－ 14　土器棺墓1(田村遺跡群・下ノ坪遺跡) 245
図6－ 15　土器棺墓2(東野土居遺跡) 246
図6－ 16　土器棺墓3(祈年遺跡1) 247
図6－ 17　土器棺墓4(祈年遺跡2) 248
図6－ 18　土器棺墓5(祈年遺跡3・深渕遺跡・ひびのきサウジ遺跡・五軒屋敷遺跡) 249
図6－ 19　土器棺墓6(岩村遺跡・奥谷南遺跡) 250
図6－ 20　土器棺墓7(伏原遺跡・東崎遺跡) 251
図6－ 21　東野土居遺跡周辺の古代遺跡 264
図6－ 22　下ノ坪遺跡建物変遷図 266
図6－ 23　田村遺跡群(Loc39・F4区)古代建物変遷図 270
図6－ 24　曽我遺跡・十万遺跡古代建物変遷図 271
図6－ 25　SK134出土遺物実測図(S=1/8) 272
図6－ 26　SK145出土遺物実測図(S=1/8) 272
図6－ 27　SX2出土八葉複弁蓮華文軒丸瓦 274
図6－ 28　土居地区小字図(S=1/5,000) 279
図6－ 29　東野土居遺跡出土の手づくね皿(S=1/6) 288
図6－ 30　十万遺跡・田村遺跡群出土の手づくね皿(S=1/6) 289
図6－ 31　銘瓦1(暗渠4) 292
図6－ 32　銘瓦2(暗渠4) 293
図6－ 33　銘瓦3(暗渠4) 294

表目次

表4－ 1　遺構埋土分析試料一覧 201
表4－ 2　放射性炭素年代測定結果 203
表4－ 3　暦年較正結果 203
表4－ 4　重鉱物・火山ガラス比分析結果 204
表4－ 5　火山ガラスの屈曲率 205

表4－6　植物珪酸体含量 206
表4－7　種実分析結果 208
表6－1　ヒビノキⅠ式段階の竪穴建物跡一覧 222
表6－2　ヒビノキⅡ式段階の竪穴建物跡一覧 223
表6－3　ヒビノキⅢ式段階の竪穴建物跡一覧 224
表6－4　馬場末式段階の竪穴建物跡一覧 225
表6－5　時期不明の竪穴建物跡一覧 225
表6－6　抽出した甕形土器一覧 234
表6－7　土器棺墓一覧1 252
表6－8　土器棺墓一覧2 253
表6－9　土器棺墓一覧3 254
表6－10　土器棺墓一覧4 255
表6－11　土器棺墓一覧5 256
表6－12　土器棺墓一覧6 257
表6－13　土器棺墓一覧7 258
表6－14　土器棺墓一覧8 259
表6－15　土器棺墓一覧9 260
表6－16　東野土居遺跡古代建物跡一覧 263
表6－17　下ノ坪遺跡建物跡一覧 265
表6－18　深渕遺跡建物跡一覧 266
表6－19　田村遺跡群建物跡一覧1 267
表6－20　田村遺跡群建物跡一覧2 268
表6－21　曽我遺跡建物跡一覧 268
表6－22　十万遺跡建物跡一覧 269
表6－23　東野土居遺跡屋敷区画一覧 278
表6－24　田村遺跡群屋敷区画一覧1 283
表6－25　田村遺跡群屋敷区画一覧2 284

遺物観察表目次

遺物観察表 1（ⅣB－2区） 299
遺物観察表 2（ⅣB－2区） 300
遺物観察表 3（ⅣB－2区） 301
遺物観察表 4（ⅣB－2区） 302
遺物観察表 5（ⅣB－2区） 303
遺物観察表 6（ⅣB－2区） 304
遺物観察表 7（ⅣB－2区） 305
遺物観察表 8（ⅣB－2区） 306

遺物観察表 9（ⅣB－2区）……307
遺物観察表10（ⅣB－2区）……308
遺物観察表11（ⅣB－2区）……309
遺物観察表12（ⅣB－2区）……310
遺物観察表13（ⅣB－2区）……311
遺物観察表14（ⅣB－2区）……312
遺物観察表15（ⅣB－2区）……313
遺物観察表16（ⅣB－2区）……314
遺物観察表17（ⅣB－2区）……315
遺物観察表18（ⅣB－2区）……316
遺物観察表19（ⅣB－2区）……317
遺物観察表20（ⅣB－2区）……318
遺物観察表21（ⅣB－2区）……319
遺物観察表22（ⅣB－2区）……320
遺物観察表23（ⅣB－2区）……321
遺物観察表24（ⅣB－2区）……322
遺物観察表25（ⅣB－2区）……323
遺物観察表26（ⅣB－2区）……324
遺物観察表27（ⅣB－2区）……325
遺物観察表28（ⅣB－2区）……326
遺物観察表29（ⅣB－2区）……327
遺物観察表30（ⅣB－2区）……328
遺物観察表31（ⅣB－2区）……329
遺物観察表32（ⅣB－2区）……330
遺物観察表33（ⅣB－2区）……331
遺物観察表34（ⅣB－2区）……332
遺物観察表35（ⅣB－2区）……333
遺物観察表36（ⅣB－2区）……334
遺物観察表37（ⅣB－2区）……335
遺物観察表38（ⅣB－2区）……336
遺物観察表39（ⅣB－2区）……337
遺物観察表40（ⅣB－2区）……338
遺物観察表41（ⅣB－2区）……339
遺物観察表42（ⅣB－2区）……340
遺物観察表43（ⅣB－2区）……341
遺物観察表44（ⅣB－2区）……342
遺物観察表45（ⅣB－2区）……343
遺物観察表46（ⅣB－2区）……344

遺物観察表47(ⅣB－2区) 345
遺物観察表48(ⅣB－2区) 346
遺物観察表49(ⅣB－2区) 347
遺物観察表50(ⅣC区) 351
遺物観察表51(ⅣC区) 352
遺物観察表52(ⅣC区) 353
遺物観察表53(ⅣC区) 354
遺物観察表54(ⅣC区) 355
遺物観察表55(ⅣC区) 356
遺物観察表56(ⅣC区) 357
遺物観察表57(ⅣC区) 358
遺物観察表58(ⅣC区) 359
遺物観察表59(ⅣC区) 360

遺構計測表目次

竪穴建物跡計測表1 363
竪穴建物跡計測表2 364
掘立柱建物跡計測表 365
土坑計測表1 366
土坑計測表2 367
土坑計測表3 368
土坑計測表4 369

図版目次

図版 1　調査前風景(西より)
調査前風景(東より)
図版 2　調査区北壁セクション(南より)
調査区北壁セクション(南より)
図版 3　調査区西部遺構検出状態(西より)
調査区西部遺構完掘状態(西より)
図版 4　調査区東部遺構検出状態(東より)
調査区東部遺構完掘状態(東より)
図版 5　SB2検出状態(南より)
SB2完掘状態(北より)
図版 6　ST69バンクセクション(南西より), ST70バンクセクション(南東より), ST70遺物出土状態, ST71弥生土器(61)出土状態, ST73石製品(85)出土状態, ST74バンクセクション(北西より), ST74遺物出土状態, ST74弥生土器(113)出土状態
図版 7　ST74弥生土器(114･115)出土状態, ST75バンクセクション(西より), ST75弥生土器(132)出土状態, ST75弥生土器(133)出土状態, ST78バンクセクション(東より), ST78弥生土器(242)出土状態, ST79バンクセクション(南より), ST79弥生土器(319･320)出土状態

図版 8　ST79 弥生土器(254)出土状態，ST79 石製品(314)出土状態，ST79(中央ピット)弥生土器(325)出土状態，ST81 バンクセクション(北東より)，ST82 土製品(347)出土状態，SB3(P10)石製品(389)出土状態，SK14 弥生土器(407)出土状態，SK14 弥生土器(414)出土状態
図版 9　SD3 須恵器(424)出土状態，SG1 弥生土器(448･449)出土状態，SG2 弥生土器(450･451)出土状態，SG3 弥生土器(453)出土状態，SG4 弥生土器(454～456)出土状態，SG5 弥生土器(458･459)出土状態，P12 弥生土器(483･484)出土状態，第Ⅱ層須恵器(538)出土状態
図版10　第Ⅲ層須恵器(596)出土状態，第Ⅲ層土師質土器(599)出土状態，第Ⅲ層土製品(601)出土状態，第Ⅲ層土製品(605)出土状態，第Ⅳ層弥生土器(705)出土状態，第Ⅴ層弥生土器(799･800)出土状態，第Ⅴ－1層弥生土器(913)出土状態，第Ⅴ－2層石製品(938)出土状態
図版11　調査区西部遺構検出状態(東より)
調査区西部遺構完掘状態(東より)
図版12　調査区西部遺構検出状態(東より)
調査区西部遺構完掘状態(西より)
図版13　調査区中央部遺構検出状態(東より)
調査区中央部遺構完掘状態(東より)
図版14　調査区中央部遺構検出状態(西より)
調査区中央部遺構完掘状態(西より)
図版15　調査区中央拡張部遺構検出状態(西より)，調査区中央拡張部遺構完掘状態(西より)，ST92 遺物出土状態，ST93 遺物出土状態，ST95 バンクセクション(南西より)
図版16　調査区東部遺構検出状態(東より)
調査区東部遺構完掘状態(東より)
図版17　調査区東部遺構検出状態(西より)
調査区東部遺構完掘状態(西より)
図版18　ST97 バンクセクション(南西より)，ST97 遺物出土状態，ST97 弥生土器(1009)出土状態，ST97 石製品(1012)出土状態，ST99 遺物出土状態
図版19　調査区東部遺構検出状態(西より)
調査区東部遺構完掘状態(西より)
図版20　ST101 遺物出土状態
ST101 遺物出土状態
図版21　SG6 弥生土器(1154)出土状態
SG7 弥生土器(1155～1157)出土状態
図版22　SG7 セクション(東より)，SG7 弥生土器(1156･1157)出土状態，SG7 弥生土器(1157)出土状態，ST105 弥生土器(1109)･庄内式土器(1122)出土状態，P21 弥生土器(1160)･東阿波型土器(1163)出土状態，P21 弥生土器(1161)･東阿波型土器(1163)出土状態，P22 弥生土器(1164)出土状態，第Ⅲ層石製品(1209)出土状態
図版23　弥生土器(壷)
弥生土器(壷)
図版24　土製品(支脚)
弥生土器(甕)
図版25　弥生土器(甕･ミニチュア)，石製品(叩石･砥石･台石)
図版26　弥生土器(壷･甕)
図版27　弥生土器(壷･甕･鉢)，石製品(叩石)
図版28　弥生土器(甕･高杯)，石製品(磨石)
図版29　弥生土器(壷･甕)，石製品(大型蛤刃石斧･扁平片刃石斧)
図版30　弥生土器(甕)，土製品(支脚)，石製品(砥石･穿孔具)
図版31　弥生土器(壷･甕)，土製品(支脚)，石製品(叩石･母材)
図版32　弥生土器(甕)，土製品(甕)，瓦(丸瓦･平瓦)，土製品(支脚)
図版33　弥生土器(甕)，土製品(支脚)，石製品(扁平片刃石斧･磨石)

図版34　弥生土器(壷・甕・高杯)，土製品(支脚)
図版35　弥生土器(壷・甕)，土師器(甕)
図版36　弥生土器(甕・ミニチュア)
図版37　弥生土器(壷・甕)，土師器(高杯)
図版38　弥生土器(壷・甕)，土師器(壷)
図版39　弥生土器(甕・高杯)，庄内式土器(甕)，瓦(軒丸瓦)，石製品(砥石)
図版40　弥生土器(壷・甕・器台)，東阿波型土器(甕)
図版41　弥生土器(壷・甕)，瓦質土器(羽釜)，瓦(軒丸瓦)，石製品(砥石・石斧)
図版42　弥生土器(鉢)
図版43　弥生土器(壷・鉢)，東阿波型土器(甕)
図版44　弥生土器(甕・鉢・高杯・ミニチュア)，土師器(壷)
図版45　弥生土器(甕・鉢)，瓦質土器(擂鉢)，瓦(平瓦)，石製品(石庖丁・砥石)
図版46　弥生土器(鉢・ミニチュア)，土製品(支脚)
図版47　弥生土器(鉢・器台)，須恵器(転用硯)，土製品(土錘)，石製品(石庖丁)
図版48　弥生土器(鉢・高杯)，土師器(高杯)，土製品(支脚)，石製品(砥石)
図版49　弥生土器(壷・甕・鉢・高杯・ミニチュア)，土師器(鉢)
図版50　弥生土器(壷・甕・鉢)，土師器(甕)，石製品(石庖丁)
図版51　弥生土器(鉢)，石製品(石庖丁)，金属製品(鉄鏃)
図版52　弥生土器(鉢・高杯・ミニチュア)，土製品(土玉)
図版53　須恵器(杯蓋・杯身)，土師質土器(杯)，瓦質土器(鍋)，土製品(円盤・支脚・土錘)，石製品(石庖丁)
図版54　弥生土器(壷・鉢・ミニチュア)，土師質土器(小皿)
図版55　弥生土器(鉢)，須恵器(杯身)，土製品(支脚・盤・土錘)，石製品(石鏃・石庖丁)
図版56　弥生土器(壷・鉢)，須恵器(高杯)，石製品(石庖丁)，金属製品(鉄斧)
図版57　弥生土器(壷・鉢・高杯)，石製品(石庖丁)
図版58　弥生土器(鉢)，土師質土器(羽釜・皿)，石製品(石庖丁・スクレイパー)
図版59　調査前風景(西より)
調査区南西部遺構検出状態(西より)
図版60　調査区北西部調査前風景(西より)
調査区北西部遺構検出状態(西より)
図版61　調査区南西部遺構完掘状態(西より)
調査区南西部遺構完掘状態(東より)
図版62　調査区東部遺構完掘状態(東より)
調査区北西部遺構完掘状態(西より)
図版63　調査区北東部北壁セクション(南東より)
調査区北西部北壁セクション(南より)
図版64　ST108完掘状態(西より)，ST108遺物出土状態1，ST108遺物出土状態2，ST108弥生土器(1256)出土状態，ST108バンクセクション(東より)
図版65　SB1完掘状態(北より)
SB2完掘状態(西より)
図版66　調査区北西部遺構完掘状態(東より)，ST107完掘状態(北より)，ST109南北セクション(東より)，ST109南北セクション(西より)，ST109石製品(1274)出土状態，ST109石製品(1275)出土状態，SK6遺物出土状態，SK13セクション(南より)
図版67　SK15完掘状態(北より)，SK18弥生土器(1301)出土状態，SK33遺物出土状態，SK33セクション(東より)，ハンダ土坑1完掘状態(東より)，ハンダ土坑2～4完掘状態(北より)，SD11バンクセクション(北より)，SD11完掘状態(南より)
図版68　SD13バンクセクション(北より)，SD13完掘状態(北より)，SX1完掘状態(西より)，SX2土製品(1360)出土状態，P4土師質土器(1393)出土状態，P8土師器(1394)出土状態，P11瀬戸焼(1396)出土

状態，P13土師質土器(1392)出土状態
図版69　弥生土器(甕･鉢･高杯)
図版70　弥生土器(壷･甕)，陶器(碗)，磁器(猪口)，瓦(平瓦)，石製品(石庖丁)
図版71　弥生土器(壷･鉢)，土師器(皿)，土師質土器(皿)，土製品(支脚)，陶器(碗･鉢)
図版72　弥生土器(壷)，土師質土器(杯･皿)，青磁(大皿)，瀬戸焼(皿)，磁器(香炉)，石製品(剥片)，金属製品(銭貨)
図版73　1.重鉱物(試料番号3)，2.重鉱物(試料番号6)，3.重鉱物(試料番号11)，4.軽鉱物(試料番号3)
図版74　種実遺体・炭化物

付図目次

付図1　東野土居遺跡調査第ⅣＢ－2・ⅣＣ区遺構平面図(S＝1/250)
付図2　東野土居遺跡調査第ⅣＢ－2区遺構平面図(S＝1/150)
付図3　東野土居遺跡調査第ⅣＣ区遺構平面図(S＝1/150)
付図4　東野土居遺跡遺構変遷図(S＝1/2,000)
付図5　東野土居遺跡遺構変遷図(S＝1/1,000)
付図6　東野土居遺跡出土土器編年試案図

第Ⅰ章　序章

1. はじめに

本書は，高知県教育委員会が平成21年度に実施した試掘調査の結果を受け，平成22・23年度に実施した高知南国道路外埋蔵文化財発掘調査のうち東野土居遺跡における調査第ⅣＢ－２区及び調査第ⅣＣ区の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は，国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画及び実施している高規格幹線道路南国安芸道路建設工事に伴い，工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い，遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

東野土居遺跡は平成 20 年度に実施した事前の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地範囲が拡大した遺跡で，本書で報告するのは平成 22・23 年度に行った東野土居遺跡調査第ⅣＢ－２区及び調査第ⅣＣ区の発掘調査報告である。

本遺跡は香宗川右岸に広がる野市台地上に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で，弥生時代及び古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物跡群，中世の屋敷跡群，近世の屋敷跡などが確認されている。

2. 調査の契機と経過

南国安芸道路は，高知市と安芸市間36㎞を結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか，四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で，昭和 62 年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長 36 ㎞と長く，高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からであり，まず埋蔵文化財の取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果，当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)があるもののこれまで発掘調査が実施されておらず，遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘調査及び確認調査を平成 19 年度までは財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター)，平成 20 年度からは高知県教育委員会が順次実施した。

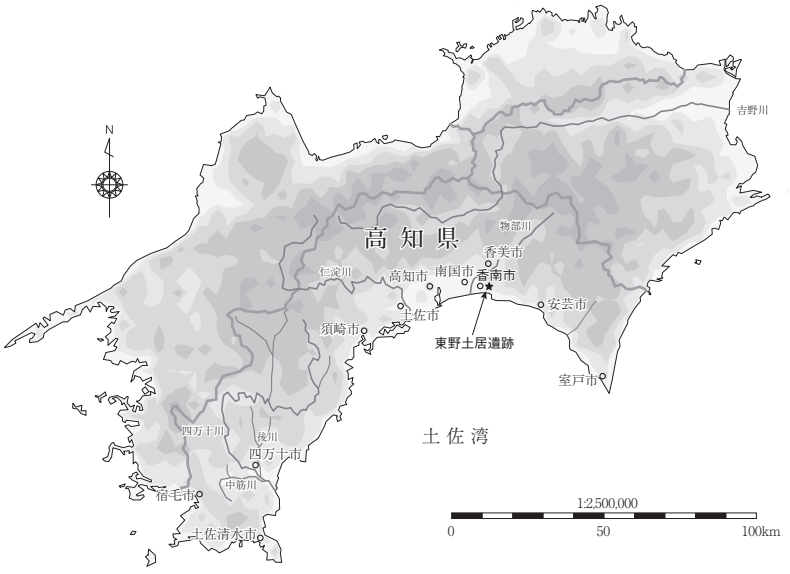


図1－1　東野土居遺跡位置図

平成 20 年度の南国安芸道路

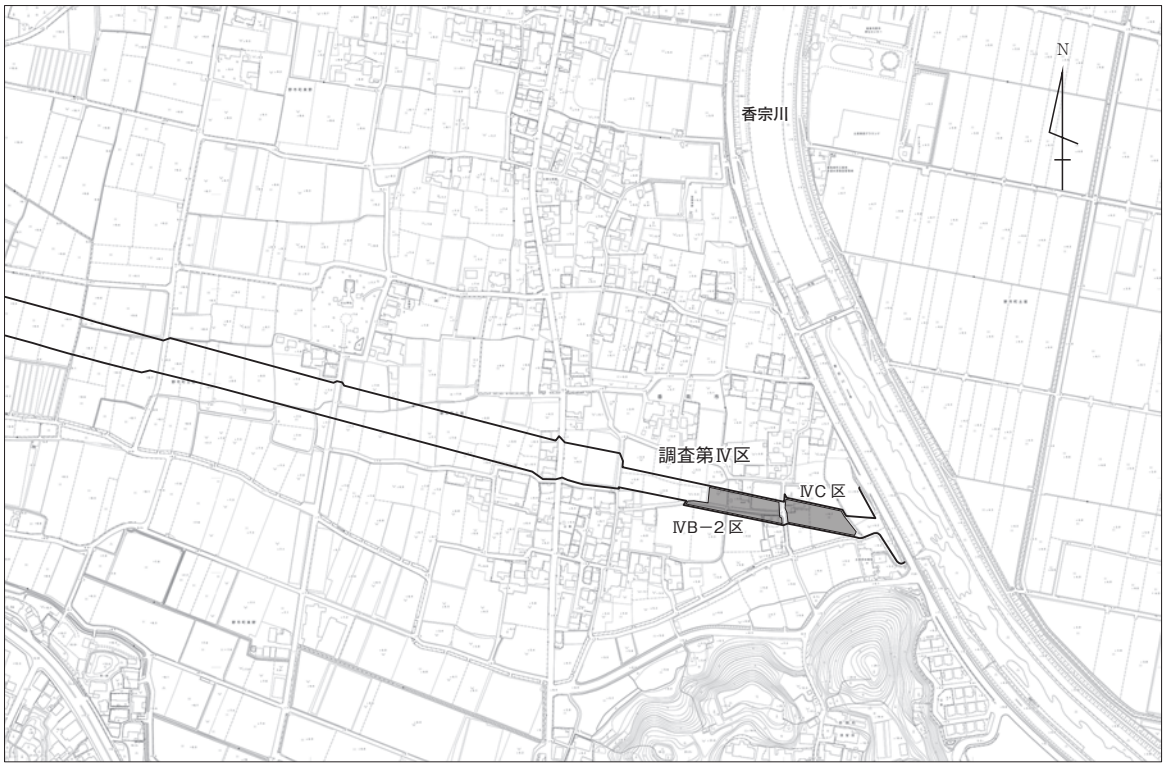


図1－2　調査区配置図(S=1/8,000)

関係では土居地区が対象となり試掘調査が実施された結果，調査対象地に設定したトレンチから遺構が検出され，当該箇所が本発掘調査の必要があると判断された。また，平成21年度には確認調査が実施され，調査対象地で36ヵ所のトレンチから遺構が検出された。本遺跡は平成元年に実施された分布調査の結果確認された遺跡であり，地名をとって「東野土居遺跡」と命名されていたが，この試掘調査の結果を受けて周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)の範囲は拡大することとなった。このため，国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の間で本発掘調査について協議を行い，平成21年度から本発掘調査を実施することとなった。

調査第ⅣＢ－２区及び調査第ⅣＣ区の調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け，平成22年度は平成22年4月1日付け，平成23年度は平成23年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで，本発掘調査を実施した。

平成16年度以降に南国安芸道路の路線内で本発掘調査が実施された周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)は，本遺跡のほか口槇ヶ谷遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)や花宴遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)，徳王子前島遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)，坪井遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ)，徳王子大崎遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ)，徳王子広本遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ)，東野土居遺跡Ⅰ(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ)，東野土居遺跡Ⅱ(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅷ)，東野土居遺跡Ⅲ(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅸ)であり，順次発掘調査報告書が公刊されている。

3. 調査の概要

⑴ 遺跡の概要

東野土居遺跡は平成元年に実施された分布調査で確認されていた遺跡で，平成20年度の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地範囲は拡大され，弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となった。

本遺跡は香宗川右岸の野市台地上に立地しており，調査対象区域東部において弥生時代終末から古墳時代前期及び古墳時代後期の竪穴建物跡100軒以上が検出され，当該期には大規模な集落が存在していたことが明らかとなった。

古代では調査対象区域東部で掘立柱建物跡群が確認されており，当該期の瓦なども出土していることから当時の官衙関連施設や寺院に関連する施設があった可能性が考えられる。また，中世では調査対象区域中央部から東部にかけて一辺約35～55mを測る10区画以上の屋敷跡や幅3～4m，深さ1.5～2mを測る堀に囲まれた一辺約80mの屋敷跡などが確認されており，当該期の屋敷群が展開していたものとみられる。

近世では調査対象区域西部で溝に囲まれた屋敷跡が確認されており，当該期の村落が広がっていたと考えられる。

⑵ 調査の方法

試掘調査の結果を受けて，平成22年度に世界測地系の4級基準点を設置し，発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(Ⅳ系)の基準点を使用し，X=61,800m，Y=19,400m(北緯33°33′02″，東経133°44′28″，真北方向角－0°07′59″)を原点とし，A～F(100mグリッド:大グリッド)を組み，調査対象区域内を北から順にアルファベット，西から順にアラビア数字を配した。100mグリッドの中にはそれぞれのアルファベットを冠する20m(中グリッド:1～25)グリッドを設定し，調査で使用する4mグリッド(小グリッド:1～25)にはA1－1と枝番を付した。なお，遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上までは機械力を導入し，遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお，遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し，機械力で遺構検出を行った。また，遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て，古

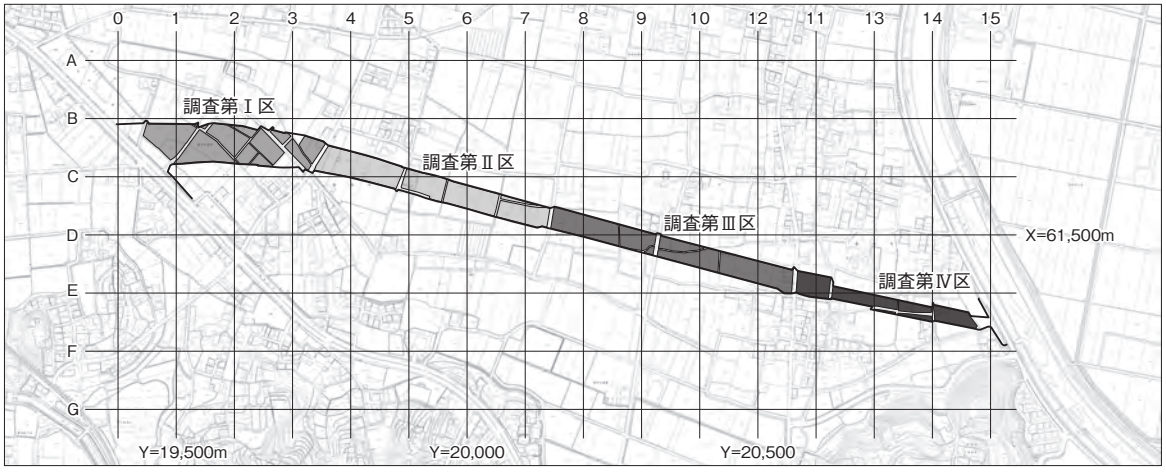


図1－3　グリッド設定図(S=1/13,000)

環境の復元にも重点を置いた。なお，下層確認調査も含めた調査総面積は 3,242 ㎡であり，出土遺物の総コンテナ数は360箱を数える。

第Ⅱ章　ⅣB－2区

1. 調査の概要と基本層位

(1) 調査の概要

調査対象区域の東部に位置する調査区で，面積は1,848㎡，遺構は調査区北東部を除く全域で検出されている。弥生時代と古墳時代の竪穴建物跡38軒や土器棺墓，古代の掘立柱建物跡3棟，中世の区画溝など弥生時代から中世の遺構が多数検出されており，遺物は弥生時代から中世のものが多数出土している。

調査区北東部は第Ⅴ層上面が遺構検出面であったが，埋土である黒褐色シルト質中粒砂との識別が困難であった。このため，グリッドを基準にバンクを設定し掘り下げたが，バンクの壁面でも遺構の掘方が判断できなかったため，本来遺物包含層ではないが第Ⅴ層での遺物取り上げを行っている。

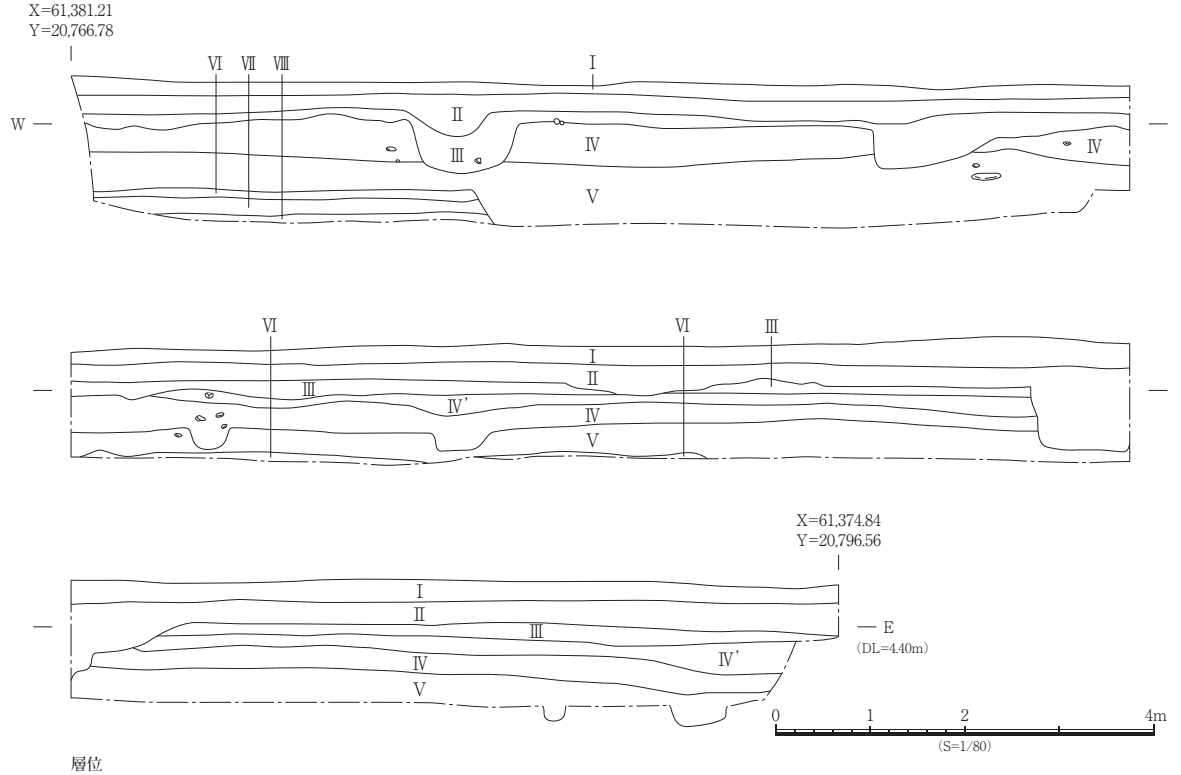
(2) 基本層位(図2－1)

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

調査区北壁セクション

第Ⅰ層　細礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂層

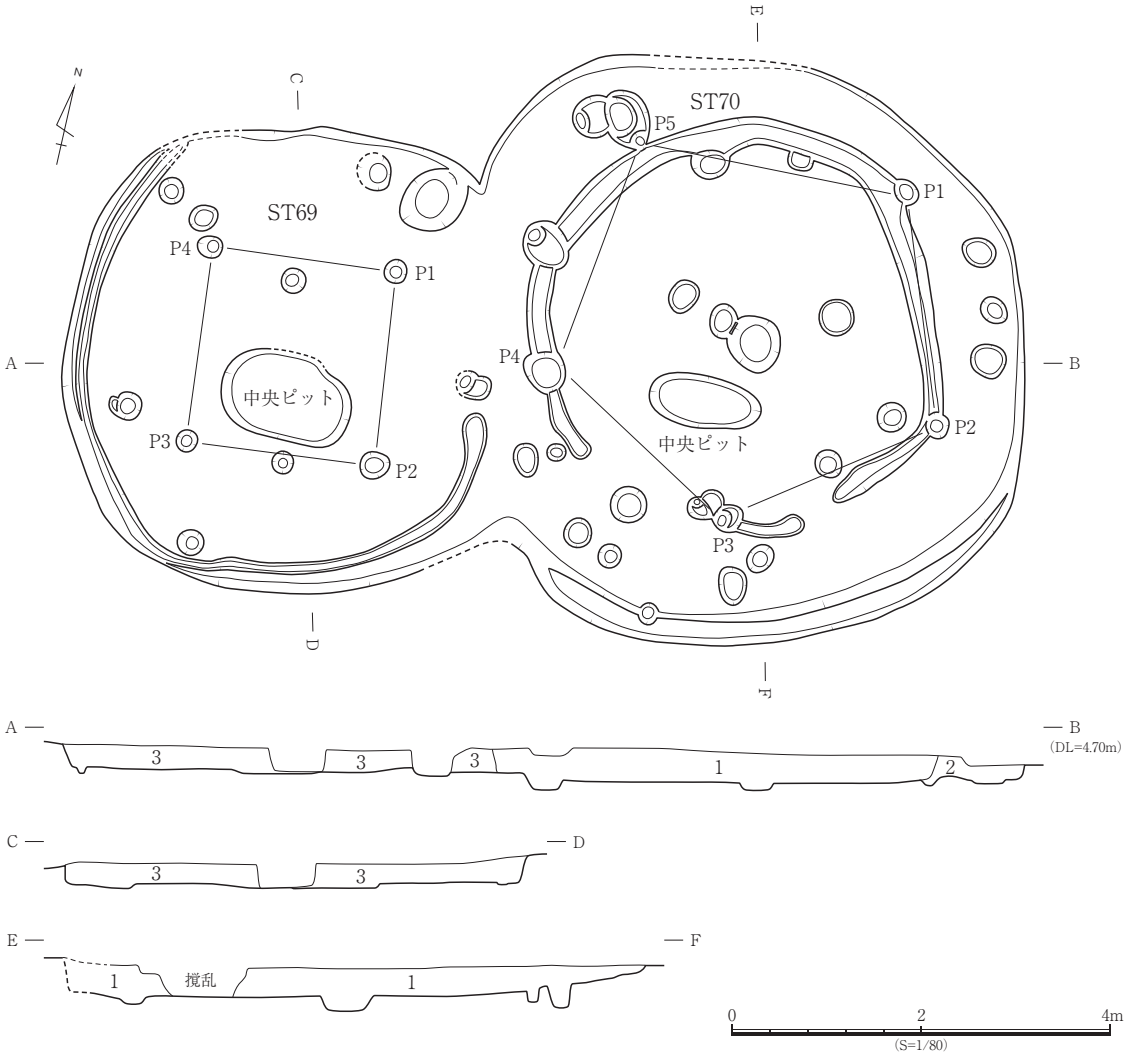
第Ⅱ層　土器を含む細～大礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層(中世の遺物包含層)



層位
第Ⅰ層　細礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂層
第Ⅱ層　土器を含む細～大礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層(中世の遺物包含層)
第Ⅲ層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層(古代の遺物包含層)
第Ⅳ層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層(弥生時代・古墳時代の遺物包含層)
第Ⅳ'層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂層(弥生時代・古墳時代の遺物包含層)
第Ⅴ層　細～中礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質中粒砂層(調査区東部の地山)
第Ⅵ層　褐色(10YR4/6)シルト質細粒～中粒砂層(調査区西部の地山)
第Ⅶ層　黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層
第Ⅷ層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～粗粒砂層

図2－1　調査区北壁セクション図

第Ⅲ層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層(古代の遺物包含層)
第Ⅳ層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層
(弥生時代･古墳時代の遺物包含層)
第Ⅳ'層　土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂層
(弥生時代･古墳時代の遺物包含層)
第Ⅴ層　細～中礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質中粒砂層(調査区東部の地山)
第Ⅵ層　褐色(10YR4/6)シルト質細粒～中粒砂層(調査区西部の地山)
第Ⅶ層　黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層
第Ⅷ層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～粗粒砂層



遺構埋土
1. 土器と褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト(地山)をブロック状に含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂(ST70)
2. 土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂(ST70)
3. 土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルト(ST69)

図2－2　ST69･70

2. 検出遺構と遺物

(1) 調査区北側

① 竪穴建物跡

ST69(図2－2)

調査区西部で検出した不整円形を呈する竪穴建物跡で，ST70 に切られる。長軸は約 4.9m，短軸は約 4.6m を測り，面積は約 17.7 ㎡である。検出面からの深さは約 29 ㎝で，床面の標高は約 4.1m を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，床面では中央ピット，ピット，壁溝を検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約 1.4m，短軸約 0.9m を測る。床面からの深さは約 7 ㎝で，埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂である。検出したピットのうち主柱穴はP1～4と考えられ，床面からの深さはP1が35㎝，P2が25㎝，P3が28㎝，P4が35㎝を測る。壁溝は北東側を除く壁際で確認され，確認長約9.3m，幅約16㎝，深さ2～7㎝を測る。

出土遺物は上層から弥生土器710点，石製品1点，中層から弥生土器301点，石製品1点，下層から弥生土器234点，石製品1点，床面から弥生土器45点，中央ピットから弥生土器111点，P1から弥生土器2点，P3から弥生土器13点，P4から弥生土器4点，壁溝から弥生土器5点がみられ，上層では弥生土器6点(1～6)，石製品1点(7)，中層では弥生土器11点(8～18)，石製品1点(19)，下層では弥生土器4点(20～23)，石製品1点(24)，床面では弥生土器7点(25～31)が図示できた。

上層出土遺物(図2－3　1～7)

1～6は弥生土器で，1～5は壷である。1～4は口縁部破片で，1は口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面にはタタキのちハケを施す。2・3は口縁部内外面にヨコナデを施し，頸部内外面にはハケ調整がみられ，口縁端部は凹線状に凹む。4は複合口縁を呈し，口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケを施す。5は胴部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にタタキ目とハケ調整が残る。6は甕と考えられる胴部破片である。口縁部内面にヨコナデを施し，胴部内面にヨコ方向

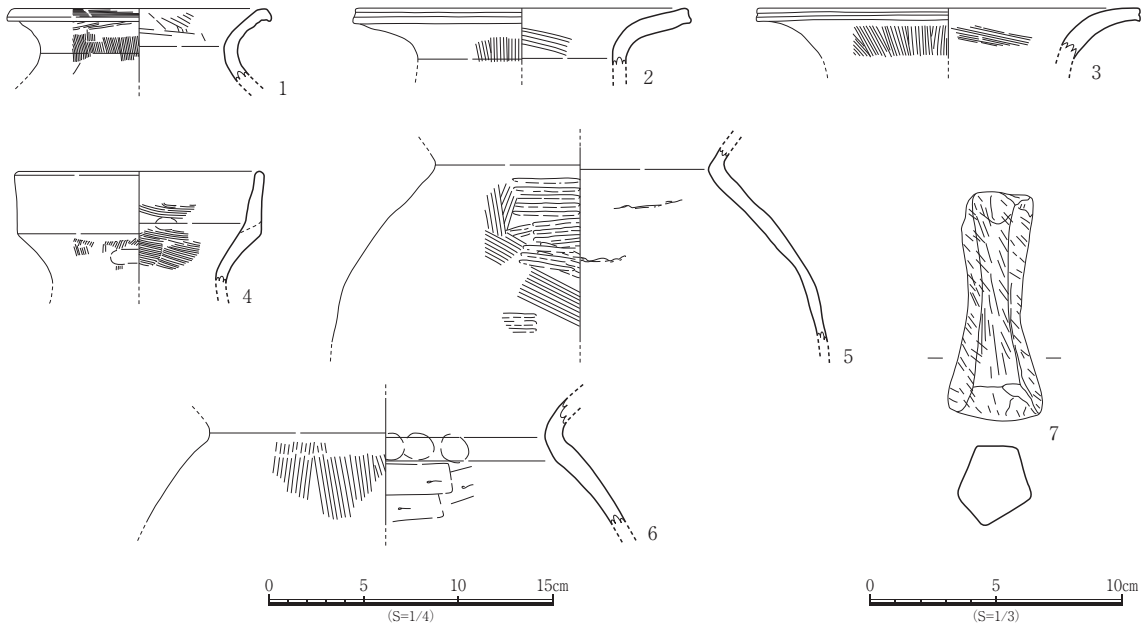


図2－3　ST69上層出土遺物実測図

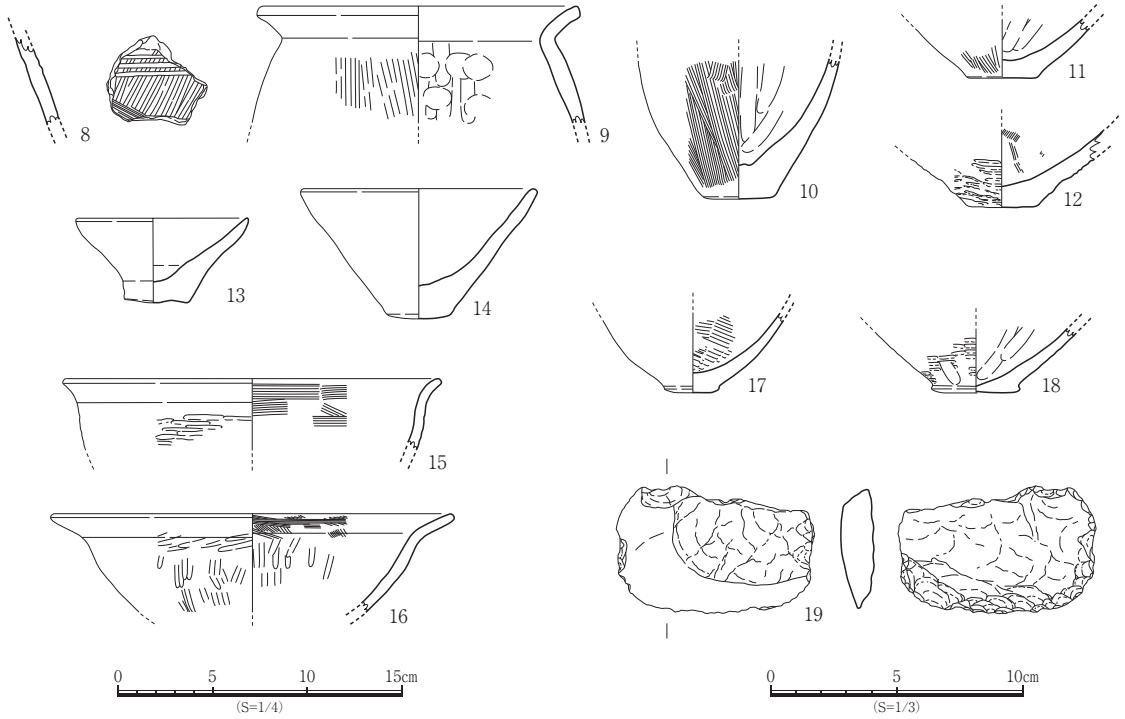


図2－4　ST69中層出土遺物実測図

のヘラケズリ調整，胴部外面にハケ調整とヨコナデ調整が認められる。7は石製品の砥石である。断面五角形を呈し，石材は流紋岩と考えられる。

中層出土遺物(図2－4　8～19)

8～18は弥生土器で，8は壷とみられる胴部破片である。内面にナデを施し，外面にはハケ調整と3条の沈線がみられる。9～12は甕である。9は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデのち指オサエ，胴部外面にハケを施す。10～12は胴部から底部にかけての破片である。10･11は胴部内面にナデ，胴部外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整が認められる。12は胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキを施す。底部外面にはナデ調整がみられ，内面には爪状圧痕が残る。13～18は鉢である。13･14は口縁部が斜め上方に立ち上がるもので，ともに摩耗のため調整は不明である。15･16は口縁端部が屈曲するものである。15は内面にハケ，口縁部外面にヨコナデを施し，体部外面にはタタキ目がみられる。16は口縁部内面にハケ，口縁部外面にナデを施し，体部内外面にはヘラミガキ調整が認められる。17･18は底部破片である。17は全体的に摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にハケ調整が残る。18は体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデを施し，底部外面にはナデ調整が認められる。19は石製品の石庖丁である。打製で，両端にわずかな抉りが認められる。石材は砂岩である。

下層出土遺物(図2－5　20～24)

20～23は弥生土器で，20～22は壷とみられる胴部から底部にかけての破片である。20は摩耗が著しく調整は不明瞭であるが，胴部内面にハケ調整，底部内面に指頭圧痕が残る。21は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。22は胴部下端と底部の内面に強いナデ，胴中央部内面と胴部外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。23は甕とみられる底部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にハケ調整が認められる。24は石製品の石錘とみられるもので，両端に抉りがみられる。石材は砂岩である。

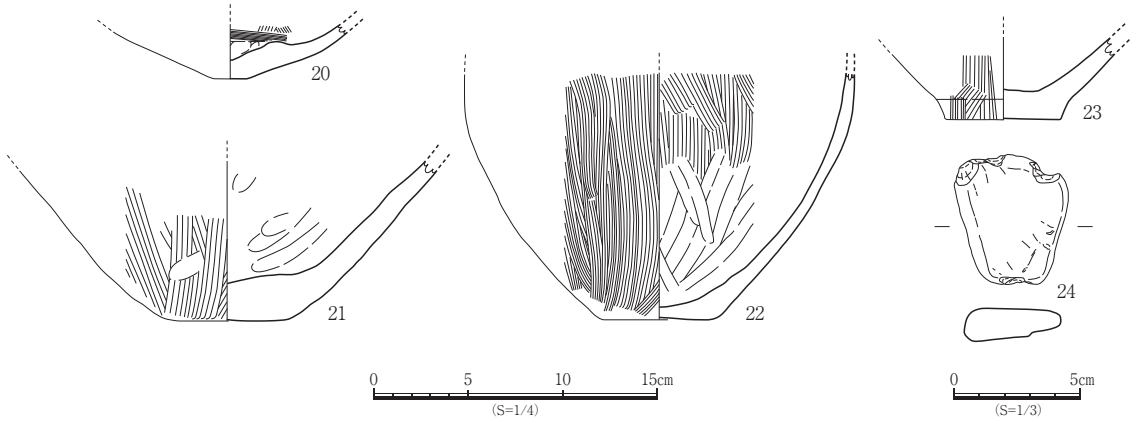


図2－5　ST69下層出土遺物実測図

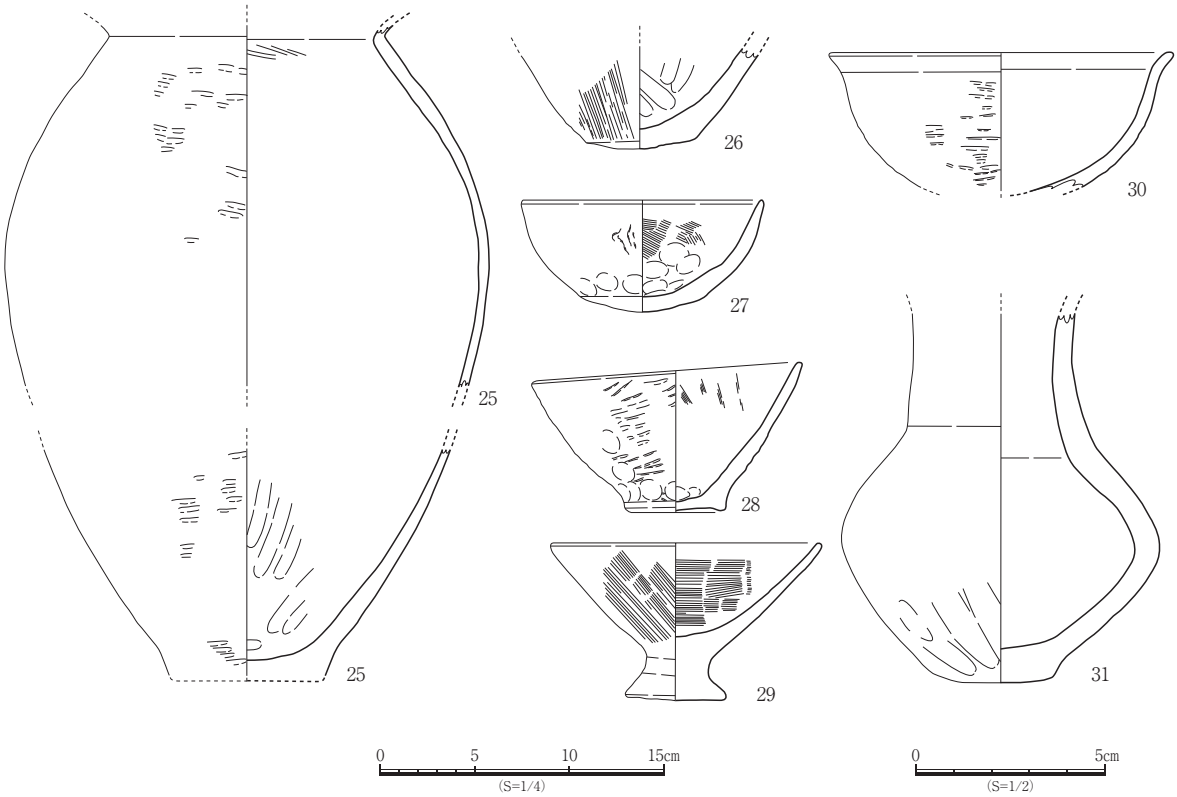


図2－6　ST69床面出土遺物実測図

床面出土遺物(図2－6　25～31)

25～31は弥生土器で，25・26は甕である。25は口縁部を欠損するもので，摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部下半の内面にナデ調整，外面にタタキ目とナデ調整が認められる。26は底部破片で，内面にナデ，外面にハケを施す。27～30は鉢である。27は体部が内湾して立ち上がるもので，口縁部内外面にヨコナデ，体上半部内面にハケと底部内面に指オサエを施し，体部から底部外面にナデ調整と指頭圧痕がみられる。28は体部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので，口縁部内面にハケ，底部内面に指オサエ，外面全体にタタキを施し，体部外面下半には指オサエを加える。29は台付きで，体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケを施し，台部に

はナデ調整がみられる。30は口縁端部が屈曲するものである。摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁端部内外面にヨコナデ調整，外面にタタキ目が認められる。31はミニチュア土器とみられるもので，丁寧な調整を施す。頸部内外面にヨコナデ調整，胴部内外面にナデ調整と指頭圧痕が認められる。

ST70（図2－2）

調査区西部で検出した多角形とみられる竪穴建物跡で，ST69を切る。長軸は約6.2m，短軸は約5.6mを測り，面積は約27.3㎡である。検出面からの深さは約32㎝で，床面の標高は約4.0mを測る。埋土は1層が土器と褐色（10YR4/4）細粒砂質シルト（地山）をブロック状に含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/2）シルト質中粒砂，2層が土器を含む細～大礫混じりの黒褐色（10YR3/1）シルト質中粒砂で，床面では中央ピット，ピット，壁溝を検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置する。平面形は長楕円形を呈し，長軸約1.2m，短軸約0.6mを測る。床面からの深さは約11㎝で，埋土は土器を含む細礫混じりの黒色（10YR3/1）中粒砂質シルトである。検出したピットのうち主柱穴は　P1～5と考えられ，床面からの深さはP1が23㎝，P2が39㎝，P3が22㎝，P4が13㎝，P5が19㎝を測る。壁溝は南西部の一部で未確認であるが，確認長約10.1m，幅約26㎝，深さ約6㎝を測る。

出土遺物は上層から弥生土器1,264点，土製品1点，中層から弥生土器666点，庄内式土器1点，下

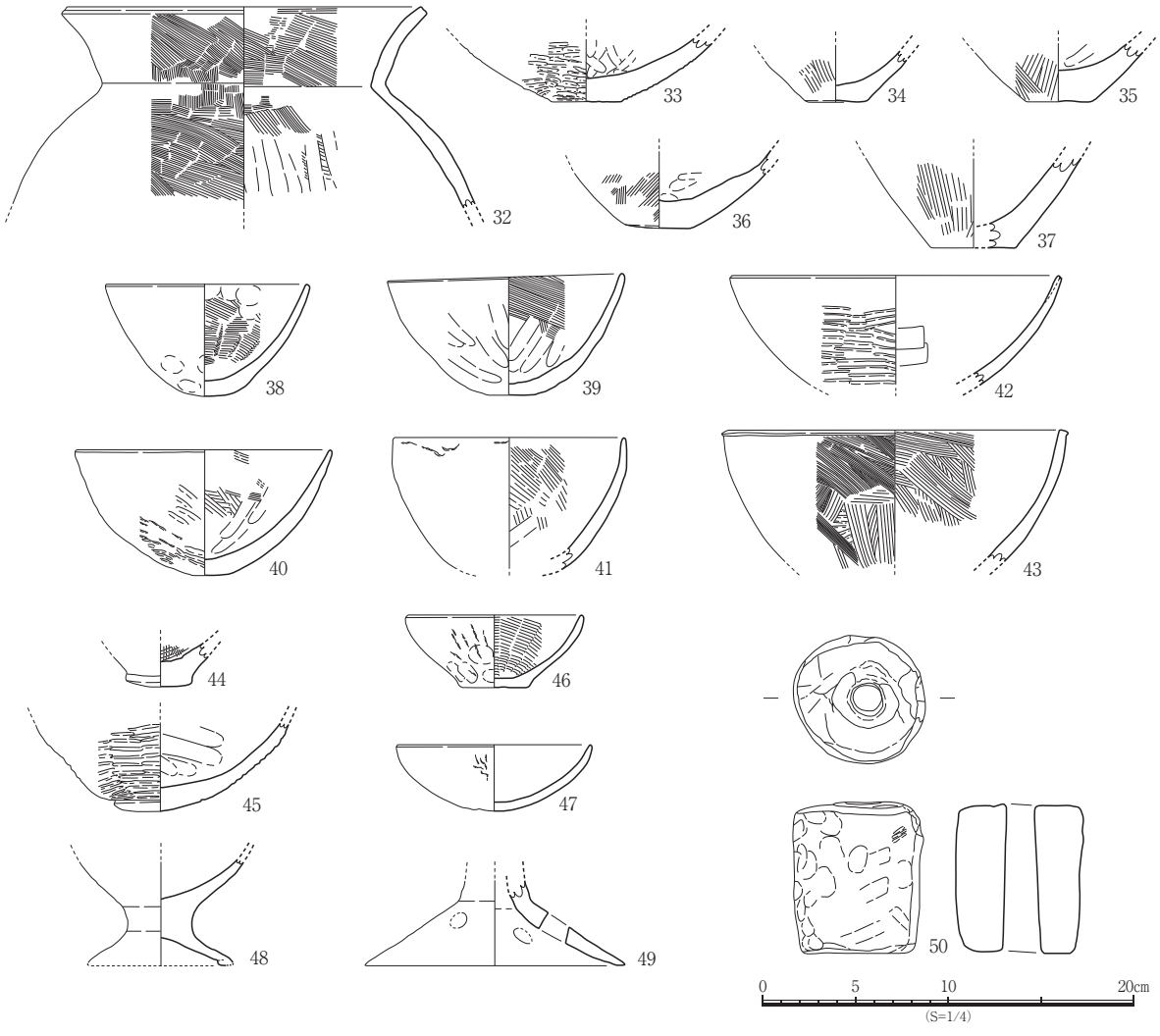


図2－7　ST70上層出土遺物実測図

層から弥生土器645点，石製品1点，床面から弥生土器70点，中央ピットから弥生土器11点，P1から弥生土器1点，P3から弥生土器2点，P4から弥生土器10点，壁溝から弥生土器13点がみられ，上層では弥生土器18点(32～49)，土製品1点(50)，中層では弥生土器3点(51～53)，庄内式土器1点(54)，下層では弥生土器5点(55～59)，石製品1点(60)が図示できた。

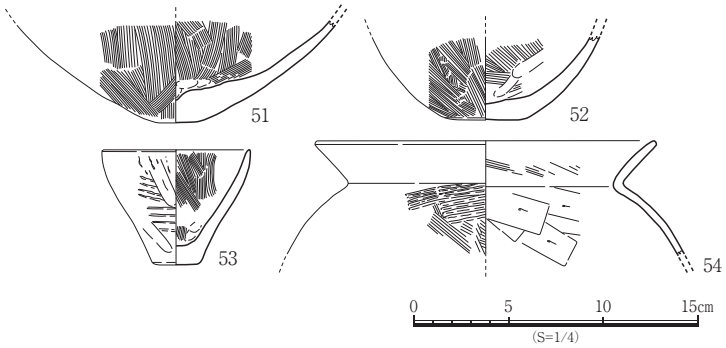


図2－8　ST70中層出土遺物実測図

上層出土遺物(図2－7　32～50)

32～49は弥生土器で，32・33は壺である。32は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部はやや外反して立ち上がる。口縁端部はヨコナデのため面をなす。口縁部内外面にはハケ，胴部内面にはハケのちナデ，胴部外面にはタタキのちハケを施す。33は底部破片で，内面にナデ調整，外面にタタキ目がみられる。34～37は甕とみられる底部破片である。34・35は内面にナデ，外面にハケのちナデを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。36は内面に指オサエ，外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。37は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にハケ調整，底部外面にナデ調整が認められる。38～48は鉢で，38～43は体部が内湾して立ち上がるものである。38・40は全体の形状が復元できたもので，39は完存する。38は丸底，39・40は平底を呈する。38は口縁部から体部内面にハケを施し，口縁部には指オサエを加える。底部内面と外面全体にはナデ調整が認められ，体部下半には指オサエを加える。39は口縁部から体部内面にハケ，底部内面と外面全体にナデを施す。40

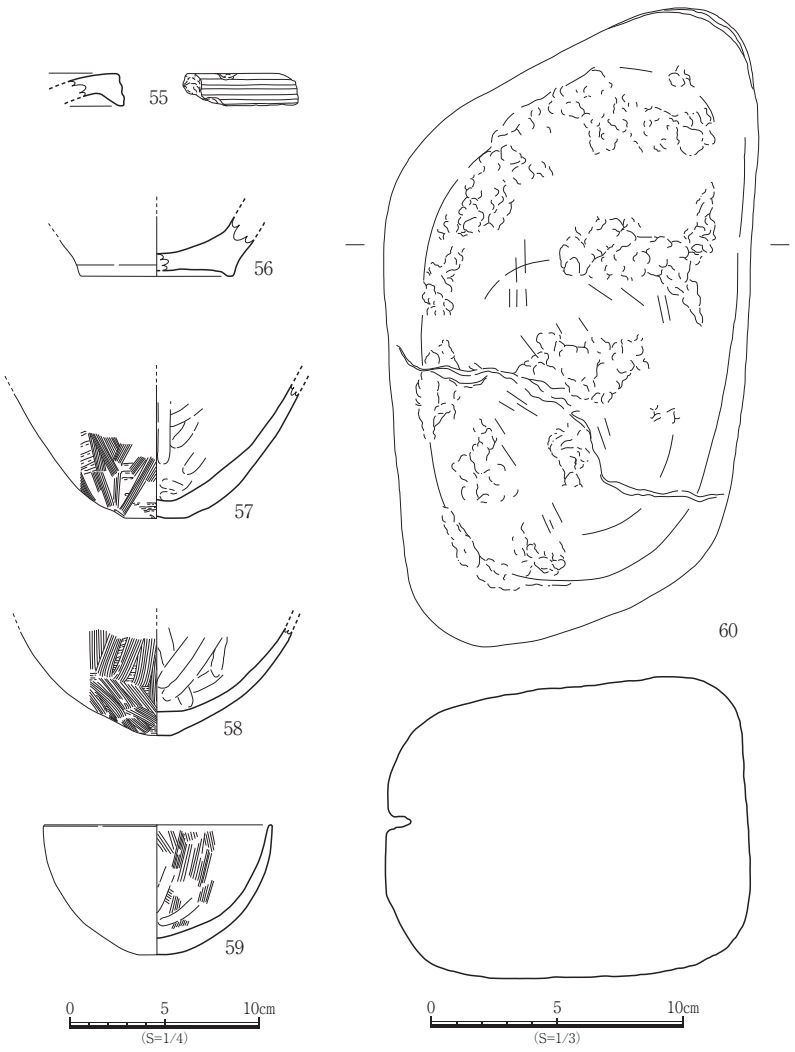


図2－9　ST70下層出土遺物実測図

は内面全体にハケのちナデ，口縁部から体部外面にタタキを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。41 ～ 43 は底部が欠損するものである。41 は内面にハケ，外面にナデを施し，体部内面下半にはナデ調整を加える。42 は内面に丁寧なヘラナデ，外面にタタキを施す。43 は口縁端部がヨコナデのため面をなし，口縁部内外面にハケ，体部内面下半にナデ，体部外面下半にタタキのちハケを施す。44・45 は底部が高台状を呈する底部破片で，44 は内面にハケ，外面にナデを施す。45 は内面に丁寧なナデ，外面にタタキを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。46・47 は手づくね成形で，全体の形状が復元できた。46 は平底を呈し，体部はやや内湾して立ち上がる。内面全体にハケ，外面全体に指オサエとナデ，底部内外面にナデを施す。47 は丸底を呈し，体部は内湾して立ち上がる。摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にナデ調整が認められる。48 は脚が付くもので，口縁部と脚端部を欠損する。摩耗のため調整は不明である。49 は高杯の脚部破片である。穿孔は 5 孔とみられ，摩耗のため調整は不明である。50 は土製品の支脚もしくは土錘と考えられるもので，ほぼ完存する。中央に径2.1 cmの穿孔がみられ，表面にはタタキ目とナデ調整が認められる。

中層出土遺物（図2－8　51～54）

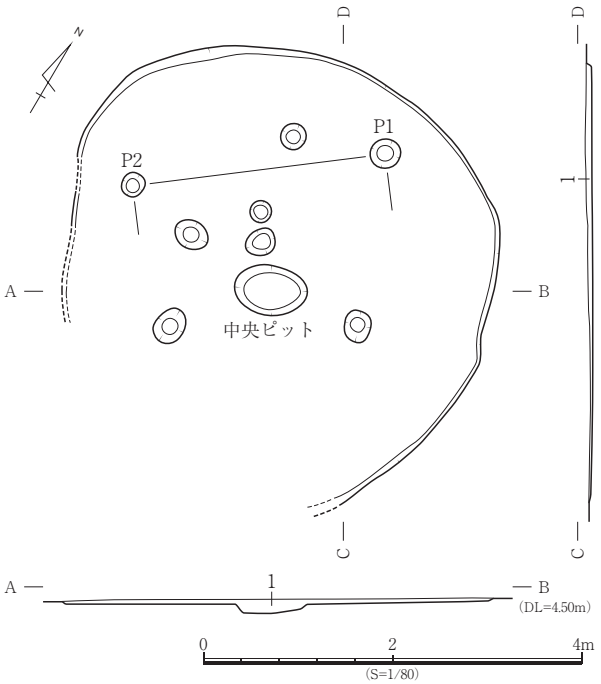
51 ～ 53 は弥生土器で，51 は壷とみられる胴部から底部にかけての破片である。胴部内外面に丁寧なハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。52・53 は鉢である。52 は底部破片で，体部はやや内湾して立ち上がる。内面にはハケのちナデ，外面には丁寧なハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。53 は手づくね成形で，全体の形状が復元できた。内面全体にハケ，外面にタタキのちナデを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。54 は庄内式土器で，甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部内面にハケ，口縁部外面にヨコナデを施し，胴部内面にはヘラケズリ調整，胴部外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。

下層出土遺物（図2－9　55～60）

55 ～ 59 は弥生土器で，55 は壷の口縁端部破片である。口縁端部を下方に拡張し，凹線を施す。内面には密なヘラミガキ調整，外面にはヨコナデ調整が認められる。56 ～ 58 は甕とみられる底部破片である。56 は底部外面がやや凹み，摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にナデ調整が認められる。57・58 は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，57 は底部外面にはタタキ目，58 はナデ調整がみられる。59 は鉢で，体部は内湾して立ち上がる。口縁端部内外面にヨコナデ，内面全体にハケ，外面全体にナデを施し，内面下半にはナデ調整を加える。60 は石製品の台石で，片面に弱い使用痕が認められる。石材は砂岩である。

ST71（図2－10）

調査区中央部で検出した不整円形を呈する竪穴建物跡で，ST72 を切る。径は約 4.7m を



遺構埋土
1. 土器を含む細～中礫混じりの褐灰色（10YR4/1）細粒～中粒砂質シルト

図2－10　ST71

測り，面積は約17.3㎡である。検出面からの深さは約６㎝で，床面の標高は約4.2mを測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトで，床面では中央ピット，ピットを検出した。中央ピットは床面のやや南寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸約0.8m，短軸約0.4mを測る。床面からの深さは約15㎝で，埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトである。検出したピットのうち主柱穴はP1・2と考えられ，床面からの深さはP1が31㎝，P2が12㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器277点，土製品５点，床面から弥生土器35点，中央ピットから弥生土器13点，P1から弥生土器３点，P2から弥生土器３点がみられ，埋土では弥生土器１点(61)，土製品１点(62)，中央ピットでは弥生土器１点(63)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－11　61･62)

61は弥生土器の壷である。広口壷で，口縁部は外反して立ち上がり，口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部から肩部内面にヨコナデ，胴部内面にナデ，外面全体にハケを施す。62は土製品の支脚もしくは土錘で，半分を欠損する。中央には径1.6㎝の穿孔がみられ，表面にはナデとヘラナデを施す。

中央ピット出土遺物(図2－11　63)

63は弥生土器である。甕の胴部から底部にかけての破片で，内面全体にハケ，外面全体にタタキを施す。胴部外面にはハケ調整とナデ調整を加え，胴部外面中位には煤が付着する。

ST72

調査区中央部で検出した竪穴建物跡である。ST71・75に切られるため，全体の形状や長軸，短軸，面積は不明である。検出面からの深さは約４㎝で，床面の標高は約4.2mを測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトで，床面ではピット３個を検出したが主柱穴

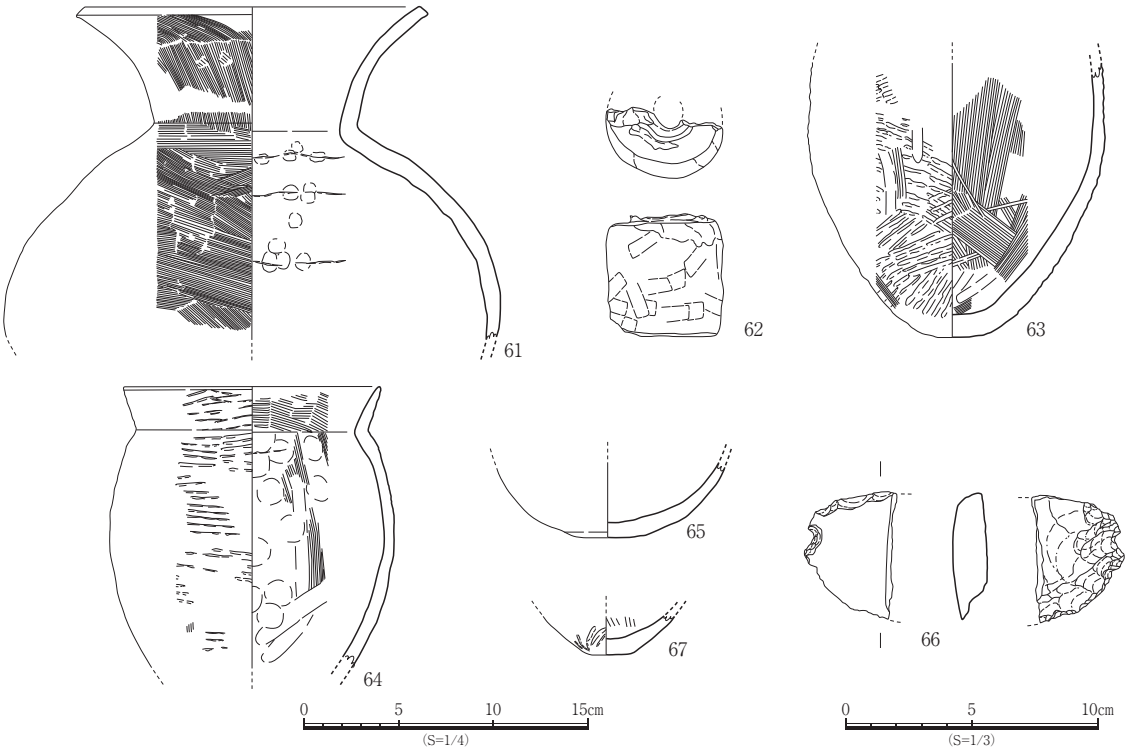


図２－11　ST71･72出土遺物実測図

は不明である。

出土遺物は埋土から弥生土器128点，石製品1点，床面から弥生土器25点，ピットから弥生土器1点がみられ，埋土では弥生土器2点(64･65)，石製品1点(66)，ピットでは弥生土器1点(67)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－11　64～66)

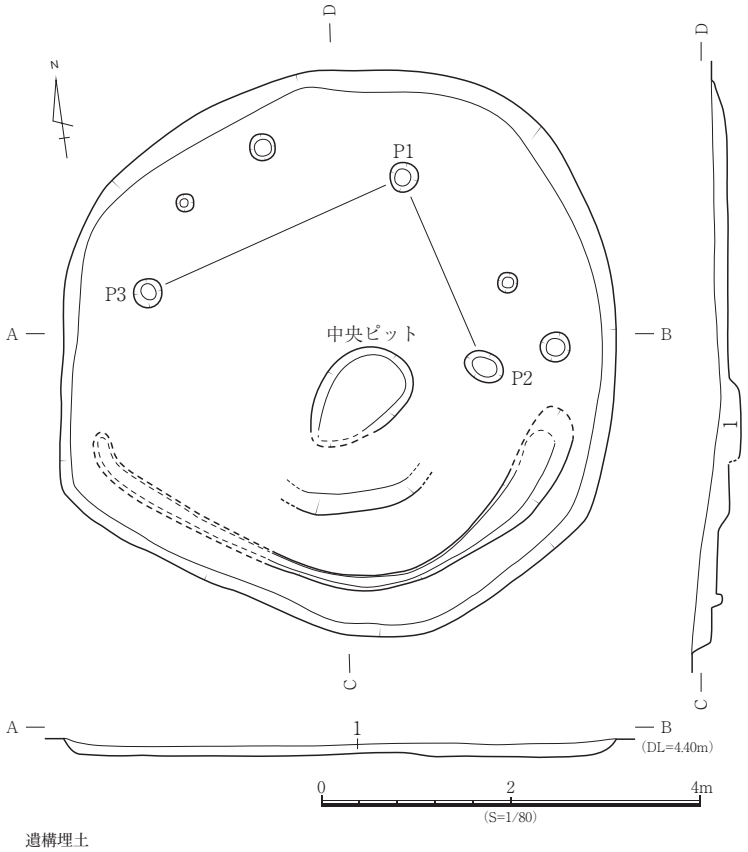
64・65は弥生土器である。64は甕で，底部を欠損する。口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり，内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，胴部内面上半に指オサエ，胴部内面下半に指オサエとナデ調整を加える。65は鉢である。口縁部を欠損し，摩耗のため調整は不明である。66は石製品の石庖丁である。約1/3のみ残存し，端部には抉りがみられる。石材は砂岩である。

ピット出土遺物(図2－11　67)

67は弥生土器の鉢とみられる底部破片で，内面にハケ，外面にタタキを施す。

ST73(図2－12)

調査区中央部で検出した不整円形を呈する竪穴建物跡で，長軸約6.2m，短軸約5.8mを測り，面積は約28.3㎡である。検出面からの深さは約15㎝で，床面の標高は約4.0mを測る。埋土は土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトで，床面では中央ピット，ピット，壁溝を検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸約1.3m，短軸約0.8mを測る。床面からの深さは約9㎝で，埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトである。検出したピットのうち主柱穴はP1～3と考えられ，床面からの深さはP1が27㎝，P2が36㎝，P3が12㎝を測る。壁溝は南側でのみ確認され，確認長約6.4m，幅13～46㎝，深さ6～10㎝を測る。



遺構埋土
1. 土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルト

図2－12　ST73

出土遺物は埋土から弥生土器1,999点，土製品1点，石製品2点，庄内式土器5点，床面から弥生土器93点，石製品1点，壁溝から弥生土器17点，P1から弥生土器6点，石製品1点，P2から弥生土器8点，P3から弥生土器6点がみられ，埋土では弥生土器17点(68～84)，石製品2点(85･86)，庄内式土器1点(87)，床面では弥生土器1点(88)，石製品1点(89)，P1では石製品1点(90)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－13　68～87)

68～82は弥生土器で，68～72は壷と考えられるものである。68は頸部破片で，内外面ともハケの

ちヨコナデを施し，頸部下端の屈曲部外面に不整形の刺突を施す。69 ～ 72 は胴部から底部にかけての破片である。69は底部外面がやや凹み，胴部内外面にハケ，胴部外面下端にナデと指オサエを施し，底部内面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。70 ～ 72 は胴部が内湾して立ち上がり，70 は内面にナデ，外面にタタキのちヘラナデを施す。71・72 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にハケ調整が残る。73 ～ 76 は甕である。73 は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁端部はヨコナデにより面をなす。内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，胴部外面にはハケ調整を加える。74 ～ 76 は胴部から底部にかけての破片である。74 は内面にヘラナデ，外面にハケのちナデを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。75 は内面にナデ，外面にハケを施す。76 は胴部内面にナデ，底部内面にハケと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。77 ～ 79 は鉢である。77 は全体の形状が復元できたもので，体部はやや内湾して立ち上がる。内面全体にハケ，外面全体にナデを施し，底部内面にはヘラミガキ調整を加える。78・79 は底部破片である。78 は底部外面に円盤

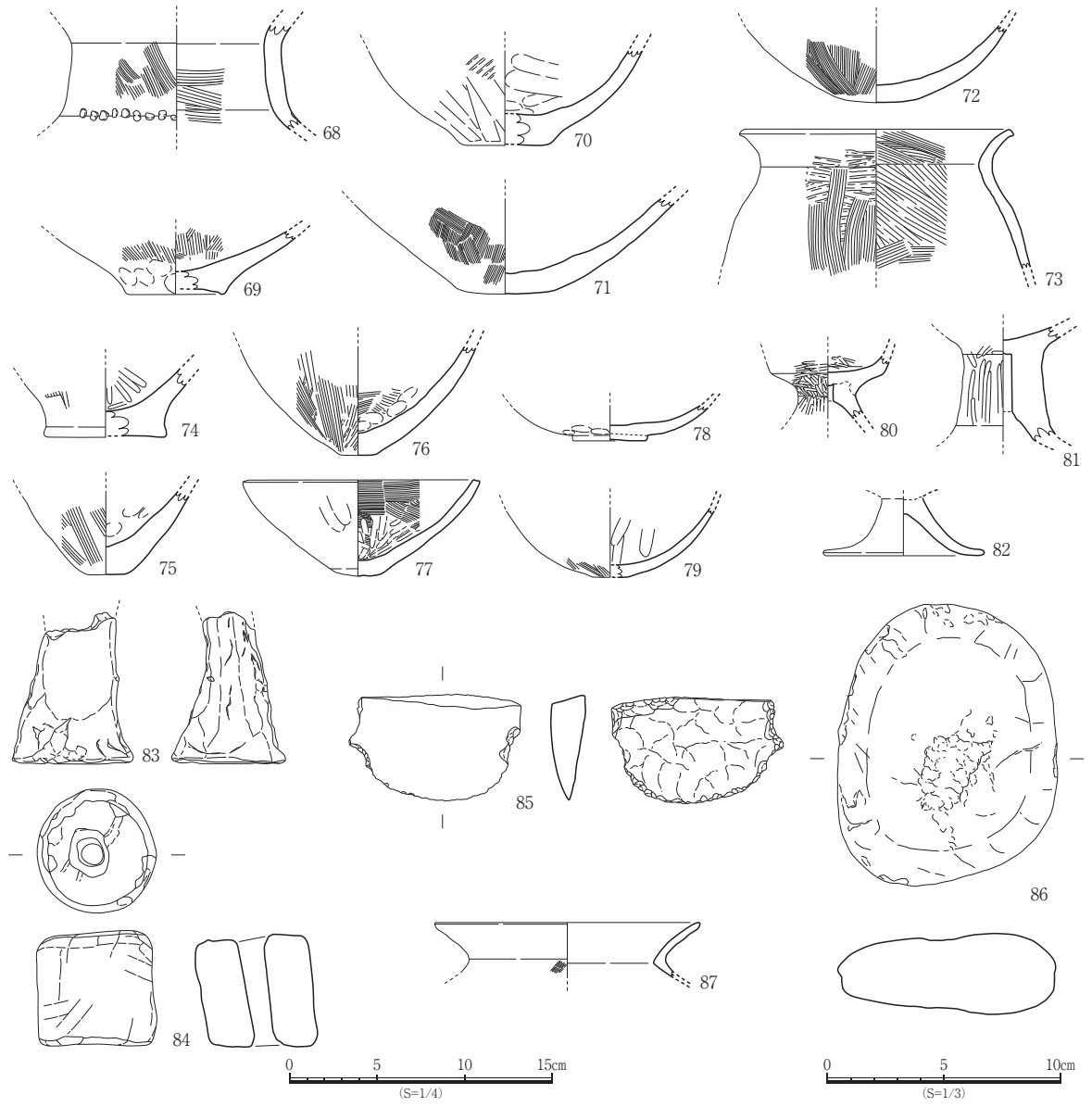


図2－13　ST73埋土出土遺物実測図

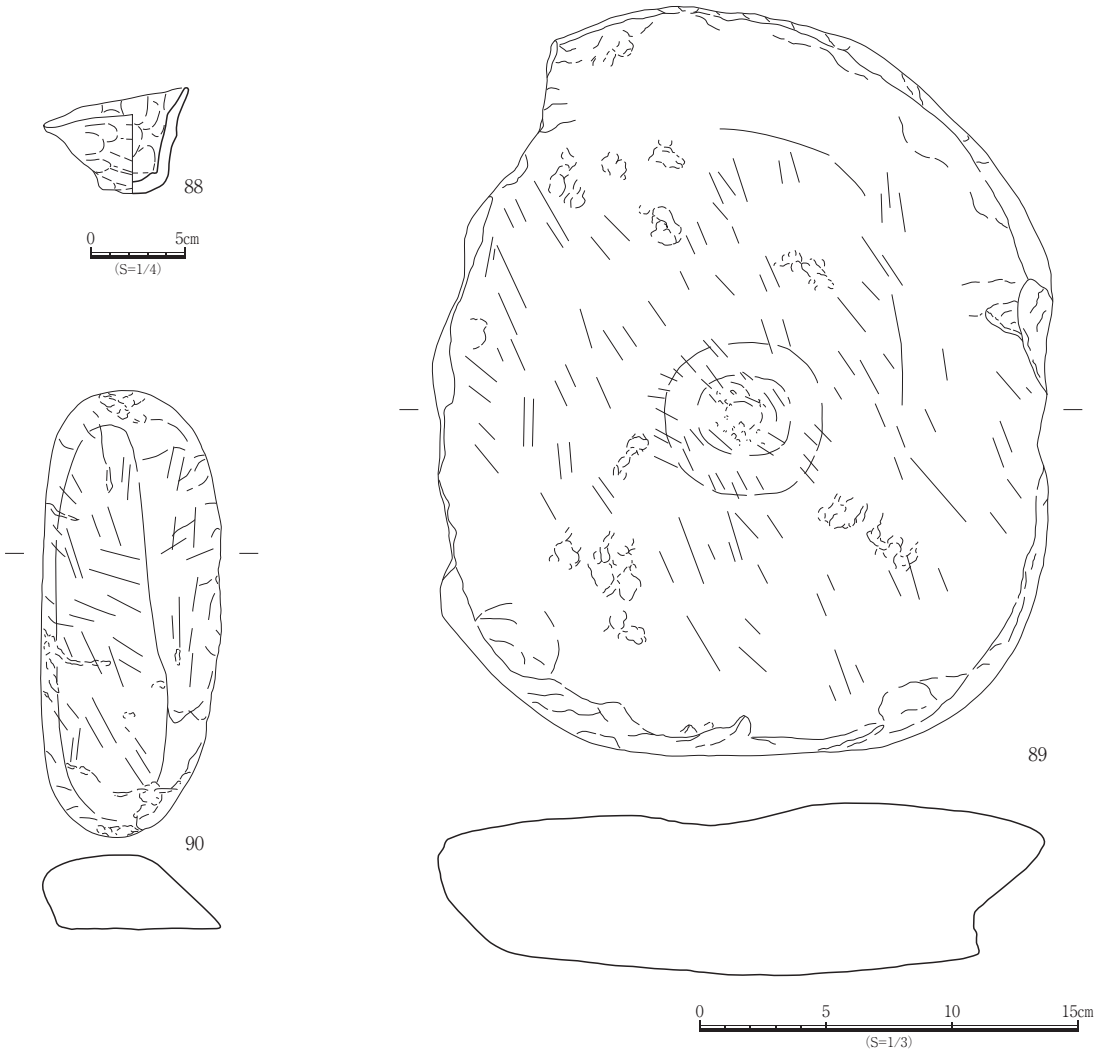


図2－14　ST73床面･ピット出土遺物実測図

状の粘土板を貼り付け，内面にナデ，外面に指オサエを施す。79は体部が内湾して立ち上がり，内外面にナデを施し，体部外面下端にはハケ調整が認められる。80～82は高杯である。80・81は杯部と脚部の接合部分が残存し，80は外面全体に丁寧なヘラミガキ，脚部内面にナデを施す。81は外面全体に丁寧なヘラミガキ，脚裾部内面にヨコナデ，脚柱部内面にナデを施す。82は脚部破片で，摩耗のため調整は不明である。83・84は土製品で83は支脚，84は支脚もしくは土錘である。83は中実で，脚部のみ残存する。摩耗のため調整は不明である。84はほぼ完存し，中央部に径1.8㎝の穿孔がみられる。表面にはナデを施し，被熱痕も認められる。85・86は石製品である。85は石庖丁で，完存する。両端に抉りを施し，石材は細粒砂岩である。86は叩石で，片面に明瞭な敲打痕が残る。石材は砂岩である。87は庄内式土器で，甕の口縁部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にタタキ目が残る。

床面出土遺物(図2－14　88･89)

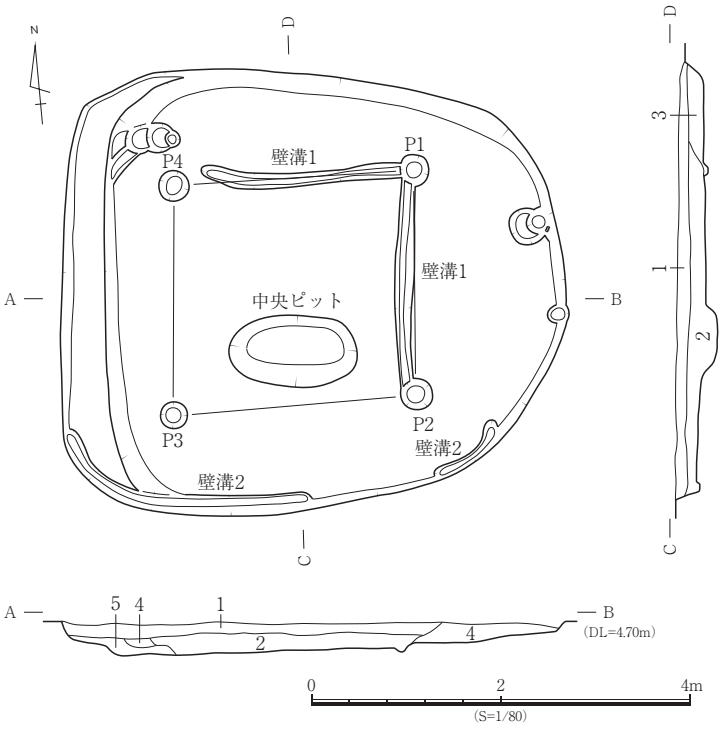
88は弥生土器の鉢で，ほぼ完存する。手づくね成形で，内外面には明瞭にナデ調整と指頭圧痕が残る。89は石製品の台石で，片面に明瞭な使用痕がみられる。石材は砂岩である。

ピット出土遺物（図2－14　90）

90は石製品である。砥石とみられるもので，3面に使用痕が認められる。石材は粗粒砂岩である。

ST74（図2－15）

調査区西部で検出した不整隅丸方形の竪穴建物跡で，ST80を切る。長軸は約5.4m，短軸は約4.6mを測り，面積は約24.8㎡である。検出面からの深さは9～22㎝で，床面の標高は約4.3mを測る。埋土は1層が土器と細～中礫を含み暗褐色(2.5YR3/3)シルトがブロック状に混じる黒褐色(7.5YR2/2)シルト，2層が土器と細～中礫を含む極暗褐色(7.5YR2/3)シルト，3層が土器と細～中礫を含み明褐色(7.5YR5/8)シルトがブロック状に混じる極暗褐色(7.5YR2/3)シルト，4層が細～中礫混じりの褐色(7.5YR4/4)シルト，5層が土器と細～中礫を含み明褐色(7.5YR5/6)シルトがブロック状に混じる極暗褐色(7.5YR2/3)シルトで，床面では中央ピット，ピット，壁溝，ベッド状遺構を検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸約1.4m，短軸約0.8mを測る。床面からの深さは約12㎝で，埋土は土器と細～中礫を含む極暗褐色(7.5YR2/3)シルトである。検出したピットのうち，主柱穴はP1～4と考えられ，床面からの深さはP1が33㎝，P2が37㎝，P3が41㎝，P4が36㎝を測る。壁溝は主柱穴に添うもの(壁溝1)と壁に添うもの(壁溝2)が確認されている。主柱穴に添うもの(壁溝1)は確認長約4.2m，幅15～26㎝，深さ3～16㎝を測る。壁に沿うもの(壁溝2)は確認長約3.8m，幅10～21㎝，深さ3㎝を測る。西側には地山削り出しのベッド状遺構が存在し，床面との比高差は約15㎝である。また，主柱穴に添う壁溝(壁溝1)の存在から，埋土の3～5層はベッド状遺構の盛土である可能性も考えられる。



遺構埋土
1. 土器と細～中礫を含み暗褐色(2.5YR3/3)シルトがブロック状に混じる黒褐色(7.5YR2/2)シルト
2. 土器と細～中礫を含む極暗褐色(7.5YR2/3)シルト
3. 土器と細～中礫を含み明褐色(7.5YR5/8)シルトがブロック状に混じる極暗褐色(7.5YR2/3)シルト
4. 細～中礫混じりの褐色(7.5YR4/4)シルト
5. 土器と細～中礫を含み明褐色(7.5YR5/6)シルトがブロック状に混じる極暗褐色(7.5YR2/3)シルト

図2－15　ST74

出土遺物は埋土から弥生土器1,244点，土製品1点，石製品1点，東阿波型土器1点，中央ピットから弥生土器31点，P1から弥生土器3点，P2から弥生土器1点，P3から弥生土器1点がみられ，埋土では弥生土器33点(91～123)，土製品1点(124)，石製品1点(125)，中央ピットでは弥生土器3点(126～128)が図示できた。

埋土出土遺物（図2－16･17　91～125）

91～123は弥生土器で，91～94は壷とみられる底部破片である。91は内面にナデ，外面にハケを施し，底部外面にはタタキ目がみられる。92は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，底部外面

図2－16　ST74埋土出土遺物実測図1

にはナデ調整がみられる。93は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内外面にハケ調整が認められる。94は内外面に丁寧なハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。95～105は甕である。95・96は全体の形状が復元できたもので，ほぼ完存する。95は口縁部はやや外反して立ち上がり，口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部から胴上半部内面にハケ，胴下半部にナデ，口縁部外面にハケのち指オサエ，胴部外面全体にタタキを施す。胴上半部外面にナデ調整，胴下半部外面にハケ調整を加え，胴中央部外面の一部に煤が付着する。96は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり，外面に幅広

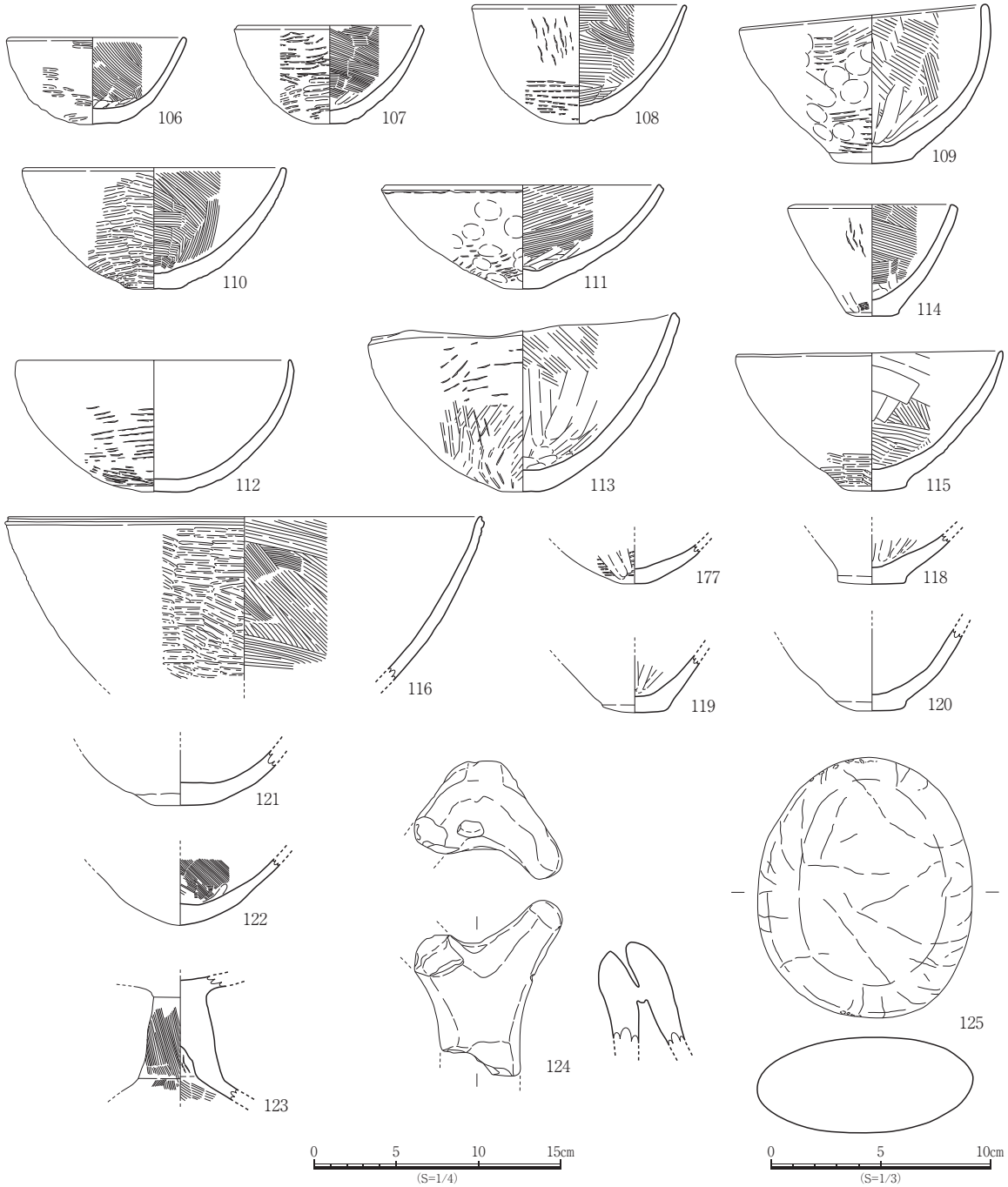


図２－17　ST74埋土出土遺物実測図2

の粘土帯を貼付する。口縁部から胴上半部内面にハケ，胴下半部内面にナデ，胴部外面にタタキを施す。胴上半部内面にはナデ調整，胴下半部外面にはハケ調整を加え，口縁部と胴上半部の外面には煤が付着する。97～102は底部を欠損するものである。97は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケを施す。98・99は口縁部がやや外反して立ち上がり，98は口縁部内面にナデ，胴部内面に強いナデ，外面全体にタタキを施し，胴中央部外面には煤が付着する。99は口縁部内面にナデ，胴部内面に強いナデ，外面全体にタタキを施す。胴下半部にはハケ調整を加え，煤が付着する。100・101は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり，100は

口縁部内面にハケ，胴部内面に粗いハケ，外面全体にタタキを施す。胴下半部内面にはナデ調整を加え，胴上半部外面には煤が付着する。101 は口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキを施し，口縁部外面には指オサエ，胴部外面にはハケ調整を加える。102 は口縁部がやや外反して立ち上がり，口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキを施す。口縁屈曲部内面にはヘラケズリが認められ，内面の一部には煤が付着する。103 ～ 105 は底部破片である。103 は内面にハケ，外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはタタキ目がみられる。104 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にナデ調整，外面にハケ調整が認められる。105 は内面にナデ，外面にタタキのちナデを施す。106 ～ 122 は鉢で，106 ～ 113 は体部が内湾して立ち上がるものである。106 は口縁部から体部内面にハケ，外面全体にタタキのちナデ，底部内面にナデを施し，口縁部外面には煤が付着する。107 は内面全体に丁寧なハケ，外面全体にタタキを施し，底部内面にはナデ調整を加える。108 は手づくね成形で，内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，口縁部外面にヨコナデ調整を加える。109 は内面全体にハケ，外面にタタキのちナデと指オサエ，底部外面にナデを施し，体下半部と底部の内面にはナデ調整を加える。110 は口縁部と体上半部内面にハケ，底部内面にナデ，外面全体にタタキを施し，体下半部外面には煤が付着する。111 は内面に粗いハケ，外面にタタキを施し，底部内面にはナデ調整，口縁部から体上半部外面にはナデ調整と指オサエ，体下半部外面には指オサエを加える。112 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，体部外面にタタキ目，底部外面にナデ調整が残る。113 はほぼ完存し，内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，体部から底部の内面と口縁部外面にナデ調整を加える。114・115 は体部が直線気味に立ち上がるものである。114 は手づくね成形で，内面全体にハケ，外面全体にナデを施し，底部内面にはナデ調整，体部外面下端にはタタキ目がみられる。115 はほぼ完存し，口縁部内面にヘラナデ，体部から底部の内面にハケ，底部外面にナデを施し，体部外面下端にはタタキ目がみられる。116 は大型の鉢とみられ，内面にハケ，外面にタタキのちナデを施す。117 ～ 122 は底部破片である。117 は内面にナデ，外面にタタキ，底部外面にナデを施し，外面にはナデ調整を加える。118 ～ 120 は内外面に丁寧なナデを施す。121 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面には丁寧なナデ調整が残る。122 は内面にハケのちナデ，外面に丁寧なナデを施す。123 は高杯である。杯部から脚柱部にかけて残存し，杯部内面にナデ，杯部と脚部の接合部にヨコナデ，脚部にハケを施す。124 は土製品の支脚で，脚部と指部を欠損する。摩耗のため調整は不明である。125 は石製品の叩石で，両端部に弱い敲打痕が認められ，石材は砂岩である。

中央ピット出土遺物（図2－18　126～128）

126 ～ 128 は弥生土器の甕である。126 は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部はやや外反して立ち上がる。口縁部から胴上端部内面にハケ，胴中央部内面にナデ，外面全体にタタキを施す。127・128 は胴部から底部にかけての破片である。127 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にはナデ調整，外面にはタタキ目が残る。128 は内面にナデ，胴中央部外面にタタキ，胴

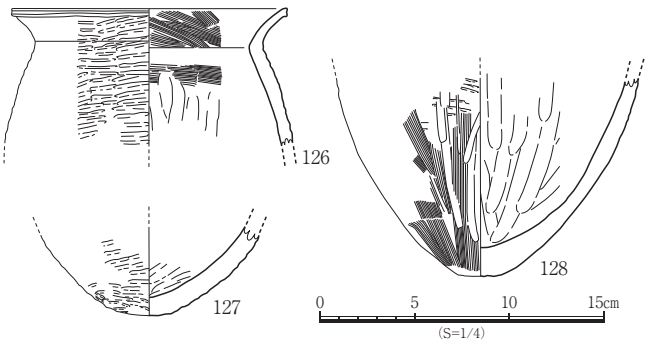


図2－18　ST74中央ピット出土遺物実測図

下半部にハケ，底部外面にタタキを施し，胴中央部外面にはハケ調整とヘラナデ調整，胴下半部外面にはヘラナデ調整を加える。

ST75

調査区中央部で検出した隅丸方形とみられる竪穴建物跡で，ST72 を切る。中央部を撹乱に切られ，南側は調査区外へ続くため短軸と面積は不明であるが，長軸は約 7.5m を測る。検出面からの深さは約 13㎝で，床面の標高は約 4.3m を測る。埋土は１層が土器を含む黒褐色（10YR2/2）細粒砂質シルト，２層が土器を含む細～中礫混じりの黒色（10YR2/1）細粒砂質シルトで，床面では中央ピット，ピットを検出した。中央ピットも撹乱に切られるため，平面形と短軸は不明であるが，長軸は約 1.7m，床面からの深さは約 14㎝を測る。埋土は土器を含む黒褐色（10YR2/2）細粒砂質シルトである。床面では 13 個のピットが検出されたが，主柱穴は不明である。

出土遺物は埋土から弥生土器 3,844 点，土製品２点，石製品 12 点，庄内式土器 10 点，東阿波型土器 31 点，金属製品１点，床面から弥生土器 137 点，石製品３点，中央ピットから弥生土器 22 点，ピットから弥生土器１点がみられ，埋土では弥生土器 63 点（129～191），土製品１点（192），石製品９点（193～201），庄内式土器１点（202），東阿波型土器（203･204），床面では弥生土器２点（205･206），石製品２点（207･208），ピットでは弥生土器１点（209）が図示できた。

埋土出土遺物（図2－19～24　129～204）

129 ～ 191 は弥生土器で，129 ～ 146 は壷である。129 は口縁部が大きく開き，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にハケを施す。130 ～ 135 は全体の形状が復元できたものである。130 は口縁部内外面にヨコナデ，胴上半部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキを施し，胴上半部内面にはヘラケズリとヘラナデ，胴下半部内面にはヘラナデ，胴下半部外面にはハケを施す。131 は口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にタタキ，胴上半部外面にハケ，胴下半部外面にタタキ，底部外面にナデを施す。口縁部外面にはヨコナデ調整，胴中央部外面にはハケ調整とナデ調整を加え，口縁部から胴中央部外面には煤が付着する。132 は口縁部内面にハケ，胴上端部にヘラケズリ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施し，胴上半部内面にはナデ調整を加える。133 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にはハケ調整とナデ調整，外面にはタタキ目が認められる。134 は口縁端部がヨコナデにより面をなし，口縁部内外面にハケ，胴上端部内面にナデ，胴中央部から胴下半部内面にハケのちナデ，底部内面にナデを施し，胴部外面全体にはタタキ目がみられ，胴上半部にはハケ調整，胴下半部にはハケ調整とヘラミガキ調整を加える。135 も口縁端部がヨコナデにより面をなし，乱雑な刺突文を配する。口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，外面は上半部にハケのちヘラミガキ，下半部にタタキのちナデ，底部外面にナデを施す。136 は口縁部を欠損するもので，内面全体にナデ，外面全体にタタキを施し，外面上下端にはハケ調整を加える。137 ～ 140 は口縁部から胴部にかけての破片である。137 は口縁部がやや外反して立ち上がり，摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にタタキ目が残る。138 は口縁部内外面にヨコナデ，胴上半部内面にハケ，胴下半部内面にナデ，胴部外面にタタキを施し，胴中央部から下半部外面にはナデ調整を加える。139 は広口と考えられるもので，内外面にハケを施す。140 は複合口縁で，口縁部内外面にヨコナデ，胴部外面にハケを施す。口縁部外面には３条単位の波状文を２重に配し，頸部と胴部の境には粘土帯を貼付し，ハケ状原体による刻みを施す。141 は口縁端部を上方に拡張し，３条の波状文を配す。口縁端部内外面にヨコナデ，口縁部内面にハケのちナデ，口縁部外面にハケを施す。142・143 は口縁部を

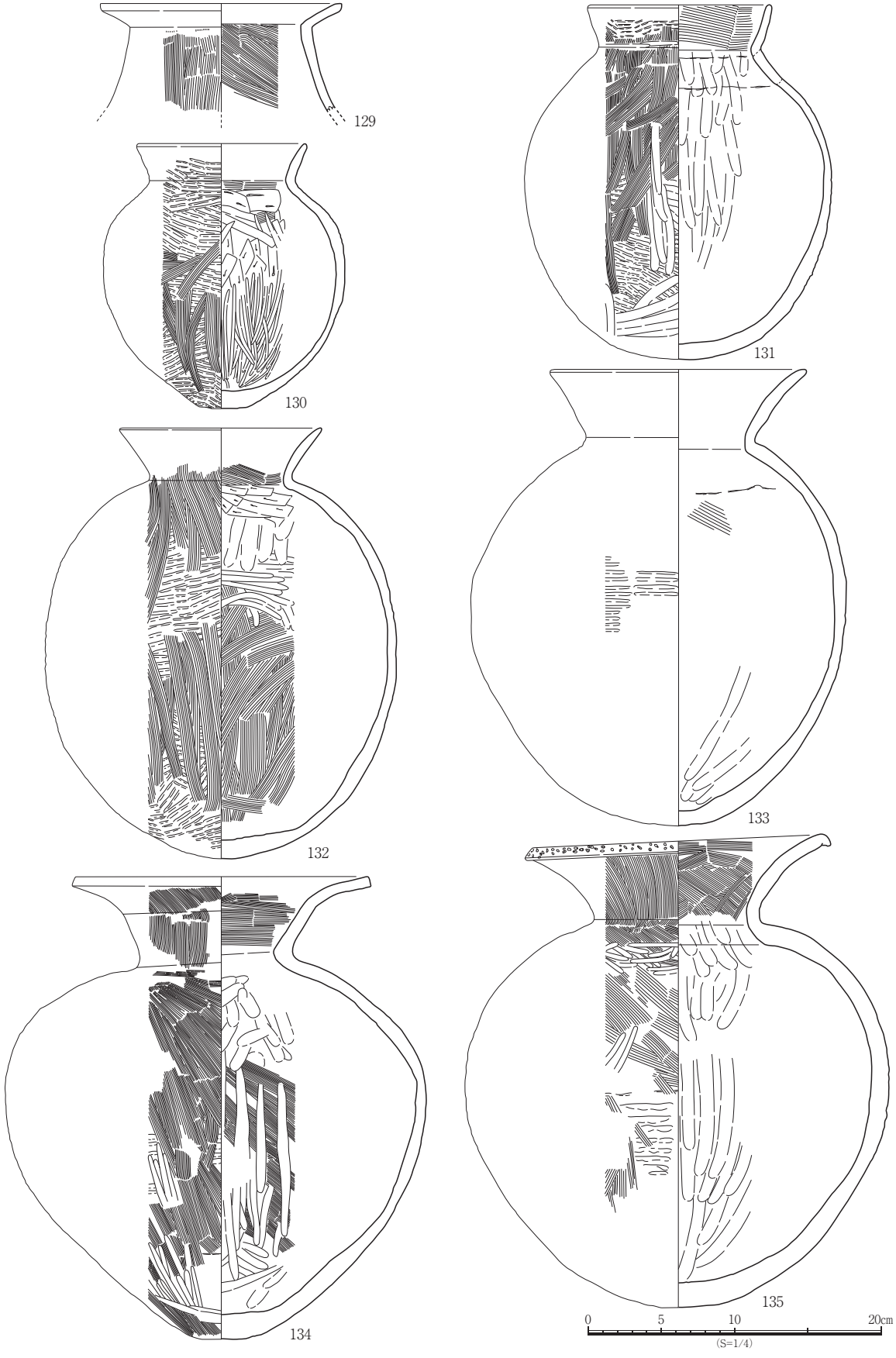


図2－19　ST75埋土出土遺物実測図1

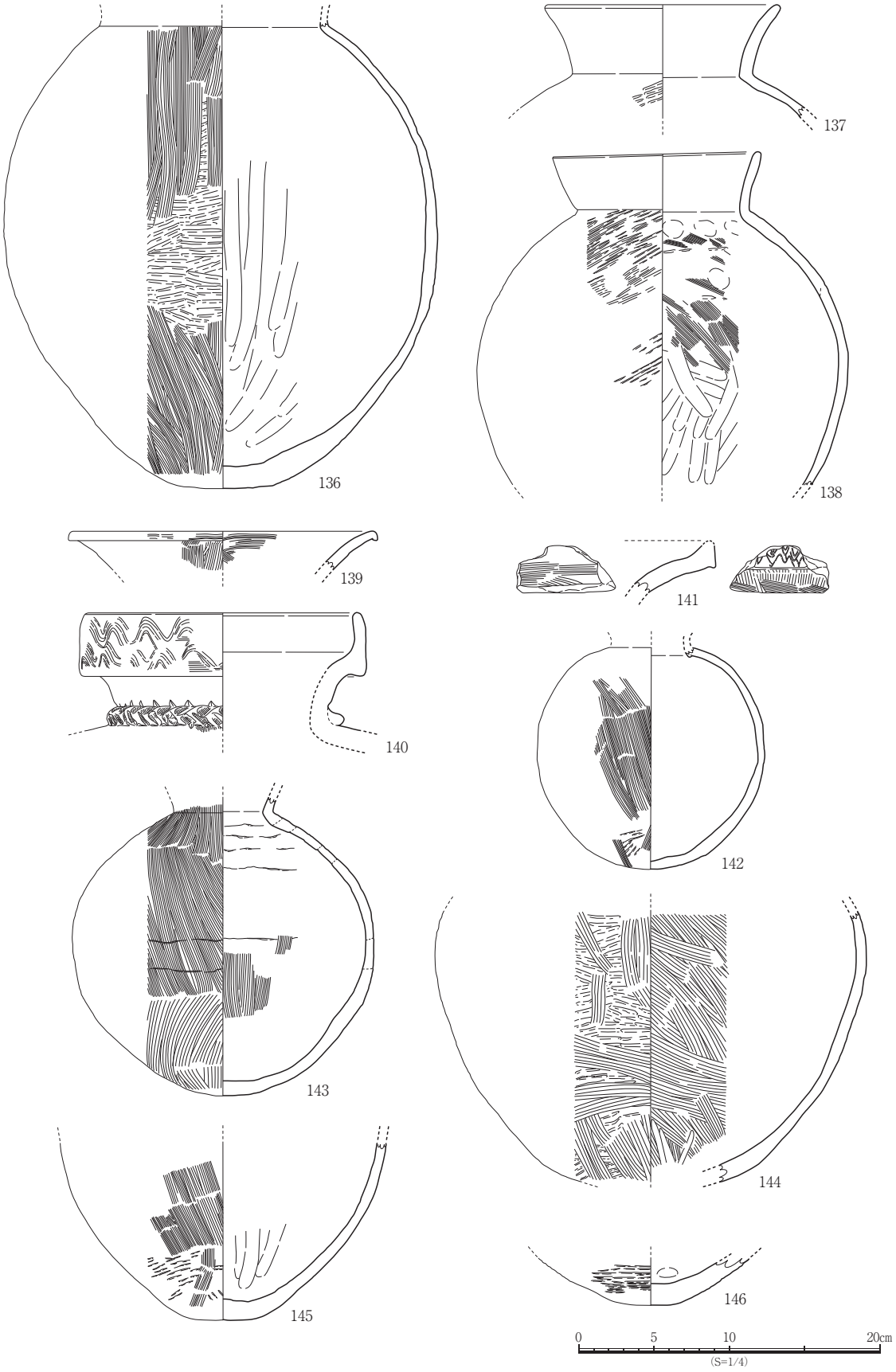


図２－20　ST75埋土出土遺物実測図2

欠損するものである。142 は内面全体にナデ，胴上半部外面にハケ，胴下半部にタタキを施し，胴下半部外面にはハケ調整を加える。143 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にハケ調整とナデ調整，外面にタタキ目とハケ調整が認められる。144 は胴部破片で，内面にハケ，外面にタタキを施す。内面下端にはヘラナデ調整，外面にはハケ調整を加え，中央部には煤が付着する。145・146 は胴部から底部にかけての破片である。145 は内面にナデ，外面は胴中央部にハケ，胴下半部にタタキを施したのちハケ調整を加える。146 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にはナデ調整と指オサエ，外面にはタタキ目が認められる。147 ～ 157 は甕で，147・148 は全体の形状が復元できたものである。147 は口縁部がやや外反して立ち上がり，胴部内面にナデ，外面全体にタタキを施す。胴下半部外面にはハケ調整を加え，口縁部から胴中央部外面には煤が付着する。148 は口縁部が大きく外反して立ち上がる。摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部内面にはナデ調整，口縁部外面にはヨコナデ調整，胴部外面にはタタキ目が認められ，口縁部から胴下半部の外面には煤が付着する。149 ～ 154 は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。149 は口縁部内面にナデ，胴上半部にハケ，胴中央部にヘラケズリ，口縁部外面に指オサエ，胴部外面にタタキのちハケを施す。

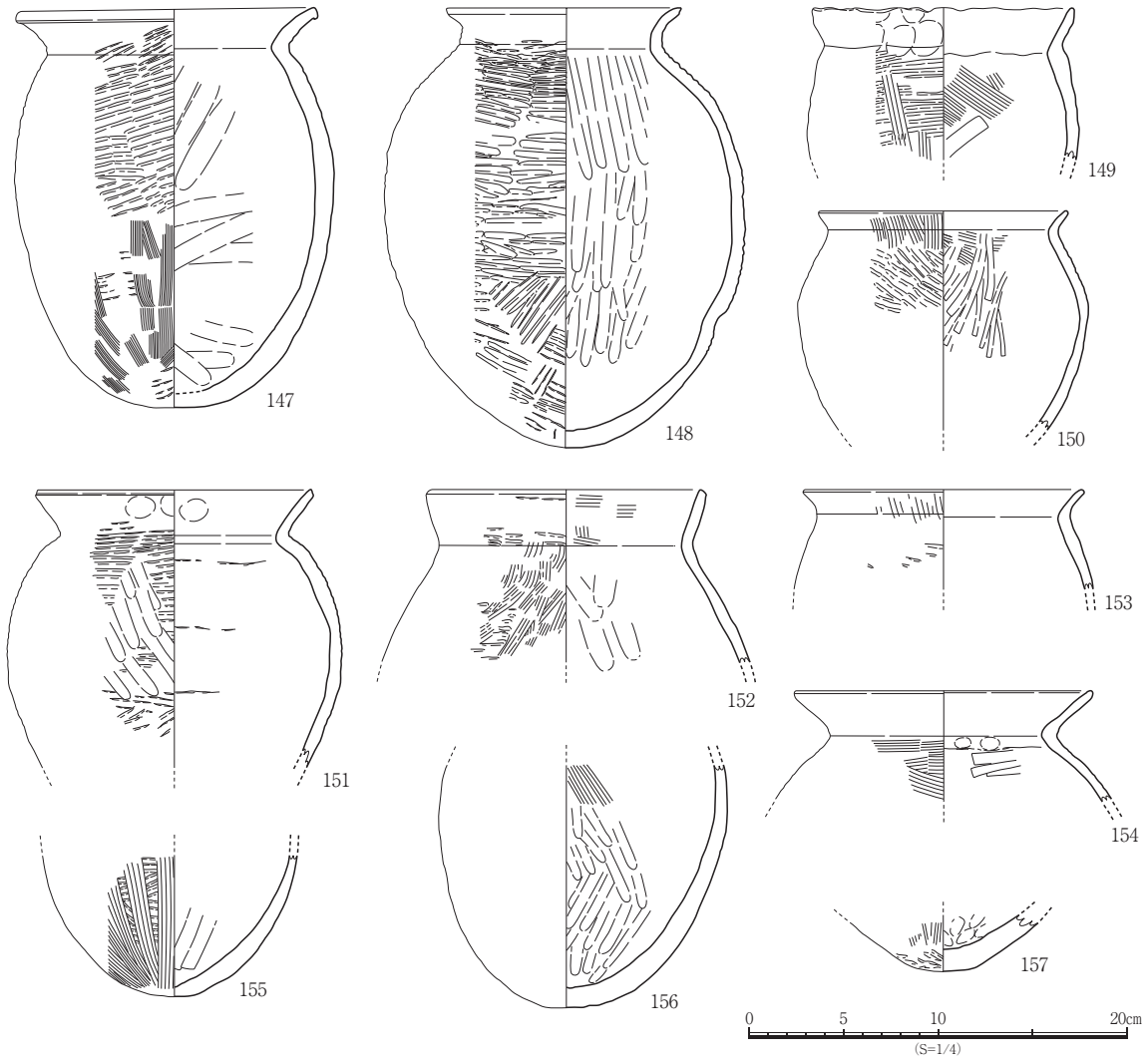


図2－21　ST75埋土出土遺物実測図3

150 は口縁部内面にヨコナデ，胴上半部内面にハケのちヘラナデ，胴中央部内面にヘラナデ，胴下半部にナデ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキを施し，胴部上端にはハケ調整を加える。151 は口縁部内面にナデと指オサエ，胴部内面にナデ，口縁部外面にナデ，胴部外面にタタキのちナデを施す。152 は口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面全体にタタキを施し，胴部外面にはハケ調整を加える。153 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁部外面にハケ調整とヨコナデ調整，胴部外面にタタキ目とナデ調整が認められる。154 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施し，口縁部外面には煤が付着する。155・156 は胴部から底部にかけての破片である。155

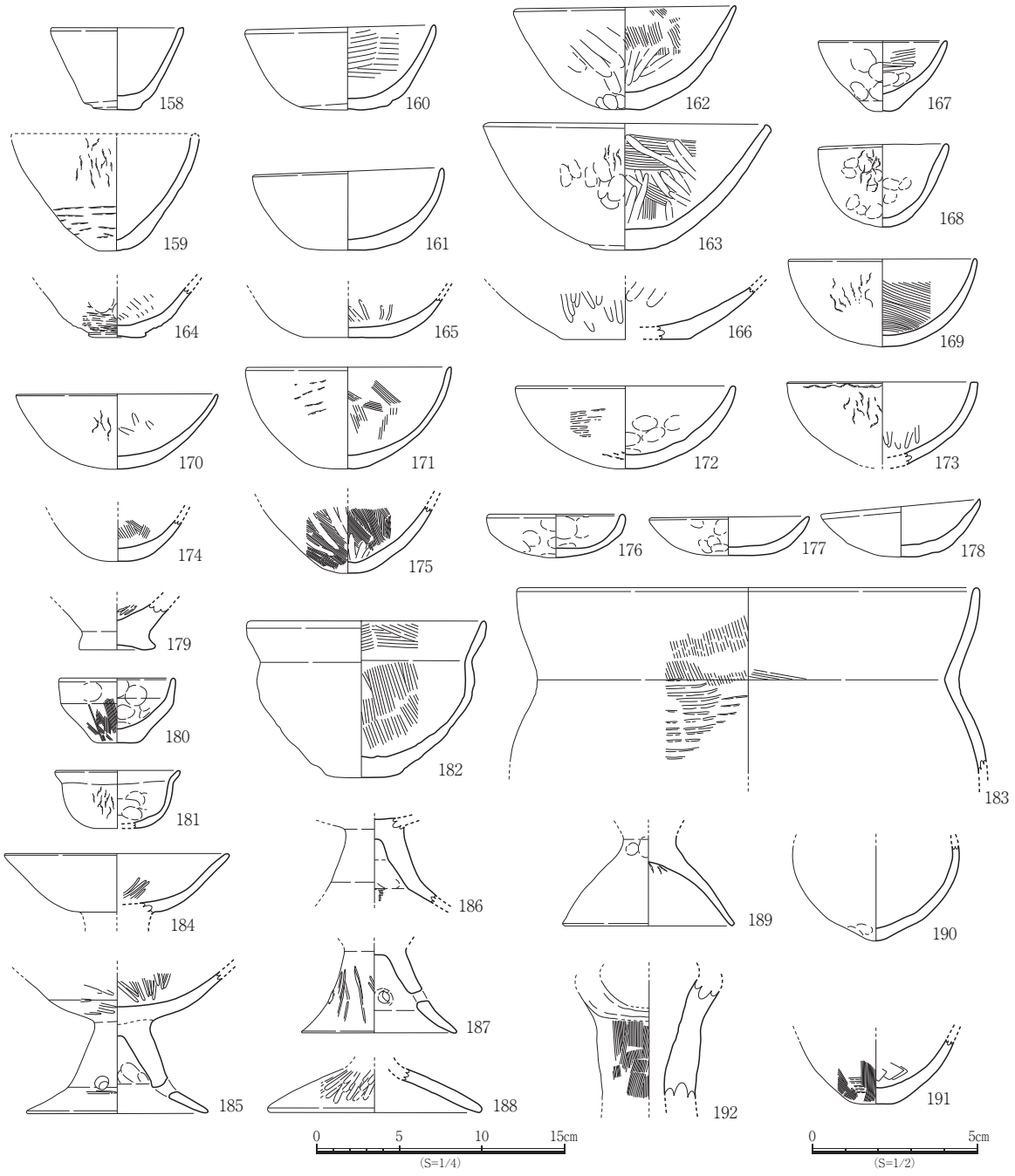


図2－22　ST75埋土出土遺物実測図4

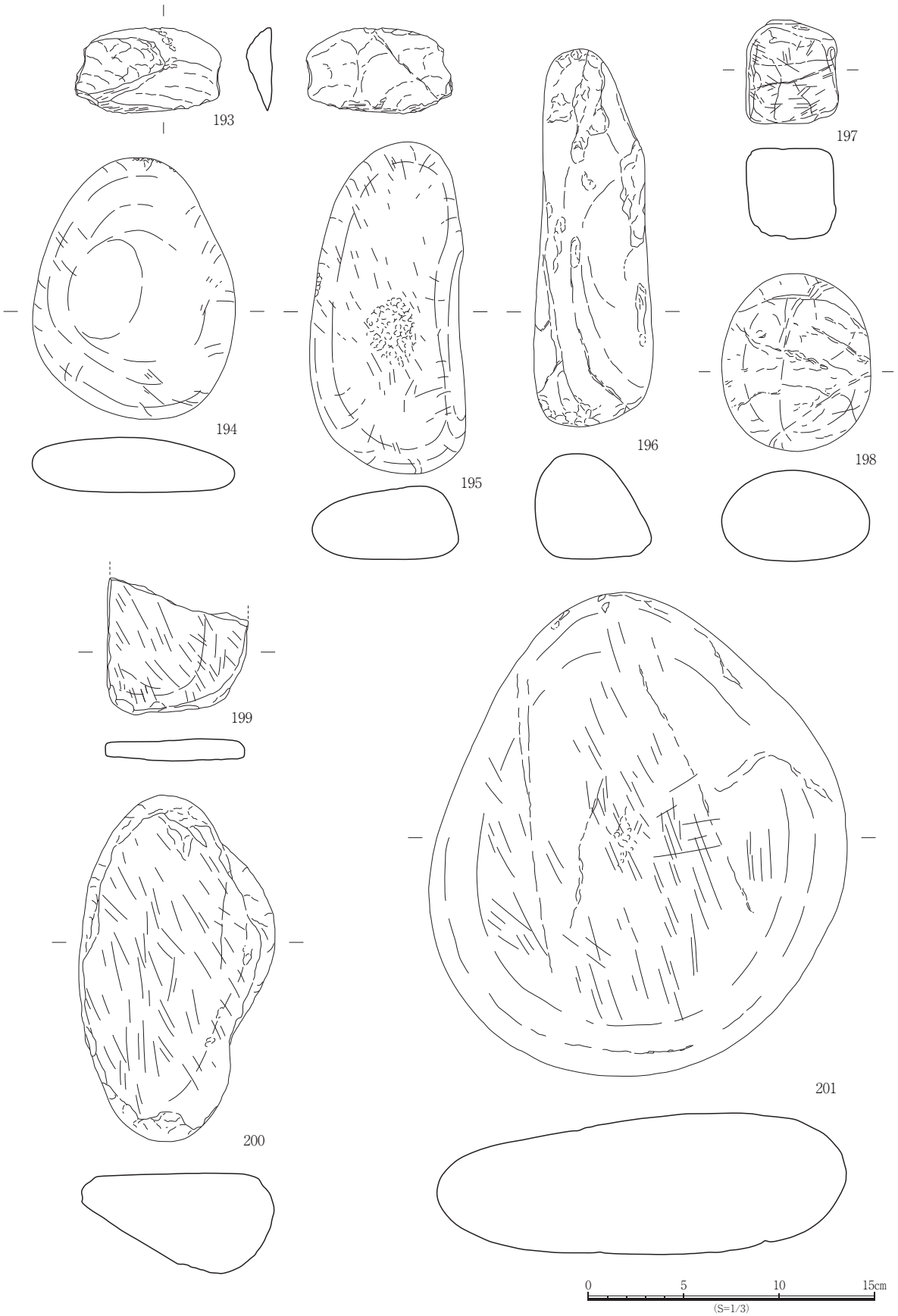


図2－23　ST75埋土出土遺物実測図5

は内面にヘラナデ，外面にタタキのちハケを施す。156 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にはハケ調整とナデ調整が残る。157 は底部破片である。内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。158～183は鉢で，158～166は平底を呈するものである。158 ～ 163 は全体の形状が復元できたもので，158・159 はコップ状を呈する。158 は内外面にナデを施す。159 は手づくね成形と考えられるもので，摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面下端にタタキ目が残る。160 ～ 163 は体部が内湾して立ち上がるもので，160 は口縁部から体部内面に粗いハケ，底部内面と外面全体にナデ調整を施す。161 ～ 163 はほぼ完存する。161 は口縁部内外面にヨコナデ，その他の部位にナデを施す。162 は口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面にハケのちナデ，体部から底部外面にナデを施し，体部外面下端には静止ヘラケズリが認められる。163 は手づくね成形とみられ，口縁部内面にヨコナデ，体部から底部内面にハケのちヘラミガキ，外面全体にタタキを施す。口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面にはナデ調整と指オサエを加え，底部外面にはナデ調整が認められる。164 ～ 166 は体部から底部にかけての破片である。164 は内面に粗いハケ，外面にタタキのち指オサエを施し，底部外面にはナデ調整が認められる。165 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面に丁寧なヘラミガキ調整が認められる。166 は内面にナデ，外面に密なヘラミガキを施す。167 ～ 175 は丸底を呈するもので，167 ～ 172 は全体の形状が復元できたものである。167 は口縁部内面にヘラミガキ，底部内面に指オサエ，外面全体に指オサエとナデを施す。168 ～ 170 は手づくね成形と考えられるものである。168 はほぼ完存し，内外面には指オサエとナデを施す。169 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケ，体部外面と底部内外面にナデを施す。170 は内面にナデのちヘラミガキ，外面にナデを施す。171 はほぼ完存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にはハケ調整，外面にはタタキ目とナデ調整が認められる。172 は口縁部内面にナデ，体部から底部内面に指オサエ，口縁部から体部外面にタタキ，底部外面にナデを施し，口縁部から体部外面にはナデ調整を加える。173 は丸底とみられるもので，手づくね成形とみられる。口縁端部はヨコナデにより面をなし，口縁部内面と外面全体にナデ，体部から底部内面にヘラミガキを施す。174・175 は体部から底部にかけての破片である。174 は体部内面にハケ，底部内面と外面全体にナデを施す。175 は体部内面にハケ，体部外面にハケのちナデ，底部内外面にナデを施す。176 ～ 178 は皿状を呈するものである。176 はほぼ完存し，内外面に指頭圧痕が残る。177 は内面に丁寧なナデ，外面に指オサエを施す。178 はほぼ完存するが，調整は摩耗のため不明である。179 は脚が付くもので，脚部のみ残存する。内面にヘラミガキ，外面にナデを施す。180 ～ 183 は口縁部が屈曲して立ち上がるものである。180 は口縁部が内側に屈曲するもので，内面と口縁部外面に指オサエ，体部外面にハケ，底部外面にナデを施す。181 ～ 183 は口縁部が外側に屈曲するものである。181 は手づくね成形で，口縁部内外面にヨコナデ，体部内面に指オサエ，体部外面にナデを施す。182 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にハケ調整が認められる。183 は口縁部内

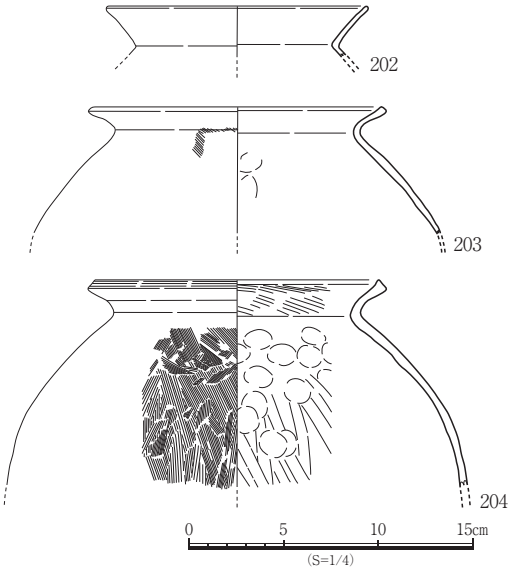


図２－24　ST75埋土出土遺物実測図6

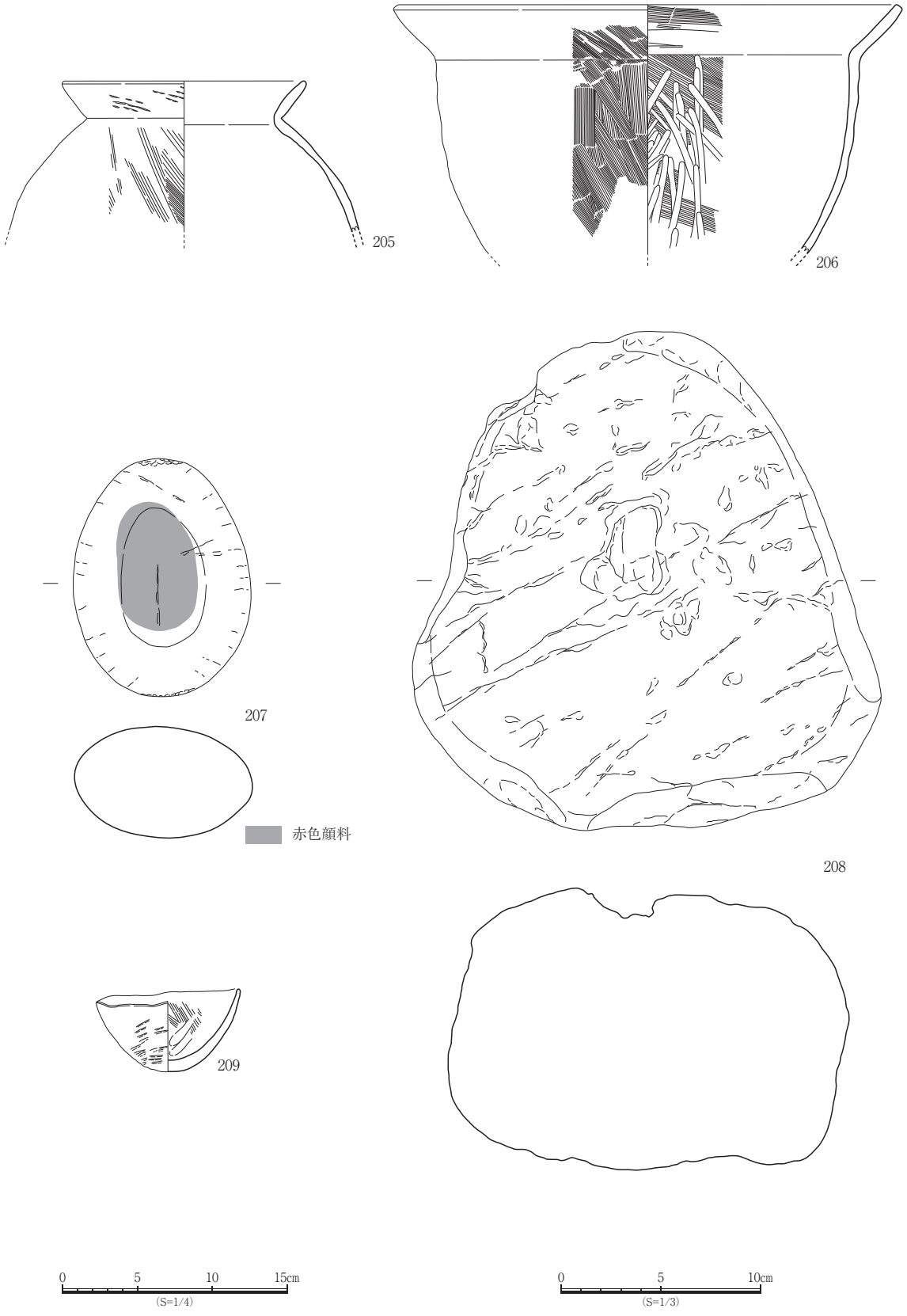


図2－25　ST75床面･ピット出土遺物実測図

面にナデとハケ，体部内面にナデ，口縁部外面にハケ，体部外面にタタキを施す。184～188は高杯である。184は杯部破片で，内外面にヨコナデを施し，内面には丁寧なヘラミガキ調整を加える。185は杯口縁部を欠損するもので，杯部内外面に丁寧なヘラミガキ，脚柱部内外面にナデ，脚裾部内外面にヨコナデを施し，脚裾部外面の一部にヘラミガキ調整が認められる。186は脚柱部破片で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，脚裾部内面にハケ調整が残る。187は脚部破片で，穿孔は3ヵ所である。外面と脚裾部内面にヨコナデ，脚柱部内面にナデを施し，外面全体に粗いヘラミガキ調整を加える。188は脚裾部破片で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にヘラミガキ調整が認められる。189は器台の脚部破片である。脚裾部内外面にヨコナデ，脚部内外面にナデを施す。190・191はミニチュア土器と考えられるものである。190は内外面にナデ調整を施し，底部外面に指オサエを加える。191は内面にヘラナデとナデ，外面にタタキのちハケを施し，底部内面にはナデ調整が認められる。192は土製品の支脚で脚部を欠損する。内面にナデ，外面にハケを施す。193～201は石製品で，193は石庖丁である。両端に弱い敲打痕がみられ，刃部の一部には研磨痕が認められる。石材は粘板岩とみられる。194～196は叩石で，石材は全て砂岩である。194は片側に弱い敲打痕，195は片面と片側に弱い敲打痕，196は両端に弱い敲打痕がみられる。197・198は磨石である。197は片面のみに使用痕がみられ，石材は石灰岩である。198はほぼ全体に使用痕がみられ，石材は泥岩である。199・200は砥石である。199は片側を欠損し，片面に使用痕がみられる。石材は砂岩である。200は両面に弱い使用痕が認められ，石材は粗粒砂岩である。201は台石である。片面の中央部に弱い敲打痕がみられ，石材は砂岩である。202は庄内式土器である。甕の口縁部破片で，摩耗のため調整は不明である。203・204は東阿波型土器の甕である。203は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴上端部外面にはハケ調整が認められる。204は口縁部内面にハケのちヨコナデ，胴上端部内面に指オサエ，胴中央部内面にナデのち指オサエ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にハケを施し，胴中央部外面には煤が付着する。

床面出土遺物（図2－25　205～208）

205・206は弥生土器で，205は甕である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁部外面にタタキのちヨコナデ，胴部外面にハケを施し，外面全体には煤が付着する。206は鉢である。内外面にハケを施し，体部内面にヘラミガキを加える。207・208は石製品である。207は叩石で，両端部に弱い敲打痕がみられ，片面に赤色顔料が付着する。石材は砂岩である。208は台石で，中央部に明瞭な使用痕がみられ，石材は砂岩である。

ピット出土遺物（図2－25　209）

209は弥生土器の鉢である。内面にハケ，外面にタタキを施し，体部から底部内面と底部外面にナデ調整を加える。

ST76

調査区西部で検出した竪穴建物跡で，ⅣＢ－1区で確認されているST61と同一の遺構と考えられる。北側が調査区外へ続くため，南北軸と面積は不明であるが，東西軸は約7.5mを測る。検出面からの深さは約48㎝で，床面の標高は約4.6mを測る。埋土は1層が細～中礫混じりの黒色（7.5YR2/1）粘土質シルト，2層が土器を含む細礫混じりの黒褐色（7.5YR2/2）粘土質シルト，3層が土器を含む細～中礫混じりの黒褐色（7.5YR2/2）粘土質シルト，4層が細～中礫混じりの黒褐色（7.5YR3/2）粘土質シルト，5層が細～中礫が少量混じる暗褐色（7.5YR3/3）粘土質シルト，6層が細～中礫混じりの暗褐色（7.5YR3/3）粘土質シルト，7層が極暗褐色（7.5YR2/3）粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色

(7.5YR3/2)粘土質シルトで，床面では中央ピットとピットを検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置すると考えられ，長軸約1.7m，短軸約0.5～0.8mを測る。床面からの深さは6㎝で，埋土は土器を含む黒色(7.5YR2/1)粘土質シルトである。

出土遺物は埋土から弥生土器3,817点，石製品5点，金属製品1点，床面から弥生土器39点，石製品2点がみられ，埋土では弥生土器16点(210～225)，石製品3点(226～228)，金属製品1点(229)，床面では石製品2点(230･231)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－26･27　210～229)

210～225は弥生土器である。210～212は壷で，210・211は口縁部破片である。210は口縁端部に3条単位の波状文を配し，内面にハケ，外面にタタキのちハケを施す。211は口縁端部を上下に拡張し，凹線がみられる。内外面にヨコナデを施し，外面には幅広のヘラミガキ調整を加える。212は底部破片で，内面にナデ，外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。213～215は甕とみられる

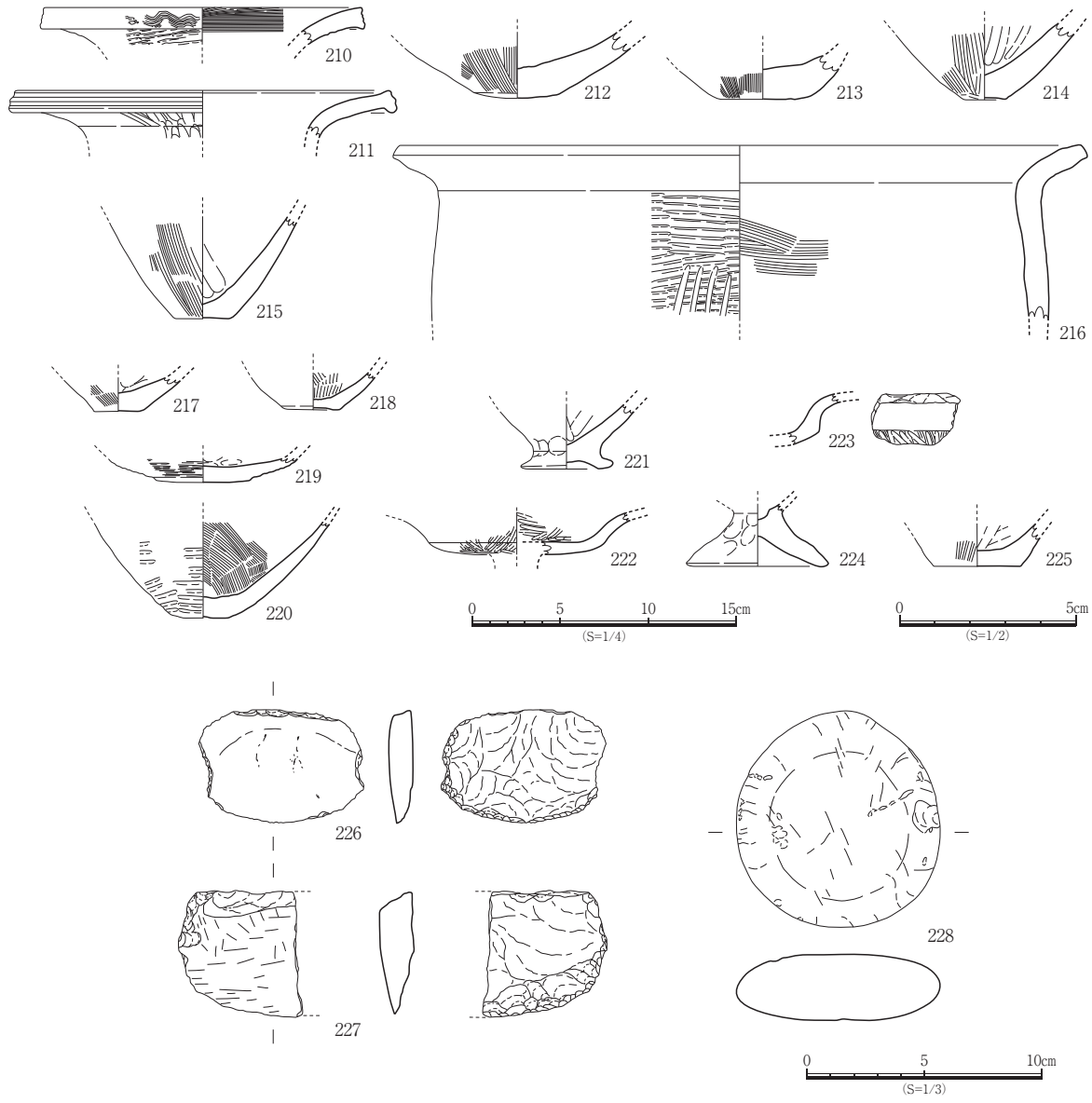


図2－26　ST76埋土出土遺物実測図1

胴部から底部にかけての破片で，底部内外面にナデ，胴部外面にハケを施す。215は外面に煤が付着する。216～221は鉢である。216は口縁部から体部にかけての破片で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，体部内面にハケ，体部外面にタタキを施し，体部外面には極太のハケ調整を加える。217～221は体部から底部にかけての破片である。217～220は平底を呈するもので，217は底部内面に指オサエ，体部外面にハケ，底部外面にナデを施す。218は内面に粗いハケ，外面にナデを施す。219は手づくね成形で，内面に指オサエとナデ，体部外面にタタキ，底部外面にナデを施す。220は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にハケ調整，外面にタタキ目が認められる。221は脚部を有するもので，内面と体部外面にナデ，脚部外面に指オサエを施す。222・223は高杯とみられる杯部破片である。ともに口縁部を欠損し，内外面に丁寧なヘラミガキを施す。224は器台とみられ

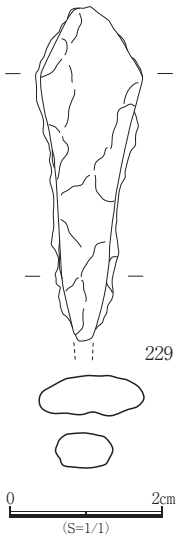


図2－27　ST76埋土出土遺物実測図2

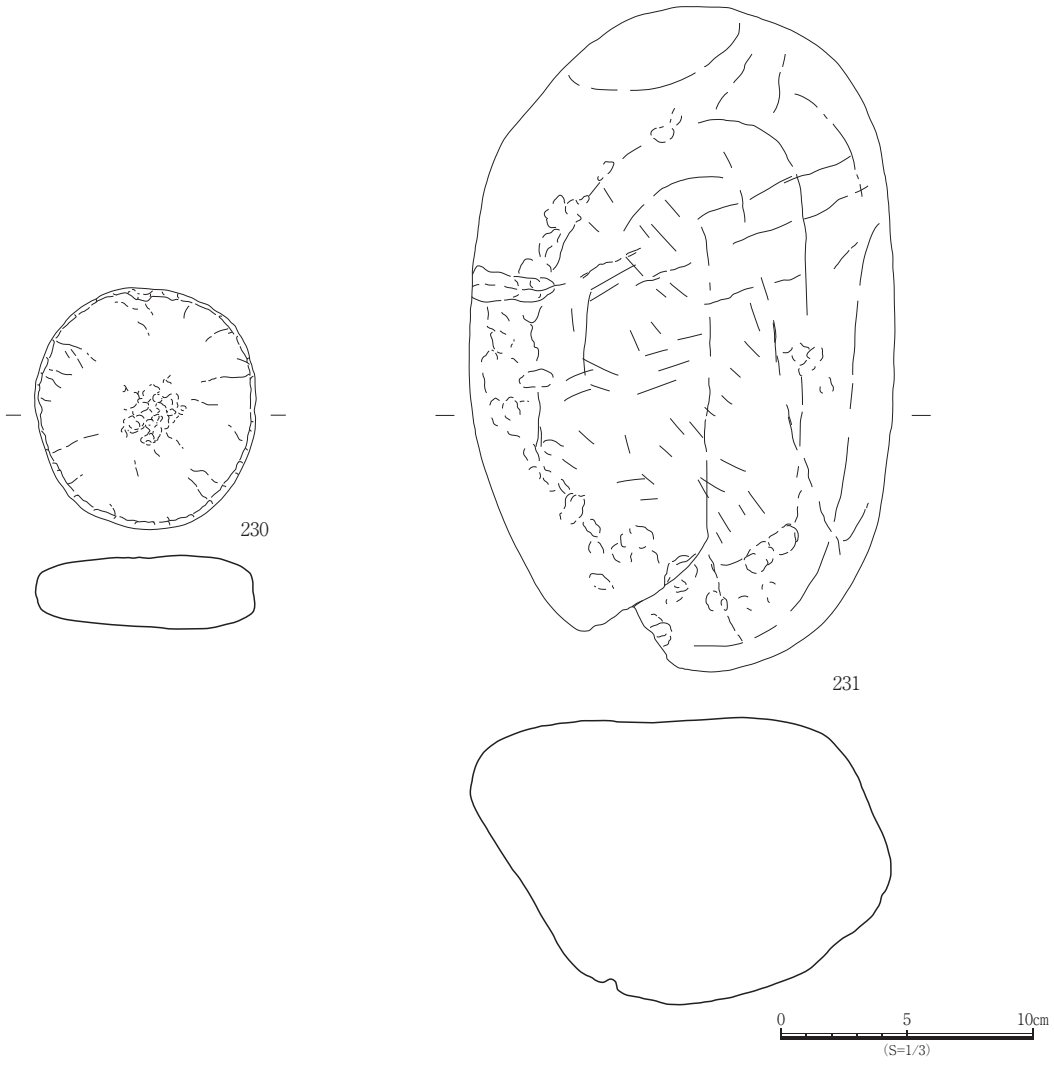


図2－28　ST76床面出土遺物実測図

る底部破片である。内面にナデ，外面にナデと指オサエを施す。225 はミニチュア土器と考えられる底部破片で，内面にナデ，体部外面にハケ，底部外面にナデを施す。226～228 は石製品である。226・227 は石庖丁で，226 は両端に抉りがみられ，石材は砂岩である。227 は約 1/2 を欠損し，石材は砂岩である。228 は叩石で，側面 1 ヵ所に弱い敲打痕が認められる。石材は砂岩である。229 は金属製品の鉄鏃で，茎部を欠損する。鏃身外形は圭頭形で，断面は錆のため不明である。

床面出土遺物(図2－28　230･231)

230・231 は石製品である。230 は叩石で，片面と側面全周に敲打痕が認められ，石材は粗粒砂岩である。231 は台石で，片面に使用痕がみられ，石材は砂岩である。

ST77

調査区中央部北西端で検出した竪穴建物跡で，ST78 に切られる。北側と西側が調査区外へと続くため，長軸，短軸，面積は不明である。検出面からの深さは約 12㎝で，床面の標高は約 4.3m を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂で，床面ではピットを検出したが，主柱穴は不明である。

出土遺物は埋土から弥生土器 269 点，石製品 1 点がみられ，弥生土器 2 点(232･233)，石製品 1 点(234)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－29　232～234)

232・233 は弥生土器で，鉢とみられる体部から底部にかけての破片である。232 は内面にハケ，外面にナデを施し，底部外面にはタタキ目がみられる。233は内面全体と体部外面にナデを施し，体下端部と底部外面にヘラケズリ調整がみられる。234 は石製品の叩石である。側面の一部に敲打痕がみられ，側面を中心に赤色顔料が付着する。石材は細粒砂岩である。

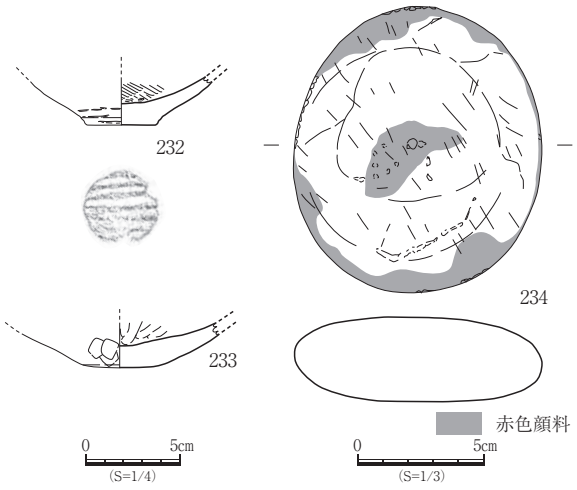
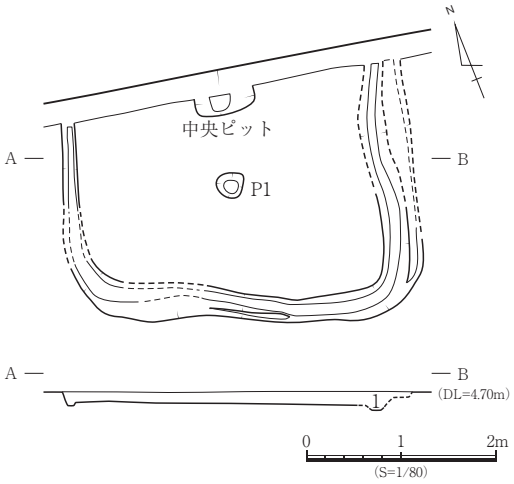


図2－29　ST77埋土出土遺物実測図

ST78(図2－30)

調査区中央部北西寄りで検出した竪穴建物跡で，ST77 を切る。北側が調査区外へ続くため，長軸と面積は不明であるが，短軸は約 3.8m である。検出面からの深さは約 25 ㎝で，床面の標高は約 4.2m を測る。埋土は土器と炭化物を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで，床面では中央ピット，ピット，壁溝を検出した。中央ピットの平面形は長方形と考えられ，床面からの深さは約 13 ㎝で，埋土は土器と炭化物を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトである。検出したP1 は南側の主柱穴と考えられ，床面からの深さは約 15 ㎝を測る。壁溝は周囲で確認され，確認長約7.8m，幅17～38㎝，深



遺構埋土
1. 土器と炭化物を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルト

図2－30　ST78

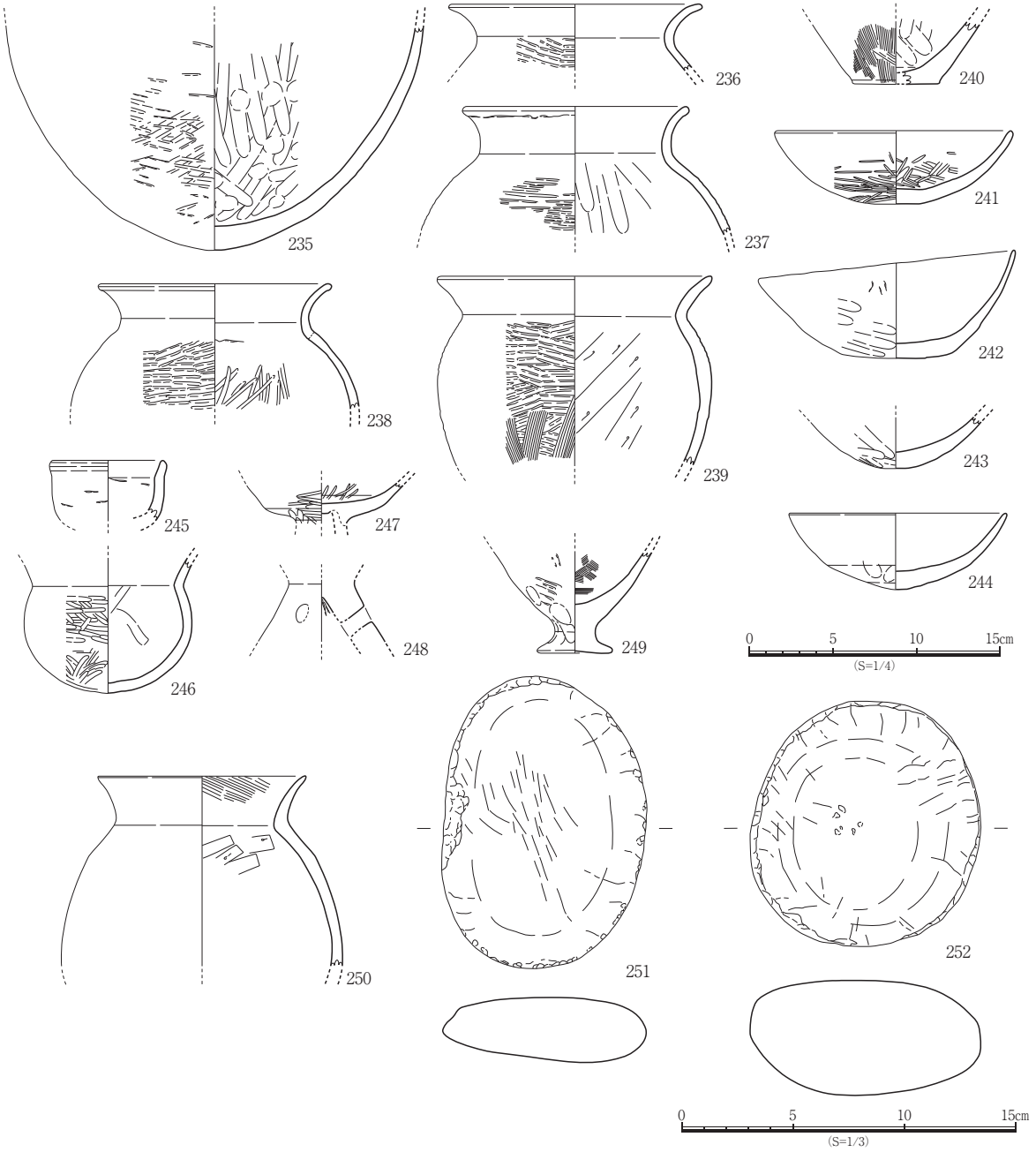


図2－31　ST78埋土出土遺物実測図

さ約5cmを測る。

出土遺物は埋土から弥生土器483点，土師器189点，石製品3点，庄内式土器9点，東阿波型土器1点，床面から弥生土器1点，土師器1点，中央ピットから弥生土器3点，土師器13点，P1から弥生土器2点，東阿波型土器1点，土師器5点，壁溝から弥生土器5点がみられ，埋土では弥生土器15点(235～249)，土師器1点(250)，石製品2点(251･252)が図示できた。

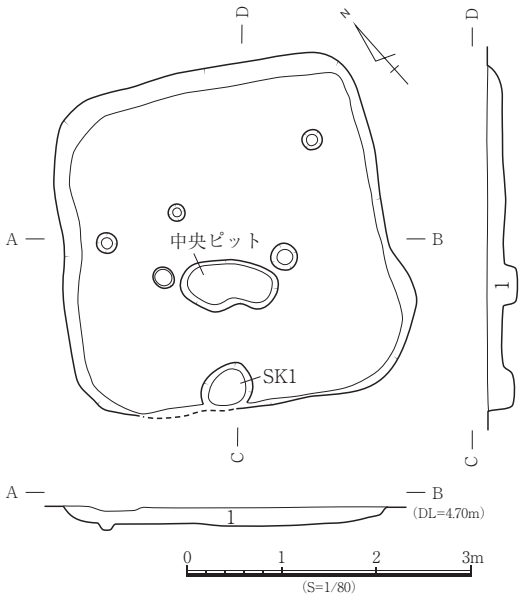
埋土出土遺物(図2－31　235～252)

235 ～ 249 は弥生土器である。235 は壷とみられる胴部から底部にかけての破片で，内面全体に強いナデ，外面全体にタタキを施し，胴下半部内面に指オサエ，外面全体に丁寧なナデ調整を加える。

236～239は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，236～238は口縁部がやや外反して立ち上がる。236は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にタタキ目が残り，一部に煤が付着する。237は内面全体と口縁部外面にナデ，胴部外面にタタキを施す。238は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面に指ナデとヘラナデ，胴部外面にタタキを施し，外面の一部に煤が付着する。239は口縁部が直線的に立ち上がるもので，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキを施す。胴外面下半部にはハケ調整を加え，一部に煤が付着する。240は底部破片で，内面にナデ，外面に丁寧なハケを施す。241～246は鉢である。241～243は平底を呈するもので，241は口縁部内外面にヨコナデ，底部外面にナデを施し，体部から底部内面と体部外面には雑なヘラミガキ調整がみられる。242は手づくね成形で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，器面全体にナデ調整が認められる。243は底部破片で，内面に丁寧なナデ，外面に雑なナデを施す。244は丸底を呈するもので，口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面に丁寧なナデ，外面全体に雑なナデを施す。245・246は口縁部が屈曲して立ち上がるものである。245は手づくね成形とみられ，口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデを施す。246は口縁端部を欠損し，口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面にナデ，体部から底部外面に丁寧なヘラミガキを施す。247・248は高杯である。247は杯部破片で，内外面に雑なヘラミガキ調整がみられる。248は脚部破片で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にはヨコナデ調整がみられ，穿孔は3孔と考えられる。249は製塩土器と考えられるもので，口縁部を欠損する。台付きで，内面全体にハケ，体部外面にタタキのち指オサエ，台部外面に指オサエを施す。250は土師器の甕で，口縁部内面にハケ，胴部内面にヘラケズリ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にナデを施し，胴部外面の一部に煤が付着する。251･252は石製品の叩石である。251は側面に強い敲打痕がみられ，石材は中粒砂岩である。252は側面全体に明瞭な敲打痕がみられ，石材は粗粒砂岩である。

ST79(図2－32)

調査区中央部北西寄りで検出した隅丸方形を呈する竪穴建物跡で，ST80を切る。長軸は約3.6m，短軸は約3.4mを測り，面積は約12.3㎡である。検出面からの深さは約13㎝で，床面の標高は約4.2mを測る。埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトで，床面では中央ピット，土坑，ピットを検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置する。平面形は不整楕円形を呈し，長軸約1.0m，短軸約0.6mを測る。床面からの深さは約10㎝で，埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトである。SK1は床面の南端で確認され，長軸は不明であるが，短軸は約0.5mを測る。床面からの深さは約9㎝を測り，埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトである。主柱穴は不明である。



遺構埋土
1. 土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルト

図2－32　ST79

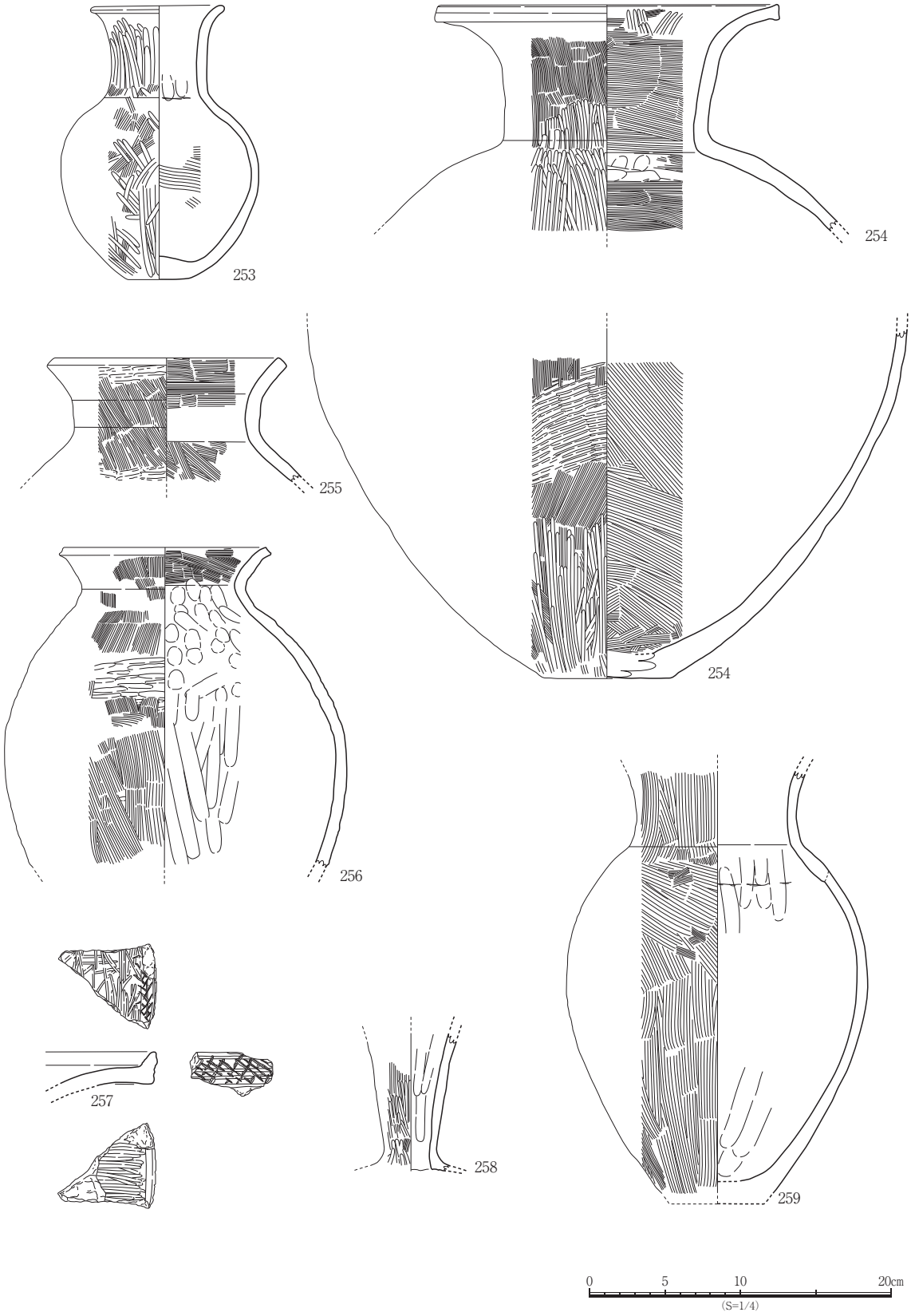


図2－33　ST79埋土出土遺物実測図1

出土遺物は埋土から弥生土器1,313点，石製品8点，床面から弥生土器14点，中央ピットから弥生土器14点がみられ，埋土では弥生土器61点(253～313)，石製品5点(314～318)，床面では弥生土器6点(319～324)，中央ピットでは弥生土器1点(325)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－33～38　253～318)

253～313は弥生土器で，253～264は壷である。253は全体の形状が復元できたもので，頸部は垂直方向にまっすぐ立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部内外面にヨコナデ，頸部内面下端から胴上部内面と底部内面にナデ，胴中央部内面にハケ，頸部外面にヘラミガキ，胴部外面にハケのちヘラミガキを施し，胴部外面の一部には煤が付着する。254は胴部を欠損するもので，頸部はやや外反して立ち上がり，口縁端部は上下に拡張される。内面全体と頸部外面にハケ，胴部外面全体にタタキ，口縁部外面にヨコナデを施し，口縁部内面と胴部外面にはヘラミガキ調整を加えるが，胴外面中央部にはタタキ目が残る。255は直立する短い頸部から口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部はヨコナデにより面をなし，内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，外面にはハケ調整を加える。256は底部を欠損するもので，口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキを施し，胴上半部内面に指オサエ，胴上端部と下半部外面にハケ調整を加える。257は口縁部破片で，口縁端部を上方に拡張する。拡張部内外面には交差する刻目を配し，内外面にはヘラミガキを施す。258は頸部破片である。内面にナデ，外面にヘラミガキを施す。259は口縁部を欠損するもので，内面全体にナデ，外面全体にタタキのちハケを施す。260～264は胴部から底部にかけての破片である。260は胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはタタキ目とハケ調整がみられる。261は胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケを施し，底部外面にはタタキ目がみられる。262は内面にナデ，外面にハケのちナデを施し，底部外面にはタタキ目とナデ調整がみられる。263は胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキを施し，胴中央部外面にはハケ調整，胴下半部外面と底部外面にはナデ調整を加える。264は内面にナデ，外面にタタキのちナデを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。265～293は甕で，265～271は全

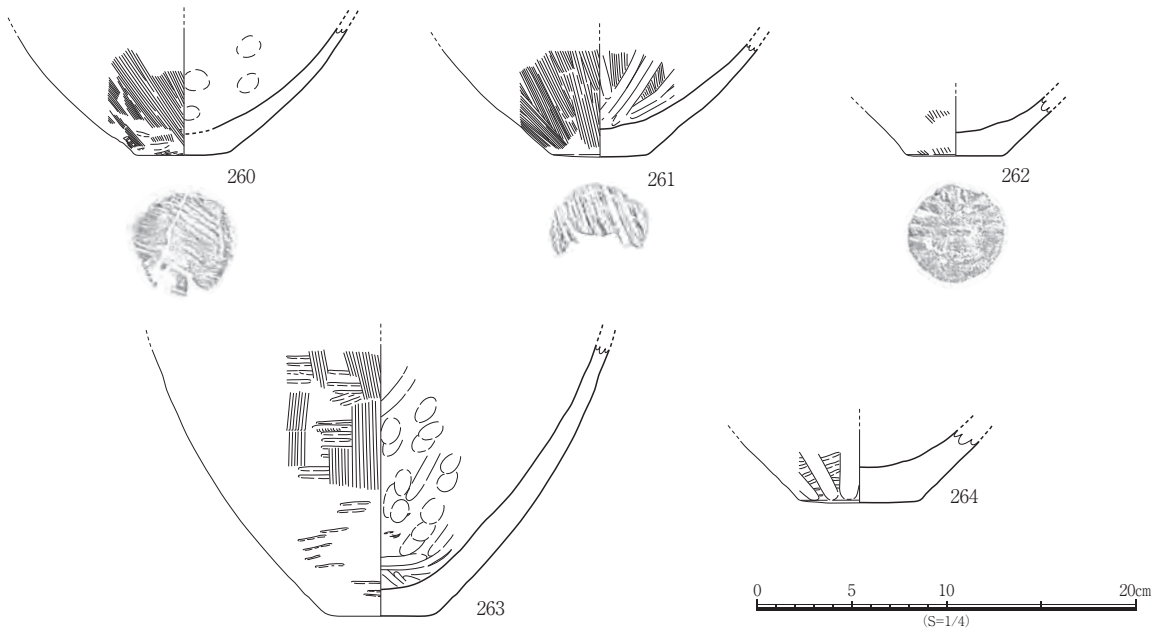


図2－34　ST79埋土出土遺物実測図2

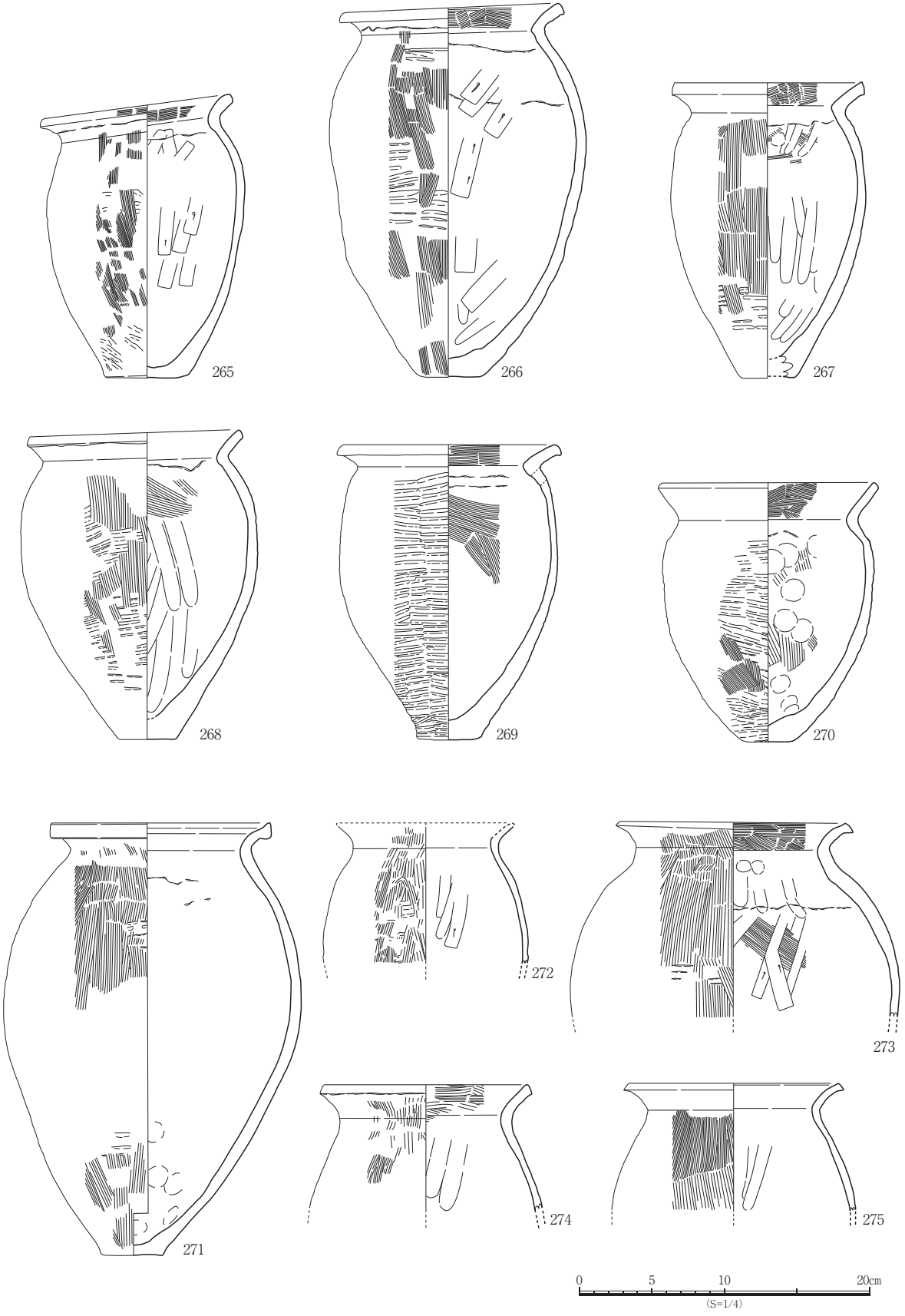


図２－35　ST79埋土出土遺物実測図3

体の形状が復元できたものである。265 ～ 269 は口縁部が短く立ち上がるもので，265 は口縁端部と口縁部内面にハケ，胴上半部内面にヘラナデ，胴中央部から下半部内面にヘラケズリ，底部内面にナデ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にタタキ，底部内面にナデを施し，胴部外面にはハケ調整を加える。266 は口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。267 は口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部から

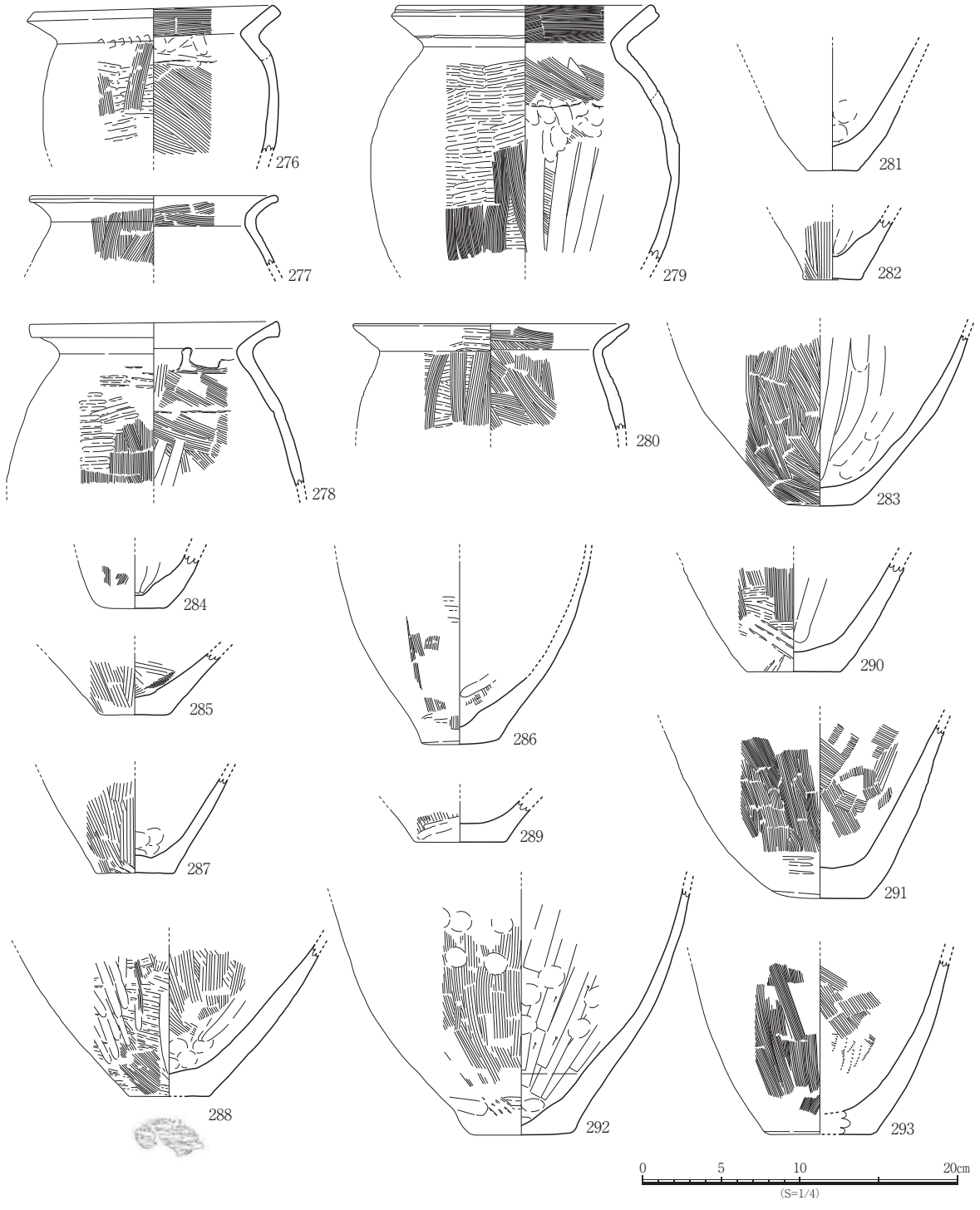


図2－36　ST79埋土出土遺物実測図4

胴上端部内面にハケ，胴部外面にタタキを施す。胴部内面にはナデ調整，胴部外面にハケ調整を加え，胴部外面には煤が付着する。268は口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケのちヨコナデ，胴部内面は上端部にヨコナデ，上半部にハケ，中央部から下半部にナデ，胴部外面はタタキを施したのち，ハケ調整を加える。269は口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面は上端部にヨコナデ，上半部にハケ，下半部にナデ，外面全体にタタキを施す。270は口縁部が斜め上方にやや長く直線的に立ち上がるもので，口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのち指オサエ，胴部外面にタタキを施したのち，一部にハケ調整を加える。271は口縁端部を上下に拡張するもので，口縁端部と口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にナデ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキを施す。胴下半部内面には指オサエ，胴上半部と下半部外面にはハケ調整を加え，胴上半部外面の一部に煤が付着する。272～280は口縁部から胴部にかけての破片である。272は胴部内面は上端部にナデ，中央部にナデのちヘラケズリ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施し，外面全体に煤が付着する。273は口縁端部を下方に拡張するもので，口縁端部にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面は上半部に指オサエとナデ，中央部にハケのちヘラケズリ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケとナデを施し，外面全体に煤が付着する。274は口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケを施す。275は口縁端部が上下に拡張され，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケを施し，外面全体には煤が付着する。276は口縁部が短く立ち上がるもので，口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面は上端部にナデ，中央部にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施す。口縁と胴の屈曲部外面にはヘラナデがみられ，外面全体に煤が付着する。277は口縁部がやや外反して立ち上がり，摩耗のため調整は不明瞭であるが，内外面にハケ調整が認められる。278は口縁端部を上下に拡張し，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキを施し，胴部内面の一部にナデ調整，胴部外面の一部にハケ調整を加える。279は口縁端部と口縁部外面にそれぞれ１条の沈線がみられる。口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面は上端部にナデ，上半部以下にハケ，胴部外面全体にタタキを施し，胴中央部内面には指オサエとナデ調整，胴中央部外面にはハケ調整を加える。280は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施す。胴部外面にはハケ調整を加え，一部には煤が付着する。281～293は胴部から底部にかけての破片である。281は摩耗のため調整は不明瞭であるが，底部内面に指頭圧痕とナデ調整が認められる。282は胴部内面にナデ，胴部外面にハケを施し，底部外面にナデ調整がみられる。283は胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にハケを施す。284は胴部内面にヘラナデ，胴部外面にハケのちナデ，底部外面にナデを施す。285は胴部内外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。286は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部内面にはハケのちナデ，胴部外面にはタタキのちハケ，底部外面にはナデを施す。287は胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。288は胴部内面にハケのちナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケを施し，指ナデとヘラナデを加え，底部外面にタタキのちナデを施す。289は底部内面にナデ，胴部外面にハケのちナデ，底部外面にナデを施す。290は胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。291は胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施す。292は胴部内面にナデとヘラケズリ，293は胴部内面にハケとナデがみられ，胴部外面はともにタタキのちハケとナデ，底部外面にナデを施し，胴中央部外面には煤が付着する。294～305は鉢である。294～298は平底を呈するもので，全体の形状が復元できた。294・295は手づくね成形である。294は

図2－37　ST79埋土出土遺物実測図5

体部内面にハケのちヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。295 は内面全体にヘラナデ，外面全体にナデを施す。296 は内面全体にハケ，体部外面にタタキを施し，器面全体に幅広い原体によるヘラミガキ調整を加える。297 は口縁部から体部内面にハケ，底部内面にナデ，口縁部から体部外面にタタキのちナデ，底部外面にナデを施す。298 は体部がやや内湾して立ち上がり，摩耗のため調整は不明瞭であるが，体部外面にハケ調整が認められる。299 は口縁部が屈曲して立ち上がるもので，口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケを施し，体部内外面には丁寧なヘラ

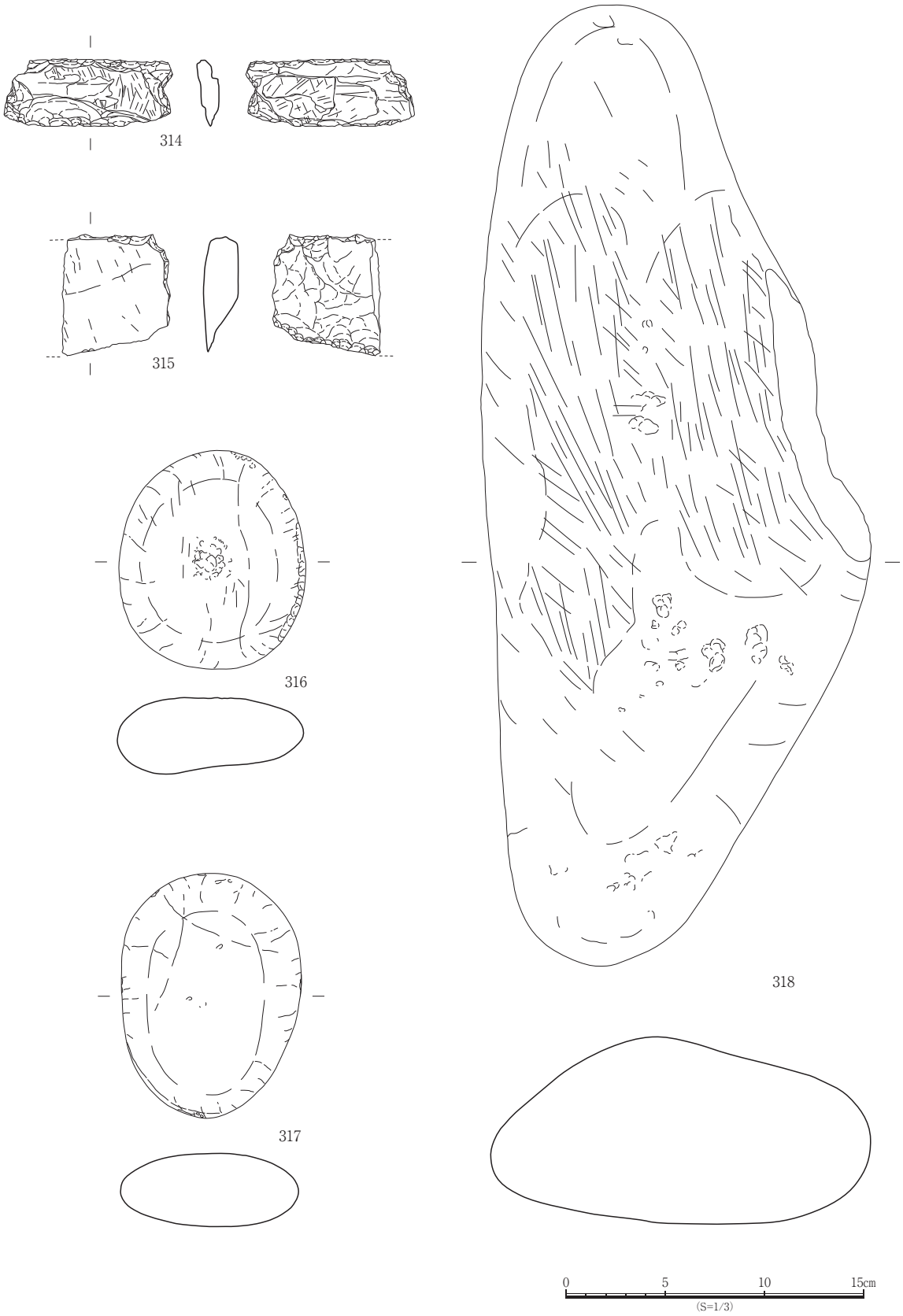


図2－38　ST79埋土出土遺物実測図6

ミガキ調整を加える。300 ～ 305 は体部から底部にかけての破片である。300・301 は高台を有し，300 は内外面に丁寧なナデを施す。301 は体部外面にハケのちナデ，底部内外面にナデを施す。302 は内面全体に丁寧なヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。303 は体部内外面にハケのちヘラミガキを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。304 は体部内面にハケのちナデ，体部外面にタタキのちハケとナデを施し，底部外面にはタタキ目が認められる。305 は体部内外面にハケのちヘラミガキ，底部外面にナデを施す。306 ～ 313 は高杯で，306 は全体の形状が復元できたものである。306 は杯部が椀状を呈するもので，杯口縁部内外面にヨコナデ，杯体部内外面にハケのちヘラミガキ，脚部内外面にハケを施す。307・308 は杯部破片である。307 は口縁部外面にヨコナデ，体部外面と内面全体にハケのち丁寧なヘラミガキを施す。308 は口縁部を欠損し，体部内外面にハケのちヘラミガキを施す。309 ～ 313 は脚柱部破片である。309 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にはハケ調整がみられる。310 も摩耗のため調整は不明瞭であるが，脚部外面にヘラミガキ調整，脚部内面にナデ調整がみられる。311 は外面にヘラミガキ，内面にヘラナデを施し，内面の一部に爪形状圧

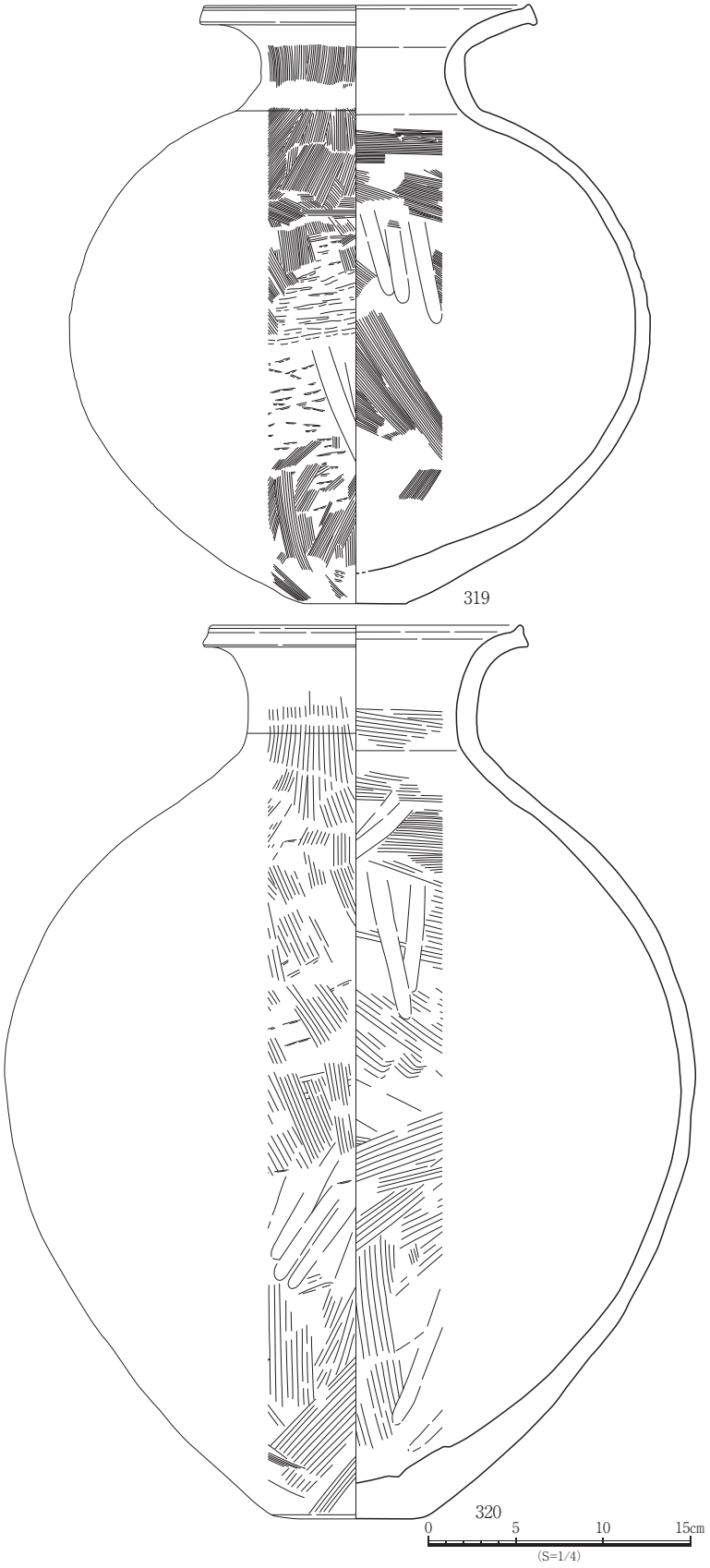


図2－39　ST79床面出土遺物実測図

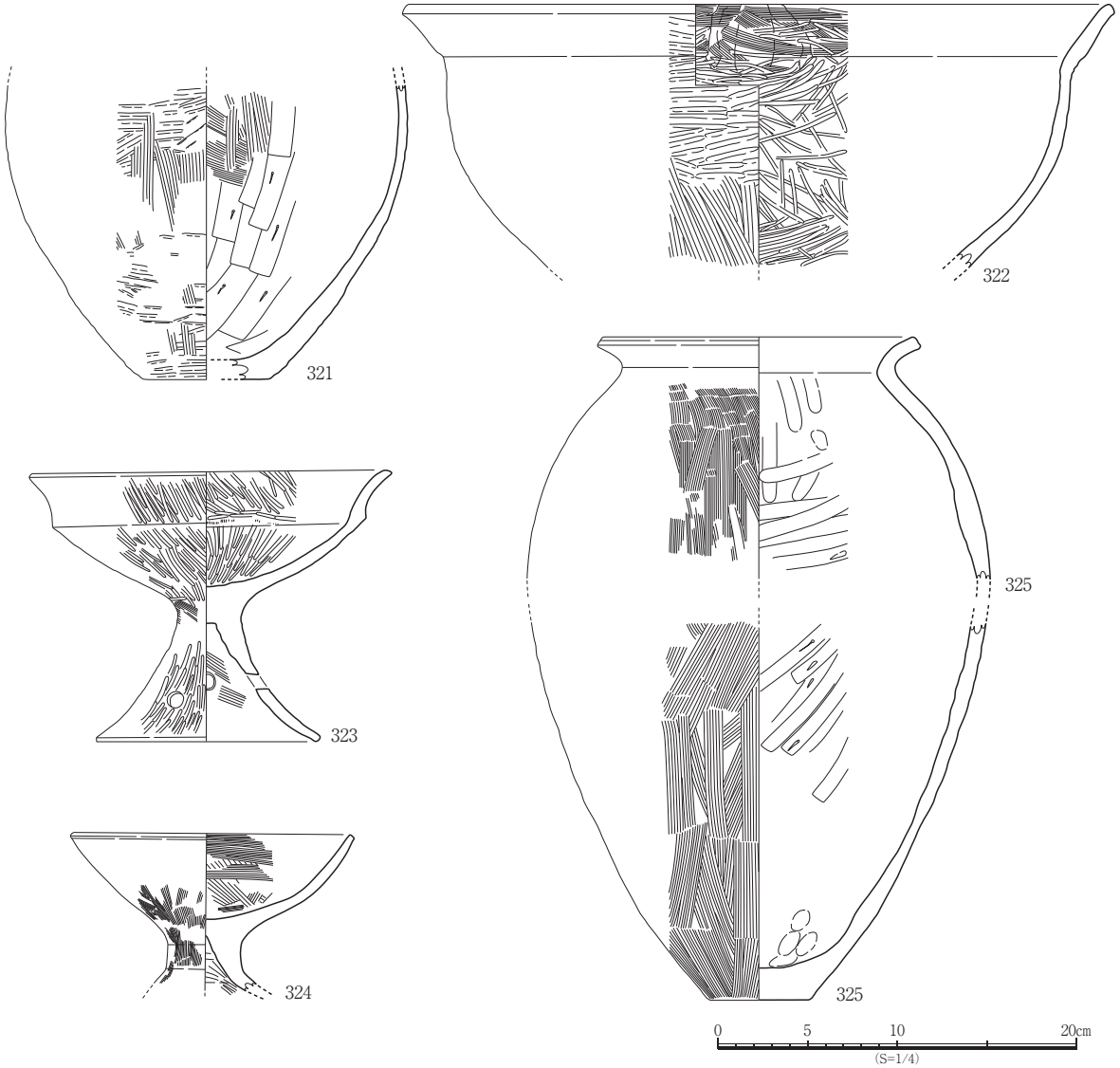


図2－40　ST79床面･中央ピット出土遺物実測図

痕が認められる。312は摩耗のため調整は不明であるが，内面に絞り目がみられる。313は脚柱部外面にハケ，脚裾部外面にヘラミガキ，脚裾部内面にハケのちヨコナデを施す。314～318は石製品である。314・315は石庖丁で，314は完存する。表面には研磨痕がみられ，石材は粘板岩と考えられる。315は片側を欠損し，石材は砂岩である。316・317は叩石で，石材は砂岩である。316は片面と側面の一部に敲打痕がみられ，317は側面の4ヵ所に弱い敲打痕がみられる。318は台石である。3面に使用痕がみられ，石材は砂岩である。

床面出土遺物（図2－39･40　319～324）

319～324は弥生土器である。319・320は壷で，全体の形状が復元できた。319はやや内傾する短い頸部から口縁部が屈曲して立ち上がり，口縁端部は上下に拡張される。胴部は大きく張り，底部は平底である。口縁端部内外面にヨコナデ，内面は頸部と底部にナデ，胴部にハケのちナデ，外面は頸部にハケ，胴上半部にハケ，胴中央部から胴下半部にタタキを施し，頸部外面にハケ調整，胴中央部から下半部にかけてハケ調整を加える。320はやや外反する頸部から口縁部が屈曲して立ち上がり，口

縁端部は上下に拡張される。口縁部内外面にヨコナデ，内面は頸部にハケ，胴上半部にハケのちナデ，胴中央部から下半部にかけてハケのちナデ，外面は胴上半部から中央部にかけてタタキのちハケとナデ，胴下半部にハケを施す。321 は甕の胴部から底部にかけての破片である。内面は胴中央部にハケのちヘラケズリ，胴下半部にヘラケズリ，外面は全体にタタキのちハケを施す。322 は注口を有する鉢である。口縁部は屈曲して立ち上がり，口縁端部にヨコナデ，内面は全体にハケのちヘラミガキ，外面は全体にタタキを施し，口縁部外面にはヨコナデ調整，体下半部にはハケ調整を加える。323・324 は高杯である。323 は全体の形状が復元できたもので，杯部には稜を有し，口縁部はやや外反して立ち上がる。杯口縁部内外面にヨコナデのちヘラミガキ，杯体部内外面と脚部外面にハケのちヘラミガキ，脚部内面にハケを施す。324 は脚部を欠損するもので，口縁端部はヨコナデにより面をなす。器面の内外面にハケを施し，杯口縁部外面にはヨコナデ調整を加える。

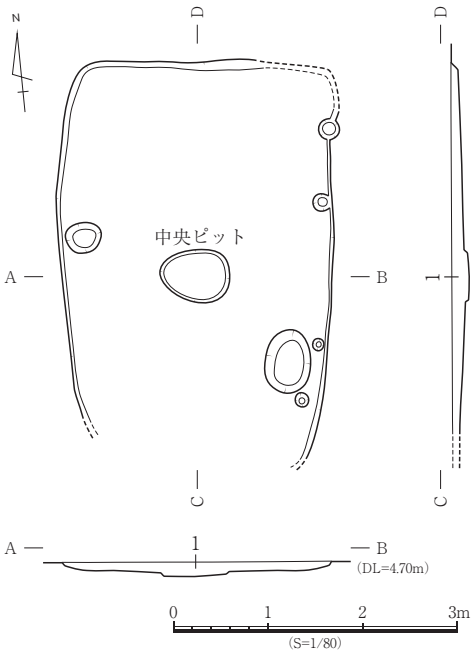
中央ピット出土遺物（図2－40　325）

325 は弥生土器の甕で，全体の形状が復元できた。口縁部は短く屈曲して立ち上がり，口縁部内外面にヨコナデ，内面は胴上半部にナデ，胴中央部から下半部にかけてヘラケズリ，胴下端部にナデと指オサエ，外面は全体にハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。

ST80（図2－41）

調査区中央部西寄りで検出した隅丸長方形を呈する竪穴建物跡である。北側をST79，南側をST74に切られ，長軸と面積は不明であるが，短軸は約 2.9m，検出面からの深さは約 8 ㎝で，床面の標高は約 4.3m を測る。埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）細粒～中粒砂質シルトで，床面では中央ピットとピットを検出した。中央ピットは床面のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸約 0.7m，短軸約 0.6m を測る。床面からの深さは約 5 ㎝で，埋土は土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）細粒～中粒砂質シルトである。ピットは2個検出されたが，主柱穴は不明である。

出土遺物は埋土から弥生土器 10 点がみられ，1 点（326）が図示できた。



遺構埋土
1. 土器と炭化物を含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）細粒～中粒砂質シルト

図2－41　ST80

埋土出土遺物（図2－42　326）

326 は弥生土器の高杯である。脚部を欠損し，杯部には稜がみられ，口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。内面は口縁部から体部にかけてハケ，底部はナデ，外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ，体下端部にハケを施す。

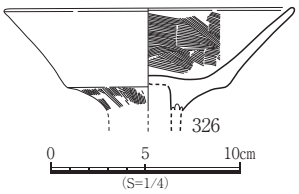


図2－42　ST80埋土出土遺物実測図

ST81（図2－43）

調査区中央部西寄りで検出した隅丸長方形を呈する竪穴建物跡である。長軸は約 4.8m，短軸は約 4.0m を測り，面積は約 19.2 ㎡である。検出面からの深さは約 10 ㎝で，床面の標高は約 4.3m を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色（10YR3/2）

シルト質中粒砂で，床面では中央ピット，ピットを検出した。中央ピットは床面のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸約 0.6m，短軸約 0.5m を測る。床面からの深さは約 7 ㎝で，埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂である。検出したピットのうち主柱穴はP1～4と考えられ，床面からの深さはP1が25㎝，P2が25㎝，P3が16㎝，P4が29㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器 451 点，庄内式土器1点，石製品6点，P1 から弥生土器1点，P2 から弥生土器 3 点，P3 から弥生土器 1 点，P4 から弥生土器2点がみられ，埋土では弥生土器9点(327～335)，石製品6点(336～341)が図示できた。

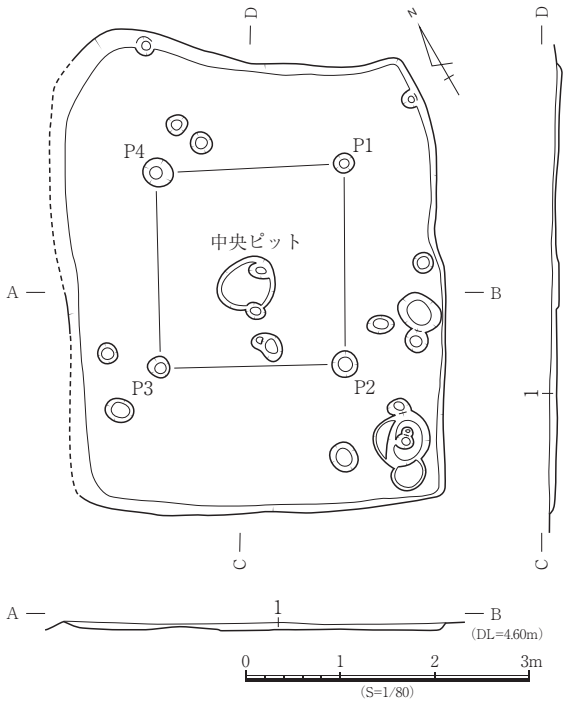


図2－43　ST81

埋土出土遺物(図2－44･45　327～341)

327～335 は弥生土器である。327 は壷の口縁部破片で，内外面にヨコナデを施す。328・329 は甕である。328 は口縁部が短く立ち上がり，口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施す。329は底部破片で，内面にヘラケズリ，外面にハケのちナデを施す。330 は甑とみられる底部破片である。底部には孔が認められ，内面にはハケと指オサエ，外面にはナデとタタキを施す。331～333 は鉢である。331 は底部破片で，底部が尖底である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にハケ調整とナデ調整が認められる。332・333 は皿状

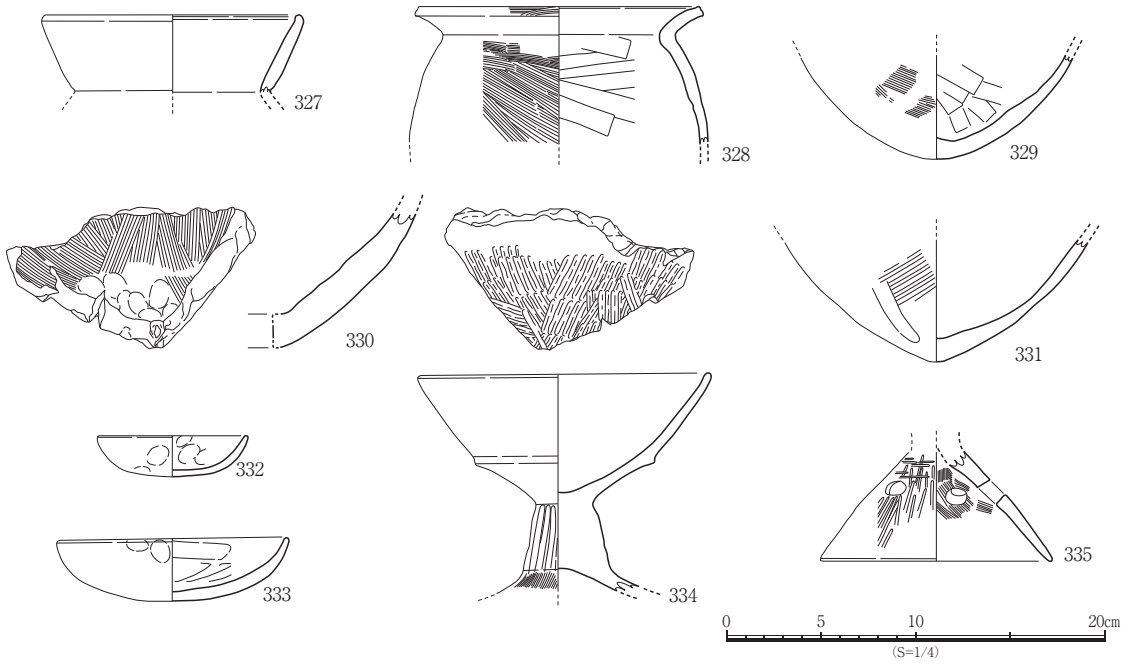


図2－44　ST81埋土出土遺物実測図1

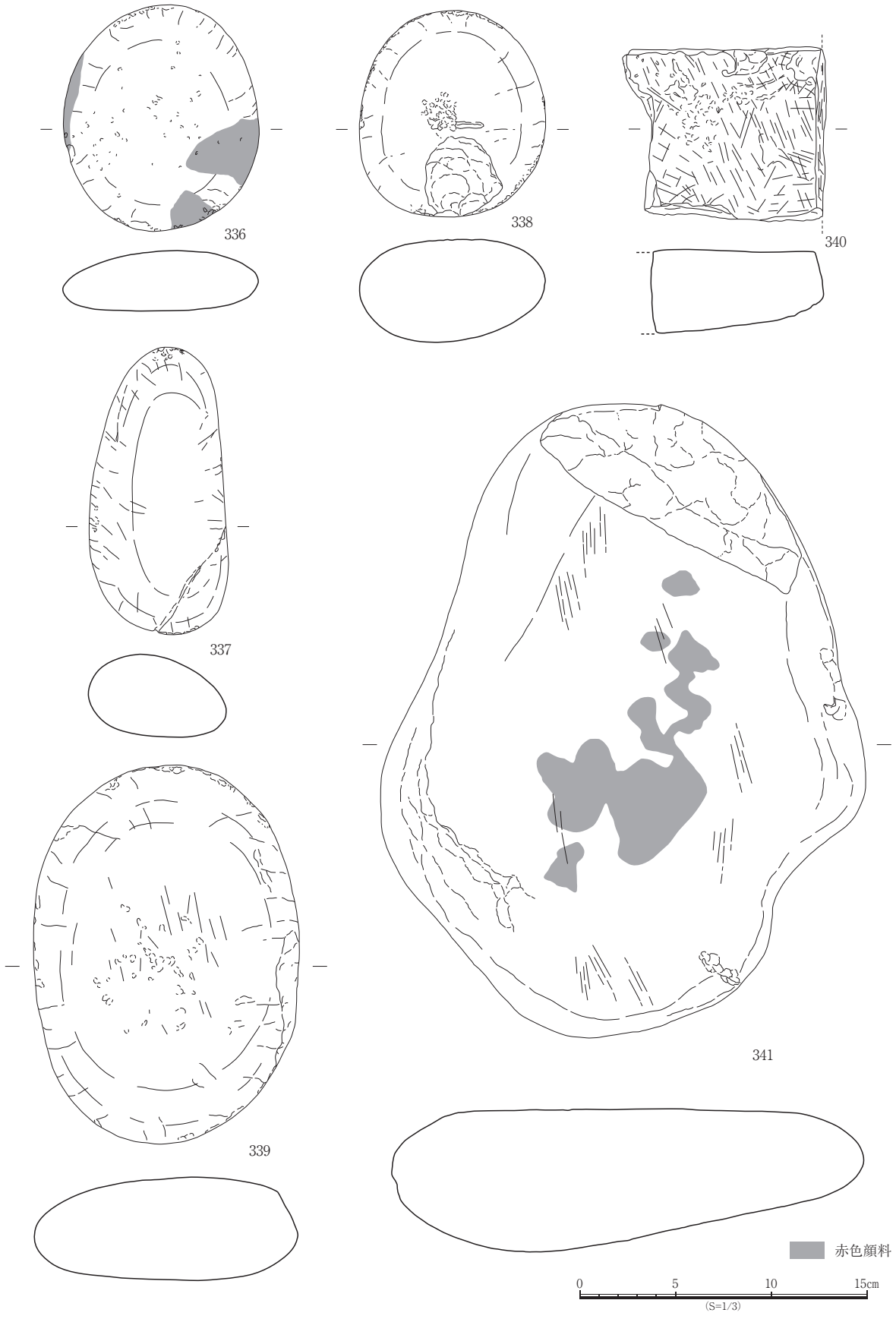


図2－45　ST81埋土出土遺物実測図2

を呈し，手づくね成形である。332は内外面に指オサエとナデを施す。333は内面にナデとヘラナデ，外面にナデを施す。334は高杯である。脚裾部を欠損し，摩耗のため調整は不明瞭であるが，脚柱部外面にヘラミガキ調整，脚裾部外面にハケ調整が認められる。335は器台の脚部破片で，内面にハケ，外面にヨコナデを施し，内面下半部にはヨコナデ調整，外面全体にはヘラミガキ調整を加える。336～341は石製品である。336～339は叩石で，石材は砂岩である。336・337は両端に弱い敲打痕がみられ，338は片面と両端に敲打痕がみられる。339は側面1ヵ所に強い敲打痕，端部と片面に弱い敲打痕がみられる。340は砥石である。3面に使用痕が認められ，石材は細粒砂岩である。341は台石で，片面に使用痕がみられ，赤色顔料が付着する。石材は砂岩である。

ST82（図2－46）

調査区中央部西寄りで検出した隅丸方形を呈する竪穴建物跡で，SB3に切られる。長軸は約3.7m，短軸は約3.5mを測り，面積は約13.0㎡である。検出面からの深さは約17㎝で，床面の標高は約4.5mを測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)シルトで，床面ではピット，壁溝を検出したが，主柱穴は不明である。壁溝は壁際で確認され，確認長約5.0m，幅16～24㎝，深さ3～8㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器697点，土製品1点，石製品1点，床面から弥生土器39点，壁溝から弥生土器17点がみられ，埋土では弥生土器5点(342～346)，土製品1点(347)，石製品1点(348)が図示できた。

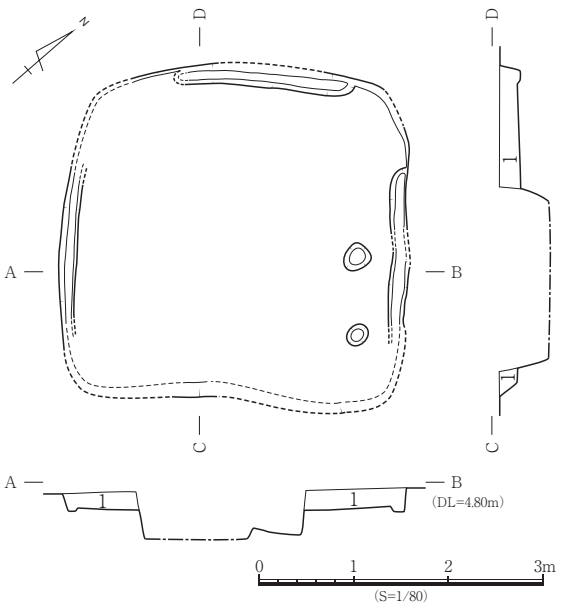


図2－46　ST82

埋土出土遺物（図2－47　342～348）

342～346は弥生土器で，342・343は甕である。342は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部はやや外反して立ち上がる。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキを施し，口縁部と胴部外面の一部に煤が付着する。343は底部破片で，内面にハケ，外面にタタキのちハケを施す。344・345は鉢で，口縁部が屈曲するものである。344は口縁

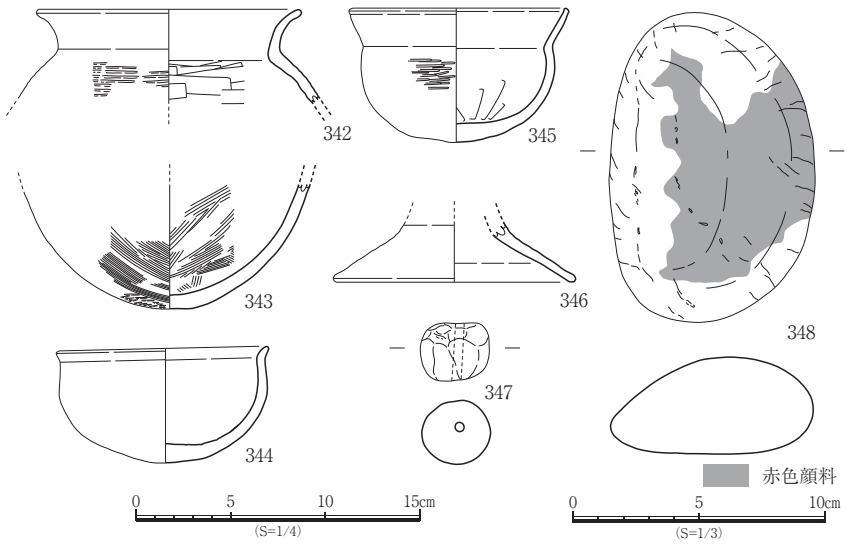


図2－47　ST82埋土出土遺物実測図

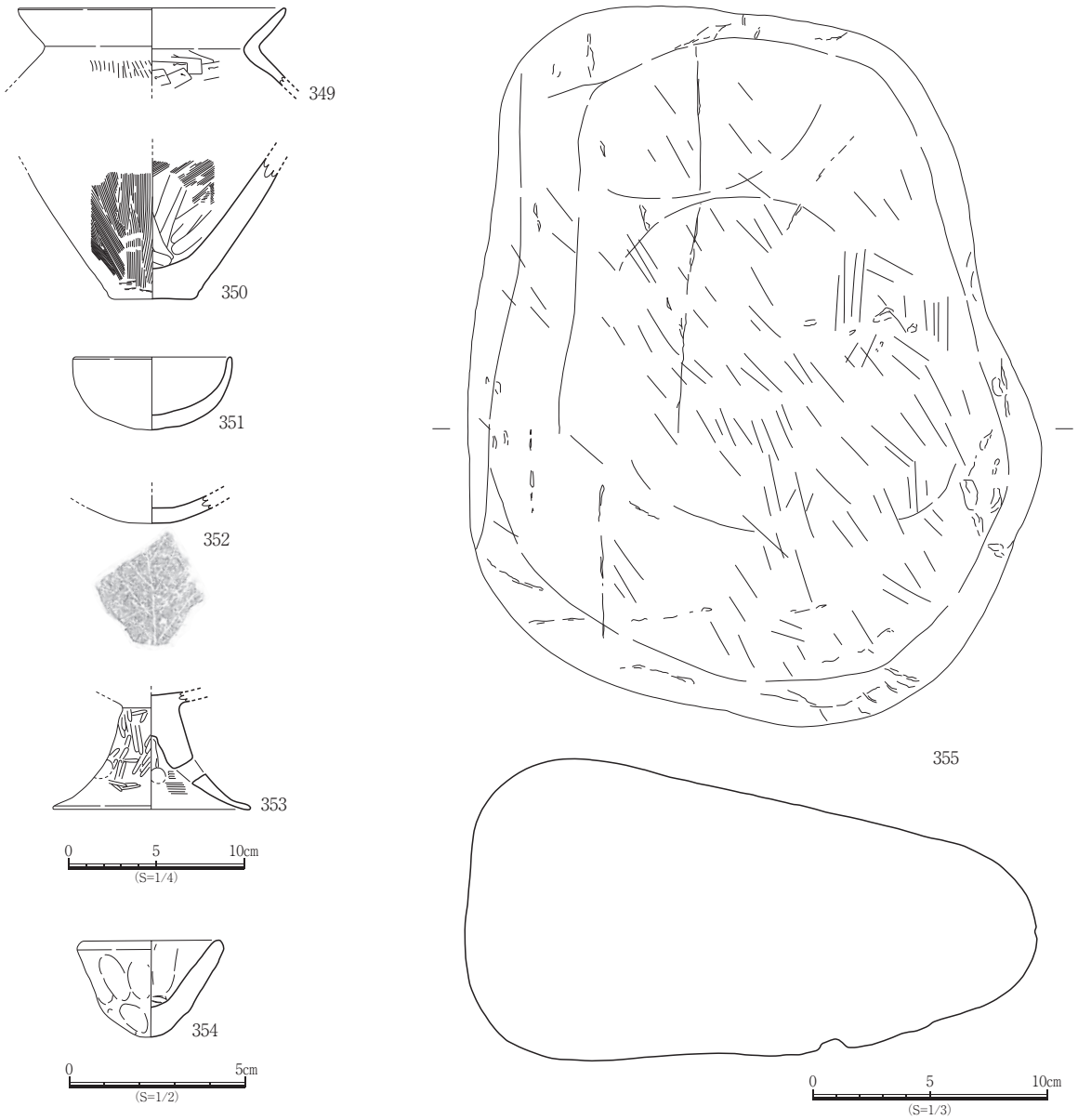


図2－48　ST83埋土出土遺物実測図

部が短く屈曲し立ち上がるもので，摩耗のため調整は不明である。345は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデと指ナデ，体部外面にナデを施し，外面の一部にはヘラミガキ調整を加える。346は高杯の脚部破片で，内外面にヨコナデを施す。347は土製品の土玉で，完存する。表面にはナデ調整と指オサエがみられる。348は石製品の磨石と考えられるもので，表面には赤色顔料が付着する。石材は砂岩である。

ST83

調査区中央部で検出した竪穴建物跡とみられるもので，SK7に切られる。削平を受けており，長軸・短軸・面積は不明である。検出面からの深さは約15㎝で，床面の標高は約4.1mを測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，床面ではピット，壁溝を検出した。主柱穴は不明で，壁溝は西側と南側のみ残存し，確認長約4.6m，幅17～32㎝，深さ約5㎝を測る。

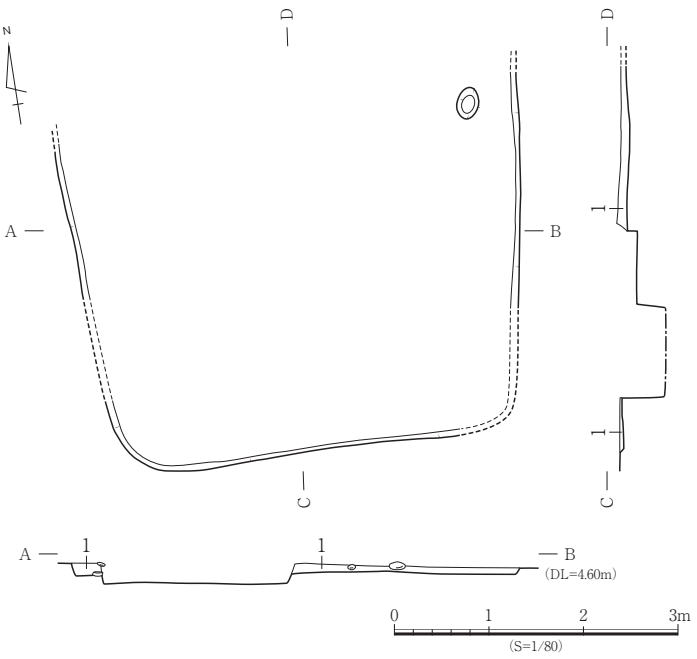
出土遺物は埋土から弥生土器346点，石製品１点，床面から弥生土器24点，壁溝から弥生土器２点がみられ，埋土では弥生土器６点(349～354)，石製品１点(355)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－48　349～355)

349～354は弥生土器で，349・350は甕である。349は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施す。350は底部から胴部にかけての破片で，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケを施す。351・352は鉢である。351は丸底を呈するもので，口縁部内外面にヨコナデを施し，他の器面にはナデ調整がみられる。352は底部破片で，器面にはナデを施し，底部外面に葉脈の圧痕が残る。353は高杯である。脚部から杯部にかけての破片で，脚裾部内外面にヨコナデ，脚部内面にハケ，脚部外面にヘラミガキを施し，杯部内面にはハケ調整のちヘラミガキ調整が認められる。354はミニチュア土器で，器面には指オサエとナデを施す。355は石製品の台石である。断面三角形を呈し，片面のみ使用痕がみられる。石材は砂岩である。

ST84(図2－49)

調査区中央部東寄りで検出した隅丸方形とみられる竪穴建物跡である。削平を受けており，長軸・短軸・面積は不明であるが，東西幅は約4.8mである。検出面からの深さは約４㎝で，床面の標高は約4.4mを測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，床面ではピットを検出したが，主柱穴は不明である。



遺構埋土
1. 土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂

図2－49　ST84

出土遺物は埋土から弥生土器174点，土師器53点，須恵器３点，石製品１点がみられ，弥生土器１点(356)，石製品１点(357)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－50　356・357)

356は弥生土器の甕である。口縁部は短く立ち上がり，底部は平底を呈する。内面は胴部にナデ，底部に指オサエ，外面はタタキのちハケを施す。底部外面にはナデ調整がみられ，胴中央部外面には煤が付着する。357は石製品の台石である。両面に使用痕がみられ，石材は砂岩である。

ST85

調査区東部で検出した隅丸方形とみられる竪穴建物跡である。削平を受けており，長軸・短軸・面積は不明である。検出面からの深さは約４㎝で，床面の標高は約4.4mを測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂である。

出土遺物は埋土から弥生土器45点，土師器５点がみられたが，図示できるものはなかった。

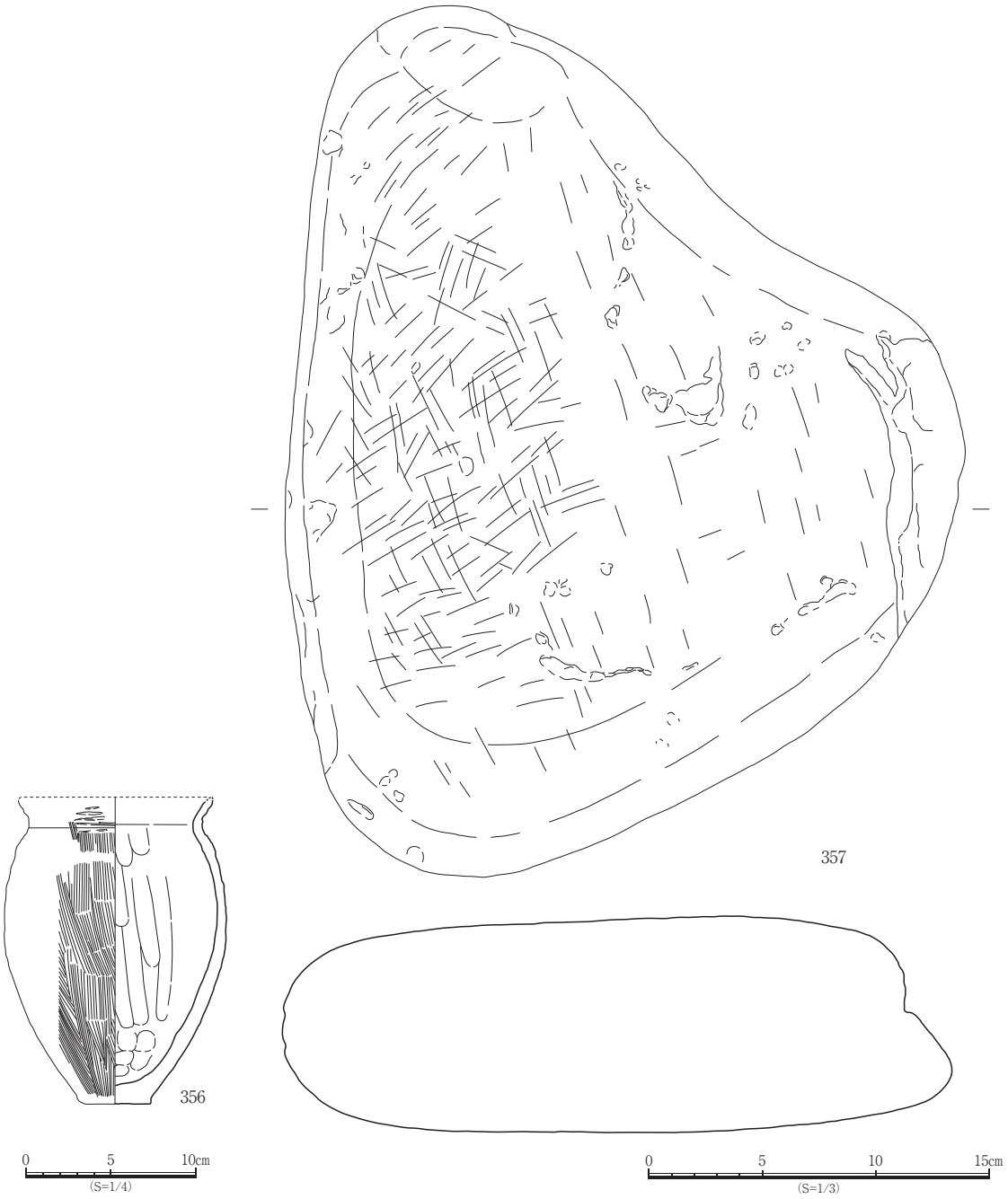


図2－50　ST84埋土出土遺物実測図

ST86

調査区東部で検出した竪穴建物跡で，ST87 に切られる。削平を受けており，長軸・短軸・面積は不明であるが，東西幅は約4.9mである。検出面からの深さは約17㎝で，床面の標高は約4.3mを測る。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルトで，床面ではピット，壁溝を検出したが，主柱穴は不明である。壁溝は東西側のみ確認され，確認長約3.6m，幅12～23㎝，深さ4～13㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器1,309点，庄内式土器2点，土師器59点，須恵器9点，石製品3点，床面から弥生土器19点，庄内式土器1点，土師器4点，石製品3点，壁溝から弥生土器6点がみられ，埋

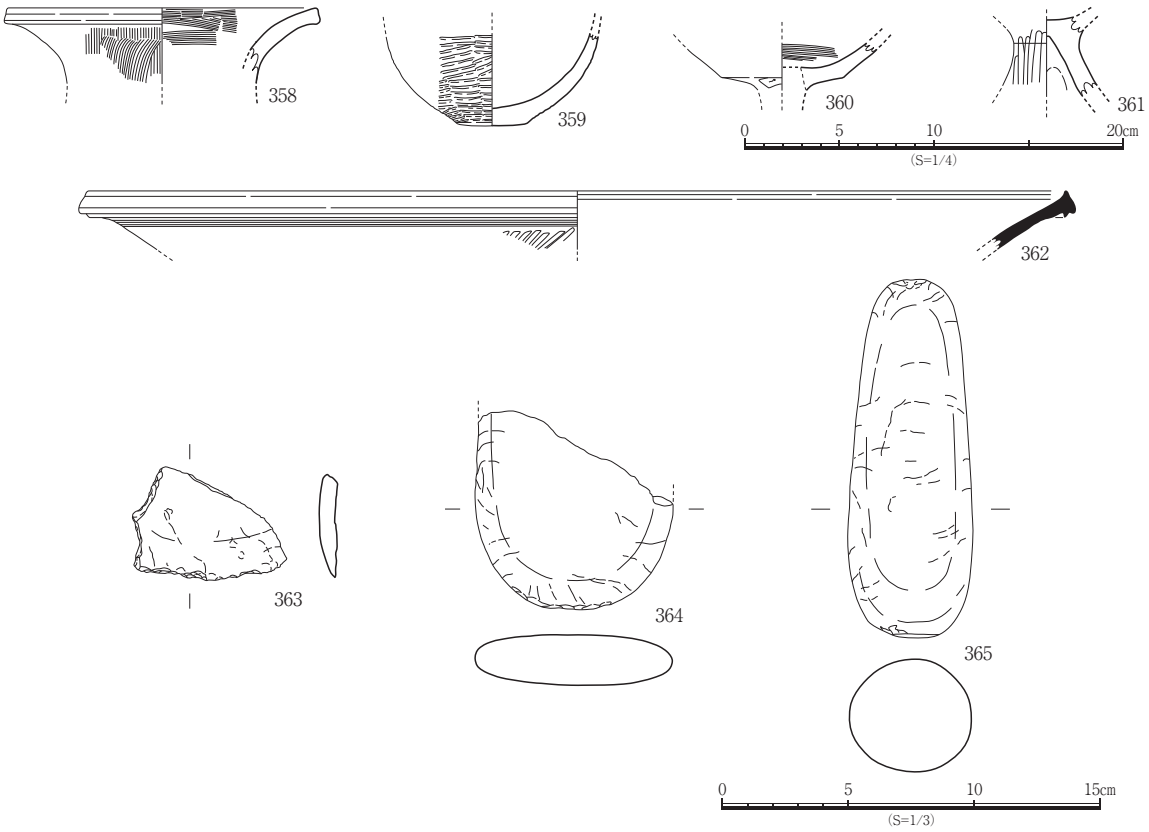


図2－51　ST86埋土出土遺物実測図

土では弥生土器4点(358～361)，須恵器1点(362)，石製品3点(363～365)，床面では庄内式土器1点(366)，石製品2点(367･368)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－51　358～365)

358～361は弥生土器である。358は壷の口縁部破片である。口縁端部はヨコナデにより面をなし，内面外面にハケを施す。359は鉢の体部から底部にかけての破片である。体部内面にナデ，体部外面にタタキを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。360･361は高杯である。360は杯部破片で，口縁部を欠損する。体部内面にハケ，体部外面にヨコナデのちナデを施し，体部外面下端にはヘラケズリ調整がみられる。361は脚部破片で，裾部を欠損する。外面にヘラミガキ，内面にナデを施す。362は須恵器の甕と考えられる口縁部破片である。器面には回転ナデを施し，外面には斜行するヘラ描文様がみられる。363～365は石製品である。363は石庖丁と考えられるもので，片側のみ抉りがみられ，石材は砂岩である。364・365は叩石で，石材は砂岩である。364は約1/2のみ残存し，端部に敲打痕がみられる。365は端部の片側に敲打痕，もう片側に使用痕がみられ，磨石としての使用も想定される。

床面出土遺物(図2－52　366～368)

366は庄内式土器と考えられる甕である。胴部破片で，内面にはヘラケズリ，外面にはハケを施す。367･368は石製品の叩石で，片面と両端部に弱い敲打痕がみられ，石材は砂岩である。

ST87

調査区東部で検出した竪穴建物跡で，ST86を切る。削平を受けており，長軸・短軸・面積は不明である。検出面からの深さは約7㎝で，床面の標高は約4.4mを測る。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)粘土質

シルトで，床面ではピットを検出したが，主柱穴は不明である。また，西側ではベッド状の高まりが存在する。

出土遺物は埋土から弥生土器5点，床面から須恵器2点がみられ，床面では須恵器(369･370)が図示できた。

床面出土遺物(図2－53　369･370)

369・370は須恵器の杯身で，ほぼ完存する。ともに器面には回転ナデを施し，底部内面にはナデ調整を加え，底部切り離しは回転ヘラ切りである。

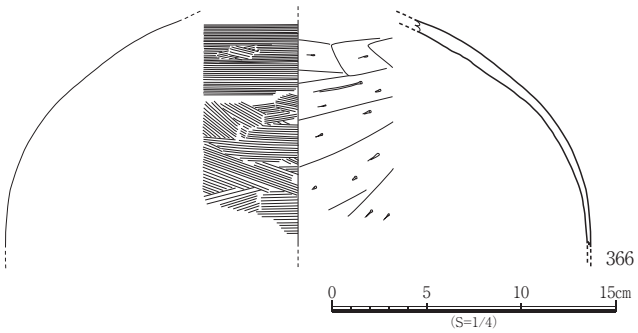
ST88

調査区中央部で検出した竪穴建物跡と考えられるものである。大部分が南側に続き，規模は不明である。検出面からの深さは約24㎝で，床面の標高は約4.5mを測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)シルトである。

出土遺物は埋土から弥生土器110点がみられ，1点(371)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－53　371)

371は弥生土器の壷と考えられるものである。胴部破片で，内外面にハケを施す。



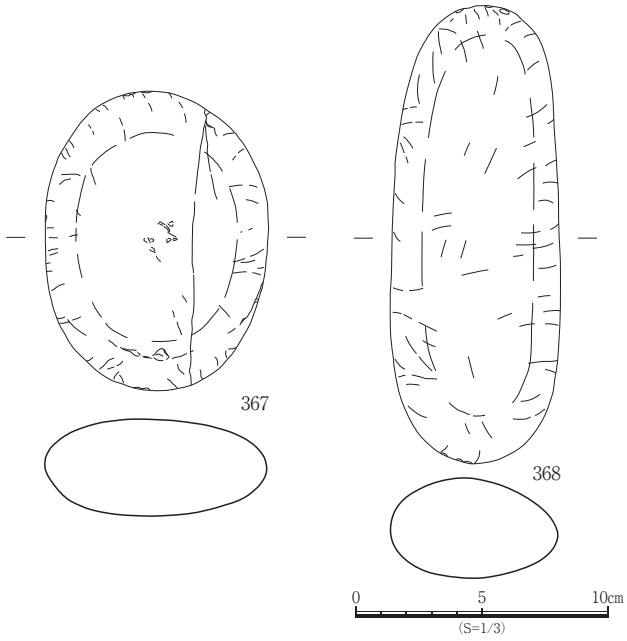


図2－52　ST86床面出土遺物実測図

② 掘立柱建物跡

SB1(図2－54)

調査区西部で検出した桁行3間(5.7m)，梁行3間(5.1m)の南北棟建物跡で，軸方向はほぼGNに沿う。柱間寸法は桁行1.80～1.95m，梁行1.65～1.80mで，面積は29.1㎡を測る。柱穴の掘方は楕円形及び隅丸方形を呈し，径及び一辺61～72㎝，深さ7～33㎝で，埋土は土器を含む黒色(7.5YR2/1)粘土質シルトである。

出土遺物はP1から弥生土器75点，土師器28点，P2から弥生土器55点，土師器6点，須恵器2点，P3から弥生土器72点，土師器2点，P5から弥生土器25点，土師器3点，須恵器1点，P6から弥生土器12点，土師器1点がみられ，P2では須恵器1点(372)が図示できた。

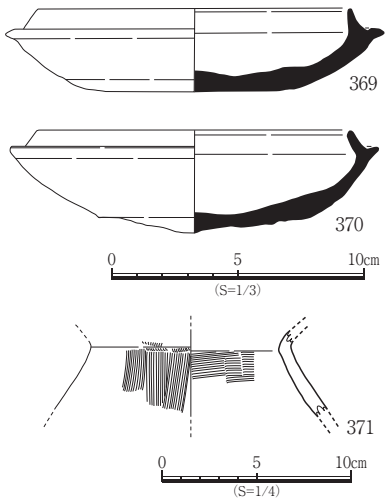


図2－53　ST87床面･ST88埋土出土遺物実測図

P2出土遺物(図2－55　372)

372は須恵器と考えられる小壷である。口縁端部は外側に拡張され，器面には回転ナデを施す。

SB2(図2－56)

調査区中央部北寄りで検出した桁行4間(7.8m)，梁行3間(4.5m)の南北棟総柱建物跡で，軸方向はN－1°－Eである。柱間寸法は桁行1.65～2.10m，梁行1.50mで，面積は35.1㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺54～77㎝，深さ17～53㎝で，埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトである。

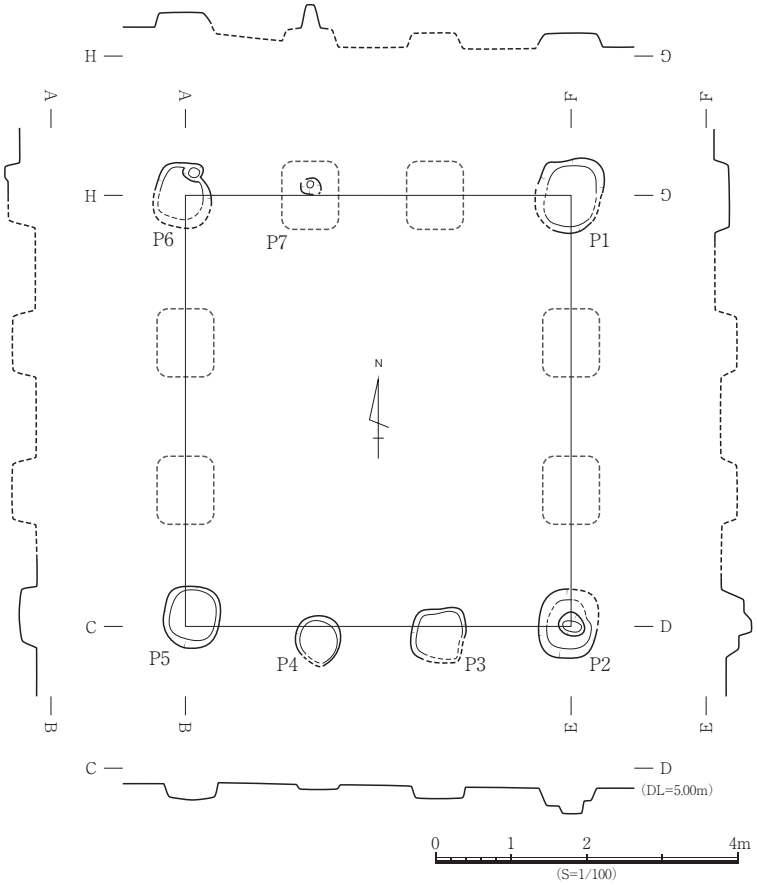


図2－54　SB1

出土遺物はP1から弥生土器113点，土師器8点，須恵器5点，P2から弥生土器191点，土師器7点，須恵器2点，P3から弥生土器44点，土師器3点，須恵器1点，P4から弥生土器19点，土師器2点，須恵器2点，P5から弥生土器20点，土師器3点，須恵器6点，石製品1点，P6から弥生土器18点，須恵器1点，石製品1点，P7から弥生土器34点，土師器6点，瓦1点，P8から弥生土器7点，土師器2点，P9から弥生土器56点，土師器4点，須恵器1点，P10から弥生土器23点，土師器2点，須恵器5点，P11から弥生土器18点，土師器2点，須恵器2点，石製品1点，P12から弥生土器4点，土師器2点，須恵器1点，石製品2点，P13から弥生土器19点，土師器7点，須恵器1点，瓦1点，P14から弥生土器35点，土師器5点，須恵器3点，P15から弥生土器54点，土師器3点，須恵器1点，土製品1点，P16から弥生土器74点，土師器7点，P17から弥生土器40点，土師器37点，須恵器2点，P18から弥生土器22点，土師器26点，須恵器1点，石製品1点，P19から弥生土器23点，土師器6点，P20から弥生土器7点，土師器5点がみられ，P1では弥生土器1点(373)，須恵器1点(374)，P5では須恵器1点(375)，石製品1点(380)，P6では石製品1点(376)，P7では瓦1点(377)，P11では石製品1点(378)，P12では石製品2点(381･382)，P18では石製品1点(383)，P19では弥生土器1点(379)が図示できた。

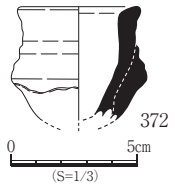


図2－55　SB1出土遺物実測図

P1出土遺物(図2－57　373･374)

373は弥生土器の高杯で，脚柱部破片である。内面にナデとヘラナデ，外面にヘラミガキを施す。374は須恵器の杯身と考えられる底部破片である。内面に回転ナデ，外面に回転ヘラケズリを施し，底部内面にはナデ調整を加える。

P5出土遺物(図2－57　375･380)

375は須恵器の杯身である。器面には回転ナデを施し，底部外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。380は石製品の礎盤で，台石の転用と考えられる。断面は三角形を呈し，1面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。

P6出土遺物(図2－57　376)

376は石製品の石庖丁と考えられるものである。両端の抉りが明瞭ではなく，未成品とみられる。石材は砂岩である。

P7出土遺物(図2－57　377)

377は平瓦である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，端部にヘラケズリ調整，凹面に布目圧痕，凸面に縄目状のタタキ目がみられる。

P11出土遺物(図2－57　378)

378は石製品の叩石である。側面6ヵ所に敲打痕がみられ，石材は砂岩である。

P12出土遺物

(図2－57　381･382)

381・382は石製品の礎盤で，台石の転用と考えられる。381は全面に使用痕が認められ，石材は砂岩である。382は断面三角形を呈し，1面に使用痕と被熱痕が認められる。石材は砂岩である。

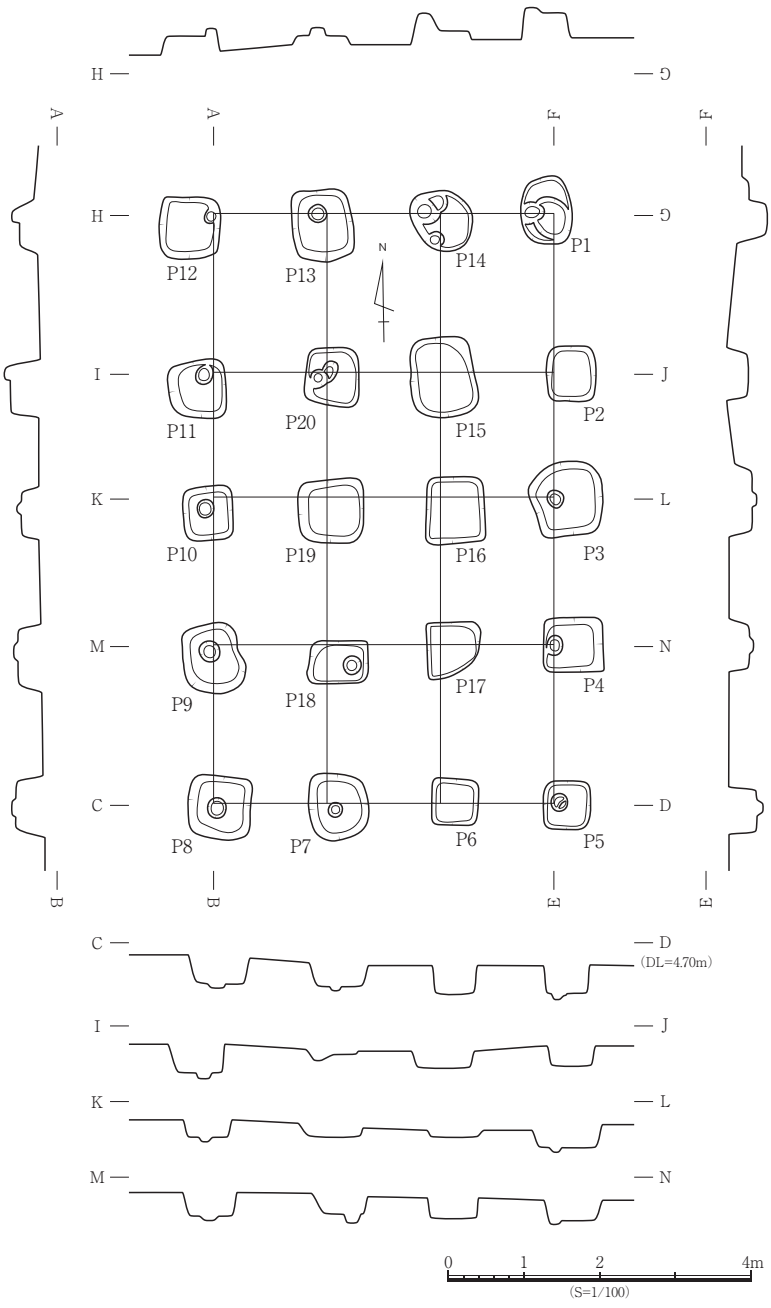


図2－56　SB2

P18出土遺物(図2－57　383)

383は石製品の礎盤と考えられるものである。断面は方形を呈し，石材は花崗岩とみられる。

P19出土遺物(図2－57　379)

379は弥生土器の甕とみられる底部破片である。内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちナデを施す。

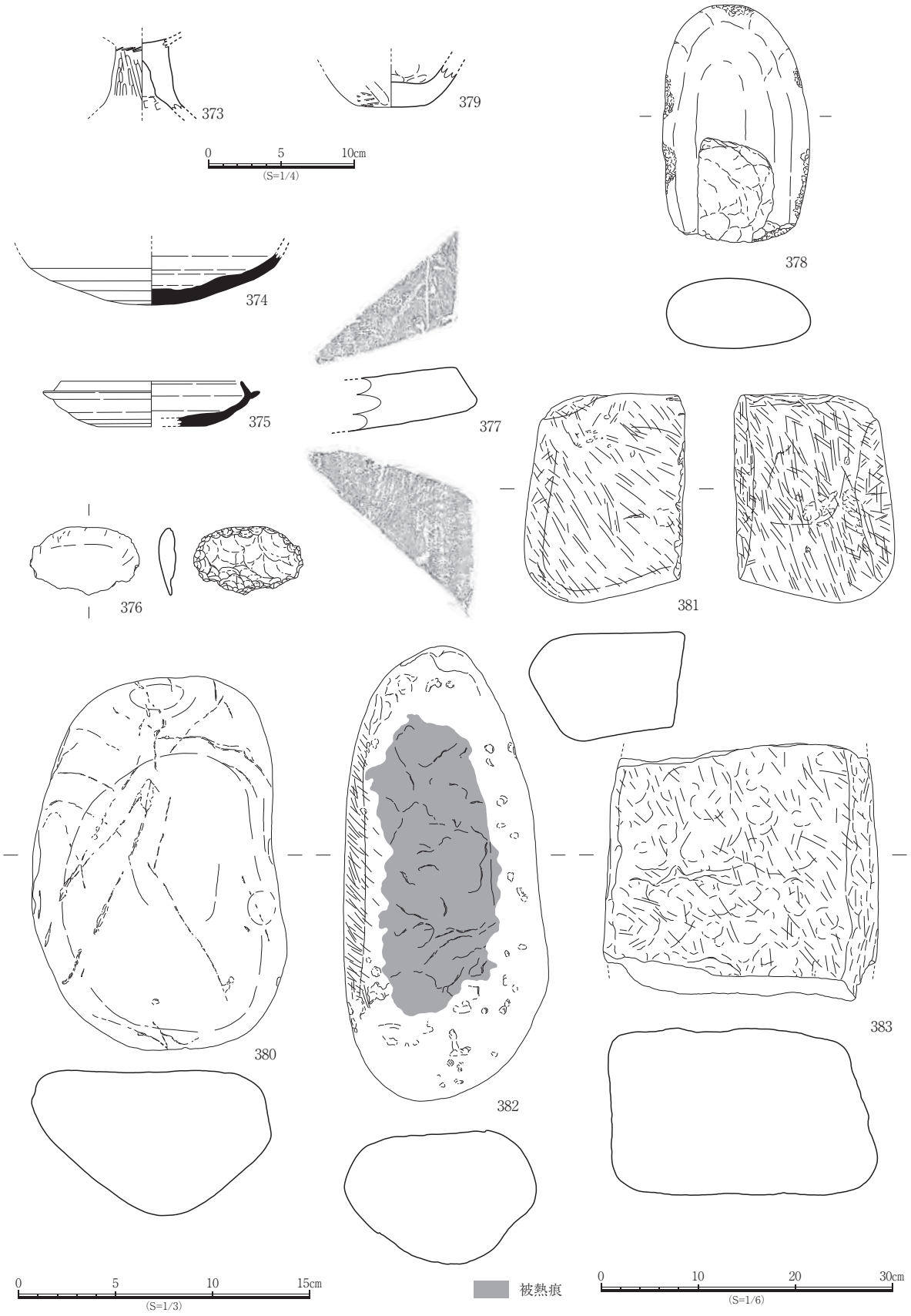


図２－57　SB2出土遺物実測図

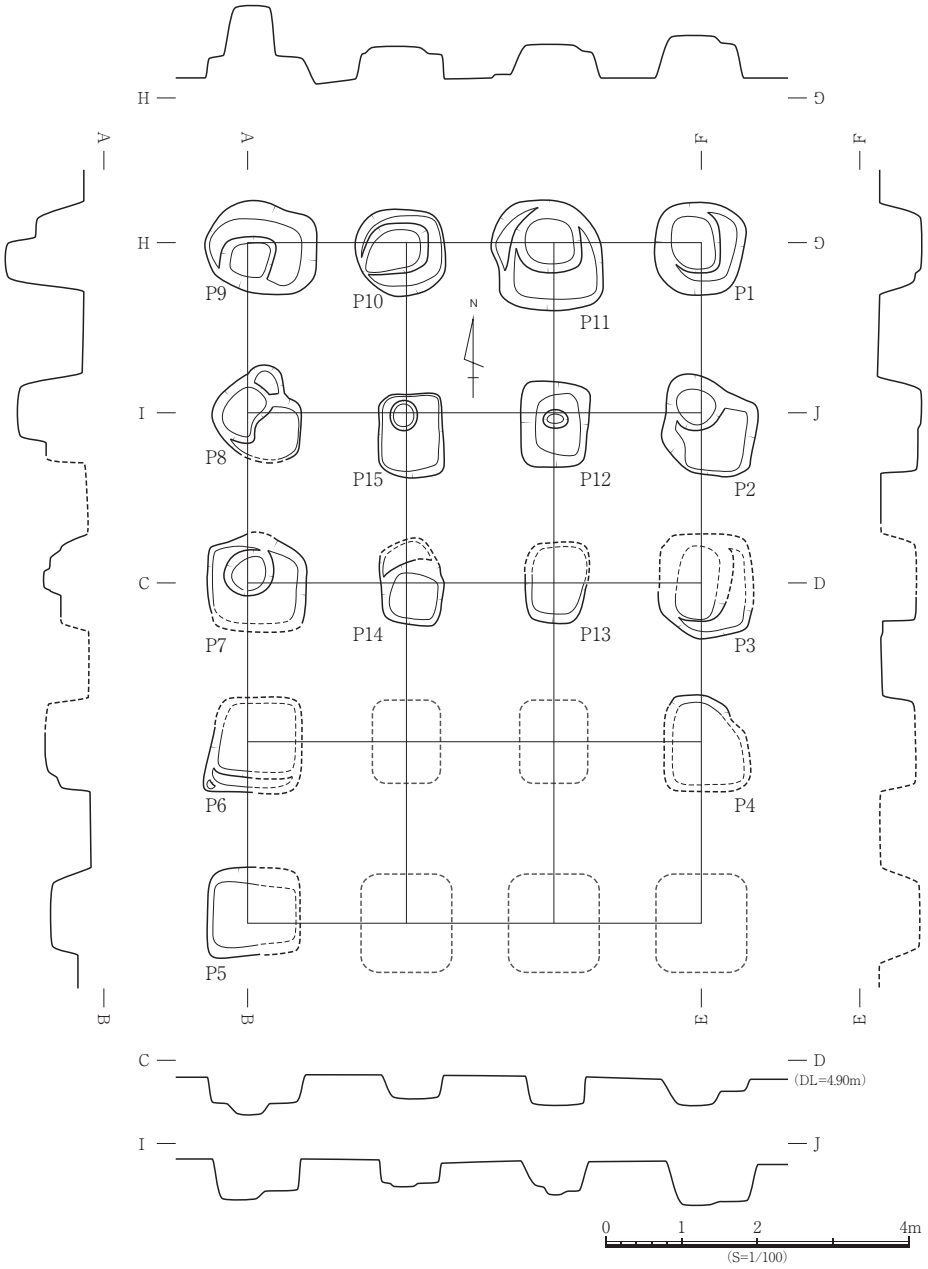


図2－58　SB3

SB3(図2－58)

調査区中央部で検出した桁行4間(9.0m)，梁行3間(6.0m)の南北棟総柱建物跡で，軸方向はN－0.5°－Eである。柱間寸法は桁行2.10～2.40m，梁行1.95～2.10mで，面積は54.0㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺81～151㎝，深さ12～52㎝で，埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトである。

出土遺物はP1から弥生土器17点，須恵器6点，瓦1点，P2から弥生土器25点，須恵器3点，P3から弥生土器13点，土師器4点，須恵器2点，P4から弥生土器2点，土師器4点，P5から土師器3点，須恵器1点，P6から弥生土器2点，P7から弥生土器50点，土師器26点，須恵器10点，瓦2点，P8から弥生土器165点，土師器9点，須恵器5点，瓦1点，P9から弥生土器58点，土師器6点，須恵器11点，

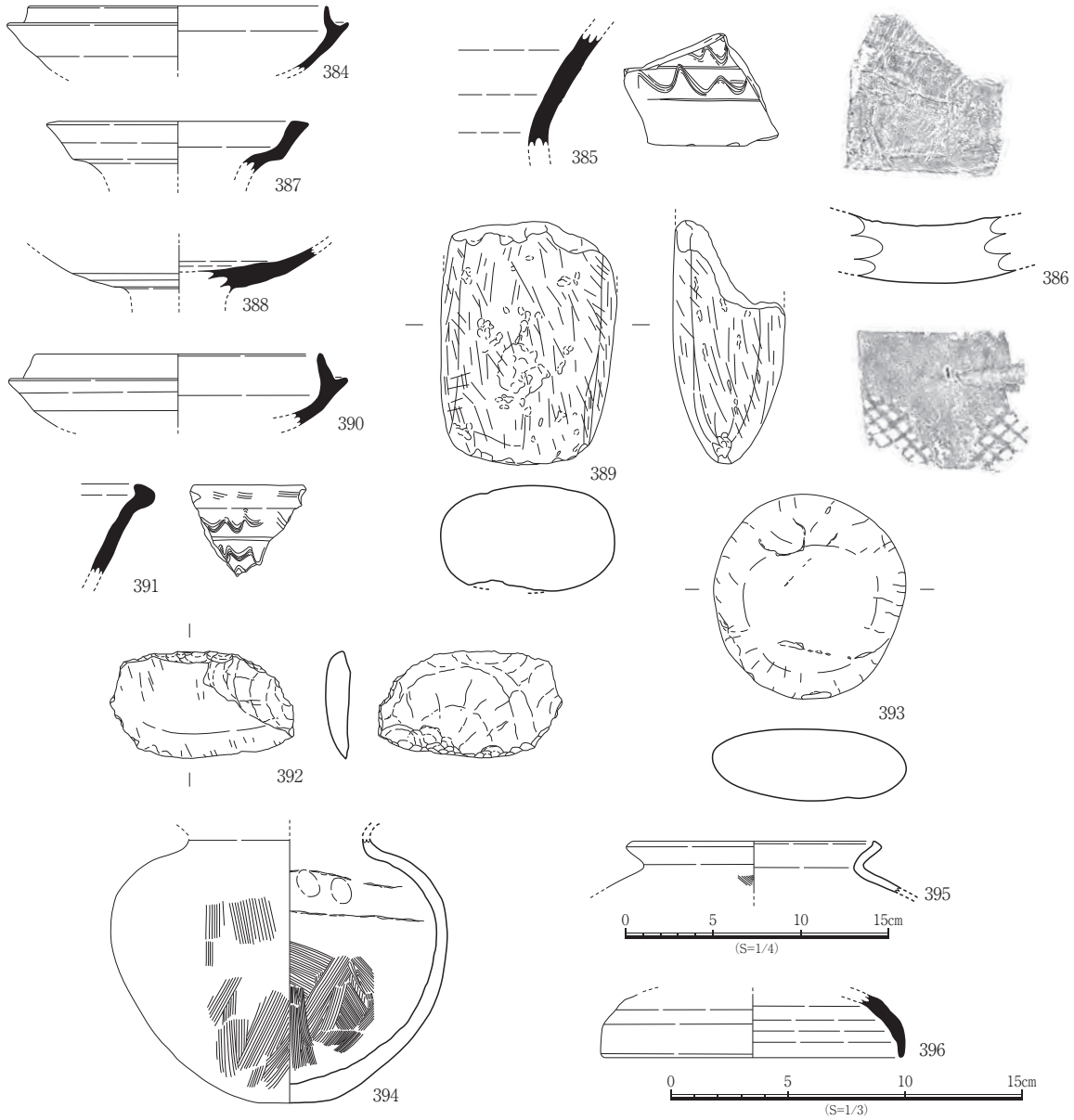


図2－59　SB3出土遺物実測図

P10から弥生土器69点，土師器1点，須恵器4点，石製品1点，P11から弥生土器23点，土師器3点，須恵器9点，P12から弥生土器160点，土師器71点，須恵器11点，石製品1点，P13から弥生土器41点，土師器5点，須恵器1点，石製品1点，P14から弥生土器35点，土師器17点，須恵器4点，P15から弥生土器140点，東阿波型土器1点，土師器8点，須恵器14点がみられ，P1では須恵器2点(384･385)，瓦1点(386)，P7では須恵器2点(387･388)，P10では石製品1点(389)，P11では須恵器2点(390･391)，P12では石製品1点(392)，P13では石製品1点(393)，P14では土師器1点(394)，P15では東阿波型土器1点(395)，須恵器1点(396)が図示できた。

P1出土遺物(図2－59　384～386)

384・385は須恵器である。384は杯身で，器面には回転ナデを施す。385は甕の頸部破片と考えられるものである。内外面に回転ナデを施し，外面には沈線と2段の波状文を配す。386は平瓦である。凹

面に布目圧痕，凸面に格子状のタタキ目がみられ，凹凸面ともにナデ調整を加える。

P7出土遺物（図2－59　387･388）

387・388は須恵器である。387は壷とみられる口縁部破片である。口縁部は外側に拡張され，器面には回転ナデを施す。388は高杯の杯部破片で，外面下端に回転ヘラケズリ，他の部位に回転ナデを施し，外面下端部には透かしの痕跡が認められる。

P10出土遺物（図2－59　389）

389は石製品の太型蛤刃石斧である。基部を欠損し，刃部は使用により破損する。石材は蛇紋岩と考えられる。

P11出土遺物（図2－59　390･391）

390・391は須恵器である。390は杯身で，内外面に回転ナデを施す。391は甕と考えられる口縁部破片である。器面には回転ナデを施し，外面には波状文を配する。

P12出土遺物（図2－59　392）

392は石製品の石庖丁である。未成品と考えられ，両端の抉りは認められない。石材は砂岩である。

P13出土遺物（図2－59　393）

393は石製品の叩石である。側面の一部に弱い敲打痕がみられ，石材は砂岩である。

P14出土遺物（図2－59　394）

394は土師器の甕で，口縁部を欠損する。摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面は胴上半部に指オサエとナデ調整，下半部にハケ調整，外面にはハケ調整が認められる。

P15出土遺物（図2－59　395･396）

395は東阿波型土器の甕である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にハケ調整が残る。396は須恵器の杯蓋と考えられるもので，器面には回転ナデを施す。

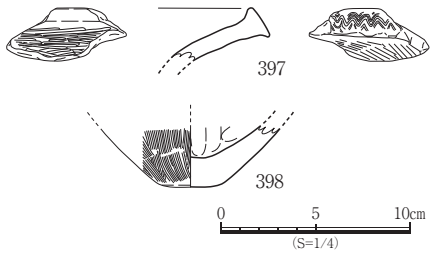


図2－60　SK5出土遺物実測図

③ 土坑

SK1

調査区西部で検出した土坑で，ST76を切る。平面形は長方形を呈し，北側は調査区外へ続く。長軸は不明であるが，短軸約0.5m，深さ6㎝を測る。埋土は土器を含む黒色(7.5YR2/1)粘土質シルトで，出土遺物には弥生土器7点，須恵器1点，石製品1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK2

調査区西部で検出した土坑で，南側を撹乱に切られる。平面形は不整長方形を呈し，短軸は不明であるが，長軸約1.1m，深さ8～16㎝を測る。埋土は土器を含む黒色(7.5YR2/1)粘土質シルトで，出土遺物には土師器8点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK3

調査区中央部西寄りで検出した土坑で，南側を撹乱に切

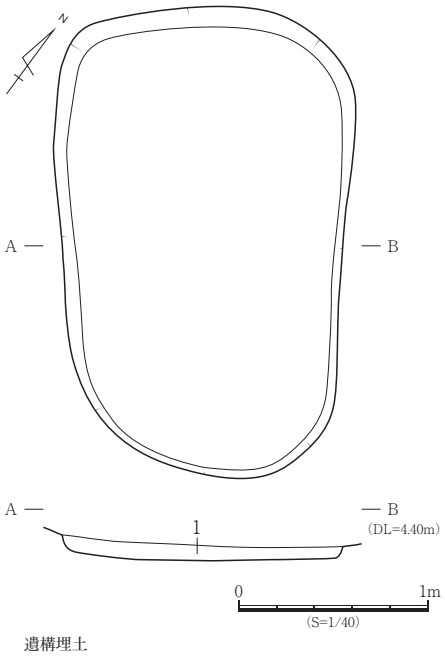


図2－61　SK7

られる。平面形は楕円形を呈し，長軸は不明であるが，短軸約0.8m，深さ15～20㎝を測る。埋土は1層が土器を含む褐色(7.5YR4/4)シルトのブロック混じりの黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂質シルト，2層が黒色(7.5YR2/1)細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器7点，土師器1点，須恵器1点，土師質土器5点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK4

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸約1.3m，短軸約0.8m，深さ8㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器73点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK5

調査区中央部北寄りで検出した土坑で，北側は調査区外へ続く。平面形は不整形を呈し，長軸約4.2m，短軸約1.7m，深さ23～37㎝を測る。埋土は1層が細礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂，2層が細～中礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒～粗粒砂，3層が土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂，4層が細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質粗粒砂，5層が細～中礫混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂である。出土遺物には弥生土器267点がみられ，2点(397･398)が図示できた。

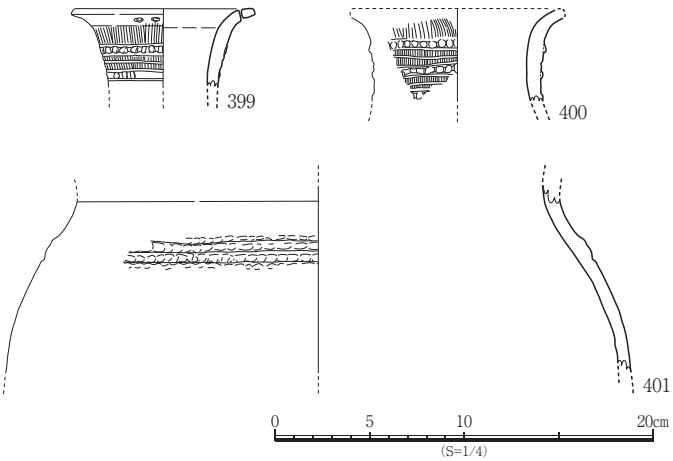


図2－62　SK7出土遺物実測図

出土遺物(図2－60　397･398)

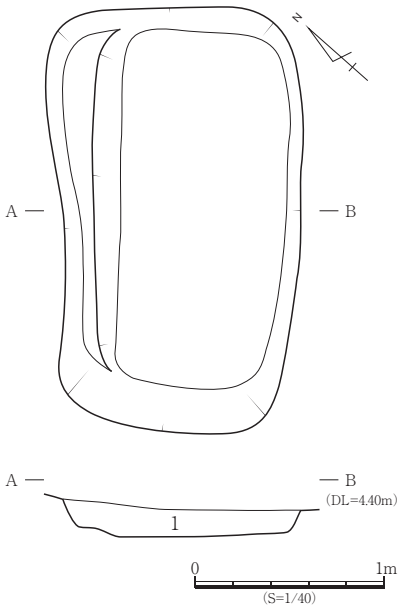
397・398は弥生土器である。397は壷の口縁部破片で，口縁端部を上下に拡張する。口縁端部にヨコナデ，内面にヘラミガキ，外面にハケを施し，口縁端部には波状文を配す。398は甕の底部破片で，内面にナデ，外面にハケを施し，底部外面にはナデ調整を加える。

SK6

調査区中央部北寄りで検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約1.2m，短軸約0.6m，深さ12～16㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質中粒砂で，出土遺物には弥生土器6点，土師器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK7(図2－61)

調査区中央部で検出した土坑で，ST83を切る。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約2.5m，短軸約1.5m，深さ5～7㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器9点がみられ，3点(399～401)が図示できた。



遺構埋土
1. 土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルト

図2－63　SK8

出土遺物(図2－62　399～401)

399～401は弥生土器で，399・400は壷の口縁部破片である。399は口縁端部にヨコナデ，外面にハケを施す。外面には2条の指頭摘み出しによる刻目突帯を貼付し，端部に2孔単位の穿孔がみられる。400は内面にヨコナデ，外面にハケを施し，外面には微隆起突帯と沈線を配す。401は甕と考えられる胴部破片で，内外面にナデを施し，胴上部外面に微隆起突帯を配す。

SK8(図2－63)

調査区中央部東寄りで検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約2.3m，短軸1.2～1.4m，深さ27～31cmを測る。埋土は土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器50点がみられ，1点(402)が図示できた。

出土遺物(図2－64　402)

402は弥生土器で，甕の底部破片である。内面にハケのちナデ，外面にハケを施す。

SK9

調査区東部で検出した土坑で，中央を撹乱に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約1.9m，短軸約1.3m，深さ5～15cmを測る。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器7点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK10

調査区東部で検出した土坑で，南側は撹乱に切られる。平面形は不整楕円形を呈し，長軸と短軸は不明であるが，深さは8～14cmを測る。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器97点がみられ，1点(403)が図示できた。

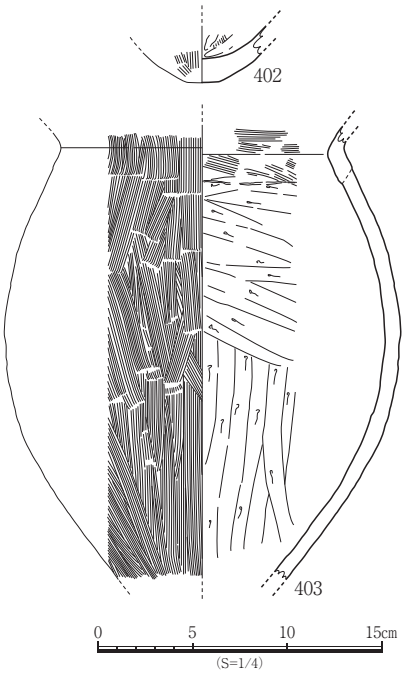


図2－64　SK8･10出土遺物実測図

出土遺物(図2－64　403)

403は弥生土器で，甕の口縁部から胴部にかけての破片である。内面は口縁部から胴上端部にハケ，胴中央部から下半部にヘラケズリ，外面はタタキのちハケを施し，胴上半部外面には煤が付着する。

SK11

調査区東部で検出した土坑で，南側は撹乱に切られる。平面形は不整楕円形を呈し，長軸は不明であるが，短軸約0.8m，深さ8～10cmを測る。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器1点，土師器5点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK12

調査区東部で検出した土坑で，平面形は楕円形を呈する。長軸約1.6m，短軸約1.2m，深さ25cmを測り，埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～粗粒砂である。出土遺物には弥生土器12点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK13

調査区東部で検出した土坑で，平面形は楕円形を呈する。長軸約1.3m，短軸約0.9m，深さ13cmを

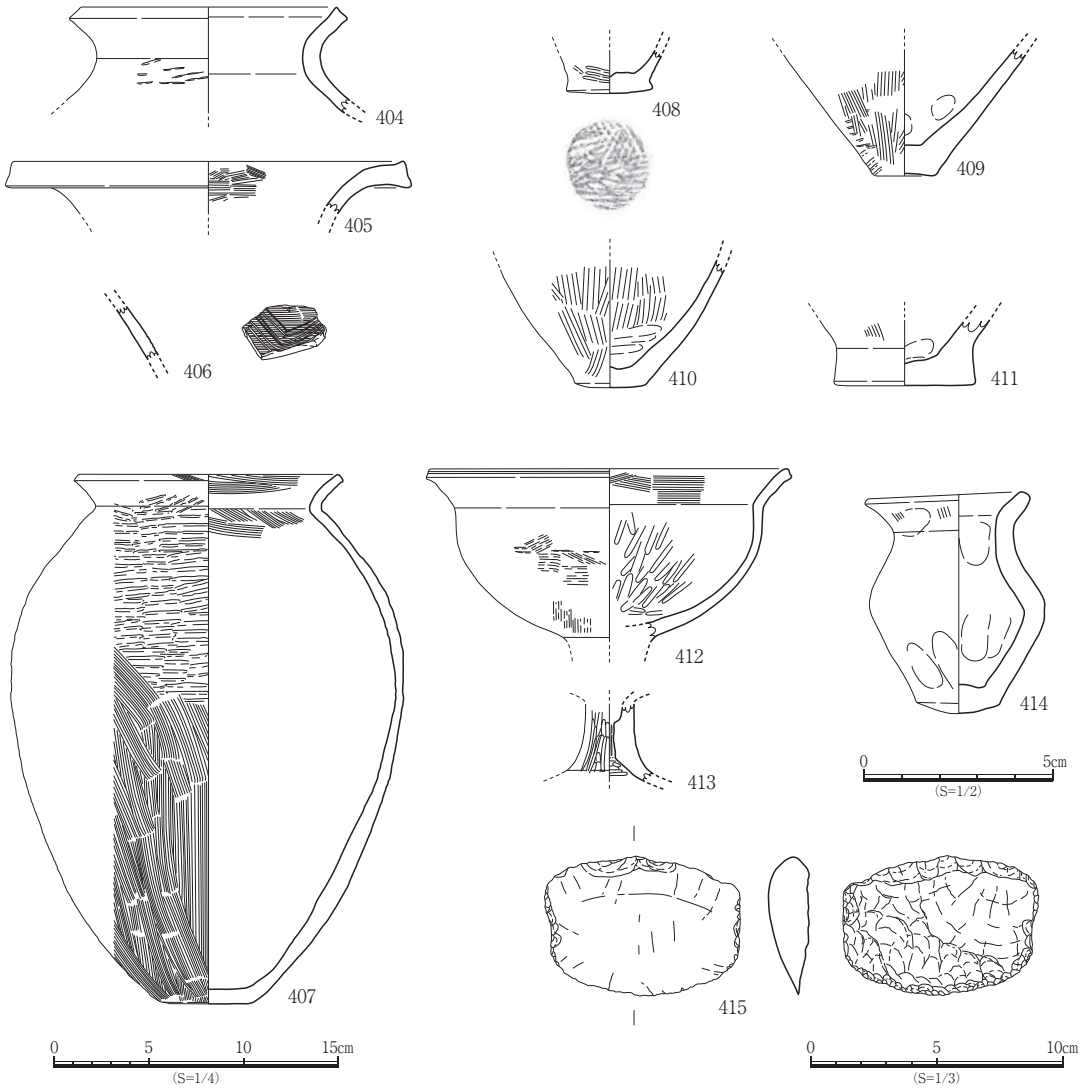


図2－65　SK14出土遺物実測図

測り，埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～粗粒砂である。出土遺物には弥生土器38点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK14

調査区東部で検出した土坑で，SD6を切る。平面形は隅丸方形を呈し，長軸約1.3m，短軸約1.2m，深さ11㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトをブロック状に含む黒褐色(10YR3/1)シルトで，出土遺物には弥生土器90点，石製品1点がみられ，弥生土器11点(404～414)，石製品1点(415)が図示できた。

出土遺物(図2－65　404～415)

404～414は弥生土器で，404～406は壷である。404は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁端部がヨコナデにより面をなし，凹線状を呈する。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちヨコナデを施す。405は広口壷の口縁部破片で，口縁端部は上下に拡張される。口縁端部内外面にヨコナデ，内面にハケ，外面にナデを施す。406は胴部破片で，内面にナデ，外面にハケを施し，外面には複線山形文を配す。407～411は甕である。407は全体の形状が復元できたもので，

口縁部内面にハケ，口縁部と胴部外面にタタキを施し，口縁部外面にヨコナデ調整，胴下半部外面にハケ調整を加える。408 ～ 411 は底部から胴部にかけての破片である。408 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にナデ調整，外面にタタキ目が残る。409 は内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちハケを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。410 は胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施し，底部内外面にはナデ調整がみられる。411 は胴部が屈曲して立ち上がり，内面に指オサエとナデ，外面にハケとナデを施す。412・413 は高杯である。412 は杯部破片である。杯体部は内湾して立ち上がり，口縁部は屈曲し斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部はヨコナデにより，凹線状を呈し，内面は口縁部にハケ，体部にヘラミガキ，外面はタタキを施し，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面にはハケ調整を加える。413 は脚柱部破片で，内面に明瞭な絞り目がみられる。内面にはヘラケズリのちヘラミガキ，外面にはヘラミガキを施す。414 はミニチュア土器で，ほぼ完存する。口縁部内外面にハケのちヨコナデ，胴部内外面に指オサエとナデを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。415 は石製品の石庖丁である。両端には弱い抉りがみられ，石材は砂岩である。

SK15

調査区東部で検出した土坑で，SD9 を切る。平面形は隅丸方形を呈し，長軸約 1.5m，短軸約 1.4m，深さ 35㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒～粗粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器 24 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK16

調査区東部で検出した土坑で，平面形は隅丸長方形を呈す。長軸約 2.0m，短軸約 1.3m，深さ 29㎝を測り，埋土は黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器 93 点，石製品 1 点がみられ，弥生土器 4 点(416～419)，石製品 1 点(420)が図示できた。

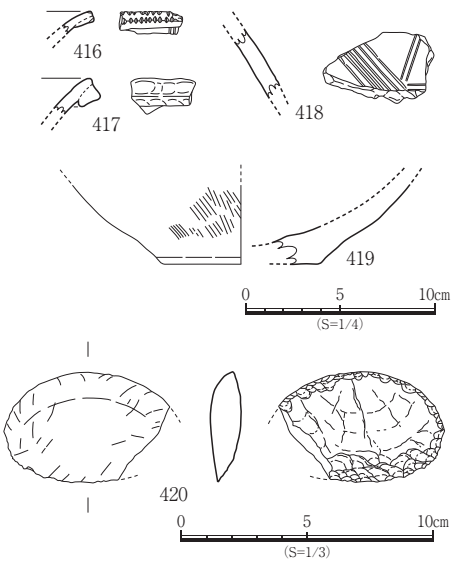


図 2 － 66　SK16出土遺物実測図

出土遺物(図 2 － 66　416～420)

416 ～ 419 は弥生土器の壷である。416・417 は口縁部破片で，416 は内面にヨコナデを施し，外面には粘土帯を貼付する。粘土帯端部には刻目がみられ，タテ方向の沈線文を配す。417 は摩耗のため調整は不明であるが，口縁部外面には粘土帯が貼付される。418 は胴部破片である。内外面にナデを施し，外面にはヘラ描沈線文を配す。419 は底部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にはハケ調整とナデ調整が認められる。420 は石製品の石庖丁である。片側を欠損し，端部には明瞭な抉りが認められない。石材は砂岩である。

④ 溝跡

SD1

調査区西部で検出した南北溝で，Ⅳ B － 1 区の SD24 と同一と考えられる。確認延長約 2.5m，幅 0.7 ～ 0.9m，深さ 22 ㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの暗褐色(7.5YR3/3)シルトで，出土遺物には弥生土器 49 点，土師器 7 点，須恵器 3 点，土師質土器 8 点，瓦質土器 4 点，瓦 3 点がみられ，弥生土器 1 点(421)が図示できた。

出土遺物（図2－67　421）

421は弥生土器である。壷とみられる底部破片で，摩耗のため調整は不明である。

SD2

調査区中央部で検出した東西溝で，確認延長約3.8m，幅0.3～0.4m，深さ12～15㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色（10YR3/1）中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器19点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD3

調査区中央部で検出した南北溝で，ST69・70を切る。確認延長約13.8m，幅0.4～0.5m，深さ12～15㎝を測り，埋土は土器を含む細礫混じりの黒褐色（10YR3/1）中粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器107点，土師器5点，須恵器14点，土師質土器12点，瓦質土器2点，瓦3点がみられ，弥生土器2点（422･423），須恵器1点（424），土師質土器1点（425），瓦1点（426）が図示できた。

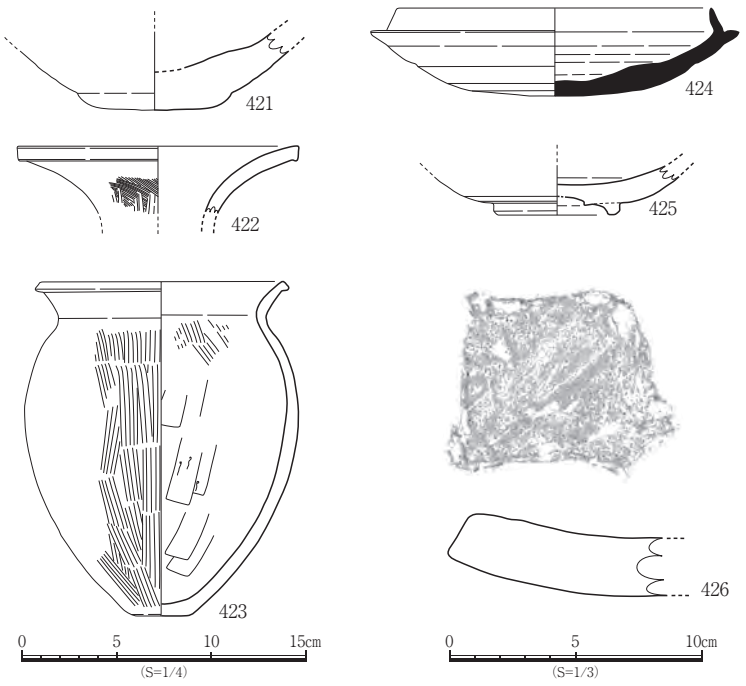


図2－67　SD1･3出土遺物実測図

出土遺物（図2－67　422～426）

422は弥生土器の壷である。口縁部破片で，口縁端部は凹線状を呈する。口縁部内外面にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキを施す。423は甕で，口縁端部は下方に拡張され，凹線状を呈する。口縁部内外面にハケのちヨコナデ，胴上端部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施す。424は須恵器の杯身で，底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施す。425は土師質土器の椀である。高台を有し，底部外面下端に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施す。426は平瓦で，凹面に布目圧痕，凸面にナデ調整がみられる。

SD4

調査区東部西寄りで検出した南北溝で，ST84を切る。確認延長約4.1m，幅0.7m，深さ11㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色（10YR4/1）シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器7点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD5

調査区東部で検出した東西溝で，南側を撹乱に切られる。確認延長約1.9m，幅0.4～0.5m，深さ18㎝を測り，埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色（10YR4/1）シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物には弥生土器5点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD6

調査区東部で検出した溝と考えられるもので，北側は調査区外へ続く。確認延長約11.4m，幅約2.8m，深さ24㎝を測り，埋土は黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器420点，

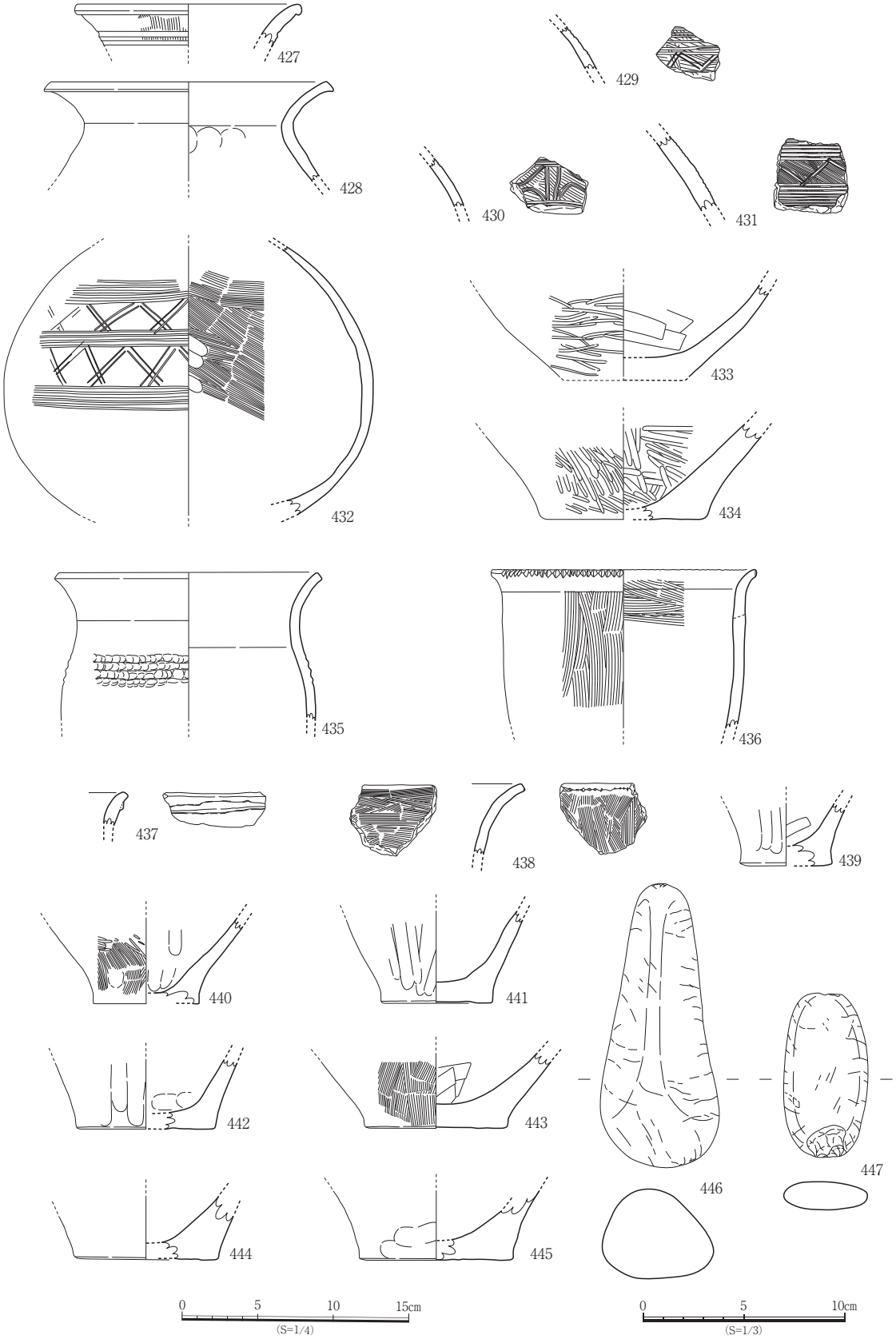


図2－68　SD6出土遺物実測図

石製品２点がみられ，弥生土器19点(427～445)，石製品２点(446･447)が図示できた。

出土遺物(図2－68　427～447)

427～445は弥生土器で，427～434は壷である。427は口縁部破片で，口縁端部と内面にヨコナデ，外面にハケのちヨコナデを施し，外面には幅広の沈線を配す。428は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部がやや外反して立ち上がり，口縁端部を外側に拡張する。口縁部内面と外面全体にヨコナデ，胴部内面にナデを施す。429～432は胴部破片である。429～431は内面にナデ，外面にハケを施し，429・431は外面に多重沈線と複線山形文，430は多重沈線とタテ方向のヘラ描直線文，上弦と下弦の重弧文を配す。432は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にハケのちナデを施し，外面には多重沈線と斜格子文を配す。433・434は胴部から底部にかけての破片で，433は内面にヘラナデ，外面に粗いヘラミガキ，434は胴部内外面にヘラミガキを施す。435～445は甕である。435は内面と口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にナデを施す。胴部外面上端に微隆起突帯を貼付し，突帯下方に煤が付着する。436は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面上端にハケ，胴部内面下半にナデ，外面にハケを施す。口縁端部には刻目がみられ，外面全体には煤が付着する。437は摩耗のため調整は不明で，外面には突帯を貼付する。438は口縁端部にヨコナデ，内外面にハケを施し，口縁端部外側には刻目がみられる。439～445は底部破片である。439は内面にヘラナデ，外面にナデを施す。440は内面にナデ，外面にハケとナデを施し，外面にはヘラミガキ調整を加える。441・442は内面にナデ，外面に強いナデを施し，442は底部内面に指頭圧痕が残る。443は内面にヘラナデ，外面にハケを施す。444・445は内外面にナデを施す。446･447は石製品である。446は叩石で，両端に弱い敲打痕がみられ，石材は砂岩である。447は石錘と考えられるもので，両端に弱い抉りが認められ，石材は砂岩である。

SD7

調査区東部で検出した南北溝で，SD6に切られる。確認延長約2.6m，幅0.5m，深さ10㎝を測り，埋土は黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器９点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD8

調査区東部で検出した南北溝で，確認延長約1.2m，幅0.2m，深さ５～10㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器３点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD9

調査区東部で検出した南北溝で，SK15に切られる。確認延長約1.8m，幅0.4m，深さ13～22㎝を測り，埋土は黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は皆無であった。

⑤ 土器棺墓

全ての土器棺墓は調査区東部で確認され

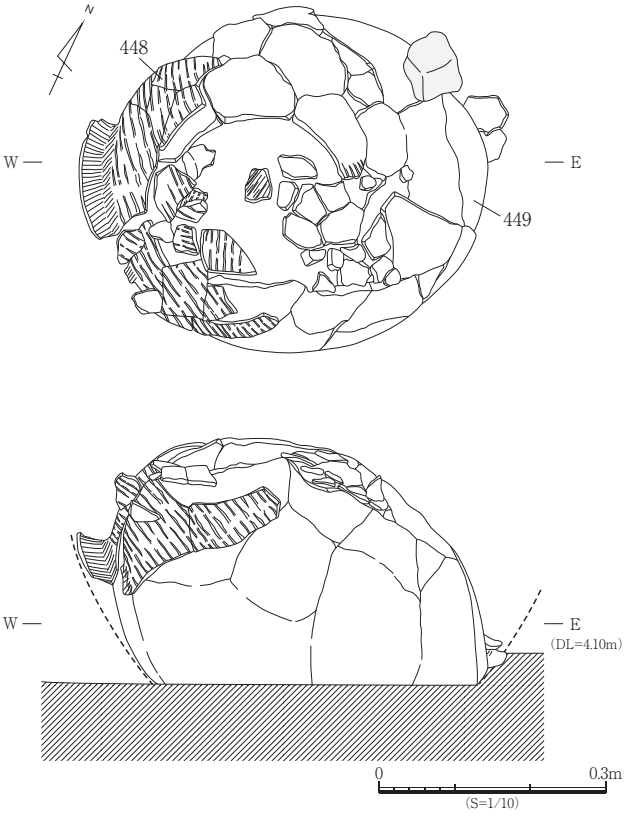


図２－69　SG1

ているが，第Ⅴ層(細～中礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質中粒砂層)上面が遺構検出面であったため，埋土と考えられる黒褐色シルト質中粒砂との識別が困難であった。このため，平面形と掘方を確認していないが，近接して出土した遺物を土器棺墓の埋土出土遺物として記載している。

SG1(図2－69)

調査区東部北寄りで確認した土器棺墓である。

出土遺物

(図2－70　448･449)

448・449は弥生土器の壷である。448は蓋として転用されたと考えられるもので，口縁部内外面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケを施す。449は棺本体と考えられるもので，口縁部を欠損する。内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケを施し，胴部外面下端にはナデ調整がみられる。

SG2(図2－71)

調査区東部北寄りで確認した土器棺墓である。

出土遺物

(図2－72･73　450～452)

450・451は弥生土器の壷である。450は蓋として転用されたと考えられるもので，口縁部を欠損する。内面は上半部にハケ，下半部にナデ，外面は上半部にハケのちへ

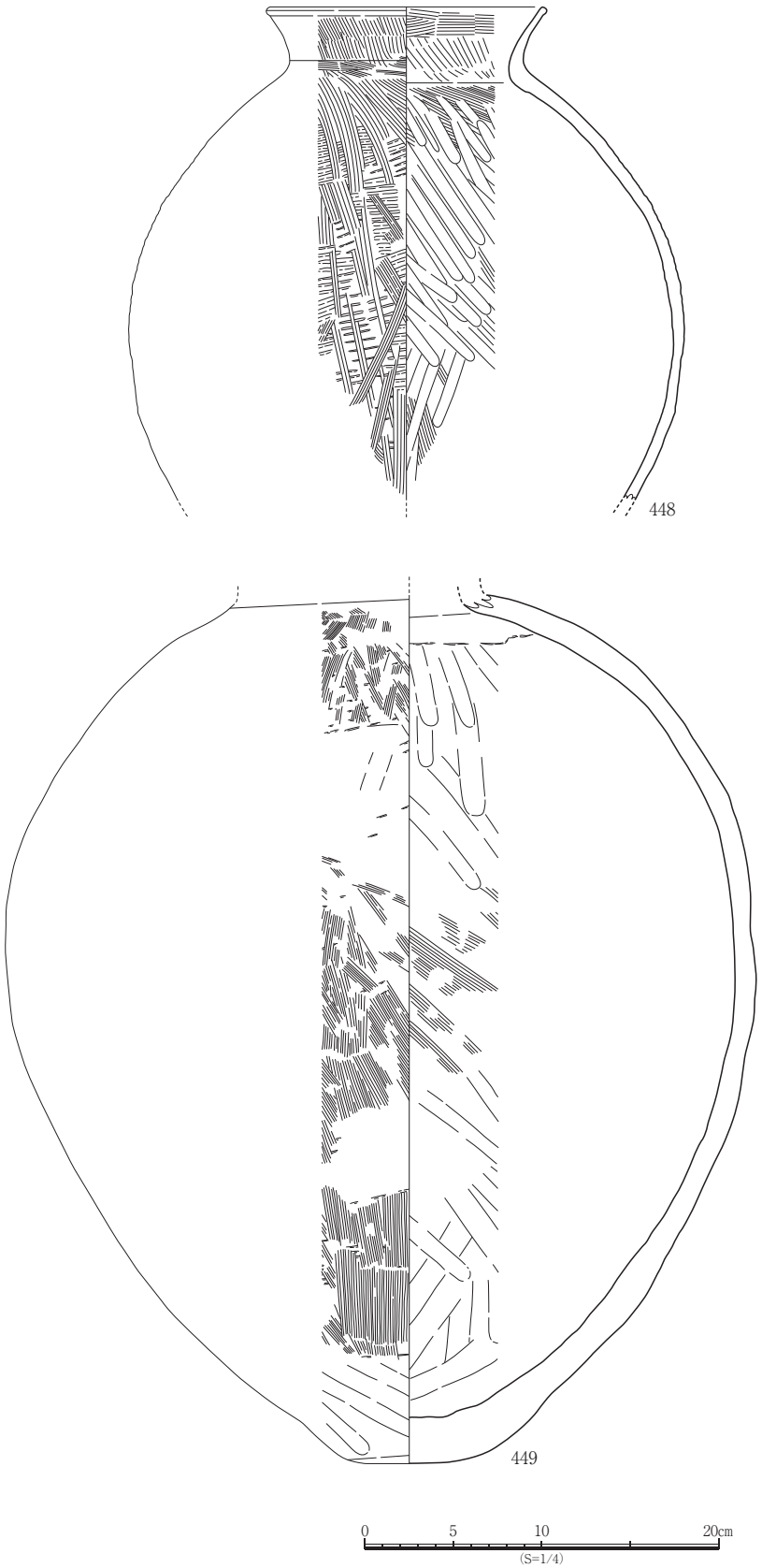


図2－70　SG1出土遺物実測図

ラミガキ，下半部にナデを施す。451は棺本体と考えられる複合口縁壺で，ほぼ完存する。口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキを施す。胴中央部内面にはナデ調整，胴部外面にはハケ調整とナデ調整を加え，口縁部外面には３条単位の波状文を配す。452は石製品の石斧である。扁平片刃石斧と考えられるもので，基部と刃部を欠損する。両面に調整痕が残り，石材は蛇紋岩とみられる。

SG3（図2－74）

調査区東部で確認された土器棺墓である。

出土遺物（図2－75　453）

453は弥生土器の壺で，胴部上端より上方を欠損する。棺本体と考えられるもので，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデを施す。

SG4（図2－76）

調査区東部で確認された土器棺墓で，口縁側には棺を安定させるための川原石が置かれていた。

出土遺物（図2－77　454～457）

454～457は弥生土器である。454・455は蓋として転用されたと考えられるものである。454は高杯の杯部破片で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面全体にヘラミガキ調整，口縁部外面にヨコナデ調整が認められる。455は甕で，口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にタタキを施し，胴上端部にハケ調整，胴下半部にナデ調整を加える。456は棺本体と考えられるもので，口縁部を欠損する。胴上端部外面に断面長方形の突帯を貼付し，端部に半竹管状の刺突文を施す。また，

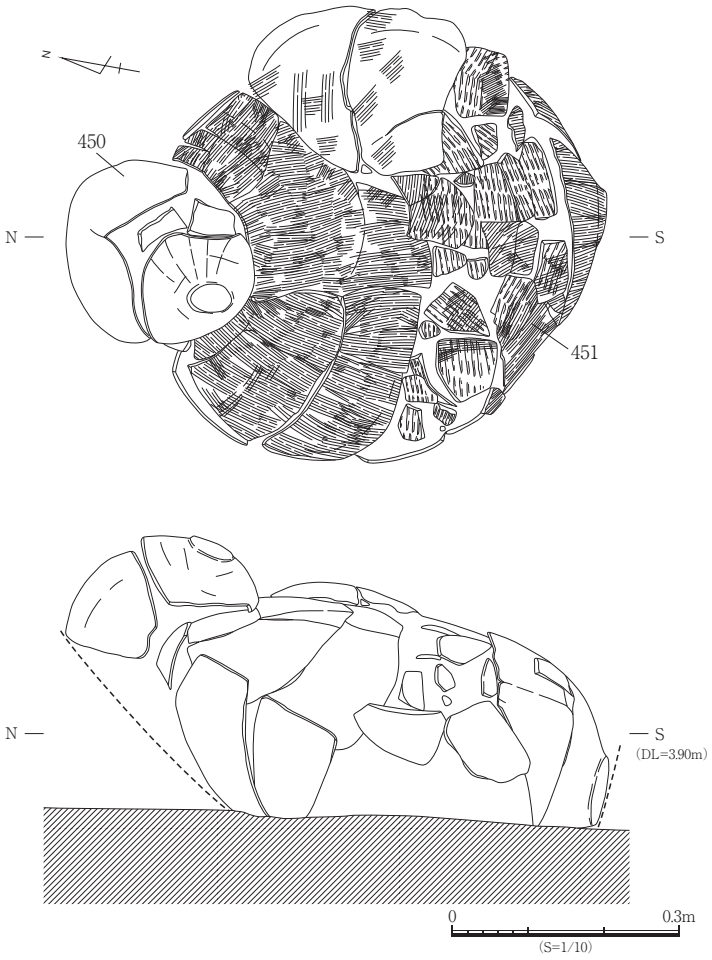


図2－71　SG2

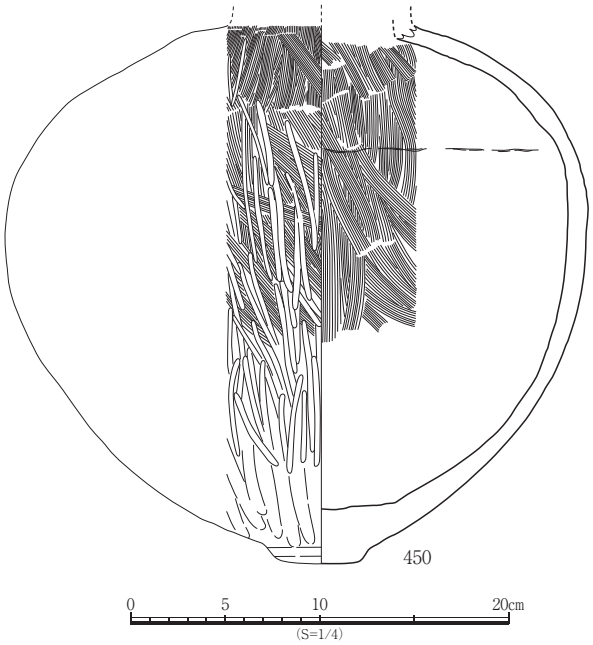


図2－72　SG2出土遺物実測図1

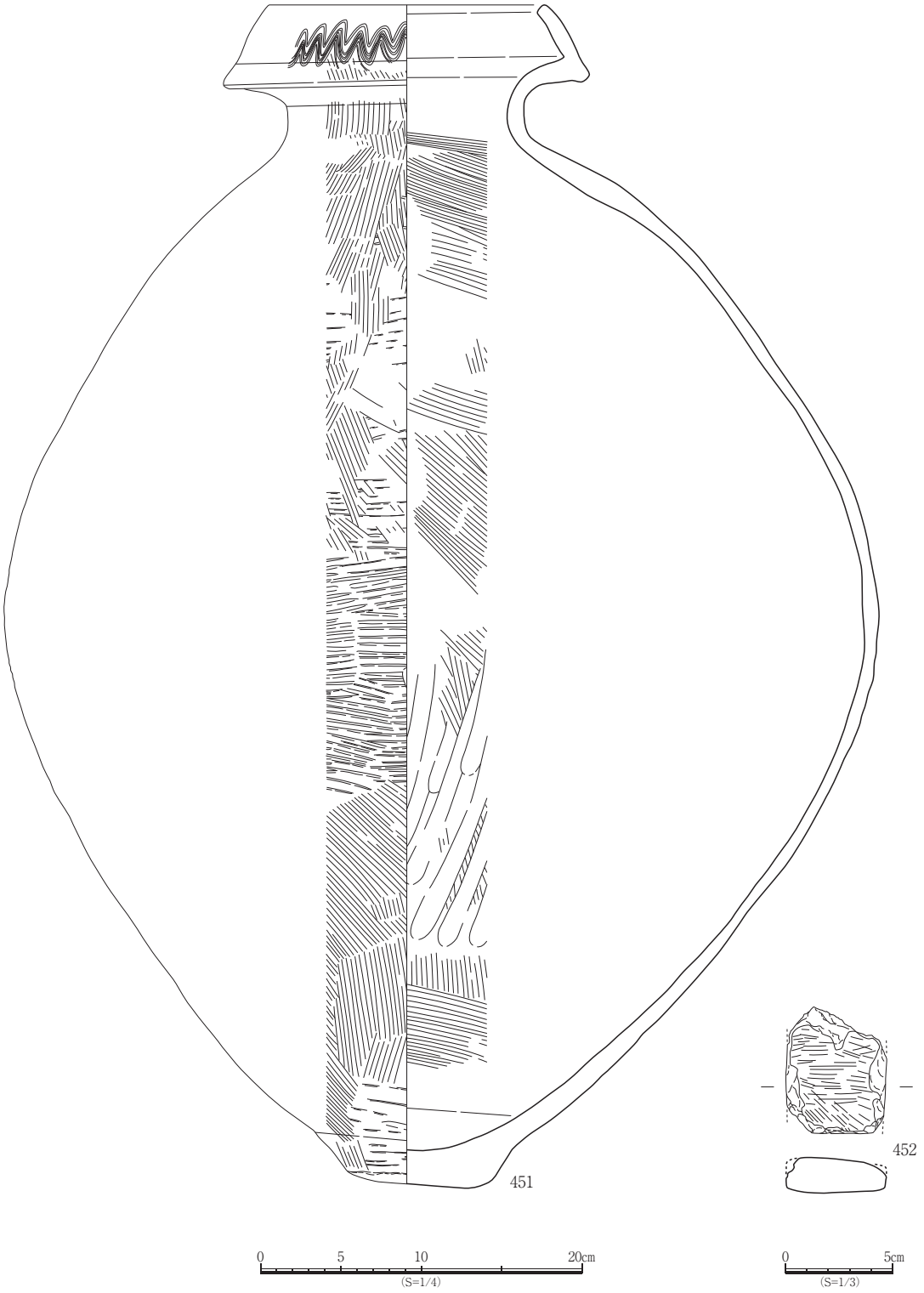


図2－73　SG2出土遺物実測図2

その下方に右下がりの斜行するものと格子状のものを連続させた鋸歯文を配する。調整は頸部内面にナデ，胴部内面にハケ，外面全体に丁寧なヘラミガキを施す。457 は近接して出土したもので，高杯の杯部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁端部にヨコナデ調整，内面にヘラミガキ調整が認められる。

SG5（図2－78）

調査区東部で確認された土器棺墓である。

出土遺物（図2－79･80　458～469）

458 ～ 468 は弥生土器である。458 は壷の底部破片で，棺本体と考えられるものである。内面にハケ，外面にハケのちヘラミガキを施す。459 は隣接して出土した甕である。口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキを施し，胴部外面下端にはハケ調整を加える。460～469は近接して出土したもので，460～462は壷である。460 は口縁端部を下方に拡張し，口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケのちヨコナデを施す。461・462 は底部破片である。461 は内面にヘラケズリのちナデ，外面にナデを施す。462は内面にハケのちナデ，外面にハケを施す。463・464 は甕である。463 は口縁部から胴部にかけての破片で，内面にハケ，外面にタタキを施し，胴中央部内面にはナデ調整を加える。464 は底部破片で，器面にはナデを施し，外面下端には指頭圧痕が認められる。465 は鉢と考えられる底部破片である。内面にハケのちナデ，外面にナデを施す。466～468は高杯である。466は椀状を呈する杯部破片で，内外面にハケを施し，杯体部外面にはヨコナデ調整を加える。467・468は脚部破片である。467は脚柱部内外面にナデ，脚裾部内面にヨコナデ，脚裾部外面にハケを施す。468は内面にナデを施し，その他の部位にはヘラミガキ調整が認められる。469 は石製品の石庖丁で，両端に弱い抉りがみられる。石材は砂岩である。

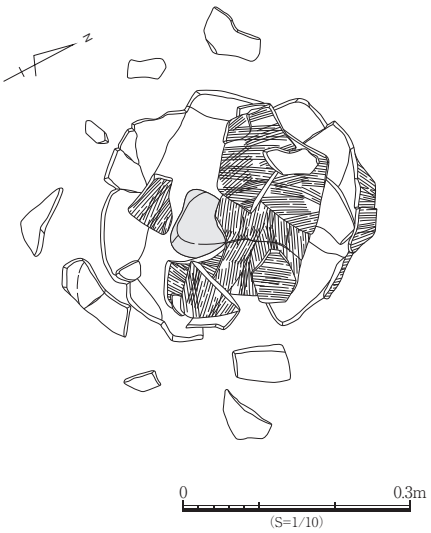


図2－74　SG3

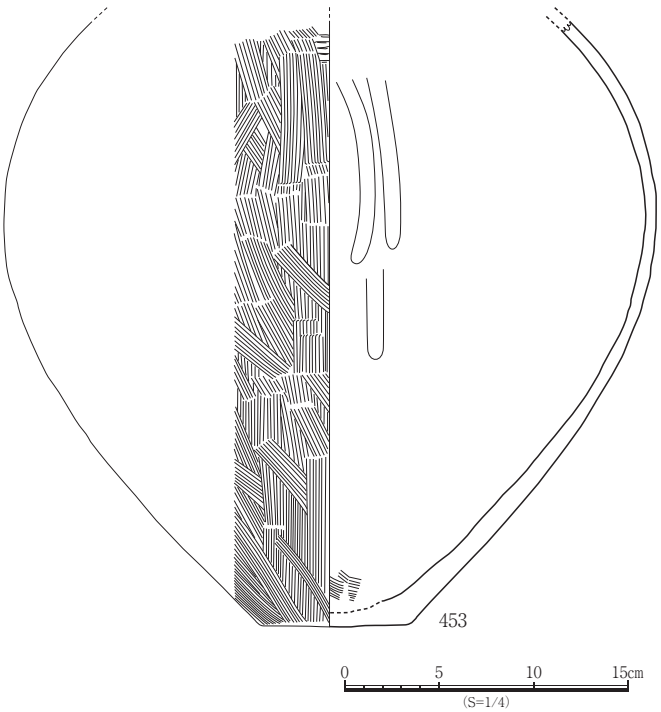


図2－75　SG3出土遺物実測図

⑥ ピット

P1

調査区中央部北西寄りで検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約 0.8m，短軸約 0.7m，深さ25㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色（10YR4/2）細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器46点，土師質土器1点がみられ，弥生土器2点（470･471）が図示できた。

出土遺物（図2－81　470･471）

470・471 は弥生土器の鉢である。470 は平底を呈し，口縁部は屈曲し短く立ち上がる。手づくね成形で，内面に粗いハケ，外面にタタキのちナデを施す。471は丸底を呈し，口縁部が屈曲し立ち上がる。

口縁部内面にハケ，体部内面にハケのちヘラミガキ，外面全体にタタキを施し，体部外面にはナデ調整を加える。

P2

調査区中央部北西寄りで検出したピットで，平面形は隅丸方形を呈し，長軸約 1.2m，短軸約 0.9m，深さ 47 ㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器 14 点，土師器 2 点，須恵器 4 点がみられ，須恵器 2 点(472･473)が図示できた。

出土遺物(図2－81　472･473)

472・473 は須恵器である。472 は壷の底部と考えられるもので，「ハ」の字状に開く高台を有する。内面に回転ナデ，外面に回転ヘラケズリを施し，内面には自然釉が認められる。473 は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部と胴上端部内外面に回転ナデ，胴部内面にタタキ，胴部外面にハケを施す。

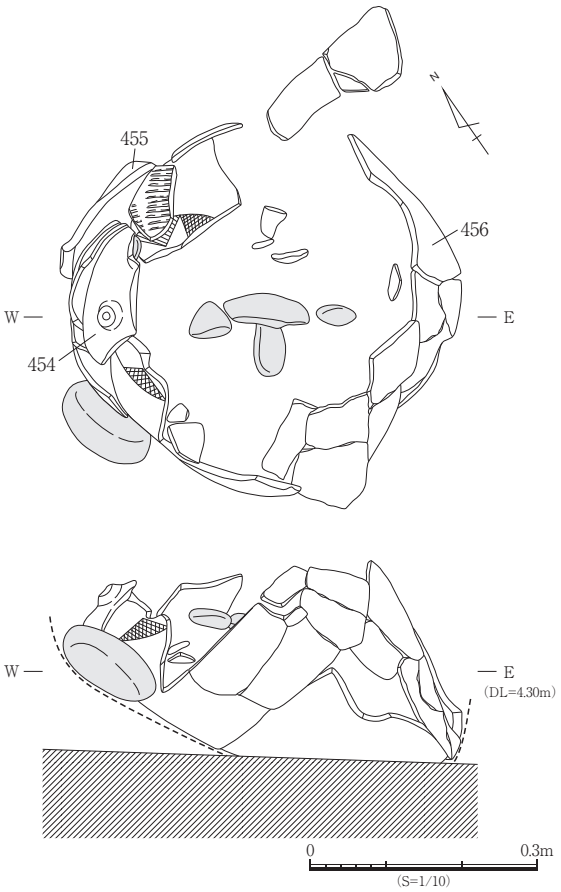


図2－76　SG4

P3

調査区中央部北西寄りで検出したピットで，平面形は円形を呈し，径約0.4m，深さ42㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器4点，瓦1点がみられ，瓦(474)が図示できた。

出土遺物(図2－81　474)

474は平瓦で，凹面に丁寧なナデを施し，凸面に縄目状の圧痕が残る。

P4

調査区中央部北西寄りで検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約 0.4m，短軸約 0.3m，深さ 6 ㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器9点，土師器1点がみられ，土師器(475)が図示できた。

出土遺物(図2－81　475)

475 は土師器の甕である。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にハケを施し，胴部内面上端にはヨコナデ調整を加える。

P5

調査区中央部北西寄りで検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約 0.4m，短軸約 0.3m，深さ10㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器4点，土師質土器1点がみられ，土師質土器(476)が図示できた。

出土遺物(図2－81　476)

476は土師質土器の杯と考えられるもので，調整は摩耗のため不明である。

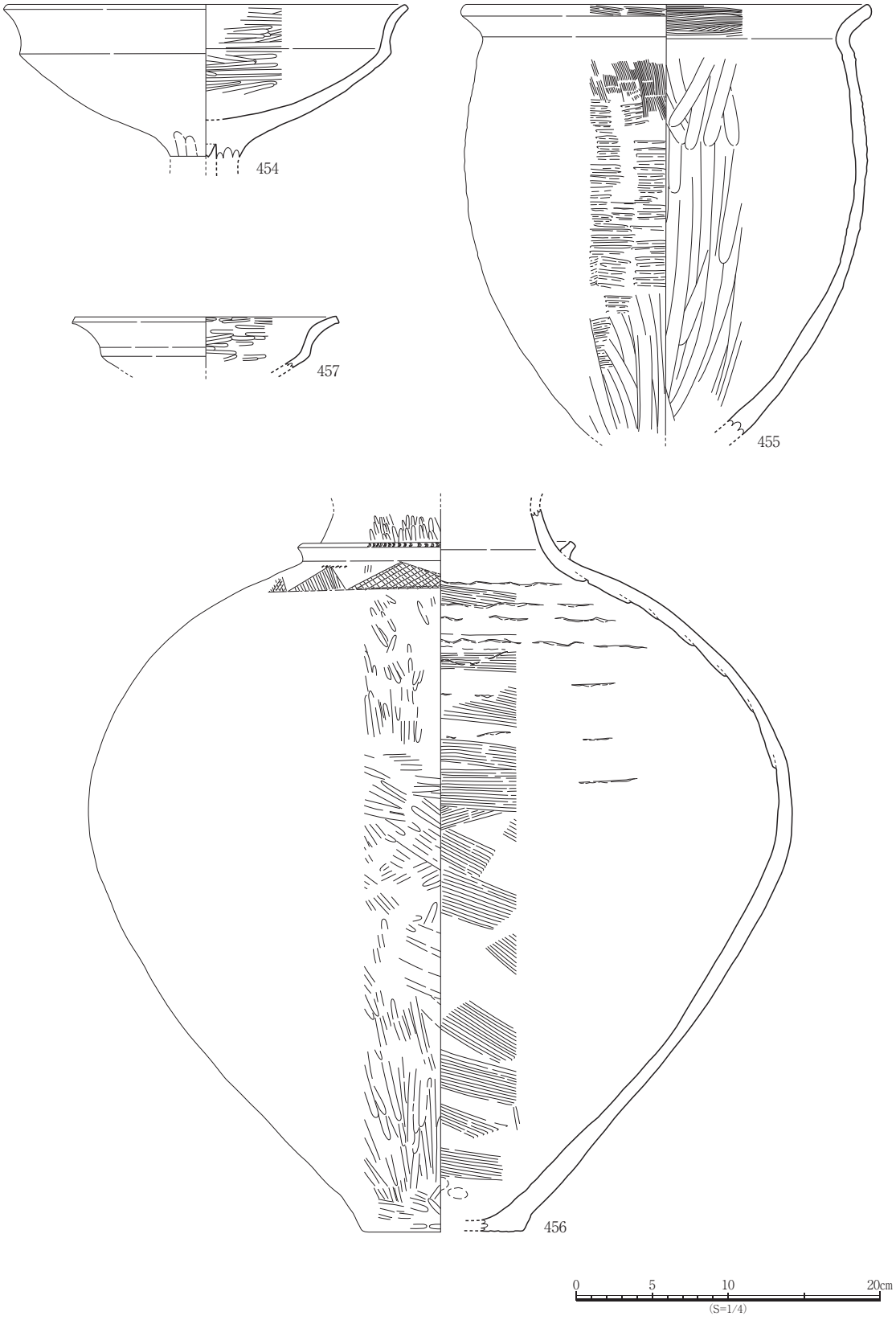


図2－77　SG4出土遺物実測図

P6

調査区中央部西寄りで検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約0.3m，短軸約0.2m，深さ34㎝を測る。埋土は細礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器19点がみられ，1点(477)が図示できた。

出土遺物(図2－81　477)

477は弥生土器の甕で，口縁端部は上下に拡張される。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施す。

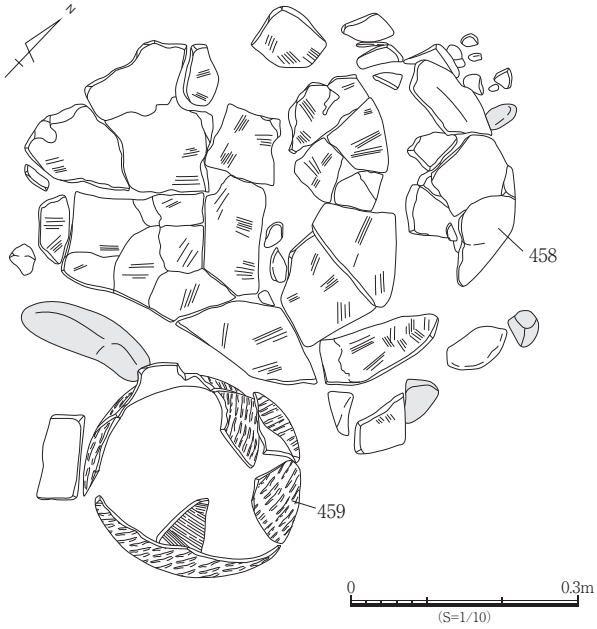


図2－78　SG5

P7

調査区中央部で検出したピットで，平面形は円形を呈し，径約0.4m，深さ26㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器25点がみられ，1点(478)が図示できた。

出土遺物(図2－81　478)

478は弥生土器の壷と考えられるものである。頸部内面にナデ，胴部内面にハケ，外面全体にヘラミガキを施す。

P8

調査区中央部で検出したピットで，平面形は円形を呈し，径約0.3m，深さ14㎝を測る。埋土は細礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器1点，土製品1点がみられ，土製品(479)が図示できた。

出土遺物(図2－81　479)

479は土製品の支脚で，指部の破片である。表面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。

P9

調査区中央部で検出したピットで，平面形は円形を呈し，径約0.5m，深さ8㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器10点がみられ，1点(480)が図示できた。

出土遺物(図2－81　480)

480は弥生土器の鉢と考えられる脚部破片で，摩耗のため調整は不明である。

P10

調査区中央部で検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約0.5m，短軸約0.4m，深さ20㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器1点，須恵器1点がみられ，須恵器(481)が図示できた。

出土遺物(図2－81　481)

481は須恵器の杯身で，器面には回転ナデを施す。

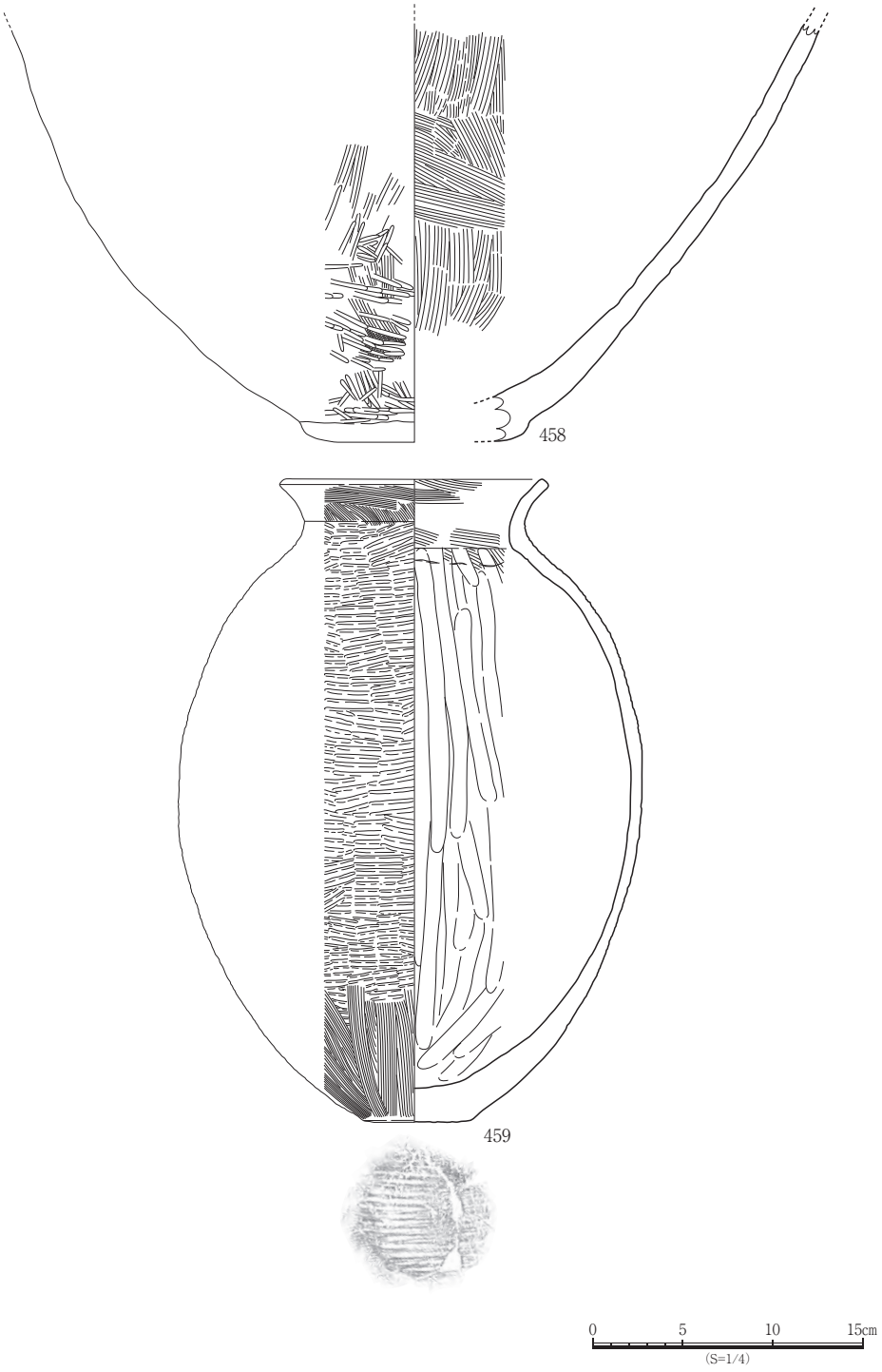


図2－79　SG5出土遺物実測図1

P11

調査区東部で検出したピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸約0.4m，短軸約0.3m，深さ10㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質中粒砂で，出土遺物には弥生土器23点がみられ，1点(482)が図示できた。

出土遺物(図2－81　482)

482は弥生土器の甕である。口縁端部内外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面に指オサエ

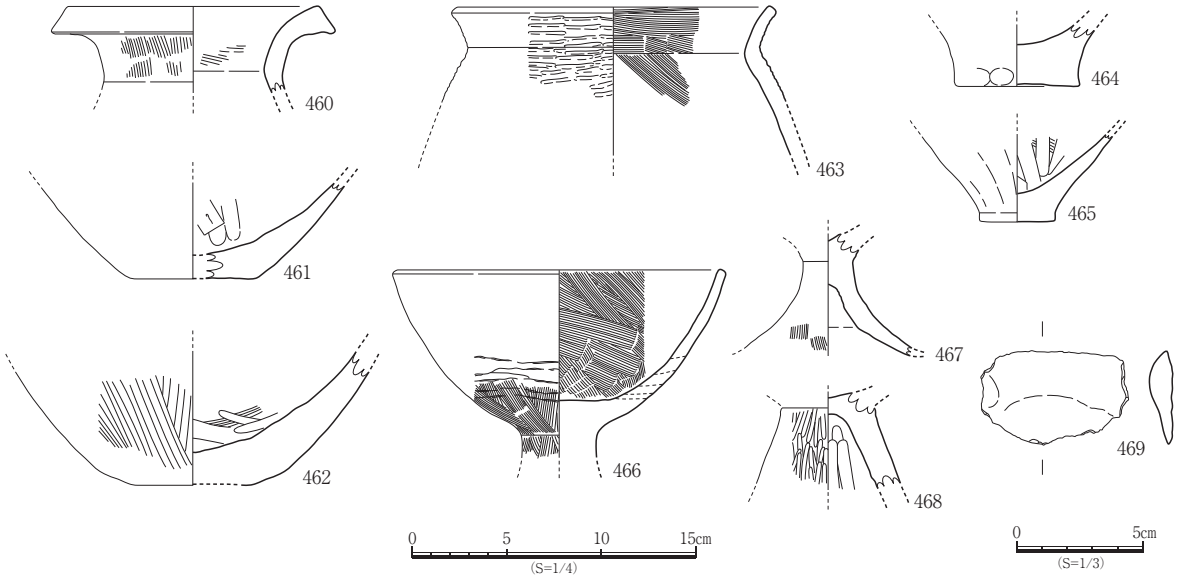


図2－80　SG5出土遺物実測図2

とナデ，胴部外面にハケを施す。

P12

調査区東部で検出したピットで，平面形は不整円形を呈し，径約 0.2m，深さ 28 ㎝を測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器 8 点がみられ，2 点(483･484)が図示できた。

出土遺物(図2－81　483･484)

483･484 は弥生土器の台付鉢である。483 は体部が内湾して立ち上がり，調整は内面に丁寧なナデ，外面に粗いハケを施す。484 は手づくね成形で，内面に指ナデとヘラナデ，外面にタタキのちナデを施す。

P13

調査区東部北寄りで検出したピットで，平面形は不整円形を呈し，径約 0.3m，深さ 30 ㎝を測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器 2 点がみられ，1 点(485)が図示できた。

出土遺物(図2－81　485)

485 は弥生土器の壺で，口縁部破片である。内面にヨコナデ，外面にヘラミガキを施し，外面には多重沈線と刺突文を配する。

P14

調査区東部北寄りで検出したピットで，平面形は不整円形を呈し，径約 0.3m，深さ 32 ㎝を測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器2点，土製品1点がみられ，土製品(486)が図示できた。

出土遺物(図2－81　486)

486 は土製品の土製円盤である。高杯の転用と考えられ，内外面に丁寧なヘラミガキ調整がみられる。

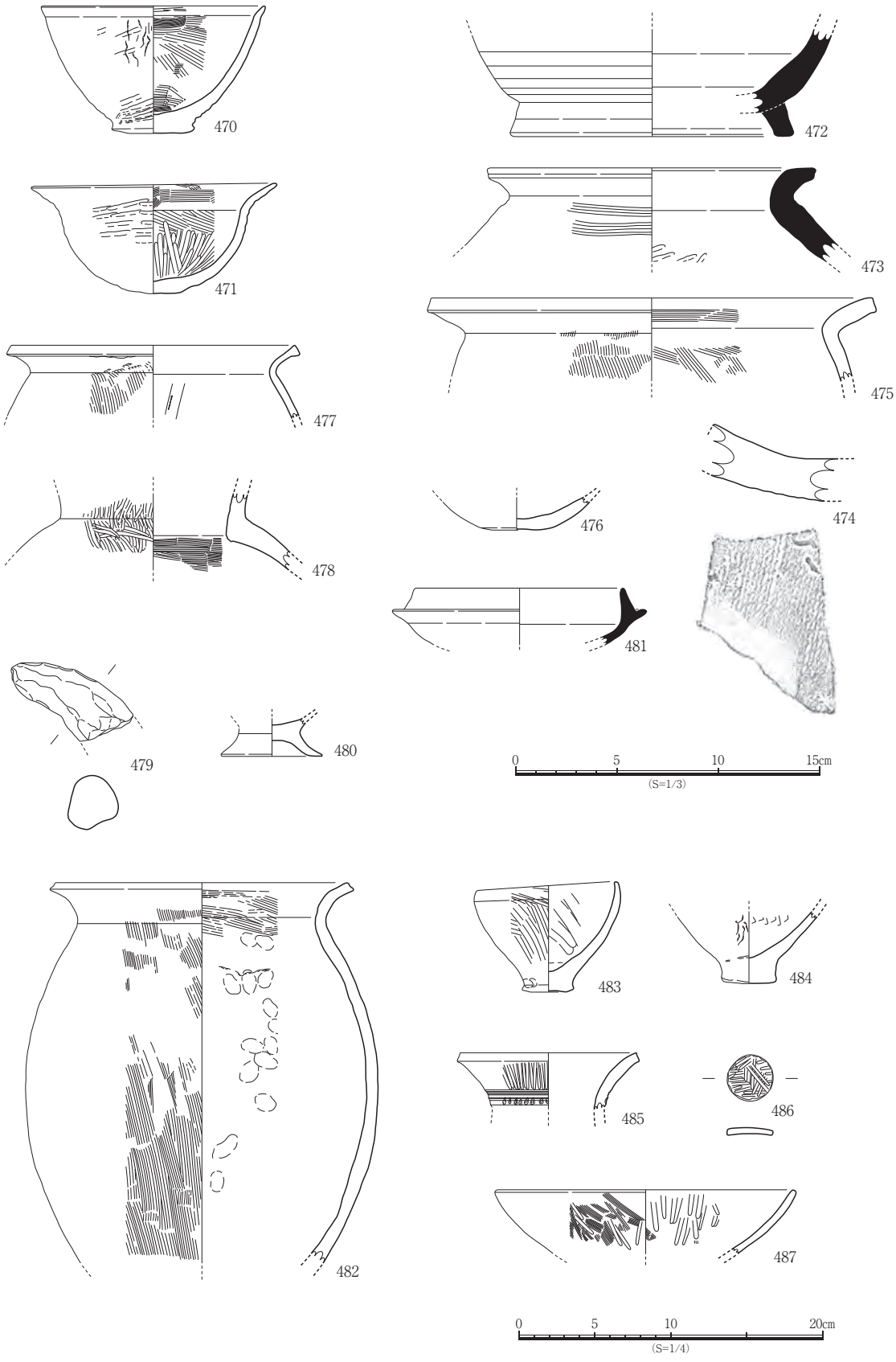


図２－81　ピット出土遺物実測図

P15

調査区東部北東寄りで検出したピットで，平面形は円形を呈し，径約 0.2m，深さ 25 ㎝を測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器 2 点がみられ，1 点(487)が図示できた。

出土遺物(図2－81　487)

487 は高杯の杯部と考えられるもので，口縁部内外面にハケのちヨコナデ，体部内外面にハケのちヘラミガキを施す。

P16(図2－82)

調査区中央部で検出したピットで，掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約 0.7m，短軸約 0.6m，深さ 23 ㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器37点，須恵器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

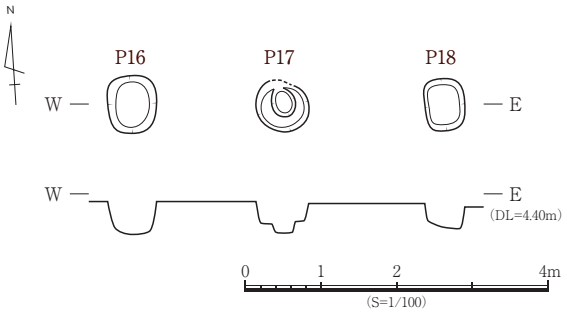


図2－82　P16～18

P17(図2－82)

調査区中央部で検出したピットで，掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。平面形は円形を呈し，径約 0.6m，深さ 30 ㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器11点，土師器5点，須恵器3点がみられたが，図示できるものはなかった。

P18(図2－82)

調査区中央部で検出したピットで，掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約 0.7m，短軸約 0.5m，深さ 21 ㎝を測る。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，出土遺物には弥生土器5点，須恵器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

⑦ 性格不明遺構

SX1

調査区中央部で検出した性格不明遺構である。大部分が南側は調査区外へ続くため規模は不明である。深さは 28 ㎝を測り，埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

出土遺物には弥生土器83点，土師器2点，須恵器6点，土師質土器1点がみられ，弥生土器1点(488)，須恵器1点(489)，土師質土器1点(490)が図示できた。

出土遺物(図2－83　488～490)

488 は弥生土器の甕と考えられるもので，器面にはナデを施し，底部外面下端には指頭圧痕が認められる。489 は須恵器の高杯である。杯部破片で，器面に回転ナデを施し，杯底部内面にはナデ調整を加える。490 は土師質土器の杯で，調整は摩耗のため不明である。

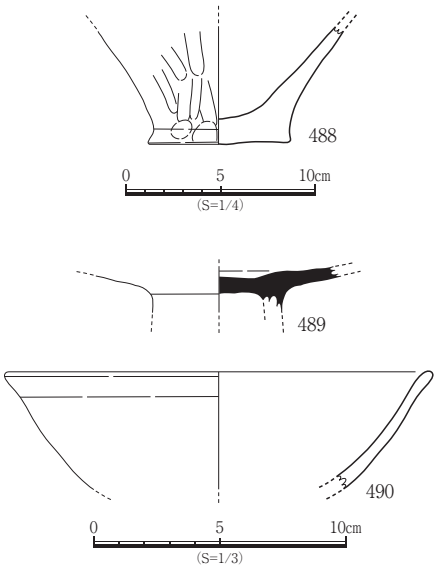


図2－83　SX1出土遺物実測図

⑧ 遺物包含層

本調査区の地勢は西から東に向けて緩やかに傾斜しており，調査区北東部に谷状の落ち込みが存在する。第Ⅰ～Ⅳ層は調査区全域に広がり，第Ⅴ層は調査区北東部を中心に存在していた。本来第Ⅴ層上面が調査区北東部の遺構検出面であるが，埋土である黒褐色シルト質中粒砂との識別が困難であった。このため，グリッドを基準にバンクを設定し掘り下げたが，バンクの壁面でも遺構の掘方が判断できなかったため，本来遺物包含層ではないが第Ⅴ層での遺物取り上げを行っている。

ⅰ 第Ⅰ層出土遺物

弥生土器（図2－84　491～506）

491～499は壷で，491～495は口縁部破片である。491は内外面にヨコナデを施し，端部が凹線状に凹む。492は端部にハケ，内外面にハケのちヨコナデを施し，端部には刻目が認められる。493は複合口縁壷で，内面は上半部にナデ，下半部に指オサエのちナデ，外面は上半部にヨコナデ，下半部にハケのちヨコナデを施す。494は内面にナデ，外面にハケのちヨコナデを施し，端部内面に楕円状の突帯を貼付し，端部外側に刻目を配す。495は端部を下方に拡張し，擬凹線がみられる。調整は内面にヘラミガキ，外面にタタキ原体によるハケのちナデを施す。496は広口壷の頸部破片と考えられるもので，内外面にハケを施し，外面の上端部と下端部にはヨコナデ調整を加える。497・498は胴部破

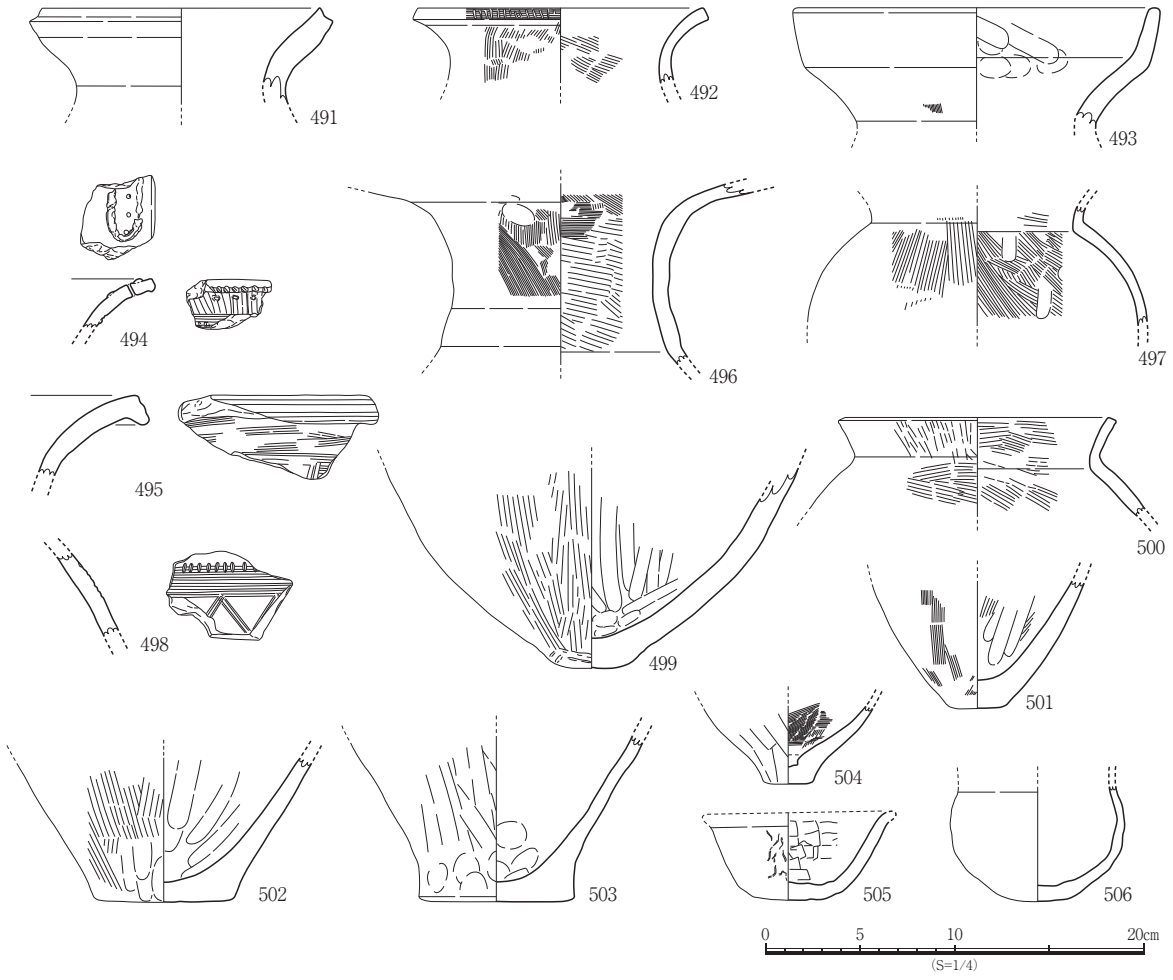


図2－84　第Ⅰ層出土遺物実測図1

片である。497は内面にハケ，外面にタタキのちハケを施し，内面にはナデ調整を加える。498は器面にナデ調整を施し，外面には列点文と多重沈線，複線山形文を配す。499は底部破片と考えられるもので，内面にナデ，外面にタタキのちハケを施す。500～503は甕である。500は口縁部破片で，内外面にハケを施す。501～503は胴部から底部にかけての破片である。501は内面にハケのちナデ，外面にハケを施す。502は内面に強いナデ，外面にナデのちハケを施す。503は胴部内外面にナデ，底部内面と胴部外面下端に指オサエを施す。504～506は鉢である。504は平底を呈するもので，内面にハケ，外面にヘラケズリを施す。505は口縁部が短く屈曲するもので，手づくね成形である。内面にヘラナデ，外面にナデを施す。506は丸底を呈するもので，口縁部を欠損する。調整は摩耗のため不明である。

須恵器（図2－85　507）

507は須恵器の杯身である。器面には回転ナデを施し，底部外面には回転ヘラケズリ調整が認められる。

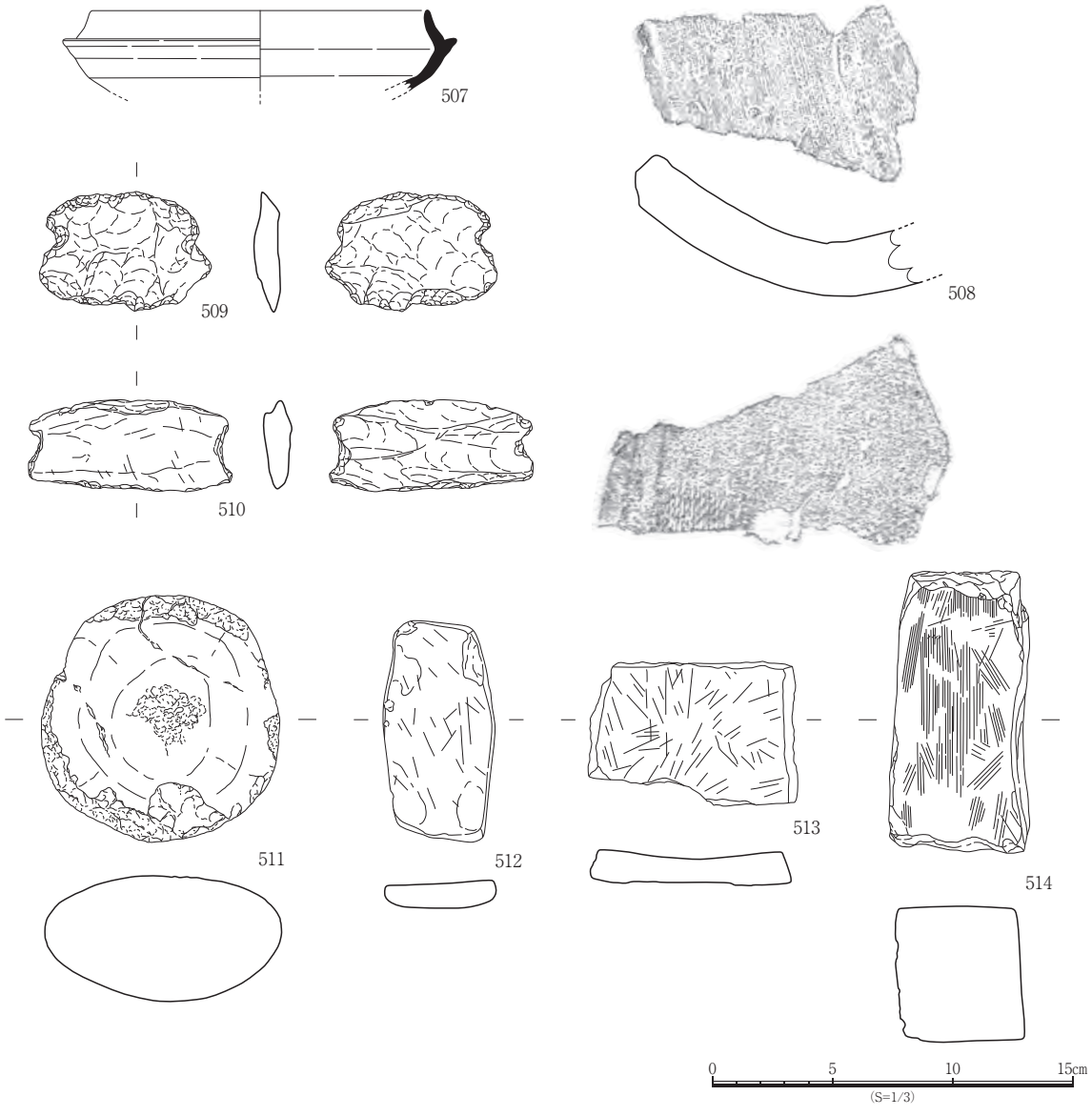


図2－85　第Ⅰ層出土遺物実測図2

瓦(図2－85　508)

508は平瓦で，端部にヘラケズリを施し，凹面には布目圧痕，凸面には縄目のタタキ目がみられる。凸面のタタキ目は丁寧にナデ消され，全体に自然釉が認められる。

石製品(図2－85　509～514)

509・510は石庖丁で，両端に明瞭な抉りがみられる。石材は509が蛇紋岩，510が結晶片岩と考えられる。511は叩石である。側面と両面に明瞭な敲打痕が残り，石材は砂岩である。512～514は砥石で，石材は砂岩である。512は全面，513は片面，514は3面に使用痕が認められる。

ⅱ 第Ⅱ層出土遺物

弥生土器(図2－86　515～531)

515～521は壷で，515～518は口縁部破片である。515は内面にヘラナデと指ナデ，外面にハケを施す。516は端部を下方に拡張し，端部内外面にヨコナデ，内外面にハケを施し，端部に2列の波状文を配する。517・518は端部を上下に大きく拡張し，517はヨコナデを施す。518は端部にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケを施し，端部には刻目がみられる。519・520は胴部破片である。519は外面にはナデ調整がみられ，微隆起突帯とその上部に櫛描きによる上弦の弧文を施す。520は内面にナデ，外面にハケを施し，外面には多重沈線と下弦の弧文，垂直方向の沈線文を配する。521は底部破片で，内面にナデ，外面にタタキのちハケを施す。522～524は甕である。522は全体の形状が復元できたも

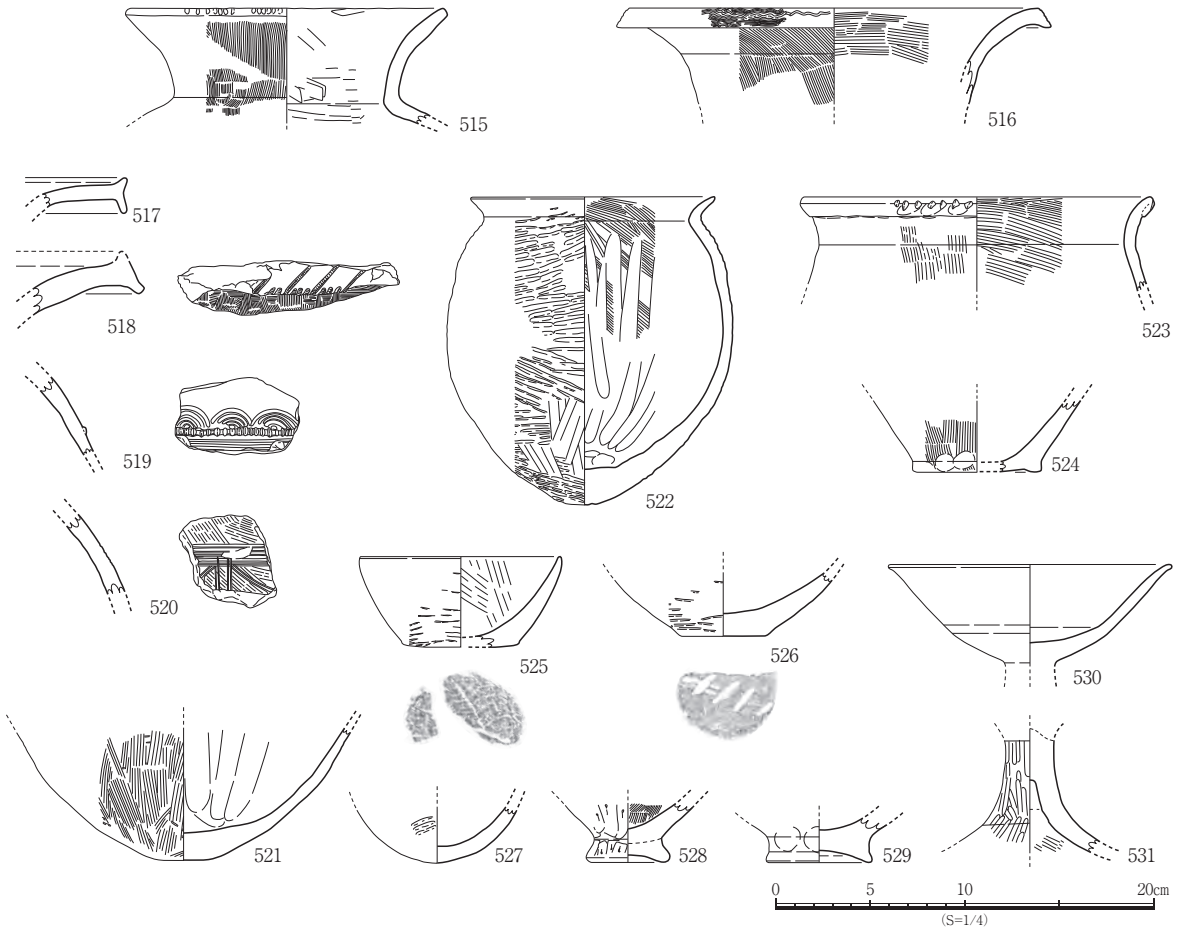


図2－86　第Ⅱ層出土遺物実測図1

ので，内面は口縁部と胴上半部にハケ，下半部にナデ，外面はタタキを施し，胴上半部内面にはナデ調整，胴下半部外面にはハケ調整を加える。523 は口縁端部を肥厚させ，端部外側に刻みを施す。内面にはハケ調整，外面にはハケ調整とヨコナデ調整がみられる。524 は胴部から底部にかけての破片で，胴部外面にハケ，底部外面にナデを施し，胴部外面下端には指頭圧痕が残る。525 ～ 529 は鉢である。525・526 は平底を呈するもので，525 は内面にハケのちナデ，外面にタタキのちナデを施す。526 は内面にナデ，外面にタタキのちナデを施し，底部外面には並行する 4 列の刻みがみられる。527 は丸底を呈するもので，内面にナデ，外面にタタキのちナデを施す。528・529 は脚付きのもので，528

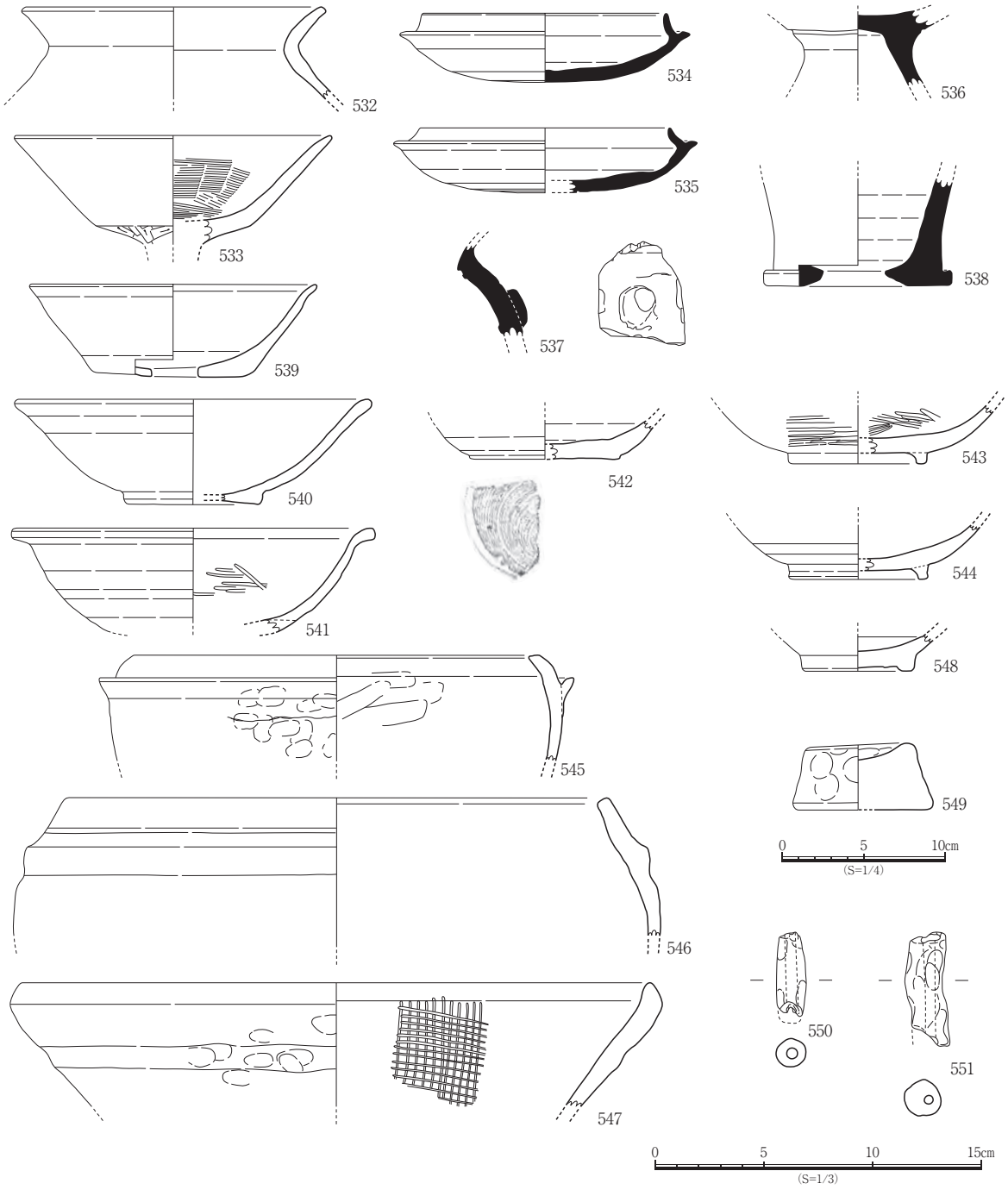


図2－87　第Ⅱ層出土遺物実測図2

は内面にハケ，外面にヘラケズリを施す。529 は内面に丁寧なナデ，外面に指オサエとナデを施す。530･531は高杯である。530は杯部破片で，器面にはヨコナデを施し，底部内面にはナデ調整を加える。531 は脚柱部破片で，内面にハケのちヨコナデ，外面に丁寧なヘラミガキを施す。

土師器(図2－87　532･533)

532 は甕で，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にナデを施す。533 は高杯で，杯部内面にハケ，口縁部内外面と杯部外面にヨコナデを施し，杯部外面下端にはヘラケズリ調整が認められる。

須恵器(図2－87　534～538)

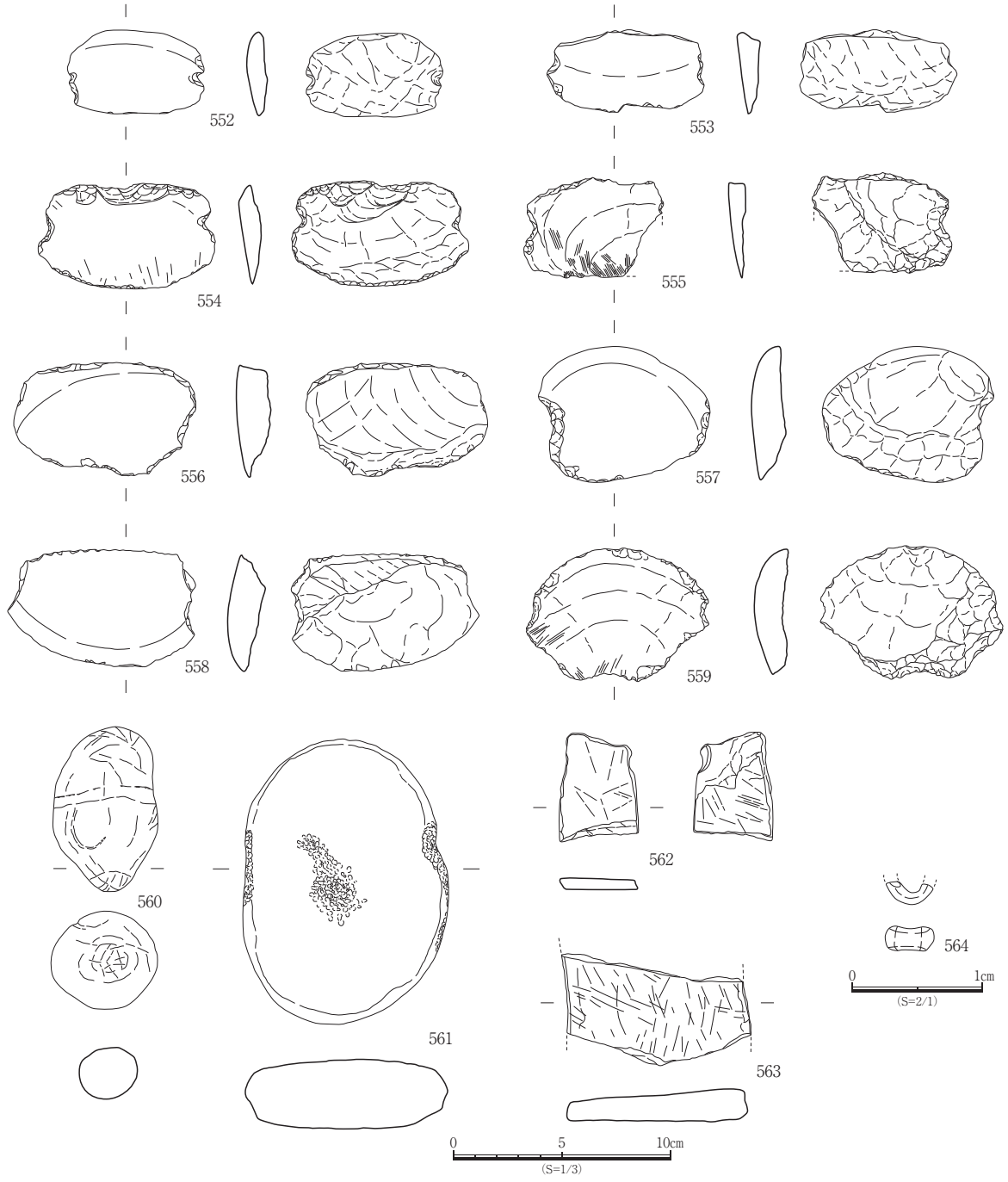


図2－88　第Ⅱ層出土遺物実測図3

534・535 は杯身で，底部外面に回転ヘラケズリを施し，他の部位には回転ナデ調整がみられる。536 は高杯で，器面には回転ナデを施し，杯部外面下端には 1 条の沈線を配す。537 は壷と考えられる胴部破片で，器面には回転ナデを施し，外面には円形浮文を貼付する。538 は鉢と考えられるもので，底部は平底である。底部を外側に拡張し，中央部には意図的な穿孔が認められる。調整は体部内外面に回転ナデ，底部外面に回転ヘラケズリを施す。

土師質土器(図2－87　539～544)

539 ～ 542 は杯である。539 は底部に意図的な穿孔がみられる。焼成が極端に悪く著しく摩耗するが，底部切り離しは回転糸切りである。540 は高台を有し，調整は摩耗のため不明である。541 は底部を欠損するもので，器面には回転ナデを施し，体部内面には丁寧なヘラミガキ調整を加える。542 は底部破片で，器面には回転ナデを施し，底部切り離しは回転糸切りである。543・544 は椀の底部破片である。543 は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。544 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，体部外面下端に回転ヘラケズリ調整，底部外面に回転ナデ調整が認められる。

瓦質土器(図2－87　545～547)

545・546 は鍋である。545 は斜め上方に立ち上がる鍔を有し，外面には自然釉がみられる。調整は内面全体と胴部外面にナデ，口縁部外面にヨコナデを施す。546 は断面三角形の鍔を有す。調整は摩耗のため不明瞭であるが，口縁部外面にヨコナデ調整がみられ，胴部外面には煤が付着する。547 は擂鉢である。口縁端部を上方に摘み上げ，内面には交差する条痕を施す。調整は口縁部内外面にヨコナデ調整，体部内面にナデ調整，体部外面に指頭圧痕とナデ調整がみられる。

白磁(図2－87　548)

548 は碗である。削り出し高台で，見込みには段を有する。

土製品(図2－87　549～551)

549 は支脚である。断面台形を呈し，上部は凹む。表面にはナデと指オサエを施し，側面に被熱痕が認められる。550・551 は土錘である。550 は一部が欠損し，全体的に摩耗する。551 は粗雑な作りで，表面には指頭圧痕が残る。

石製品(図2－88　552～563)

552～559 は石庖丁で，石材は全て砂岩である。552・553 は両端に弱い抉り，554 は両端に明瞭な抉りがみられる。555 は一部を欠損し，片側に明瞭な抉りがみられる。556・559 は両端に弱い抉り，557 は片側に明瞭な抉り，558 は両端に明瞭な抉りがみられる。560 は穿孔具と考えられるもので，先端部に使用痕がみられ，鉄分が付着する。石材は砂岩である。561 は叩石で，両側面と両面に明瞭な敲打痕がみられ，石材は砂岩である。562・563 は砥石である。562 は両面に使用痕がみられ，石材は泥岩である。563 は大部分を欠損し，片面と側面に使用痕がみられる。石材は細粒砂岩である。

ガラス製品(図2－88　564)

564 はガラス玉で，約 1/2 が残存する。色調は青色を呈する。

ⅲ 第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図2－89･90　565～594)

565 ～ 577 は壷で，565 ～ 569 は広口壷である。565 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁部内面にハケ調整が残る。566 は口縁端部にヨコナデ，口縁部内面にハケのちヘラミガキ，口縁部外面にヘラミガキを施す。567 は口縁端部にヨコナデ，口縁部内外面にハケを施す。568 は口縁端部外面に

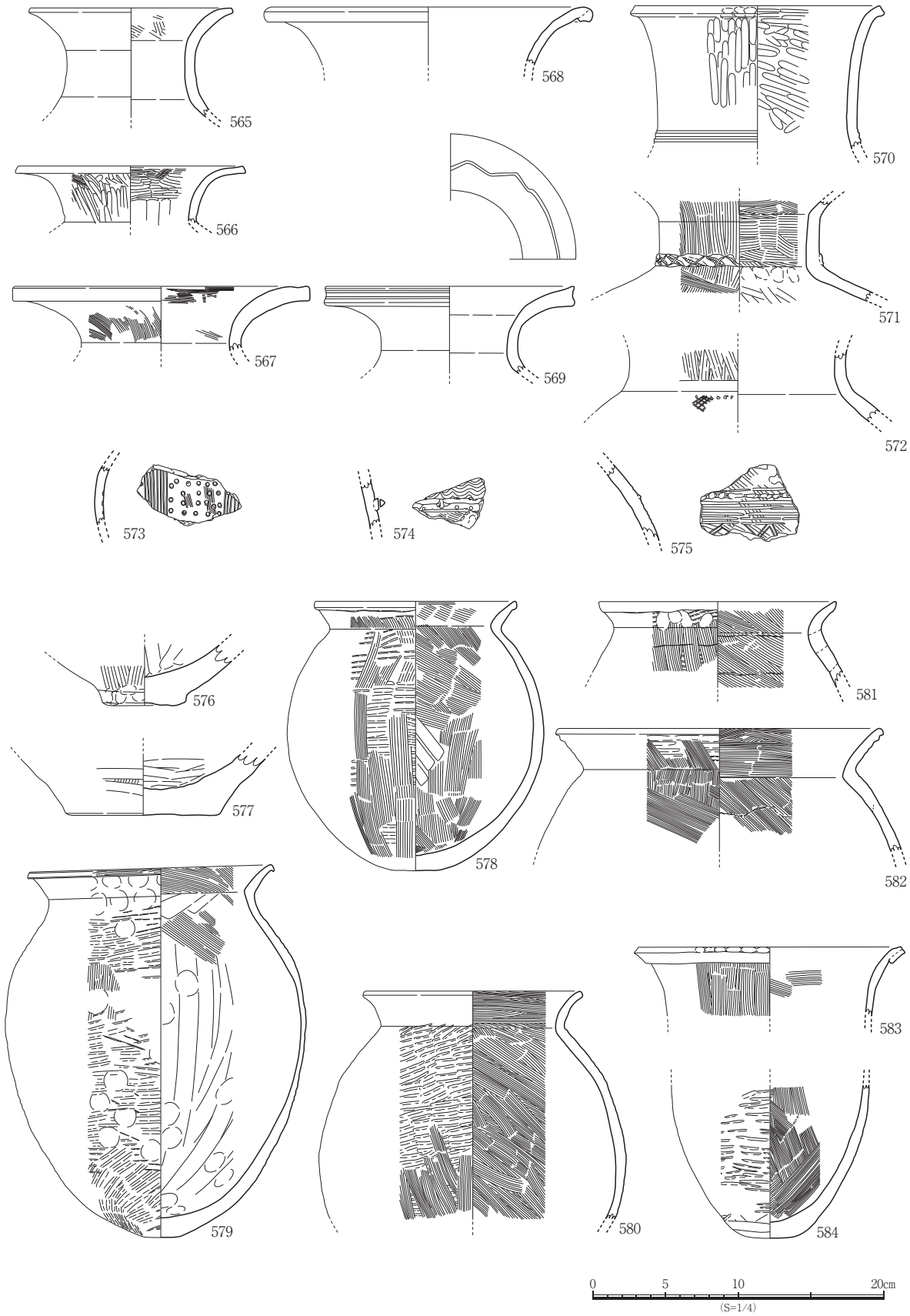


図２－89　第Ⅲ層出土遺物実測図1

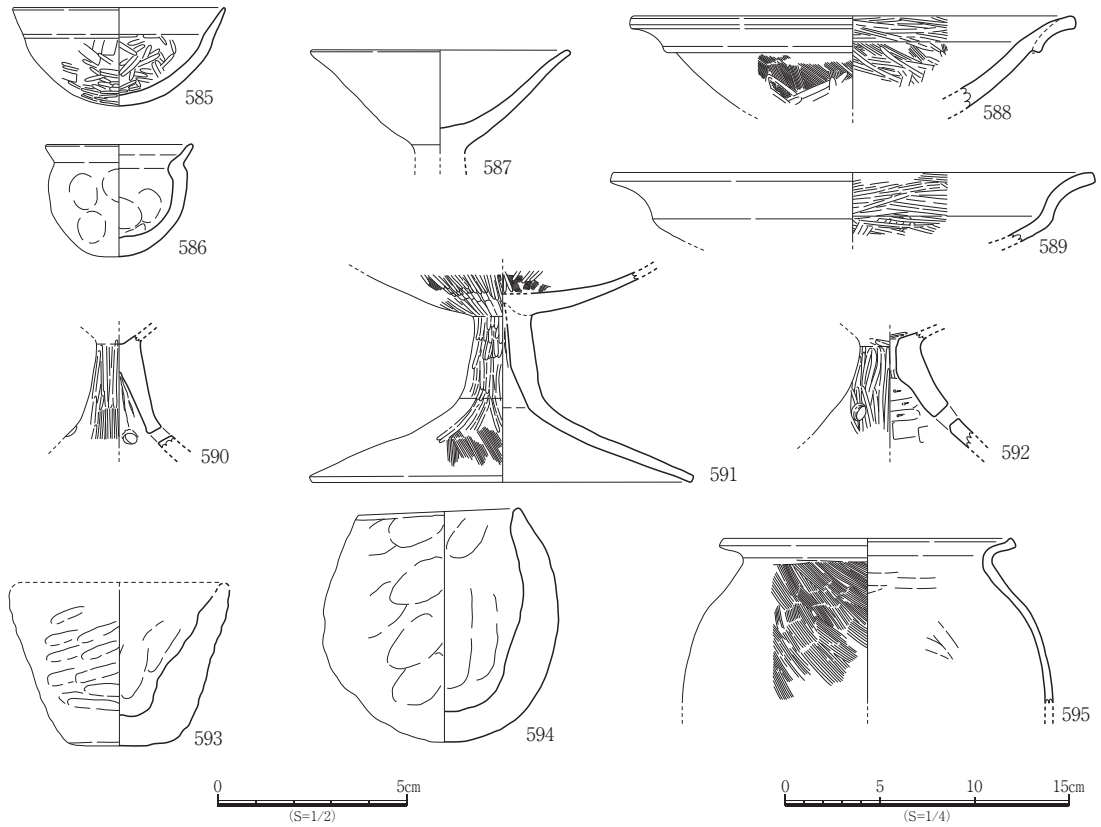


図2－90　第Ⅲ層出土遺物実測図2

粘土帯を貼付し，口縁部内面にナデ，口縁端部内外面と口縁部外面にヨコナデを施す。569 は口縁端部に 2 条の沈線，口縁部内面に粗雑な沈線山形文を配する。調整は内外面ともヨコナデを施し，外面の一部に煤が付着する。570 は頸部下端に 2 条の沈線がみられ，口縁端部に指オサエ，内面全体にハケのち粗雑なヘラミガキ，外面全体に粗雑なヘラミガキを施す。571・572 は頸部から胴部にかけての破片である。571 は頸部と胴部の境に幅広の突帯を貼付し，ハケ原体による交差する刻みを施す。調整は頸部内面と外面全体にハケ，胴部内面にナデを施す。572は肩部外面に刺突文と鋸歯文を配し，調整は内面にナデ，外面にヘラミガキとヨコナデを施す。573 は頸部破片で，外面に竹管状の列点文と多重ヘラ描沈線文を配す。574・575 は胴部破片である。574 は外面に断面三角形の穿孔された突帯を貼付し，突帯上方に波状文を配する。調整は内面にナデ，外面にハケを施す。575 は外面に微隆起突帯を貼付し，多重沈線と複線山形文を配する。調整は内面にナデ，外面にハケを施す。576・577 は底部破片である。576 は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施す。577 は内面にナデ，外面にハケのちヨコナデを施す。578～584 は甕で，578･579 は全体の形状が復元できた。578 は胴部が球形を呈し，内面全体にハケ，外面全体にタタキのちハケを施す。胴下半部内面にはヘラナデ調整を加え，胴部外面の一部には煤が付着する。579 は長胴形を呈し，内面は口縁部と胴上半部にハケ，下半部にナデのち指オサエ，外面全体にタタキを施す。胴部内面上端にはヘラナデ調整，胴部外面上半部にはハケ調整を加える。580 は内面全体にハケ，口縁部外面に指オサエとナデ，胴部外面にタタキを施し，胴中央部外面にはハケ調整を加える。581 は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，胴上端部外面にはハケ調整を加える。582 は内面全体にハケ，外面全体にタタキのちハケを施し，口縁部の一部には

煤が付着する。583は口縁端部外面に粘土帯を貼付し，口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にハケのちヨコナデ，頸部外面にハケを施す。584は底部破片である。内面にハケ，外面にタタキを施す。585・586は手づくね成形の鉢である。ともに丸底で，口縁部が屈曲して立ち上がるものである。585は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラミガキ，体部外面にヘラケズリのちヘラミガキを施す。586は口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面に指オサエとナデを施す。587～591は高杯である。587～589は杯部破片で，587は口縁部内外面にヨコナデ，体部外面にナデを施す。588は口縁端部外面に扁平な粘土帯を貼付するもので，内外面にハケのちヘラミガキを施す。589は口縁部が屈曲して立ち上がるもので，内面にヘラミガキ調整が認められる。590は脚柱部破片で，内面には絞り目がみられ，外面にはヘラミガキを施す。591は杯口縁部を欠損するもので，杯部内外面にハケのち丁寧なヘラミガキ，脚部外面にハケのち丁寧なヘラミガキを施す。592は器台で，穿孔は3ヵ所と考えられる。内面にはヘラケズリ調整とヘラナデ調整，外面には丁寧なヘラミガキ調整が認められる。593・594はミニチュア土器で，手づくね成形で

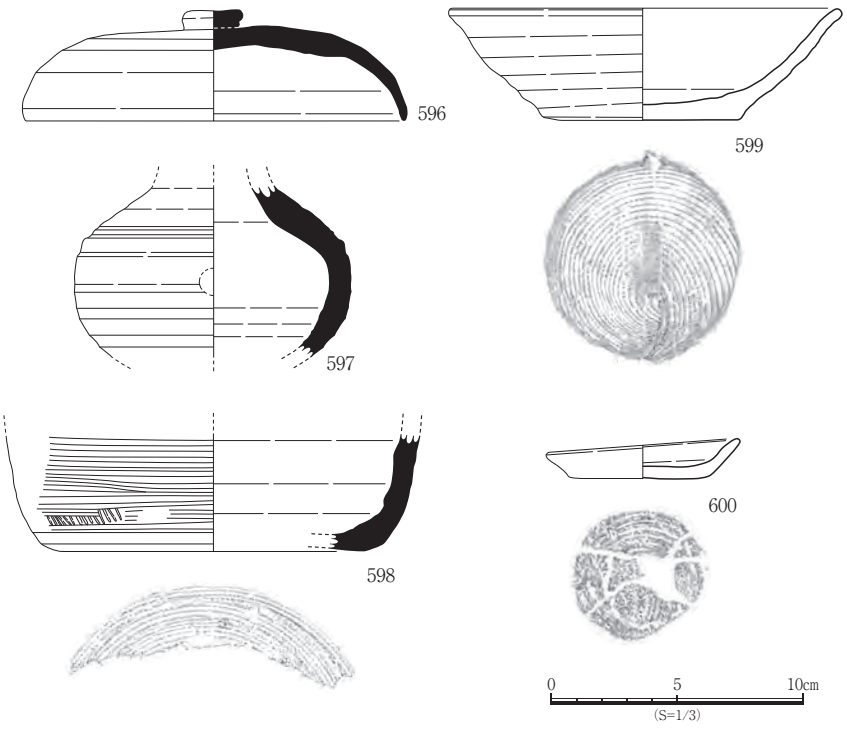


図2－91　第Ⅲ層出土遺物実測図3

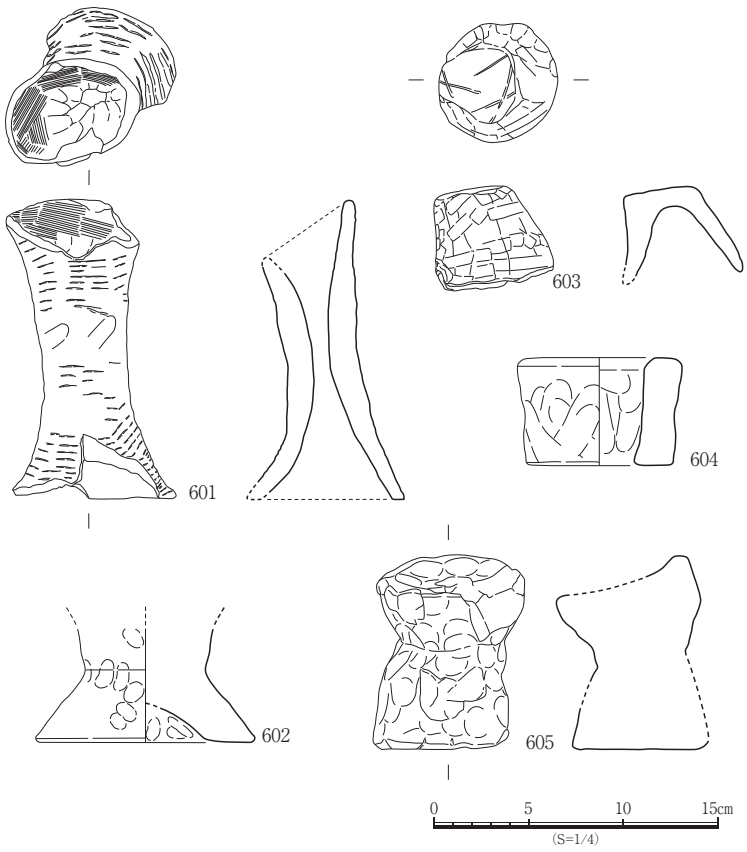


図2－92　第Ⅲ層出土遺物実測図4

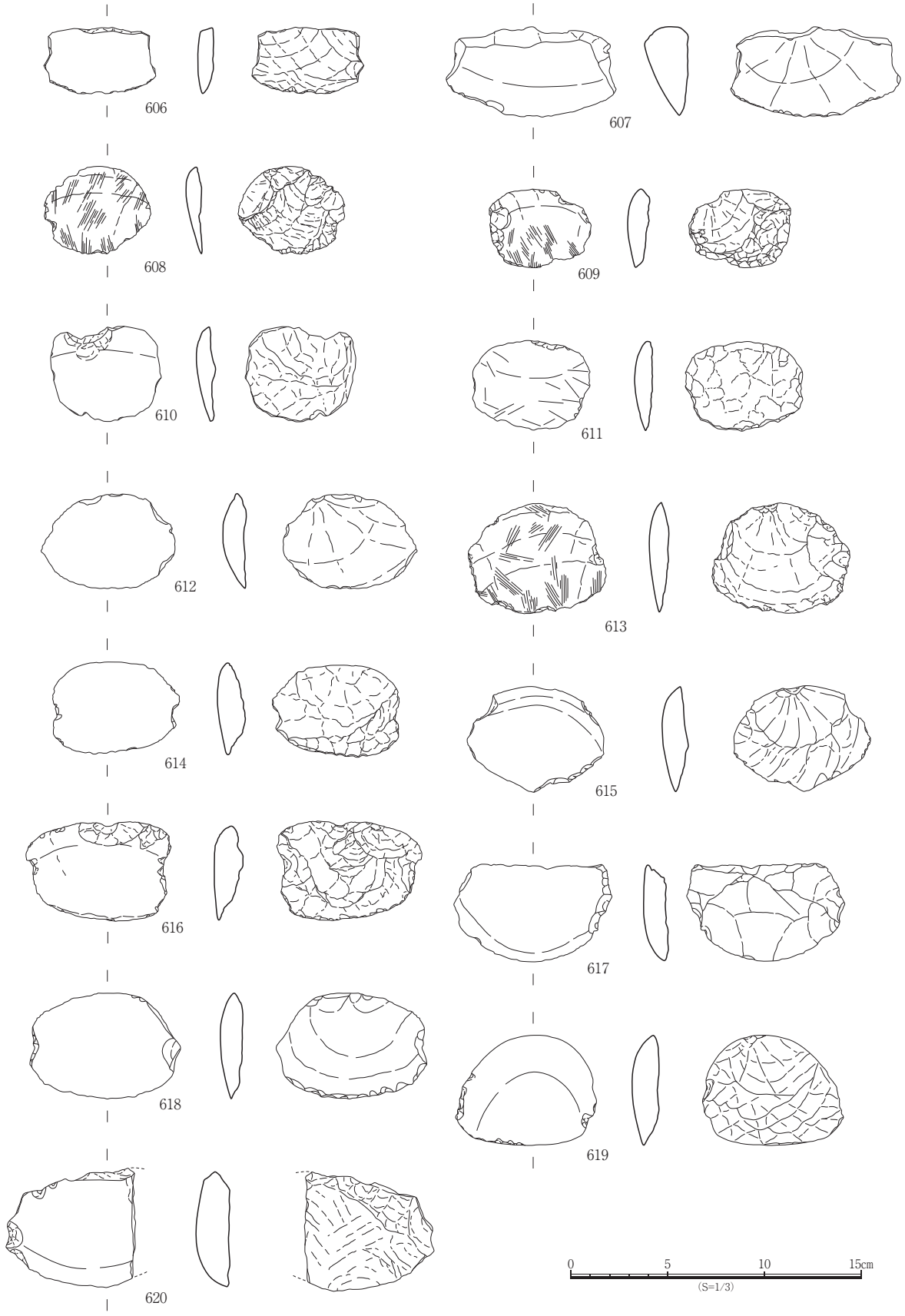


図2－93　第Ⅲ層出土遺物実測図5

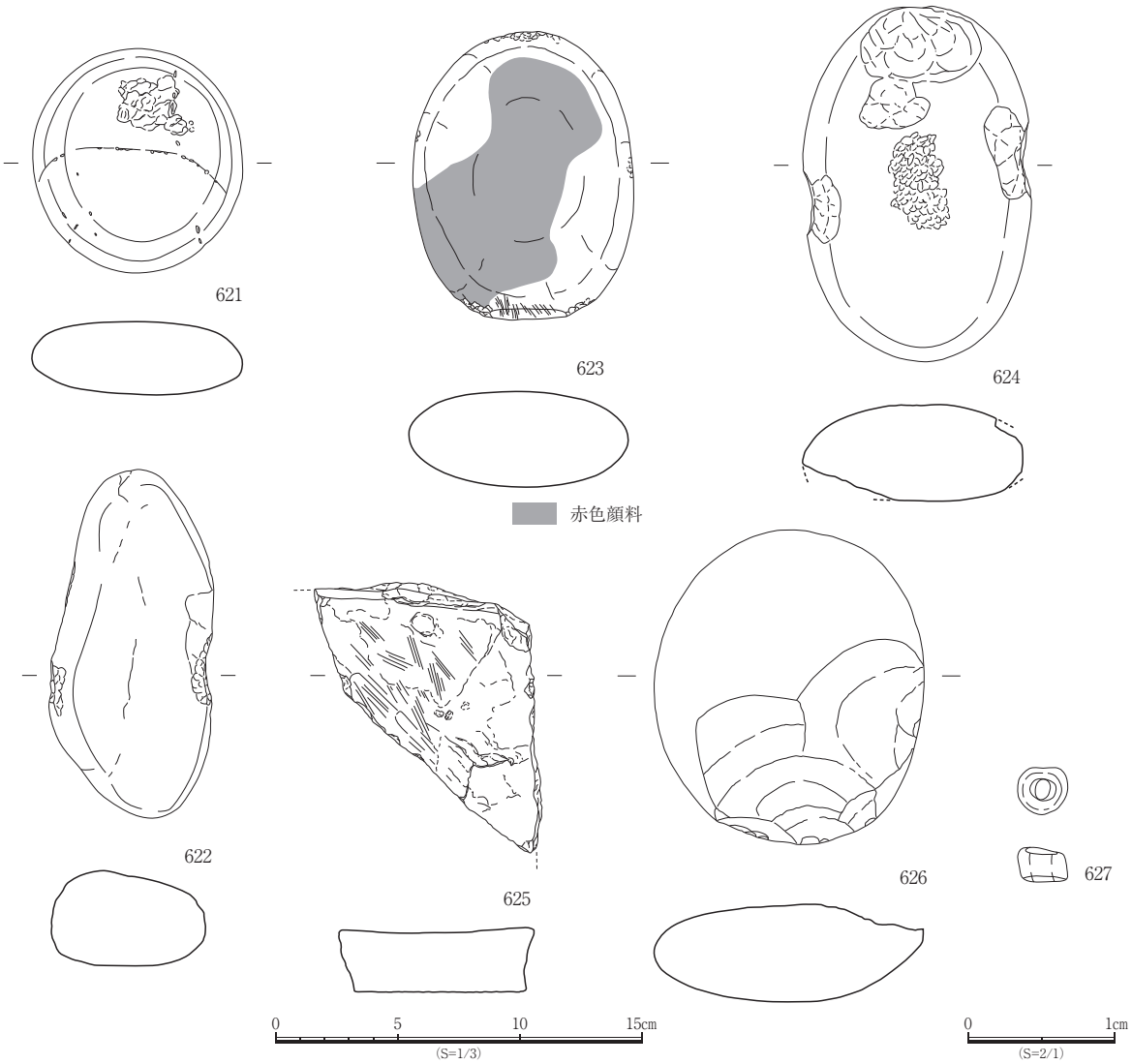


図2－94　第Ⅲ層出土遺物実測図6

ある。593は内面にナデ，外面にタタキを施す。594は内面にナデ，外面に指オサエとナデを施す。

東阿波型土器（図2－90　595）

595は甕で，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケを施す。

須恵器（図2－91　596～598）

596は杯蓋で，ボタン状の摘みを有する。天井部外面に回転ヘラケズリを施し，他の部位には回転ナデ調整がみられる。597は𤭯で，胴下半部外面に回転ヘラケズリを施し，他の部位には回転ナデ調整がみられる。598は鉢と考えられるもので，内面全体に回転ナデ，外面全体にタタキのち回転カキ目を施し，底部外面下端には回転ヘラケズリ調整を加える。

土師質土器（図2－91　599･600）

599は杯で，ほぼ完存する。器面には回転ナデを施し，底部切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。600は小皿で，摩耗のため調整は不明であるが，底部切り離しは回転糸切りである。

土製品（図2－92　601～605）

601～605は支脚である。601・602は脚付きのもので，601はほぼ完存する。内面にハケとナデ，外

面にタタキのちナデを施し，外面の一部に被熱痕がみられる。602 は脚部のみ残存し，表面には指頭圧痕とナデ調整が認められる。603 は断面台形を呈し，中空である。手づくね成形で，上部平坦面は面取りのため多角形を呈する。調整はヘラナデ調整とナデ調整である。604 は断面方形を呈し，中空である。調整は指オサエとナデ調整で，外面には被熱痕がみられる。605 は手づくね成形で，ほぼ完存する。調整は指オサエとナデ調整で，外面には被熱痕がみられる。

石製品（図2－93･94　606～626）

606～620 は石庖丁で，石材は 612 が蛇紋岩で，その他は全て砂岩である。606・615・616 は両端に粗雑な抉り，607・611～613・617～619 は両端に弱い抉り，608・620 は片側に弱い抉り，614 は両端に明瞭な抉りを施し，609・610 は抉りがみられず未成品の可能性が考えられる。621 ～ 624 は叩石で，石材は全て砂岩である。621 は片面に敲打痕，622 は両側面に敲打痕，623 は両側に敲打痕と片側に摩滅痕，624 は両面と両側面の敲打痕がみられ，623 には赤色顔料が付着する。625 は砥石である。大部分を欠損し，片面に弱い使用痕がみられる。石材は砂岩である。626 は石庖丁の母材と考えられるもので，剥離痕が残る。石材は砂岩である。

ガラス製品（図2－94　627）

627 はガラス玉である。完存し，色調は青色を呈する。

ⅳ 第Ⅳ層出土遺物

弥生土器（図2－95～99　628～700）

628～649 は壷である。628 は全体の形状が復元できたもので，内面全体にタタキ原体によるハケ，外面全体にタタキを施し，外面の胴上端部と下半部にタタキ原体によるハケ調整を加える。629 は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がるもので，口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケを施す。630 は長頸壷で，口縁端部には刻目がみられる。内面は口縁部にハケのちナデ，頸部にナデ，外面は口縁部にヨコナデ，頸部にハケを施す。631～636 は広口壷である。631・632 は口縁端部に擬凹線がみられる。631 は口縁端部を下方に拡張し，口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にハケのちヨコナデ，頸部外面にハケを施す。632 は内面は口縁部にヨコナデ，頸部にハケのちヘラミガキ，胴部にハケ，外面は口縁部にハケ，頸部にヨコナデ，胴部にタタキのちナデを施す。633 は口縁端部を下方に大きく拡張し，端部にはハケ状原体による刻目がみられる。口縁端部内面には櫛描山形文を配し，器面にはヨコナデを施す。634 は口縁端部を上下に拡張し，上端に刻みを施し，内面にはハケ調整が残る。635 は口縁端部を上下に大きく拡張し，波状文を施す。器面にはヨコナデ調整がみられる。636 は口縁端部にハケを施し，竹管状の刺突文を配する。調整は口縁部内外面にヨコナデ，内面にハケのちナデ，外面にハケを施す。637 ～ 639 は二重口縁壷である。637 は山陰系土器の模造と考えられるもので，口縁部内面にハケのちヨコナデ，口縁部外面にヨコナデ，頸部外面にハケを施す。638 は口縁部が短く外反して立ち上がるもので，器面にはヨコナデを施し，外面の一部にハケ調整が認められる。639 は搬入品と考えられるもので，内外面にヨコナデを施す。640 は複合口縁壷で，搬入品の可能性が考えられる。口縁端部を欠損し，頸部内面と口縁部外面にヨコナデ，頸部外面にハケのちヨコナデを施す。641 は口縁部が斜め上方にやや外反して立ち上がるもので，口縁部内面と外面全体にヘラミガキ，胴部内面にハケを施し，口縁部外面と胴中央部外面に煤が付着する。642 は長頸壷と考えられるもので，摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にタタキ目が残る。643 は口縁部破片で，口縁端部にハケ原体による交差する刻みを施し，内

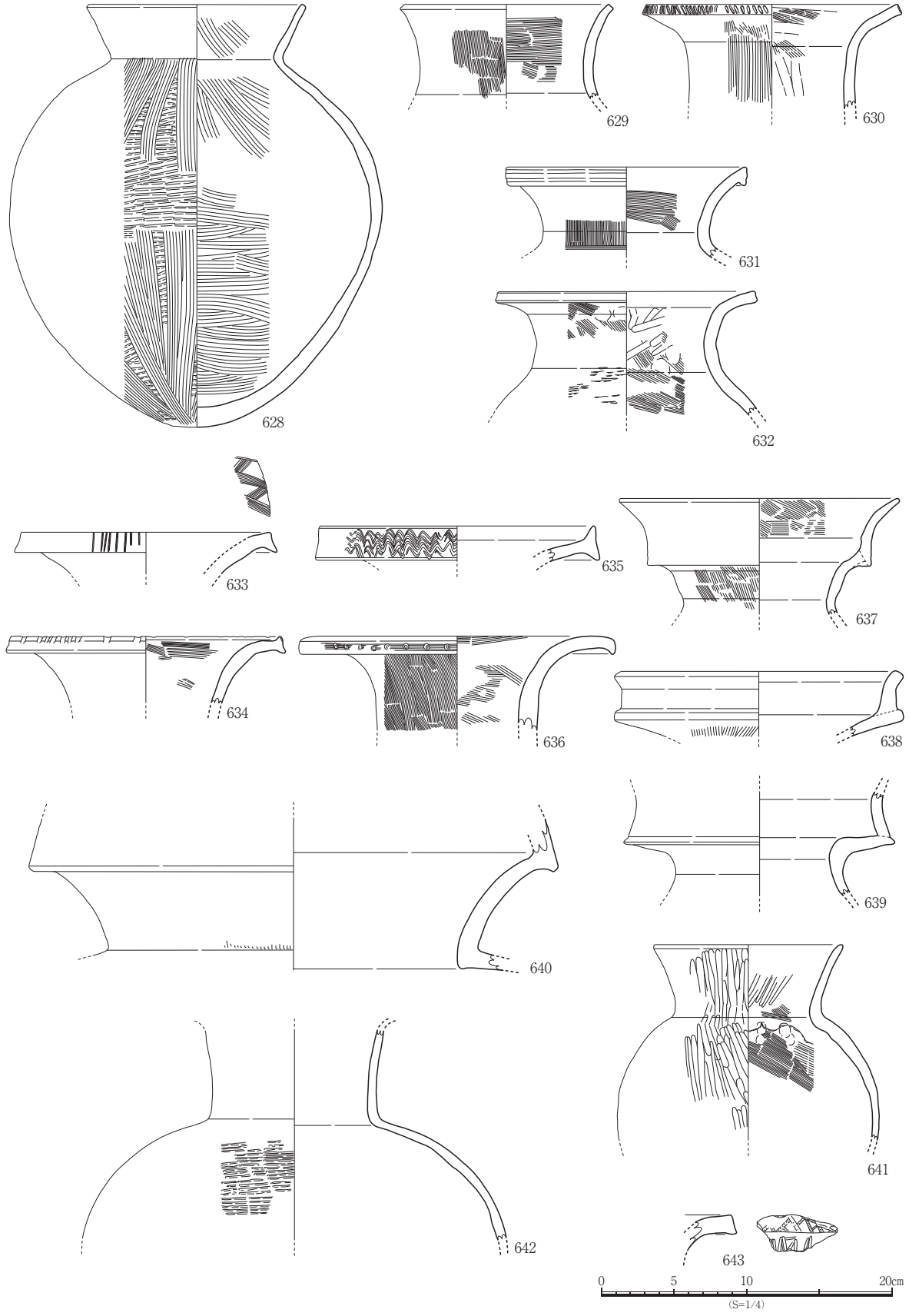


図2－95　第Ⅳ層出土遺物実測図1

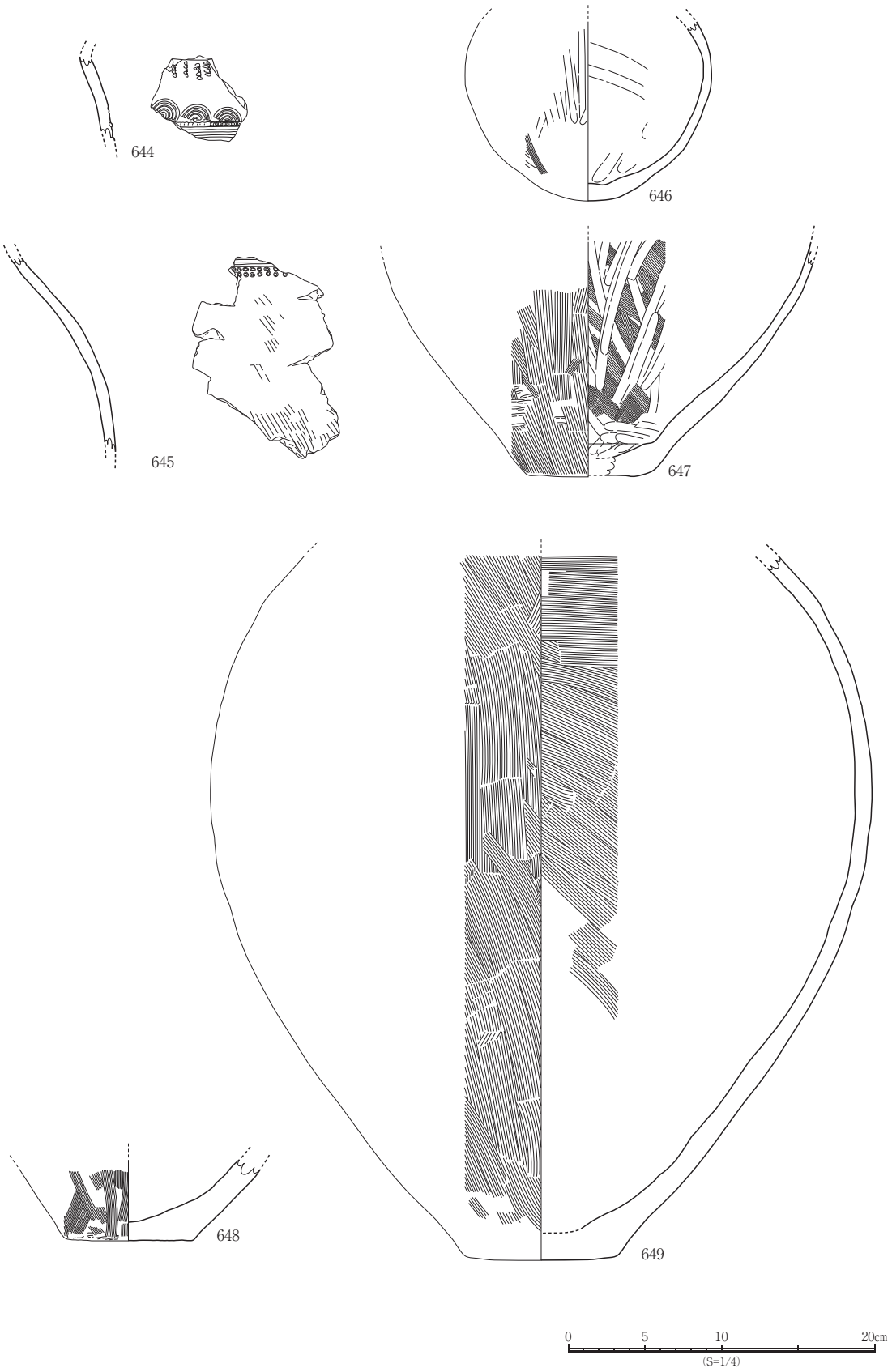


図2－96　第Ⅳ層出土遺物実測図2

面にはヨコナデ調整，外面にはヨコナデ調整とヘラミガキ調整がみられる。644・645 は胴部破片である。644 は内外面にナデを施し，外面には竹管並列刺突文と半円状の多重沈線文，刻目を伴う微隆起突帯，多重沈線がみられる。645 は内面にナデ，外面にハケのちナデを施し，外面には2列の刺突文と多重沈線がみられる。646 ～ 649 は胴部から底部にかけての破片である。646 は内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキを施し，外面の一部には煤が付着する。647 は内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケを施す。648 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にはタタキを施し，胴部外面にはハケ調整，底部外面にはナデ調整を加える。649 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内外面にハケ調整が認められる。650 ～ 658 は甕である。650 ～ 652 は全体の形状が復元できたもので，650 は球形の胴部を呈し，口縁部が短く立ち上がる。内面は口縁部にハケのちヨコナデ，胴上端部にハケ，胴下半部にナデ，外面は口縁部にヨコナデを施し，胴部にはハケを施したのちヘラミガキ調整を加える。651・652 は長胴形を呈し，651 は内面全体にナデ，外面全体にタタキを施し，胴上半部外面にはナデ

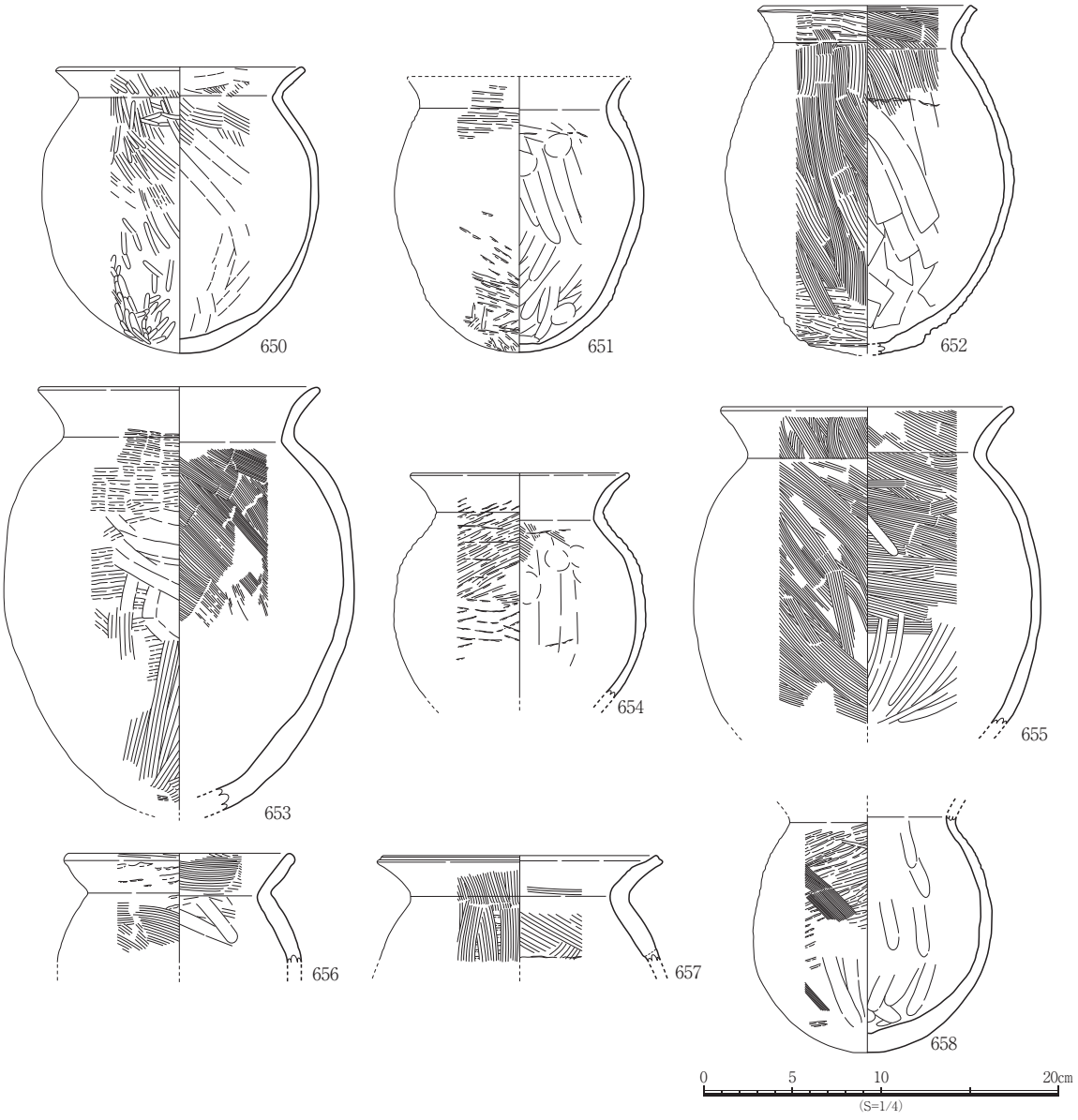


図2－97　第Ⅳ層出土遺物実測図3

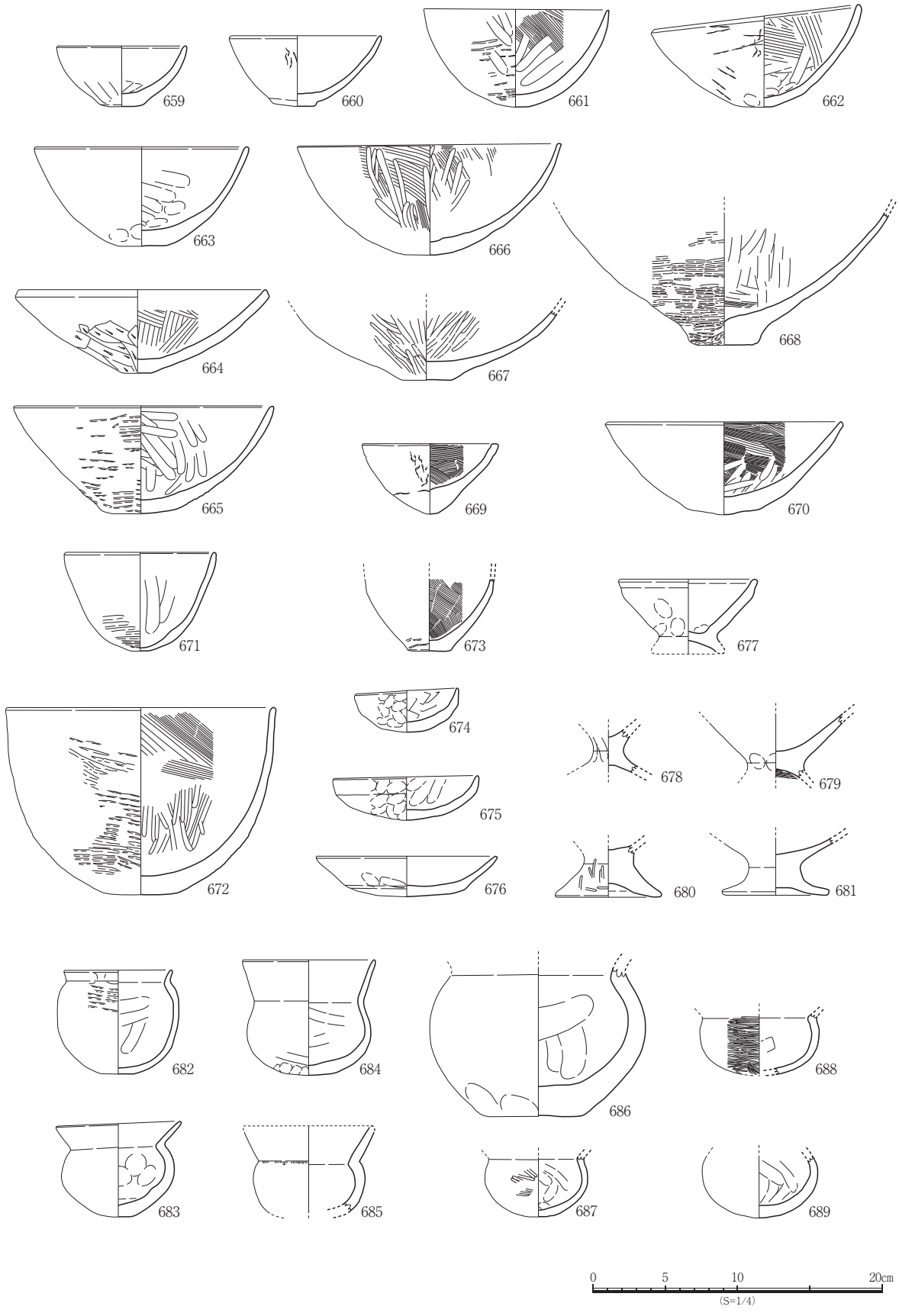


図2－98　第Ⅳ層出土遺物実測図4

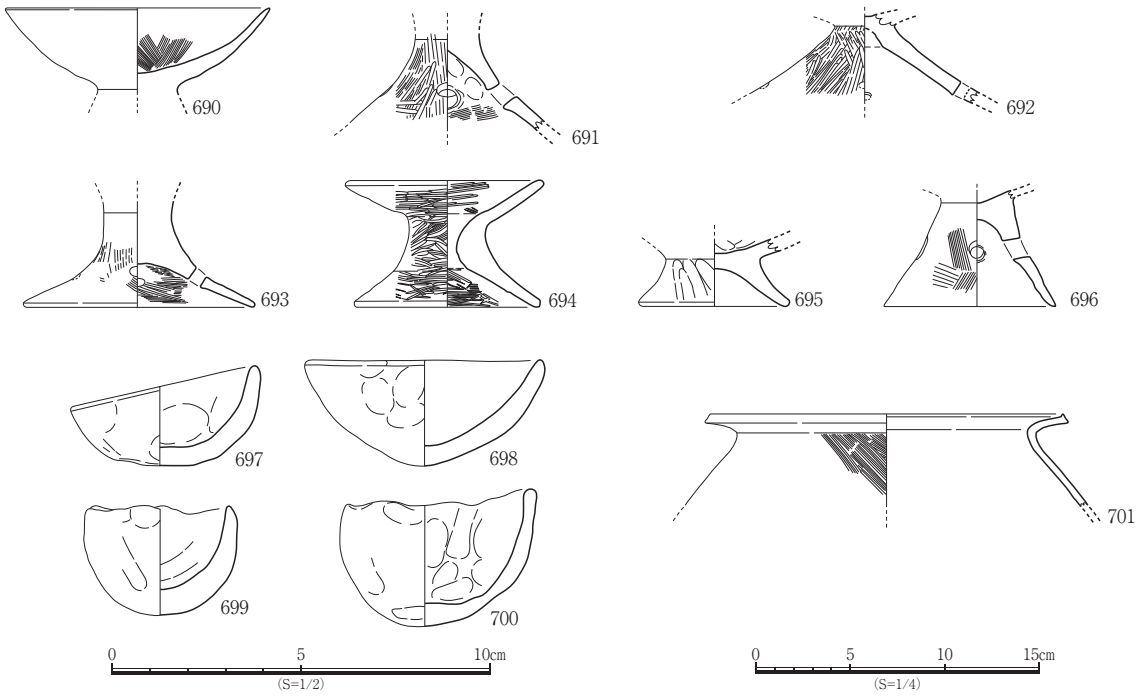


図2－99　第Ⅳ層出土遺物実測図5

調整を加える。652 は口縁部と胴上端部の内面にナデ，胴部内面にヘラナデを施し，外面は全体にタタキを施したのち，胴部にハケ調整を加える。653 は底部を欠損するもので，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケとナデ，外面全体にタタキを施す。外面の胴上半部にはナデ調整，胴下半部にはハケ調整を加え，胴上半部には煤が付着する。654・655 も底部を欠損するものである。654 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキを施す。655 は口縁部と胴上半部の内面，外面全体にハケ，胴下半部内面にナデを施す。656・657 は口縁部から胴部にかけての破片である。656 は口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキを施し，口縁部外面にはナデ調整，胴部外面にはハケ調整を加える。657 は口縁端部に擬凹線がみられ，口縁端部と口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にハケ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施す。658 は口縁部を欠損するものである。長胴形を呈し，内面にナデ，外面にタタキのちナデとハケを施す。659 ～ 689 は鉢で，659 ～ 668 は体部が内湾して立ち上がるものである。659 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面にナデを施す。660 は手づくね成形で，摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にはナデ調整がみられる。661 は口縁部内面にハケのちナデ，体部内面にナデ，外面全体にタタキのちナデを施す。662 は手づくね成形で，口縁部と体部内面にハケ，底部内面にナデと指オサエ，外面全体にタタキのちナデを施す。663 は内外面にナデと指オサエを施す。664 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケ，体部外面にヘラケズリを施す。665 は内面全体にナデ，外面全体にタタキを施し，外面にはナデ調整を加える。666 は内外面にハケのちヘラミガキを施し，底部外面にはナデ調整がみられる。667・668 は口縁部を欠損し，667 は内面にハケのち丁寧なヘラミガキ，外面に丁寧なヘラミガキを施す。668 は内面にハケのちナデ，外面にタタキを施す。669・670 は尖底及び丸底を呈するものである。669 は手づくね成形で，内面にハケ，外面にナデを施す。670 は内面にハケのちナデ，外面にナデを施す。671 ～ 673 は比較的器高が高く，深鉢状を呈するものである。671 は内面

にナデ，外面にタタキを施し，体上半部外面にはナデ調整を加える。672 は口縁端部がやや外反し，ヨコナデを施す。内面にはハケ調整とヘラミガキ調整，外面にはタタキ目とナデ調整がみられる。673 は口縁部を欠損するもので，内面にハケ，体部外面にナデ，体下端部外面にタタキのちナデを施し，底部外面にはナデ調整を加える。674 ～ 676 は皿状を呈するものである。674 は手づくね成形で，内面にヘラナデ，外面に指オサエを施す。675 は内面にナデ，外面に指オサエを施す。676 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面に指オサエとナデを施す。677 ～ 681 は脚付きのものである。677 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面に指オサエを施す。678 は脚柱部のみ残存し，器面にはナデを施す。679 は鉢部破片で，口縁部を欠損する。内面にナデ，外面にタタキのちナデを施す。680 は脚部破片で，杯部内面と脚部外面にナデ，脚部外面にヘラミガキを施す。681 は杯部から脚部にかけて残存し，杯部内外面にナデ，脚部内外面にヨコナデを施す。682 ～ 689 は口縁

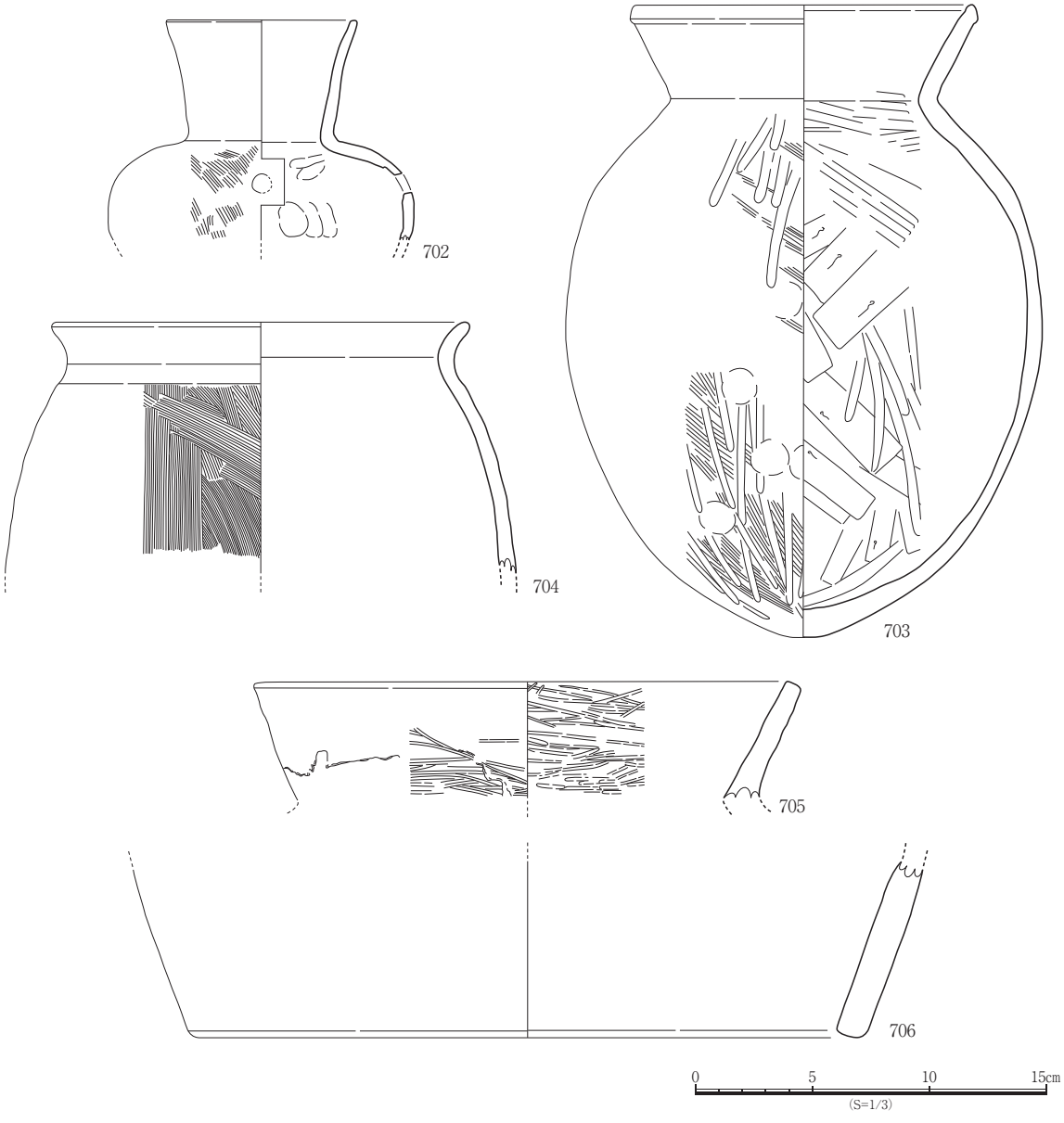


図2－100　第Ⅳ層出土遺物実測図6

部が屈曲して立ち上がるものである。682は口縁部が短く立ち上がり，口縁部内外面に指オサエ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデを施す。683～685は口縁部が比較的長く屈曲して立ち上がるもので，683は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面に指オサエとナデ，体部外面にナデを施す。684は口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデを施し，底部外面には静止ヘラケズリ調整が認められる。685は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にハケのちナデを施す。686～688は口縁部を欠損するもので，686は内面に丁寧なナデ，外面に指オサエとナデを施す。687は内面にナデ，外面にヘラミガキを施す。688は搬入品と考えられるもので，内面に指ナデとヘラナデ，外面にヘラミガキを施す。689は体部破片で，器面にはナデを施す。690～693は高杯である。690は杯部破片で，口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケを施す。691～693は脚部破片で，691・692は裾部を欠損する。691は穿孔が4ヵ所と考えられ，内面にハケ，外面にハケのちヘラミガキを施す。692は内面にナデ，外面に丁寧なヘラミガキを施す。693は摩耗のため調整は不明瞭であるが，器面にはハケ調整がみられる。694～696は器台である。694は全体の形状が復元できたもので，脚柱部内面にヨコナデ，その他の部位に丁寧なヘラミガキを施す。695・696は脚部破片で，695は内外面に粗いナデを施す。696は摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にハケ調整が残る。697～700はミニチュア土器で，ほぼ完存する。全て手づくね成形で，器面にはナデと指オサエを施す。

東阿波型土器（図2－99　701）

701は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケを施す。

土師器（図2－100　702～706）

702は壷で，搬入品の可能性が考えられる。口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり，胴部には穿孔がみられる。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面に指オサエとナデ，胴部外面にハケを施す。703～705は甕である。703は全体の形状が復元できたもので，口縁部内外面にヨコナデ，胴上半部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリのちヘラナデ，胴部外面にハケのちヘラミガキを施す。704は口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がり，内外面にヨコナデを施す。胴部内面にはナデ調整，胴部外面にはハケ調整がみられる。705は口縁部破片で，内外面にヨコナデのちヘラミガキを施す。706は単孔式の甑と考えられる底部破片である。器面にはヨコナデを施し，内面の一部には煤が付着する。

須恵器（図2－101　707～728）

707～714は杯蓋である。707は器面に回転ナデを施し，天井部内面にナデ調整を加える。708は器面に回転ナデを施し，天井部外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。709は天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，天井部内面にはナデ調整を加える。710は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面に回転ナデ調整がみられ，天井部内面にはナデ調整を加える。711は天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，外面には自然釉が残る。712は口縁端部に明瞭な段を有し，天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施す。713・714はボタン状の摘みを有するもので，口縁部を欠損する。ともに器面には回転ナデを施し，天井部内面にナデ調整を加える。715～720は杯身である。715～718は口縁部の立ち上がりが短いものである。715は器面に回転ナデを施す。716は底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，底部内面にはナデ調整を加える。717は体部外面下端に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，底部切り離しは回転ヘラ切りである。718は底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施

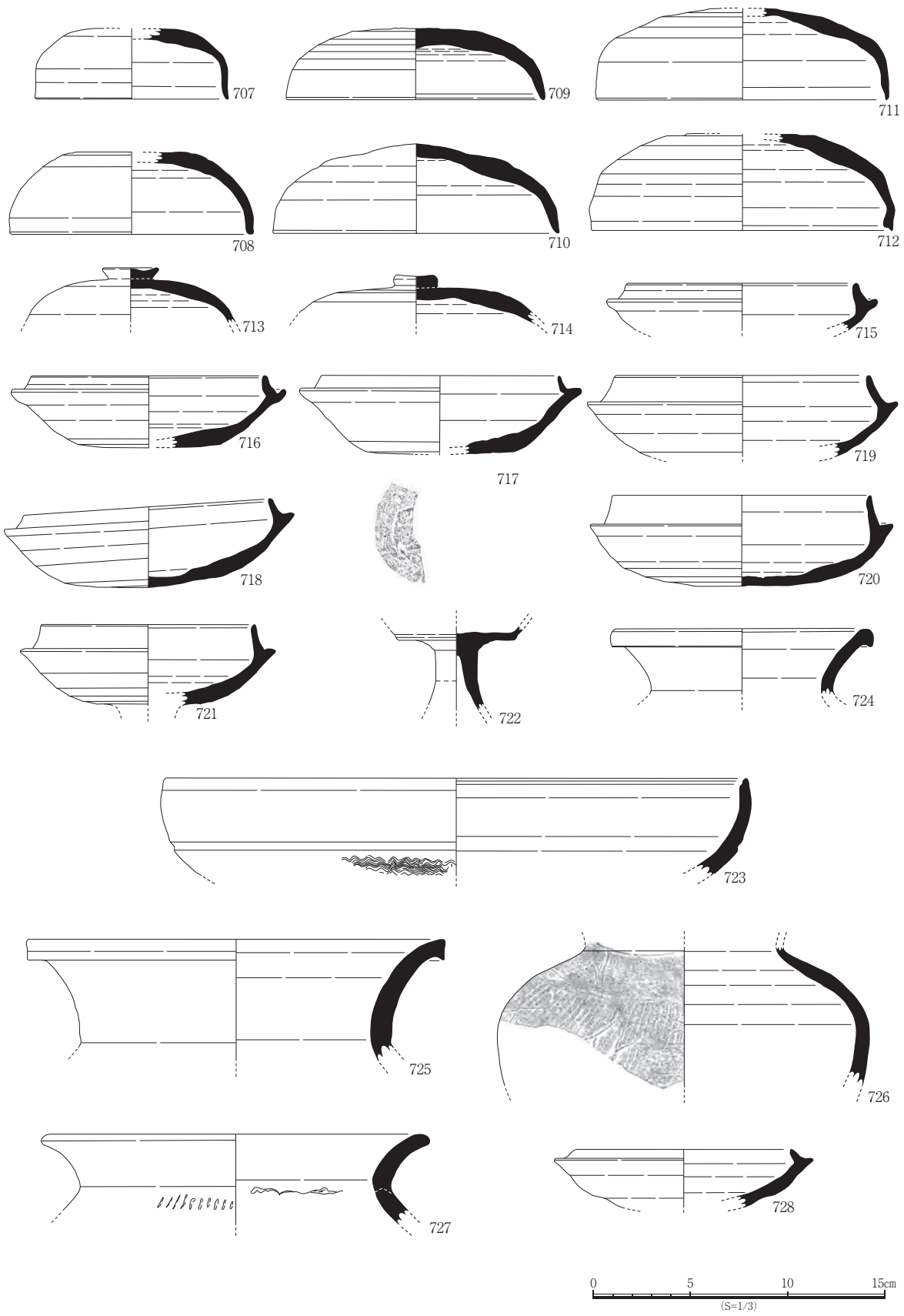


図2－101　第Ⅳ層出土遺物実測図7

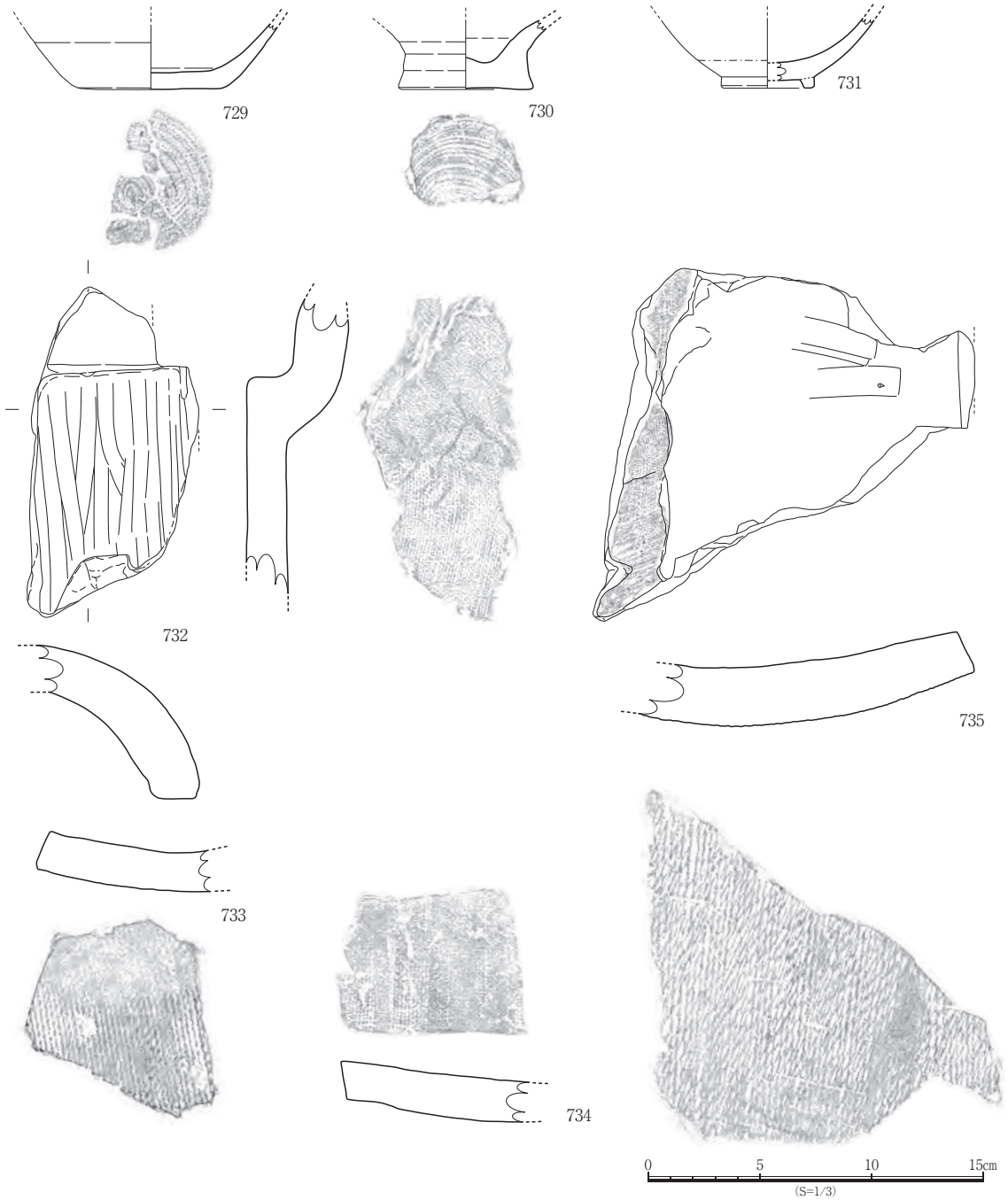


図２－102　第Ⅳ層出土遺物実測図8

し，底部内面にはナデ調整を加える。719・720は口縁部の立ち上がりが比較的高いもので，底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，720の底部内面にはナデ調整がみられる。721・722は高杯である。721は杯部破片で，体部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施す。722は脚部内面にナデ，その他の部位に回転ナデを施し，外面には自然釉が残る。723は器台と考えられる口縁部破片で，器面には回転ナデを施す。口縁端部に段を有し，外面には沈線と波状文を配する。724 ～ 726は壷と考えられるもので，724・725は口縁部破片である。ともに器面には回転ナデを施す。726は胴部破片で，器面には回転ナデを施す。727は甕と考えられる口縁部破片で，摩耗のため

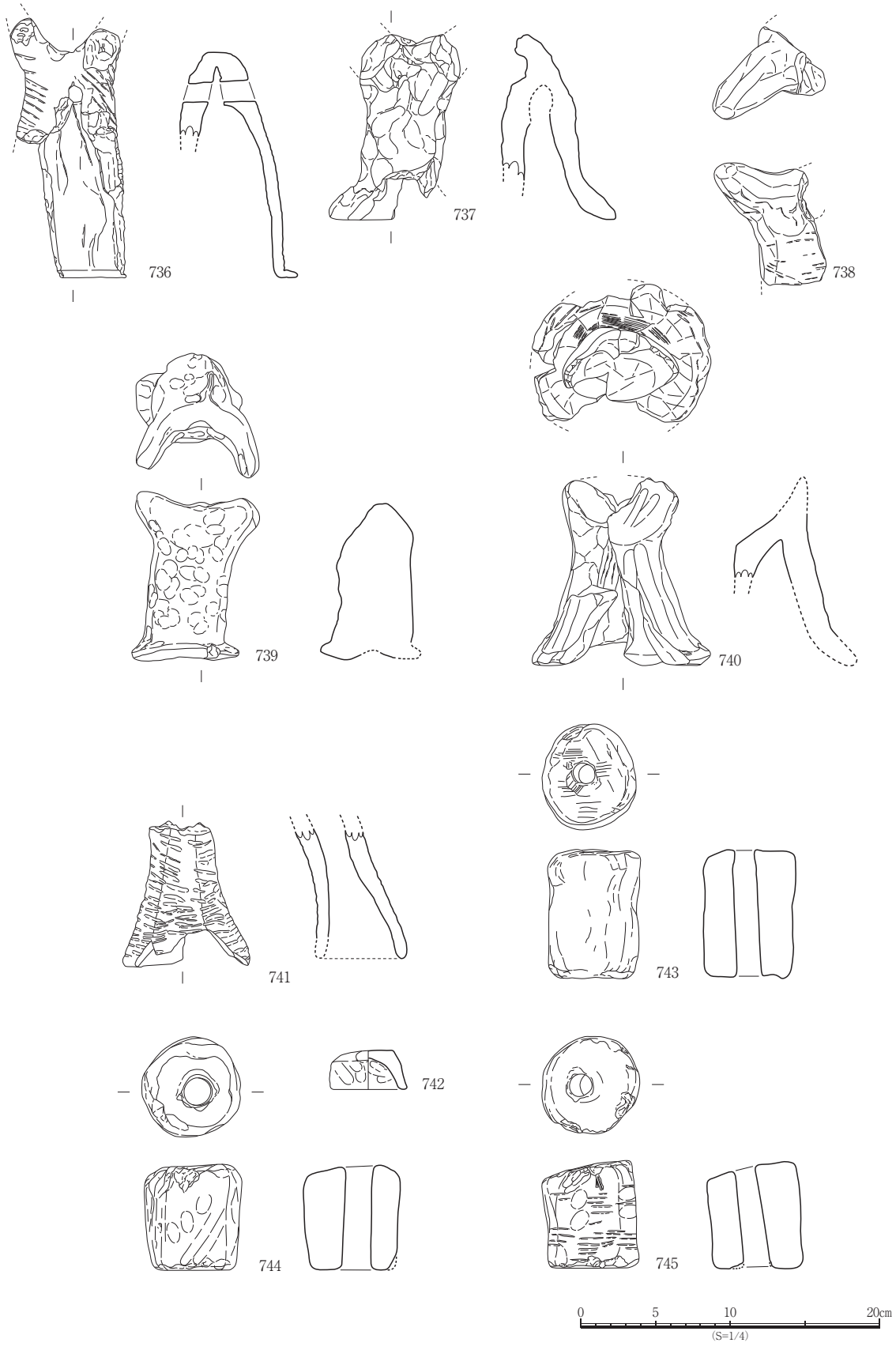


図2－103　第Ⅳ層出土遺物実測図9

図2－104　第Ⅳ層出土遺物実測図10

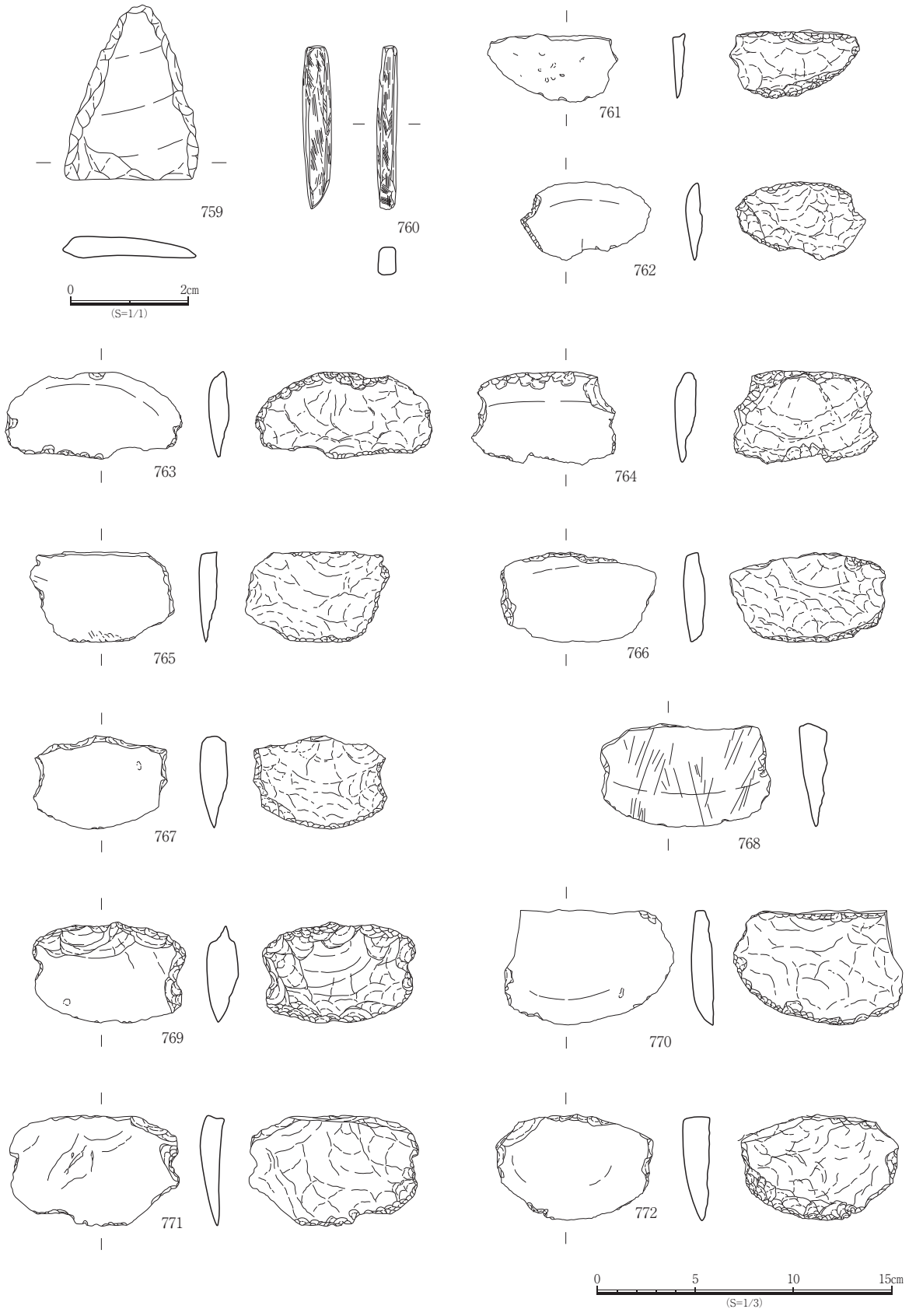


図2－105　第Ⅳ層出土遺物実測図11

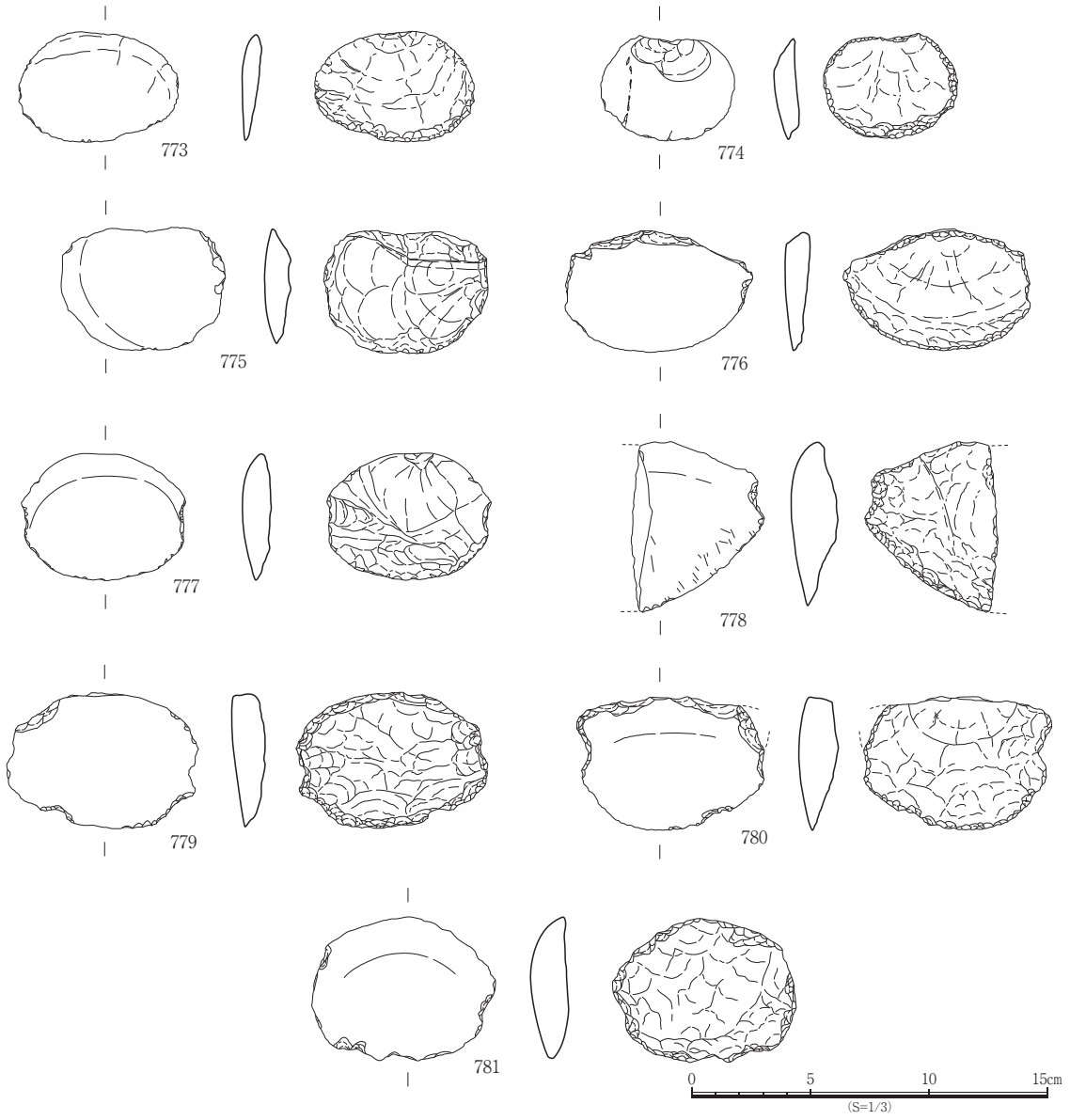


図2－106　第Ⅳ層出土遺物実測図12

調整は不明瞭であるが，内面には回転ナデ調整，外面にタタキ目が残る。728は転用硯と考えられるもので，器面には回転ナデ調整がみられ，内面に墨痕が認められる。

土師質土器（図2－102　729･730）

729・730は杯の底部破片で，器面に回転ナデを施し，底部切り離しは回転糸切りである。

磁器（図2－102　731）

731は碗の底部破片である。削り出し高台で，外面下部と高台は露胎である。器面には透明釉を施す。

瓦（図2－102　732～735）

732は丸瓦である。玉縁部が残存し，凹面には明瞭な布目圧痕，凸面には丁寧なヘラケズリ調整が認められる。733～735は平瓦である。733は凹面にヘラナデ，凸面に縄目状のタタキ目がみられる。734は凹面に布目圧痕，凸面にナデ調整がみられる。735は凹面にヘラケズリ調整，凸面に縄目状のタタキ目がみられる。

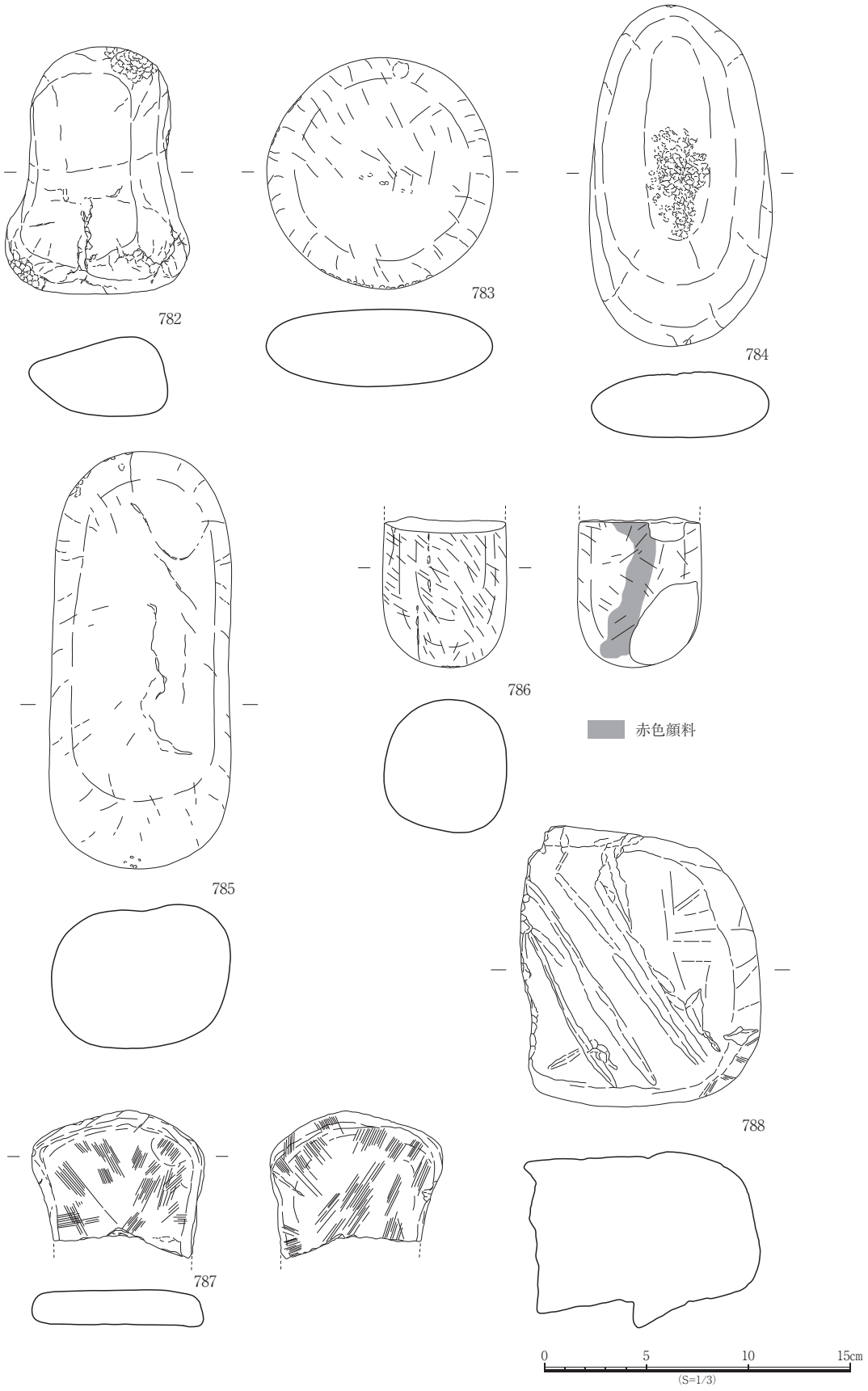


図2－107　第Ⅳ層出土遺物実測図13

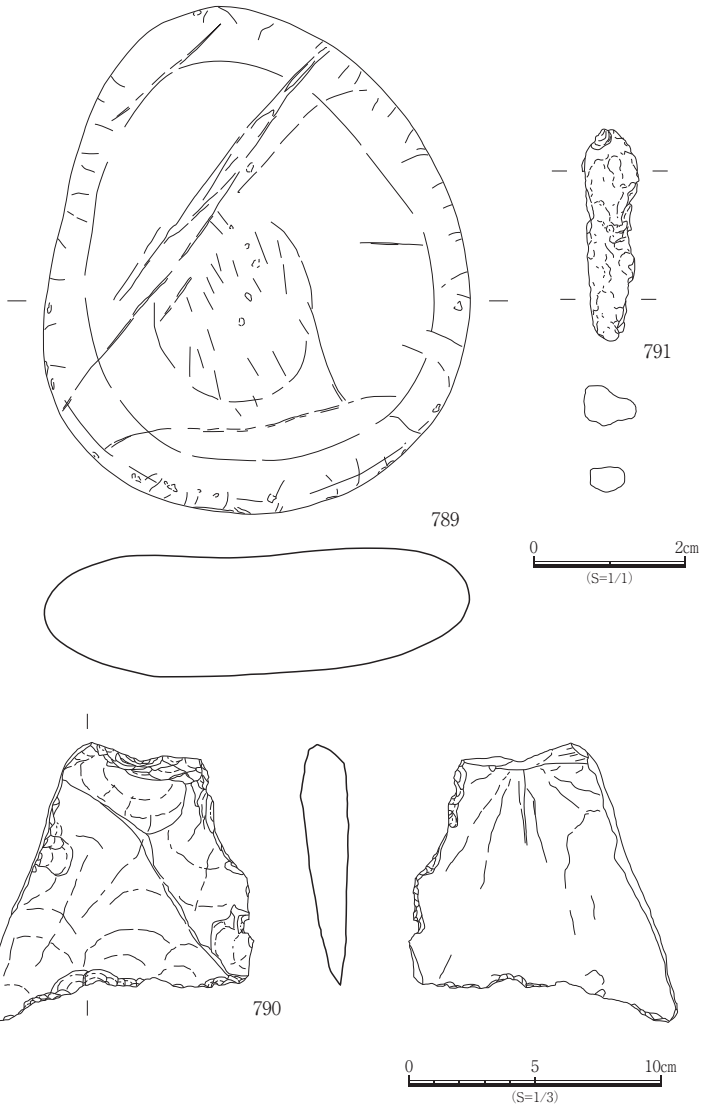


図２－108　第Ⅳ層出土遺物実測図14

土製品（図2－103･104　736～758）

736 ～ 741 は支脚である。736 ～ 739 は指を有するもので，736 ～ 738 は中空である。736 は外面にタタキを施し，脚部上端に穿孔が認められる。737 は指部を欠損し，表面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。738 は表面にタタキのちナデを施す。内面に絞り目がみられ，脚部上端に穿孔が認められる。739 は中実で，ほぼ完存する。表面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。740 は受部を有するものである。中空で，表面にはタタキ目とナデ調整がみられる。741 は脚部破片で，中空である。表面にはタタキを施す。742 は断面台形を呈するもので，中空である。ほぼ完存し，表面には指頭圧痕とナデ調整がみられる。743～756 は支脚もしくは土錘と考えられるもので，中央に穿孔がみられる。743 は表面にタタキ目とナデ調整がみられ，上端部に被熱痕が認められる。744 は表面にナデ調整と指頭圧痕がみられ，横断面は五角形を呈する。745・746 は表面にタタキ目とナデ調整がみられ，横側に被熱痕が認められる。747 は表面にナデ調整がみられ，横断面は五角形を呈する。748・749 は表面にナデ調整と指頭圧痕がみられる。横断面は多角形を呈し，748 は部分的に被熱痕が認められる。750 は表面にタタキのちナデを施し，上端部にはタタキ目が残る。部分的に被熱痕が認められる。751 は表面にタタキのちナデとヘラナデを施し，横断面は五角形を呈する。側面と上面に被熱痕がみられる。752・753 は表面にはタタキとナデを施し，753 は部分的に被熱痕がみられる。754 は表面にナデとヘラナデを施す。横側の一部が面をなし，被熱痕がみられる。755 は表面にナデを施し，横断面は五角形を呈する。756 は表面にタタキのちナデを施し，横断面は多角形を呈する。757 は土錘で，完存する。表面にはヘラケズリを施し，明瞭な面を作り出す。758 は盤である。平面形は方形を呈し，中央に穿孔が認められる。

石製品（図2－105～108　759～790）

759 は鏃である。平基式と考えられ，石材はサヌカイトである。760 は扁平片刃石斧である。表面を丁寧に磨き，成形する。刃部には使用痕がみられ，石材は蛇紋岩と考えられる。761 ～ 781 は石庖丁で，石材は761～770，772～781が砂岩，771が泥岩である。761･763･772･775～777･779は両端に弱い抉り，

762・766は片側に弱い抉り，764・767～769・771・780は両側に明瞭な抉り，765・770・773・774・781は両側に抉りが認められず，未成品の可能性が考えられる。778は片側を欠損し，もう一方の片側に抉りがみられる。782～785は叩石で，石材は全て砂岩である。782は両端の頂部に敲打痕がみられる。783は側面の一部に弱い敲打痕がみらる。784は両端と両面に敲打痕がみられる。785は両端に弱い敲打痕がみられ，片側には赤色顔料が付着する。786は磨石である。全面に使用痕がみられ，一部に赤色顔料が付着する。石材は細粒砂岩である。787・788は砥石である。787は両面に使用痕がみられ，石材は細粒砂岩である。788は有溝砥石と考えられるもので，4条の溝が認められる。石材は砂岩である。789は台石と考えられるもので，片面に弱い使用痕がみられる。石材は砂岩である。790は母材と考えられるもので，石材はサヌカイトである。

金属製品（図2－108　791）

791は鉄製の鉇と考えられるもので，錆膨れのため，詳細な形状は不明である。

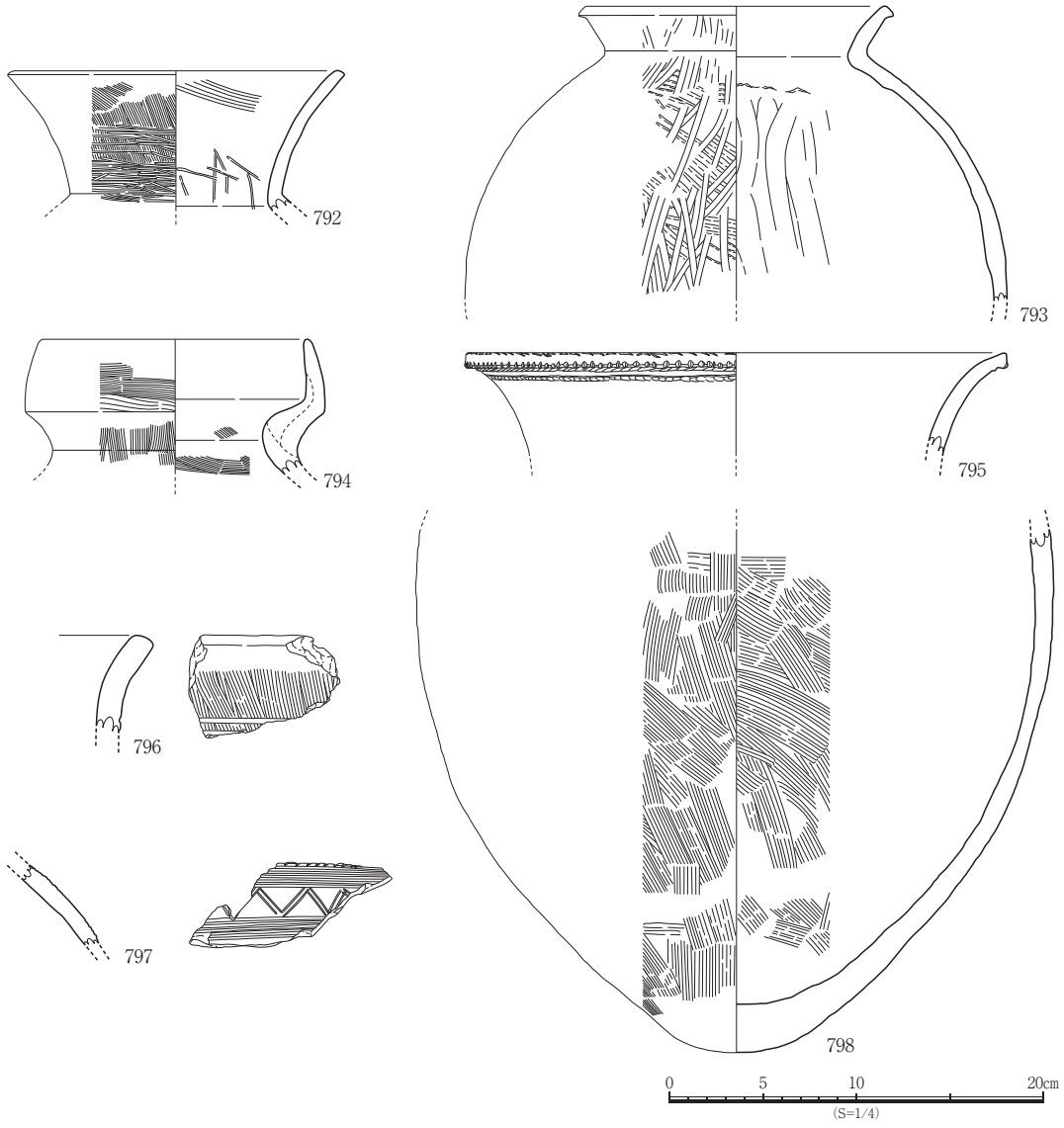


図2－109　第Ⅴ層出土遺物実測図1

v 第Ⅴ層出土遺物

弥生土器（図2－109～111　792～837）

792～798は壷である。792は口縁部破片で，内面全体にヨコナデ，外面全体にハケを施し，内面にはハケ調整とヘラミガキ調整，外面にはヘラミガキ調整を加える。793は口縁部が短く立ち上がるもので，胴部内面にナデ，口縁部外面にハケのちヨコナデ，胴部外面にタタキのちヘラミガキを施す。794は複合口縁壷で，搬入品と考えられる。口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にはハケとナデ，外面全体にハケを施し，頸部外面にはヨコナデ調整を加える。795は内面にヨコナデ，外面にナデを施し，口縁端部外側に微隆起突帯を貼付する。796は口縁部破片で，口縁端部内面にヨコナデ，口縁部内面にナデ，外面全体にハケを施し，外面には2条の沈線を配する。797は胴部破片で，器面にはナデを施す。外面には多重沈線と複線山形文を配する。798は胴部から底部にかけての破片で，内面にハケ，外面にタタキのちハケを施す。799～806は甕である。799･800は全体の形状が復元できたものである。799は長胴形を呈し，内面は口縁部にハケ，胴部にハケのちヘラナデ，外面はタタキのちハケを施す。800は胴部が球形を呈し，口縁部内外面に指オサエ，胴部内面に指ナデとヘラナデ，外面全体にタタキを施す。801～803は口縁部から胴部にかけての破片である。801は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケを施す。802は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施す。803は口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキを施す。口縁部外面にはハケ調整を加え，一部に煤が付着する。804～806は胴部から底部にかけての破片である。804は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，胴中央部外面には煤が付着する。805は内面にヘラナデ，

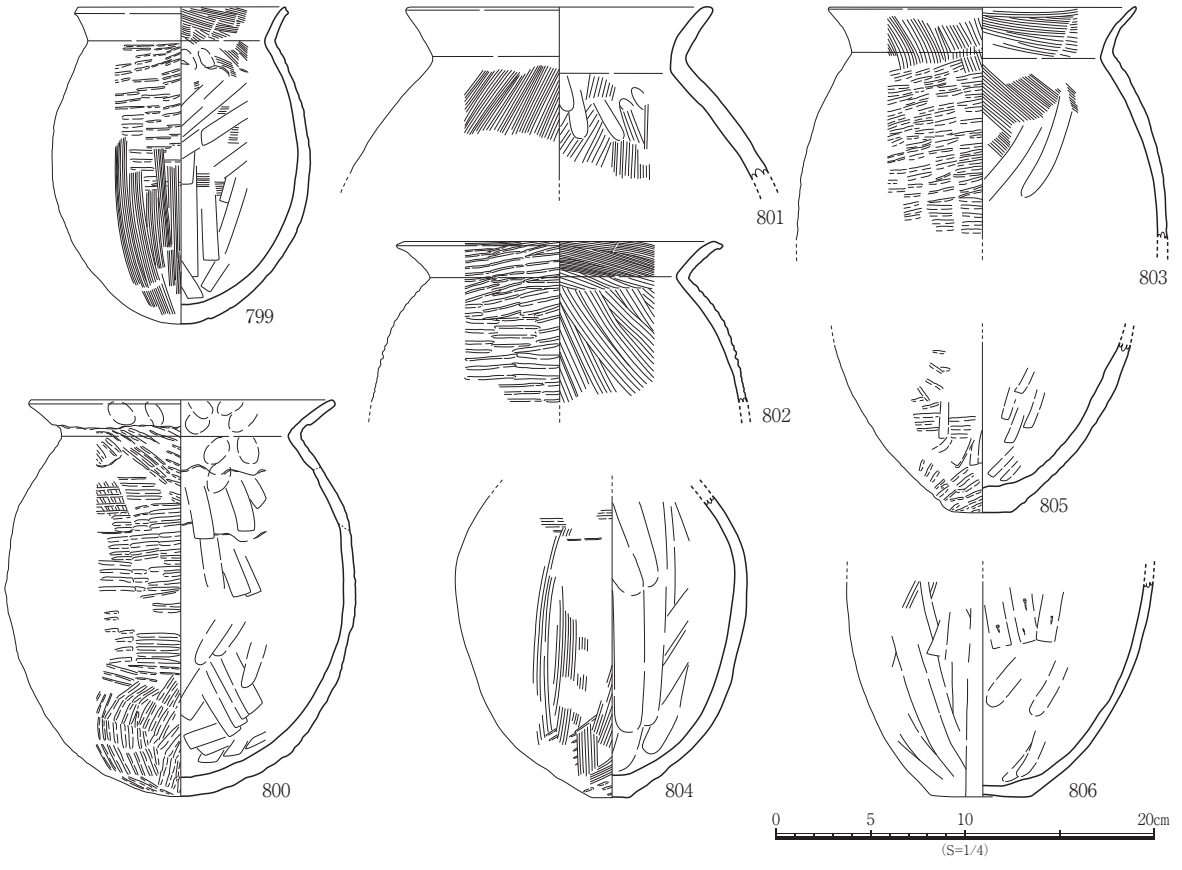


図2－110　第Ⅴ層出土遺物実測図2

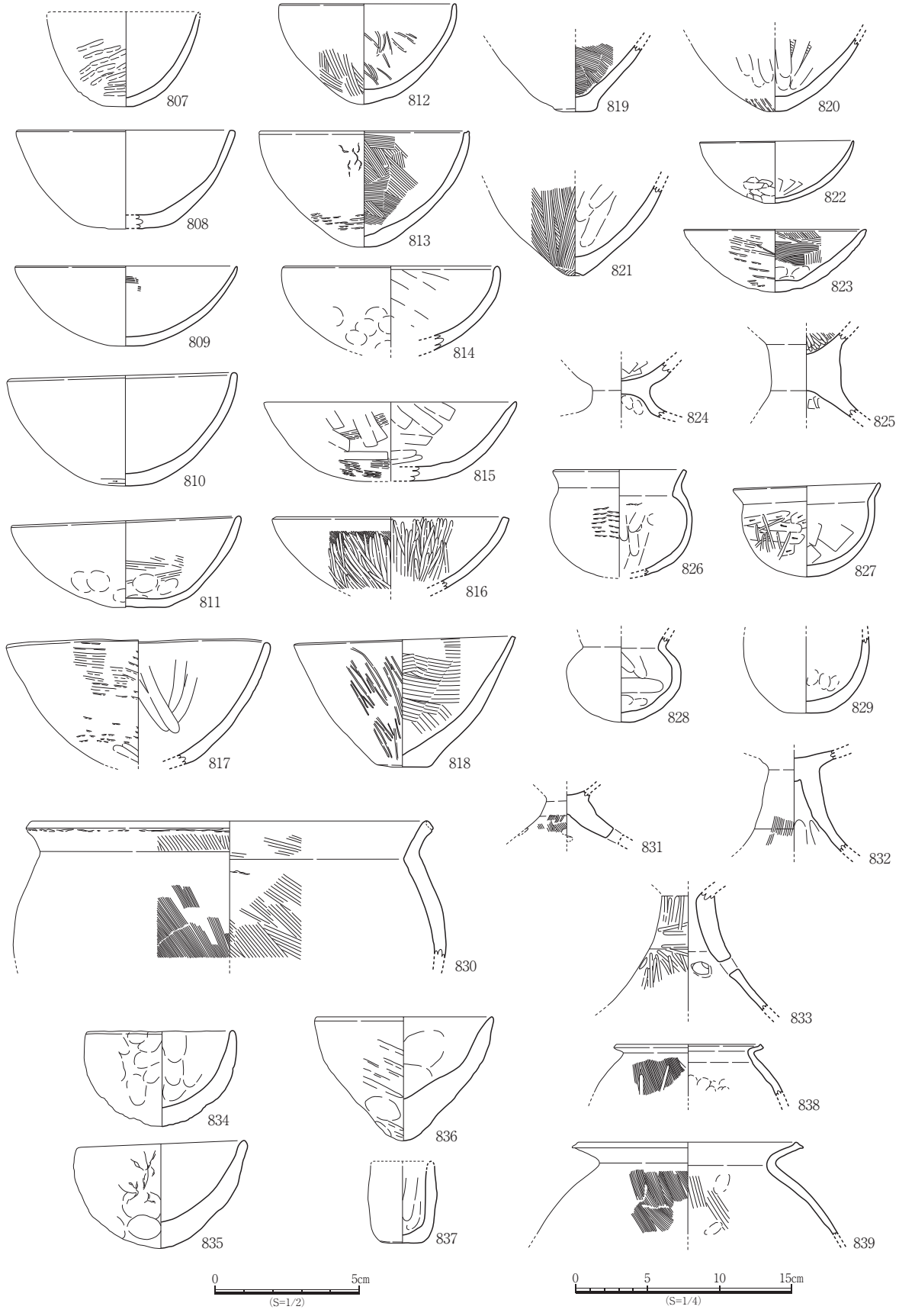


図2－111　第Ⅴ層出土遺物実測図3

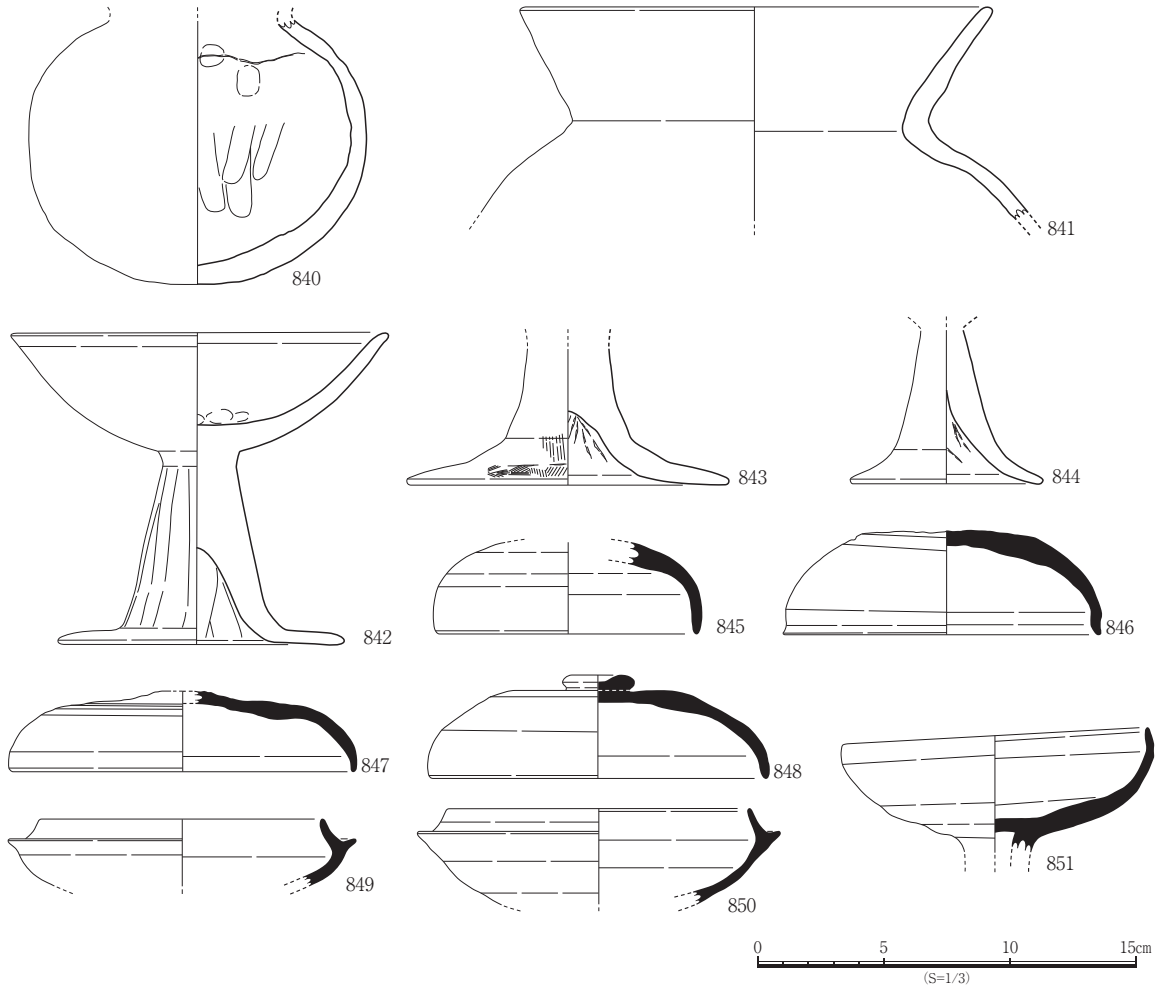


図2－112　第Ⅴ層出土遺物実測図4

外面にタタキのちヘラナデを施す。806は搬入品の可能性が考えられるもので，内面は胴中央部にヘラケズリ，胴下半部にナデ，外面はハケのちヘラナデを施し，外面全体に煤が付着する。807～830は鉢である。807～811は平底を呈し，体部が内湾気味に立ち上がるものである。807は摩耗のため調整は不明瞭であるが，外面にタタキ目が残る。808は手づくね成形で，口縁端部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデを施す。809は摩耗のため調整は不明瞭であるが，口縁部内面にハケ調整が残る。810は口縁端部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデを施し，底部外面にはヘラケズリ調整が認められる。811は手づくね成形で，口縁部内面にヨコナデ，体部内面にハケと指オサエ，口縁部外面にナデとヨコナデ，体部外面に指オサエとナデを施す。812・813は尖底もしくは丸底を呈し，体部が内湾気味に立ち上がるものである。812は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデのちヘラミガキ，体部外面にハケを施す。813は手づくね成形で，内面全体にハケ，外面全体にタタキのちナデを施す。814～817は底部を欠損し，体部が内湾気味に立ち上がるものである。814は内面全体にハケ，口縁部外面にヨコナデ，体部外面にナデと指オサエを施す。815は手づくね成形で，口縁部から体部の内面にヘラナデ，底部内面に指ナデ，外面全体にタタキのちヘラナデを施す。816は器面にハケを施し，口縁端部外面にヨコナデ調整，その他の部位にヘラミガキ調整を加える。817は手づくね成形で，内面全体にナデ，外面全体にタタキのちナデを施す。818～821は体部が直線気味に立ち上がると考えら

れるもので，818は手づくね成形で，内面全体にハケ，外面全体にナデのち粗いヘラナデを施す。819～821は口縁部を欠損するもので，819は内面にハケ，外面にナデを施す。820は手づくね成形で，内面にハケのちナデ，外面にタタキのちナデを施す。821は内面全体にナデ，外面全体にハケを施す。822・823は皿状を呈するもので，822は口縁部内外面にヨコナデ，底部内面にヘラナデ，底部外面にヘラケズリを施す。823は内面にハケ，外面にタタキを施す。824・825は脚付きと考えられるものである。824は鉢底部内面にヘラナデ，脚部内面に指オサエとナデ，外面全体にナデを施す。825は鉢底部内面にヘラミガキ，脚部内面にヘラナデ，外面全体にナデを施す。826～830は口縁部が屈曲して立ち上がると考えられるものである。826

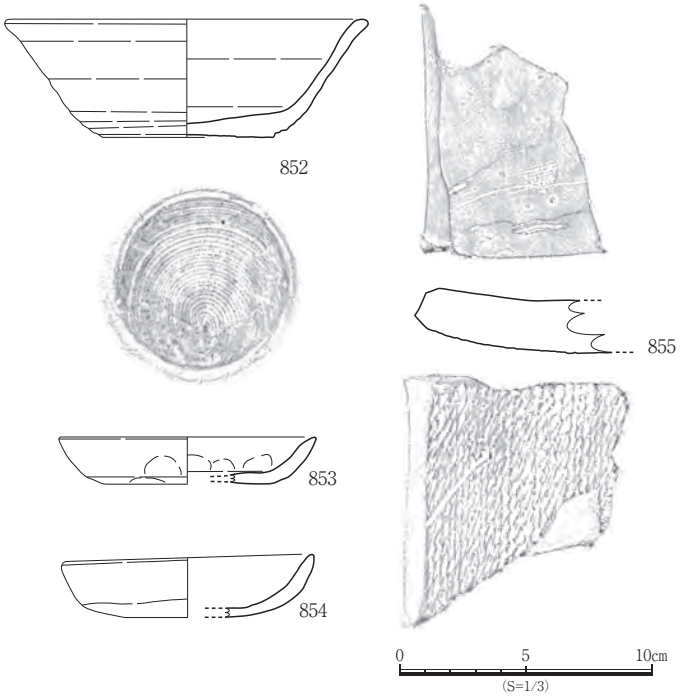


図2－113　第Ⅴ層出土遺物実測図5

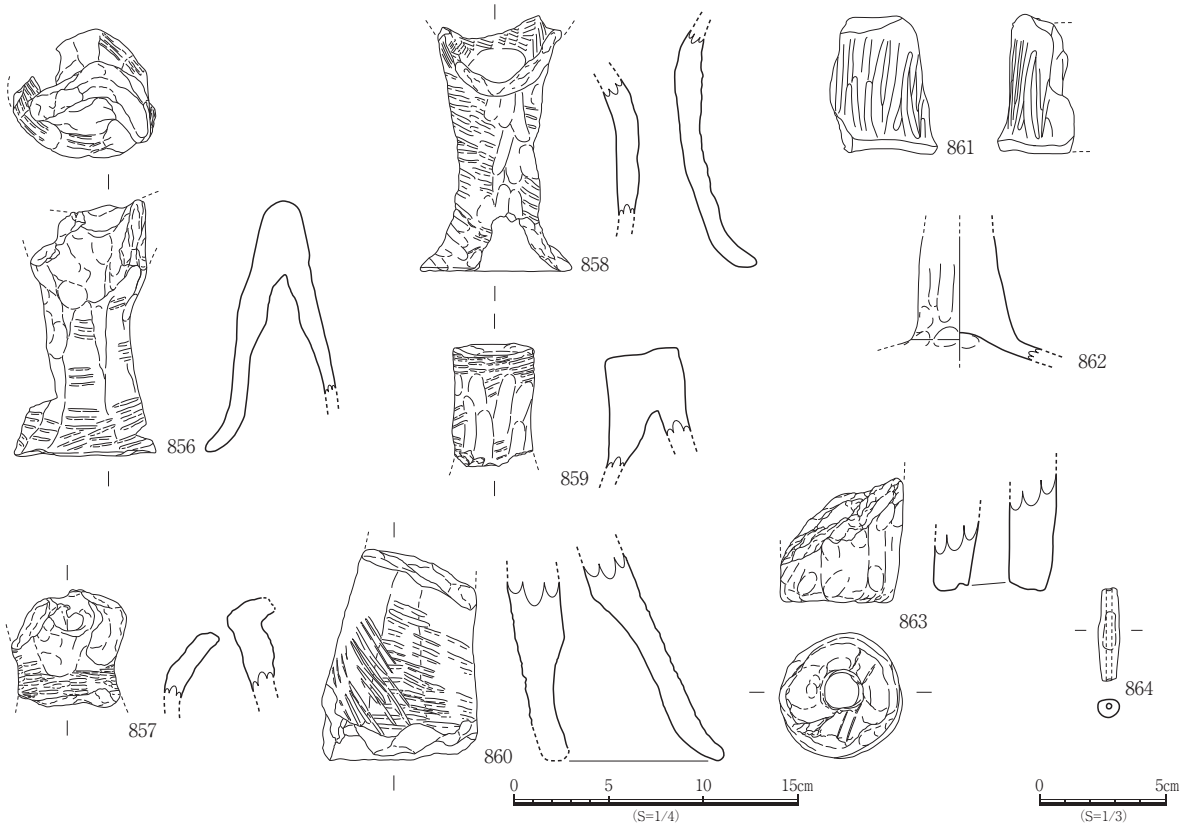


図2－114　第Ⅴ層出土遺物実測図6

は口縁部内面にナデ，体部内面にナデと指オサエ，外面全体にタタキのちヨコナデを施す。827 は搬入品の可能性が考えられるもので，口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面にヘラケズリのちヘラミガキを施す。828 は口縁部を欠損し，胴上端部外面にヨコナデ，その他の部位にナデを施す。829 は底部破片で，内面に指オサエとナデ，外面にナデを施す。830 は大型の鉢と考えられるもので，内面全体にハケ，口縁部外面にハケ，体部外面にタタキのちハケを施す。831 ～ 833 は高杯の脚部破片である。831・832 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，831 は外面にハケ調整，832 は内面にナデ調整，外面にハケ調整が残る。833 は搬入品と考えられるもので，内面にナデ，外面にヘラミガキを施す。834 ～ 837 はミニチュア土器で，全て手づくね成形である。834 ～ 836 は鉢状を呈するもので，834 は内外面に指オサエとナデを施す。835 は内面にナデ，外面に指オサエを施す。836 は尖底を呈し，内面に指オサエとナデ，外面にタタキのち指オサエとナデを施す。837 はコップ状を呈するもので，内面にナデ，外面に指オサエを施す。

東阿波型土器（図2－111　838･839）

838・839 は甕である。838 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケのちヘラミガキを施す。839 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケを施し，口縁部外面には煤が付着する。

土師器（図2－112　840～844）

840 は壷と考えられるもので，口縁部を欠損する。内面は上端部にナデと指オサエ，下半部にナデ，外面全体にナデを施す。841 は甕と考えられるもので，調整は摩耗のため不明である。842 ～ 844 は高杯である。842 は全体の形状が復元できたもので，杯口縁部と脚裾部の内外面にヨコナデ，杯体部内外面と脚部内面にナデ，脚柱部外面にヘラナデを施す。843・844 は脚柱部破片である。843 は脚柱部外面にナデ，脚裾部外面にハケ，脚端部内外面と脚裾部内面にヨコナデを施す。844 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面には絞り目がみられる。

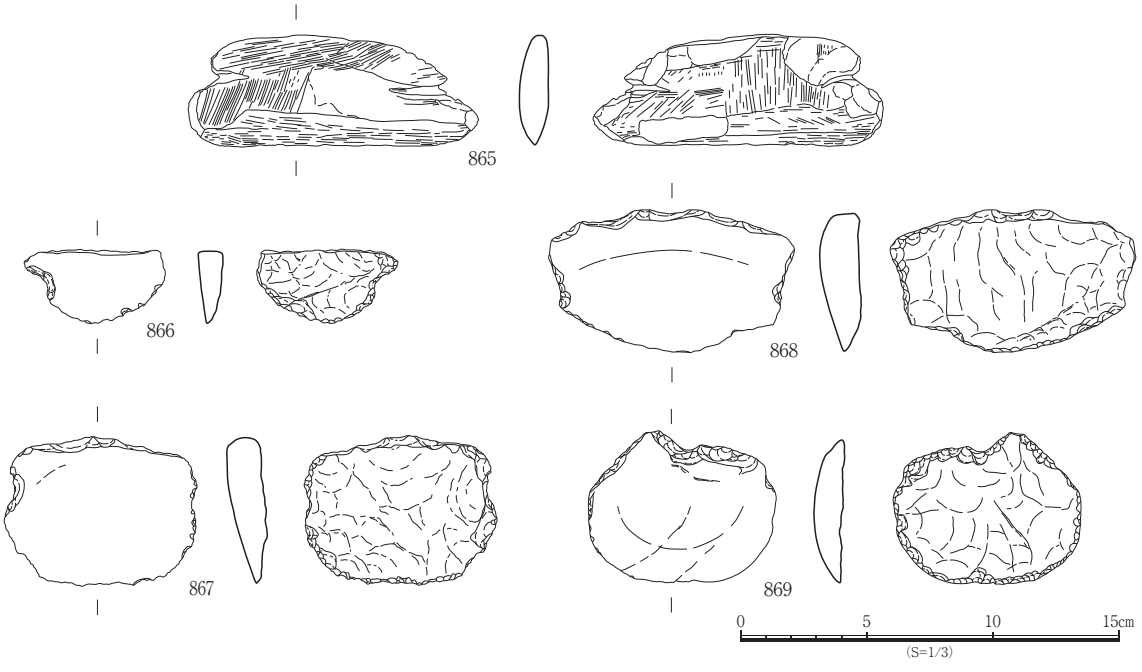


図2－115　第Ⅴ層出土遺物実測図7

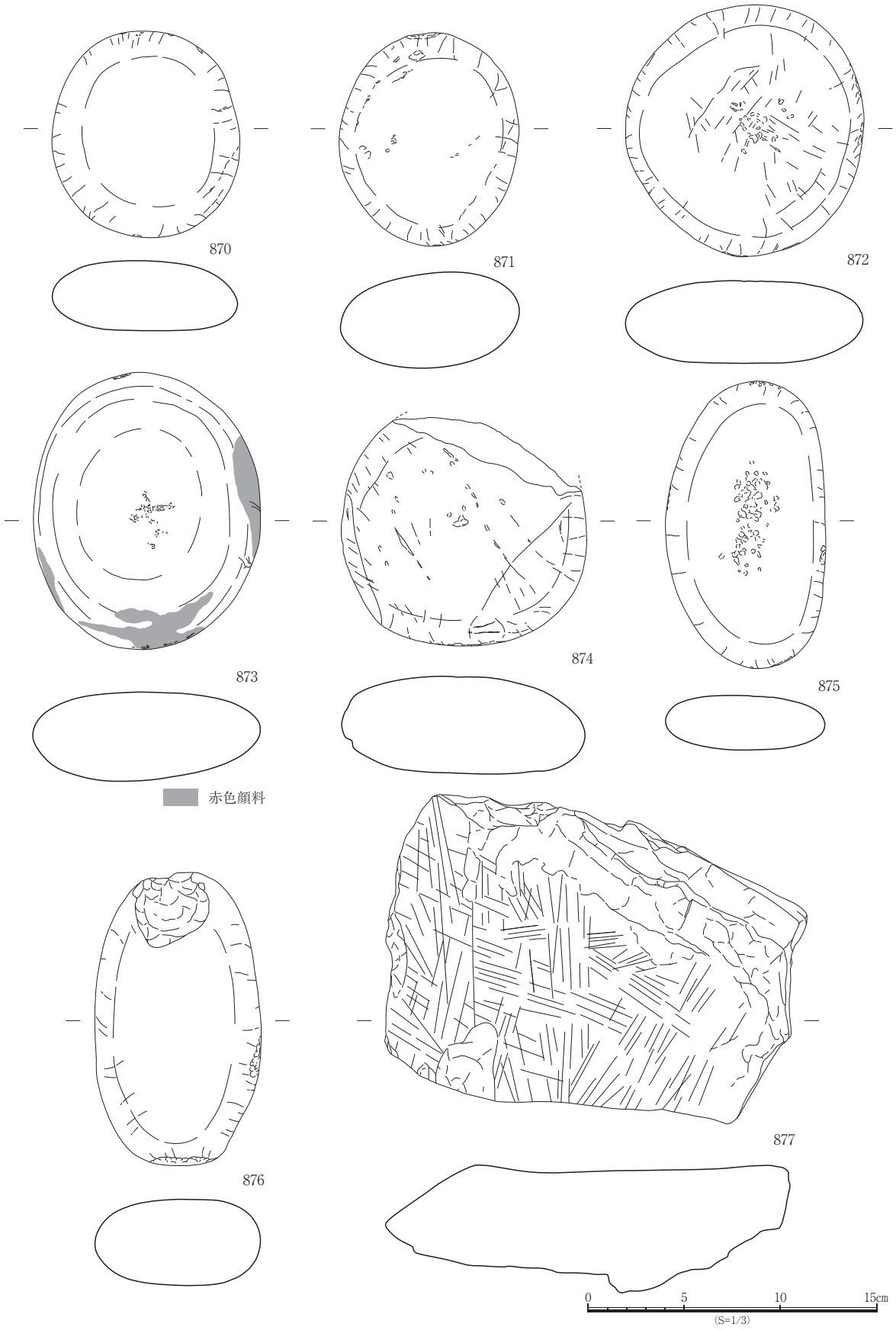


図2－116　第Ⅴ層出土遺物実測図8

須恵器（図2－112　845～851）

845～848は杯蓋である。845は天井部を欠損し，器面には回転ナデを施す。846は天井部外面下端にヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を加える。847は天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，天井部内面にはナデ調整を加える。848はボタン状の摘みを有するものである。天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデを施し，天井部内面にはナデ調整を加える。849・850は杯身で，底部を欠損し，器面には回転ナデを施す。851は高杯である。器面には回転ナデを施し，杯底部内面にはナデ調整を施す。

土師質土器（図2－113　852～854）

852は杯である。器面には回転ナデを施し，底部切り離しは回転糸切りである。853・854は手づくね成形の皿である。853は口縁部内外面にヨコナデ，底部内外面に指オサエを施す。854は口縁部内外面にヨコナデ，底部内外面にナデを施す。

瓦（図2－113　855）

855は平瓦である。凹面に丁寧なヘラケズリ調整，凸面に縄目状のタタキ目がみられる。

土製品（図2－114　856～864）

856～863は支脚で，856～861は中空である。856・857は指を有するもので，856は指部と脚の一部を欠損し，表面にはタタキ目が認められる。857は指部と脚部を欠損し，表面にはタタキのちナデを施す。858は受部を有するもので，受部内面にハケ，外面にタタキのちナデを施す。859は上端に平坦な面を有するもので，脚部を欠損し，表面にはタタキのち丁寧なナデを施す。860・861は脚部破片で，860は内面にナデ，外面にタタキを施す。861は外面に丁寧なヘラミガキ調整が認められる。862は中実の脚部破片で，内外面に指オサエとナデを施す。863は支脚もしくは土錘と考えられるもので，約1/2を欠損する。調整は指オサエとナデである。864は土錘である。完存し，表面には指頭圧痕がみられる。

石製品（図2－115･116　865～877）

865～869は石庖丁で，865は磨製で石材は片岩，866～869が打製で石材は砂岩とみられる。865は両端に明瞭な抉りがみられ，刃部を丁寧に作り出す。866は片側に明瞭な抉り，867は両端に明瞭な抉り，868は両端に弱い抉り，869は片側に弱い抉りがみられる。870～876は叩石で，石材は全て砂岩である。870･871は片側に弱い敲打痕，872は両面と片側に弱い敲打痕がみられる。873は側面の一部に弱い敲打痕がみられ，部分的に赤色顔料が付着する。874は片面と側面の一部に弱い敲打痕，875は両端と片面に弱い敲打痕，876は片側端部と側面に明瞭な敲打痕がみられる。877は砥石である。片面と側面に使用痕がみられ，石材は片岩と考えられる。

ⅵ 第Ⅴ－１層

弥生土器（図2－117～119　878～915）

878～890は壷である。878は口縁部が緩やかに外反して立ち上がり，内面は口縁部にヨコナデ，頸部上半にハケ，頸部下半にナデ，外面全体にハケを施し，頸部には1条の沈線がみられる。879～881は広口壷の口縁部破片である。879は口縁端部内外面にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケのちヨコナデを施す。880は口縁端部内外面にヨコナデ，内面にハケ，外面にタタキのちハケを施す。881は内面にヨコナデ，外面にヨコナデのちヘラミガキを施す。882・883は胴部破片である。882は内外面にナデを施す。外面にはタテ方向の刻みを施す微隆起突帯を貼付し，下方に2条の沈線を配する。883は器面に

はナデを施す。外面には多重沈線と刺突文を配する。884 ～ 887 は胴部から底部にかけての破片である。884 は胴中央部内面にハケのちナデ，胴下半部にナデのち粗いヘラミガキ，外面全体にタタキを施し，胴中央部にはハケ調整，胴下半部にはハケ調整と粗いヘラミガキ調整を加える。885 は内外面にハケを施す。886 は胴上半部と下半部内面にナデ，胴中央部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキのちハケを施し，胴上半部外面には煤が付着する。887 は搬入品の可能性が考えられるもので，内面にナデ，外面にハケのちナデを施す。888 ～ 890 は底部破片である。888 は内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキを施す。889 は内外面にナデを施す。890 は内面にヘラナデ，外面にハケのちナデを施す。891 ～ 899 は甕である。891 は口縁端部を摘み出しにより拡張し，内面は口縁部にハケ，胴下半部にナデのちヘラミガキ，外面は口縁部にヘラミガキ，胴部にナデを施す。胴部外面には摘み出しによる 2 条の微

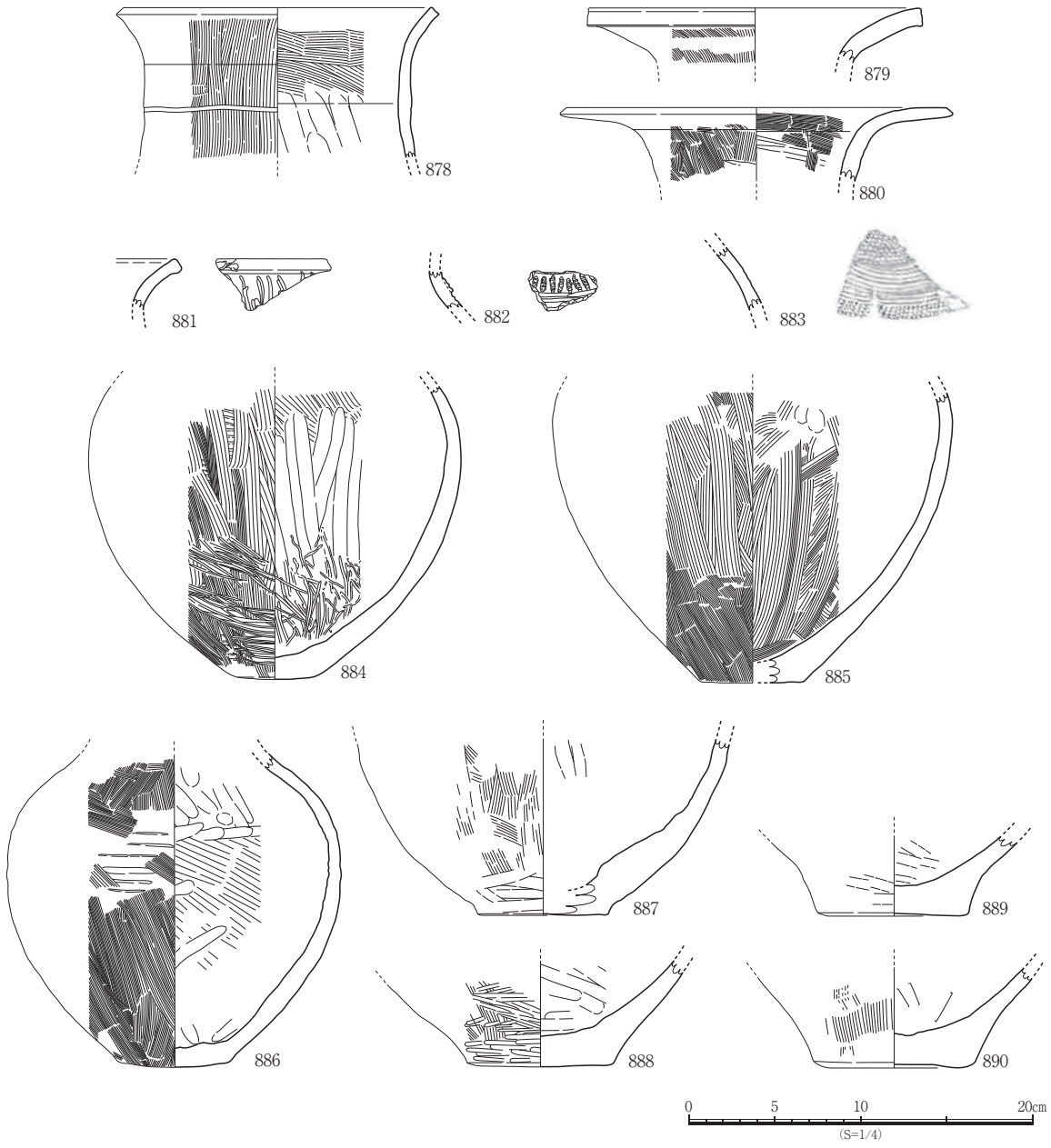


図2－117　第Ⅴ－1層出土遺物実測図1

隆起突帯がみられる。892は全体の形状が復元できたもので，口縁部内面と外面全体にハケ，胴上端部内面に指オサエとナデ，胴下半部内面にハケのちヘラケズリを施し，胴下半部外面にはナデ調整を加える。893 ～ 895 は口縁部から胴部にかけての破片である。893 は口縁部内面と外面全体にハケ，胴部内面にハケのちナデを施す。894は口縁部内外面にハケのちナデ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施し，外面全体に煤が付着する。895は口縁部と胴上端部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケを施し，胴部内面にはナデ調整とヘラナデ調整を加える。896 ～ 899 は胴部から底部にかけての破片である。896 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，胴部外面にハケ調整と指頭圧痕，底部外面にナデ調整がみられる。897は胴部内外面にナデ，底部外面にハケのちナデを施す。898は胴部内外面にナデ，胴部外面下端にヨコナデを施す。899 は内面にナデ，外面にタタキを施す。900 ～ 912は鉢である。900 ～ 905は体部が内湾して立ち上がるもので，900 ～ 904は平底を呈するものである。900 は体部内面に指ナデ，底部内面にヘラナデ，外面全体にタタキを施す。901 は内面全体にハケ，外面全体にタタキのちナデを施し，底部内面には指オサエによる凹みが認められる。902 は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，底部内面にはナデ調整，口縁部から体部外面にはハケ調整を加える。903は内外面にハケ調整，底部外面にタタキのちナデを施す。904は口縁部内外面にヨコナデ調整，体部外面にハケ調整，底部外面にナデ調整が認められる。905は丸底を呈するもので，体部内外面にハケ調整，底部内面にナデ調整が認められる。906 は尖底を呈するもので，内面全体にハケ，外面全体にナデを施し，内面下半にはナデ調整を加える。907 ～ 909 は脚付きのもので，摘み出し成形による脚部を有する。907 は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施す。908・909 は口縁部を欠損し，908 は内外面にナデを施す。909 は内面にハケ，外面にヘラナデを施す。910 ～ 912 は口縁部が屈曲するもので，910・

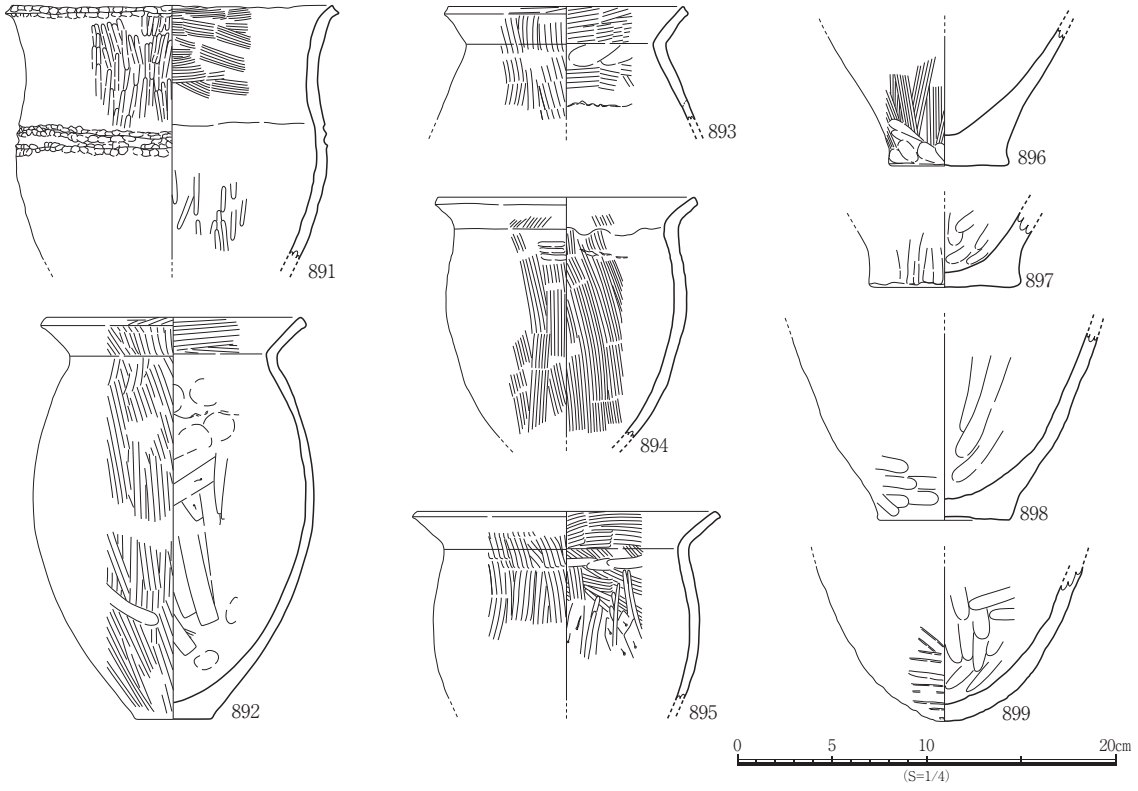


図2－118　第Ⅴ－1層出土遺物実測図2

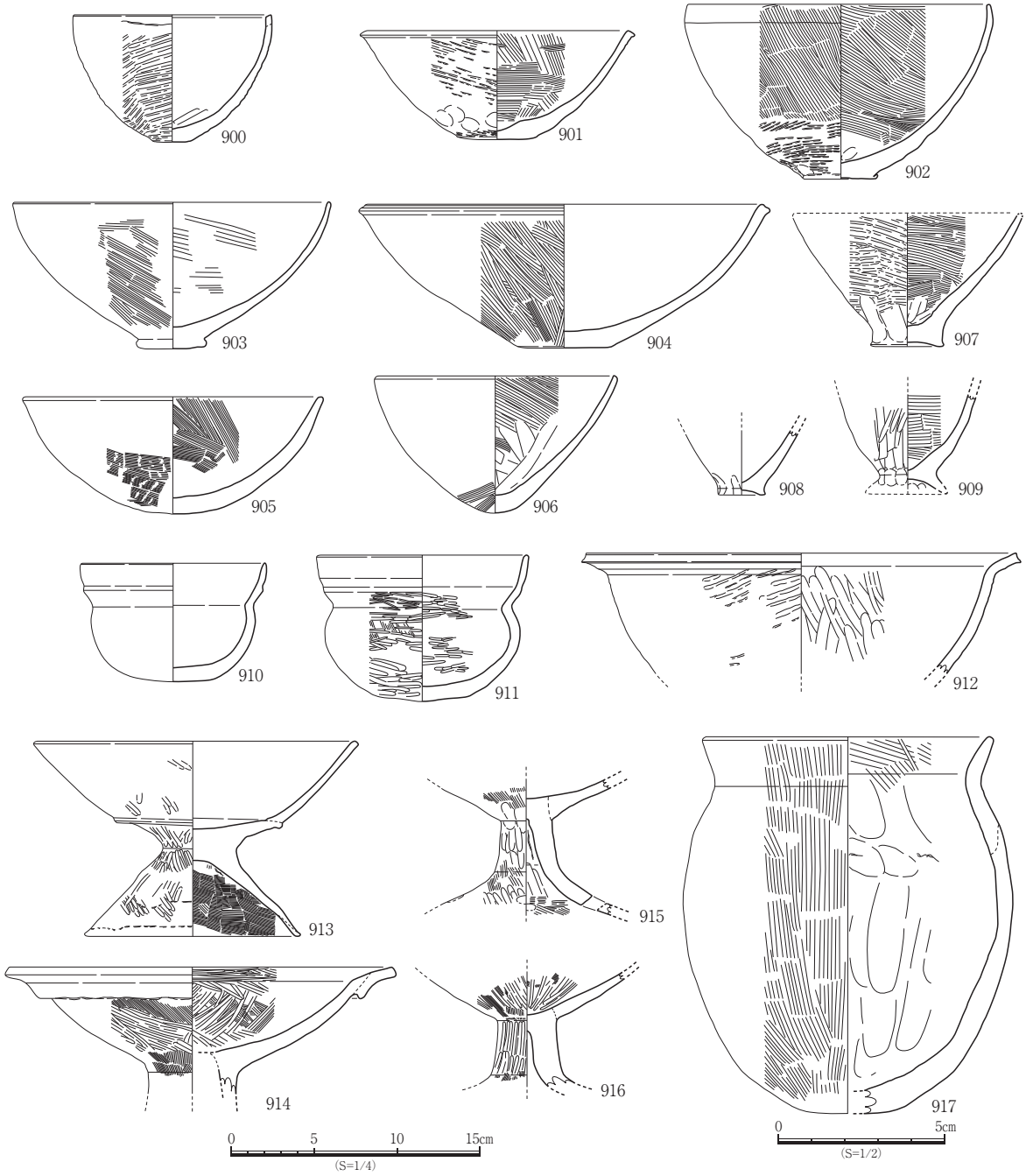


図2－119　第Ⅴ－1層出土遺物実測図3

911 は口縁部に段を有する。910 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデを施す。911 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にハケを施し，内外面に粗いヘラミガキ調整を加える。912 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデを施す。913 ～ 916 は高杯である。913 は全体の形状が復元できたものである。摩耗のため調整は不明瞭であるが，杯口縁端部内外面にヨコナデ，杯体部外面にヘラミガキ，脚内外面にハケを施し，脚部外面にはヘラミガキ調整を加える。914 は杯部破片で，口縁端部に粘土帯を貼付する。口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケを施し，内面全体と体部外面には粗いヘラミガキ調整を加える。915 は杯部から脚部にかけての

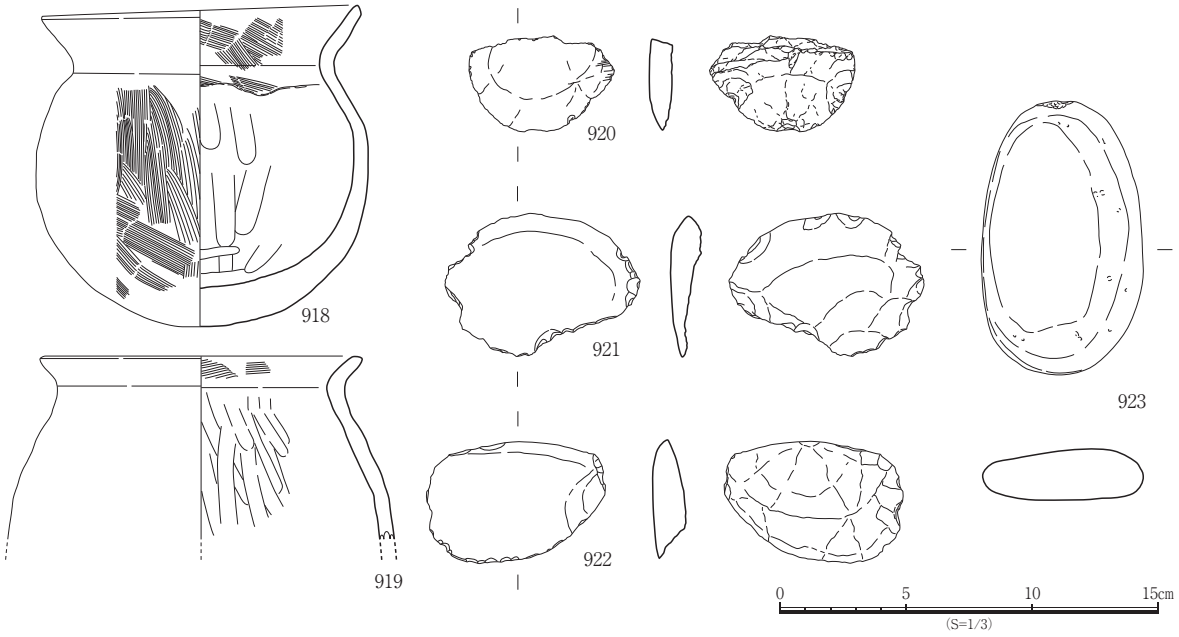


図2－120　第Ⅴ－1層出土遺物実測図4

破片で，杯部内面にナデ，杯部外面にハケのちナデ，脚柱部内面にハケのちナデ，脚柱部外面にハケのちヘラミガキを施す。916は外面全体にハケのちヘラミガキ，脚柱部内面にナデを施す。917はミニチュア土器と考えられるもので，口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面全体にタタキのちハケを施す。

土師器（図2－120　918･919）

918・919は甕である。918はほぼ完存し，内面は口縁部にハケ，胴部にナデ，外面は口縁部にヨコナデ，胴部にハケを施す，胴部外面下半には煤が付着する。919 は口縁部内面にハケ，その他の部位にナデを施す。

石製品（図2－120　920～923）

920～922は石庖丁である。全て両端に弱い抉りがみられ，石材は920・922が砂岩，921が蛇紋岩である。923は叩石である。片側端部に弱い敲打痕がみられ，石材は蛇紋岩と考えられる。

ⅶ 第Ⅴ－2層

弥生土器（図2－121　924～937）

924 ～ 932 は壺である。924 は口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，胴部内外面にナデを施し，頸部には多重沈線がみられる。925～927は口縁部破片で，925 は内外面にハケを施し，外面にはヨコナデ調整を加える。926 は内面にヘラミガキ，外面にハケのちヨコナデを施し，外面には沈線と刺突文を配する。927は内面にハケとナデ，外面にハケを施す。928・929は頸部破片と考えられるもので，928は内面にナデ，外面にハケを施し，外面には多重沈線と微隆起突帯がみられる。929は内外面にナデを施し，外面には波状文がみられる。930は胴部破片で，内面にナデ，外面にハケのちナデを施し，外面には多重沈線の間を垂直の沈線で仕切り，上下弦の弧文を配する。931・932は底部破片である。931は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施す。932は内面にナデ，外面にハケを施す。933・934は甕である。933は口縁部を欠損し，内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，胴部上半には煤が付着する。934 は内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケを施し，胴中央部外面には煤が付着する。935～937は鉢である。935はほぼ完存し，口縁端部内外面

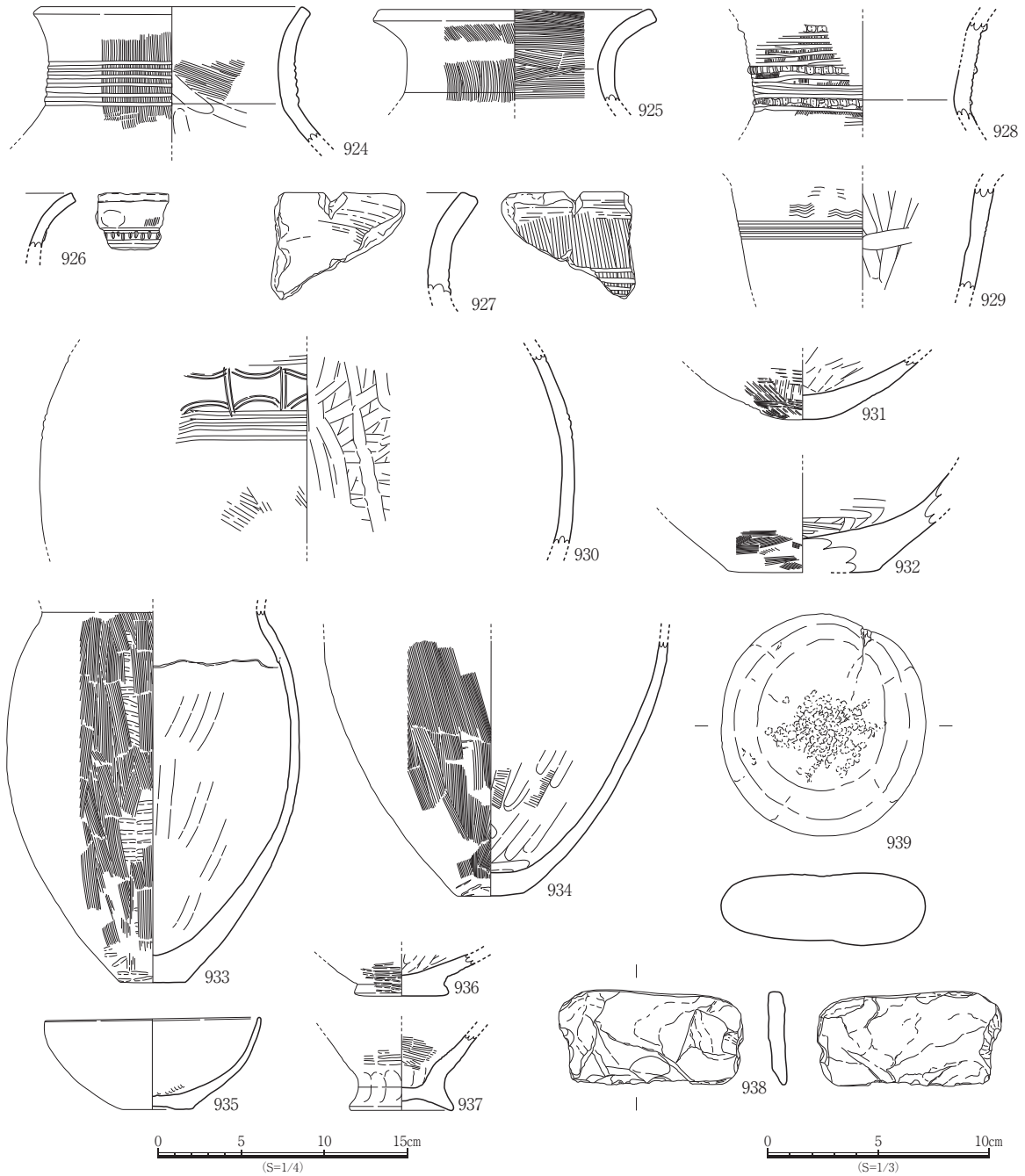


図2－121　第Ⅴ－2層出土遺物実測図

にヨコナデ，体部内面にハケのちナデを施す。936は底部破片で，内面にナデ，外面にタタキを施す。937は脚付きのもので，脚部は摘み出しにより成形される。調整は内面にハケ，外面にタタキを施す。

石製品(図2－121　938･939)

938は石庖丁である。両端に弱い抉りがみられ，石材は粘板岩である。939は叩石である。両面に明瞭な敲打痕がみられ，石材は粗粒砂岩である。

viii 第Ⅴ－3層

弥生土器(図2－122　940～950)

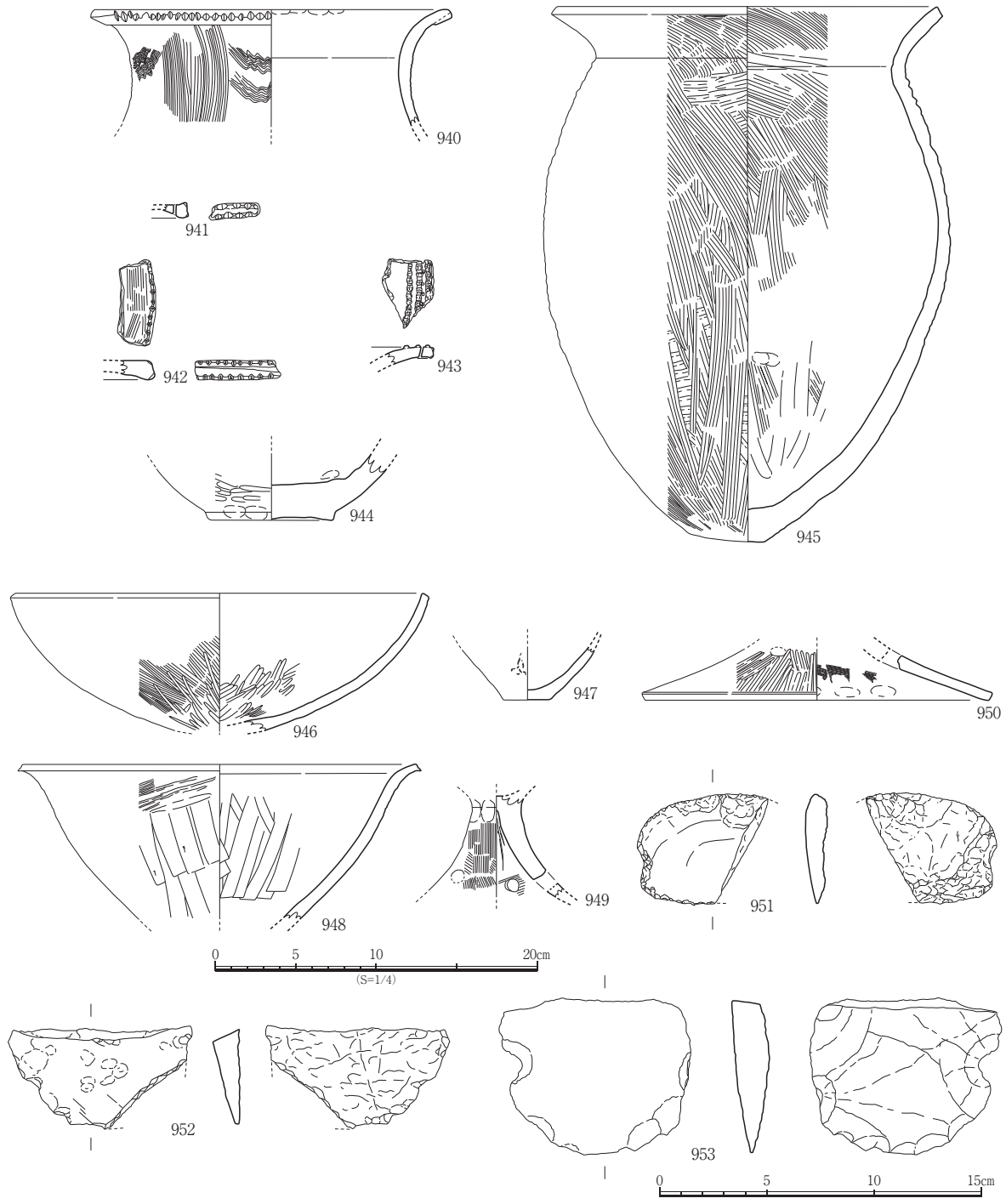


図2－122　第Ⅴ－3層出土遺物実測図

940～944は壷である。940は口縁端部に粘土帯を貼付し，口縁端部内外面に指オサエのちヨコナデ，頸部内外面にヨコナデを施す。口縁端部には刻目，頸部外面には簾状の沈線間に2列の波状文を配する。941～943は口縁部破片である。941は器面にナデを施し，端部の上下に刻みと穿孔がみられる。942は内面にハケ，外面に指オサエを施し，端部の上下にハケ原体による刻目がみられる。943は内面に微隆起突帯を貼付し，端部の上下に刻みを施す。調整は外面にハケがみられる。944は底部破片で，内面にナデと指オサエ，外面にナデのちヘラミガキを施す。945は甕で，口縁部内外面と胴部内

面にハケ，胴部外面全体にタタキのちハケを施し，胴部内面下半にはナデ調整を加える。946 ～ 948は鉢である。946 は摩耗のため調整は不明瞭であるが，内面にヘラミガキ，外面にハケのちヘラミガキを施す。947は手づくね成形で，内外面にナデを施す。948は口縁部が屈曲するもので，口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面上端にタタキ，体部外面上半より下にヘラケズリを施す。949・950 は高杯である。949 は脚柱部破片で，内外面にハケを施す。950 は脚裾部破片で，内面にハケとヨコナデ，外面にハケのちヘラミガキを施す。

石製品(図2－122　951～953)

951～953は石庖丁で，石材は全て砂岩である。951は約2/3が残存し，片側に明瞭な抉りがみられる。952は刃部を欠損し，片側に弱い抉りがみられる。953は両端に明瞭な抉りがみられる。

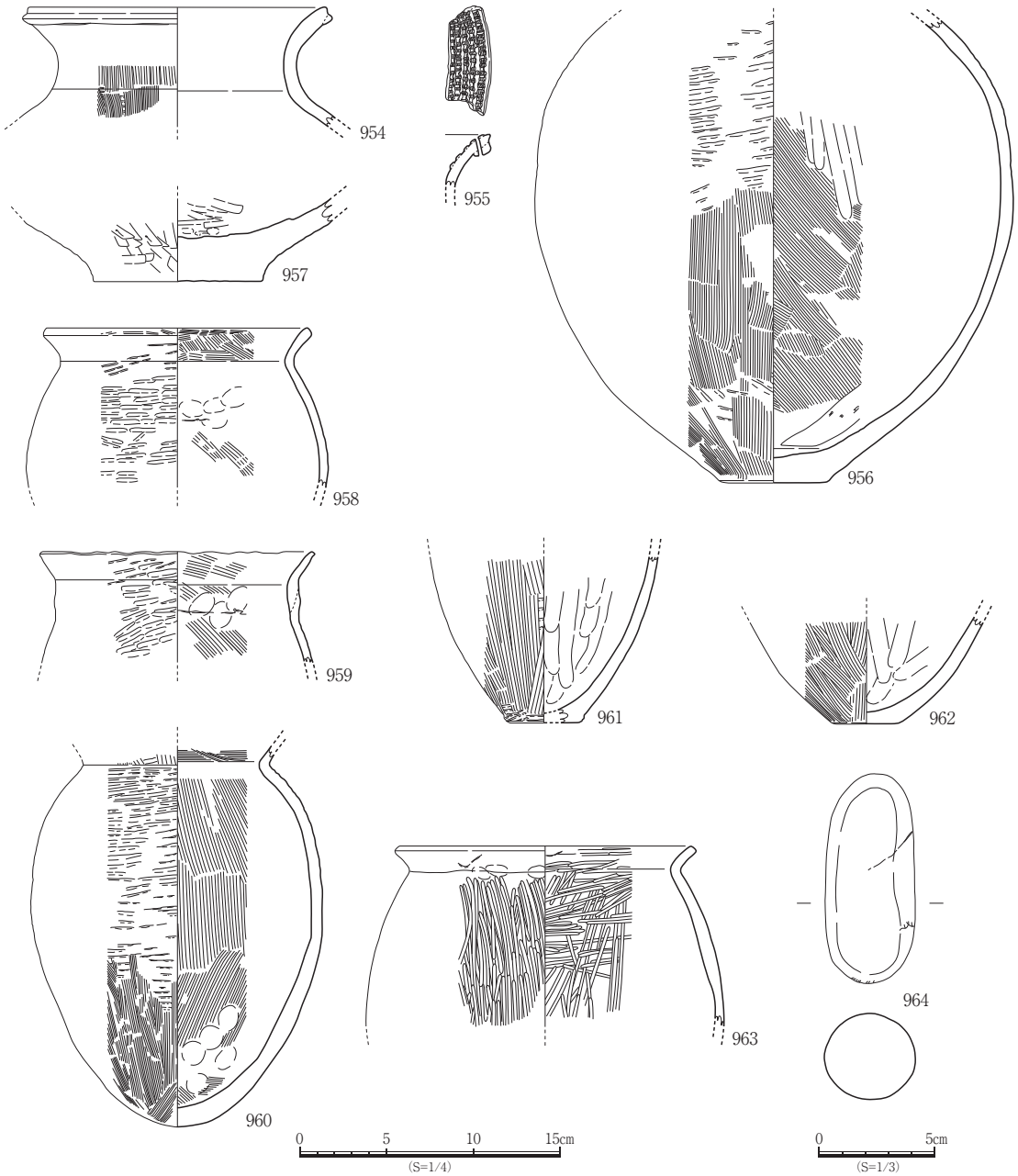


図2－123　第Ⅴ－4層出土遺物実測図

ix 第Ⅴ－4層

弥生土器(図2－123　954～963)

954～957は壷である。954は口縁部内外面にヨコナデ，頸部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケを施す。955は口縁部破片で，外面に粘土帯を貼付し，内面にハケ状原体による刻目を配した微隆起突帯と穿孔がみられる。956は口縁部を欠損し，内面全体はハケ，外面全体はタタキのちハケを施し，胴中央部内面にはナデ調整，胴下端部内面にはヘラケズリ調整を加える。957は底部破片で，内外面にヘラナデを施す。958～963は甕である。958・959は口縁部から胴部にかけての破片で，958は口縁部内面にハケ，胴部内面に指オサエとハケ，外面全体にタタキを施す。口縁部外面にはナデ調整

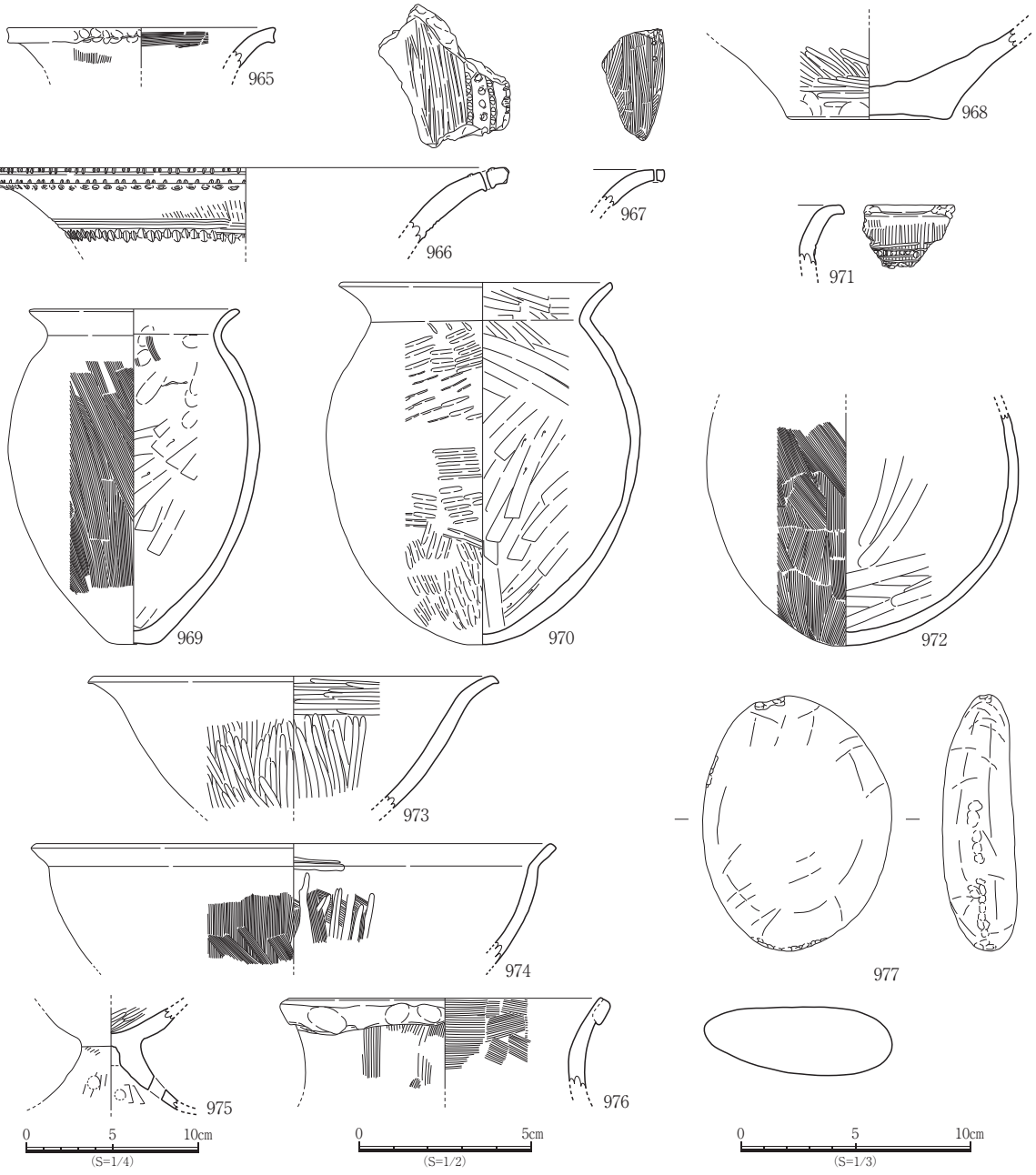


図2－124　第Ⅴ－5層出土遺物実測図

を加え，外面全体に煤が付着する。959 は内面全体にハケ，外面全体にタタキを施し，胴部内面上端には指頭圧痕が残る。960 は口縁部を欠損するもので，内面にハケ，外面にタタキを施す。外面下半にはハケ調整を加え，外面には煤が付着する。961 は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施す。962 は内面にナデ，外面にハケを施す。963 は讃岐からの搬入品と考えられるもので，内面全体と胴部外面にヘラミガキ，口縁部外面にヨコナデを施す。

石製品(図2－123　964)

964 は叩石で，両端に弱い敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

x 第Ⅴ－5層

弥生土器(図2－124　965～976)

965 ～ 968 は壷である。965 ～ 967 は口縁部破片で，965 は口縁端部を指オサエとヨコナデにより上下に拡張し，内外面にハケを施す。966 は内面にヘラミガキ，外面にハケのちナデを施し，外面には多重沈線と列点文，内面には微隆起突帯，端部の上下に刻目を配する。967 は端部に 2 孔の穿孔がみられ，内外面にはハケを施す。968 は底部破片で，外面にヘラミガキ調整がみられる。969 ～ 972 は甕である。969・970 は全体の形状が復元できたもので，969 は口縁部内外面にヨコナデ，胴上半部内面に指オサエのちナデとハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケを施し，外面全体に煤が付着する。970 は口縁部内面にハケ，胴上半部内面にハケのちナデ，胴下半部内面にヘラケズリ，外面全体にタタキを施し，胴上半部外面には煤が付着する。971 は口縁部破片で，内面にハケのちナデ，外面にハケを施し，外面には沈線と列点文を配する。972 は内面にナデ，外面にタタキのちハケを施し，胴中央部外面には煤が付着する。973・974 は鉢で，口縁部が屈曲して立ち上がるものである。973 は口縁部内外面にヨコナデ，体部外面にハケを施し，内外面にヘラミガキ調整を加える。974 は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケのちヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケを施す。975 は高杯で，杯底部内面にヘラミガキ，脚部内面にナデ，脚部外面にハケを施す。976 はミニチュア土器で，口縁端部に粘土帯を貼付し，内外面にハケを施す。

石製品(図2－124　977)

977 は叩石で，両端と側面の一部に弱い敲打痕がみられ，石材は粗粒砂岩である。

(2) 調査区南側

① 竪穴建物跡

ST89

ST89 は調査区西側で検出した竪穴建物跡である。東西長約 3.9 mを測り，中央部はSX2 に切られる。北側と南側が調査区外へ続く。検出面からの深さは約 20 ㎝で，床面の標高は約 4.6m である。埋土は土器片を含む細～中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～

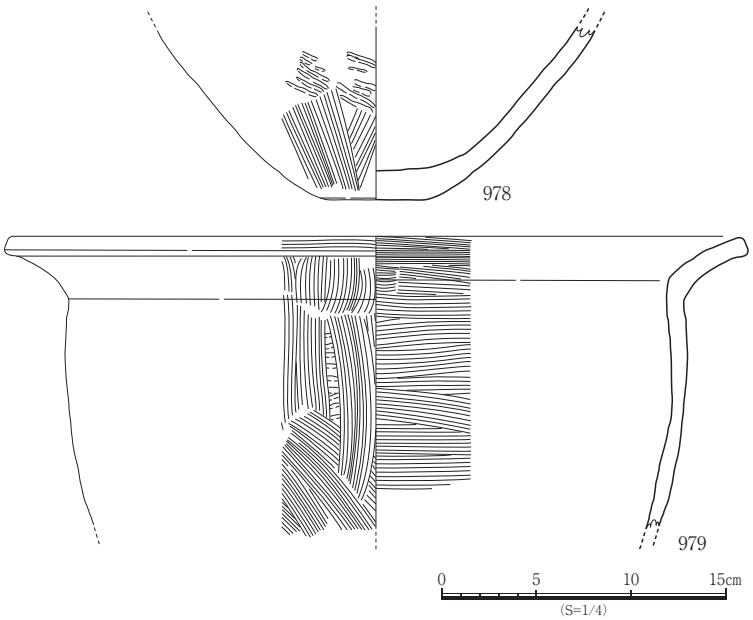


図2－125　ST89･90埋土出土遺物実測図

中粒砂質シルトである。

出土遺物は埋土から弥生土器95点がみられ，1点(978)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－125　978)

978は弥生土器の壷である。内面にはナデ，外面はタタキのちハケ，底部は板状のものによる丁寧なナデ調整が認められる。

ST90

ST90は調査区西側の南端で検出した竪穴建物跡である。東西長約2.5ｍを測り，南側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約10㎝で，床面の標高は約4.6mである。埋土は細礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で，床面で確認できた壁溝は確認長約1.0m，幅20～22㎝，深さ4㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器22点がみられ，1点(979)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－125　979)

979は弥生土器の鉢である。口縁端部は面をなしハケ調整がみられ，内面にはハケ，胴部外面はタタキのちハケ調整が認められる。

ST91

ST91は調査区中央部で検出した壁溝を伴う竪穴建物跡である。北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約30㎝で，床面の標高は約4.4mである。埋土は1層が細～中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂質シルト，2層が細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)極細粒～中粒砂質シルトで，床面で確認できた壁溝は確認長約2.9m，幅20～24㎝，深さ5㎝を測る。

出土遺物は上層から弥生土器232点，須恵器5点，石製品3点，中層から弥生土器269点，金属製品1点，下層から弥生土器3点，埋土から弥生土器318点，土師器1点，須恵器1点，石製品2点，P1から弥生土器10点，P2から弥生土器5点がみられ，上層から弥生土器1点(980)，須恵器1点(981)，中層から弥生土器4点(982～985)，金属製品1点(986)，埋土から弥生土器3点(987～989)，土師器1点(990)，ST91とST92埋土から弥生土器2点(991･992)が図示できた。

上層出土遺物(図2－126　980･981)

980は弥生土器の甕で，口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので，口縁端部は面をなす。口縁部内外面にはヨコナデ，内面一部にハケが残り，外面一部にはタタキ目が残る。胴部内面にはハケと指頭圧痕，外面は右上がりのタタキ目が認められる。981は須恵器の高杯で，口縁部の立ち上がりは内傾し，端部は丸くおさめる。受部は上外方向にのび，端部はやや尖る。基部に凹線，内面は回転ナデ，内底部ケズリと重ね焼きの痕跡，外面は回転ナデ，回転ヘラケズリが認められる。混入したと思われる。

中層出土遺物(図2－126　982～986)

982～985は弥生土器である。982は広口壷で，口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面にはヨコナデ，肩部から胴中央部内面にはナデと指頭圧痕がみられる。胴下部内面は板状のもので調整を施す。肩部から胴中央部外面にはハケとナデ，胴下部はハケ調整が認められる。983は甕で，口縁部内外面にはヨコナデ，煤が付着する。内面はハケ，外面はタタキ目が認められる。984は鉢で，内面には丁寧なナデ，外面はナデ調整が認められる。985は高杯で，口縁部にはヨコナデを施し，杯部内面には丁寧なナデ，外面にはハケ調整が認められる。986は金属製品の鉄鋤先と考えられる。

埋土出土遺物(図2－126　987～990)

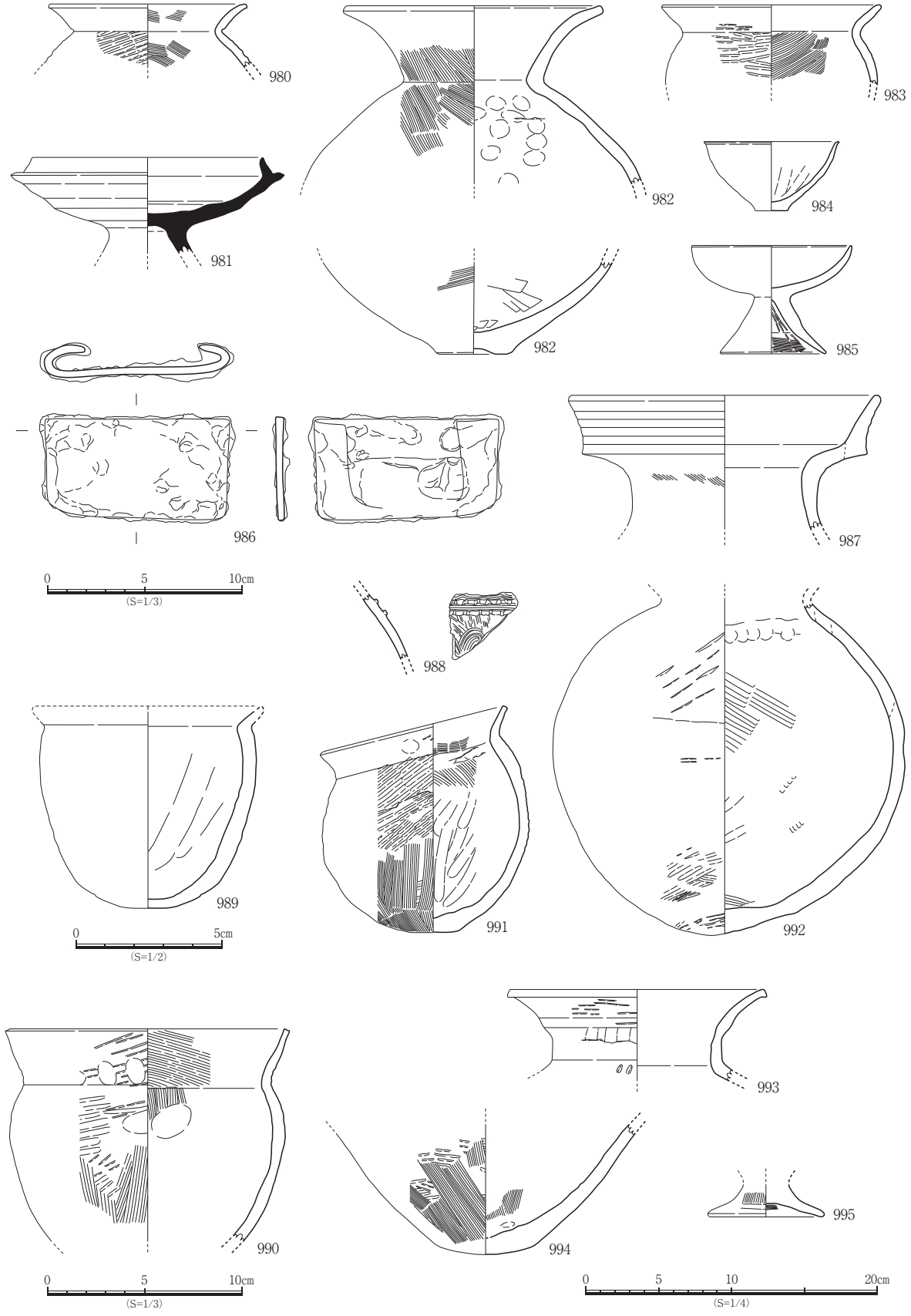


図2－126　ST91･92出土遺物実測図

987 ～ 989 は弥生土器である。987 は搬入品とみられる二重口縁壺で，口縁部は受口状で端部は面をなし，外面は５条の凹線文が巡る。頸部内面には丁寧なナデ，外面は一部ハケが残るナデ調整が認められる。988 は壺の胴部破片と考えられるもので，外面は櫛描波状文の間に２条の刻目突帯，突帯間に櫛描直線文を配し，ハケ調整を施す。989 は丸底を呈するミニチュア土器で，手づくね成形と考えられる。口縁部には指頭圧痕，胴部内外面にナデ調整が認められる。990 は土師器の甕で，口縁部内面はハケ，外面は右上がりのタタキ目，口縁端部はナデにより緩く凹状をなす。胴上部内面には粗いハケと指頭圧痕，一部をナデ消し，胴中部はハケをナデ消す。胴上部外面は右上がりと水平のタタキ目，胴中部から下方はハケでタタキ目を消す調整が認められる。

ST91・92埋土出土遺物（図2－126　991･992）

991・992 は弥生土器の甕である。991 は口縁部内面にはハケ，外面はタタキ目をナデ消す。胴部内面にはナデ，胴上部外面はタタキ目，胴中央部はタタキ目をハケで消す。底部はタタキ目がみられ，煤が付着する。992 は丸底を呈し，内面にはハケ・ナデと指頭圧痕がみられ，胴上部から胴中央部外面はタタキ目をナデ消し，底部にはタタキ目が残る。

ST92

ST92 は調査区中央部で検出した竪穴建物跡である。ST91 と SK23・SD13 に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 30 ㎝で，床面の標高は約 4.4m を測る。床面では南側に一段高いテラス状遺構と北側にピットを検出した。テラス状遺構の床面との比高差は約 13 ㎝である。埋土は細～中礫混じりの灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂質シルトで，検出したピットは長軸 0.6m，短軸 0.5m，深さ 14 ㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）極細粒～中粒砂質シルトである。

出土遺物は１層から弥生土器32点，３層から弥生土器58点，埋土から弥生土器55点がみられ，１層では３点（993～995）が図示できた。

埋土出土遺物（図2－126　993～995）

993 ～ 995 は弥生土器で，993・994 は壺である。993 は広口壺で，口縁部は粘土帯貼付痕がみられ，口縁端部は面をなす。口縁部外面はタタキ目をナデ消し，内面にはナデを施す。口縁部の粘土帯接合部から頸部外面にはケズリのちヨコナデ，頸部直下に列点状の刺突がみられる。994 は壺の底部で煤が付着する。内面にはハケと指頭圧痕，外面はタタキ目をハケで消し，底部はタタキ目をナデ消す。995 は脚付鉢の脚部で，内面にはハケと指頭圧痕，脚接合部から中央部外面にはハケ，中央部から端部はナデ調整が認められる。

ST93

ST93 は調査区中央部で検出したベッド状遺構と壁溝を伴う竪穴建物跡である。ST91 に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 15 ㎝，床面の標高は約 4.5m で，ベッド状遺構の床面との比高差は約 13 ㎝である。埋土は細礫及び地山細礫が若干混じる黒褐色（10YR2/3）シルトで，ベッド状遺構と床面との境で検出した壁溝は確認長約 2.7m，幅 17 ～ 22 ㎝，深さ 19 ㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器203点がみられ，８点（996～1003）が図示できた。

埋土出土遺物（図2－127　996～1003）

996 ～ 1003 は弥生土器で，996 ～ 1000 は甕である。996 は平底を呈し，煤が付着する。内面にはナデ，外面はタタキ目をハケで粗く消し，底部付近は丁寧に消す。997 は口縁部内外面にはヨコナデ，口唇部は強いナデにより凹む。胴上部内面にはハケと指頭圧痕，胴部外面はタタキ目をハケで消す。煤が

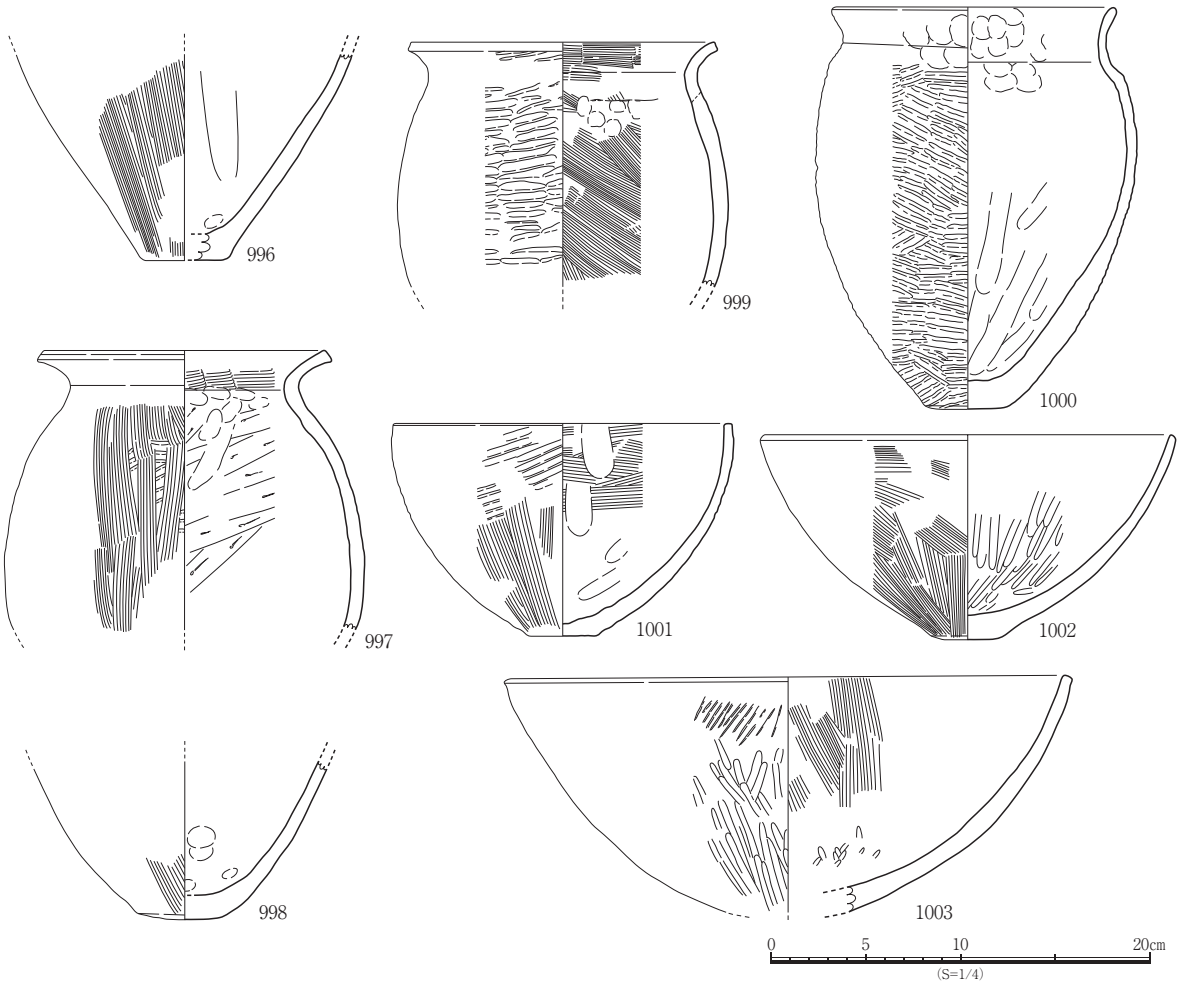


図2－127　ST93埋土出土遺物実測図

付着する。998は平底を呈し，煤が付着する。内面には強いナデ，外面はタテハケ，底部は成形時のタタキ目が一部残る。999の口縁端部は強いナデにより凹み，内面にはハケ，一部胴上部に指頭圧痕，外面はタタキ目が認められ，煤が付着する。1000は口縁部内外面に指頭圧痕，口縁部内面にはヨコナデ，胴部にナデ，底部に指頭圧痕が認められる。肩部外面はナデ，胴部はタタキ目が認められる。煤が付着する。1001～1003は鉢である。1001は平底を呈し，煤が付着する。口縁部から体部内面にはハケ，体部中央はハケをナデ消し，体部中央から下部には丁寧なナデを施す。口縁部から体部中央外面にはタタキ目が認められ，体部中央から底部までハケ調整が認められる。1002は口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にはヘラミガキ，外面はハケ調整が認められる。1003は口縁部内外面にヨコナデ，口縁端部は面をなす。体部上半内面にはハケ，下半はヘラミガキを施す。外面にはヘラミガキ調整が認められる。

ST94

ST94は調査区中央の南端で検出した壁溝を伴う竪穴建物跡である。SK24に切られており，南側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約20㎝で，床面の標高は約4.5mである。埋土は細礫と10㎝大の河原石が混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルトで，床面

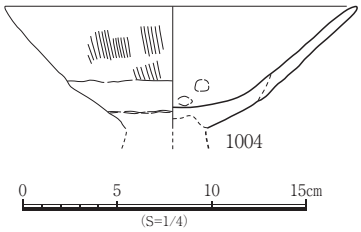


図2－128　ST94埋土出土遺物実測図

で確認できた壁溝は確認長約1.8m，幅17～20㎝，深さ3～4㎝である。

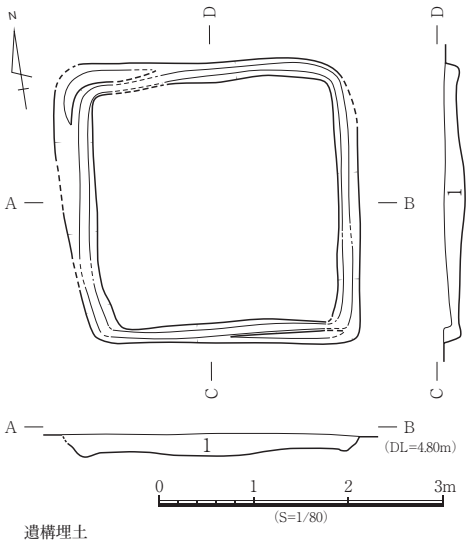
出土遺物は埋土から弥生土器141点，須恵器2点，土師質土器1点，瓦1点がみられ，弥生土器1点(1004)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－128　1004)

1004は弥生土器の高杯である。外面にハケ調整が認められる。

ST95(図2－129)

ST95は調査区中央で検出した隅丸方形を呈する竪穴建物跡で，SK25・26に切られており，複数のピットと切り合っている。長軸約3.2ｍ，短軸約3.0ｍを測り，面積は約9.3㎡である。検出面からの深さは約21㎝で，床面の標高は約4.4mを測る。埋土は土器を含む細～中礫と黄褐色シルトブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/3)シルトで，床面で検出した壁溝は全周しており，確認長約10.5m，幅10～24㎝，深さ4～9㎝を測る。



遺構埋土
1. 土器と細～中礫を含み黄褐色シルトブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/3)シルト

図2－129　ST95

出土遺物は埋土から弥生土器413点，土師器1点，須恵器3点，石製品1点がみられ，弥生土器1点(1005)，土師器1点(1006)，石製品1点(1007)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－130　1005～1007)

1005は弥生土器の鉢である。内面にはナデ，口縁部外面はヨコナデ，体部はタタキ目をナデ消す。底部は丸底に近い。1006は搬入品とみられる土師器の二重口縁壺である。口縁部内面にはナデとハケ，外面はナデ調整が認められる。1007は石庖丁である。両側に抉り，刃部にはミガキが施される。石材は頁岩である。

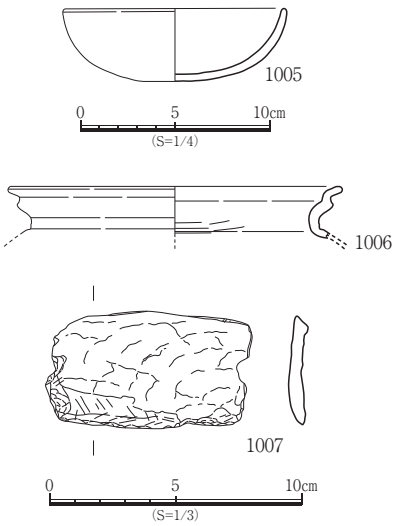


図2－130　ST95埋土出土遺物実測図

ST96

ST96は調査区中央の南端で検出した竪穴建物跡である。SD14に切られており，南側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約10㎝で，床面の標高は約4.6mである。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)極細粒～中粒砂質シルトである。

出土遺物は埋土から弥生土器7点，須恵器1点がみられ，弥生土器1点(1008)が図示で

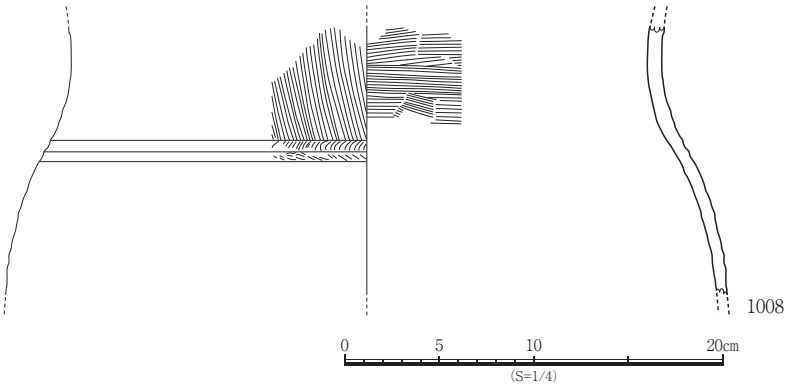


図2－131　ST96埋土出土遺物実測図

きた。

埋土出土遺物(図2－131　1008)

1008は弥生土器の甕である。口縁部内面にはヨコハケ，胴部はナデを施す。口縁部外面にはタテハケ，肩部に2条の凹線文を施し，凹線文内にはハケ調整が認められる。

ST97(図2－132)

ST97は調査区東側で検出した竪穴建物跡である。長軸約4.2m，短軸約3.4mで，ST98を切り，SK37に切られる。遺構範囲は北西側は調査区外に続く。検出面からの深さは約34cm，床面の標高は約4.3mである。床面ではベッド状遺構，ピット，壁溝を検出した。南東側で検出したベッド状遺構の床面との比高差は3.1～4.9cmである。埋土は1層が土器を含む細～大礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂，2層が土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂，3層が土器を含む細～中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂である。検出したピットのうちP1は径約0.3m，深さ26cmを測り，P2は径約0.3m，深さ6cmを測る。埋土は土器を含む小～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂である。床面で確認できた壁溝は確認長約7.0m，幅16～31cm，深さ7～11cmを測る。

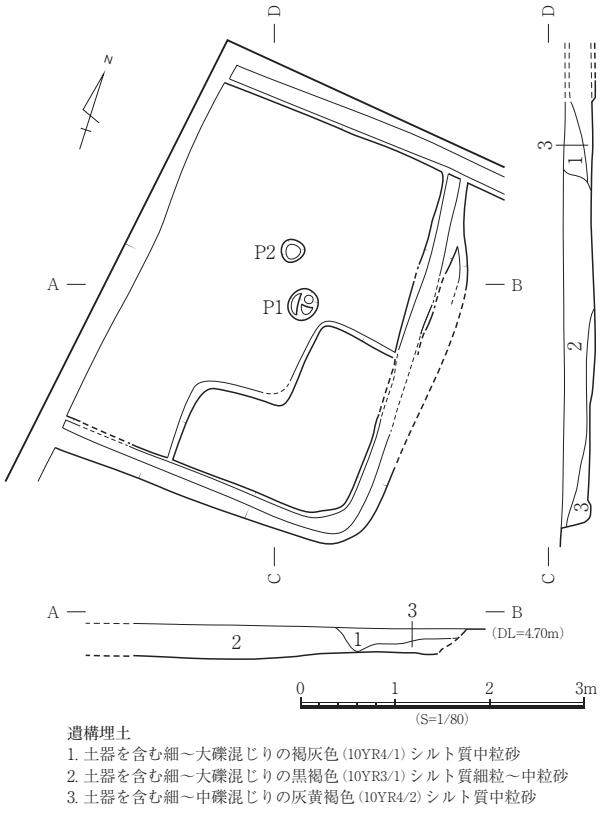


図2－132　ST97

遺物は多数出土しており，上・中層から弥生土器832点，土師器1点，須恵器3点，石製品3点，中層から弥生土器881点，土師器3点，須恵器1点，石製品1点，下層とST98の中層からは弥生土器648点，土師器2点，石製品5点，最下層から弥生土器347点，床面からは弥生土器350点，土師器8点，埋土からは弥生土器1,670点，土師器11点，須恵器2点，石製品3点，P1から弥生土器3点，P2から弥生土器2点がみられ，上・中層から弥生土器2点(1009･1010)，石製品2点(1011･1012)，中層から弥生土器2点(1013･1014)，土師器3点(1015～1017)，下層とST98の中層からは弥生土器5点(1018～1022)，土師器1点(1023)，石製品1点(1024)，床面からは弥生土器7点(1025～1031)，土師器5点(1032～1036)，埋土からは弥生土器6点(1037～1042)，土師器1点(1043)，P2から弥生土器1点(1044)が図示できた。

上・中層出土遺物(図2－133　1009～1012)

1009・1010は弥生土器の壷である。1009は丸底を呈し，口縁部内外面にはヨコナデ，内面肩部は接合痕が顕著，頸部に何らかの道具をあてた痕跡がみられる。外面は胴上部から胴部中央にはタタキ目，胴部下半はタタキ目をナデ消す調整が認められる。1010は広口壷で内面にはナデ，外面はハケをナデ消す調整が認められる。1011・1012は石庖丁である。1011は両端に抉りが施される。石材は砂岩である。1012は片刃で両端の抉りに紐状のものによるこすれの痕跡がみられる。石材は砂岩

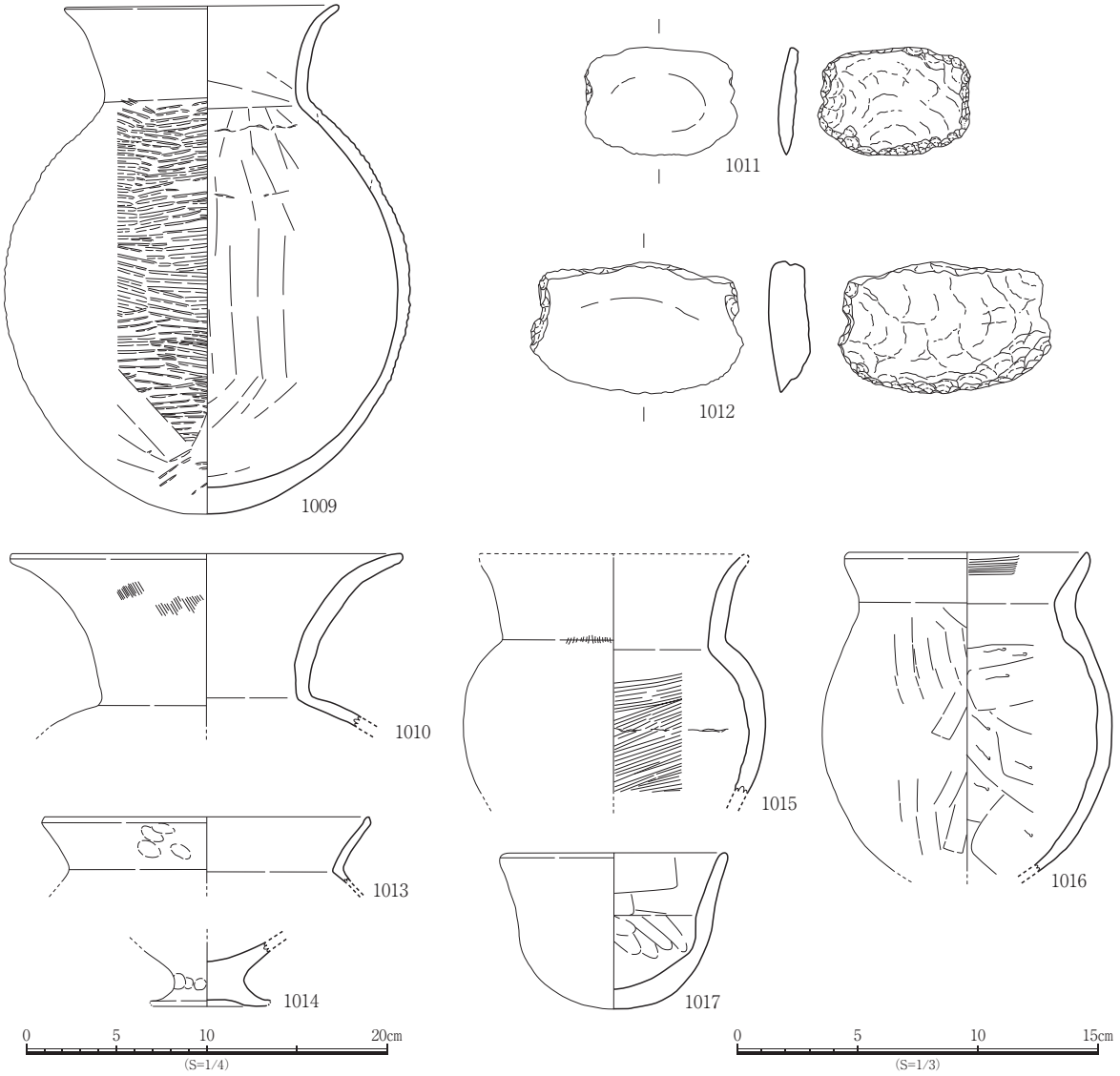


図2－133　ST97上･中層出土遺物実測図

である。

中層出土遺物（図2－133　1013～1017）

1013は搬入品の弥生土器の甕である。内面にはナデ，外面にはナデと指頭圧痕がみられる。1014は弥生土器で外面には指頭圧痕がみられる。1015は土師器の壷である。口縁部内面にはナデ，胴部にハケ，外面はハケをナデ消す。化粧土が施され，道具不明の圧痕がみられる。1016は土師器の甕である。小型のもので，口縁部内面には板状の工具によるナデ，胴部はヘラケズリを施す。外面にはナデ調整が認められ，煤が付着する。1017は土師器の鉢である。丸底を呈する小型のもので，口縁部内面にはヘラ状工具によるヨコナデ，胴部から底部はナデを施す。口縁部外面にはヨコナデ，胴部から底部はナデ調整が施される。

下層・ST98中層出土遺物（図2－134　1018～1024）

1018～1021は弥生土器の甕である。1018は丸底を呈し，煤が付着している。内面にはナデ，口縁部外面はナデ，胴部から底部にタタキ目が認められる。1019は口縁部内面にはハケ，端部ナデ，胴部内

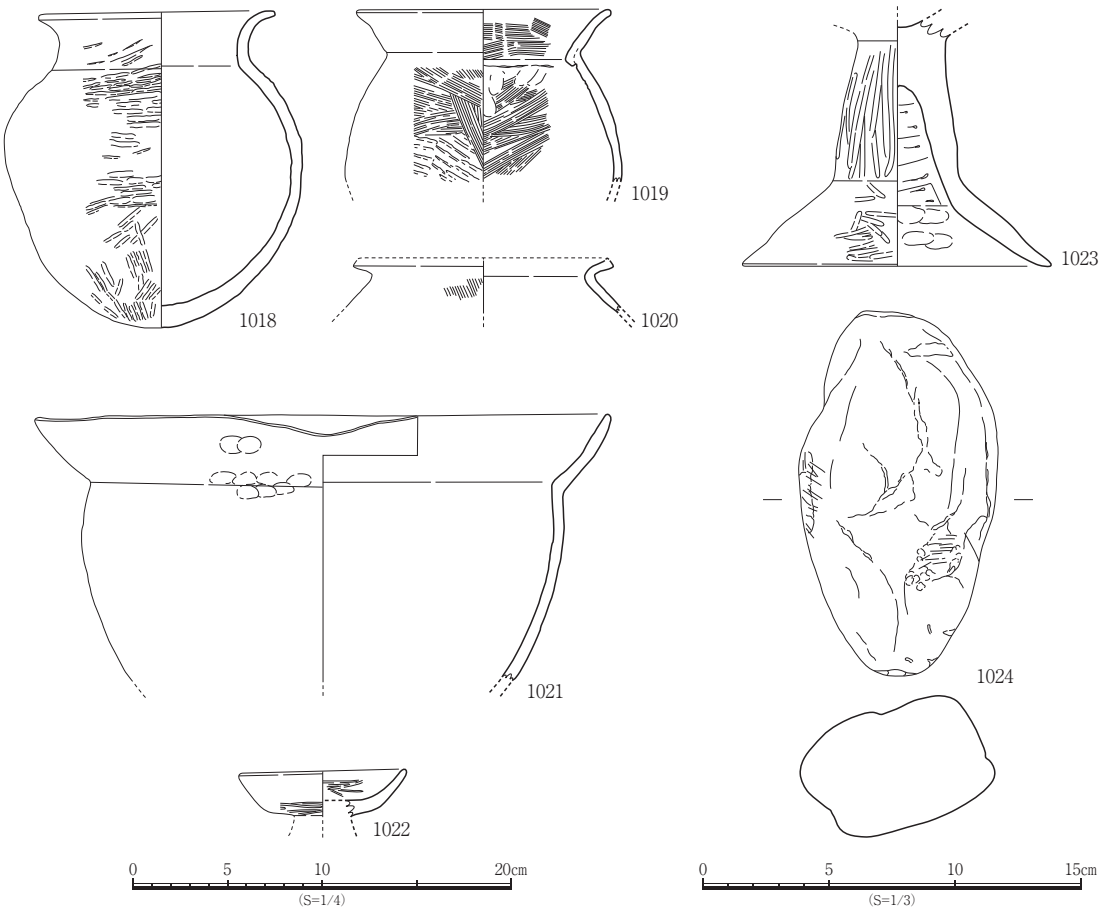


図2－134　ST97下層･ST98中層出土遺物実測図

面には指頭圧痕とハケ，接合痕が顕著にみられる。口縁部外面にはナデ，胴上部はナデとハケ，胴部下半にタタキ目が認められ，煤が付着する。1020は内面にはナデ，口縁部外面にはヨコナデ，胴部にハケ調整が認められる。1021は弥生土器の甕である。片口のもので，口縁部内外面にナデと指頭圧痕，胴部内外面はナデ調整が認められ，外面一部に煤が付着する。1022は弥生土器の高杯である。内外面にヘラミガキを施す。1023は土師器の高杯である。脚部内面にはヘラケズリ，裾部はハケ調整ののちナデ，裾端部にはヨコナデを施す。脚部と裾部外面にはヘラミガキ，裾端部にヨコナデが認められる。1024は叩石で突出している箇所に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

床面出土遺物（図2－135　1025～1036）

1025は弥生土器の壷である。口縁端部に刻目，内面にはナデとハケ，外面にはナデ調整が認められる。1026～1029は弥生土器の鉢である。1026は手づくね成形で，内外面にナデと指頭圧痕が認められる。1027は内面には丁寧なナデ，胴部外面はハケ調整が認められる。1028は内外面にナデと指頭圧痕が認められる。1029は脚付鉢で内面にはナデ，外面は指頭圧痕が認められる。1030は外面にハケ調整が認められる。1031はミニチュア土器で内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。1032～1034は土師器の壷である。1032は口縁部内外面にナデ，接合部に指頭圧痕がみられる。胴部内面にはヘラケズリ，胴部外面にはハケとナデ調整が認められる。1033は口縁部内外面にヨコナデ，肩部内面はナデ・ハケと指オサエ，胴部はヘラケズリを施す。肩部外面にはヨコナデ，胴部はハケとナデ調整が認められ，煤が付着する。1034は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にはヘラケズリ，胴部外面

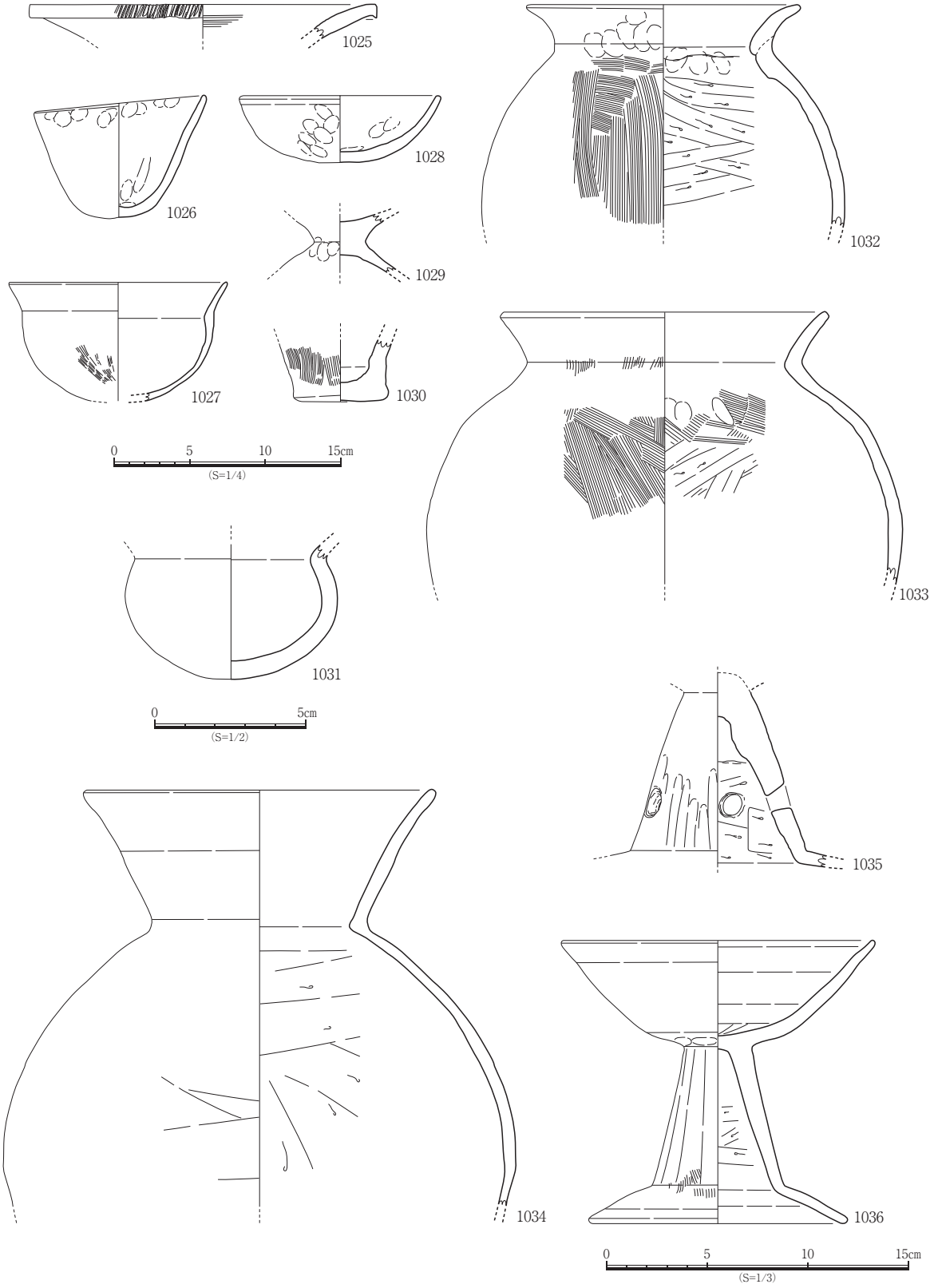


図２－135　ST97床面出土遺物実測図

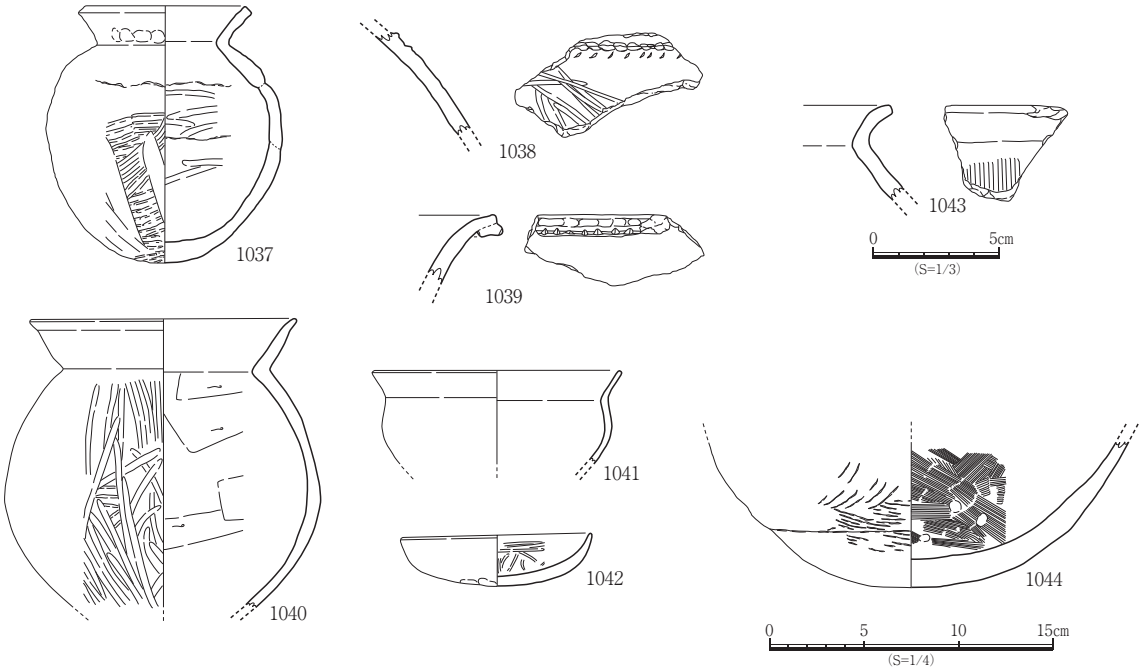


図2－136　ST97埋土･P2出土遺物実測図

はナデ調整が認められる。1035・1036は土師器の高杯である。1035は脚部のみで内面はヘラケズリ，外面は上部にナデ，下部はヘラミガキ調整がみられ，円孔が認められる。煤が付着する。1036は杯部内外面にナデ，外面接合部には指頭圧痕がみられる。脚部内面にはヘラケズリ，外面はヘラミガキを施す。裾部内面にはナデ，外面はナデとハケ調整が認められる。

埋土出土遺物(図2－136　1037～1043)

1037 ～ 1039は弥生土器の壺である。1037は丸底を呈する。口縁部内外面にはナデと指オサエ，胴部内面はナデを施す。胴部外面にはタタキ目がみられ，指と板状のものでナデ上げる調整が認められる。接合痕が顕著にみられる。1038は内面にナデ，外面には2条の突帯，突帯直下に爪形の圧痕文を配する。ヘラ状工具によるナデとミガキ調整が認められる。1039は内外面にナデ，口縁部内面には指頭圧痕が残り，口縁部外面には粘土帯を貼付し，上端を摘み出して刻みを施す。1040は弥生土器の甕である。口縁部内外面にはヨコナデ，胴部内面はヘラケズリを施す。胴部外面にはタタキのちハケ，ヘラミガキで仕上げる。煤が付着する。1041・1042は弥生土器の鉢である。1041は内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。1042は皿状を呈し，内面にはナデとミガキ，外面はナデ・ミガキと指頭圧痕が認められる。1043は搬入品の土師器の甕である。口縁部内外面にはヨコナデ，頸部に指頭圧痕，胴部は板状のものによるナデ調整が認められる。

P2出土遺物(図2－136　1044)

1044は弥生土器の甕である。内面にはハケ・ナデと指頭圧痕，外面はタタキ目をナデ消す調整が認められる。粘土帯接合痕が顕著，煤が付着する。

ST98

ST98は調査区東側の南端で検出した竪穴建物跡である。ST97に切られており，南側と西側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約12㎝で，床面の標高は約4.4mである。埋土は

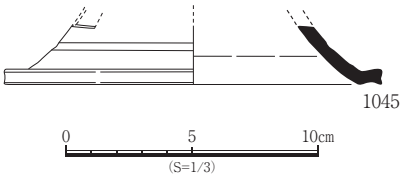


図2－137　ST98上層出土遺物実測図

土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトである。

出土遺物は上層から弥生土器187点，須恵器１点，中層から弥生土器239点，土師器１点，土師質土器１点がみられ，上層から須恵器１点(1045)が図示できた。

上層出土遺物(図2－137　1045)

1045は須恵器の高杯である。内外面には回転ナデ調整がみられ，透かしを施す。

ST99

ST99は調査区東側で検出した竪穴建物跡である。長軸約5.0ｍ，短軸約2.2ｍを測り，平面形は隅丸長方形とみられる。SK38に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約18cmで，床面の標高は約4.2mである。埋土は土器を含む細～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトである。

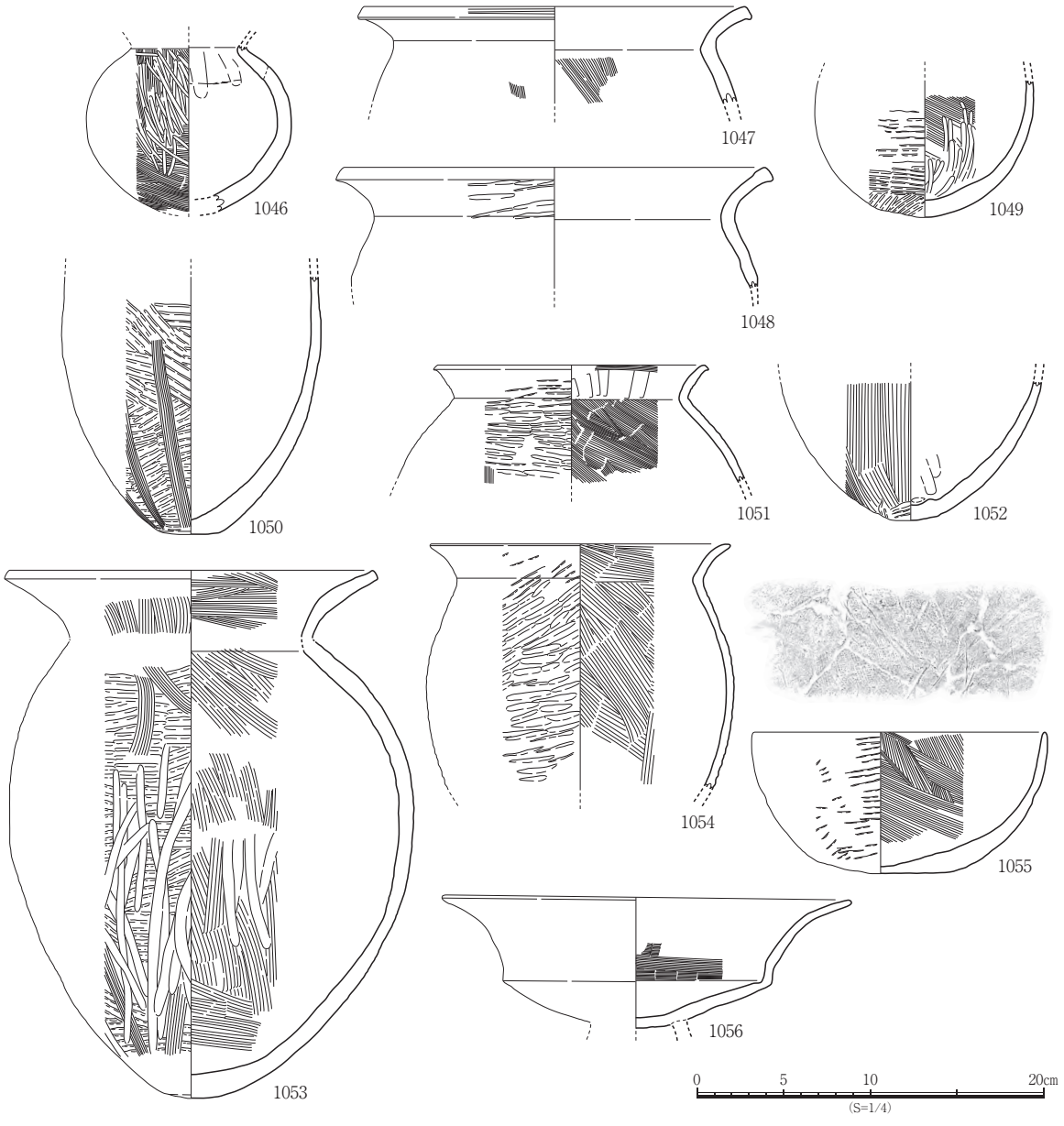


図2－138　ST99埋土出土遺物実測図

出土遺物は埋土から弥生土器429点，須恵器1点，焼石1点がみられ，弥生土器11点(1046～1056)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－138　1046～1056)

1046 ～ 1049 は弥生土器の壷である。1046 は内面にナデ，接合痕が顕著，内底部には指頭圧痕が認められる。胴上部外面にはタタキのちハケとヘラミガキ，胴部下半はタタキのちハケ調整が認められる。1047 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にはハケと指頭圧痕，胴部外面はナデとハケ調整が認められる。1048 は外面にタタキ目が認められる。1049 は丸底を呈し，内面にはハケとヘラ状工具によるナデを施す。外面はタタキのちナデ調整が認められる。1050 ～ 1054 は弥生土器の甕である。1050 は内面にナデ，外面はタタキ目とハケ，底部は成形時のタタキ目が残る平底を呈する。1051 は口縁部内面を板状のもので調整し端部はハケ，接合痕が顕著にみられ，胴部内面はハケを施す。口縁部外面はタタキのちハケ，胴部にはタタキ目とハケ調整が認められ，煤が付着する。1052 は胴部内面にナデ，底部には指頭圧痕，外面にタタキ目とハケ調整が認められ，煤が付着する。1053 は内面にハケとナデ，外面にはタタキのちハケとナデ調整が認められ，煤が付着する。1054 は内面にハケ，外面にはタタキ目とナデ調整が認められ，煤が付着する。1055 は弥生土器の鉢である。内面にはハケ，底部に布状のものによる圧痕が認められる。外面はタタキのちナデ，底部は板状のものによるナデ調整が認められる。1056 は弥生土器の高杯である。内面にはハケとナデ，外面はナデ調整が認められる。

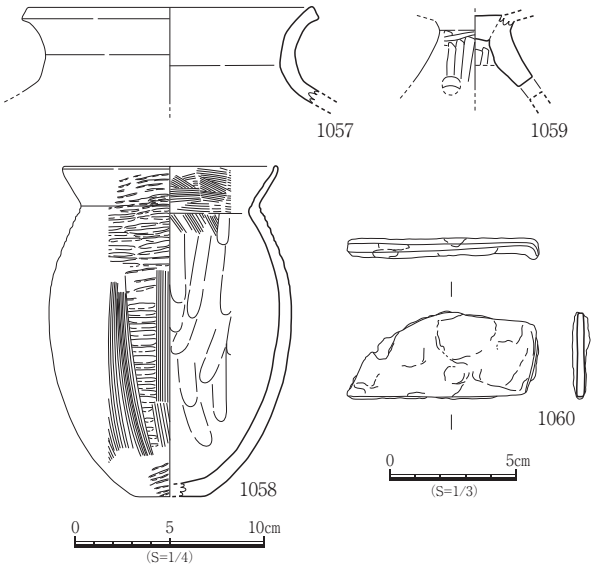


図2－139　ST100埋土出土遺物実測図

ST100

ST100 は調査区東側で検出した竪穴建物跡である。ST99 と SK37・38 に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 30 ㎝で，床面の標高は約4.2mである。埋土は土器を含む細～中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂である。

出土遺物は上層から弥生土器 81 点，石製品 1 点，中層から弥生土器30 点，染付 2 点，下層から弥生土器4 点，埋土から弥生土器102 点，須恵器2 点，染付2 点，金属製品1 点がみられ，埋土から弥生土器3 点(1057～1059)，金属製品1 点(1060)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－139　1057～1060)

1057 は弥生土器の壷である。内外面にはナデ調

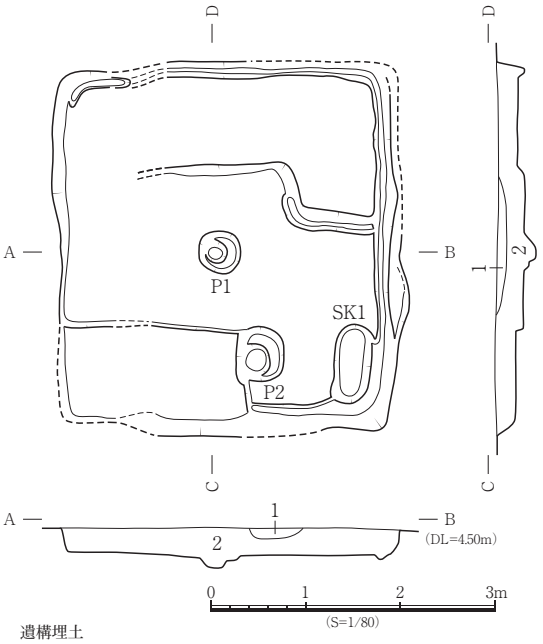


図2－140　ST101

整が認められる。1058は弥生土器の甕である。口縁部内面にはハケ，胴部はナデ，口縁部外面はタタキのちナデ，胴部はタタキ目とハケ，底部は成形時のタタキ目が残る平底を呈する。1059は弥生土器の高杯である。内面にはナデ，外面はミガキ調整が施され，円孔が認められる。1060は金属製品の穂摘具と考えられる。

ST101（図2－140）

ST101は調査区東側で検出した隅丸方形を呈する竪穴建物跡で，ST103を切る。長軸約4.0ｍ，短軸約3.7ｍを測り，面積は約14.6㎡である。検出面からの深さは約30㎝を測り，床面の標高は約4.1mである。床面では北側と南側にベッド状遺構，土坑，ピット，壁溝を検出した。ベッド状遺構の床面との比高差は南側北側ともに８～９㎝を測る。埋土は１層が土器を多く含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）シルト質細粒砂，２層が土器を多く含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/2）シルト質極細粒～中粒砂である。検出したピットのうちP1は長軸約0.5ｍ，短軸約0.4ｍ，深さ12㎝を測り，埋土は土器を多く含む細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/2）シルト質極細粒～中粒砂である。P2は長軸約0.6m，短軸約0.5m，深さ11㎝を測り，埋土は土器を含む細～中礫混じりの灰黄褐色（10YR4/2）シルト質中粒砂である。SK1は平面形が不整楕円形を呈し，長軸約0.8m，短軸約0.4m，深さ10㎝を測り，埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色（10YR4/1）シルト質細粒砂である。壁溝は南側のベッド状遺構を除き存在していたと考えられ，確認長約8.1m，幅10～24㎝，深さ２～14㎝を測る。

遺物は多数出土しており，上層から弥生土器1,572点，土師器１点，須恵器１点，石製品２点，瓦１点，中層から弥生土器949点，石製品４点，床面から弥生土器６点，埋土から弥生土器151点，土師器２点，SK1から弥生土器８点，P1から弥生土器12点，P2から弥生土器４点がみられ，上層から弥生土器９点（1061～1069），土師器１点（1070），須恵器１点（1071），石製品１点（1072），中層から弥生土器９点（1073

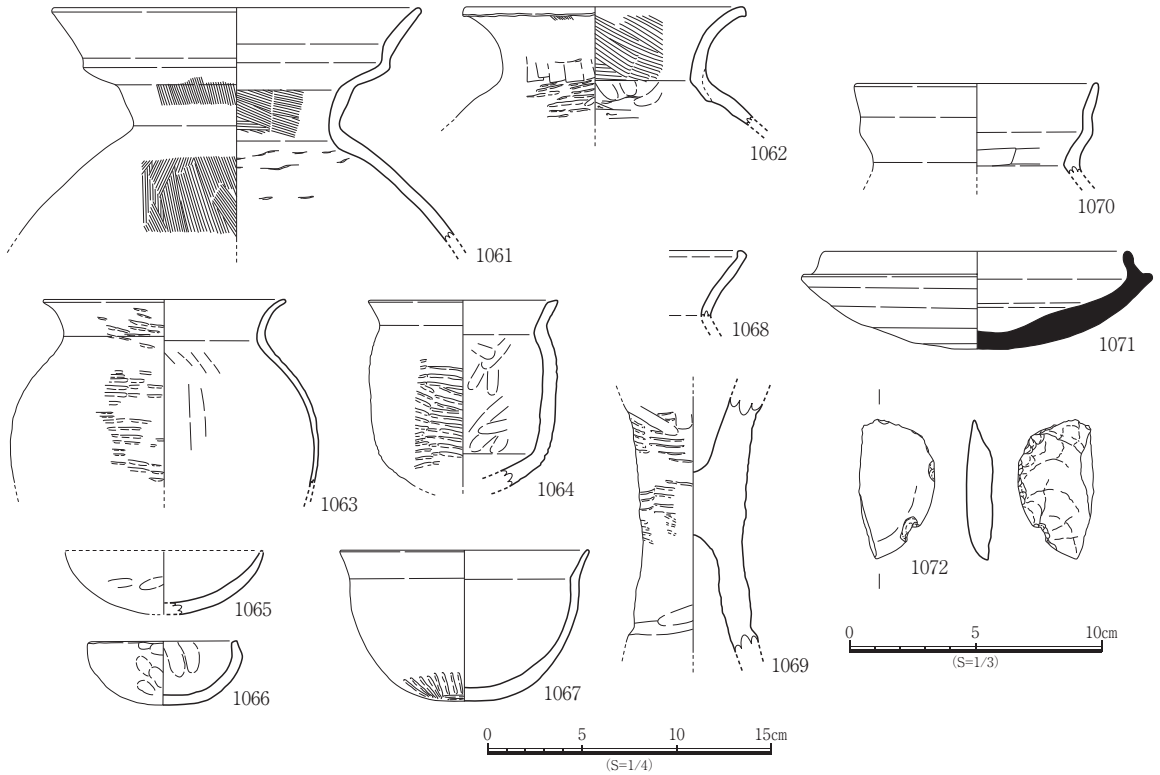
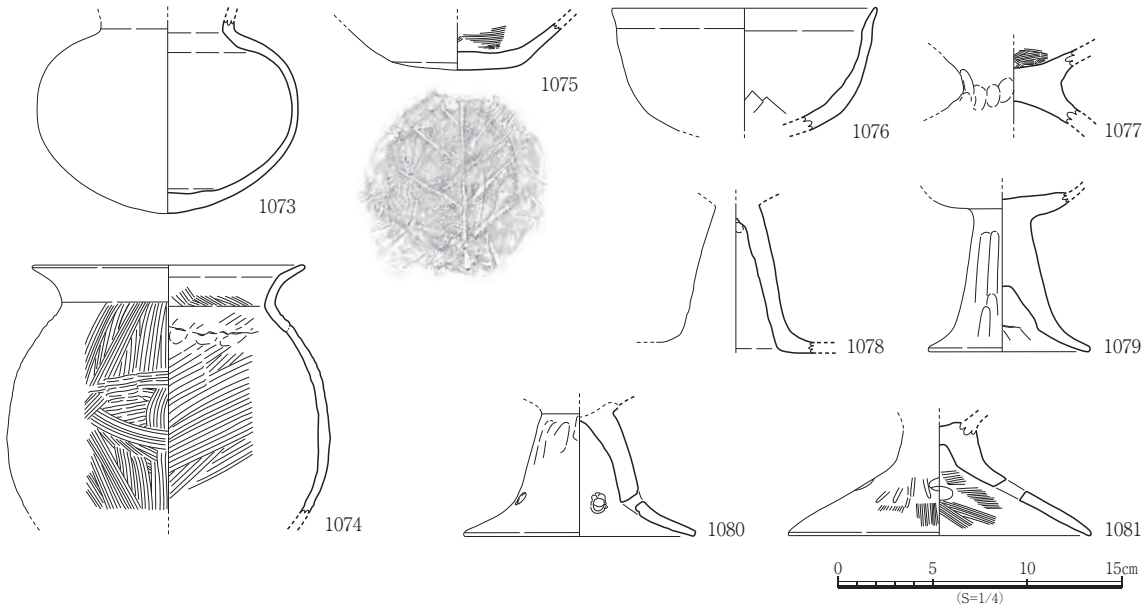


図2－141　ST101上層出土遺物実測図

～1081)，石製品4点(1082～1085)，床面から弥生土器2点(1086･1087)，埋土と包含層から弥生土器3点(1088～1090)，土師器2点(1091･1092)が図示できた。

上層出土遺物(図2－141　1061～1072)

1061・1062は弥生土器の壷である。1061は二重口縁を呈し，口縁部内外面はハケをナデ消す。頸部内面にはハケ，肩部から胴部にナデと指頭圧痕，粘土帯接合部が顕著にみられる。頸部上半外面にはハケ，下半はヨコナデ，肩部にはナデ，胴部はハケ調整が認められる。1062は口縁部内面にハケとナデ，胴部はヘラケズリとナデ，口縁部外面にはヨコナデ，端部を摘み出す。頸部は板状のものによるナデ，胴部にはタタキ目とナデ調整が認められる。1063・1064は弥生土器の甕である。1063は内面にナデ，外面はタタキ目とナデ調整が認められる。1064は内面にナデ，口縁部外面はナデ，胴部にはタ



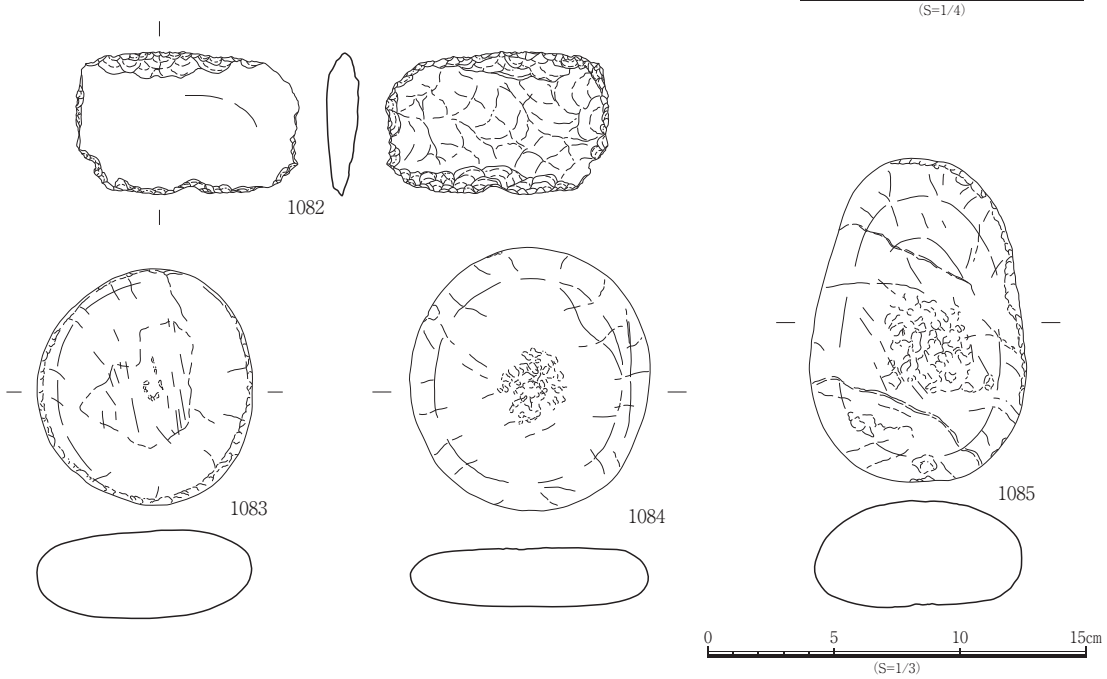


図2－142　ST101中層出土遺物実測図

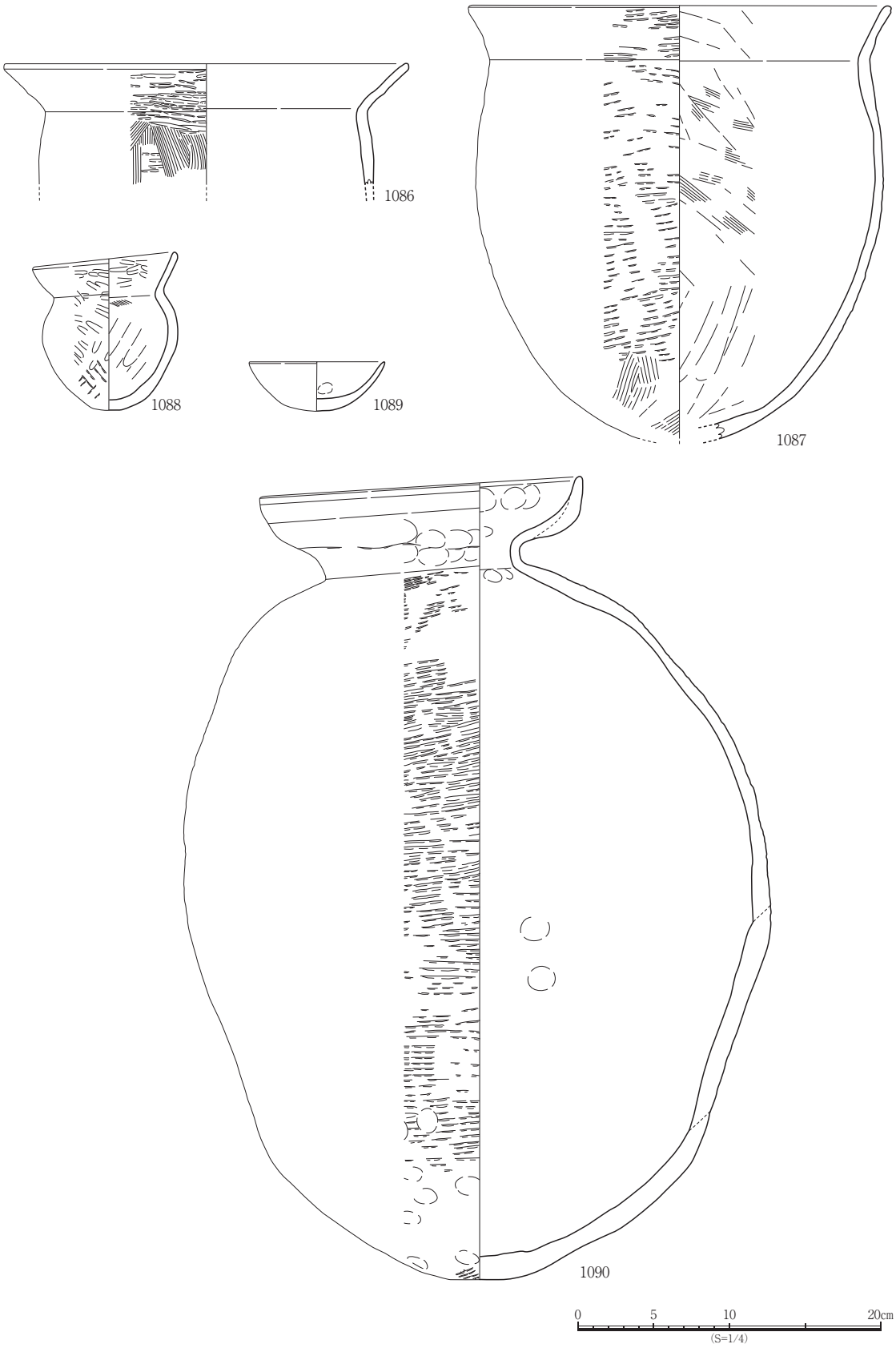


図2－143　ST101床面･埋土出土遺物実測図

タキ目とナデ，底部はナデ調整が施される。1065 ～ 1067 は弥生土器の鉢である。1065 は外面にナデ調整がみられる。1066 は手づくね成形で，口縁端部は面をなし，内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。1067 は内外面にナデ，底部外面にタタキ目が残る。1068 は弥生土器の甕である。内面にはハケとナデ，外面はナデ調整がみられ，搬入品と考えられる。1069 は土製品の支脚である。内面にはナデ，外面はタタキのちナデ調整が認められる。1070 は土師器の壷である。二重口縁を呈し，内外面にはヨコナデ調整が認められる。1071 は須恵器の杯身である。内面にはナデ，口縁部外面にもナデ，底部には回転ヘラケズリ調整が認められる。1072 は石庖丁である。片面に自然面が残り，未成品である。石材は砂岩である。

中層出土遺物（図2－142　1073～1085）

1073 は弥生土器の壷である。内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。1074 は弥生土器の甕である。口縁部内面にはハケのちナデ，胴部はハケとナデ，接合痕が顕著にみられる。口縁部外面にはタタキのちナデ，胴部はタタキのちハケ，煤が付着する。1075 ～ 1077 は弥生土器の鉢である。1075 は内面にハケとナデ，外面はハケのちナデ，底部に葉脈の圧痕が認められる。1076 は内外面にナデ調整が認められる。1077 は脚付きのもので，体部内面にはハケ，脚部はハケとナデ，外面にはナデと指頭圧痕が認められる。1078 ～ 1081 は弥生土器の高杯である。1078 は内外面にナデ調整が認められる。1079 は内外面にナデ，杯内底部には指頭圧痕が認められる。1080 は内外面にナデ調整が施され，3ヵ

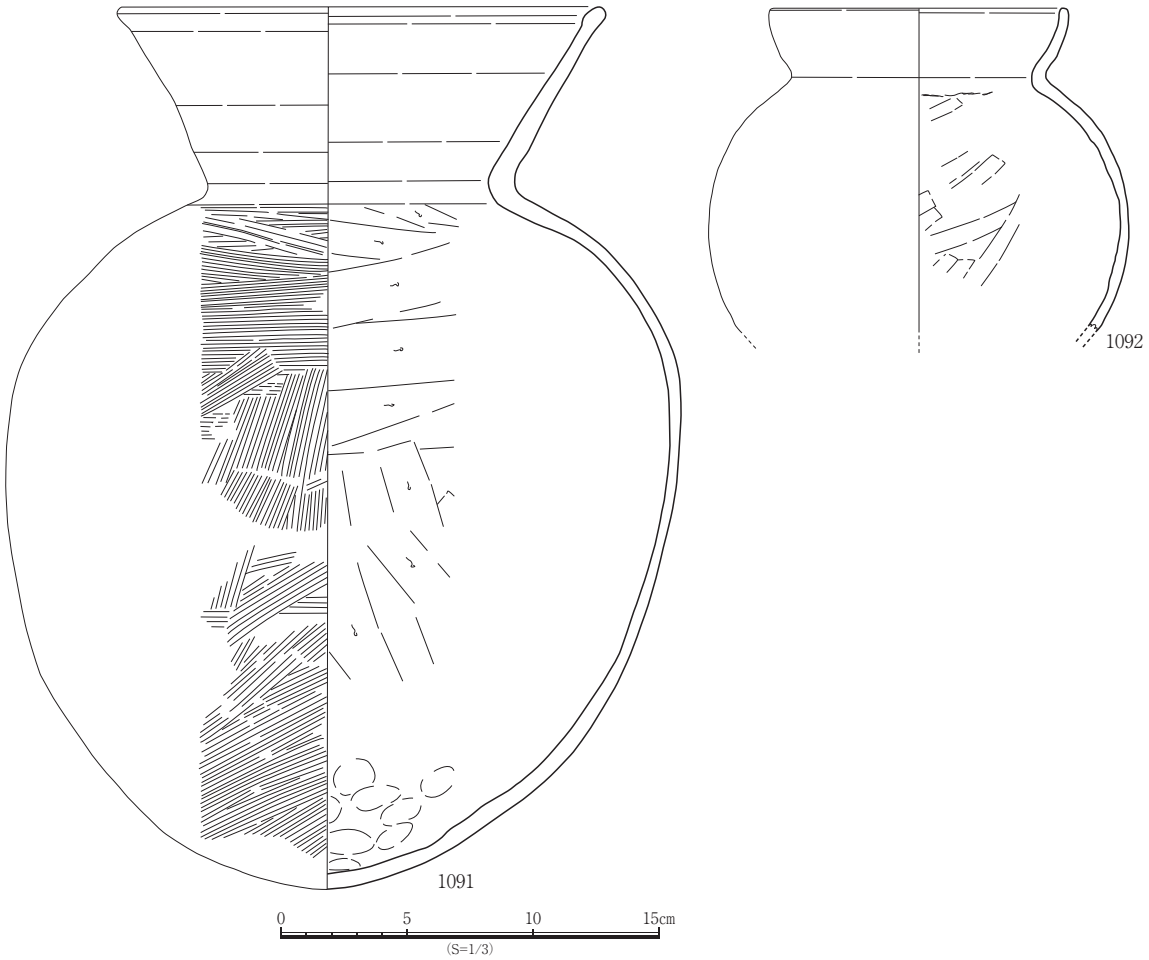


図2－144　ST101埋土出土遺物実測図

所に円孔が認められる。1081は内面にハケ，外面はハケとミガキ調整が施され，裾部に2ヵ所の穿孔が認められる。1082は石庖丁である。片面に自然面が残り，未成品である。石材は砂岩である。1083～1085は叩石である。1083は側面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。1084は両面中央部に敲打痕が残る。石材は砂岩である。1085は両面中央と側面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

床面出土遺物（図2－143　1086･1087）

1086・1087は弥生土器の甕である。1086は口縁部内面にハケのちナデ，口縁部外面にはタタキ目とナデ，胴部はタタキのちハケ調整が認められる。1087は胴部内面にハケとナデ，底部はナデ，胴部外面にはタタキ目とナデ，底部はハケとナデ調整が認められる。

埋土出土遺物（図2－143･144　1088～1092）

1088は弥生土器の壺である。口縁部内面にはミガキ，胴部はナデ，外面にはタタキのちナデとミガキ調整が認められる。1089は弥生土器の鉢である。丸底を呈し，内面にはナデと指頭圧痕が認められる。1090は弥生土器の壺である。二重口縁部の内外面ともにヨコナデ，受口状部分にタールとみられるものが付着する。胴部内面はナデ，粘土帯接合部が顕著にみられる。胴上部外面は水平と右上がりのタタキ目とナデ，下部は水平のタタキ目と強いナデを施す。肩部に3本の斜線が2ヵ所にみられる。底部はタタキ目をナデ消す。1091は土師器の壺である。丸底を呈し，口縁部内外面にはヨコナデ，胴部内面にはヘラケズリ，内底部に指頭圧痕が認められる。胴部外面には丁寧なハケ調整が施される。1092は土師器の甕である。口縁部にはナデ，端部は面をなす。胴部内面にはケズリ，外面はナデ調整が認められ，煤が付着する。

ST102

ST102は調査区東側で検出した壁溝を伴う竪穴建物跡である。ST106に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約30㎝で，床面の標高は約4.1mである。埋土は1層が細礫混じりの黒褐色（10YR3/1）シルト質細粒砂，2層が細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/2）シルト質細粒～中粒砂で，床面で確認できた壁溝は確認長約4.0m，幅10～19㎝，深さ3～4㎝を測る。

出土遺物は上層から弥生土器114点，埋土から弥生土器57点，土師質土器1点がみられ，埋土から弥生土器4点（1093～1096），土師質土器1点（1097）が図示できた。

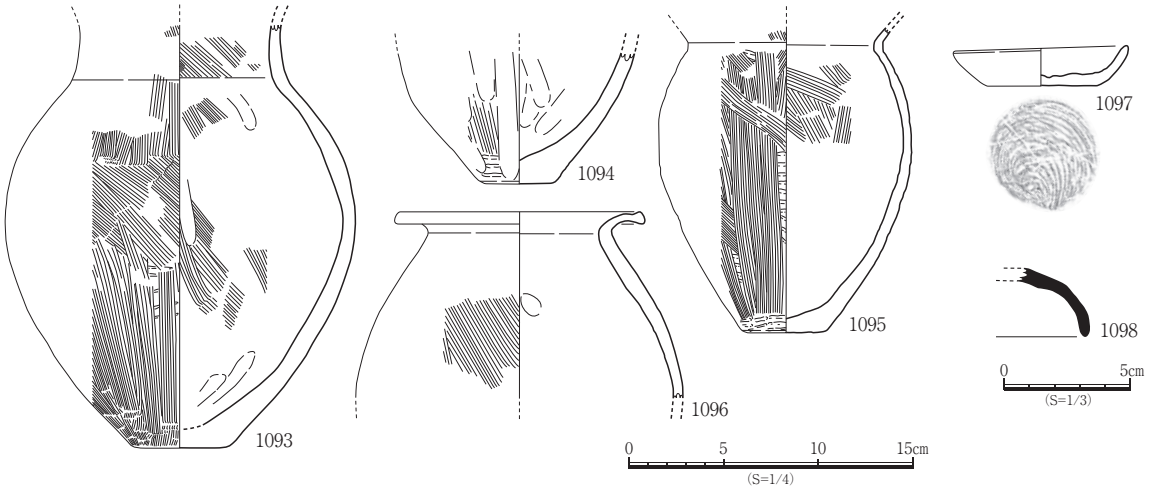


図2－145　ST102･103埋土出土遺物実測図

埋土出土遺物(図2－145　1093～1097)

1093は弥生土器の壺である。内面にはハケ・ナデと指頭圧痕，外面はタタキのちハケ，頸部にはヨコナデ調整が認められる。1094 ～ 1096 は弥生土器の甕である。1094 は内面にナデ，内底部には指頭圧痕が認められる。外面にはタタキのちハケとナデ調整が認められ，煤が付着する。1095は内面にハケとナデ，外面にはタタキのちハケ，頸部はヨコナデ，底部は成形時のタタキ目が残る平底を呈する。煤が付着する。1096は口縁部内外面にナデ，胴部内面はナデと指頭圧痕，胴部外面にはハケ調整が認められる。1097は混入したと考えられる土師質土器の小皿である。内外面には回転ナデ，内底部中央は凸状に残る。外底部は回転糸切りと板状の圧痕が認められる。

ST103

ST103は調査区東側で検出した竪穴建物跡である。ST101・102に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 17 ㎝で，床面の標高は約 4.2m である。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂である。

出土遺物は上層から弥生土器24点，埋土から弥生土器100点，須恵器2点が出土し，埋土から須恵器1点(1098)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－145　1098)

1098は須恵器の杯蓋である。内外面には回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズリ調整が認められる。

ST104

ST104 は調査区東側の南端で検出した竪穴建物跡である。南側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 17 ㎝で，床面の標高は約 4.2m である。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～中粒砂である。

出土遺物は上層から弥生土器54点，埋土から弥生土器14点がみられ，埋土から弥生土器2点(1099・1100)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－146　1099・1100)

1099・1100 は弥生土器の鉢である。1099 は丸底を呈し，内面にはハケ調整が認められる。1100 は丸底を呈し，内面にはハケ調整が認められる。

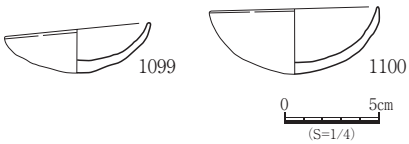


図2－146　ST104埋土出土遺物実測図

ST105

ST105は調査区東側で検出した竪穴建物跡で，東西長約5.0m を測る。SK40～42・44，SD24，撹乱に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは約 33 ㎝で，床面の標高は約 4.0m である。床面ではベッド状遺構，ピット，壁溝を検出した。ベッド状遺構の床面との比高差は10～13㎝である。埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂である。検出したピットのうちP1は径0.3 m，深さ7㎝を測る。P2は長軸0.3m，短軸0.2m，深さ10㎝を測る。P3は長軸0.3m，短軸0.2m，深さ11㎝を測る。P4は径0.3m，深さ24㎝を測る。埋土は土器と細礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂がブロック状に混じる黒色(10YR2/1)シルト質細粒～中粒砂である。壁溝は確認長約10.6m，幅14～16㎝，深さ約4㎝を測る。

遺物は多数出土しており，上層から弥生土器822点，石製品5点，中層から弥生土器423点，石製品1点，下層から弥生土器136点，埋土から弥生土器491点，石製品2点，P1から弥生土器1点，P2から弥生土器26点，P3から弥生土器7点，P4から弥生土器2点，壁溝から弥生土器1点，ST105・SD24

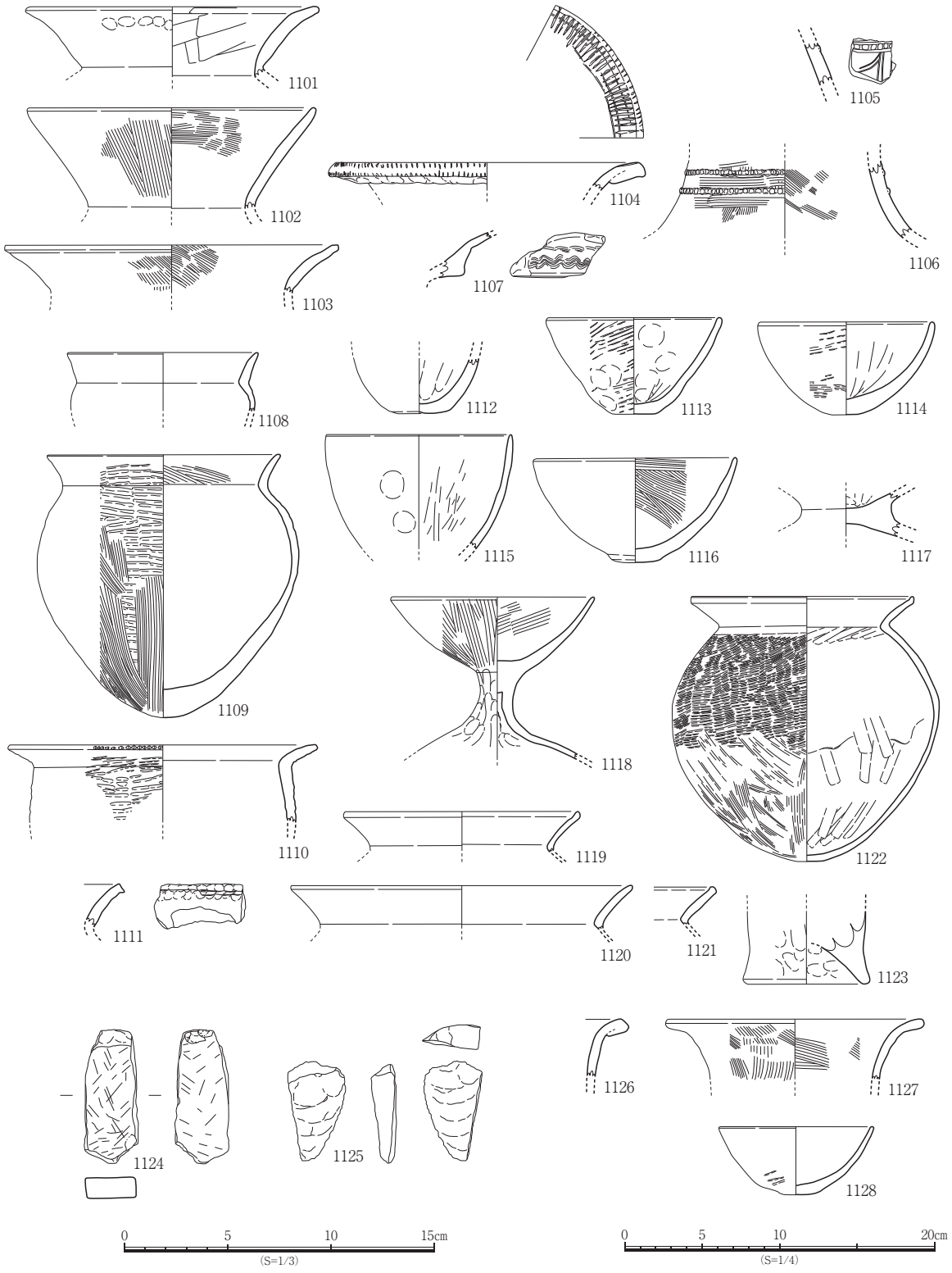


図2－147　ST105･SD24埋土出土遺物実測図

埋土から弥生土器 107 点がみられ，埋土から弥生土器 23 点(1101～1123)，石製品 2 点(1124･1125)，ST105・SD24 埋土から弥生土器3点(1126～1128)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－147　1101～1125)

1101～1107 は弥生土器の壷である。1101 は口縁部内面にヨコナデ，頸部には板状工具によるナデ，肩部はヘラナデ調整が認められる。1102 は口縁部内面にハケとヨコナデ，頸部にはナデ，外面はハケのちナデ調整が認められる。1103 は口縁部内外面にハケとヨコナデ，端部は面をなす。1104 は口縁部内面に櫛描直線文と短沈線による施文，端部は櫛描文様を刻む。口縁部外面に粘土帯を貼付する。外面には指頭圧痕が認められる。1105 は内面にナデ，外面には扁平刻目突帯とヘラ描沈線，双線による施文が認められる。1106 は内外面にハケ，外面には2条の扁平刻目突帯，突帯下に櫛描直線文が認められる。1107 は二重口縁を呈し，外面にはナデと櫛描波状文が施される。1108～1111 は弥生土器の甕である。1108 は口縁部が「く」の字状を呈する。調整は器面の摩耗が著しく不明である。1109 は丸底を呈し，口縁部内面にハケ，胴部はナデ，底部には指頭圧痕がみられる。胴部上半外面にタタキ目とナデ，下半はタタキのちハケ調整が認められ，煤が付着する。1110 は口縁部内外面にヨコナデ，端部に刻目を施す。胴部内面にはナデ，胴部外面はタタキ目がみられる。1111 は内外面にハケとナデ調整を施し，口縁端部は摘み出す。1112～1117 は弥生土器の鉢である。1112 は内外面ともに丁寧なナデが施され，底部中央は凹む。1113 は内面に板状工具によるナデと指頭圧痕，外面にはタタキのちナデと指頭圧痕が認められる。1114 は内面にナデ，外面にはタタキ目とナデ調整が認められる。1115 は口縁部内外面にヨコナデ，胴部はナデ調整がみられる。1116 は内面にハケ，底部はナデ，外面にはミガキ調整が施される。1117 は脚付鉢である。内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。1118 は弥生土器の高杯である。杯部内外面にはハケ，脚部内外面はナデ調整が認められる。1119～1121 は搬入品と考えられる弥生土器の甕である。1119 は内外面にナデ調整が認められる。1120 も内外面にナデ調整が認められる。1121 は内外面ともに丁寧なヨコナデ調整が施される。1122 は庄内式土器の甕である。口縁部内外面にヨコナデ，胴中央部から下部の内面にヘラケズリを施す。胴上部外面はタタキ目，中央部から下部はハケ調整が認められ，煤が付着する。1123 は支脚で，内外面に指頭圧痕がみられる。1124 は砥石で，2 面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。1125 は混入したと考えられるスクレイパーである。

ST105・SD24 埋土出土遺物(図2－147　1126～1128)

1126・1127 は弥生土器の壷である。1126 は器面の摩耗が著しく調整は不明である。1127 は口縁部内外面にナデ，頸部はハケ調整が認められる。1128 は弥生土器の鉢である。胴部下半外面にタタキ目がみられる。

ST106

ST106 は調査区東側で検出した壁溝を伴う竪穴建物跡である。撹乱に切られており，北側は調査区外へ続く。検出面からの深さは 9～20 ㎝で，床面の標高は約 4.2m である。埋土は土器を含む細礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂で，床面で確認できた壁溝は東側確認長約 1.1m，西側確認長約 1.4m，幅 9～22 ㎝，深さ 1～5 ㎝を測る。

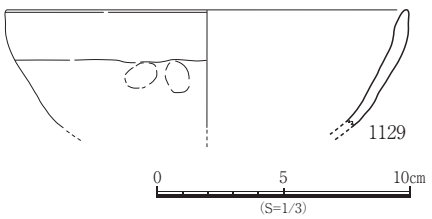


図2－148　ST106埋土出土遺物実測図

出土遺物は埋土から弥生土器11点，瓦質土器1点，瓦器1点

がみられ，瓦器(1129)が図示できた。

埋土出土遺物(図2－148　1129)

1129は瓦器の椀である。口縁部外面にはヨコナデ，体部は指頭圧痕がみられる。

② 土坑

SK17

SK17は調査区の西隅に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約1.0ｍ，短軸約0.5ｍ，深さ41㎝を測る。北側は調査区外へ続く。埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器43点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK18

SK18は調査区西側に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約1.1ｍ，短軸約0.6ｍ，深さ9㎝を測る。SD12と切り合っている。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～粗粒砂で，出土遺物は弥生土器36点，須恵器1点，石製品2点がみられ，石製品(1130･1131)が図示できた。

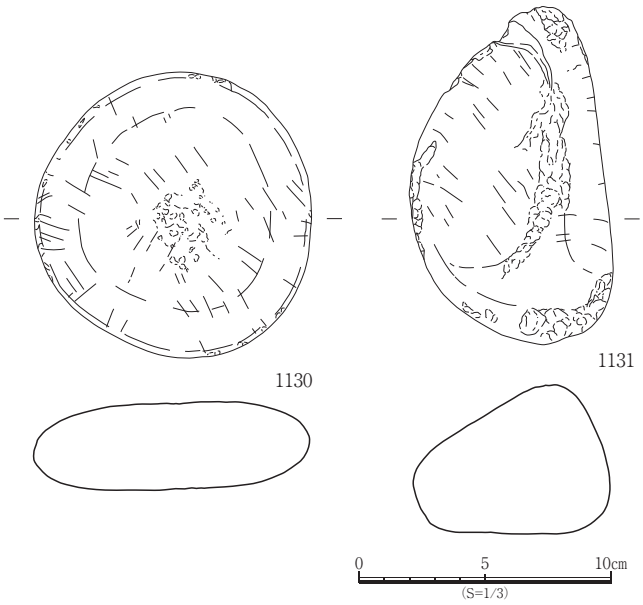


図2－149　SK18出土遺物実測図

出土遺物(図2－149　1130･1131)

1130・1131は叩石である。1130は両面と側面に使用痕がみられる。石材は砂岩である。1131は両面と側面に使用痕がみられ，被熱している。石材は砂岩である。

SK19

SK19は調査区西側に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約1.3ｍ，短軸約1.0ｍ，深さ20㎝を測る。SK20に切られており，北側は調査区外へ続く。埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器90点，須恵器3点，瓦1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK20

SK20は調査区西側に位置する土坑で，平面形は不整形を呈し，長軸約0.9ｍ，短軸約0.6ｍ，深さ22㎝を測る。SK19を切っており，北側は調査区外へ続く。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器9点，須恵器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK21

SK21は調査区西側の南端に位置する土坑で，平面形は不明，長軸・短軸・深さともに不明である。ST90を切っている。埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器1点がみられたが，図示できなかった。

SK22

SK22は調査区中央の北端に位置する土坑で，平面形は不整形を呈し，長軸約0.6ｍ，短軸約0.5ｍ，

深さ24㎝を測る。西側は調査区外へ続く。埋土は細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は皆無であった。

SK23

SK23は調査区中央の南端に位置する土坑で，平面形は不整長方形を呈し，長軸約2.8ｍ，短軸約1.1ｍ，深さ13㎝を測る。ST92を切っており，南側は調査区外へ続く。埋土は土器を含む細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器14点，須恵器2点，備前焼4点，土師質土器1点，染付4点，陶器15点，瓦17点がみられ，土師質土器1点(1132)，染付1点(1133)が図示できた。

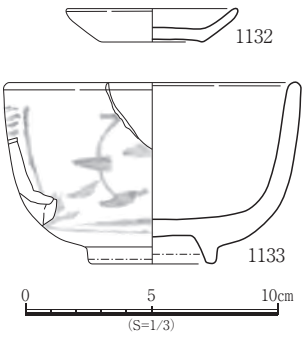


図2－150　SK23出土遺物実測図

出土遺物(図2－150　1132･1133)

1132は土師質土器の小皿である。内外面にナデ調整が施され，外底部は回転糸切りが認められる。1133は染付の碗である。高台の畳付に釉剥ぎが認められる。

SK24

SK24は調査区中央の南端に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約0.8ｍ，短軸約0.4ｍ，深さ30㎝を測る。ST94を切っており，南側は調査区外へ続く。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黄灰色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器1点がみられたが，図示できなかった。

SK25

SK25は調査区中央に位置する土坑で，平面形は不明，長軸・短軸・深さともに不明である。ST95を切っている。埋土は土器を含む細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器17点がみられたが，図示できるものはなかった。

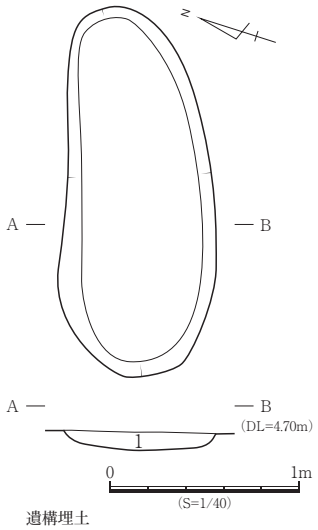


図2－151　SK27

SK26

SK26は調査区中央に位置する土坑で，平面形は不明，長軸・短軸・深さともに不明である。ST95を切っている。埋土は細礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は皆無であった。

SK27(図2－151)

SK27は調査区中央に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約2.0ｍ，短軸約0.7ｍ，深さ10㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器4点，須恵器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK28

SK28は調査区中央に位置する土坑で，平面形は楕円形を呈し，長軸約0.8ｍ，短軸約0.7ｍ，深さ14㎝を測る。埋土は細礫混じりの

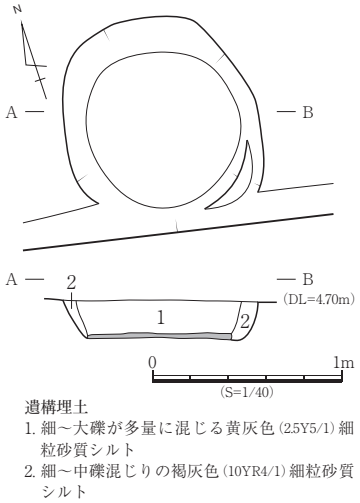


図2－152　SK29

灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は皆無であった。

SK29(図2－152)

SK29は調査区東側の南端に位置する土坑で，平面形は円形を呈し，径1.0ｍ，深さ20㎝を測る。南側は調査区外へ続く。埋土は1層が細～大礫が多量に混じる黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト，2層が細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで，底板が確認された。出土遺物は金属製品1点，染付1点が出土し，金属製品(1134)が図示できた。

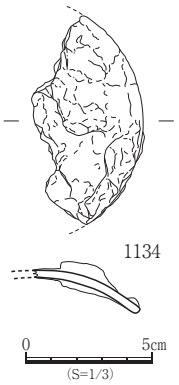


図2－153　SK29出土遺物実測図

出土遺物(図2－153　1134)

1134は金属製品である。鉄製で，蓋の可能性がある。

SK30

SK30は調査区東側の南端に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形とみられ，長軸約1.3ｍ，短軸約0.9ｍ，深さ10㎝を測る。遺構範囲は調査区南壁に続く。埋土は土器を含む細～中礫(地山礫)混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器11点，須恵器1点，土師質土器1点，瓦質土器2点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK31

SK31は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整円形を呈し，長軸約0.6ｍ，短軸約0.5ｍ，深さ17㎝を測る。SD15に切られ，SD17と切り合っている。埋土は細～中礫(地山礫)混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトで，遺物は皆無であった。

SK32

SK32は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整長方形を呈し，長軸約2.2ｍ，短軸約1.7ｍ，深さ28㎝を測る。ST99・100とSK35・SD15に切られる。埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂で，出土遺物は弥生土器44点，陶器1点がみられ，弥生土器2点(1135･1136)が図示できた。

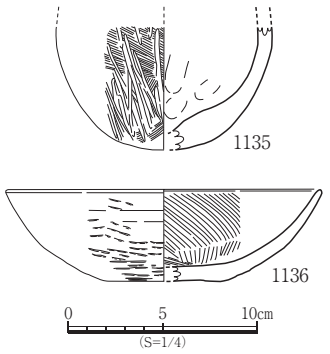


図2－154　SK32出土遺物実測図

出土遺物(図2－154　1135･1136)

1135・1136は弥生土器で，1135は甕である。内面はナデ，内面底部に指頭圧痕がみられる。外面にはハケとミガキ調整が施され，煤が付着する。1136は鉢である。内面口縁部はナデ，体部はハケを施す。外面口縁部にはタタキのちハケのちナデ，体部はタタキのちナデ調整がみられ，底部はヘラ切りと考えられる。

SK33(図2－155)

SK33は調査区東側に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約1.4ｍ，短軸約0.8ｍ，深さ13㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器22点がみられたが，図示できるものはなかった。

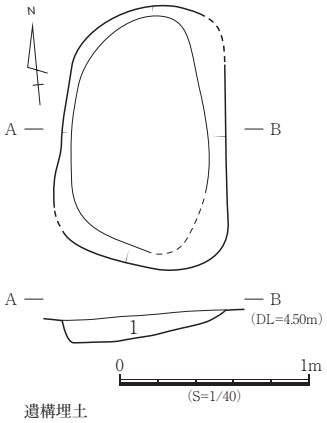


図2－155　SK33

SK34(図2－156)

SK34 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整円形を呈し，径約 0.9 m，深さ 14 ㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器 1 点がみられたが，図示できなかった。

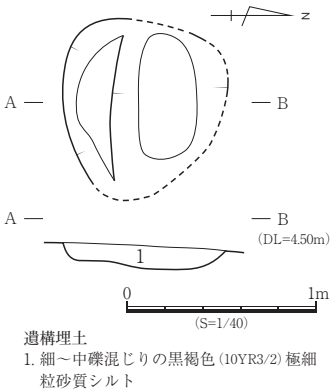


図2－156　SK34

SK35

SK35 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整形を呈し，長軸約 1.7 m，短軸約 0.8 m，深さ 4 ㎝を測る。SK32 を切り，SD15 に切られる。埋土は土器を含む細～中礫(地山礫)混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器 11 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK36

SK36は調査区東側の南寄りに位置する土坑で，平面形は円形を呈し，径約 1.0 m，深さ 74 ㎝を測る。埋土は細～大礫(地山礫)が多量に混じる黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は土師質土器4点，陶器28点，染付14点，瓦2点がみられ，陶器2点(1137･1138)が図示できた。

出土遺物(図2－157　1137･1138)

1137・1138 は陶器の蓋と鍋のセットである。1137 は鍋蓋で，内外面に施釉，鍔部は露胎，外面には笹文様，摘みは犬か獅子と考えられ，二次被熱をしている。1138 は鍋で，内面口縁受部から体部上半は露胎，外面には施釉，注口部を中心に笹文様，把手部は斑点文様が施される。二次被熱をしている。

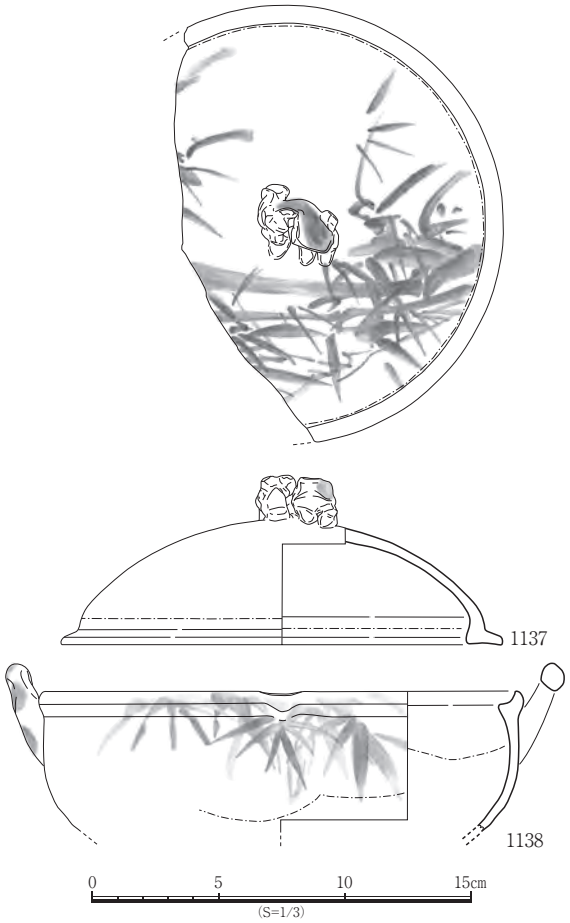


図2－157　SK36出土遺物実測図

SK37

SK37 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約 1.9 m，短軸約 1.5 m，深さ 55 ㎝を測る。ST97・100 を切っている。埋土は細～大礫(地山礫)が多量に混じる黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器 1 点，須恵器 1 点，陶器 1 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK38

SK38 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約 1.3 m，短軸約 1.0 m，深さ 82 ㎝を測る。ST99・100 を切っている。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルトをブロック状に多く含む黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器3点，須恵器5点，土師質土器1点，染

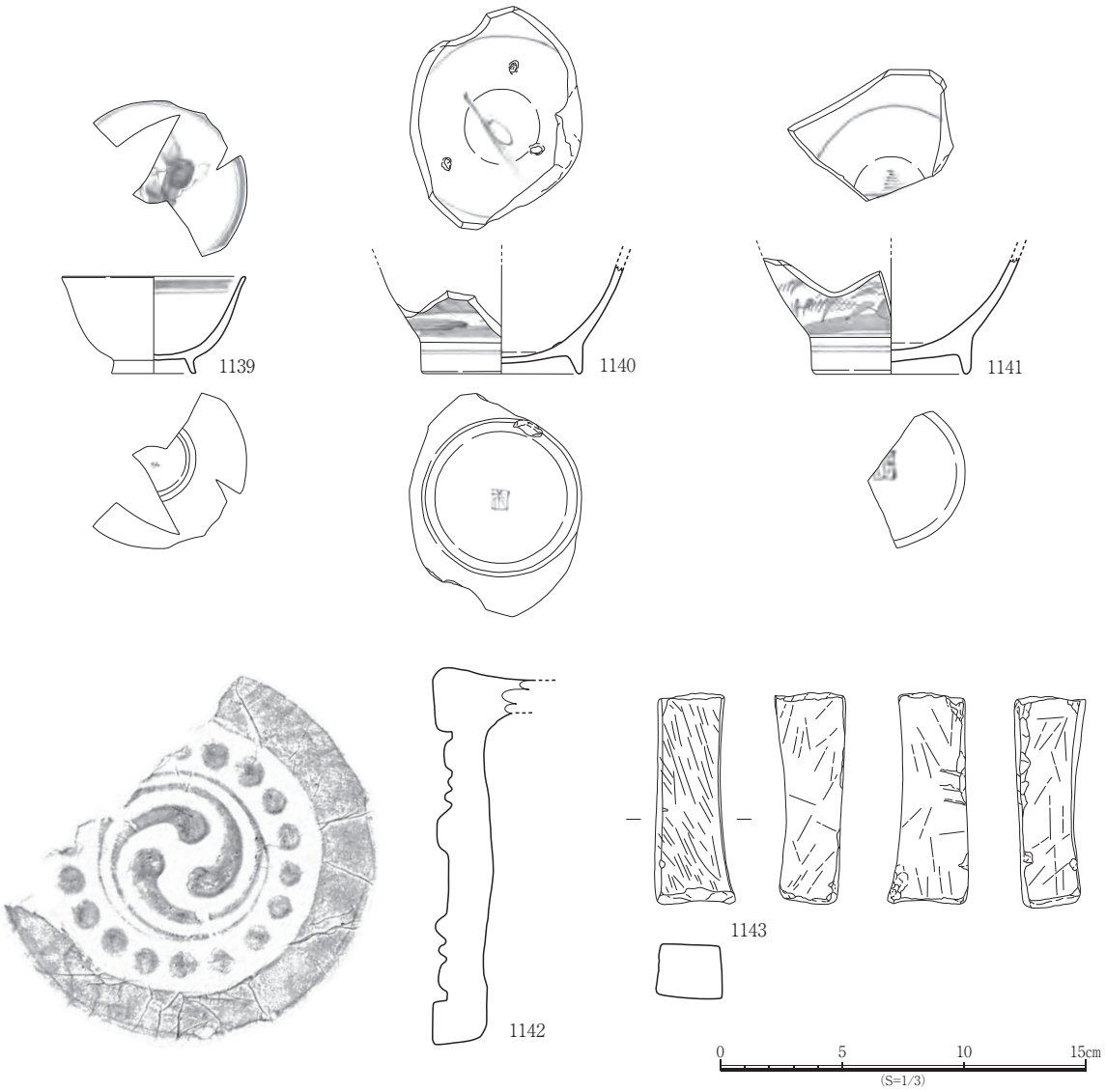


図２－158　SK38出土遺物実測図

付27点，陶器23点，瓦１点，石製品１点，金属製品１点がみられ，染付３点(1139～1141)，瓦１点(1142)，石製品１点(1143)が図示できた。

出土遺物(図2－158　1139～1143)

1139～1141は能茶山窯の染付碗である。1139は小碗で，口縁部は端反り，内面口縁部に帯線，見込みには草花文を施す。高台内に「サ」の銘がみられる。1140は広東碗形で，内面に圏線，見込みには岩波と考えられるものと目痕が３足みられる。外面は草花文と考えられ，高台には二重圏線，高台内には角枠に「茶」の銘がみられる。1141は広東碗形で，内面に圏線，見込みには岩波文を施す。外面は草文，高台には二重圏線，高台内には角枠に「茶」の銘がみられる。1142は軒丸瓦である。残存長は4.2㎝，三巴と珠文で飾られる。1143は砥石で，４面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。

SK39

SK39は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は円形を呈し，径約0.8ｍ，深さ40㎝を測る。SK44の床面より検出された撹乱遺構である。出土遺物は須恵器１点がみられたが，図示できなかった。

SK40

SK40 は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は円形とみられ，径 1.0 m，深さ 127 ㎝を測る。ST105 と SD24 を切り，SK41 と切り合っている撹乱遺構である。出土遺物は皆無であった。

SK41

SK41 は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は円形とみられ，径 1.2 m，深さ 134 ㎝を測る。ST105 と SD24 を切り，SK40 と切り合っている撹乱遺構である。出土遺物は皆無であった。

SK42

SK42 は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は不明，長軸約 1.4 m，短軸不明，深さ 96 ㎝を測る。複数の遺構と切り合っている撹乱遺構である。出土遺物は弥生土器 8 点，染付 1 点，陶器 2 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK43

SK43 は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は円形とみられ，径 1.5 m，深さ 46 ㎝を測る。SD19 を切る撹乱遺構である。出土遺物は皆無であった。

SK44

SK44 は調査区の東隅に位置する土坑で，平面形は不明，長軸約 3.0 m，短軸約 1.7 m，深さ 10 ㎝を測る。ST105 を切っており，床面から SK39 を検出し，北側と東側は調査区外へ続く。埋土は細礫混じりの黒褐色 (10YR3/1) シルト質細粒砂で，出土遺物は弥生土器 41 点と須恵器 1 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK45

SK45 は調査区の南東隅に位置する土坑で，平面形は不明，長軸約 1.9 m，短軸不明，深さ 86 ㎝を測る。SD24 を切り，SK42 と SD20 に切られている。埋土は土器を含む細～大礫混じりの黒褐色 (10YR3/1) シルト質中粒～粗粒砂で，出土遺物は弥生土器 162 点，金属製品 1 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK46

SK46 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形，長軸約 1.0 m，短軸約 0.3 m，深さ 10 ㎝を測る。埋土は土器を含む細礫混じりのにぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒～中粒砂がブロック状に混じる黒褐色 (10YR3/1) シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器 6 点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK47 (図 2－159)

SK47 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は不整楕円形を呈し，長軸約 1.6 m，短軸約 1.3 m，深さ 26 ㎝を測る。SK49 と切り合っている。埋土は黒色 (10YR2/1) シルト質細粒～中粒砂で，出土遺物は弥生土器 1 点がみられたが，図示できなかった。

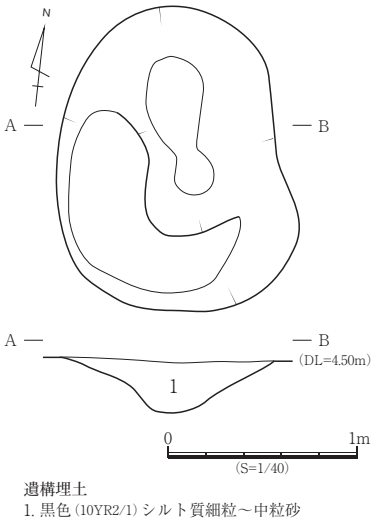


図 2－159　SK47

SK48

SK48 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形を呈し，長軸約 2.1 m，短軸約 0.6 m，深さ 22 ㎝を測る。複数のピットに切られている。埋土は細～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) シルト

質細粒砂で，出土遺物は弥生土器９点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK49

SK49 は調査区東側に位置する土坑で，平面形は隅丸長方形と考えられ，長軸約 2.9 m，短軸約 1.0 m，深さ７㎝を測る。SD22 に切られ，SK47・ピットと切り合っている。埋土は土器を含む細礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂がブロック状に混じる黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器１点がみられたが，図示できなかった。

③ 溝跡

SD10

SD10 は調査区の西隅に位置し，東西へとのびる溝で，調査区外へ続く。確認延長は 11.1 m，幅 0.3 ～ 0.4 m，深さ 3 ～ 13 ㎝を測り，断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は細～大礫混じりの黄灰色(2.5Y5/1)中粒～粗粒砂で，出土遺物は弥生土器 14 点，染付１点，陶器２点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD11

SD11は調査区西側の南寄りに位置し，東西へとのびる溝で，ピットに切られている。確認延長は2.3 m，幅0.6 m，深さ12㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器20点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD12

SD12は調査区西側に位置し，東西へとのびる溝で，SK18とピットに切られている。確認延長は不明，幅0.3 m，深さ７㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器12点，須恵器１点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD13

SD13 は調査区中央に位置し，東からST92 を切り南へとＬ字状にのびる溝で，南側は調査区外へと続く。確認延長は7.6 m，幅0.3～0.4 m，深さ６～９㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～中礫混じりの黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器１点，須恵器１点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD14(図2－160)

SD14 は調査区中央の南端に位置し，東西へとのびる溝で，ST96 を切り，東側は調査区外へ続く。確認延長は 2.0 m，幅 0.5 m，深さ 8 ㎝を測り，断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器３点，須恵器１点がみられたが，図示できるものはなかった。

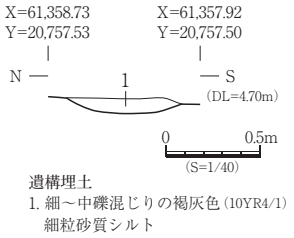


図2－160　SD14

SD15

SD15 は調査区東側の南寄りに位置し，東西へとのびる溝で，複数の遺構を切り，東側は調査区外へ続く。確認延長は 3.9 m，幅 0.4 m，深さ７㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～大礫(河原石)が多量に混じる黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルトで，出土遺物は弥生土器17点，土師質土器3点，染付2点，陶器2点，土製品１点，土人形２点が出土し，土師質土器２点(1144･1145)，土

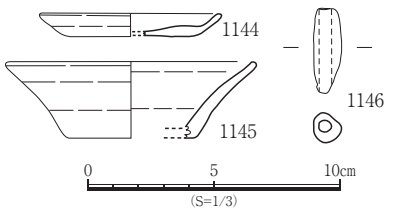


図2－161　SD15出土遺物実測図

製品1点(1146)が図示できた。

出土遺物(図2－161　1144～1146)

1144・1145は土師質土器である。1144は小皿で，内外面に回転ナデ調整が施され，底部は回転糸切りが認められる。1145は杯で，内外面に回転ナデ調整が施される。1146は土製品の土錘で，外面にナデ調整が認められる。

SD16

SD16は調査区東側に位置し，区画の東側からL字状に南へのびる溝で，確認延長は2.4 m，幅0.4～0.5 m，深さ5㎝を測り，断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルトで，出土遺物は弥生土器2点，青磁1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD17

SD17は調査区東側に位置し，南北は調査区外へとのびる溝で，SD15に切られている。確認延長は5.8 m，幅0.3 m，深さ4㎝を測り，断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルトで，出土遺物は弥生土器3点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD18

SD18は調査区東側の南端に位置し，南北へとのびる溝で，ST100を切り南側は調査区外へ続く。確認延長は2.3m，幅0.5～0.7m，深さ6～9㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～大礫(河原石)が多量に混じる黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルトで，出土遺物は弥生土器21点，陶器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

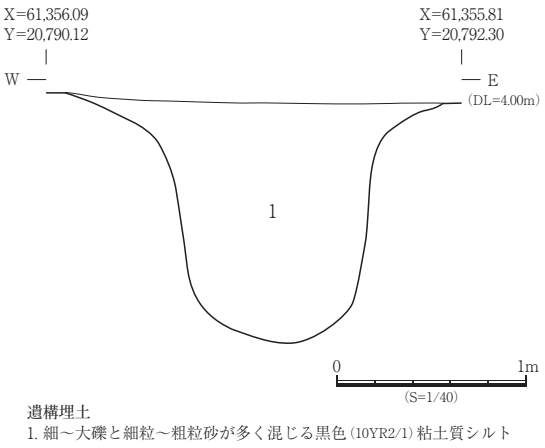


図2－162　SD24

SD19

SD19は調査区東隅に位置し，東西へとのびる溝で，SK43に切られ，東側は調査区外へ続く撹乱遺構である。確認延長は1.4 m，幅0.6 m，深さ9㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。遺物は皆無であった。

SD20

SD20は調査区南東隅に位置し，東西へとのびる溝で，SK45・ピットを切る撹乱遺構である。確認延長は0.3 m，

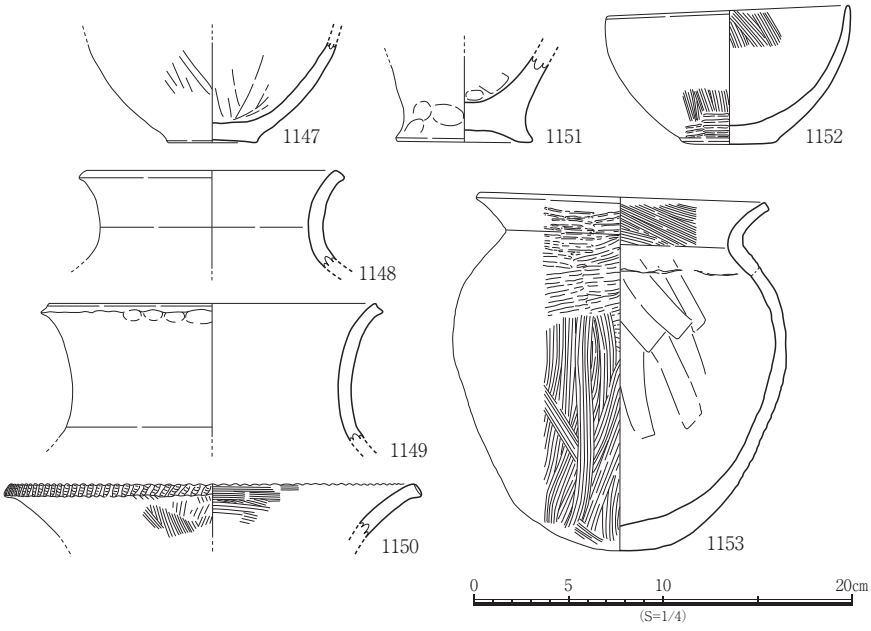


図2－163　SD24出土遺物実測図

幅0.3ｍ，深さ不明，断面形態は舟底形を呈する。出土遺物は弥生土器4点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD21

SD21は調査区東側に位置し，東西へとのびる溝で，撹乱遺構である。確認延長は1.9ｍ，幅0.5ｍ，深さ15㎝を測り，断面形態は逆台形を呈する。埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR5/1)シルト質細粒砂で，出土遺物は弥生土器３点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD22

SD22は調査区東側の南寄りに位置し，東西へとのびる溝で，SK47・49を切る撹乱遺構である。確認延長は5.0ｍ，幅0.8ｍ，深さ8㎝を測り，断面形態は浅い皿状を呈する。出土遺物は弥生土器1点がみられたが，図示できなかった。

SD23

SD23は調査区東側の南寄りに位置し，東西へとのびる溝で，ST101を切る撹乱遺構である。確認延長は0.8ｍ，幅0.2ｍ，深さ15㎝を測り，断面形態は舟底形を呈する。出土遺物は弥生土器19点，瓦１点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD24(図2－162)

SD24は調査区東隅に位置し，南北へとのびる溝で，ST105を切り，複数の遺構に切られ，遺構は南北ともに調査区外へ続く。確認延長は6.1ｍ，幅2.0ｍ，深さ126㎝を測り，断面形態はＵ字状を呈する。埋土は細～大礫と細粒～粗粒砂が多く混じる黒色(10YR2/1)粘土質シ

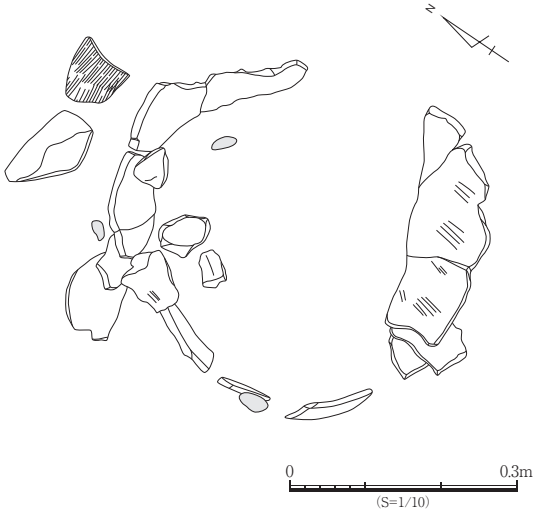


図2－164　SG6

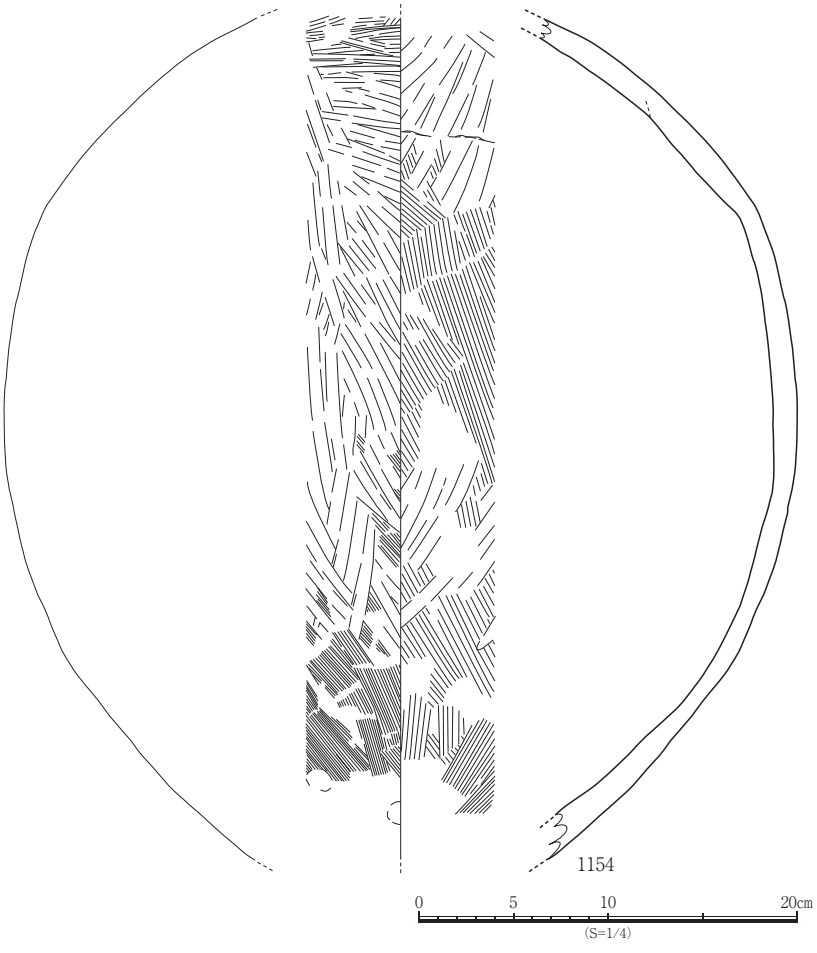


図2－165　SG6出土遺物実測図

ルトで, 出土遺物は弥生土器338点, 土師質土器1点, 石製品2点がみられ, 埋土から弥生土器6点(1147～1152), SD24とST105埋土から弥生土器1点(1153)が図示できた。

出土遺物(図2－163　1147～1153)

1147～1150は弥生土器の壺である。1147は内面にナデ, 外面にはミガキ調整が施される。1148は内外面にナデ調整が認められ, 口縁端部は面をなす。1149は内外面にナデ調整が認められ, 口縁端部は強いナデにより凹状をなす。1150は内面にヨコハケ, 外面にはハケ調整が認められ, 口縁端部はハケ状工具による刻目が施される。1151は弥生土器の甕で, 内外面にナデ調整が認められ, 底部はわずかに摘み出される。煤が付着する。1152は弥生土器の鉢で, 内面にハケ, 外面にはタタキのちハケ調整が施される。1153は弥生土器の甕で, 内面口縁部にハケ, 口縁端部は面をなし, 胴部はナデ, 肩部の接合痕が顕著にみられる。外面口縁部はタタキとナデ, 胴部にはタタキのちハケ調整が認められる。丸底を呈し, 煤が付着する。

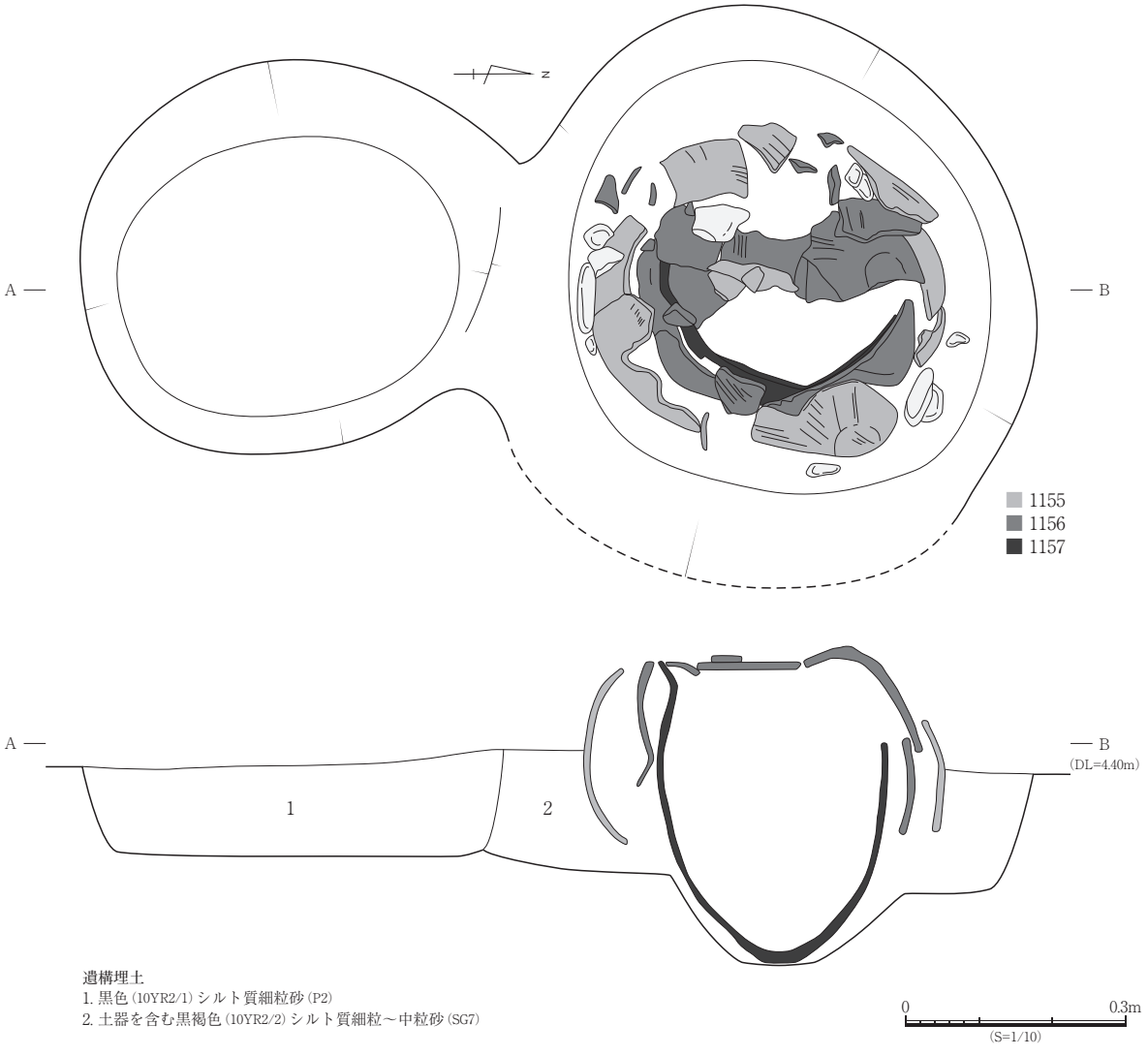


図2－166　SG7

④ 土器棺墓

SG6（図2－164）

SG6は調査区東側の南寄りに位置し，掘方の平面形態は円形を呈し，径約0.4ｍ，深さ5㎝を測る。埋土は細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器１点（1154）がみられ，図示できた。北側20㎝の位置に弥生土器の甕（1170）が出土している。

出土遺物（図2－165　1154）

1154は弥生土器の壺で，内面胴上部にナデ，中央部から下部にはハケとナデ，外面胴上部から中央部はミガキ，下半部はタタキのちハケ調整が認められる。

SG7（図2－166）

SG7は調査区東側に位置し，掘方の平面形態は不整形を呈し，長軸約0.8ｍ，短軸約0.7ｍ，深さ29㎝を測る。ST105とピットに切られている。埋土は土器を含む黒褐色（10YR2/2）シルト質細粒～中粒砂で，弥生土器3点（1155～1157）が重なりあった状態で出土し，3点とも図示できた。

図2－167　SG7出土遺物実測図1

出土遺物（図2－167･168　1155～1157）

1155は弥生土器の壺で，複合口縁部の受口状部分から口縁端部までナデ，頸部内面は粗いヨコハケ，外面は粗いタテハケを施す。内面胴部はハケとナデ，粘土帯接合部を確認できる。外面胴上部はタタキをハケで消し，中央部から下部はタタキのちハケを施す。底部は粗いハケでタタキを消す調整が認められ，煤が付着する。1156・1157は弥生土器の甕である。1156は内面口縁部にヨコハケ，口縁端部はナデにより面をなし，胴部には２種類のハケ，底部はナデを施す。外面口縁部はタタキのちハケ，胴上部から中央部にはタタキ目，下部はタタキのちハケ，底部は成形時のタタキ目が残り，平底を呈する。1157は内面口縁部にハケとナデ，口縁端部はヨコナデ，胴上部から中央部にハケとナデ，中央部から底部はナデを施す。外面は口縁端部直下にタタキ目，肩部までハケ，胴上部にタタキのちハケ，中央部はタタキ目，下部にはタタキのちハケとタタキ原体によるナデ，底部付近はハケが認められる。底部は摩耗している。

⑤ ピット

P19

調査区西側の南端に位置するピットで，平面形は不整楕円形を呈し，長軸0.9ｍ，短軸0.7ｍ，深さ9

cmを測る。SK18・SD11を切っており，埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで，出土遺物は弥生土器12点，須恵器2点が出土し，須恵器1点(1158)が図示できた。

出土遺物(図2－170　1158)

1158は須恵器の高杯である。内外面に回転ナデ調整がみられ，透かしを施す。

P20

調査区西側に位置するピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸0.4 m，短軸0.2 m，深さ19 cmを測る。遺構範囲は東側が調査区外に続き，埋土は土器を含む細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで，遺物は弥生土器8点が出土し，1点(1159)が図示できた。

出土遺物(図2－169　1159)

1159は弥生土器の甕で，内面にハケ，外面口縁部にタタキ目，口縁端部は強いナデにより凹状をなす。胴上部にはタタキのちハケ，下部はタタキ目がみられる。

P21

調査区東側に位置するピットで，平面形は円形を呈し，径約0.6 m，深さ34 cmを測る。SD21に切られており，埋土は土器を多く含み細～中礫が多く混じり黄褐色(10YR5/6)地山礫が混じる黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器9点，金属製品1点がみられ，弥生土器4点(1160～1163)が図示できた。

出土遺物(図2－169　1160～1163)

1160～1163は弥生土器である。1160は甕で，内面にハケ，外面上部にタタキ目，下部にはタタキのちナデが認められ，煤が付着する。1161は手づくね成形の鉢で，内外面にナデ調整が認められる。1162は器台で，内外面にナデ，受部の内底器面が摩耗し，脚部に4ヵ所の円孔が認めら

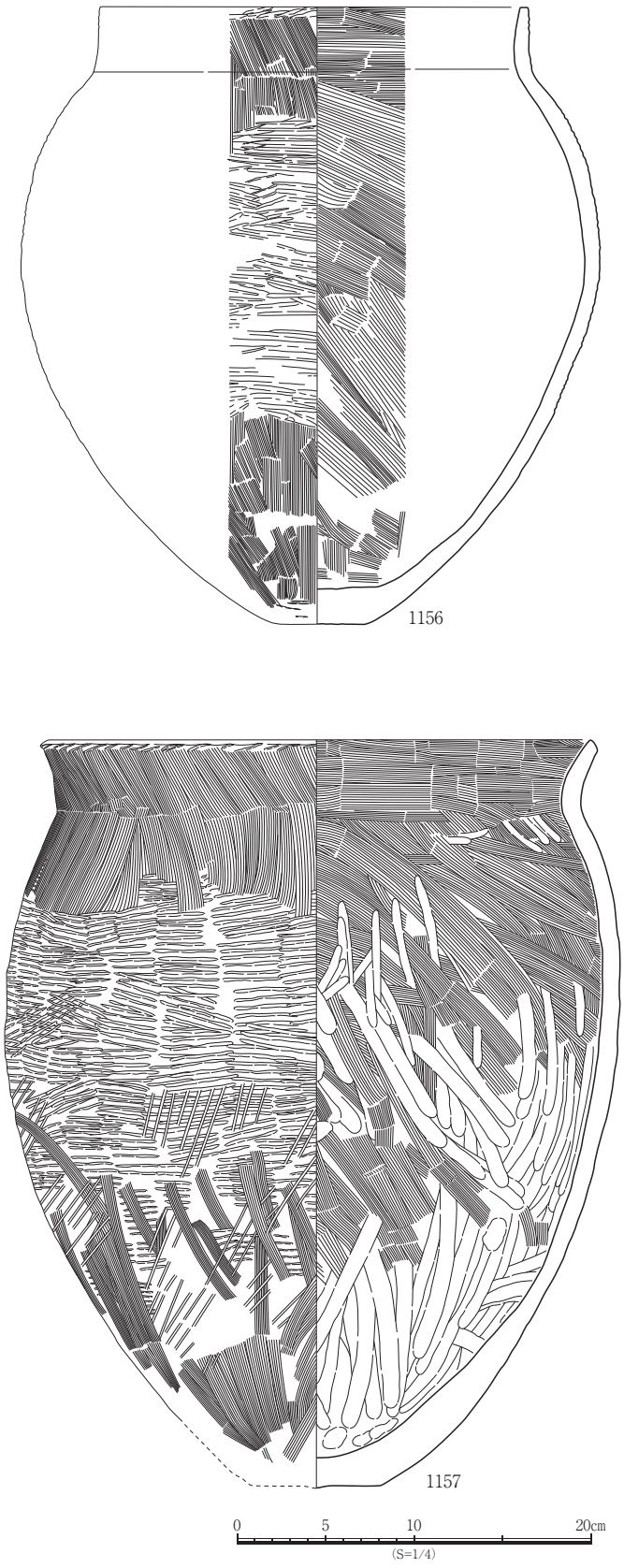


図2－168　SG7出土遺物実測図2

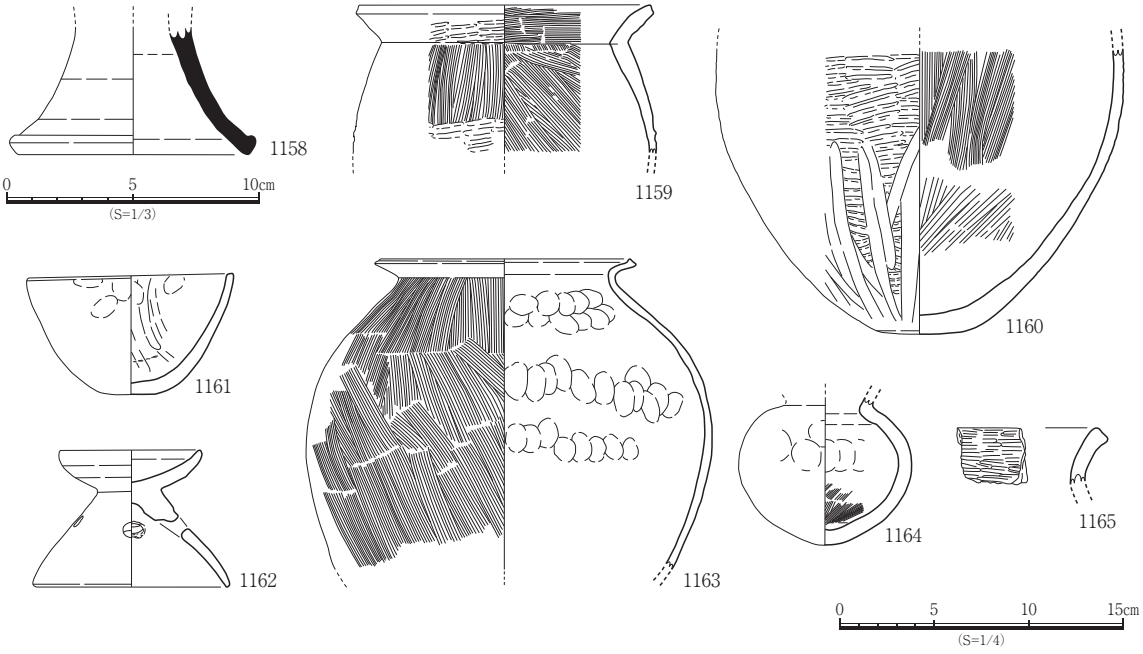


図2－169　ピット出土遺物実測図

れる。1163は搬入品の東阿波型土器の甕で，口縁部内外面にヨコナデ，端部は緩く凹状をなす。内面胴部に指頭圧痕，外面胴部にハケ調整が認められ，煤が付着する。

P22

調査区の東隅に位置するピットで，平面形は楕円形を呈し，長軸0.5ｍ，短軸0.4ｍ，深さ8㎝を測る。埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂で，出土遺物は弥生土器4点がみられ，1点(1164)が図示できた。

出土遺物(図2－169　1164)

1164は弥生土器の壷で，内外面にナデと指頭圧痕，内底部にはハケ調整が認められ，丸底を呈する。

P23

調査区の南東隅に位置するピットで，平面形は不整円形を呈し，径約0.3ｍ，深さ21㎝を測る。他のピットと切り合っており，埋土は土器を含む細礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂がブロック状に混じる黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器2点がみられ，1点(1165)が図示できた。

出土遺物(図2－169　1165)

1165は弥生土器の甕で，内面口縁部にミガキ，一部にハケ，口縁端部は強いナデにより凹状をなす。外面はナデ調整が認められる。

⑥ 性格不明遺構

SX2

調査区西側に位置する性格不明遺構で，平面形は溝状を呈し，長軸3.0ｍ，短軸1.0ｍ，深さ28㎝を測る。ST89を切っており，埋土は土器を含む細礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂がブロック状に混じる黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂で，出土遺物は弥生土器197点，須恵器5点，瓦2点，石製品1点がみられ，弥生土器1点(1166)，瓦1点(1167)が図示できた。

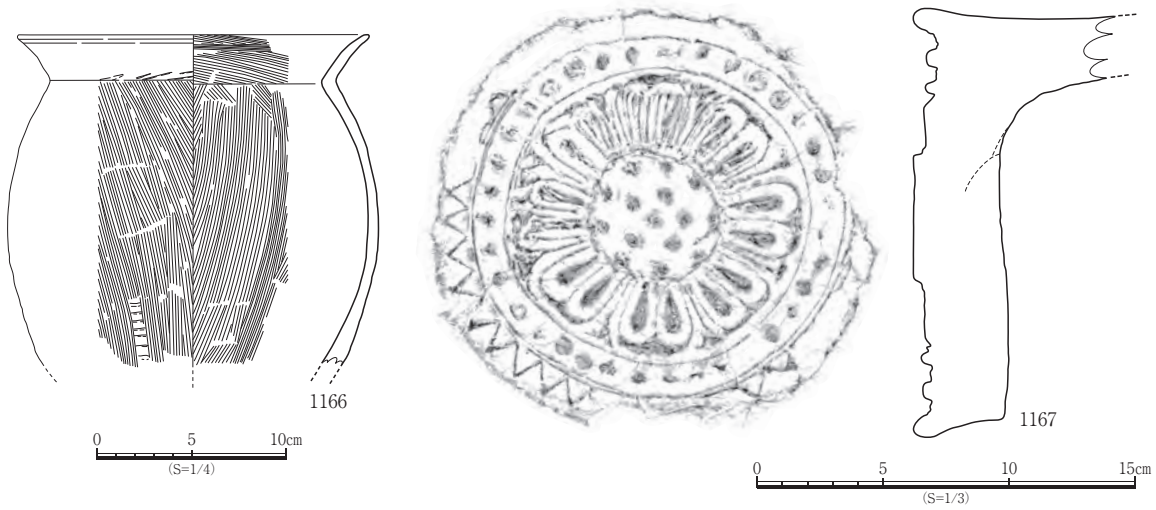


図2－170　SX2出土遺物実測図

出土遺物(図2－170　1166･1167)

1166は弥生土器の甕で, 口縁部内面にヨコハケ, 肩部から胴部はタテハケ, 外面口縁部にはヨコナデ, 胴部はタタキのちハケ調整が施され, 煤が付着する。1167は軒丸瓦で, 残存長は8.1㎝, 藤原宮(694年遷都)の造営時に造瓦された八葉複弁蓮華文軒丸瓦(讃岐の古瓦展より)の瓦当文様の影響を受けた藤原宮式の同系瓦と考えられる。

SX3

調査区東側に位置する性格不明遺構で, 平面形・長軸・短軸・深さ不明, ST99の上面遺構である。埋土は不明で, 出土遺物は弥生土器24点, 染付2点, 陶器1点, 瓦1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

⑦ 遺物包含層

ⅰ トレンチ出土遺物

須恵器(図2－171　1168)

調査区の南西側トレンチから出土した須恵器1点(1168)が図示できた。1168は須恵器の杯身で, 内外面に回転ナデ, 外面底部は回転ヘラケズリ調整が認められる。

弥生土器(図2－171　1169･1170)

中央部トレンチでは弥生土器1点(1169)が図示できた。1169は弥生土器の鉢で, 内面にナデと指頭圧痕, 外面にはナデ調整が認められ, 底部中央を指頭により凹ませる。E14－15－7グリッドから弥生土器1点(1170)が図示できた。1170は弥生土器の甕で, 内面にナデ, 外面口縁部はタタキのちナデ, 胴部にはタタキ目, 底部はタタキのちハケ調整が認められ, 丸底を呈する。SG6の北側20㎝の位置で出土している。

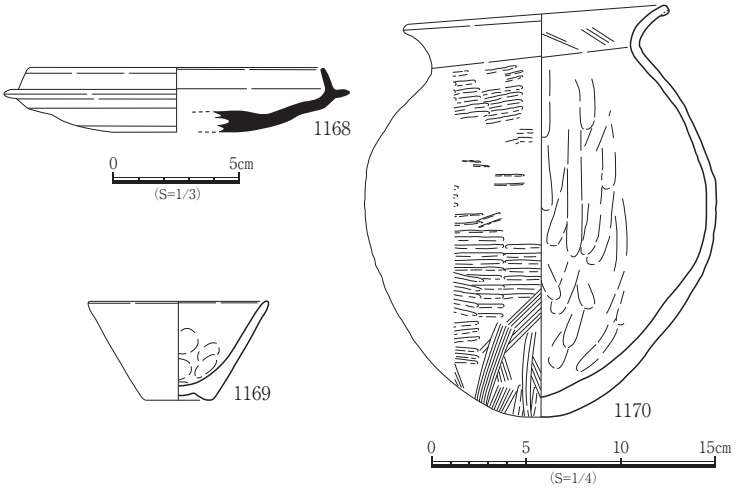


図2－171　トレンチ出土遺物実測図

ⅱ 第Ⅱ層出土遺物

弥生土器（図2－172　1171～1174）

1171 は甕である。内面口縁部にハケ，口縁端部はナデ，胴部にはナデ，外面口縁部はナデ，胴部にはタタキとハケ調整が認められる。1172は鉢である。内外面にナデ，内底部には指頭圧痕がみられる。製塩土器と考えられるが被熱していない。1173・1174は高杯である。1173は脚部が欠損しており，内外面にナデ，底部にはヘラケズリが認められる。1174 は脚部のみで，内外面にナデ，3 ヵ所に円孔を施す。

須恵器（図2－172　1175･1176）

1175・1176は高杯である。1175は杯部のみで，内外面に回転ナデ調整が認められる。1176は脚部のみで，内外面に回転ナデ調整が認められ，透かしが施される。

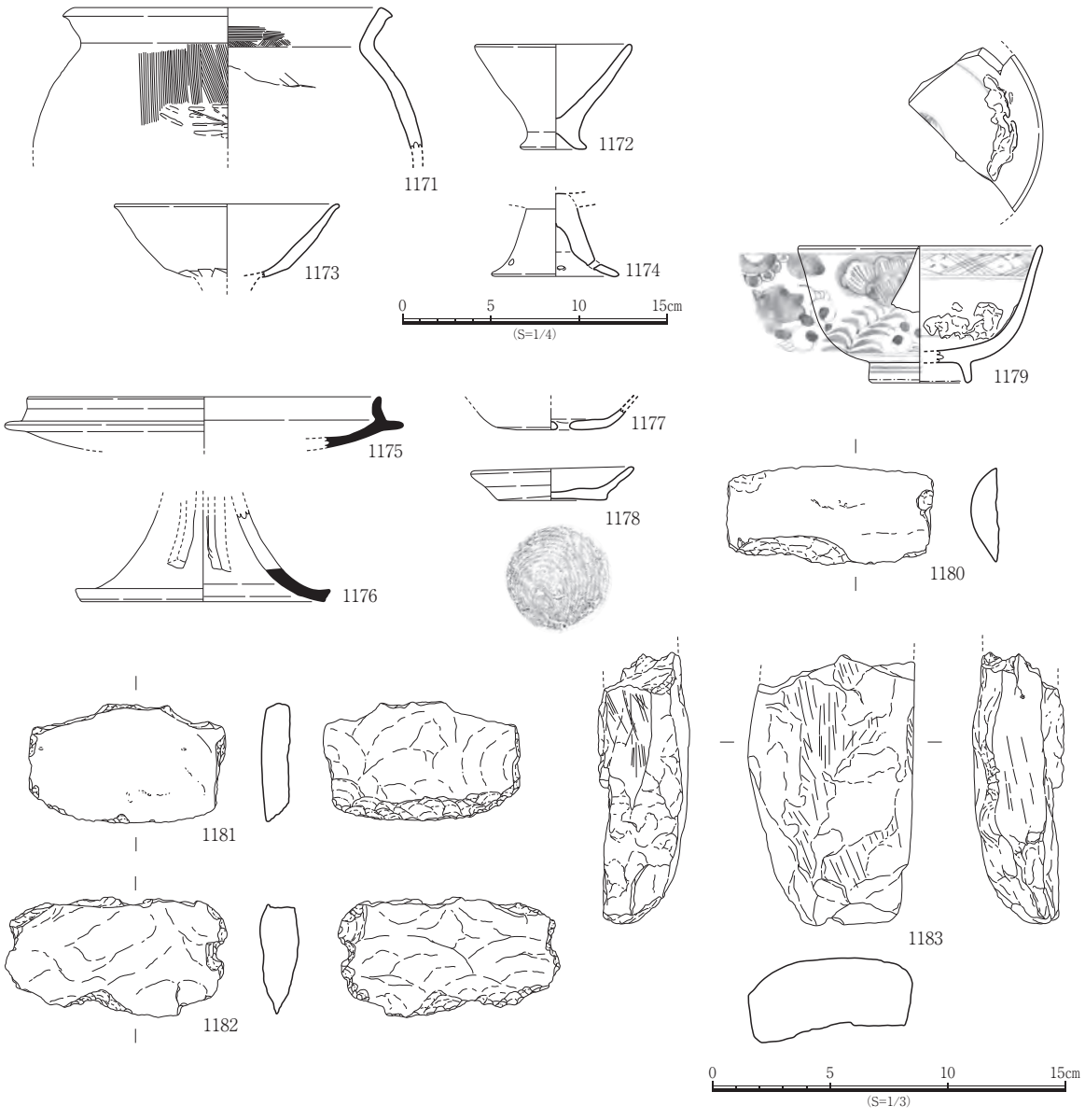


図2－172　第Ⅱ層出土遺物実測図

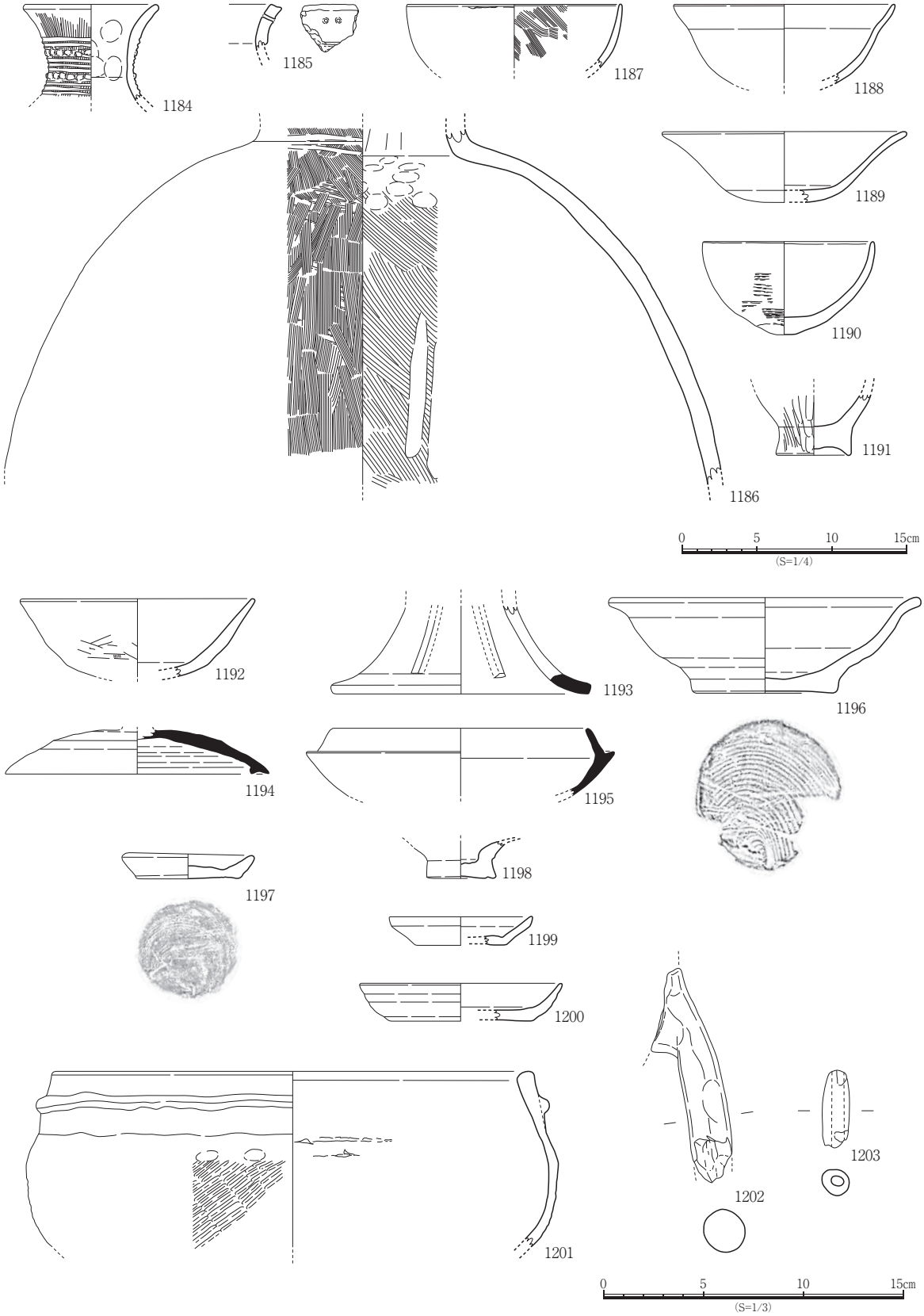


図2－173　第Ⅲ層出土遺物実測図1

土師質土器(図2－172　1177･1178)

1177は小皿である。内外面にナデ，外底部は回転糸切り，内底部からの穿孔がみられる。1178は灯明皿である。内外面に回転ナデ，外底部は回転糸切り，口縁部に広い範囲でタールが付着する。

染付(図2－172　1179)

1179は碗である。口縁部は端反，内側面に四方襷，見込みに圏線と文様を施す。外側面の圏線間に草花文，高台に二重圏線を施し，畳付は露胎である。内面の付着物は食物残滓と考えられる。

石製品(図2－172　1180～1183)

1180～1182は石庖丁である。1180は未成品で，片側に抉りを施し，片面に自然面が残る。石材は砂岩である。1181は片側に抉りを施し，片面に自然面が残る。石材は砂岩である。1182は両側に抉りを施し，自然面が残る。石材は砂岩である。1183は砥石である。3面に使用痕がみられる。

ⅲ 第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図2－173　1184～1192)

1184～1186は壷である。1184は内面にナデと指頭圧痕，外面はハケ，ヘラ描沈線文の下に2条の扁平刻目突帯と突帯下にヘラ描沈線文を施す。1185は内外面にナデ，口縁端部は強いナデにより凹む。2ヵ所に円孔を施す。1186は内面頸部にハケ，肩部に指頭圧痕，胴部にはハケとナデ，外面はタタキのちハケ調整が認められる。1187～1191は鉢である。1187は内外面にハケのちナデ調整が認められる。1188は内面にナデ，外面口縁部にはヨコナデ，体部はナデと指頭圧痕が認められる。1189は内面にナデとハケ調整が認められる。1190は内面にナデ，内底部には指頭圧痕，外面はタタキ目をナデ消す。1191は内面ナデ，外面はハケとナデ調整が認められ，底部は高台状をなす。1192は高杯である。内面はハケのちヨコナデ，外面上部にはタテハケのちヨコナデ，下部はヘラケズリが認められる。

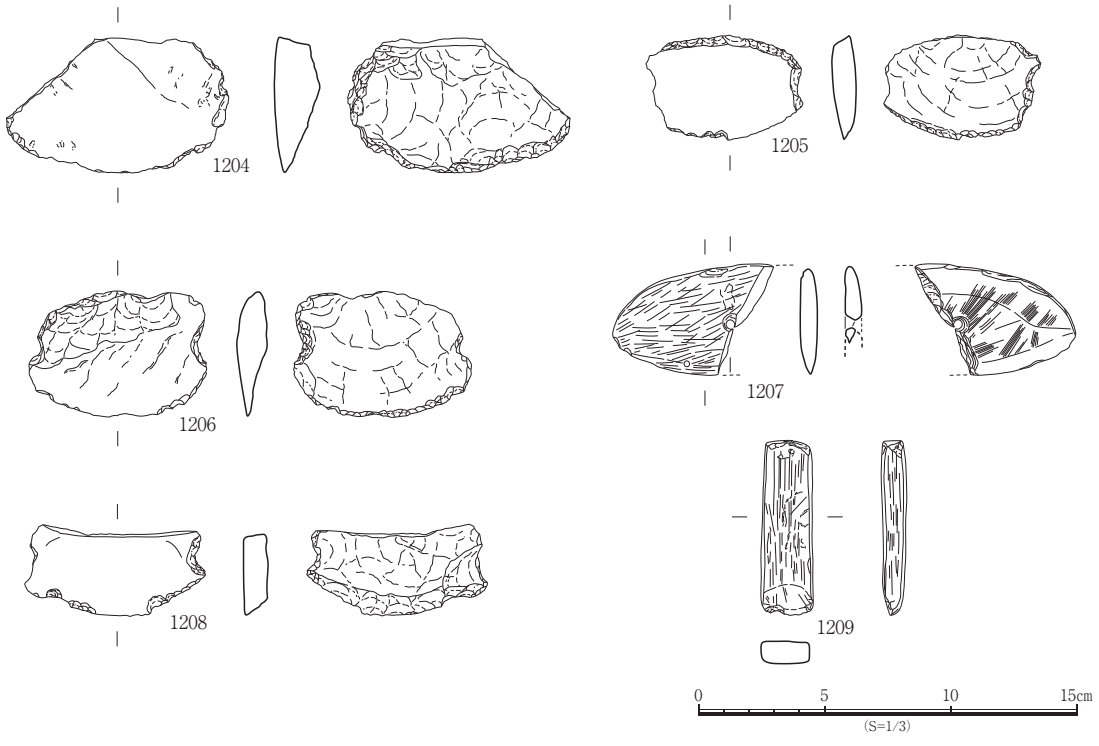


図2－174　第Ⅲ層出土遺物実測図2

須恵器(図2－173　1193～1195)

1193は高杯の脚部である。内外面に回転ナデ調整が認められ，透かしを施す。1194は杯蓋である。内面と外面口縁部はナデ，天井部には回転ヘラケズリが認められ，摘みは欠損する。1195は杯身である。内外面に回転ナデ，外面底部は回転ヘラケズリが認められる。

土師質土器(図2－173　1196～1201)

1196は杯である。口縁部は玉縁状を呈し，内外面は回転ナデ，外底部は回転糸切り痕がみられる。1197～1199は小皿である。1197は内外面にナデ，外底部には回転糸切り痕がみられる。1198は内外面に回転ナデ，外底部は回転糸切り痕がみられる。1199は灯明皿で，内面は回転ナデ，内面全面と外面の一部にタールが付着し，外底部は回転糸切り痕がみられる。1200は皿である。口縁部にナデ，外面体部にハケ，底部は回転糸切り痕がみられる。1201は羽釜である。口縁部内外面にヨコナデ，内面胴部はナデ，外面鍔直下にはヨコナデ，胴部にはタタキ目が認められ，煤が付着する。

瓦質土器(図2－173　1202)

1202は羽釜の脚部分である。外面はナデ調整が認められ，煤が付着する。

土製品(図2－173　1203)

1203は土錘である。表面の摩耗が著しく調整は不明である。

石製品(図2－174　1204～1209)

1204～1208は石庖丁である。1204は打製石庖丁の未成品で，片面に自然面が残る。石材は砂岩である。1205は両側に抉りを施し，片面に自然面が残る。石材は粘板岩である。1206は両側に抉りを施し，片面の一部に自然面が残る。石材は砂岩である。1207は全面が研磨され，石材は粘板岩である。1208は両側に抉りを施し，片面に自然面が残る。石材は砂岩である。1209は石斧である。全長7.0㎝，全幅2.1㎝，全厚1.0㎝，重量28.8gを測り，全面丁寧に研磨される。石材は緑色片岩である。

ⅳ 第Ⅳ層出土遺物

須恵器(図2－175　1210)

1210は壷である。内外面は回転ナデ，上部に爪状の圧痕が認められ，ヘラ状工具による刻目が施される。

土師質土器(図2－175　1211)

1211は杯である。内外面に回転ナデ，タールが付着し，外底部は回転糸切り痕がみられる。

石製品(図2－175　1212)

1212は叩石である。両側に使用痕が認められ，石材は砂岩である。

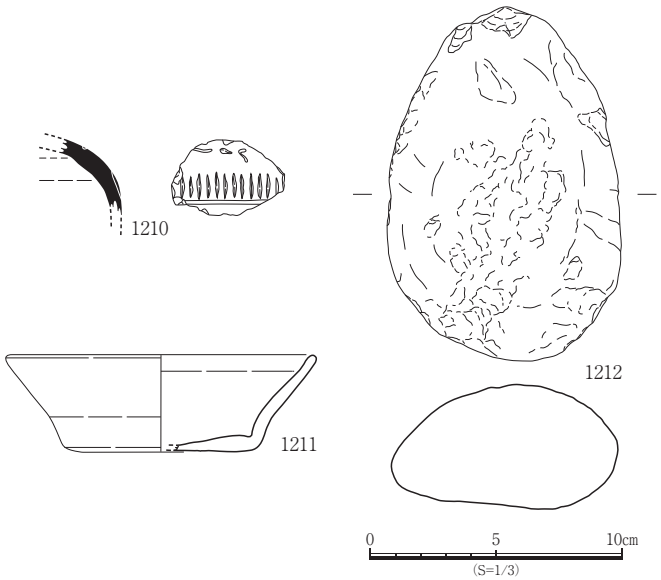


図2－175　第Ⅳ層出土遺物実測図

第Ⅲ章　ⅣC区

1. 調査の概要と基本層位

(1) 調査の概要

東野土居遺跡の東端部にあたる調査区で，ⅣB区の東側に位置する。調査面積は1,394㎡を測る。遺構は竪穴建物跡4軒，掘立柱建物跡8棟，柵列跡1列，土坑46基，溝跡16条，性格不明遺構4基，ピット等を検出した。遺構は調査区の西側に集中しており，遺物は竪穴建物跡から多く出土している。

(2) 基本層位(図3－1)

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層(耕作土)

第Ⅱ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層

第Ⅲ層　暗褐色(10YR3/3)シルト層

第Ⅳ層　黒褐色(10YR2/3)シルト層

第Ⅴ層　0.5～3㎝大の中礫が混じる黒褐色(7.5YR3/1)シルト層

第Ⅵ層　灰黄褐色(10YR5/2)シルト層

第Ⅶ層　1～5㎝大の円礫及び地山礫が混じる明褐色(7.5YR5/6)礫層

第Ⅷ層　5～10㎝大及び20㎝大の礫層

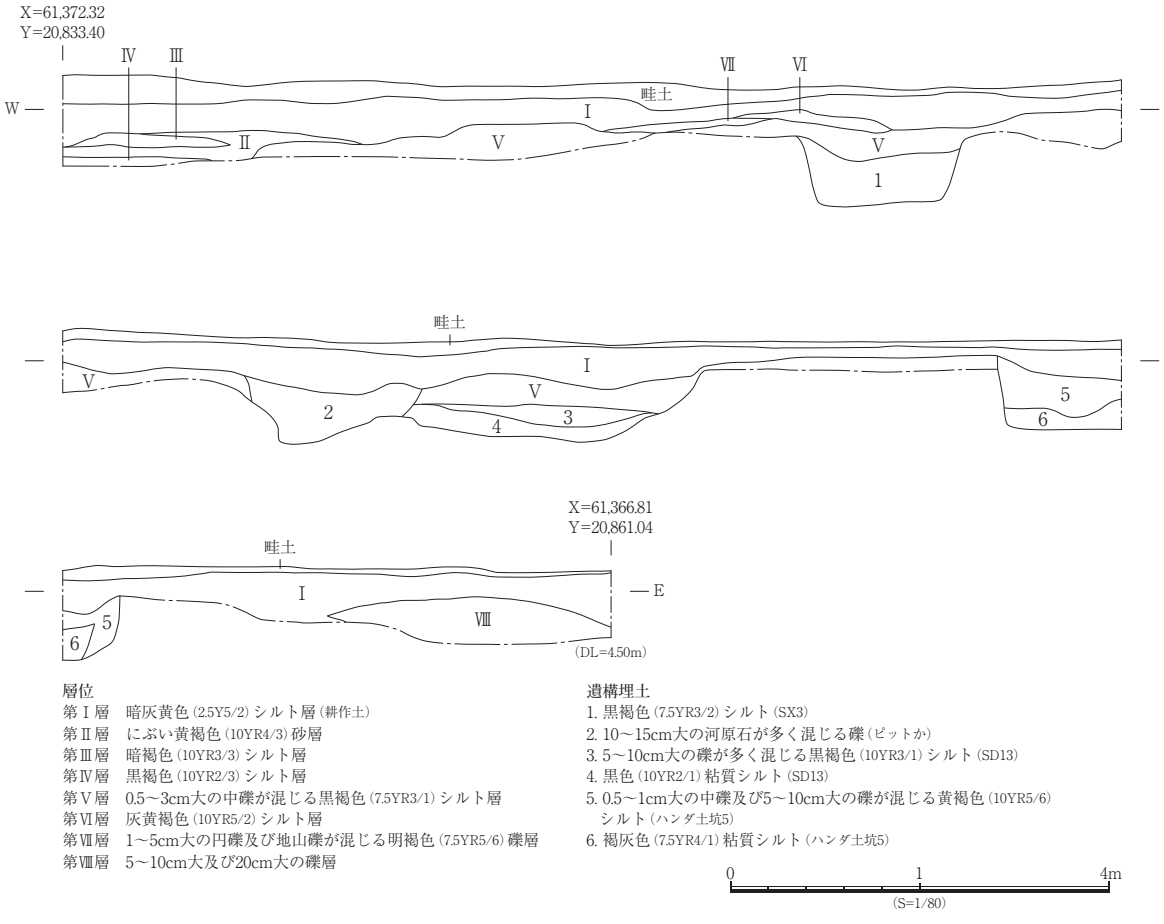


図3－1　調査区北壁セクション

2. 検出遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

ST107(図3－2)

調査区の南西部隅において検出した。残存長は南北 2.9m 以上，東西 3.4m 以上を測る。検出面からの深さは 20 ～ 30 ㎝で，埋土は土器片及び中礫が混じる黒褐色(10YR3/2)シルトである。床面からは 10 個のピットを検出した。主柱穴かどうかは判然としない。壁側には壁溝が検出されており，周縁部には壁溝が巡っていたものと考えられる。

出土遺物は弥生土器壷(1213～1216)・甕(1217)・鉢(1218)・蓋(1219)・高杯(1221)，ミニチュア土器(1220)が図示できた。

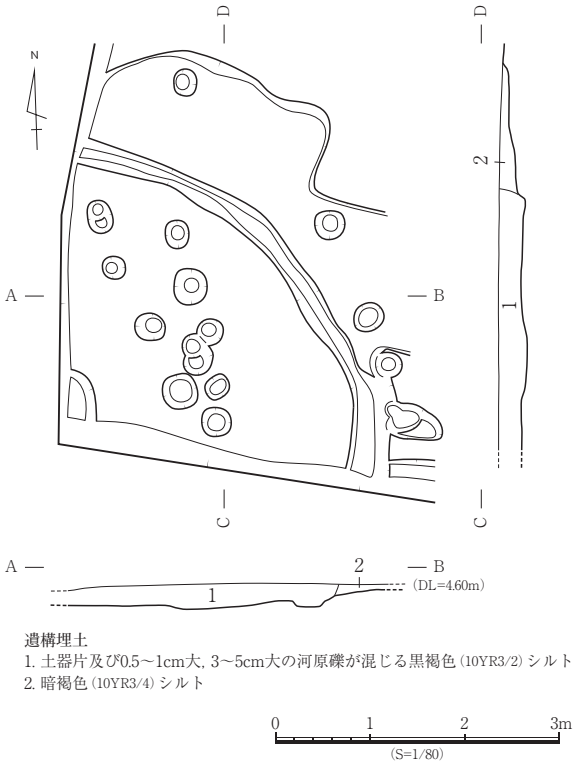


図3－2　ST107

出土遺物(図3－3　1213～1221)

1213 は口縁部に粘土帯を貼付する。貼付部分に指頭圧痕がみられ，内面はハケ調整を施す。1214 は口唇部がやや肥厚する。外面と内面はともに摩耗するが，ハケ調整が一部にみられる。1215 は壷の底部で平底を呈する。外面はタタキのちタテ方向のハケ調整，内面はハケ調整とナデ調整を施す。1216 も底部で平底を呈する。外面は指頭圧痕とナデ調整で一部にハケ調整，内面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。1217 は甕で口縁部は外反し，口唇部は内傾して上方にのびる。口唇部外面は浅い凹状を呈する。頸部から体部にかけて外面はハケ調整，内面はナデ調整とケズリ調整を施す。1218 は鉢で，底部は平底を呈し，外面と内面はともに摩耗するが，外面にはタタキが薄く認められる。1219 は蓋で外面に指頭圧痕とナデ調整がみられ，内面はナデ調整を施す。1220 はミニチュア土器または小型の鉢と考えられる。外面は一部にミガキ調整を施す。内面は指頭圧痕とナデ調整がみられ，一部にハケ調整が認められる。1221 は高杯の脚部である。外面はミ

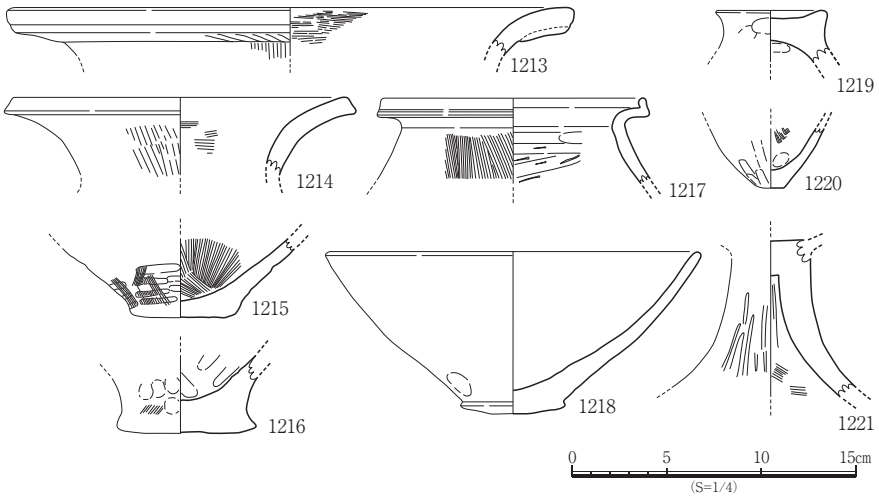


図3－3　ST107出土遺物実測図

ガキ調整，内面にナデ調整とハケ調整を施す。

ST108（図3－4）

調査区の西部において検出した。竪穴建物跡の北部は調査区外に続くと考えられる。規模は南北4.9m以上，東西5.2mを測り，平面形は円形から不整円形を呈する。検出面から床面までの深さは26cmで，埋土は礫が混じる黒褐色（7.5YR2/2）シルトが主体である。中央ピットは竪穴建物跡のほぼ中央部に位置しており，規模は長軸1.1m，短軸0.6mを測る。平面形は楕円形を呈し，検出面からの深さは約15cmで，埋土は同一である。床面からは11個のピットを検出した。そのうちP1～4は主柱穴と考えられ，検出面からの深さは28～44cmを測る。遺構の西部から南部にかけて壁溝が検出されており，周縁部には壁溝が巡っていたものと考えられる。遺物には弥生土器前期末～中期初頭と後期末の2時期が出土しており，遺構が重複している可能性が考えられる。

出土遺物は弥生土器壺（1222～1235）・甕（1236～1245）・鉢（1246～1248）・高杯（1249～1254･1256），土製品（1255･1258），ミニチュア土器（1259･1260），土師器（1257），石製品（1261～1270）が図示できた。

出土遺物（図3－5～7　1222～1270）

1222は口縁部に粘土帯を貼付する。貼付部の外面は指頭圧痕が顕著である。頸部にかけてはハケ調整を施す。内面はナデ調整とハケ調整を施す。1223は口唇端部を上方に摘み上げる。外面は口縁部にナデ調整とハケ調整，内面はハケ調整で，下半部はケズリ調整とナデ調整を施す。1224は口縁部を肥厚させる。口唇部は平坦面を呈し，外面にナデ調整，内面はハケ調整を施す。1225は頸部外面にハ

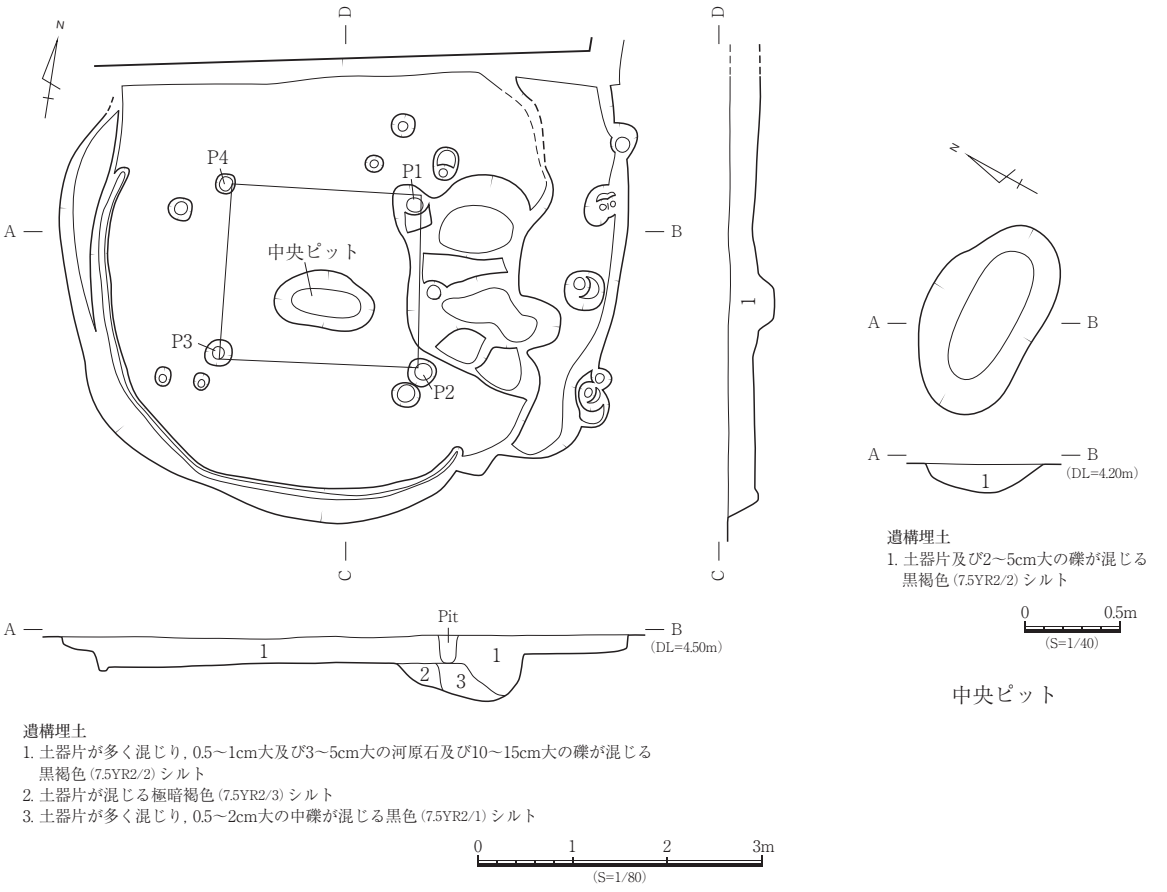


図3－4　ST108

ケ調整と列点文が巡り，内面にナデ調整を施す。1226は壷の口縁部で，外面はハケ調整ののちにヘラ描直線文を配し，扁平な刻目突帯を貼付する。内面はハケ調整を施す。1227は壷の頸部から体部である。頸部外面には列点文(刺突か)を配し，頸部から体部内面にかけてナデ調整と指頭圧痕がみられる。1228は底部である。大型で厚みをもつ。外面は指頭圧痕がみられ，一部面取り状をなす。内面はナデ調整である。1229は底部で平底を呈する。外面はタタキののちにハケ調整，内面にナデ調整を施す。1230は壷の口縁部である。外面には粘土帯を貼付する。内面に4条のヘラ描沈線文と短い沈線を配する。1231は壷である。外面は多条のヘラ描沈線文と斜格子文を施す。内面はナデ調整である。1232は長頸壷で，口唇部は平坦面を呈する。口縁端部は外面内面ともにナデ調整，頸部にかけては外面にハケ調整，内面はハケ調整と指頭圧痕がみられる。

1233は壷の口縁部で，口唇部はやや肥厚する。外面はナデ調整とハケ調整，内面にハケ調整を施す。1234は壷で，外面は多条のヘラ描沈線文に扁平な突帯を貼付し，刻目を配する。内面はナデ調整を施す。1235は壷で，口唇部は肥厚し，ナデ調整を施す。外面は頸部にかけてハケ調整，口縁部内面にナデ調整とハケ調整を施す。

1236は甕の口縁部で短く外反し，のびる。口唇部は平坦面を呈する。外面は体部にタタキが認められ，頸部にはハケ調整が施される。内面は口縁部にナデ調整，頸部から体部にかけて指頭圧痕とケズリ調整がみられる。1237は口唇部が下方にやや肥厚する。わずかに凹状を呈する。外面は体部から頸部までタタキが認められ，口縁部にナデ調整，頸部にはハケ調整を施す。内面は口縁部にナデ調整とハケ調整，頸部から体部にかけてナデ調整を施す。1238は外面の体部から頸部近くまでタタキが認められる。口唇部はナデ調整で，頸部はハケ調整を施す。1239は口縁部が外反し，外方に短くのび，口唇部はやや肥厚する。外面は口縁部から頸部にかけてナデ調整，体部は摩耗する。内面は口縁部にナデ調整，体部に指頭圧痕とナデ調整がみられる。1240は外面の口縁部にナデ，頸部から体部にかけハケ調整で一部ミガキ状を呈する。内面は口縁部にハケ調整を施す。1241・1242は同一個体と考えられる甕である。1241は摩耗するが，内面に指ナデがみられる。1242の外面は体部下半部から底部にかけハケ調整，内面は指ナデを施す。1243は口縁部が外反して短くのびる。外面は口縁部に指頭圧痕がみられ，頸部から体部にかけてハケ調整を施す。内面は口縁部にハケ調整とナデ調整，頸部から体部にかけてケズリ調整を施す。1244は底部である。外面は指頭圧痕及び工具による圧痕がみられる。内面はナデ調整を施す。1245は甕の底部である。外面と内面は摩耗する。

1246は鉢で底部は平底である。外面はタタキを施し，内面は口縁部から体部途中までハケ調整，体部下半部から底部にかけて指頭圧痕とナデ調整がみられる。1247は底部が平底で，外面内面はともに指頭圧痕とナデ調整がみられる。1248の底部は平底を呈する。外面はハケ調整とナデ調整，内面は口縁部にハケ調整，体部はナデ調整を施す。

1249～1252は高杯の脚部である。1249は外面にハケ調整ののちタテ方向のミガキ調整を施す。内面はハケ調整で，一部ヨコ方向のミガキ調整がみられる。3ヵ所に円孔が認められる。1250は外面にハケ調整ののちミガキ調整を施し，内面は裾部にハケ調整，端部はナデ調整を施す。裾部内面には帯状に煤が付着する。3ヵ所に円孔が施される。1251は柱部から裾部にかけてミガキ調整，裾端部はナデ調整を施す。内面は一部にハケ調整がみられ，その他は摩耗が著しい。4ヵ所に円孔を施す。1252は杯部の外面にミガキ調整，内面はハケ調整とナデ調整を施す。1253は杯部の外面と内面にミガキ調整を施す。1254は杯部の外面と内面にミガキ調整，脚部は外面にミガキ調整とハケ調整で内面に

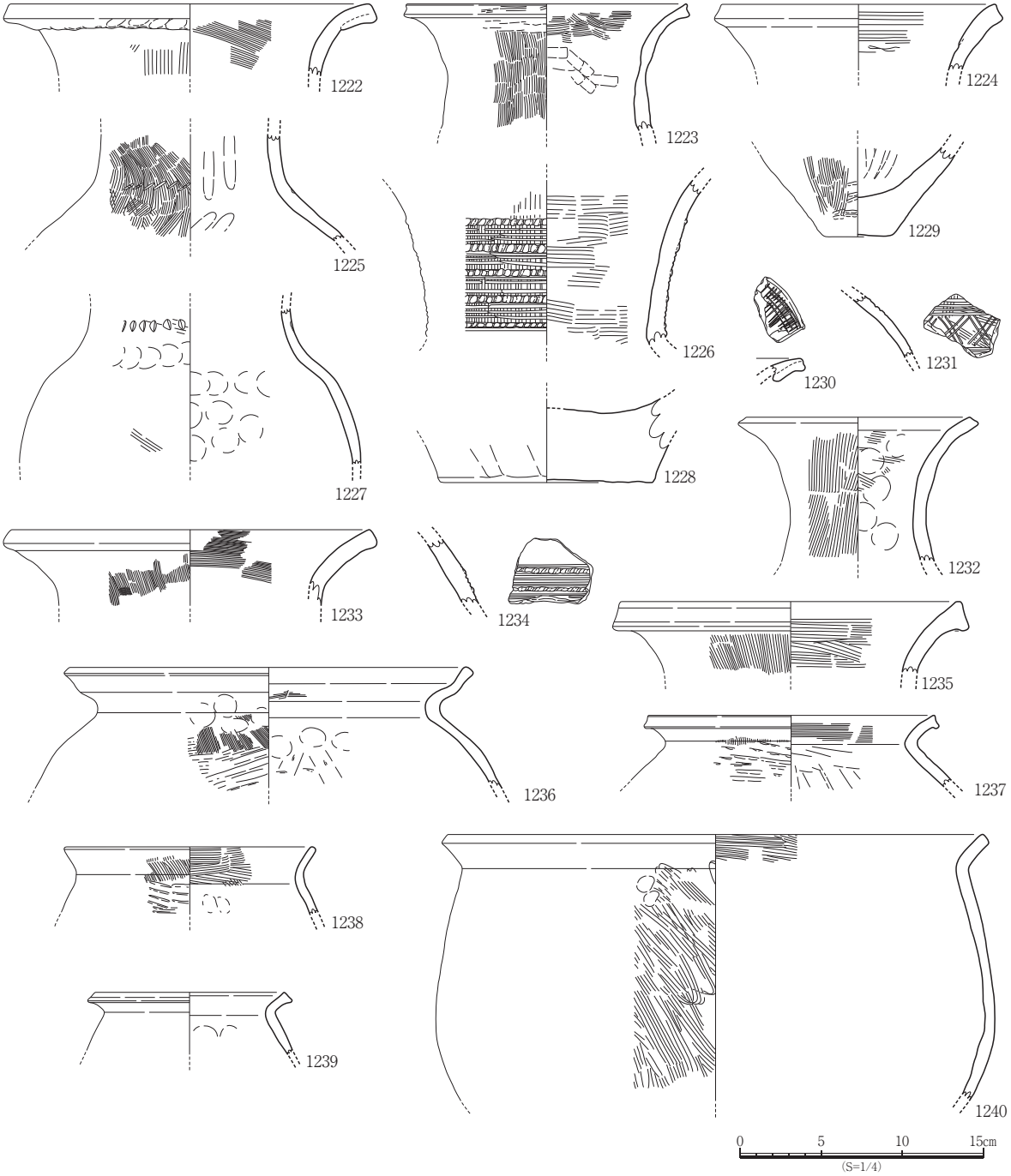


図3－5　ST108出土遺物実測図1

ハケ調整を施す。1256は杯部の外面内面にハケ調整，脚部外面はハケ調整で一部にミガキ調整がみられる。脚部内面はハケ調整及びナデ調整を施す。脚部には7ヵ所の円孔が施される。1257は土師器の手づくね皿である。底部外面には簀子状の圧痕がみられる。外面と内面はナデ調整を施す。

1255・1258は支脚である。1255は中空を呈し，上部は内傾する。外面は指頭圧痕が顕著である。内面は指頭圧痕及びナデ調整がみられる。1258は指頭圧痕が顕著である。1259はミニチュア土器である。外面はタタキが認められる。内面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。1260は同じく底部と考えられる。外面はナデ調整で，一部にハケ調整がみられる。内面はナデ調整を施す。

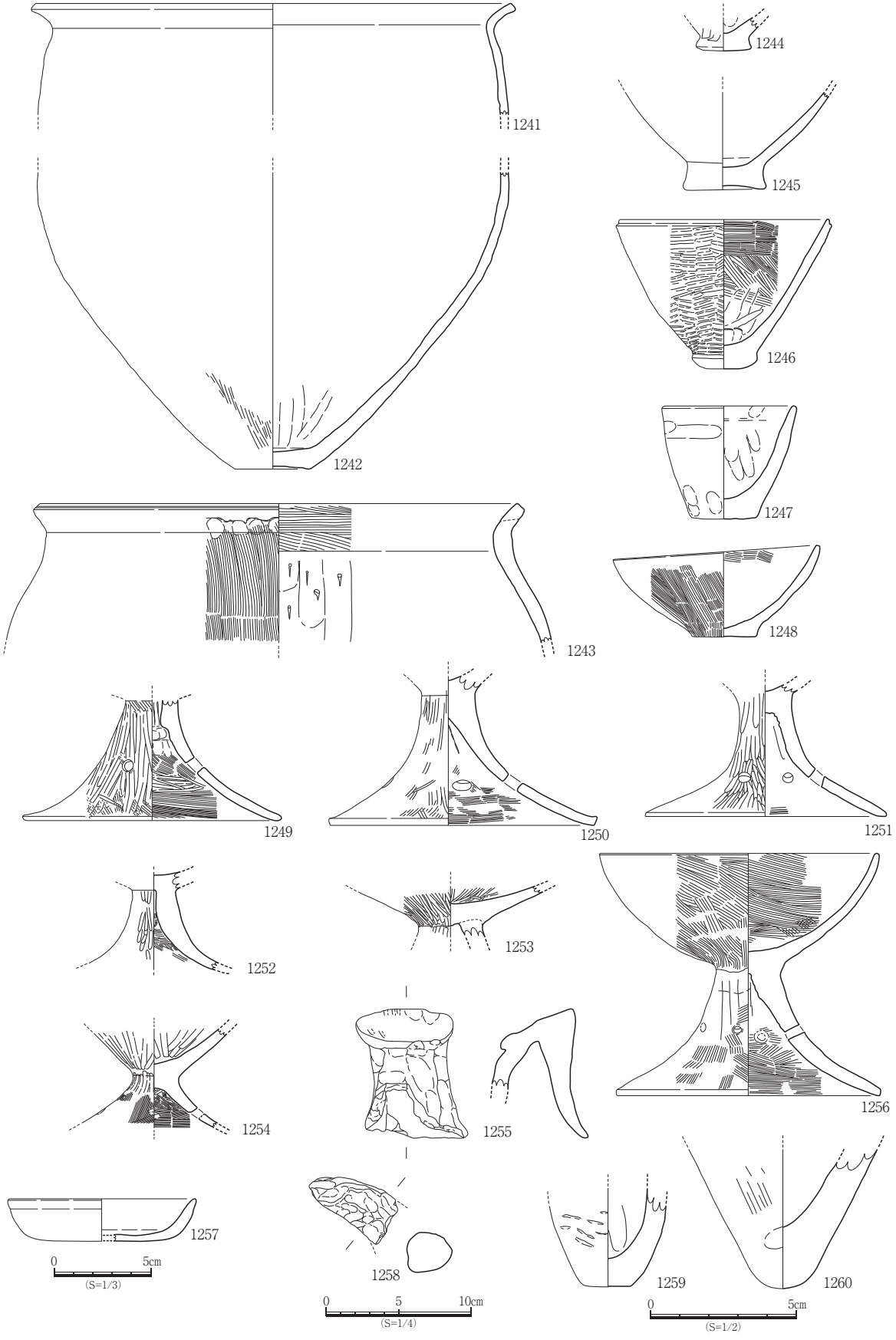


図3－6　ST108出土遺物実測図2

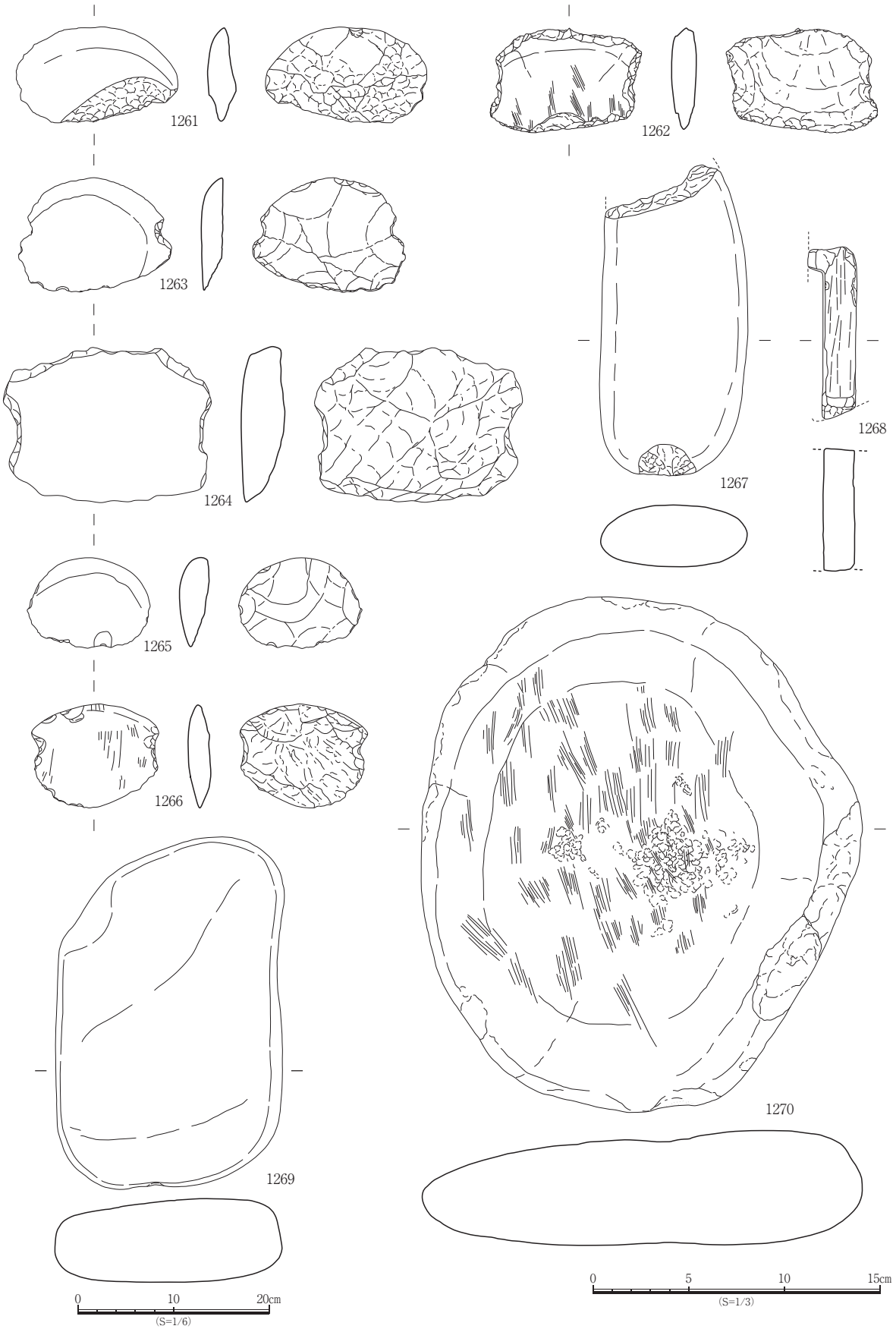


図3－7　ST108出土遺物実測図3

1261は打製石庖丁の未成品と考えられる。1262～1266は打製石庖丁である。1262は砂岩製で一面は自然面，片面は剥離面を呈し，上部に敲打痕跡がみられ，両端には抉りを施す。1263は砂岩製で一面は自然面で片面は剥離面を呈する。両端に抉りを施す。1264は一面は自然面で片面は剥離面を呈する。両端には抉りを施す。1265・1266は他の打製石庖丁に比べ小型である。1265は砂岩製で未成品と考えられる。1266も砂岩製である。一面は自然面で片面は剥離面を呈する。両端には抉りを施す。1267は砂岩製で周縁部に敲打痕跡がみられる。1268は砥石で，2面に使用痕跡が認められる。1269と1270は台石と考えられる。1269は砂岩製である。1270は中央部と周縁部に敲打痕跡がみられる。

ST109(図3－8)

調査区の北西部において検出した。ST110を切り，竪穴建物跡の南部は調査区外に続くと考えられる。規模は南北2.6m以上，東西5.0mを測り，平面形は円形から楕円形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは約20㎝で，埋土は細～中礫が混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。床面からは10個のピットを検出したが，主柱穴かどうかは判然としない。

出土遺物は弥生土器壷(1271)・鉢(1272･1273)，石製品(1274･1275)が図示できた。

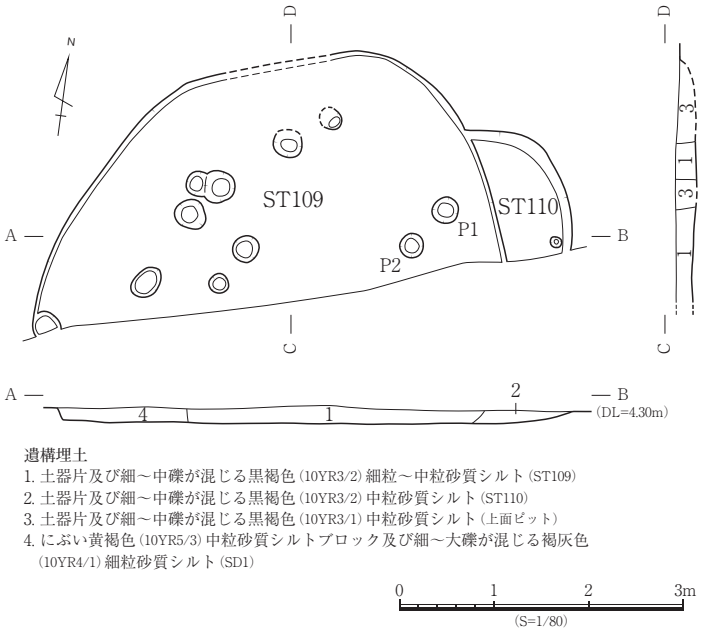


図3－8　ST109･110

出土遺物(図3－9　1271～1275)

1271は口縁部に粘土帯を貼付する。貼付部分に指頭圧痕がみられる。内面は摩耗する。1272は外面にタタキのち下半部はハケ調整，口縁部は指頭圧痕及びナデ調整がみられる。内面はナデ調整と指頭圧痕，口縁部内面には粘土紐接合痕が認められる。1273は小型の鉢で，外面体部下半部はタタキが認められる。その他の外面内面はナデ調整を施す。1274は砂岩製の打製石庖丁である。片面は自然面，もう一面は剥離面を呈する。片端には抉りを施す。1275は砂岩製で，片面は自然面で，もう一面は剥離面を呈する。両端は抉りを施し，刃部の一部を抉り状に打ち欠く。石錘として転用されたものと考えられる。

ST110(図3－8)

調査区の北西部において検出した。ST109に切られる。残存規模は南北1.4m，東西0.8mを測る。検出面から床面までの深さは約12㎝で，埋土は土器片及び細～中礫が混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

遺物は弥生土器底部片と細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

(2) 掘立柱建物跡

SB1(図3－10)

調査区西部において検出した掘立柱建物跡である。北西隅部の柱穴は調査区外のため，検出することはできなかった。桁行3間(6.5m)，梁行3間(4.8m)，面積31.2㎡の南北棟で，棟方向はN－6°－Wで

ある。柱間寸法は桁行で2.15～2.20m，梁行で1.50～1.70mを測る。柱穴の掘方は方形及び楕円形を呈し，長軸が0.8～1.4m，検出面からの深さはP5・11が25㎝，その他は40～55㎝である。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(7.5YR2/2)シルトが中心である。

出土遺物は瓦(1276･1277)と石製品(1278)が図示できた。

出土遺物

(図3－11　1276～1278)

1276と1278はP2から出土しており，1276は平瓦片で凹面は摩耗が著しく，凸面には縄目痕が認められる。1278は台石と考えられる。砂岩製か。中央部と周縁部には敲打痕跡がみられる。1277はP4から出土している。平瓦片である。凹面に布目痕，凸面はナデ調整がみられる。

SB2(図3－12)

調査区南部において検出した掘立柱建物跡である。建物跡の南部は調査区外のため検出することはできなかった。確認された規模は桁行3間(4.6m)，梁行2間(3.7m)以上と考えられる。柱間寸法は桁行で1.45～1.65m，梁行で1.60～1.90mを測る。柱穴の掘方は方形及び楕円形を呈し，径は長軸が1.1～1.5m，検出面からの深さは30～45㎝である。埋土は中礫が混じる黒褐色(7.5YR3/1)シルトが中心で

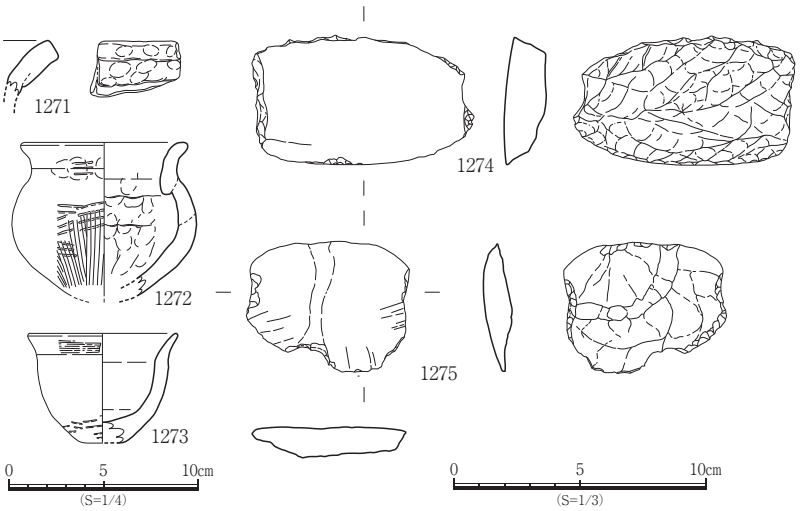
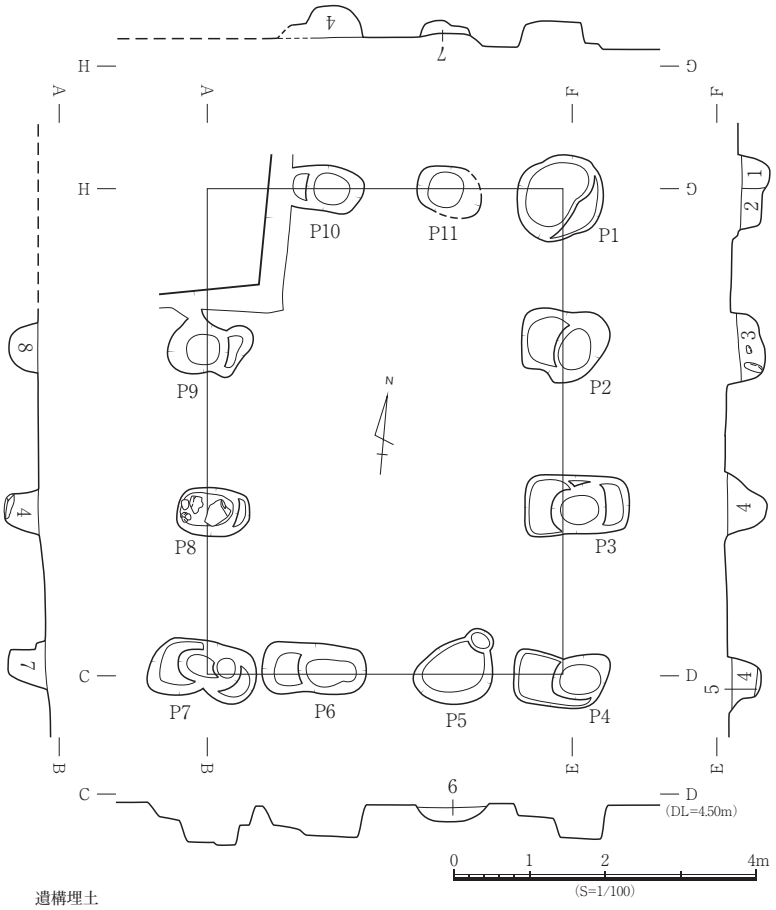


図3－9　ST109出土遺物実測図



遺構埋土
1. 15cm大の角礫を含む黒褐色(7.5YR2/2～3/2)細粒砂混じりシルト
2. 0.5～1cm大の中礫と明褐色(7.5YR5/6)土が粒状に混じる黒褐色(7.5YR2/2～3/2)細粒砂混じりシルト
3. 5～10cm大の中礫，20cm大の巨礫と黄褐色ブロックが粒状に混じる黒褐色(7.5YR2/2)細粒砂混じりシルト
4. 土器片，0.5～1cm大の中礫と明褐色ブロックが粒状に混じる黒褐色(7.5YR2/2)細粒砂混じりシルト
5. 黒色(7.5YR2/1)シルト
6. 3cm大の中礫と明黄褐色土ブロックが混じる黒褐色(10YR2/3)細粒砂混じりシルト
7. 土器片，0.5～1cm大の中礫と黄褐色ブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルト
8. 0.5～1cm大・5cm大の中礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルト

図3－10　SB1

ある。

遺物は弥生土器，土師器，土師質土器，須恵器，国内産陶器が出土しており，そのうち土師質土器椀(1279)，須恵器甕(1282)，陶器皿(1280)，備前焼擂鉢(1281)，石製品(1283)が図示できた。

出土遺物(図3－13　1279～1283)

1279 はP3 から出土した椀の底部で底部外面に断面方形の高台を貼付し，外面内面ともにナデ調整を施す。1282 はP1 から出土した甕の口縁部である。口唇部は肥厚し，外面内面ともに回転ナデ調整を施す。1280 と 1281 はP5 からの出土である。1280 は唐津焼と考えられる。口縁下の外面はケズリを施し，内面には施釉がみられる。1281 は擂鉢である。口縁端部を上方に拡張し，内面は強いナデ調整を施す。P5 は上面遺構と切り合っており，1280 と 1281 は上面遺構に属するものと考えられる。

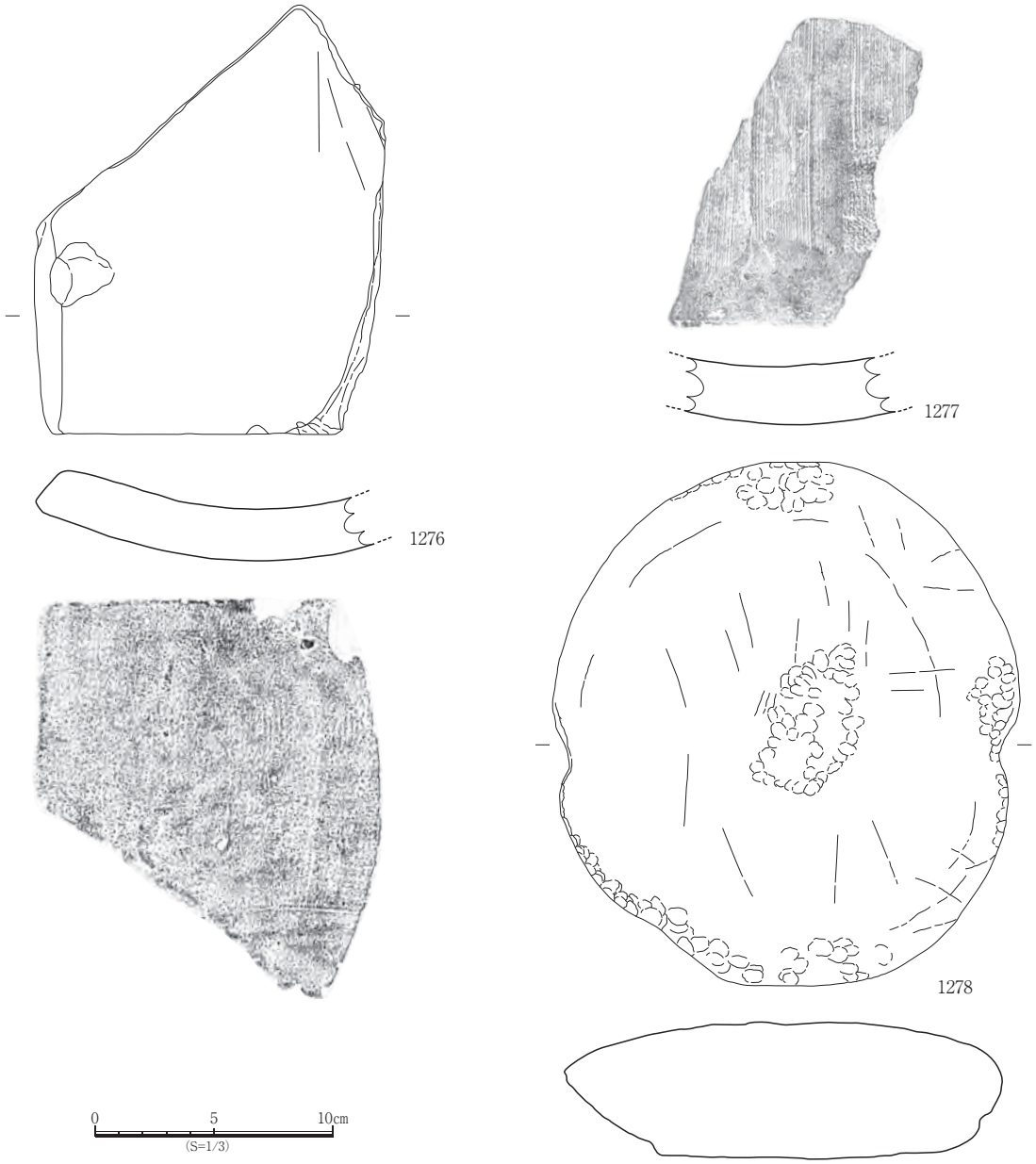


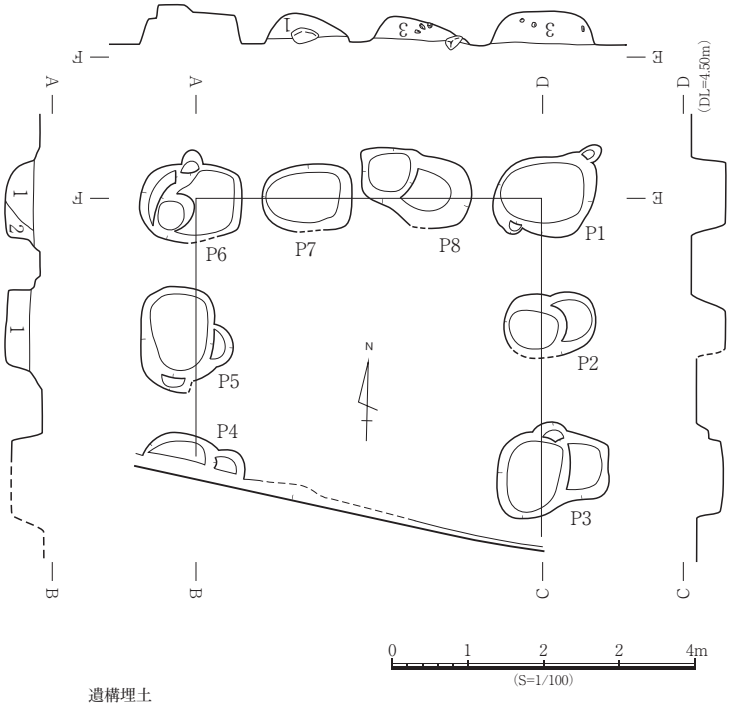
図3－11　SB1出土遺物実測図

1283はP3から出土した砂岩製の石庖丁で，表面は自然面，裏面は剥離面を呈し，両側に抉りを施す。

SB3（図3－14）

調査区の西部において検出した。桁行2間（4.2m），梁行1間（3.1m），面積13.2㎡の南北棟で，棟方向はN－3°－Eである。柱間寸法は桁行で2.00～2.10m，梁行で3.00～3.10mを測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径はP1・3・5・6は30㎝前後，P2は40㎝を測る。検出面からの深さはP1が10㎝，その他は20～30㎝である。柱穴の埋土は細～中礫混じりの黒褐色（10YR3/2）砂質シルトが中心である。

出土遺物は弥生土器の細片と土師器細片がみられたが，図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 0.5～1㎝大の中礫が混じる黒褐色（7.5YR3/1）シルト
2. 黄褐色土がブロック状に混じる黒褐色（7.5YR3/1）シルト
3. 0.5～1㎝大の中礫と黄褐色ブロックが混じる黒褐色（7.5YR3/1）シルト

図3－12　SB2

SB4（図3－14）

調査区の西部において検出した。桁行2間（4.3m），梁行1～2間（3.1m），面積13.3㎡の東西棟で棟方向はN－6°－Eである。柱間寸法は桁行で1.95～2.35m，梁行は1.30～2.80mを測る。柱穴の掘方は概ね円形から楕円形を呈し，径はP3・5が20㎝前後，P1・6・7が概ね30㎝，P2・4は50㎝で，検出面からの深さはP1・5～7が10㎝，P2～4は20～30㎝を測る。柱穴の埋土は細礫が混じる褐灰色（10YR4/1）シルトが中心である。

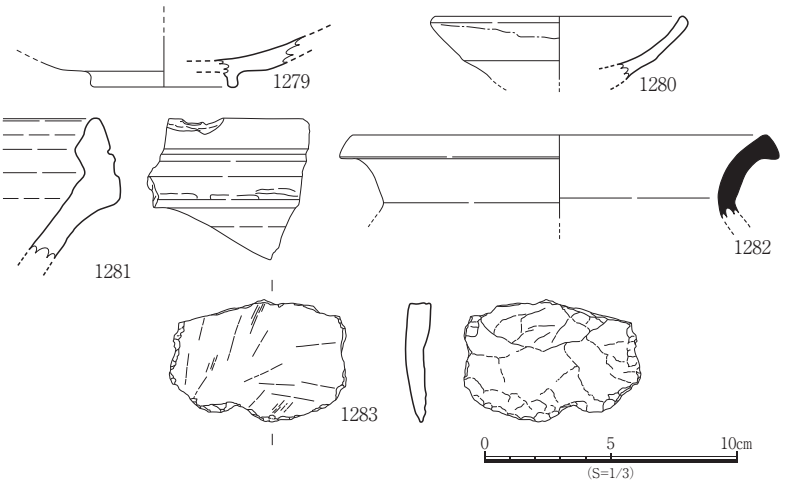


図3－13　SB2出土遺物実測図

遺物は弥生土器の細片と土師質土器皿の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SB5（図3－14）

調査区の中央南部において検出した。桁行2間（3.1m），梁行1間（1.45m），面積4.35㎡の東西棟で，棟方向はN－9°－Wである。SB2と切り合う。柱間寸法は桁行で1.40～1.70m，梁行で1.45mを測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径は30㎝前後，検出面からの深さは20～30㎝を測る。柱穴の埋土は細礫が混じる褐灰色（10YR4/1）シルトが中心である。

遺物は土師質土器釜の口縁部が出土している。

SB6（図3－14）

調査区の北西部において検出した掘立柱建物跡である。建物跡の北東隅と南東隅の柱穴については確認することはできなかった。規模は桁行2間（5.1m），梁行1間（3.35m）と考えられる南北棟で，棟方向はN－1°－Wである。柱間寸法は桁行で2.50～2.60m，梁行で3.35mを測る。柱穴の掘方は方形及び隅丸方形を呈し，一辺は90～100㎝，検出面からの深さはP3が15㎝，その他は概ね30㎝で

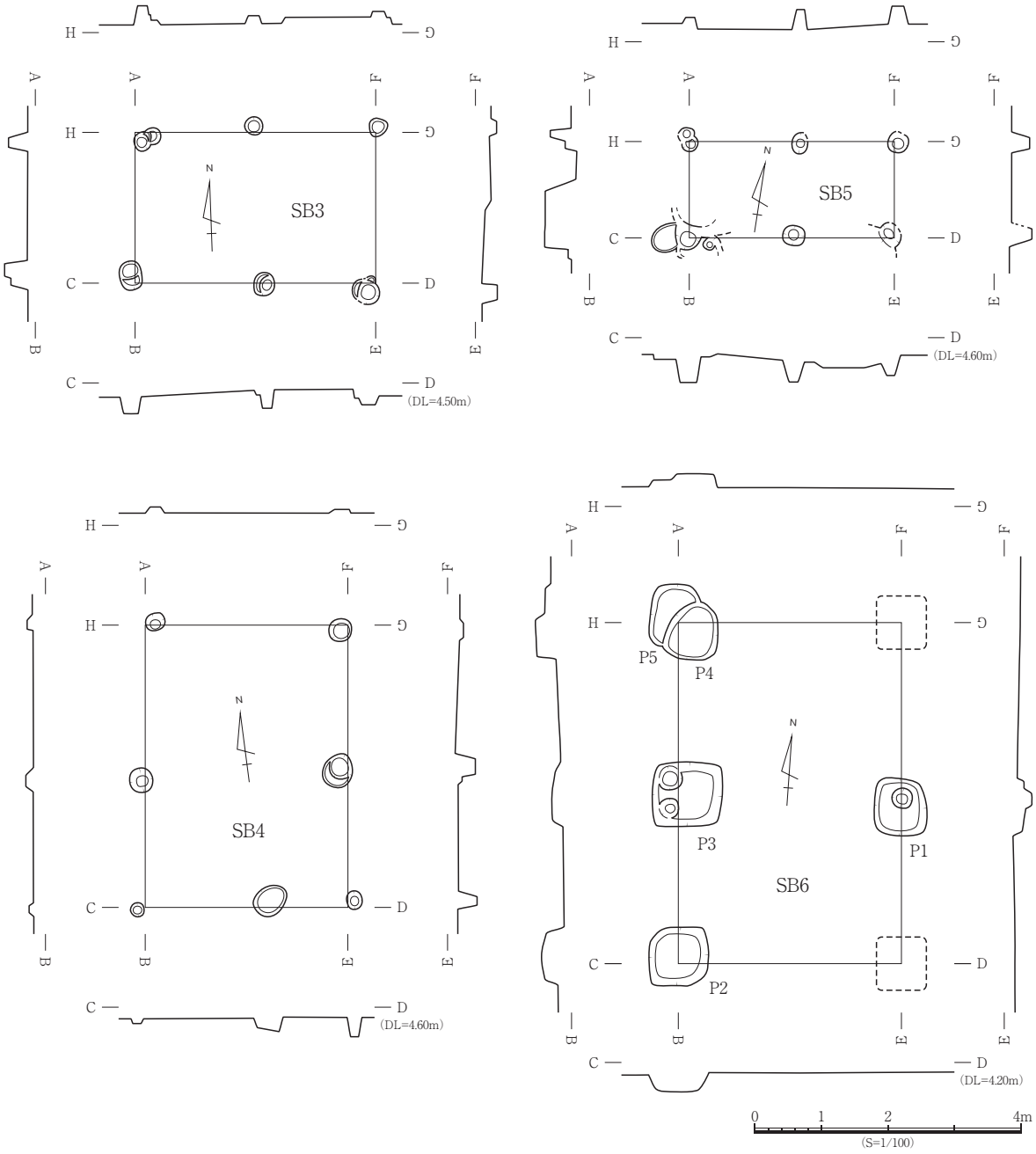


図3－14　SB3～6

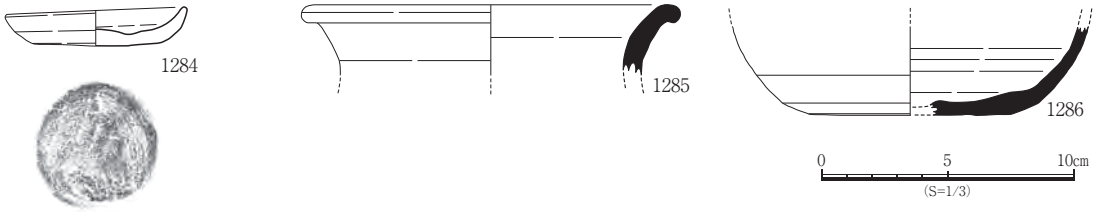


図3－15　SB6出土遺物実測図

ある。柱穴の埋土は細礫が混じる黒褐色(7.5YR3/1)シルトが中心である。

遺物は弥生土器と土師器，土師質土器の細片が出土しており，そのうち土師質土器皿(1284)，須恵器甕(1285)・壷あるいは甑(1286)が図示できた。

出土遺物(図3－15　1284～1286)

1284は底部の切り離しは回転糸切りで，外面と内面はともに回転ナデ調整を施す。1285は甕の口縁部である。外反し，口唇部は丸くおさめる。1286は底部外面はケズリ及び回転ナデ調整を施す。内面はナデ調整である。外面には自然釉が掛かる。壷あるいは甑の底部と考えられる。

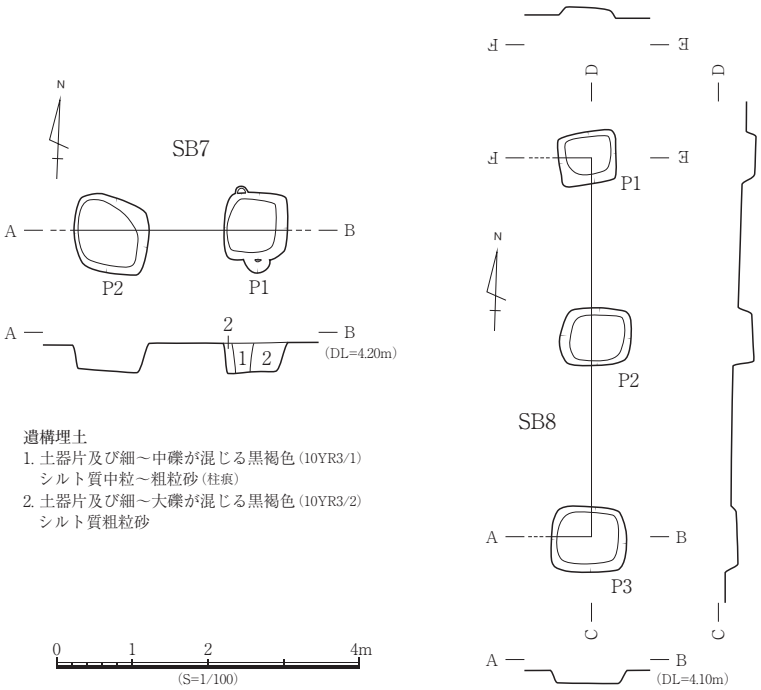


図3－16　SB7･8

SB7(図3－16)

調査区の北西部において検出した。掘立柱を構成する柱穴と考えられるため，ここではSBとして報告する。柱穴の掘方は方形から不整方形を呈し，一辺がP1は0.9m，P2は1.0m，検出面からの深さはP1・2ともに概ね40㎝を測る。柱穴の埋土は細～大礫が混じる黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒砂が中心である。

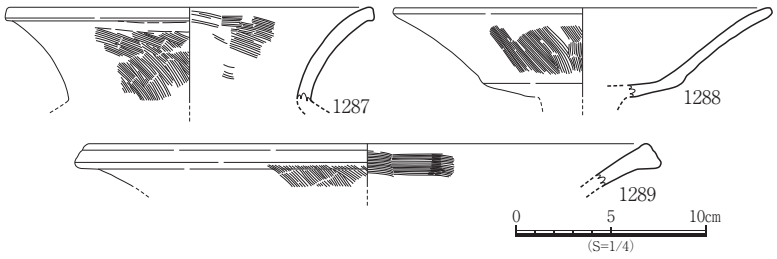


図3－17　SB7出土遺物実測図

出土遺物は弥生土器壷(1287･1289)・高杯(1288)が図示できた。

出土遺物(図3－17　1287～1289)

1287・1289はP1，1288はP2からの出土である。1287は壷の口縁部で，口唇部は下方に摘み出す。外面と内面はナデ及びハケ調整を施す。1288は高杯で，杯部外面はタテ方向のハケ調整が施される。内面は摩耗している。1289は壷の口唇部を下方に拡張する。口唇部はナデ調整で口縁部外面にタテ

方向のハケ調整, 内面にヨコ方向のハケ調整を施す。

SB8(図3－16)

調査区の北西部において検出した。南北方向に 2 間分の柱穴を確認しており, 掘立柱建物跡の東側を構成する柱穴と考えられる。柱間寸法は2.40～2.60m を測る。柱穴の掘方は方形及び隅丸方形を呈し, 一辺はP1が70㎝, P2は80～100㎝, P3が100㎝を測る。検出面からの深さはP1・3が20㎝, P2は25㎝である。柱穴の埋土は細～中礫が混じる黒色(2.5Y2/1)砂質シルトが中心である。

遺物は弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器が出土している。

(3) 柵列跡

SA1(図3－18)

調査区の南東部, SD11 の西側において検出した。調査区南側へ続く可能性が考えられる。2 間(4.5m)を検出し, 柱間寸法は2.1～2.4m で, 柱穴は径60～90㎝の円形及び楕円形を呈する。検出面からの深さはP1 が 27 ㎝, P2 は 43 ㎝, P3 は 38 ㎝を測る。柱穴の埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

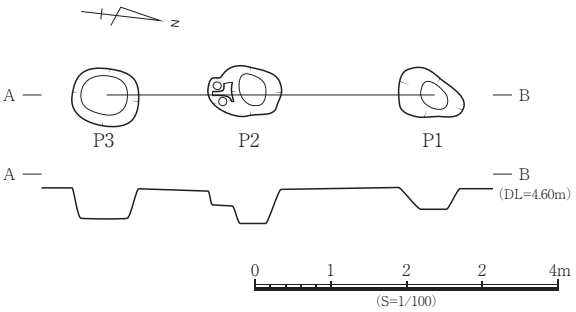


図3－18　SA1

出土遺物はミニチュア土器(1290)が図示できた。

出土遺物(図3－19　1290)

1290 は外面は指頭圧痕とナデ調整が顕著である。

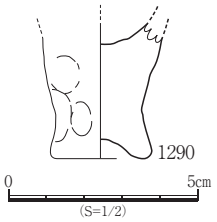


図3－19　SA1出土遺物実測図

(4) 土坑

SK1(図3－20)

調査区の南西部において検出した。長軸約 1.7m , 短軸約 1.5m を測り, 平面形は円形を呈する。検出面からの深さは 8 ㎝で, 埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

遺物には図示できるものはなかったが, 埋土からは須恵器片が出土している。

SK2(図3－20)

調査区の南西部において検出した。長軸約 1.5m , 短軸約 1.3m を測り, 平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは5㎝で, 埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

遺物は土師質土器や瓦質土器の細片が出土しているが, 図示できるものはなかった。

SK3(図3－20)

調査区の南西部において検出した。遺構の東部は試掘坑によって切られる。規模は長軸1.4m 以上, 短軸 0.6m 以上を測る。検出面からの深さは 19 ㎝で, 埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

遺物に弥生土器の細片が出土しているが, 図示できるものはなかった。

SK4(図3－20)

調査区の南西部において検出した。長軸約 1.7m , 短軸約 1.6m を測り, 平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約10㎝で, 埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

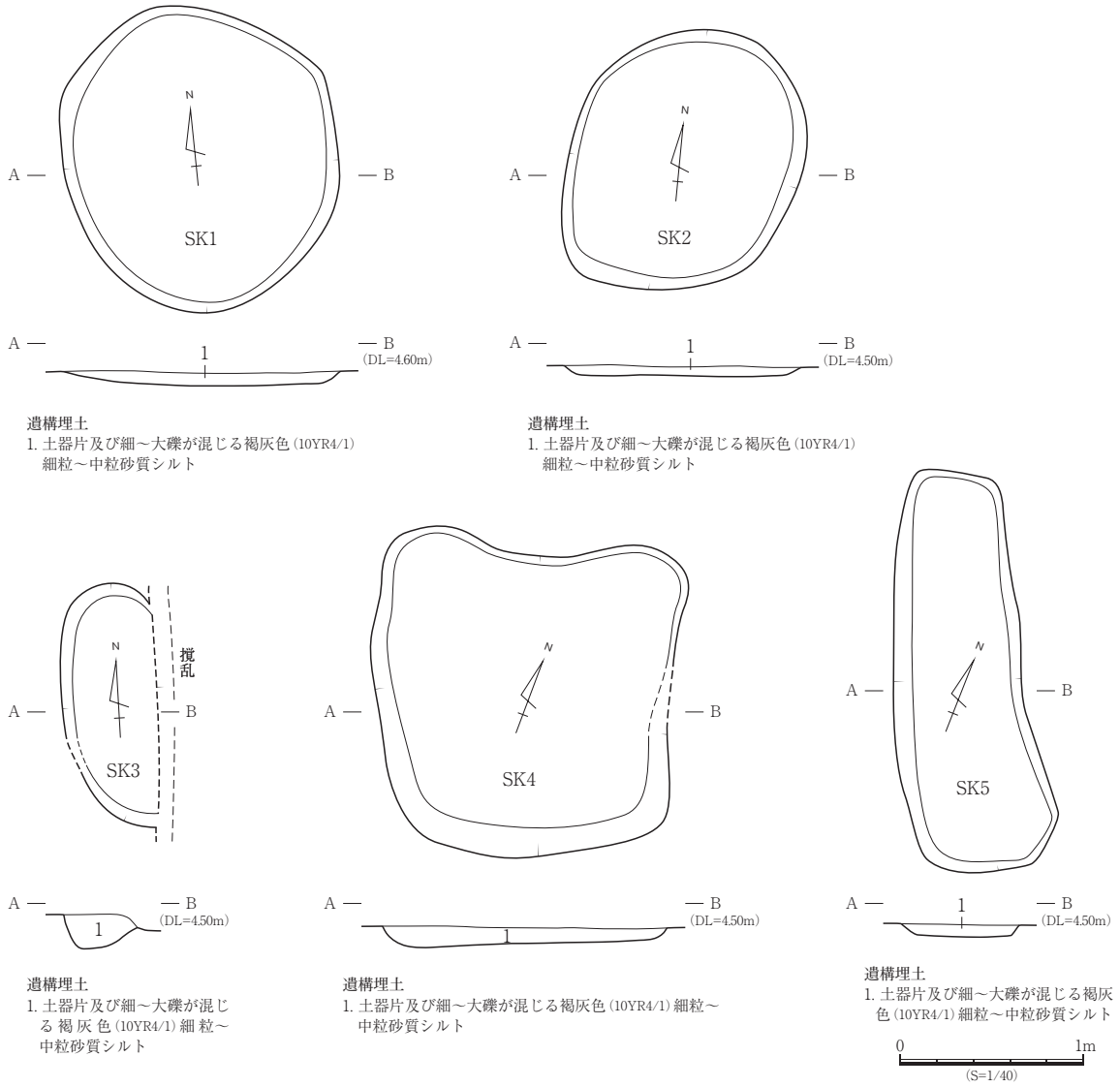


図3－20　SK1～5

遺物は弥生土器と土師質土器が出土しており，そのうち，弥生土器壷(1291)が図示できた。

出土遺物(図3－21　1291)

1291は壷の底部と考えられ，平底を呈する。外面にハケ調整とナデ調整，内面は器面が剥離しており，調整は不明瞭である。

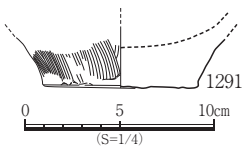


図3－21　SK4出土遺物実測図

SK5(図3－20)

調査区の南西部において検出した。長軸約2.2m，短軸約0.7mを測り，平面形は隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは8㎝で，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器と瓦質土器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK6(図3－22)

調査区の南西部において検出した。長軸約8.0m，短軸約6.0mを測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは15～18㎝で，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

出土遺物では弥生土器甕(1292)が図示できた。

出土遺物(図3－23　1292)

1292 の口縁部は緩やかに外反し，口唇部に指頭圧痕が認められる。頸部から胴部の間に 4 条のヘラ描沈線文を配し，口縁部から頸部にかけて外面と内面にハケ調整，胴部は外面と内面に工具によるナデ調整を施す。

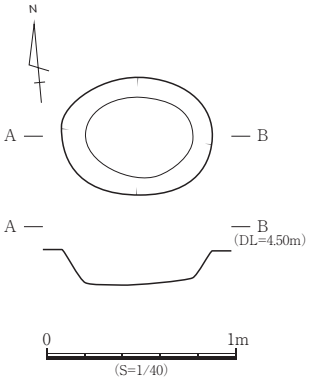


図3－22　SK6

SK7

調査区の南西部において検出した。長軸約1.4m，短軸約1.2m を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは 17 ㎝で，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトである。

遺物は土師器と須恵器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK8

調査区の南西隅において検出した。遺構の南側は調査区外に続くと考えられる。残存長は南北 0.9m 以上，東西 0.8m を測り，平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは 16 ～ 34 ㎝で，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器と土師器の細片が出土している。

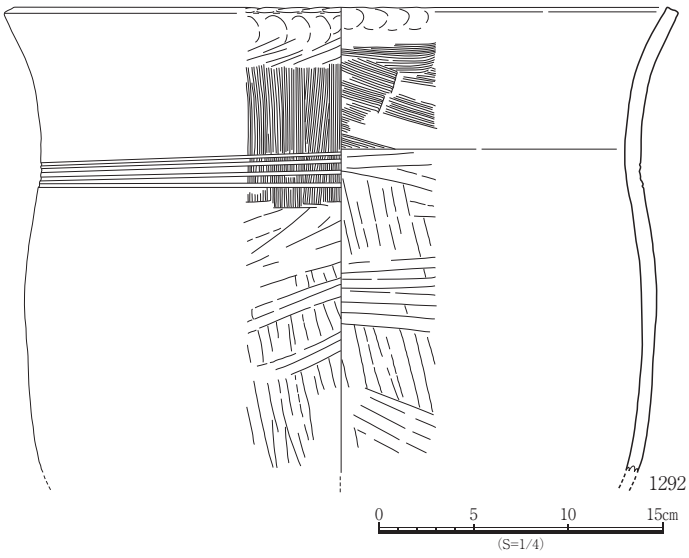


図3－23　SK6出土遺物実測図

SK9

調査区の南西部において検出した。遺構の北部は調査区外に続く。遺構の残存長は東西 2.7m，南北は 1.2m 以上を測る。検出面からの深さは 17 ㎝で，埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルトである。

遺物は弥生土器，土師質土器及び瓦質土器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK10

調査区南西部において検出した。長軸約 0.9m，短軸約 0.8m を測り，平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。遺構の北部はピットに切られる。検出面からの深さは 4 ㎝を測り，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトである。

遺物は土師質土器，瓦質土器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK11

調査区の南西部隅において検出した。遺構の南側は調査区外に続く。遺構の残存長は南北 1.8m 以上，東西約 2m を測る。検出面からの深さは 8 ～ 14 ㎝で，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)

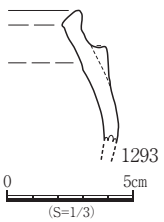


図3－24　SK11出土遺物実測図

細粒砂質シルトである。

遺物は土師質土器，須恵器，瓦質土器が出土しており，そのうち土師質土器鍋(1293)が図示できた。

出土遺物(図3－24　1293)

1293は口唇部が内傾し，口縁下外面には断面三角形の鍔が巡る。鍔より下方部は指頭圧痕とナデ調整で，外面には煤が付着する。

SK12

調査区の南西部において検出した。長軸約1.3m，短軸約0.8mを測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは約10㎝で，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK13(図3－25)

調査区の中央北部において検出した。長軸約3.3m，短軸約1.7mを測り，平面形は隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約50㎝で，埋土は大礫混じりの灰褐色(7.5YR4/2)シルトと中礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器，土師質土器，瓦質土器，須恵器，国内産陶磁器が出土しており，そのうち陶器碗(1294･1295)が図示できた。

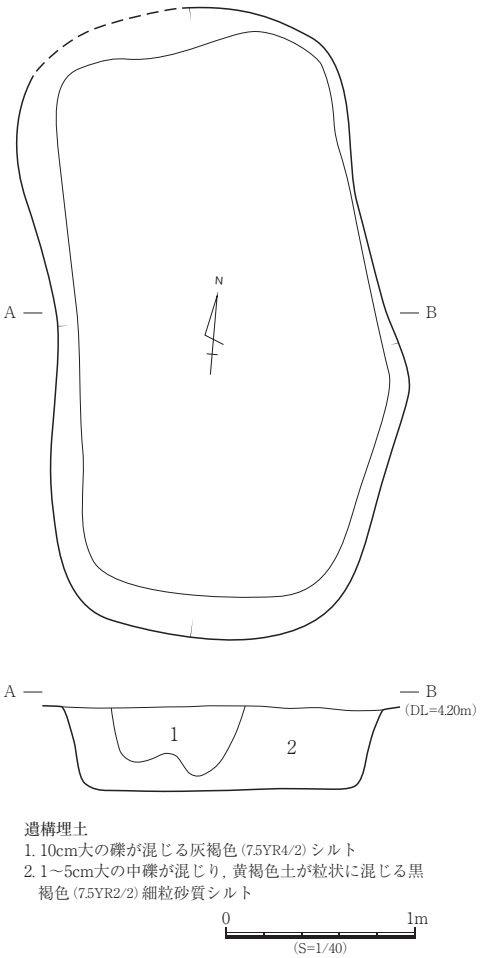


図3－25　SK13

出土遺物(図3－26　1294･1295)

1294は碗の口縁部と考えられ，外面と内面に黒褐色の釉が施される。1295は碗の底部で，高台畳付は露胎で，その他は施釉する。内面の見込みには目痕がみられる。

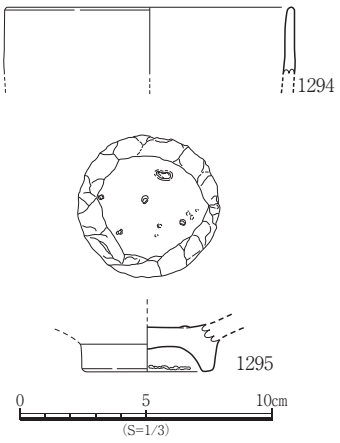


図3－26　SK13出土遺物実測図

SK14

調査区の中央北部において検出した。長軸約2.6m，短軸約2.0mを測り，平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは10～15㎝で，埋土は褐灰色(10YR4/1)シルトである。

遺物は弥生土器，土師器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK15(図3－27)

調査区の中央北部において検出した。長軸約1.7m，短軸約1.5mを測り，平面形は不整楕円形を呈する。検出面からの深さは約22㎝で，埋土は中礫が多く混じり，大礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。

出土遺物は弥生土器壺(1296～1298)・高杯(1299･1300)が図示できた。

出土遺物(図3－28　1296～1300)

1296 は壷の口縁部で，粘土帯を貼付する。口唇部は平坦面をなし，外面には指頭圧痕がみられる。内面はナデ調整である。1297・1298 は壷の底部で平底を呈する。1297 は外面にナデ調整，内面は摩耗する。1298 は外面にハケ調整とナデ調整を施し，内面は摩耗する。1299・1300 は高杯の脚部である。1299 は外面にミガキ調整とナデ調整，内面はナデ調整を施し，穿孔が認められる。1300 は外面にミガキ調整，内面はユビナデとハケ調整を施す。1ヵ所に穿孔を施す。

SK16

調査区の中央部において検出した。径約1.5mを測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは9㎝を測り，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器と土師器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

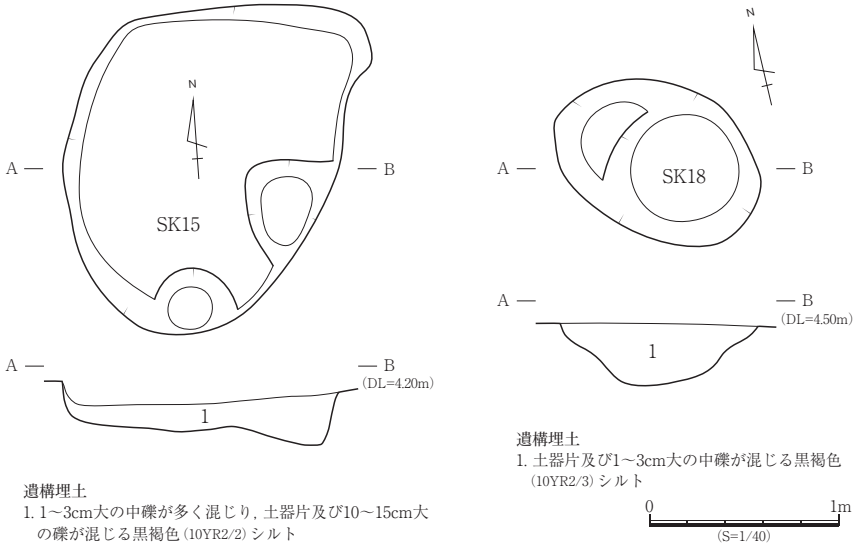


図3－27　SK15･18

SK18(図3－27)

調査区の中央南部において検出した。長軸約1.1m，短軸約0.6mを測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは32㎝で，埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトである。

出土遺物では弥生土器壷(1301)・甕(1302･1303)が図示できた。

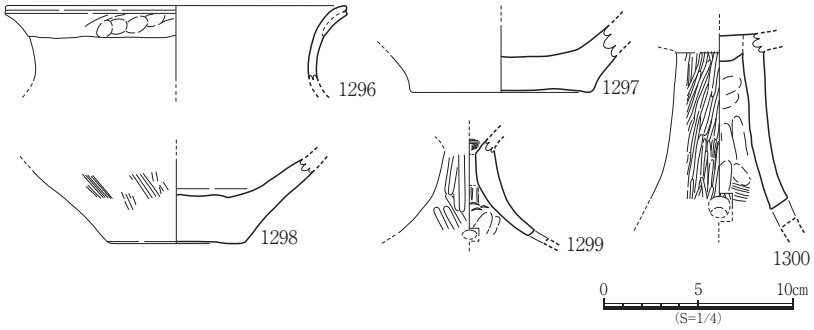


図3－28　SK15出土遺物実測図

出土遺物(図3－29　1301～1303)

1301 は口縁部が外方に大きく開き，口唇部は肥厚する。外面は口縁部から頸部にかけてハケ調整とナデ調整，内面は口縁部にナデ調整とハケ調整，頸部にかけてナデ調整とハケ調整を施す。1302 は甕で，外面はタタキが認められ，頸部には指頭圧痕がみられる。内面は口縁部から頸部にかけてナデ調整で，胴部はハケ調整を施す。1303 は甕の底部と考えられる。底部は平底を呈し，外面にハケ調整と内面には指頭圧痕とナデ調整がみられる。

SK22

調査区の中央南部において検出した。長軸約 1.5m，短軸約 1.3m 以上を測り，平面形は隅丸方形

を呈する。検出面からの深さは34㎝で，埋土は黄褐色土が混じる黒褐色(7.4YR3/1)シルトである。

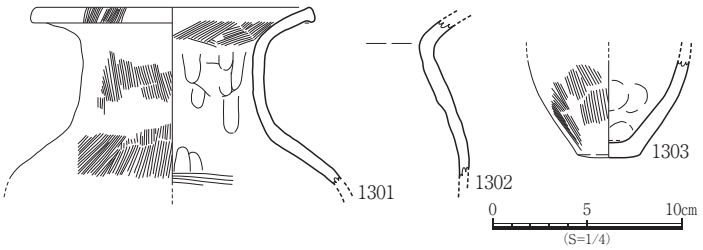


図3－29　SK18出土遺物実測図

SK23

調査区の西部に位置するST108の床面において検出した。長軸約1.2m，短軸約0.9m以上を測り，平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは34㎝で，埋土は黄褐色土が混じる黒褐色(7.5YR3/1)シルトである。ST108に属する遺構の可能性が考えられる。

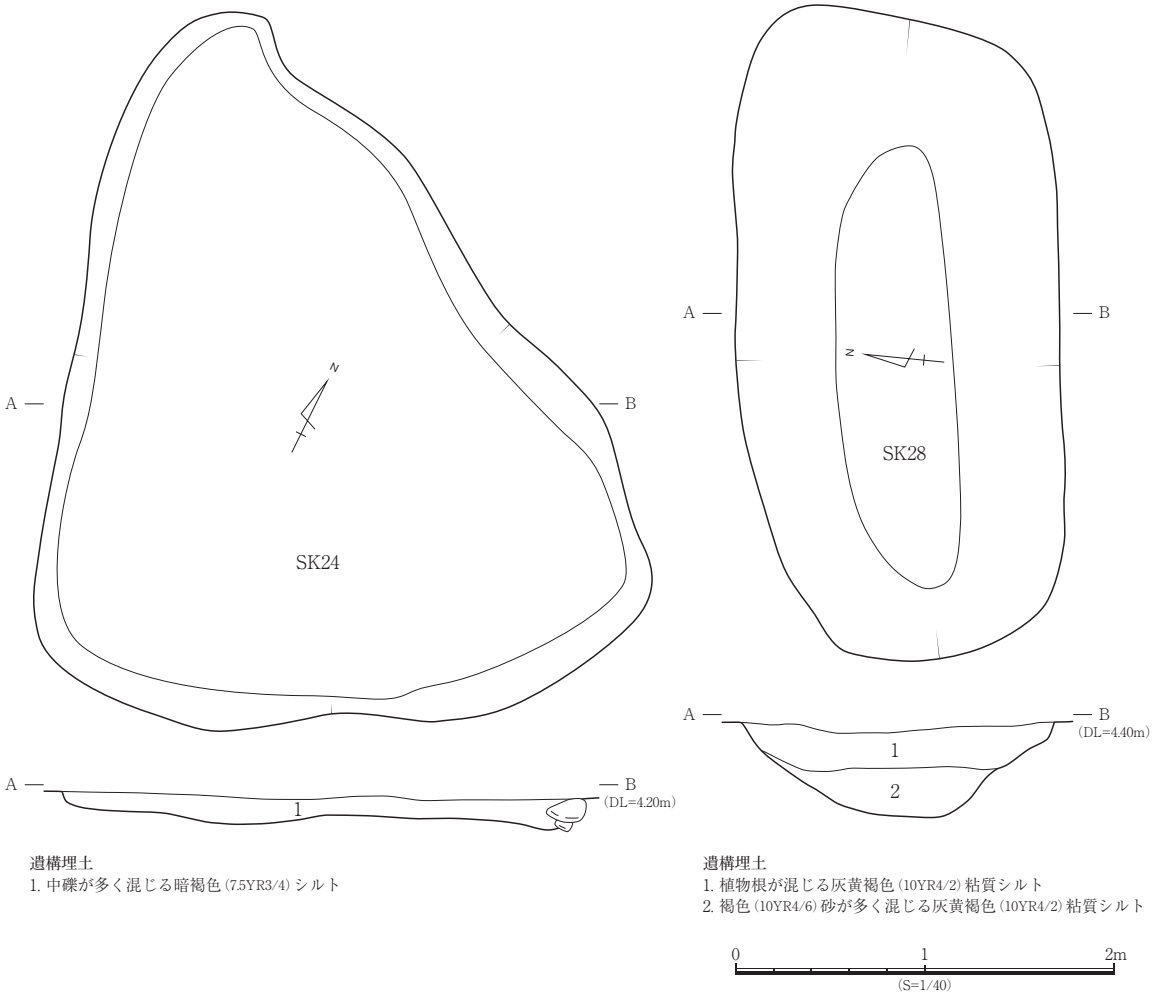
SK24(図3－30)

調査区の東部において検出した。長軸約3.8m，短軸約2.8mを測り，平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは16㎝で，埋土は中礫が多く混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルトである。

遺物は主に弥生土器の細片等が出土しており，そのうち，石製品(1304)が図示できた。

出土遺物(図3－31　1304)

1304は打製石庖丁で，砂岩製である。片刃を呈し，両側には抉りを施す。



遺構埋土
1. 中礫が多く混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルト

遺構埋土
1. 植物根が混じる灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
2. 褐色(10YR4/6)砂が多く混じる灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト

図3－30　SK24･28

SK25

調査区の東部において検出した。長軸約 1.0m，短軸約 0.6m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは30㎝で，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土しており，そのうちミニチュア土器(1305)が図示できた。

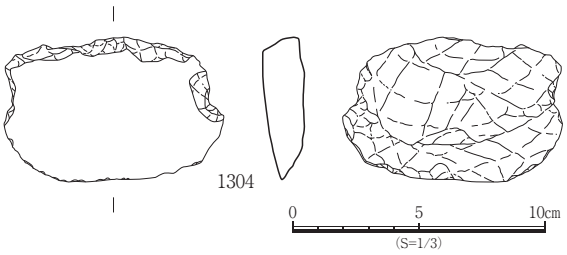


図3－31　SK24出土遺物実測図

出土遺物(図3－32　1305)

1305は脚部の外面と内面に指頭圧痕とナデ調整がみられる。

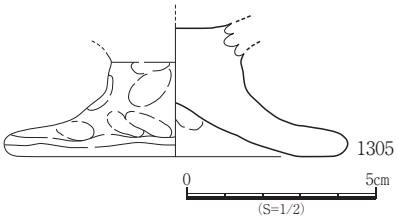


図3－32　SK25出土遺物実測図

SK26

調査区の東部において検出した。径約 1.0m を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは 22㎝で，埋土は細～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

遺物は弥生土器と須恵器の細片が出土している。

SK27

調査区の東部において検出した。SD11 を切る。長軸約 1.8m，短軸約 1.5m を測り，平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは 40～50㎝で，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルトと細～中礫が多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土している。

SK28(図3－30)

調査区の東部において検出した。SD11 を切る。長軸約 3.4m，短軸約 1.8m を測り，平面形は隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 50㎝で，埋土は灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルトと褐色(10YR4/6)砂が混じる灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土している。

SK29(図3－33)

調査区の東部において検出した。長軸約 3.5m，短軸約 0.9m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さ

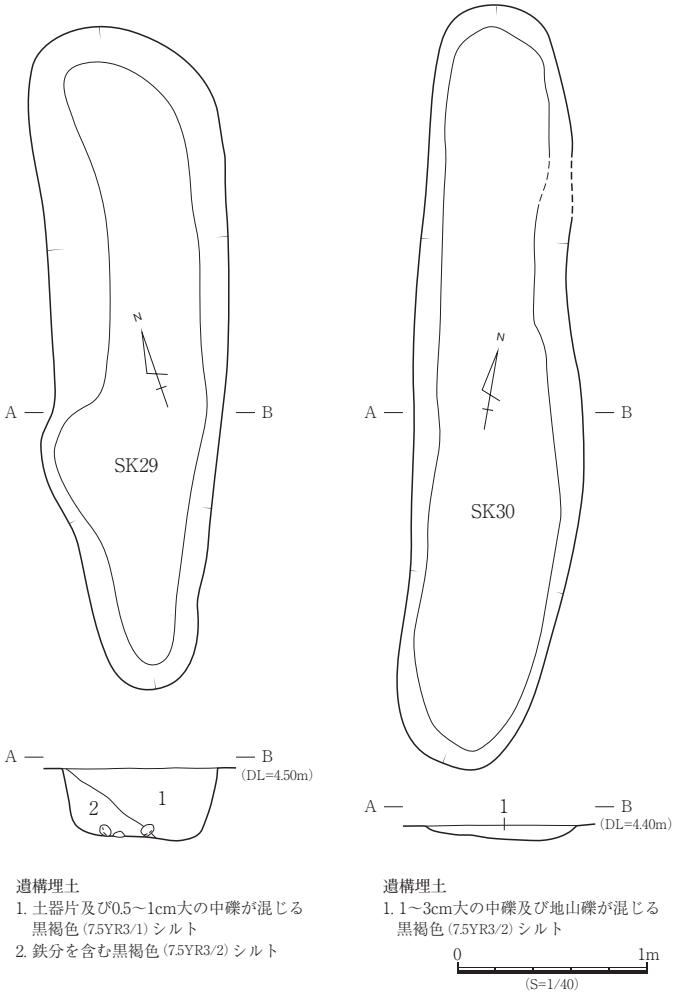


図3－33　SK29･30

は 36 ～ 47 ㎝で，埋土は中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/1)シルトが主体である。

遺物は弥生土器の細片などが出土しており，そのうち弥生土器壷(1306)が図示できた。

出土遺物(図3－34　1306)

1306 は底部で平底を呈する。外面はハケ調整とナデ調整で内面にナデ調整を施す。

SK30(図3－33)

調査区の中央部において検出した。長軸約 4.1m，短軸約 0.9m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは5～6㎝で，埋土は中礫混じりの黒褐色(7.5YR3/2)シルトである。

出土遺物は弥生土器の細片などが出土している。そのうち弥生土器壷(1307)が図示できた。

出土遺物(図3－35　1307)

1307 は底部で平底を呈する。外面と内面はともにナデ調整を施す。外面の一部は摩耗する。

SK31

調査区の東部において検出した。ハンダ土坑 1 に続くものと考えられる。長軸約 2.4m，短軸 0.3 ～ 0.4m を測り，平面形は溝状を呈する。検出面からの深さは 17 ～ 27 ㎝で，埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトである。

遺物は陶器と瓦の細片等が出土しており，そのうち陶器皿(1308)・碗(1309)が図示できた。

出土遺物(図3－36　1308･1309)

1308 は口縁部が輪花状を呈する。口縁端部に口銹を施す。1309 は丸型碗である。

SK32

調査区の中央南部において検出した。長軸約 1.8m，短軸約 0.9m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは14㎝で，埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトである。

遺物は弥生土器と陶器の細片が出土している。

SK33(図3－37)

調査区北西部において検出した。長軸約 1.3m，短軸約 0.6m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 12 ㎝で，埋土は土器片が多く混じり，細～大礫が混じる黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトである。

出土遺物では弥生土器甕(1310～1314)が図示できた。

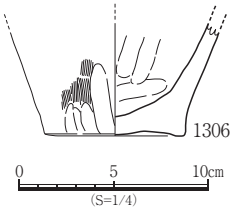


図3－34　SK29出土遺物実測図

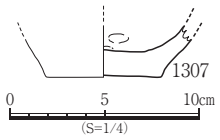


図3－35　SK30出土遺物実測図

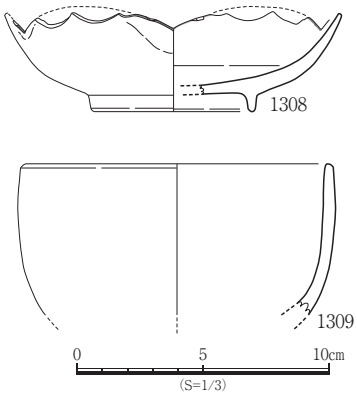


図3－36　SK31出土遺物実測図

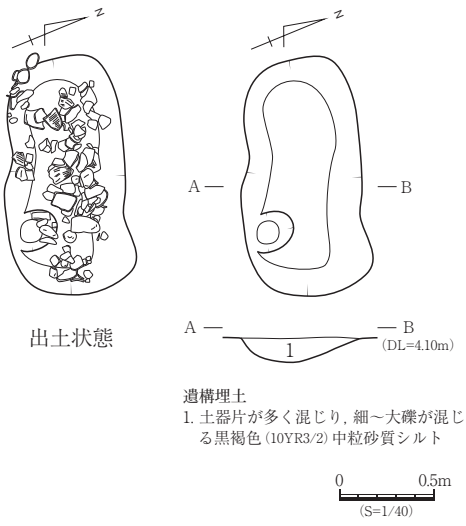


図3－37　SK33

出土遺物(図3－38　1310～1314)

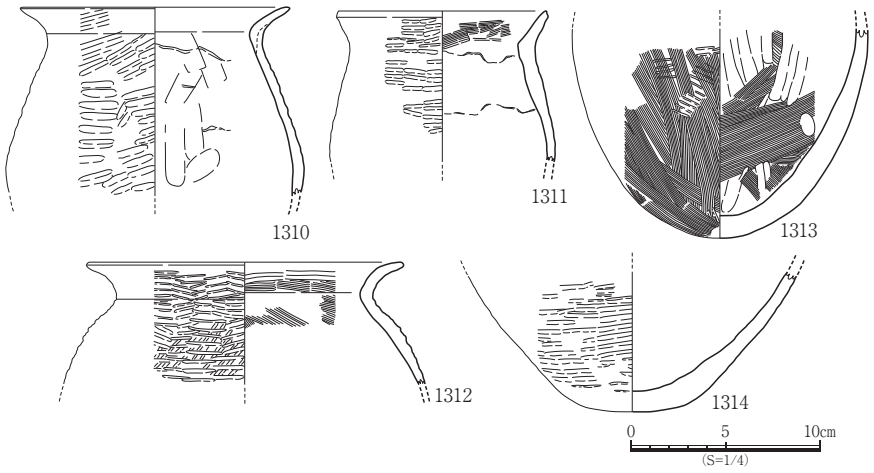


図3－38　SK33出土遺物実測図

1310は口縁部が「く」の字状を呈する。胴部から頸部近くまでタタキが認められ，口縁部は外面内面ともにナデ調整を施す。内面は指ナデを施し，頸部近くには接合痕が認められる。1311は小型の甕で，胴部から口縁部までタタキが認められる。内面は口縁部にハケ調整，頸部と体部には粘土紐接合痕が認められ，段状を呈する。1312は口縁部は大きく外反する。外面は胴部から口縁部までタタキが認められ，内面は口縁部にナデ調整，口縁部下半から頸部にかけてはハケ調整を施す。1313・1314は底部である。1313は丸底を呈する。外面はタタキ後にタテ方向のハケ調整，内面はハケ調整と指ナデを施す。1314は外面にタタキが認められる。内面は摩耗し，一部器面が剥離している。

SK34

調査区北西部において検出した。遺構の南側は調査区外にのびる。規模は長軸0.8m以上，短軸約1.1mで，検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトである。

遺物は弥生土器と土師質土器の細片が出土しているが，図示できるものはなかった。

SK35

調査区北西部において検出した。遺構の北側は調査区外にのびる。確認規模は東西約4.2m，南北約0.9mで，検出面からの深さは6～9cmを測る。埋土は細～中礫混じりの黒色(2.5Y2/1)中粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土している。

ハンダ土坑1(図3－39)

調査区北東部において検出した。規模は長軸約1.9m，短軸約1.7mを測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは28～35cmで，埋土は1層：ハンダが所々混じり，5～10cm大の円礫が多く混じる褐灰色(10YR4/1)粘質シルトと，2層:5～10cm大の円礫が混じる明黄褐色(10YR6/6)粘質土である。

遺物は陶器と瓦片が出土している。

ハンダ土坑2(図3－39)

調査区中央南部において検出した。遺構の南にはハンダ土坑3・4が並んで検出された。規模は径約2.0mで，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは24～31cmで，埋土は1層：円礫及び褐灰色粘土が混じるにぶい黄橙色(10YR6/4)シルトと，2層：1～5cm大の円礫が混じる褐灰色(10YR6/1)粘質シルトである。

遺物は弥生土器の細片が出土している。

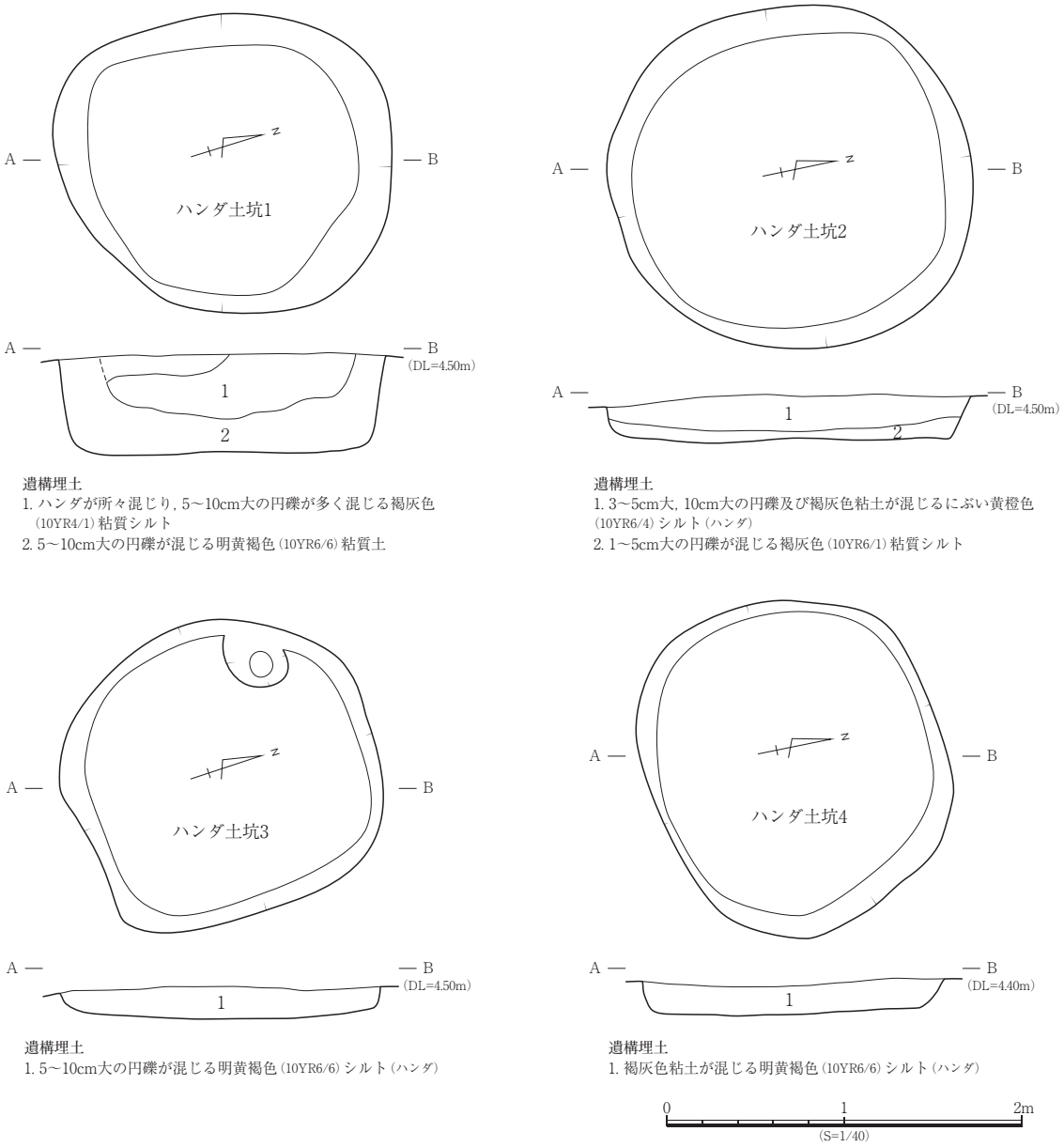


図3－39　ハンダ土坑1～4

ハンダ土坑3(図3－39)

調査区中央南部において検出した。遺構の北側にはハンダ土坑2，南にはハンダ土坑4が並んで検出された。規模は径約1.7mで，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは18～20㎝で，埋土は5～10㎝大の円礫が混じる明黄褐色(10YR6/6)シルトである。

遺物は土師質土器の細片が出土している。

ハンダ土坑4(図3－39)

調査区中央南部において検出した。遺構の北側にはハンダ土坑3が検出された。規模は長軸約1.9m，短軸約1.7mで，平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは約20㎝で，埋土は褐灰色粘土が混じる明黄褐色(10YR6/6)シルトである。

(5) 溝跡

調査区において16条の溝跡が検出された。ここでは主な遺構について記述する。

SD1

調査区の南西部から中央南部にかけて検出した。規模は長さ 22.0m，幅約 20 cmを測る。検出面からの深さは12cmで，埋土は細～中礫混じりの灰黄色(2.5Y6/2)シルトである。

遺物は弥生土器や土師質土器等の細片が出土している。

SD2

調査区の西部において検出した南北方向の溝跡である。規模は長さ5.5m以上，幅は約 40 cmを測る。検出面からの深さは約8cmで，埋土は細～中礫が混じる褐灰色(10YR4/1)極細粒砂質シルトである。

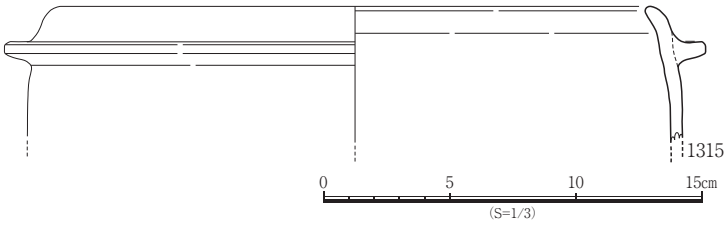


図3－40　SD2出土遺物実測図

遺物は土師質土器，瓦質土器が出土しており，そのうち瓦質土器羽釜(1315)が図示できた。

出土遺物(図3－40　1315)

1315は口縁部は内傾し，外面には断面方形の鍔が巡る。外面内面はともに摩耗する。

SD3

調査区の西部において検出した南北方向の溝跡である。規模は長さ 2.6m以上，幅は 40 ～ 60 cmを測る。検出面からの深さは概ね 7 cmで，埋土は細～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。

遺物は土師質土器，瓦質土器等の細片が出土している。

SD5

調査区の中央部において検出した南北方向の溝跡である。規模は長さ14.0m以上，幅は20cmを測る。検出面からの深さは概ね8～12cmで，埋土は細～中礫混じりの灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトである。

遺物は弥生土器と土師質土器の細片が出土している。

SD7・14(図3－41)

調査区中央部において検出した南北方向の溝跡である。溝の北側から3.4 mで東西溝のSD15に接する。そのSD15を境として南部をSD7，北部をSD14として調査を実施した。全体の規模は長さ 12.5m，幅は 50 ～ 80 cmを測る。検出面からの深さは12 cmで，埋土は地山礫が混じる暗褐色(10YR3/3)シルトである。SD15と同一溝の可能性も考えられる。

遺物は弥生土器，土師質土器，近世陶磁器の細片が出土しており，そのうち近世陶磁器皿(1316)が図示できた。

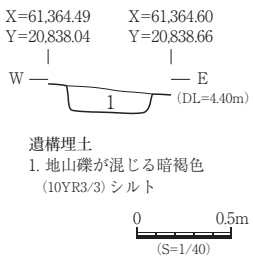


図3－41　SD7･14

出土遺物(図3－42　1316)

1316は底部が削り出し高台で内面見込みは蛇ノ目状に釉が剥ぎ取られ，周囲には砂目が認められる。

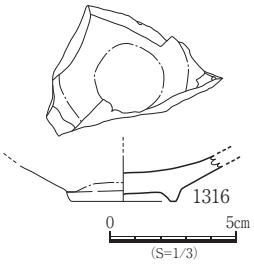


図3－42　SD7･14出土遺物実測図

SD11（図3－43）

調査区の東部において検出した南北方向の溝跡で，調査区外に続く。検出規模は長さ 23.4m，幅は 0.8 ～ 1.2m を測る。検出面からの深さは 40 ～ 50 ㎝で，埋土は中礫混じりの黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルトである。

遺物は弥生土器，須恵器，土師器，瓦等の細片が出土しており，そのうち弥生土器高杯（1317），土製品支脚（1318），須恵器甕（1319），近世陶磁器皿（1320～1322）・碗（1323～1325）・瓶（1326），平瓦（1327）が図示できた。

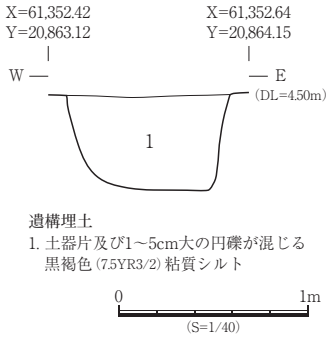


図3－43　SD11

出土遺物（図3－44　1317～1327）

1317 は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。外面はミガキ調整とナデ調整，柱部内面にハケ状工具による圧痕がみられる。1318 は支脚の一部で外面には指頭圧痕，内面に指頭圧痕とナデ調整がみられる。1319 は須恵器甕の口縁部で口唇部は平坦面を呈し，外面と内面はナデ調整を施す。1320 は灯明皿の受皿と考えられ，受部の一部には抉りが施される。煤が付着する。1321 は内面見込みと高台は露胎で，その他は褐釉が施される。外面の体部から高台までは回転ケズリ調整がみられる。1322 は内面見込みは釉剥ぎで，外面内面には褐釉を施す。1323 は陶器で外面に上絵付が施される。1324 は磁器の染付碗である。外面に草花と山，内面は口縁部に二重の圏線，見込みに1条の圏線を施す。1325 は広東型の碗で，外面は帯文間に波文か。内面は口縁部に二重圏線と見込みに 1 条の圏線が施される。1326 は筒形を呈し，底部外面と内面は無釉である。1327 は平瓦である。凹面はナデ調整，凸面に縄目がみられる。摩耗している。

SD12

調査区の中央部において検出した南北方向の溝跡で，SX1 と切り合う。検出規模は長さ 12.5m，幅は約0.8～0.9m を測る。検出面からの深さは16㎝で，埋土は細礫混じりの暗褐色（7.5YR3/3）シルトである。

遺物は弥生土器と陶器の細片が出土している。

SD13（図3－45）

調査区の東部において検出した南北方向の溝跡で，調査区を縦断し，調査区外に続く。検出規模は長さ 23.4m，幅は 3.2m を測る。溝の南部，両端には径 10 ～ 25 ㎝大の礫が並ぶ。検出面からの深さは約 1.3m で，断面形は逆台形を呈する。埋土は土器片及び 1 ～ 3 ㎝大の中礫が混じる暗褐色（7.5YR3/3）シルト，黒褐色（7.5YR3/2）礫層，中礫混じりの黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルトと中礫混じりの暗褐色（7.5YR3/4）粘質土である。

遺物は弥生土器，土師器，土師質土器，須恵器，貿易陶磁器，国内産陶磁器，瓦片等が出土しており，そのうち，土師質土器椀（1328･1329）･羽釜（1336），青磁碗（1330），陶器碗（1331･1332）・皿（1333），磁器筒型容器（1334），土師器甕（1335），瓦質土器釜（1337），瓦（1338･1339）が図示できた。

出土遺物（図3－46　1328～1339）

1328 は底部外面に断面方形の高台が付く。外面内面ともにナデ調整を施す。1329 は底部外面に断面方形の高台が付く。外面内面ともにナデ調整を施す。1330 は青磁碗の底部で削り出し高台を呈し，内面から高台畳付にかけて施釉する。1331・1332 は天目茶碗である。1331 は口縁部から体部にかけ

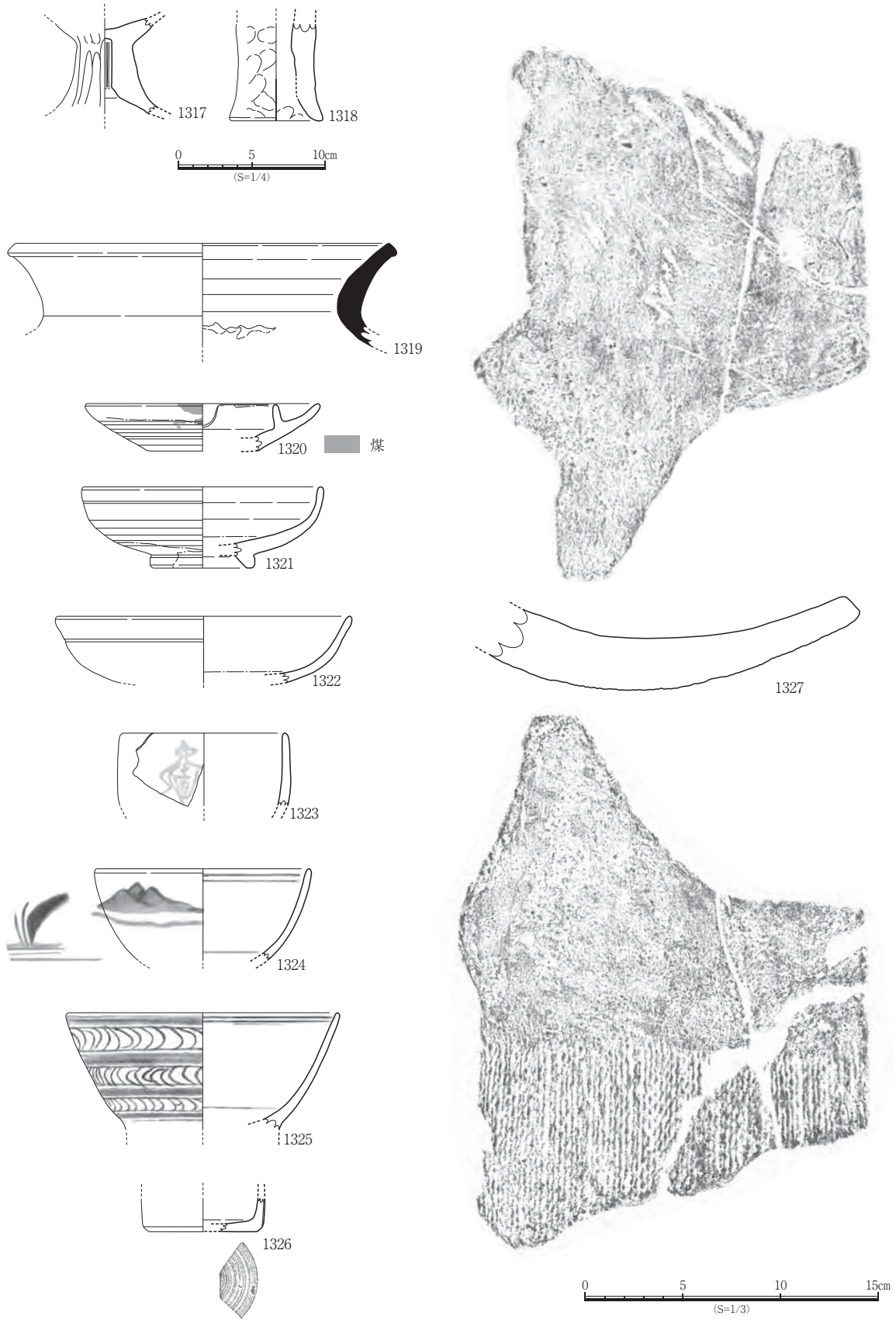


図3－44　SD11出土遺物実測図

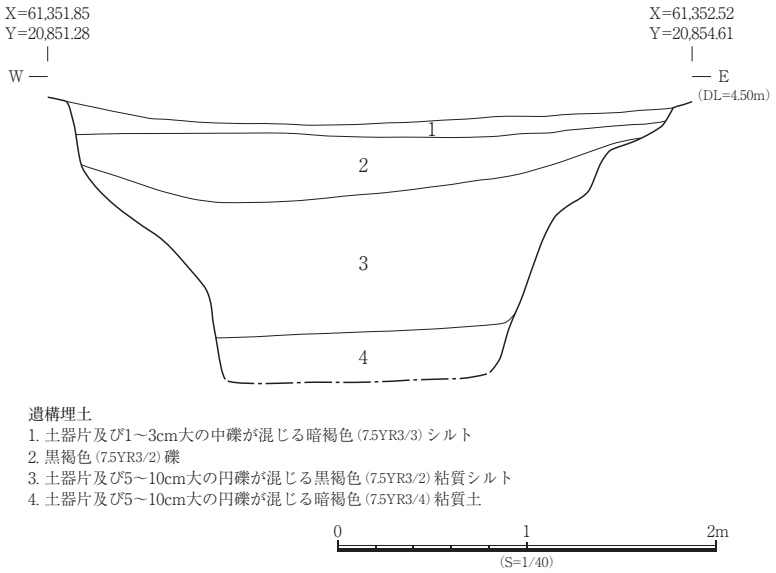


図3－45　SD13

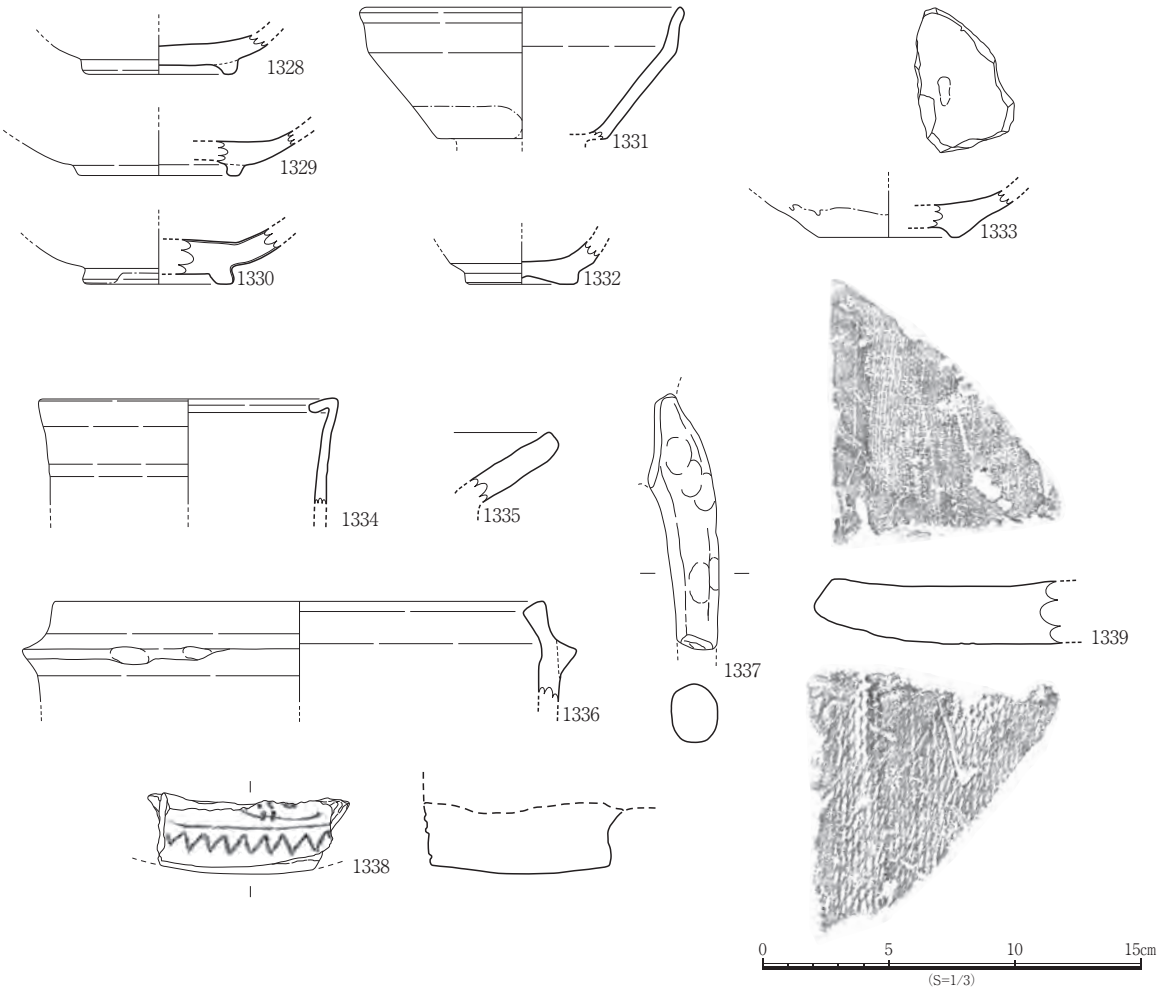


図3－46　SD13出土遺物実測図

て残存する。1332 は削り出し高台を呈する。1333 は唐津焼の皿である。削り出し高台で高台は露胎を呈する。内面見込み部分には目痕がみられる。1334 は筒形容器と考えられる。口縁部は内側に屈曲し，外面は施釉，口縁部より下の内面は露胎である。1335 は甕の口縁部である。外面は指頭圧痕がみられ，ハケ調整とナデ調整を施し，内面にナデ調整を施す。1336 は口縁下外面に断面三角形の鍔を貼付し，周辺にナデ調整を施す。口縁部内面は強いナデ調整である。1337 は瓦質土器釜の脚部分で，途中で欠損する。外面に指頭圧痕とナデ調整がみられる。1338 は軒平瓦で瓦当部分に鋸歯文と唐草文がみられる。1339 は平瓦片である。凹面に布目痕，凸面は縄目痕がみられる。

SD15

調査区の中央北部において検出した東西方向の溝跡で，SD7・14 と接し，SX1 と切り合う。検出規模は長さ 2.5m，幅は約 0.4 ～ 0.6m を測る。検出面からの深さは約 13 ㎝で，埋土は細礫混じりの褐灰色 (10YR4/1) シルトである。SD7･14と同一の溝の可能性も考えられる。

遺物は陶器と瓦片が出土しており，そのうち陶器碗 (1340･1341) が図示できた。

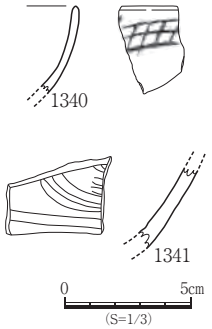


図3－47　SD15出土遺物実測図

出土遺物 (図3－47　1340･1341)

1340 は口縁部外面に格子状の文様を施す。1341 は内面に陽刻を施す。

SD16

北西部の調査区において検出した南北方向の溝跡と考えられる。検出規模は長さ 10.4m，幅は約 5.8m を測る。検出面からの深さは約 12 ㎝で，埋土は細～大礫混じりの褐灰色 (10YR4/1) シルトににぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトブロックが混じる。

出土遺物は弥生土器壷 (1342･1343)，陶器碗 (1344) が図示できた。

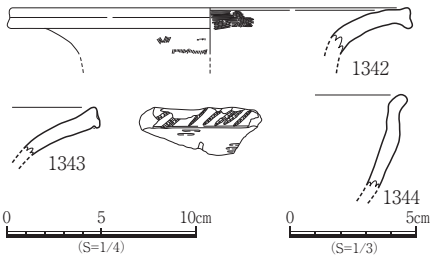


図3－48　SD16出土遺物実測図

出土遺物 (図3－48　1342～1344)

1342は大きく外反する。口唇部は浅い凹状を呈し，口縁端部はナデ調整，下方部にハケ調整を施す。内面はナデ調整とハケ調整がみられる。1343 は口唇部は肥厚し，ハケ状工具による列点文を配する。外面はタタキのちナデ調整で内面はナデ調整とハケ調整を施す。1344 は天目茶碗の口縁部である。外面内面ともに施釉がみられる。

(6) 性格不明遺構

SX1 (図3－49)

調査区の中央北部において検出した。SD12・15 を切る。規模は長軸 4.7m，短軸 2.1m を測り，平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 60 ㎝で，断面形は逆台形を呈する。埋土は人頭大の礫及びハンダ土が混じる灰色 (N4/) 粘質シルトに円礫が混じる。また底面近くからは木片が数点確認された。

出土遺物は陶磁器皿 (1345･1346)・碗 (1347･1348)・猪口 (1349)・擂鉢 (1350)，瓦 (1351～1357)，金属製品 (1358･1359) が図示できた。

出土遺物(図3－50･51　1345～1359)

1345は口縁部は外反し，端部は輪花状を呈する(なぶり口)。1346は口縁部が輪花状を呈し，口縁端部に錆釉を施す。1347は陶器の碗である。底部は削り出し高台で体部から口縁部にかけて内湾する。底部側面は回転ケズリを施す。高台以外は施釉がみられる。1348は削り出し高台で体部から口縁部にかけて内湾する。外面下半部に陽刻状の文様が巡る。高台畳付は露胎である。1349は磁器である。高台内は施釉し，畳付周辺には砂が付着する。外面には3条の圏線が巡る。1350は備前焼の擂鉢と考えられる。口縁部外面には1条の沈線，内面には11条1単位の摺目を巡らす。1351・1353は軒平瓦である。瓦当には大振りの文様が確認できる。1352も軒平瓦である。瓦当には中心飾りと唐草と考えられる文様がみられる。1354は丸瓦である。凸面は工具によるナデ，凹面に布目痕と鉄線引きの痕跡がみられる。1355～1357は桟瓦である。1358は銭貨で寛永通寶である。1359は煙管の吸口の一部と考えられる。

SX2(図3－52)

調査区の中央南端において検出した。検出長は南北2.0m，東西3.4mを測り，遺構の南部は調査区外に続く。検出面からの深さは約10㎝で，床面からは溝状遺構を検出した。その形状から竪穴建物跡の壁溝の可能性も考えられる。埋土は細礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器鉢(1361)と土製品(1360)が図示できた。

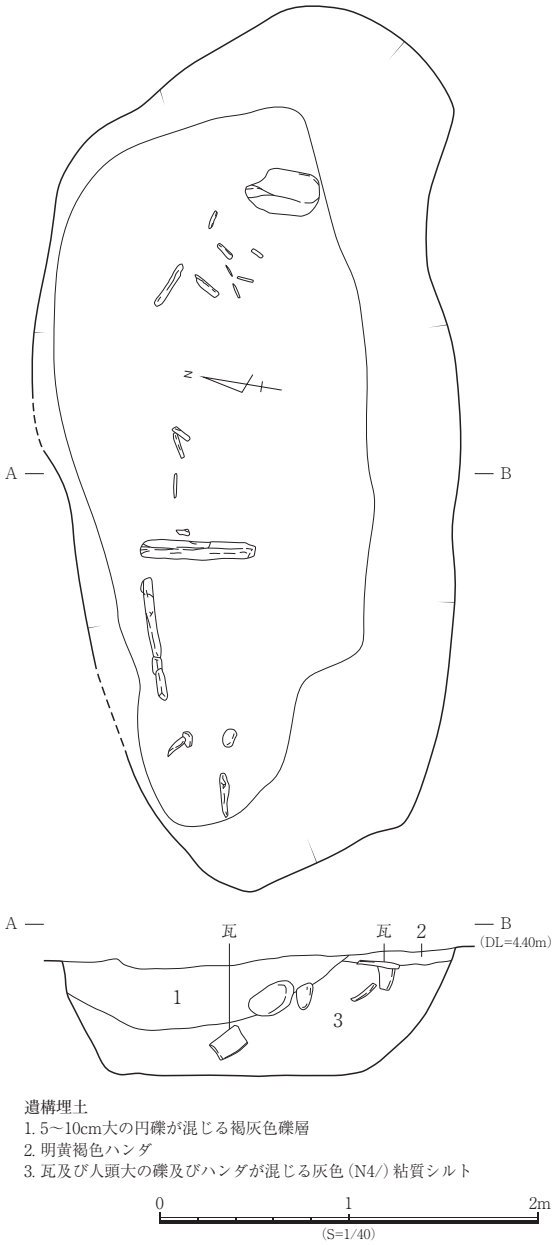


図3－49　SX1

出土遺物(図3－53　1360･1361)

1360は支脚である。中空を呈し，外面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。1361は外面と内面には指頭圧痕とナデ調整，外面底部には接合痕がみられる。

SX3

調査区の北部において検出した。検出長は南北1.2m，東西2.0mを測り，遺構の北部は調査区外に続く。遺構の南部はSX1に切られる。検出面からの深さは約70㎝を測り，埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルトである。また検出時は重複する遺構の存在が考えられたが，切り合い関係を確認することはできなかった。

出土遺物は，須恵器杯(1362)・甕(1363)，近世陶磁器碗(1364･1366･1376)・皿(1365･1370･1373･

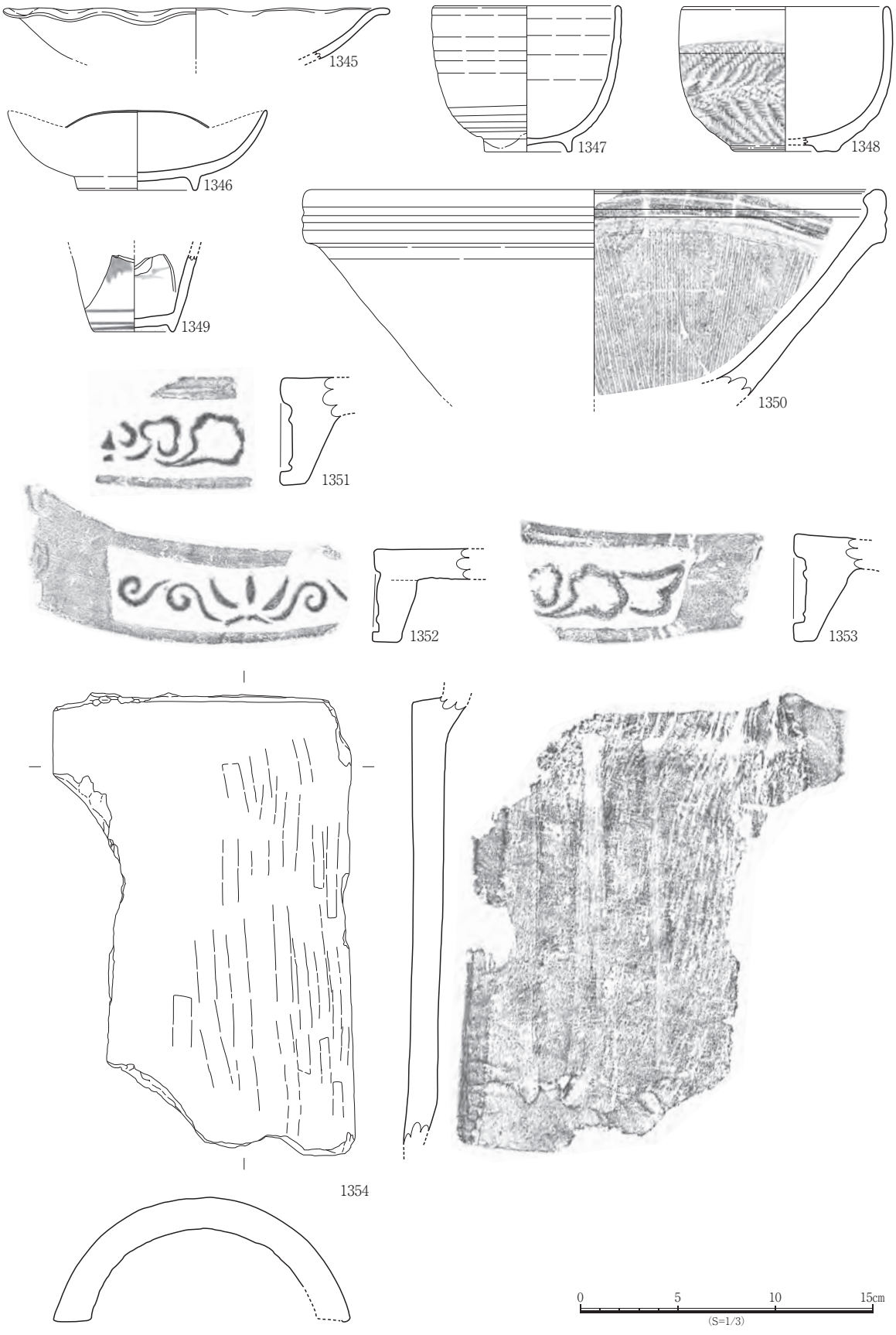


図3－50　SX1出土遺物実測図1

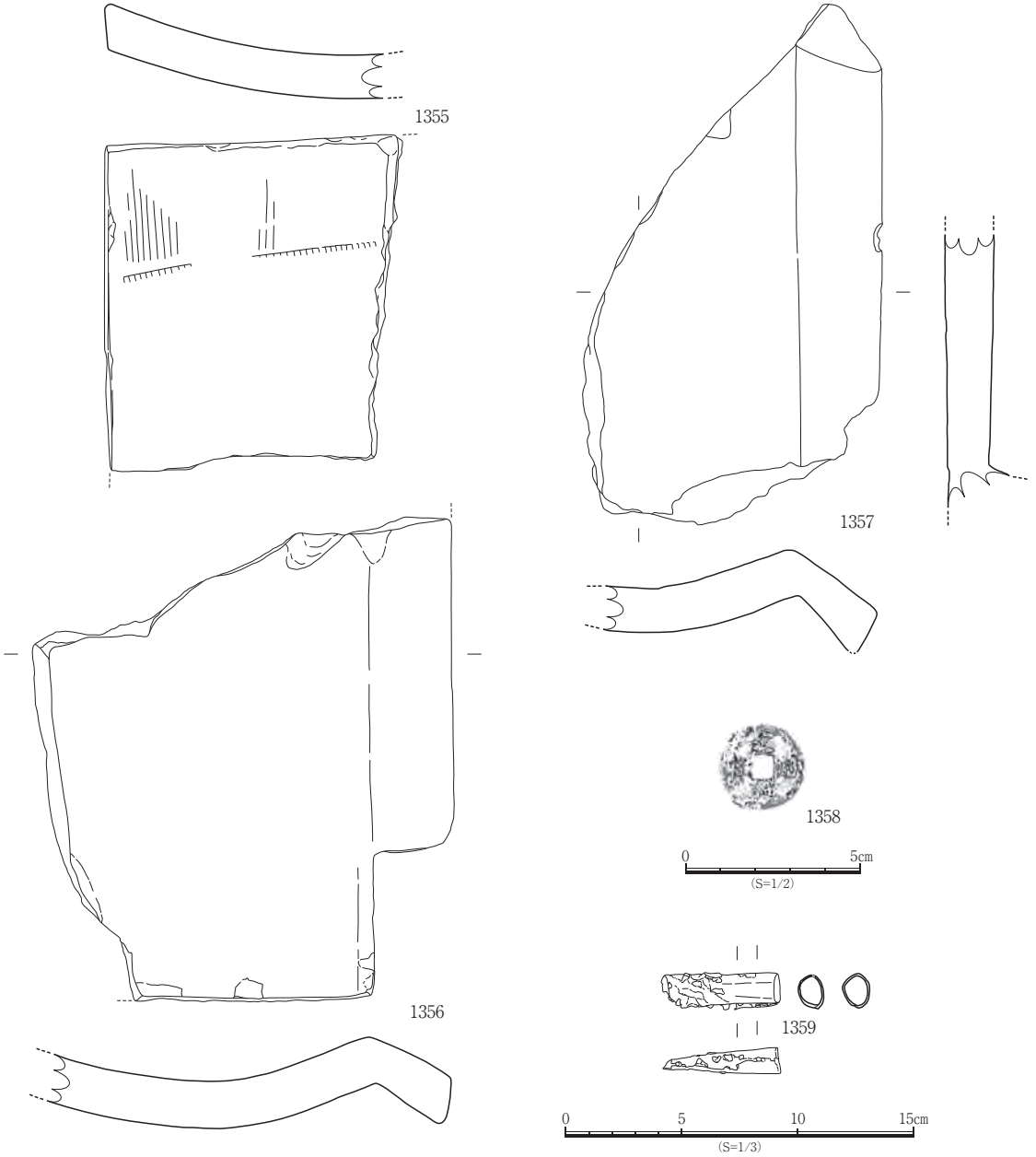


図3－51　SX1出土遺物実測図2

1374)・鉢(1368･1377･1378)・瓶(1371･1375)・香炉(1372), 石製品硯(1379)・砥石(1369･1380), 瓦(1367)が図示できた。

出土遺物(図3－54･55　1362～1380)

1362は口縁部の外面内面ともにナデ調整を施す。1363は甕の口縁部で, 口縁端部及び外面内面はナデ調整を施す。1364は小形丸碗である。底部は削り出し高台で高台部分は露胎である。1365は陶器の皿で内面見込みに染付を施し, 高台内に刻印がみられる。1366は陶器の碗である。外面に染付を施す。1367は平瓦である。凹面は布目痕, 凸面に縄目痕が認められる。1368は陶器の鉢である。口縁端部は折縁を呈する。高台内は露胎で, 口縁部から体部の外面はハケ目と褐釉を施す。内面は口縁端部を除きハケ塗りである。1369は砥石片と考えられる。4面に使用痕跡があり, そのうちの1面に文

字が刻まれる。1370 は青磁の大皿である。口縁部は折縁状を呈し，底部高台内は蛇ノ目釉剥ぎを施す。内面には砂目がみられる。1371 は染付の瓶である。外面には圏線が巡る。内面は回転ケズリ，回転ナデ調整を施す。1372 は香炉と考えられる。底部外面の脚部は 3 足を呈し，高台部ももつ。内面には煤が付着する。1373 は灯明皿と考えられる。立ち上がりの一部に抉りを施す。外面は回転ケズリと回転ナデ調整で内面に回転ナデ調整を施す。1374 は陶器の皿である。底部は削り出し高台で口縁部は輪花状を呈し，内面見込みは蛇ノ目状の釉剥ぎを施す。1375 は瓶の底部で，内面と高台内は露胎を呈する。1376 は碗の底部である。高台畳付は露胎を呈しその他は施釉する。高台内は抉り状を呈する。1377 と 1378 は鉢である。1377 の口縁部は玉縁状を呈し，外面内面ともに回転ナデ調整を施す。1378 の外面は体部に回転ケズリを施し，高台は摩耗する。内面は回転ナデ調整を施す。1379 は硯である。中央部にかけて断面凹状を呈する。1380 は砥石である。4 面に使用痕跡がみられる。

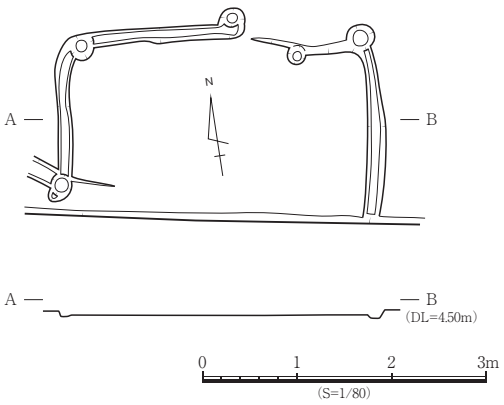


図3－52　SX2

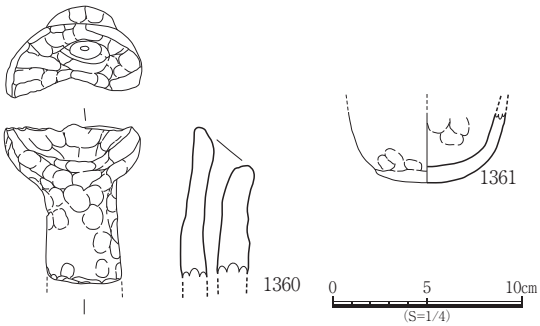


図3－53　SX2出土遺物実測図

SX4

調査区の中央南部において検出した。検出長は長軸約 4.0m，短軸約 2.2m を測る。平面形は隅丸長方形を呈する。遺構は上面を SD1，SK22 に切られる。検出面からの深さは 8 ～ 16 ㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器壷(1381･1382)・鉢(1383)が図示できた。

出土遺物(図3－56　1381～1383)

1381 は複合口縁壷である。2 次口縁部の外面に櫛描波状文とナデ調整を施す。1 次口縁部から頸部の外面と内面はハケ調整である。1382 は壷の底部と考えられる。外面は摩耗し，内面も摩耗するが，一部ナデ調整がみられる。1383 は鉢で外面は底部にタタキとナデ調整が施される。内面にハケ調整，底部にはナデ調整を施す。

(7) ピット

P1

調査区の南西部において検出した。2 個のピットと切り合う。規模は径 36 ㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは 9 ㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器鉢(1388)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1388)

1388 は小型の鉢で外面は摩耗する。内面はナデ調整で一部は摩耗する。

P2

調査区の南西部において検出した。SD2 を切る。規模は径が概ね 30 ㎝を測り，平面形は円形を呈

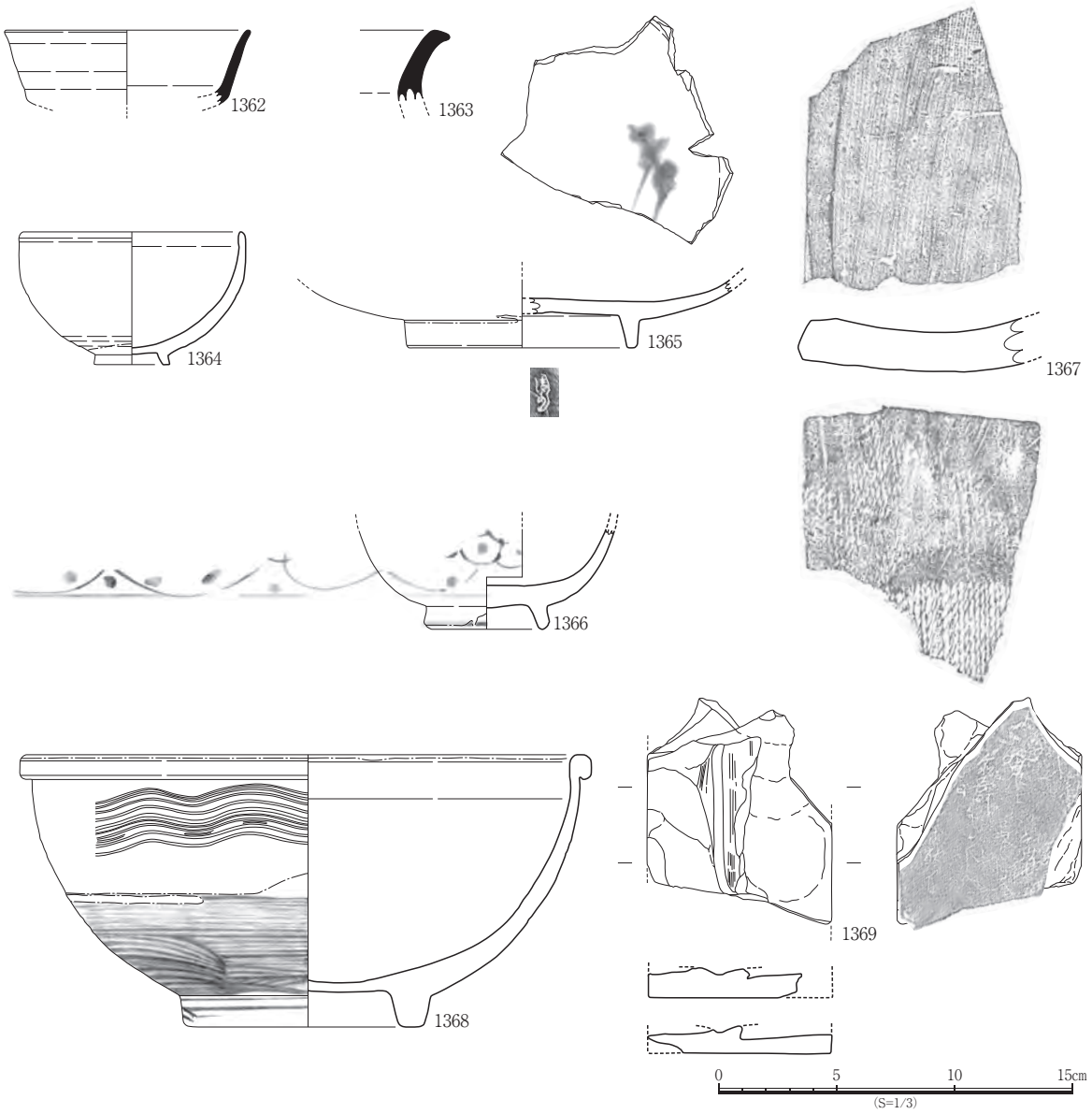


図3－54　SX3出土遺物実測図1

する。検出面からの深さは約20㎝を測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器高杯(1390)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1390)

1390は高杯の脚部である。外面内面ともに摩耗しており，円孔が施される。

P3

調査区の南西部において検出した。他のピットと切り合う。規模は径30～40㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは概ね36㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は近世陶磁器碗(1391)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1391)

1391は肥前系磁器と考えられる。底部は削り出し高台を呈する。内面の見込みに圏線と文様がみられる。外面にも圏線を施す。

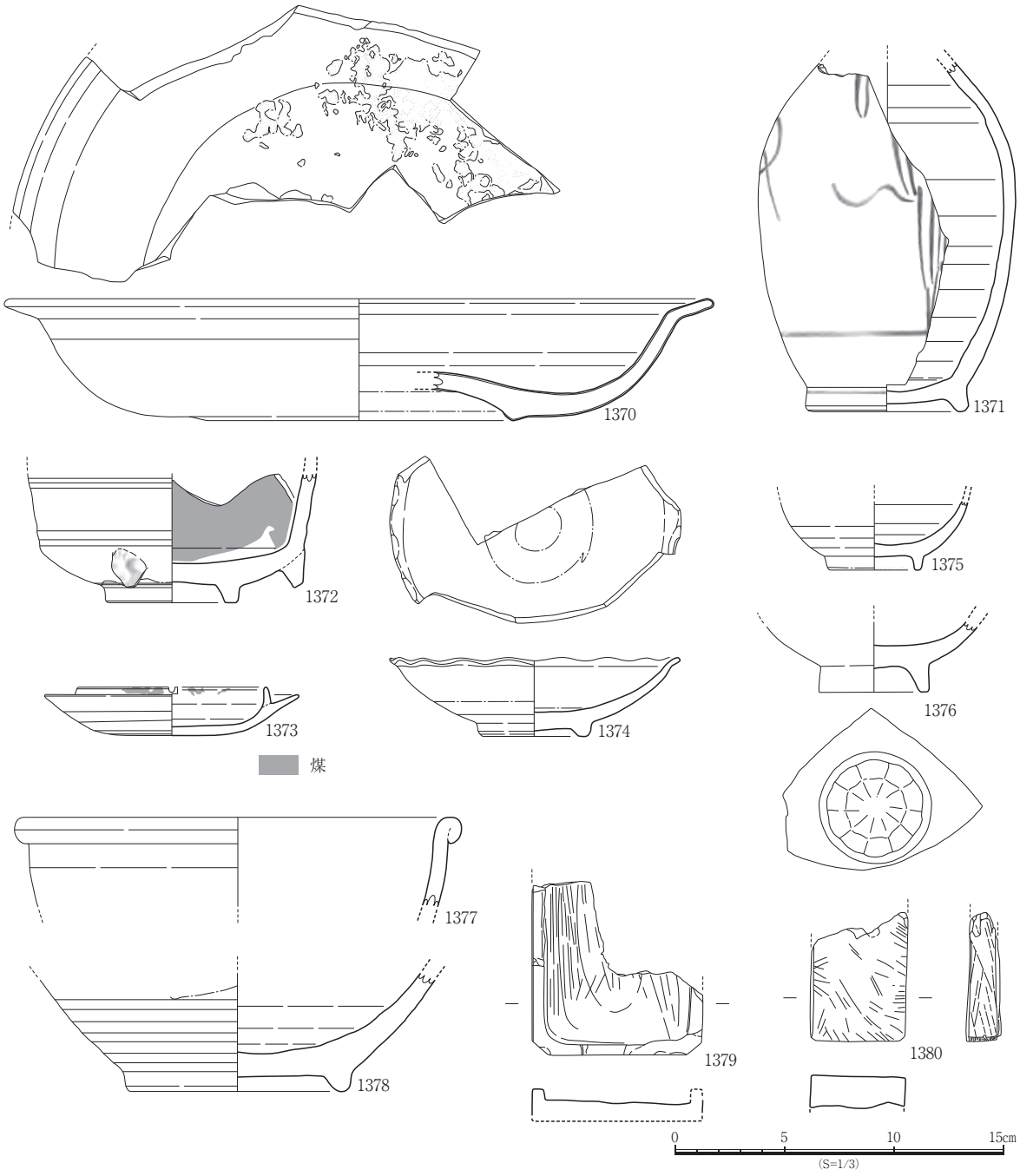


図3－55　SX3出土遺物実測図2

P4

調査区の南西部において検出した。規模は径が概ね25㎝前後を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは13㎝を測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

出土遺物は土師質土器皿(1393)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1393)

1393は底部外面の切り離しは回転糸切りで，体部から口縁部は外面内面ともに回転ナデ調整を施す。

P5

調査区の南西部において検出した。他のピット2個と切り合う。規模は径45～50㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは8㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

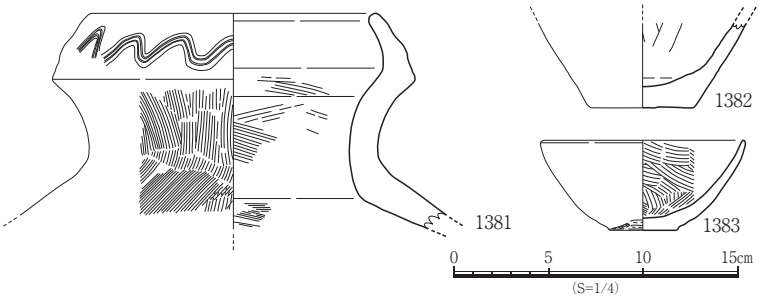


図3－56　SX4出土遺物実測図

出土遺物は弥生土器壷(1384)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1384)

1384は壷の口縁部で，端部に粘土帯を貼付し肥厚させる。外面は粘土帯の貼付部分に丁寧な指頭圧痕がみられ，口縁部下方はタテ方向のハケ調整を施す。内面の口縁端部は摩耗するが，その他はヨコ方向のハケ調整とミガキを施す。

P6

調査区の南西部において検出した。他のピット3個と切り合う。規模は径58㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは概ね15㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器高杯(1389)が図示できた。

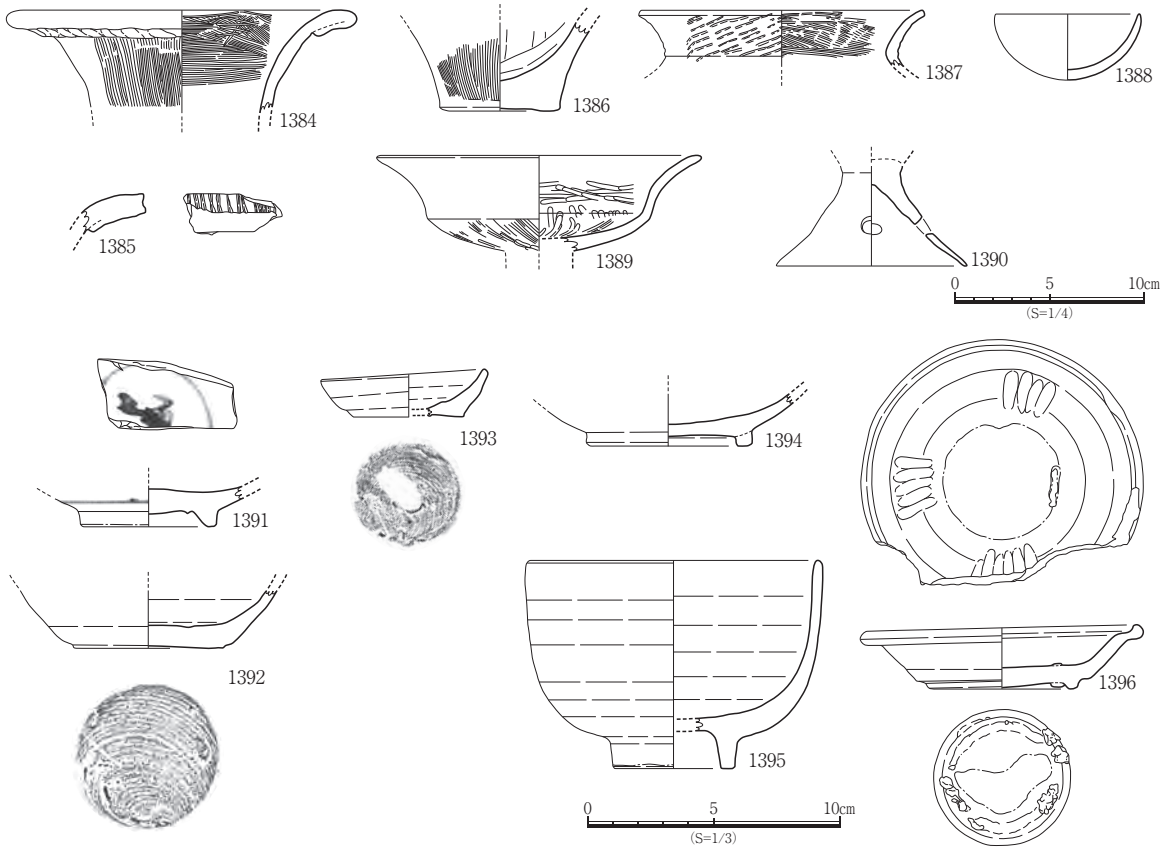


図3－57　ピット出土遺物実測図

出土遺物(図3－57　1389)

1389は杯部である。口縁部外面は摩耗する。その他は底部にかけてハケ調整とミガキを施す。内面は口縁部にナデ調整，体部から底部にかけてミガキを施す。

P7

調査区の南西部において検出した。規模は径が概ね40㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは5～24㎝を測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器壷(1385)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1385)

1385の口縁部は粘土帯を貼付し肥厚させ，口唇部に刻目を施す。貼付部分に指頭圧痕及びナデ調整がみられる。

P8

調査区の南西部において検出した。規模は長軸約90㎝，短軸約40㎝を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは4～14㎝を測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

出土遺物は土師器椀(1394)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1394)

1394は底部に断面方形の輪高台を貼付する。底部には糸切り痕がみられる。内面にナデ調整を施す。

P9

調査区の南西部において検出した。規模は径が概ね20㎝を測る。平面形は円形を呈する。SX4を切る。検出面からの深さは35㎝を測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器壷(1386)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1386)

1386は壷の底部で平底を呈する。外面はタテ方向のハケ調整で内面にナデ調整を施す。

P10

調査区の東部において検出した。規模は長軸約86㎝，短軸約46㎝を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは13㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は弥生土器甕(1387)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1387)

1387は甕の口縁部で外反する。外面はタタキが施される。内面はハケ調整である。

P11

調査区の中央南部において検出した。規模は径が概ね20㎝は測る。平面形は円形を呈する。検出面からの深さは25㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は瀬戸焼皿(1396)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1396)

1396は折縁皿で，内面見込みは円形の釉剥ぎがみられる。また，体部内面は丸ノミ状のケズリが3ヵ所に施される。高台内には窯道具の一部が付着する。

P12

調査区の中央北部において検出した。規模は径約90㎝を測る。平面形は円形を呈する。検出面か

らの深さは18㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は陶器碗(1395)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1395)

1395は断面方形の高台を有する。高台は露胎で，その他は施釉がみられる。

P13

調査区の北西部において検出した。SB6のP3を切る。規模は径約30㎝を測り，平面形は円形を呈する。検出面からの深さは26㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。

出土遺物は土師質土器杯(1392)が図示できた。

出土遺物(図3－57　1392)

1392は底部の切り離しは回転糸切りで，外面と内面はともに回転ナデ調整を施す。

(8) 遺物包含層

ⅣC 区の調査区では北西部とその他の区域で堆積状況が異なっていたため，調査区北西部と調査区南西部・中央部・東部の堆積層出土遺物を分けて記述する。

① 調査区北西部

ⅰ 第Ⅱ層出土遺物

弥生土器(図3－58　1397)

1397は壷の底部と考えられる。平底を呈し，外面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。内面にナデ調整がみられる。

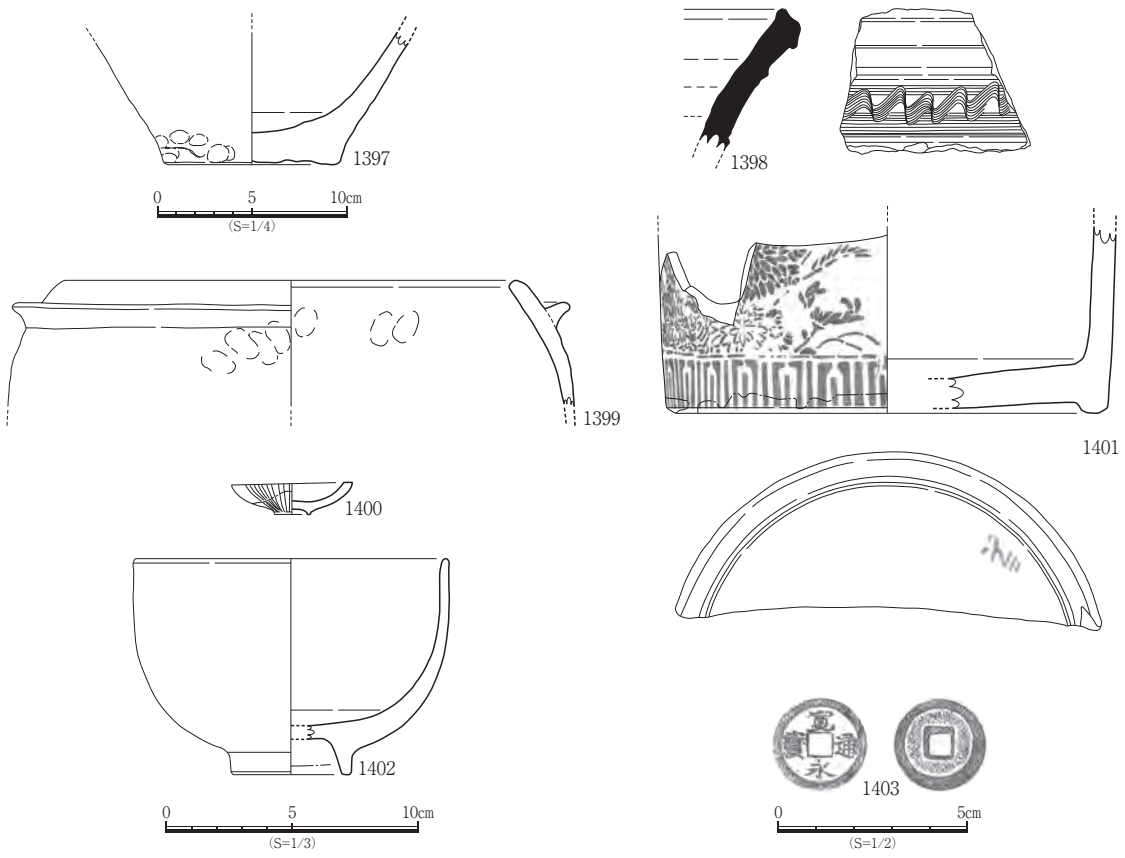


図3－58　第Ⅱ層出土遺物実測図

須恵器(図3－58　1398)

1398は甕の口縁部である。外面に櫛描波状文が巡り，口縁端部はナデ調整を施す。内面は摩耗する。

瓦質土器(図3－58　1399)

1399 は瓦質土器の羽釜である。外面内面ともに摩耗している。口縁部下方に断面三角形の鍔を貼付する。外面の鍔と体部間に煤が付着する。

陶磁器(図3－58　1400～1402)

1400 は磁器の紅皿である。外面は貝殻状の型押成形を施す。口縁部には細礫が付着する。1401 は陶器の鉢と考えられる。底部は削り出し高台を呈し，外面に雷文と菊の文様がみられる(型紙刷り)。高台内面に「三六」の墨書が施される。1402 は陶器の碗である。丸型碗で底部は削り出し高台を呈する。高台畳付と内側にかけては露胎である。

金属製品(図3－58　1403)

1403は寛永通寶である。

ⅱ 第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図3－59　1404･1405)

1404 は壷の口縁部である。粘土帯を貼付し肥厚させる。外面の貼付部分は指頭圧痕がみられる。内面は4条の櫛描文と短沈線を巡らす。1405も壷の口縁部である。口唇部には竹管による施文がみられる。外面はハケ調整，内面にナデ調整を施す。

土師質土器(図3－59　1406･1407)

1406 は皿で，底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部にかけて外上方に短くのびる。外面と内面はともに回転ナデ調整を施す。1407 は杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。体部は斜め上方にのび，口縁部に至る。外面と内面は回転ナデ調整を施す。

貿易陶磁器(図3－59　1408)

1408 は青磁の稜花皿である。口縁端部に抉りを施す。

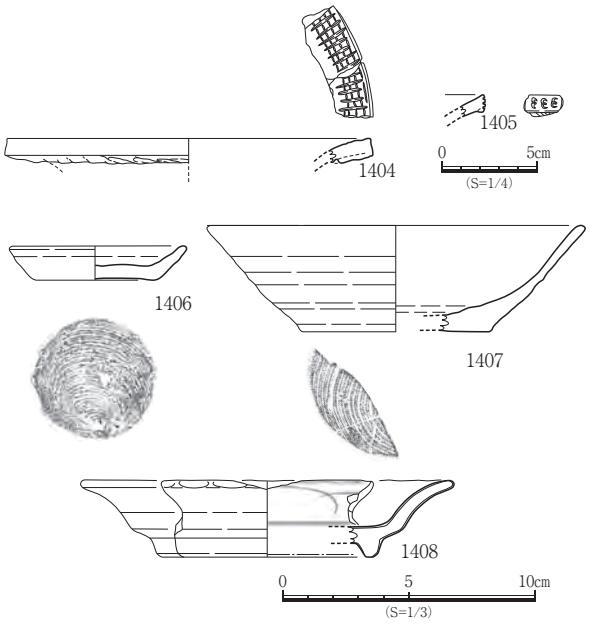


図3－59　第Ⅲ層出土遺物実測図

ⅲ 第Ⅳ層出土遺物

弥生土器(図3－60　1409～1414)

1409は壷である。口縁部には粘土帯を貼付する。口唇部は平坦面を呈する。外面と内面はともにナデ調整とハケ調整を施す。1410 は壷である。口縁部は外反する。口唇部は下方に拡張し，外面には列点文を配する。内面はナデ調整を施す。1411 は甕である。口縁部は「く」の字状を呈する。外面は体部から口縁部までタタキがみられ，頸部にハケ調整を施す。内面は口縁部から頸部にかけてハケ調整，体部にナデ調整を施す。1412は甕である。外面は体部から口縁部までタタキがみられ，頸部と体部下半部にハケ調整を施す。内面は口縁部から頸部にかけてハケ調整で体部下半部にナデ調整を施す。

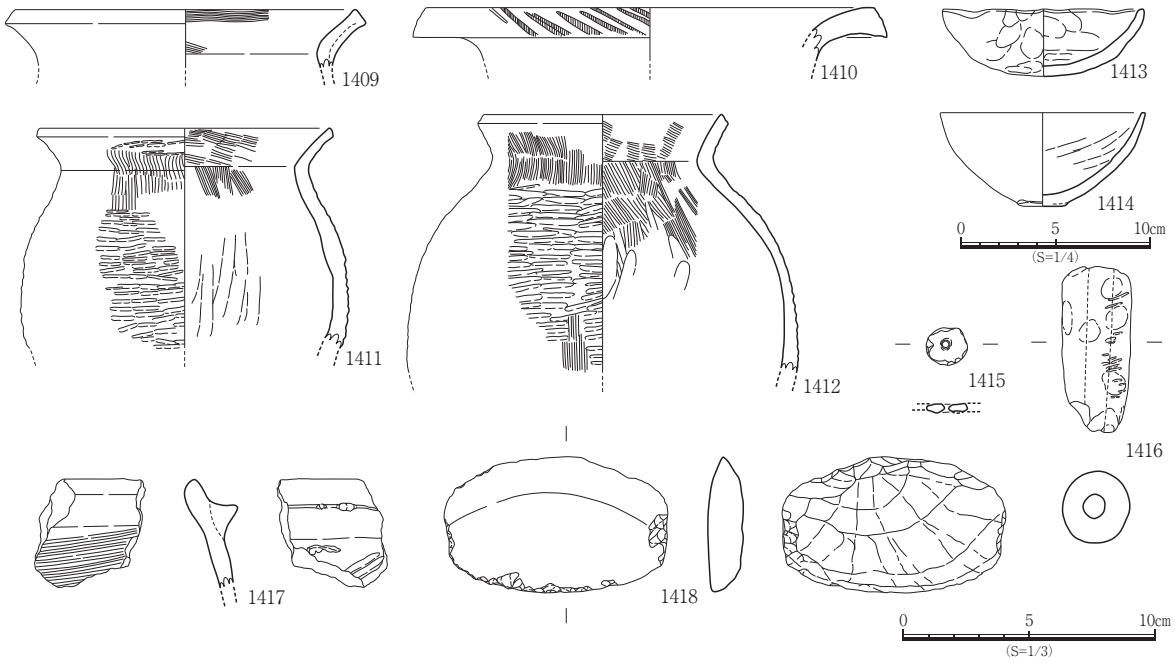


図3－60　第Ⅳ層出土遺物実測図

1413は鉢である。外面と内面はともに指頭圧痕とナデ調整がみられ，口縁部の一部は指頭圧痕により波状を呈する。1414は鉢である。外面と内面はともにナデ調整を施す。

土製品（図3－60　1415･1416）

1415は土製品で紡錘車の可能性が考えられる。周縁部は器面が剥離している。1416は土錘と考えられる。外面の一部にタタキがみられ，ナデ調整と指オサエを加える。

土師質土器（図3－60　1417）

1417は羽釜の口縁部である。外面の口縁部下方に断面三角形の鍔が巡り，下方にはタタキがみられる。内面は口縁部にナデ調整で口縁部下方はハケ調整を施す。

石製品（図3－60　1418）

1418は打製石庖丁の未成品と考えられる。両側は抉りを意識したものか。

② 調査区南西部・中央部・東部

ⅰ 包含層出土遺物

弥生土器（図3－61　1419･1420）

1419は壺の底部で平底を呈する。外面はハケ調整で，底部近くは指頭圧痕がみられる。内面はナデ調整と指頭圧痕がみられる。1420はミニチュア土器である。鉢を意識したものか。外面は指頭圧痕がみられ，内面にナデ調整を施す。

土師質土器（図3－61　1421･1423）

1421は土師質土器の杯である。体部は斜め上方にのびて，口縁部に至る。外面と内面はともに摩耗している。1423は鉢あるいは焙烙の可能性が考えられる。口縁部は内湾し，口唇部は平坦面を呈する。外面内面ともにナデ調整で一部摩耗がみられる。

須恵器（図3－61　1424･1425）

1424は甕の底部である。外面内面は回転ナデ調整で底部外面周辺はケズリが施される。1425は壺

の底部である。外面はナデ調整で，内面にナデ調整とタタキ状の圧痕がみられる。

灰釉陶器(図3－61　1422)

1422は皿の口縁部である。外面と内面ともに回転ナデ調整を施す。

貿易陶磁器(図3－61　1426･1427･1433)

1426 は青磁の皿である。口縁部は外反する。1427 は青花の皿である。内面見込みに牡丹唐草文か。1433 は青磁で，碗の底部である。外面には鎬蓮弁か。高台内は蛇ノ目状の釉剥ぎを呈し，内面見込みに印花文がみられる。

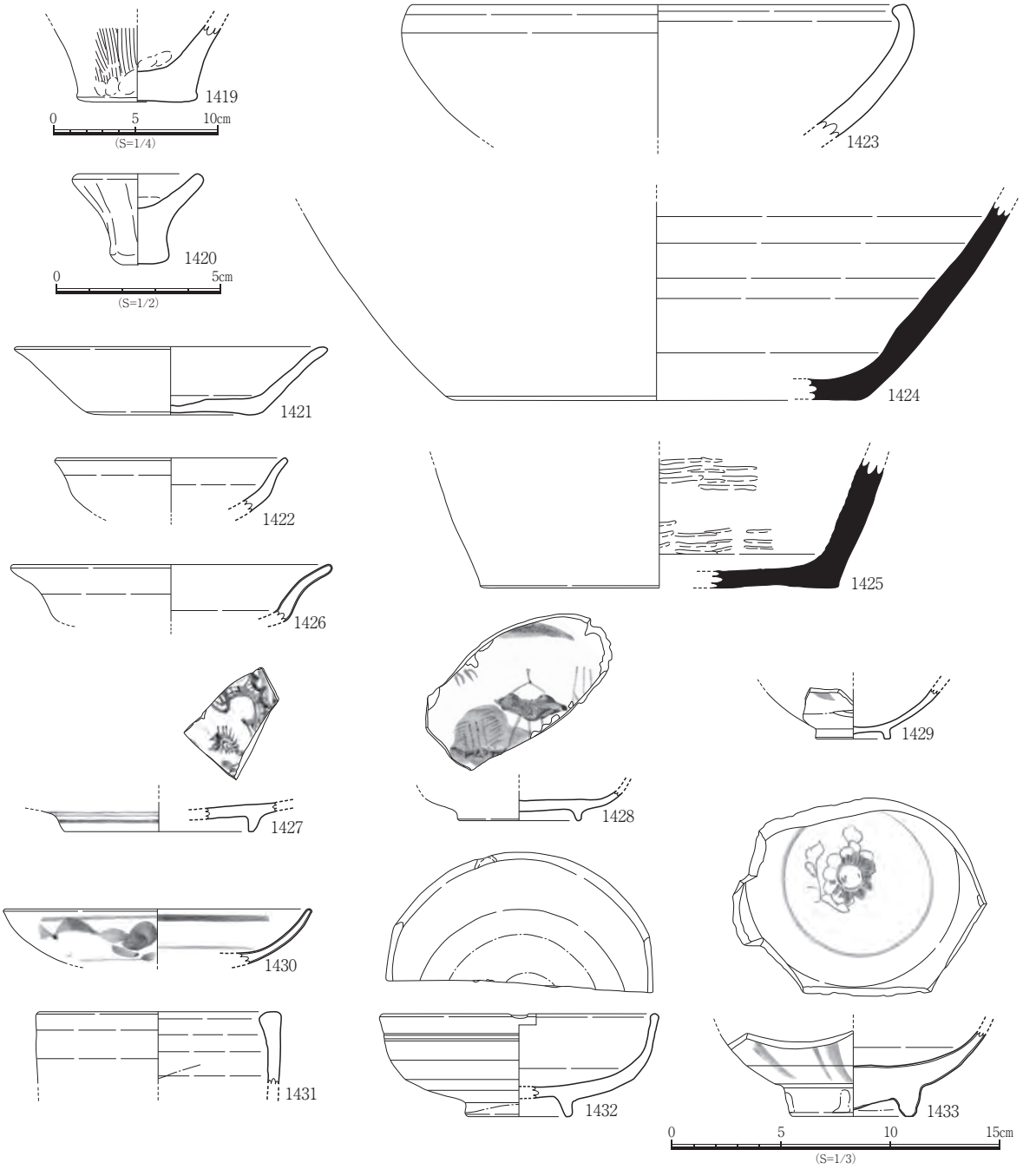


図3－61　包含層出土遺物実測図1

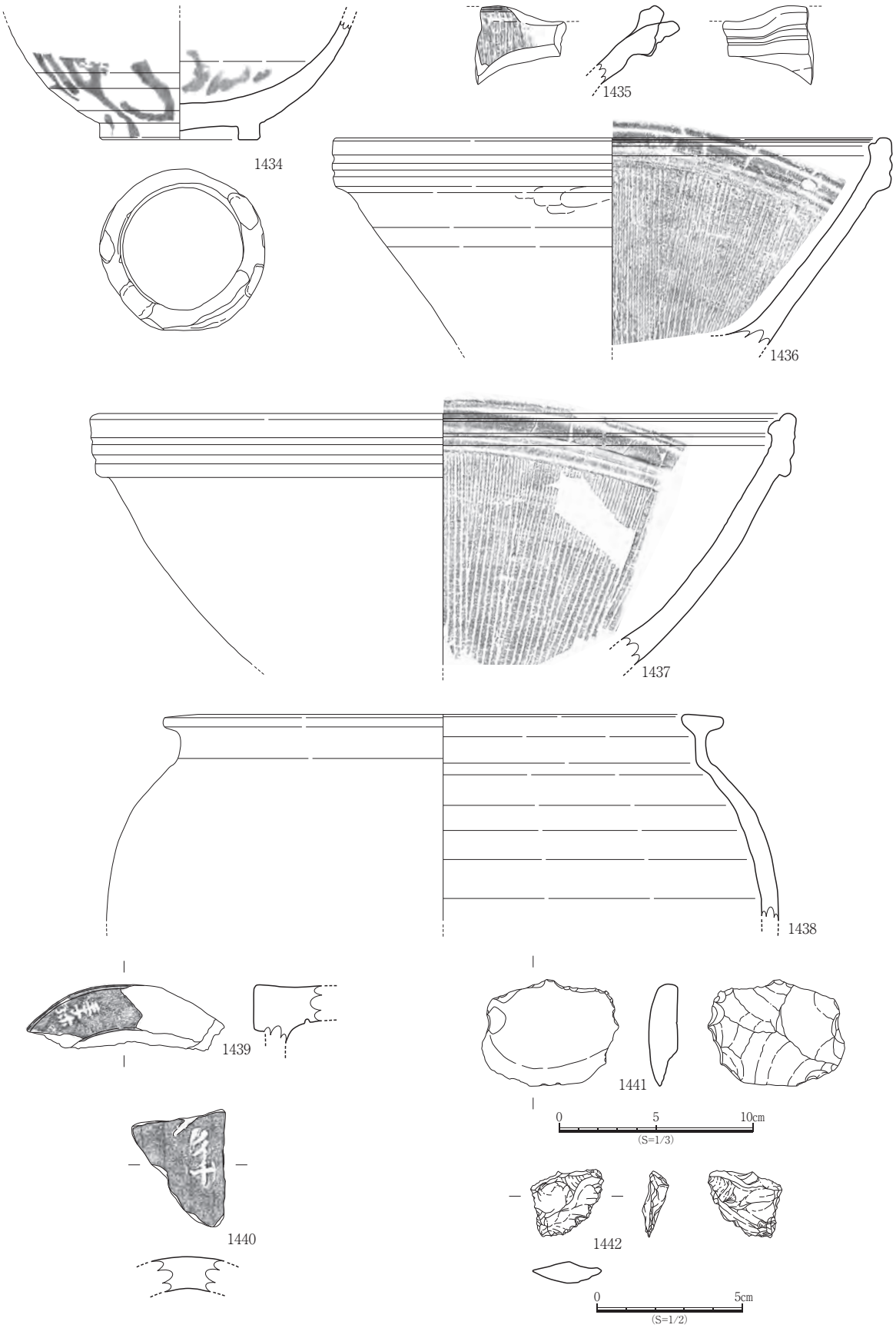


図3－62　包含層出土遺物実測図2

近世陶磁器（図3－61･62　1428～1432･1434～1438）

1428 は染付の磁器皿である。底部は削り出し高台を呈し，内面に東屋あるいは楼閣と樹木を配する。1429 は皿である。削り出し高台を呈し，外面は露胎である。1430 は染付の磁器皿である。外面は圏線間に草花文を配する。内面は口縁部と見込みに圏線文がみられる。1431 は磁器で，香炉あるいは筒型容器の口縁部である。口縁端部は肥厚し，内傾する。内面は口縁部下方まで施釉する。1432 は陶器の皿である。鉄釉で，底部は削り出し高台を呈し，内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台は露胎である。1434は陶器の鉢である。底部は削り出し高台を呈する。外面と内面はともに回転ナデ調整で，内面と外面に褐釉を施す。さらに外面に鉄釉流し掛けを施す。1435 は擂鉢の片口部分である。内面には摺目を施す。備前焼か。1436 と 1437 は擂鉢である。口縁部外面は２条の沈線がみられ，体部外面はケズリとナデ調整である。内面に摺目を施し，口縁部下方はナデ調整を施し，摺目をナデ消す。1438 は陶器の甕である。外面内面ともに回転ナデ調整で，内面と外面にオリーブ色の釉を施す。

瓦（図3－62　1439･1440）

1439 は軒丸瓦である。「王子□」の刻印が施される。□には弥か。1440 は丸瓦の凸面に「ノイ千」の刻印が施される。

石製品（図3－62　1441･1442）

1441 は打製石庖丁である。砂岩製で片側に抉りを施す。1442 は剥片である。チャート製である。

第Ⅳ章　東野土居遺跡Ⅲ・Ⅳ区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・松元美由紀・馬場健司・辻　康男

1. はじめに

本報告では，遺跡発掘調査に伴い実施した自然科学分析結果について述べる。実施した自然科学分析は，放射性炭素年代測定，テフラ分析（重鉱物組成＋火山ガラス比分析・屈折率測定），植物珪酸体分析，遺構埋土の水洗別と種実の同定を主目的とした微細物分析，炭化材同定である。

2. 試料

テフラ分析は，ⅣＢ－１区で実施する。分析層準は，調査区壁面沿いに設定した深堀トレンチにおいて，段丘礫層の上位に累重するローム状堆積層および包含層をなす黒ボク土である。分析試料は，試料番号１～５を採取した。試料の詳細については，重鉱物組成＋火山ガラス比分析の結果記載で示す図４－１の柱状図を参照頂きたい。

放射性炭素年代測定は，竪穴住居のST28（14C－1），ST25（14C－2）より検出された炭化材である。

植物珪酸体分析はテフラ分析層準と同一試料の試料番号１～５と，ⅢＡ－６区のSD1とSE1の遺構

表４－１　遺構埋土分析試料一覧

調査区		遺構／位置		層位	時代	分析			備考
						PO	S	C14	
ⅢＡ	6	SD1	－	下層	中世	○	－		堀埋土
		SE1	－	〃	〃	○	－		井戸埋土
ⅢＢ	2	ST1	P1	－	弥生終末	－	○		－
		ST2	SK1	－	〃	－	○		－
		ST2	P1	－	〃	－	○		－
		ST3	SK1	埋土	古墳後期	－	○		－
		ST5	P1	－	弥生終末～古墳初頭	－	○		－
		ST7	〃	埋土	〃	－	○		－
ⅣＡ		ST25	中央ピット	－	〃		○	○	－
		ST28	〃	－	〃		○	○	－
		ST30	〃	－	〃		○		－
ⅣＢ	1	ST46	〃	－	弥生後期後葉		○		－
		SK6	－	－	弥生終末～古墳初頭		○		－

註）PO:植物珪酸体分析　S:種実分析　C14:放射性炭素年代測定

埋土最下部を充填する堆積物の試料番号6・7である。

微細物分析は，竪穴住居跡の中央ピットの埋土を分析試料とし，ⅢＢ－2区のST1～3・5・7，ⅣＡ区のST25・28・30，ⅣＢ－1区のST46・SK6で実施する(表4－1)。炭化材同定は，SK26埋土の水洗別によって抽出された炭化材片と放射性炭素年代試料である。

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析は，AMS法で実施する。土壌に現在の根等が含まれている場合は，ピンセット等を用いて除去する。土壌に塩酸を加えて放置したあと，蒸留水で洗浄し不純物を取り除く。

試料中の炭素からCO_2を精製する。その後CO_2からグラファイトを生成する。処理後の試料を内径1㎜の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，3MV小型タンデム加速器をベースとした14C－AMS専用装置(NEC　Pelletron　9SDH－2)を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX－Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に13C/12Cの測定も行うため，この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり，誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い，誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2) テフラ分析

① 重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離，重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は，重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え，その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また，火山ガラス比における「その他」は，主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

② 屈折率測定

屈折率の測定は検出された火山ガラスを対象とし，火山ガラス比分析を行った試料全点を対象とする。測定は，古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重

2.5)の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下，短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ)を，近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には，分析試料の乾燥重量，プレパラート作成に用いた分析残渣量，検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し，堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は，植物珪酸体含量の一覧表で示すとともに，植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(4) 微細物分析

試料 200cc を水に浸し，粒径 0.5 ㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。

抽出された大型植物遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)，中山ほか(2000)等の図鑑との対照から，種類と部位を同定し，個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は，ハイフンで結んで表示する。炭化材は，最大径と 70℃ 48 時間乾燥後の重量を表示する。試料中に確認された木材，木の芽，植物のトゲ，蘚苔類，菌核，昆虫は，抽出・プラス表示にとどめる。分析後は，大型植物遺体等を種類別に容器に入れ，70%程度のエタノール溶液で液浸し，保管する。

表4－2　放射性炭素年代測定結果

試料名	遺構	層位	種類		補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
14C－1	ST28	2層	炭化材	スダジイ	1,820± 20	－26.07±0.40	1,840± 20	IAAA－103134
14C－2	ST25		〃	ツバキ属	1,850± 20	－24.14±0.42	1,830± 20	IAAA－103135

1)年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用
2)BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は，測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値

表4－3　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代(cal)											相対比	Code No.
14C－1	1,819±24	σ	cal	AD	139	－	cal	AD	158	cal	BP	1,811	－	1,792	0.239	IAAA－103134
			cal	AD	167	－	cal	AD	196	cal	BP	1,783	－	1,754	0.392	
			cal	AD	208	－	cal	AD	235	cal	BP	1,742	－	1,715	0.369	
		2σ	cal	AD	128	－	cal	AD	249	cal	BP	1,822	－	1,701	1.000	
14C－2	1,847±23	σ	cal	AD	129	－	cal	AD	179	cal	BP	1,821	－	1,771	0.652	IAAA－103135
			cal	AD	187	－	cal	AD	213	cal	BP	1,763	－	1,737	0.348	
		2σ	cal	AD	87	－	cal	AD	105	cal	BP	1,863	－	1,845	0.054	
			cal	AD	121	－	cal	AD	236	cal	BP	1,829	－	1,714	0.946	

1)計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%，2σ は95%である。
5)相対比は，σ，2σ のそれぞれを1とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(5) 炭化材同定

炭化材を自然乾燥させた後，木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡を用いて木材組織を観察し，その特徴から種類を同定する。

なお，同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については，島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また，日本産木材の組織配列については，林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果では，C14－1(ST28)が1,820±20 yrs BP，C14－2(ST25)が1,850±20 yrs BPを示す(表4－2)。

次に暦年較正値を示す。暦年較正とは，大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動，及び半減期の違い(現在14Cの半減期は5,730±40年とされるが，過去の年代測定結果との整合性を図るため，測定には5,568年を用いている)を較正することである。暦年較正に関しては，本来10年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1年単位で表した。暦年較正は，測定誤差 σ，2σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真

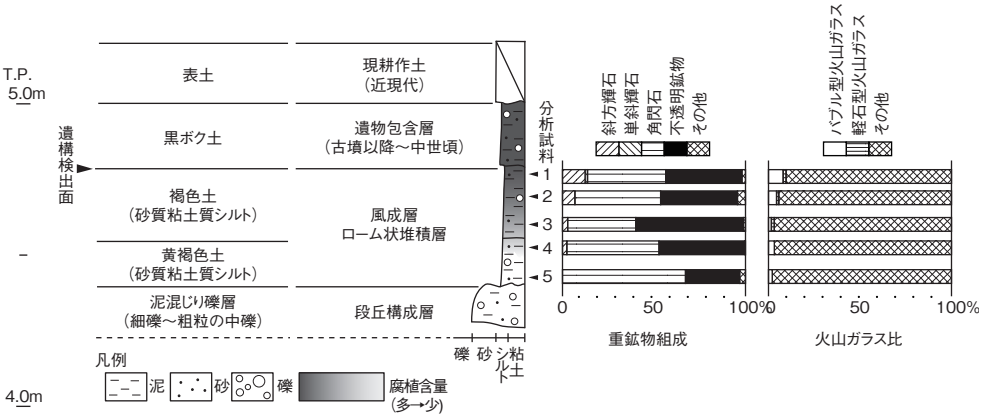


図4－1　ⅣB－1区重鉱物及び火山ガラス比分析結果

表4－4　重鉱物･火山ガラス比分析結果

調査区・位置	資料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	ザクロ石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
ⅣB－1区 深掘トレンチ	1	31	3	107	0	0	104	5	250	20	0	4	226	250
	2	17	0	117	0	2	105	9	250	11	0	3	236	250
	3	7	0	93	0	0	147	3	250	4	0	4	242	250
	4	6	0	126	1	0	117	0	250	8	0	1	241	250
	5	0	0	168	0	0	74	8	250	5	0	0	245	250

の値が68%の確率で存在する範囲，2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また，表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれ1とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

2σの暦年較正結果では，C14－1がcal AD 128－cal AD 249，C14－2がcal AD 121－cal AD 236となる(表4－3)。

(2) テフラ分析

重鉱物・火山ガラス比分析の結果を表4－4，図4－1に示す。重鉱物組成は，全試料ともに角閃石と不透明鉱物を主体とする組成を示すが，層位によって量比は異なり，試料番号5では角閃石の方が多く，試料番号1，2，4では両者ほぼ同量であり，試料番号3では不透明鉱物の方が多い。また，斜方

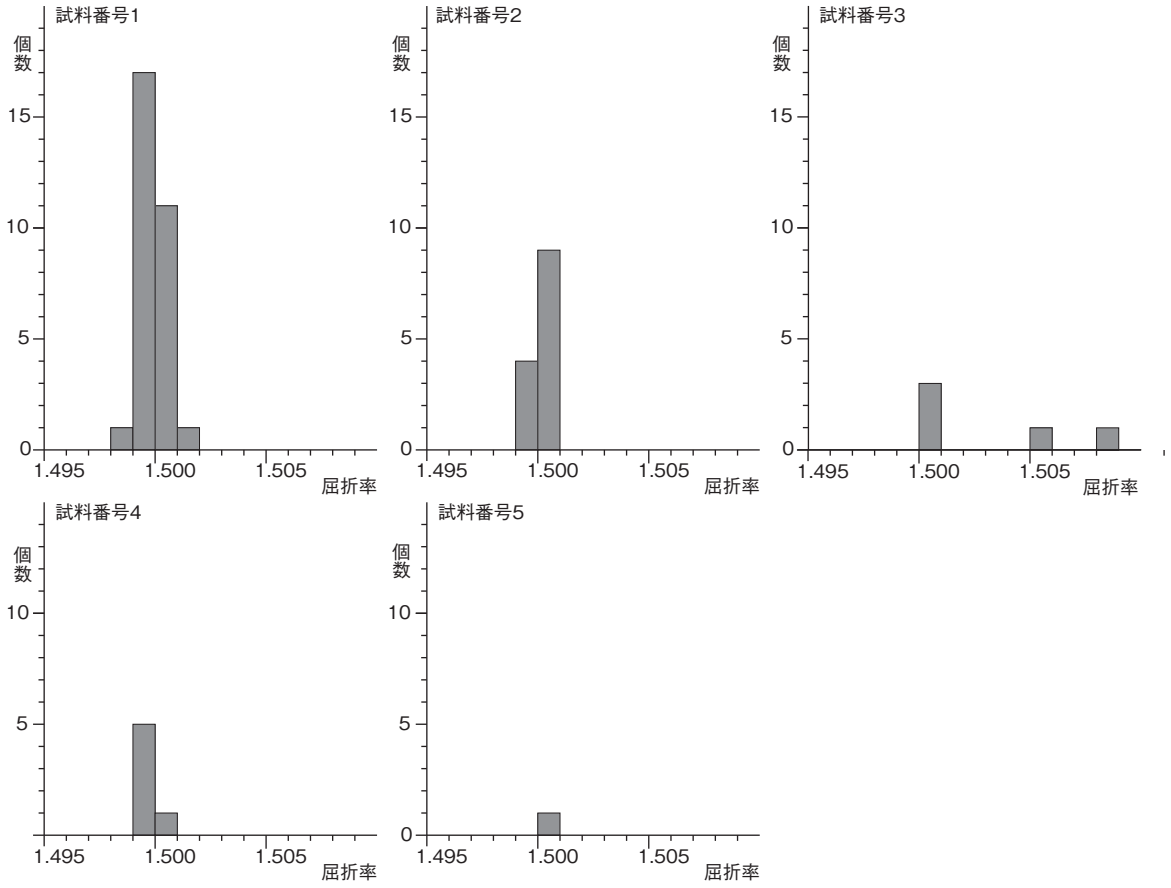


図4－2　ⅣB－1区火山ガラスの屈曲率

表4－5　火山ガラスの屈曲率

位置	試料番号	屈折率 形態	平均値	最小値	最大値	合計	対比されるテフラ
ⅣB－1区 深掘トレンチ	1	bw	1.499	1.498	1.501	30	AT
	2	bw	1.500	1.499	1.500	13	AT
	3	bw>pm	1.502	1.500	1.508	5	AT?
	4	bw	1.499	1.499	1.500	6	AT
	5	bw	1.500	1.500	1.500	1	AT

輝石が試料番号4には微量含まれ，上位の試料ほど多くなる傾向を示し，試料番号1では10%をやや超える程となる。

火山ガラス比では，全試料にバブル型火山ガラスが含まれるが，試料番号5では微量，それより上位に向かって増加する傾向が認められ，試料番号1では約10%程となる。また，試料番号1～4には微量の軽石型火山ガラスも伴われている。

火山ガラスの屈折率測定結果を表4－5，図4－2に示す。試料番号1と2では，測定に充分な火山ガラスの粒数が得られ，そのレンジが特定できた。試料番号1はn1.498－1.501であり，n1.499－1.500の狭い範囲に集中する。試料番号2はn1.499－1.500に集中するレンジである。試料番号3以下は，充分な火山ガラス量が得られなかったため，レンジを特定することはできないが，主体は上述した試料番号1や2と同様の火山ガラスであると考えられる。なお試料番号3には，n1.505以上の高い屈折率を示す火山ガラスも微量認められた。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表4－6，図4－3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

テフラ分析試料と同一試料の基本層序の植物珪酸体含量は，試料番号1を除いて概して少なく，試料番号5で約1,800個/g，試料番号2～4で約4,000～6,000個/gであり，試料番号1は約1.6万個/gとなる。

表4－6　植物珪酸体含量

分類群	ⅢA－6区		ⅣB－1区				
	SD1	SE1	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	100	－	400	－	－	－	－
クマザサ属	100	200	500	100	500	500	300
メダケ属	600	400	1,200	300	200	300	<100
タケ亜科	1,300	1,400	5,900	2,100	1,600	1,400	300
ヨシ属	－	－	<100	<100	－	－	－
イチゴツナギ亜科オオムギ族	<100	－	－	－	－	－	－
イチゴツナギ亜科	<100	－	400	－	<100	<100	<100
不明	800	1,200	2,600	600	500	300	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	400	－	600	－	－	－	－
メダケ属ネザサ節	－	－	900	200	300	100	<100
メダケ属	800	300	－	－	－	－	
クマザサ属	100	100	300	<100	500	500	300
タケ亜科	1,300	900	700	800	500	300	300
ヨシ属	<100	－	200	<100	－	－	－
ウシクサ族	<100	－	－	－	－	－	－
不明	1,500	1,100	2,300	1,300	600	700	400
合　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,000	3,200	11,200	3,200	2,800	2,600	900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,200	2,500	5,000	2,500	1,800	1,600	900
合　計	7,200	5,700	16,200	5,700	4,600	4,200	1,800
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	＊	－	－	－	－	－	－
イネ属短細胞列	＊	－	－	－	－	－	－

含量は，10の位で丸めている(100単位にする)。
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
<100：100個/g未満
－：未検出，＊：検出

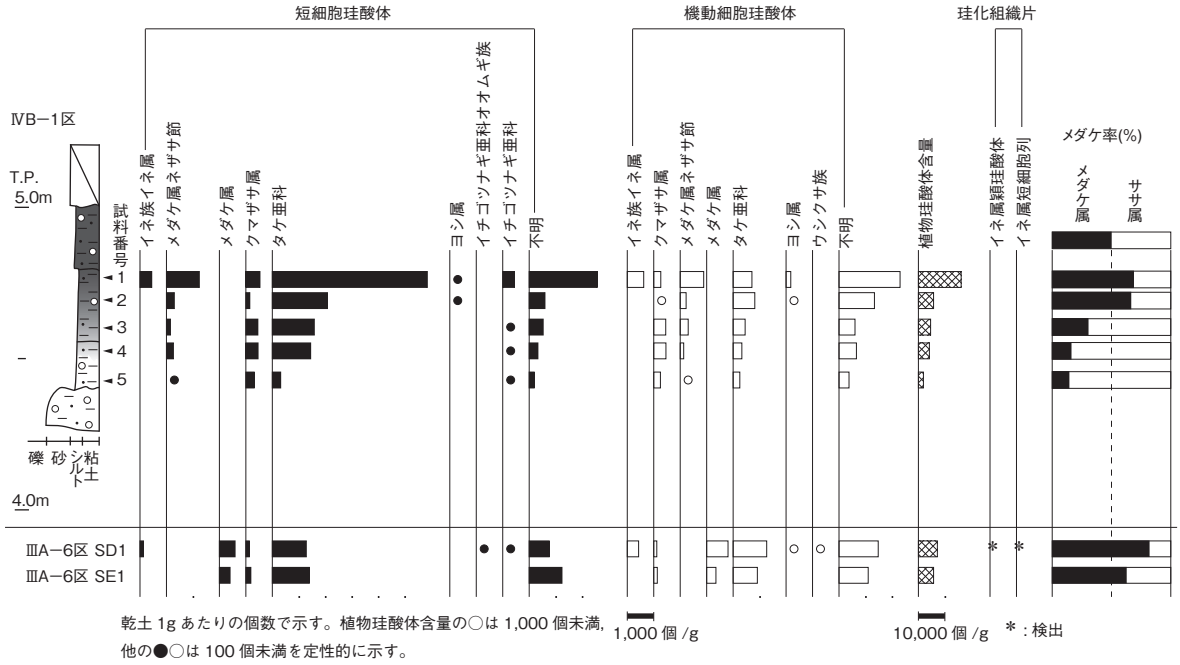


図4－3　植物珪酸体分析結果

タケ亜科の産出が目立ち，イチゴツナギ亜科やヨシ属がわずかに認められる。

タケ亜科には，保存状態が悪く含量密度も少ない中で，クマザサ属(ササ属)やメダケ属(ネザサ節)が見られる。日本でのタケ亜科植物の分布状況などから，クマザサ属は寒冷，メダケ属(ネザサ節)は温暖の指標とされ，その推定植物生産量の比率である「メダケ率」の変遷を見ることで，過去の気候を推定する試みが行われている(杉山,2001)。メダケ率の値が100%に近ければメダケ属が主体の温暖な気候，0%に近ければクマザサ属が主体の寒冷な気候とされる。今回の産状についても試みたところ，試料番号3～5ではメダケ率が約14～30%，試料番号1と2では70%近い値となる。なお，試料番号1では栽培植物であるイネ属も検出され，葉部の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が見られる。その含量は，短細胞珪酸体が約400個/g，機動細胞珪酸体が約600個/gである。

遺構埋土の植物珪酸体含量についても概して少なく，ⅢA－6区SD1が7,000個/g程度，ⅢA－6区SE1が約5,700個/g程度である。

これらの試料では，基本層序と同様にタケ亜科の産出が目立つ。この中にクマザサ属(ササ属)やメダケ属が見られる。ⅢA－6区SD1ではイチゴツナギ亜科あるいはヨシ属がわずかに認められる。また，ⅢA－6区SD1では栽培植物であるイネ属も産出し，葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。ただし，その含量は少なく，短細胞珪酸体が100個/g前後，機動細胞珪酸体が100～600個/g程度である。さらに，ⅢA－6区SD1では，籾(穎)に形成される穎珪酸体も検出される。この他，ⅢA－6区SD1では，オオムギ族の短細胞珪酸体もわずかに見られる。

(4) 微細物分析

結果を表4－7に示す。試料200gから回収された種実遺体が少なかったため，ⅢB－2区ST3(SK1)の1試料は100g，ⅣB－1区(ST46中央ピット・SK6)，ⅣA区(ST25中央ピット・ST28中央ピット・ST30中央ピット)の5試料は300gを追加分析した結果，草本11分類群(イネ，アワ，アワ近似種，ヒエ近似種，イネ科，タデ属，スベリヒユ科，アカザ科，マメ類，カタバミ属，オドリコソウ属)143個の種実遺体のほかに，炭化

材(計35.5g)，土器片(2個；最大5cm)が検出された。炭化材は，ⅣＢ－1区SK6が最も多く(31.0g；最大2.3cm)，ⅣＡ区ST25中央ピット(1.6g；最大1.2cm)，ⅢＢ－2区ST1P1(1.2g；最大1.0cm)と次ぐ。

種実遺体群には，炭化した栽培種のイネの穎(基部)が64個，胚乳が16個，アワの穎・胚乳が1個，アワ近似種の胚乳が3個と，栽培種の可能性があるヒエ近似種の胚乳が1個，マメ類の種子が1個の計86個が確認された。イネは全ての試料から出土し，穎(基部)がⅢＢ－1区ST2(SK1)から6個，ST2(P1)から11個，ST3(SK1)埋土から1個，ST5(P1)から10個，ST7(P1)埋土から14個，ⅣＡ区ST30(中央ピット)から15個，ⅣＢ－1区ST46(中央ピット)，SK6から各3個，ⅣＡ区ST28(中央ピット)から1

表4－7　種実分析結果

種類	部位	状態	調査区	ⅢＢ－2区						ⅣＢ－1区		ⅣＡ区			備考
			遺構	ST1	ST2	ST2	ST3	ST5	ST7	SK6	ST46	ST30	ST28	ST25	
			位置	P1	SK1	P1	SK1	P1	P1	－	中央ピット	中央ピット	中央ピット	中央ピット	
			層位	－	－	－	埋土	－	埋土	－	－	－	－	－	
			時代	弥終	弥終	弥終	古墳後期	弥終	弥終	－	－	－	－	－	
			試料番号	9	10	11	12	13	14	－	－	－	－	－	
炭化種実															
イネ	穎	破片(基部)		－	6	11	1	10	14	3	3	15	1	－	
	穎胚乳	完形		－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	長さ4.79，幅2.72厚さ2.30㎜
	胚乳	完形		1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	残存長4.15，残存幅2.5，厚さ2.22㎜
		破片		10	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	
イネ？	胚乳	破片		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	
アワ	穎胚乳	完形		－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	背面に穎付着
アワ近似種	胚乳	完形		－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－	
		破片		－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	
ヒエ近似種	胚乳	完形		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
イネ科	胚乳	完形		－	－	－	－	－	－	－	1	1	1	－	
		破片		－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	頂部欠損
タデ属	果実	完形		－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	
マメ類	種子	完形		－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	臍欠損
炭化していない，または判別が難しい種実															
スベリヒユ科	種子	完形		－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	
アカザ科	種子	完形		－	－	－	－	－	－	－	20	－	－	－	
		破片		－	－	－	－	－	－	－	26	1	－	－	
カタバミ属	種子	完形		－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	
オドリコソウ属	果実	完形		－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	
炭化材(径1㎜以上)				1.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.5	31.0	0.2	0.2	0.3	1.6	乾燥重量(g)
				10.2	3.6	8.6	4.0	3.7	17.0	23.1	7.0	6.1	5.9	12.2	最大径(㎜)
炭化材主体残渣(径1－0.5㎜)				0.8	0.1	0.4	0.1	－	0.3	1.5	0.3	0.0	0.1	0.2	乾燥重量(g)
土器片				－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	個数
				－	－	－	－	－	13.9	－	－	－	－	－	乾燥重量(g)
				－	－	－	－	－	50.6	－	－	－	－	－	最大径(㎜)
砂礫主体残渣				13.2	14.8	8.1	14.8	8.8	3.8	38.9	66.9	40.9	69.3	31.7	乾燥重量(g)
分析量				200.2	200.8	200.3	300.8	200.0	200.9	507.7	504.8	502.6	502.3	501.5	湿重(g)

注1)イネの計測値はデジタルノギスによる。

注2)弥終は，弥生時代終末期～古墳時代初頭を示す。

個，穎・胚乳がⅢＢ－２区ST2(P1)から１個，胚乳がⅢＢ－１区ST1(P1)から11個，ST2(P1)，ⅣＡ区ST28，ⅣＢ－１区SK6から各１個，胚乳と思われる破片がⅣＡ区ST25中央ピットから１個確認された。その他に，アワの穎･胚乳がⅢＢ－２区ST2(P1)から１個，アワ近似種の胚乳がⅢＢ－２区ST2(P1)，ST5(P1)，ⅣＡ区ST30(中央ピット)から各１個，ヒエ近似種の胚乳がⅢＢ－２区ST7(P1)埋土から１個，マメ類の種子がⅣＢ－１区ST46(中央ピット)から１個確認された。

栽培種を除いた分類群は，ⅢＢ－２区ST2(P1)，ⅣＢ－１区ST46(中央ピット)，ⅣＡ区ST30(中央ピット)，ⅣＡ区ST28(中央ピット)から炭化した草本のイネ科の胚乳が各１個(計3個)，ⅢＢ－２区ST2(P1)から炭化したタデ属の果実が１個確認された。その他に，ⅣＢ－１区SK6からは，炭化していない草本のスベリヒユ科の種子が３個，カタバミ属の種子，オドリコソウ属の果実が各１個と，炭化の判断が難しいアカザ科の種子がⅣＢ－１区ST46(中央ピット)から46個，ⅣＡ区ST30(中央ピット)から１個確認された。これらの種実遺体は，保存状態から後代の混入の可能性が高く，炭化種実と由来が異なると想定されるため，本報告では検出状況の表示に留め，解析からは除外する。

炭化種実各分類群の写真を図版に示し，形態的特徴等を以下に記す。

・イネ(Oryza sativa L.)　イネ科イネ属

胚乳，穎(果)は炭化しており黒色，やや偏平な長楕円体。胚乳は，長さ4.8㎜，幅2.7㎜，厚さ2.3㎜(ⅢＢ－2区ST2P1)と，残存長4.2㎜，残存幅2.5㎜，厚さ2.2㎜(ⅢＢ－2区ST1P1)，長さ4.7㎜，幅2.8㎜，厚さ1.5㎜(ⅣＡ区ST28中央ピット)。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。胚乳表面はやや平滑で，２～３本の縦隆条がある。ST2(P1)の胚乳側面には，穎の破片の付着がみられる。

胚乳を包む穎(果)は，完形ならば長さ６～7.5㎜，幅３～４㎜，厚さ２㎜程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し，その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は５脈，内穎は３脈をもち，ともに舟形を呈し，縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く脆く，表面には顆粒状突起が縦列する。破片は主に果実序柄が確認され，大きさは最大1.5㎜程度。

・アワ(Setaria italica (L.) P.Beauv.)　イネ科エノコログサ属

穎(果)，胚乳は炭化しており黒色，半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。ⅢＢ－２区ST2(P1)より出土した胚乳は，長さ1.6㎜，幅1.2㎜，厚さ1.0㎜で，背面基部正中線上に長さ0.9㎜，最大幅0.5㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で，腹面には穎(果)の破片が付着している。果皮は薄く，表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。なお，穎の付着がみられない胚乳をアワ近似種としている。ⅣＡ区ST30(中央ピット)より出土した胚乳は，長さ1.0㎜，幅0.8㎜，厚さ0.6㎜で，背面基部正中線上に径0.5㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。

・ヒエ近似種(Echinochloa cf. utilis Ohwi et Yabuno)

胚乳は炭化しており黒色，長さ1.5㎜，径1.1㎜程度のやや偏平な卵体。背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に，長さ1.1㎜，最大幅0.4㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。表面は粗面。実体顕微鏡下観察では，栽培種のヒエと周辺域に生育していた可能性があるイヌビエ等の野生種との厳密な区別は困難であるため，ヒエ近似種としている。

・イネ科(Gramineae)

胚乳は炭化しており黒色，長さ0.9～2.1㎜，径0.5～0.6㎜程度のやや偏平な狭卵～楕円体。背面は丸みがあり，腹面は平ら。基部正中線上に長さ0.3～0.7㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面はやや平滑～粗面。

・タデ属(Polygonum)　タデ科

果実は炭化しており黒色，長さ1.4㎜，径1.3㎜程度の三稜状広卵体で焼き膨れている。頂部は尖り，基部は切形で萼が残存する。果皮表面には微細な網目模様がある。

・マメ類(Leguminosae)　マメ科

種子は炭化しており黒色，長さ4.2㎜，幅3.0㎜，厚さ1.9㎜程度のやや偏平な楕円体。腹面の子葉合わせ目上にある細長い長楕円形の臍を欠損する。種皮表面はやや平滑だが，焼き崩れた部分がある。

(5) 炭化材同定

SK6 埋土では，微細物分析の水洗別により比較的大きな炭化材片が得られた。この炭化材片について同定を行ったところ，全て常緑広葉樹のツバキ属に同定された。同一個体である可能性が高い。

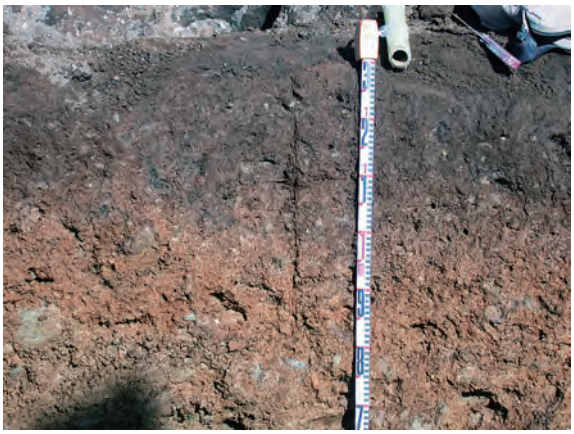


写真4－1　ⅡA－1区テフラ分析試料採取断面

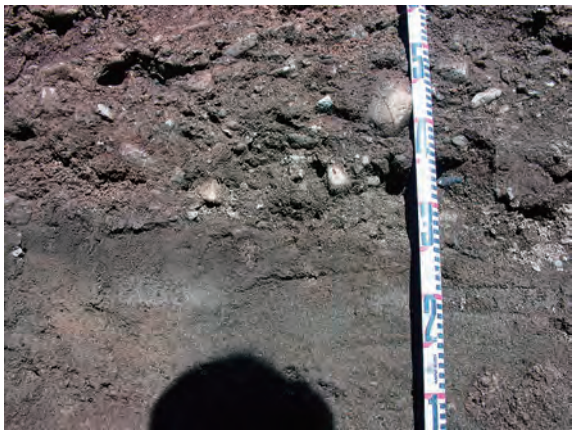


写真4－2　ⅡA－1区テフラ分析層準基盤の砂礫層

写真4－3　ⅣB－1区テフラ分析試料採取断面

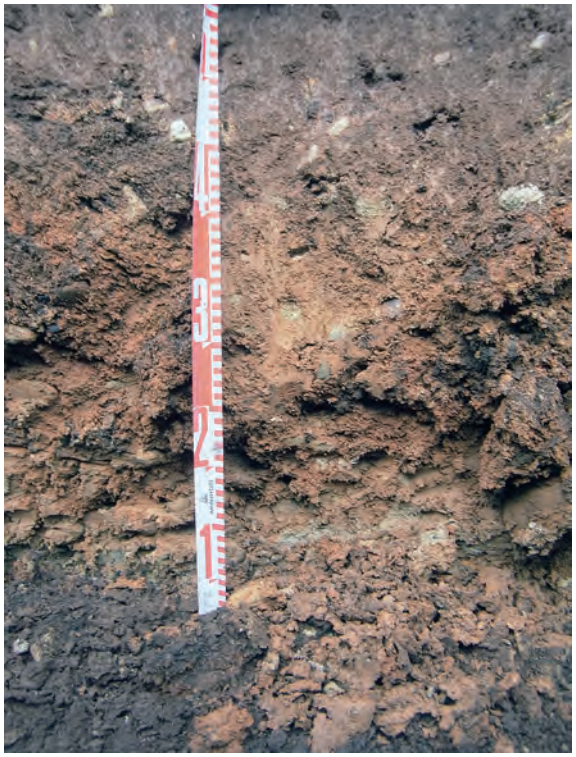


写真4－4　ⅣB－1区テフラ分析試料黄褐色土

写真４－５　ⅡC区調査基底面検出状況

写真４－６　ⅣB－2区北壁断面

ツバキ属は，暖温帯常緑広葉樹林を構成し，木材は重硬・緻密で強度が高い材質を有することから，強度を必要とするような用途に利用されることもある。生態性から，調査区周辺の林分に由来するものと考えられる。解剖学的特徴等を記す。

・ツバキ属（Camellia）　ツバキ科

散孔材で，管壁は薄く，横断面では多角形～角張った楕円形，単独および2－3個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し，壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性，1－3細胞幅，1－20細胞高。

5. 考察

(1) テフラ分析結果

重鉱物分析では，上位に向かって増加する斜方輝石が捉えられる。この傾向は，火山ガラス比におけるバブル型火山ガラスの量比の層位変化と相関している。このことから，斜方輝石と火山ガラスは，同一のテフラに由来すると考えられる。火山ガラスについては，その形態と試料番号１と２で認められた特徴のある屈折率から，噴出年代の暦年代が約 2.8 万年前（青木ほか,2008）の姶良 Tn 火山灰（AT:町田･新井,1976）に由来すると解釈される。ATの主要な斑晶鉱物は斜方輝石とされていることから，今回の重鉱物組成における斜方輝石の産状は，ATの産状と調和的と捉えられる。以上の斜方輝石および火山ガラスの産状からは，試料番号1付近に降灰層準があると判断される。試料番号1・2では，K－Ahの火山ガラスは全く認められなかったことから，この層位は，K－Ah降灰以前にすでに形成されていたことが確認される。

なお，テフラ分析については，台地の中央部に相対的に近いⅡA－1区でも実施している。この両地点では，ローム状堆積層の層厚に差違が認められる。その層厚は，今回のⅣB－1区で40～50㎝，ⅡA－1区で50～70㎝である（図4－4）。ⅡA－1区のローム状堆積層は，下位から黄褐色土，褐色土，暗褐色土，褐色土の順に積層する。これに対し，ⅣB－1区では，黄褐色土，褐色土のみしか認められない（写真4－1～4）。また，台地東端部では，ⅣC区での深堀断面調査から，ローム状堆積物が存在せず，砂礫層のみが累重することが確認される（図4－4･写真4－5）。これらのことから，野市台地では，台地東縁に向かってローム状堆積物の層厚が相対的に減少傾向にあることが確認される。

台地中央部に近いⅡA－1区では，今回の分析地点であるⅣB－1区で認めることのできなかっ

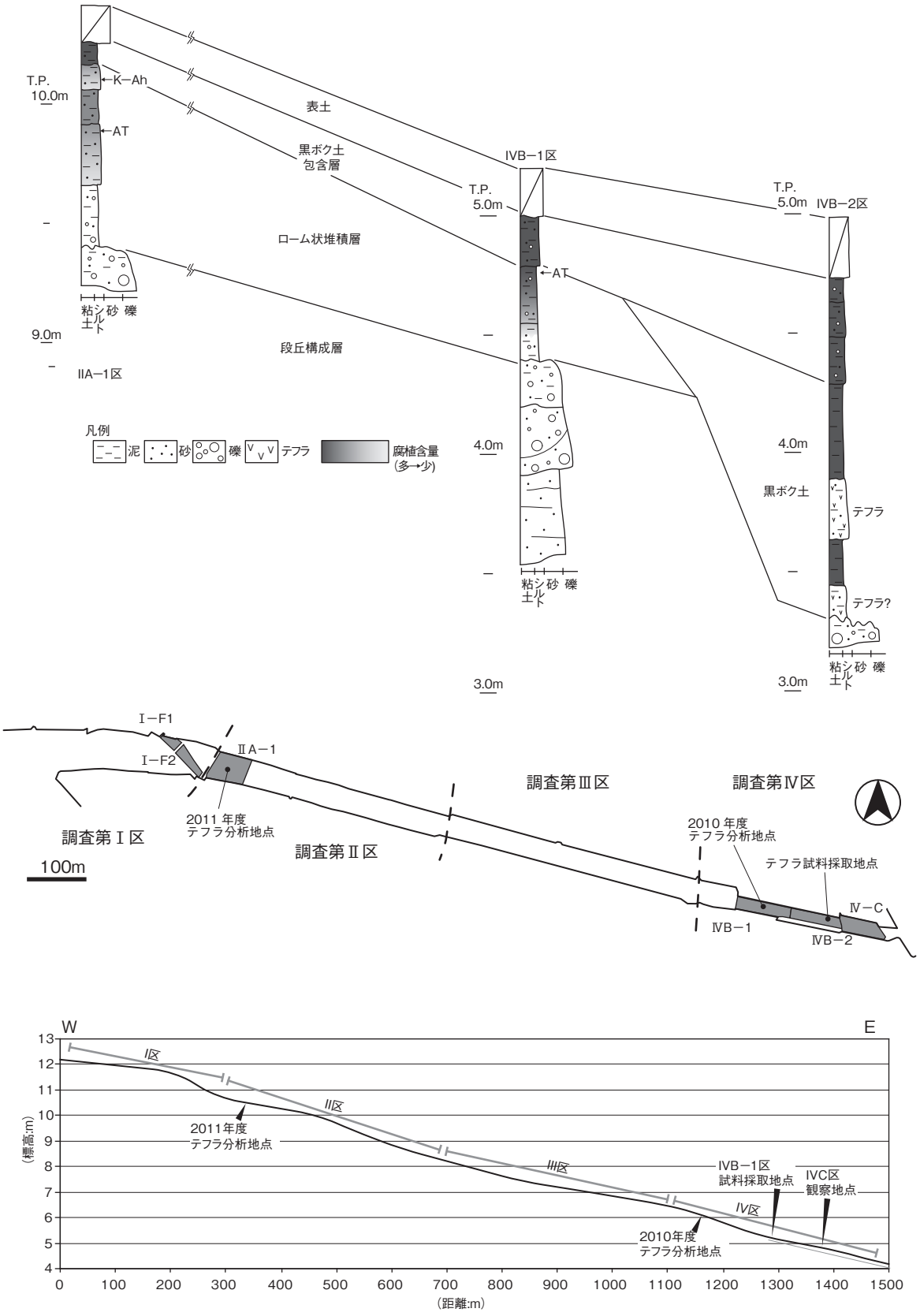


図4－4　東野土居遺跡テフラ分析地点層所対比図

たK－Ahの降灰層準が，黒ボク土の下位に確認される（図4－4）。ⅣB－1区では，黒ボク土直下のローム状堆積物最上部がAT降灰層準となる。上記したように，台地東縁部に向かってローム状堆積層の層厚が小さくなることから，ⅣB－1区では，AT降灰層準より上位が侵食されたものと判断される。ⅡA－1区とⅣB－1区の両地点のテフラ分析により，野市台地では，東縁部が侵食傾向にあることがうかがえる。

ところで，ⅣC区の西側に隣接するⅣB－2区では，基盤の砂礫層が侵食された凹地内に，層厚150㎝前後の黒ボク土が厚く累重する（図4－4，写真4－6）。ここでは，砂礫層の40㎝上位に黒ボク土に挟在してテフラの挟在が確認される。このⅣB－2区では，弥生時代終末期～古墳時代の遺物を多量に包含する黒ボク土の遺物包含層の層厚も20～40㎝と，周辺の調査区に比べ非常に厚い。地形分類図によれば，ⅣB－2区は，南側を通る浅谷の支谷もしくは台地東縁に形成された東西方向の谷状の侵食部分に位置することが読みとれる（図4－5）。このことから，ⅣB－2区で観察される黒ボク土は，土壌クリープなどによる谷内への再堆積により形成された可能性が指摘される。また，挟在するテフラについては，K－Ahである可能性が極めて高いと判断される。この点については，今後テフラの同定において確認することが必要である。

⑵ 古植生

① 植物珪酸体分析

ⅣB－1区のテフラ分析と同一層準を分析した植物珪酸体分析結果では，タケ亜科の産出が優占する。分析層準が離水した台地上のローム状堆積物であることから，乾燥地を生育適地とするタケ亜科の優占は，立地環境とも調和的である。AT降灰層準の試料番号1より下位の試料番号3～5で

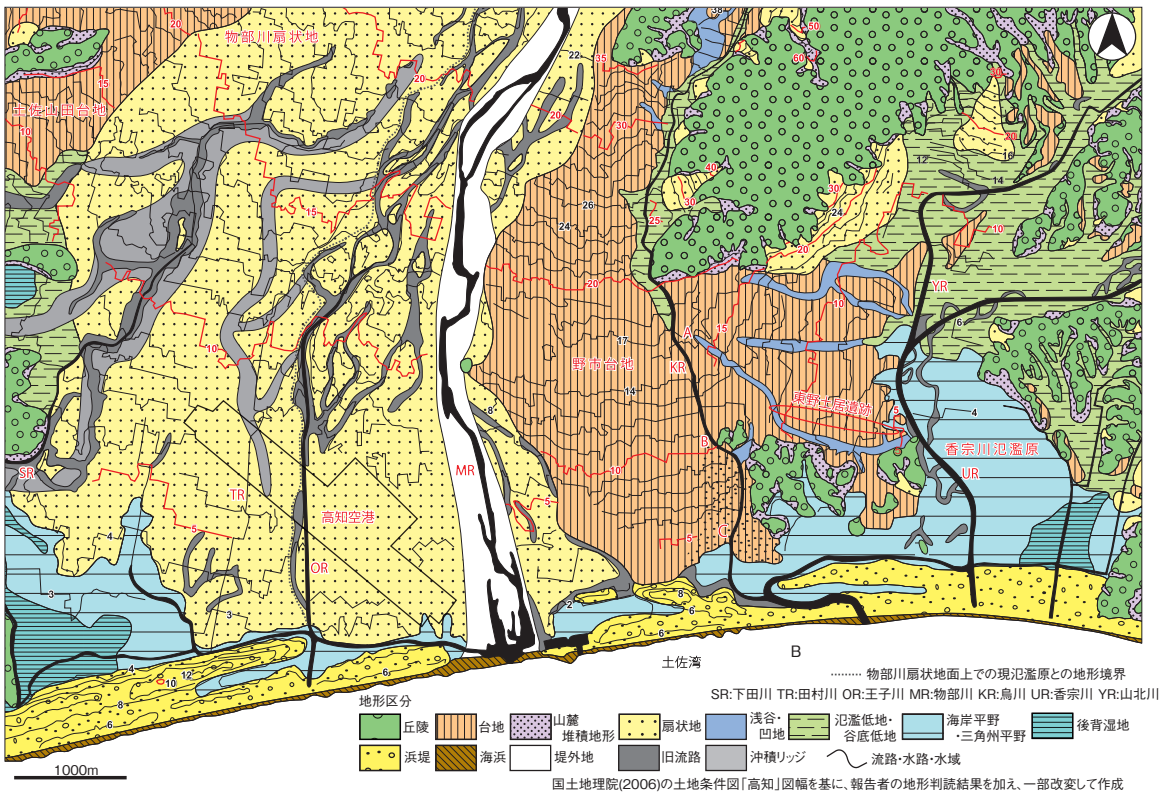


図4－5　遺跡周辺の地形分類図

はササ率が高く，最終氷期末期におけるこれまでの分析結果と調和的な傾向を示す。メダケ率は，試料番号2より上位で急増する。メダケ率は，関東地方および九州南部では約1万年前を境に急激に上昇しており，その要因として急激な温暖化が指摘されている（杉山,2001）。本遺跡では，テフラ分析結果にもとづくとAT降灰層準が試料番号1付近とされ，テフラ層序と植物珪酸体による生層序が矛盾する。ただし，遺構検出面の直下に相当する試料番号1では，弥生時代以降とみなされる栽培種のイネ属の産出が認められる。分析地点では，弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡から炭化したイネが検出されており，弥生時代から古墳時代にイネが持ち込まれていたことが確認される。また，湿潤な場所に生育するヨシ属は，イネ属と同様に試料番号1と下位の試料番号2のみでわずかに見られる。

これらの産出状況をふまえると，試料番号1，2の植物珪酸体群集は，植物などの土壌化にともなう生物擾乱の影響を強く受けていると判断される。これは，植物珪酸体が土壌内での物質移動の影響を強く受ける細粒なシルトサイズで構成されるためと推測される。これに対し，テフラ分析は，砂サイズを抽出しており，相対的に土壌撹乱の影響が小さかったと解釈される。ただし，テフラ分析結果における土壌撹乱の影響については，近接する地点において追加分析を試み，検証していくことが必要である。

いっぽう，中世の堀下部の埋土であるⅢA－6区のSD1下層では，湿った場所を好むヨシ属がわずかに認められる。この分析結果から，周囲の地表より低い堀内では，滞水や水はけが悪く，湿潤な土壌環境の部分も存在していたことが推測される。ここでは，栽培種であるイネ属もわずかに産出する。ⅢA－6区のSD1下層は，中世の堀埋土であることから，堀内へ人為ないし自然営力で再堆積したイネ植物体に由来する可能性が高い。本遺構では，オオムギ族が産出する。栽培種かどうか珪酸体では判別できないものの，産状や時期をふまえると，このオオムギ族は，栽培種のオオムギに由来する可能性が指摘される。

② 微細物分析・炭化材同定

竪穴住居跡の中央ピットないしピットの埋土から，栽培種では，イネ，アワ，アワ近似種，ヒエ近似種が確認された。栽培種以外では，イネ科，タデ属，マメ類の炭化種実が存在する。マメ類については，保存状態が悪く，さらに1個体のみの産出にとどまり，栽培種かどうかの判断が不可能である。イネ科，タデ属については，明るく開けた場所に生育する，いわゆる人里植物に属する分類群である。これらは，調査区周辺の明るく開けた草地環境に由来すると考えられる。

分析試料は，イネがわずかに産出した古墳時代後期のST3を除き，すべて弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に帰属する。弥生時代終末期～古墳時代初頭の分析試料のうち，ST25とST28では，埋土中の炭化材から年代値が得られており，ST28がcal AD 128 － cal AD 249，ST25がcal AD 121 － cal AD 236と非常に近接した年代値を示す。この年代値は，西本編（2006）の土器付着炭化物の放射性炭素年代値の集成にもとづくと，出土土器の年代値と矛盾しない。

年代試料となった炭化材については，スダジイとツバキ属に同定された。ST25では，微細物分析で検出された炭化材片でもツバキ属が確認される。周辺の遺跡では，伏原遺跡で弥生時代終末期の竪穴住居跡の構築部材と考えられる炭化材で，ツブラジイ，クスノキ科が同定されている（高橋,2010）。

産出した栽培種は，すべて火を受けた炭化種実である。分析試料の採取場所をふまえると，これらは，居住域で利用された植物質食糧に由来しており，何らかの理由で燃焼を受けたものと考えられ

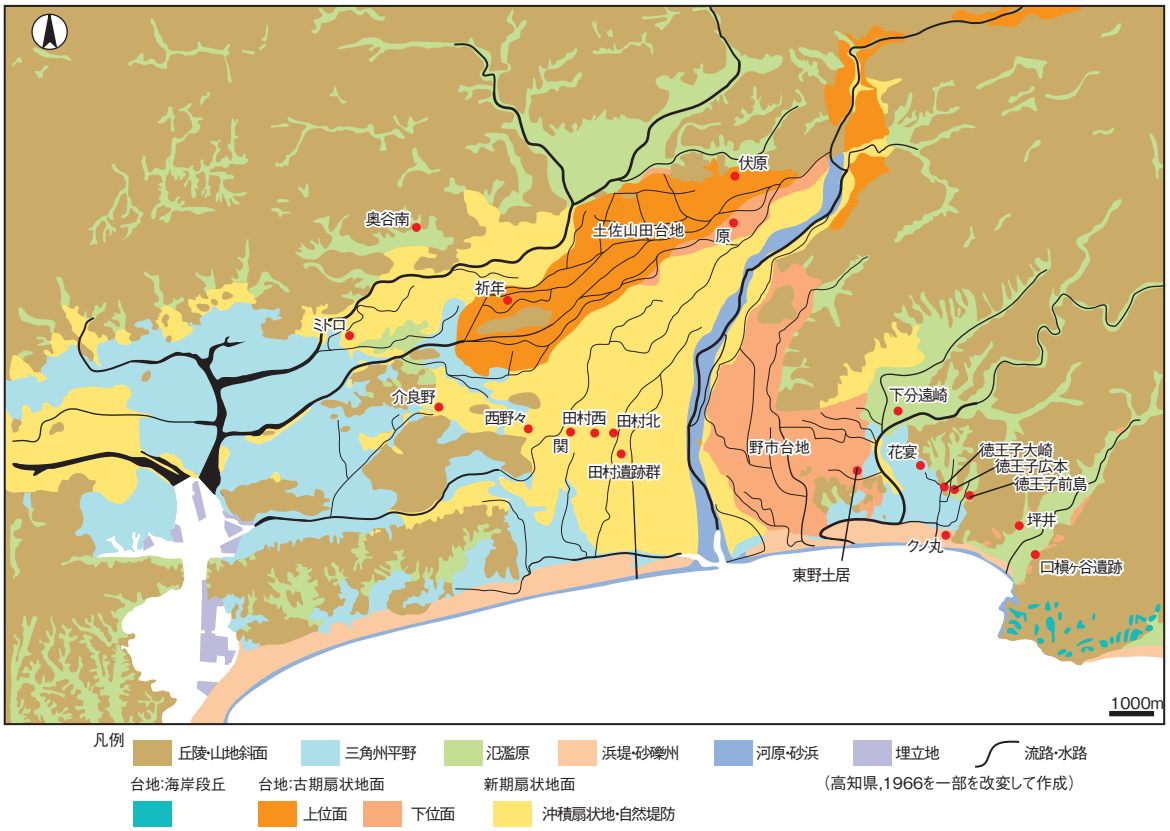


図4－6　遺跡の位置図と自然科学分析を実施した周辺遺跡

る。分析点数の多い弥生時代終末期～古墳時代初頭については，イネが多産する。これまでに本遺跡周辺（図4－6）では，竪穴住居跡の遺構埋土の水洗別分析が実施されており，物部川扇状地末端近傍の氾濫原上の介良野遺跡（高知市）の弥生時代終末期～古墳時代初頭でイネ，アワ－ヒエ，マメ類が（辻ほか,2007），土佐山田台地上の伏原遺跡（香美市）の弥生時代終末期～古墳時代初頭で，イネ，アワ－ヒエが（松元ほか,2010），物部川沖積扇状地上の西野々遺跡（南国市）の弥生時代中期で，イネとコムギが確認されている（辻ほか,2011）。弥生時代終末期～古墳時代初頭の分析結果については，今回の分析結果と同様にイネが最も多産する。

上記の分析結果から，弥生時代終末期～古墳時代初頭には，東野土居遺跡やその周辺の遺跡でイネが栽培され，食料として相対的に多く利用されていた傾向がうかがえる。野市台地上に立地する東野土居遺跡では，弥生時代から古墳時代に用水を得ることが，地形的および技術的に極めて困難であると考えられる。このことから，弥生時代から古墳時代に台地上では，水田が存在しなかったと想定される。したがって，本遺跡周辺における水田可耕地としては，周辺地形をふまえると，東方に広がる香宗川氾濫原が有力とみなされる。このため，野市台地東縁部に位置する本遺跡の立地については，水田生産域が想定される香宗川氾濫原との近接性も視野に入れて検討することが必要と思われる。

なお本遺跡では，人間活動が活発に展開した弥生から古墳時代に関する古植生のデータがほとんど得られてない。台地上に立地するために，調査区では，保存状態の良い，花粉や種実遺体を得ることが不可能である。このため，遺跡周辺の古植生復元については，周辺から採取されることが多い燃

料材と推測される炉跡などから検出される炭化材の樹種同定を行うことが必要と判断される。周辺の遺跡では，伏原遺跡では，燃料材の可能性のある炭化材同定から，弥生時代終末期～古墳時代初頭に，調査区近傍でマツ属，コナラ亜属クヌギ節，クリ近似種などが生育する二次林が存在していた可能性が推定されている（松元ほか,2010）。これらの樹種構成は，近接する時期の住居構築材と思われる樹種であるツブラジイ，クスノキ科（高橋,2010）の遺跡周辺の自然植生である暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素と異なる可能性がうかがえる点が興味深い。

引用文献

青木かおり・入野智久・大場忠道,2008,鹿島沖海底コアMD01 － 2421の後期更新世テフラ層序.第四紀研究,47 － 6,391 － 407.

早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－ ATにまつわる議論に関係して－.考古学研究,34,18 － 32.

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

平井幸弘,2004,外帯河川のつくる沖積低地.日本の地形 6 近畿・中国・四国,東京大学出版会,318 － 325.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123 － 133.

福沢仁之,1995,天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物.第四紀研究,34,135 － 149.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81 － 181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66 － 176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83 － 201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30 － 166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47 － 216.

国土地理院,2006,1:25000 土地条件図 高知.国土地理院地理調査部防災地理課.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

高知県,1966,土地分類基本調査 高知　5万分の1　国土調査,経済企画庁.

町田　洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339 － 347.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143 － 163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

松元美由紀・高橋　敦・辻　康男,2010,伏原遺跡Ⅱ自然科学分析.伏原遺跡Ⅱ高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター,271 － 280.

宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,姶良Ｔｎ火山灰のＣ－14年代のクロスチェック（演旨）.地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD － ROM）,2001,Qm － 010.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

西本　弘編,2006,新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代.雄山閣,143p.

日本の地質「四国地方」編集委員会,1991,日本の地質8　四国地方.共立出版,266p.

島地　謙・伊東　隆夫編,1988,日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.

杉山真二,2001,テフラと植物珪酸体分析.月刊地球,23,海洋出版株式会社,645 － 650.

杉山真二,2002,鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生に与えた影響－植物珪酸体分析による検討－.第四紀研究,41,311 － 316.

辻　康男・田中義文・馬場健司・松元美由紀・高橋　敦,2007,介良野遺跡の自然科学分析.介良野遺跡，高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター,163 － 194.

辻　康男・矢作健二・辻本裕也・松元美由紀・高橋　敦・斉藤紀行,2011,自然科学分析.西野々遺跡Ⅲ－本文編－,高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター,357 － 391.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第Ⅴ章　東野土居遺跡出土土器の胎土分析
－周辺遺跡出土のヒビノキ式土器との胎土比較－

岡山理科大学
白石　純

1. はじめに

この胎土分析では，東野土居遺跡より出土している「ヒビノキ式土器」の自然科学的な胎土分析を実施し，以前分析したミトロ，介良野，伏原，祈年，田村西の各遺跡出土のヒビノキ式土器の胎土と比較することで，東野土居遺跡出土のヒビノキ式土器の生産地を推定する。また今回，新しく田村遺跡Ⅲ，ひびのきサウジ遺跡，具同中山遺跡から出土した土器も比較の対象として分析した。そして，各遺跡におけるヒビノキ式土器の胎土の特徴などを検討し，今後のヒビノキ式土器の生産地と流通に向けての基礎データの蓄積を行うことを目的としている。

なお，これまでの各遺跡出土の「ヒビノキ式土器」の胎土比較では，ヒビノキ式土器は各遺跡内で個々に生産されていることが推定されている(1)。

2. 分析方法と試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で行い，胎土の成分(元素)量を測定し，その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した成分(元素)はSiO_2，TiO_2，Al_2O_3，Fe_2O_3，MnO，MgO，CaO，Na_2O，K_2O，P_2O_5の10成分である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A(日立ハイテクサイエンス)を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径2.5mm，電流50～200mA，電圧50kV/15kV，測定時間300秒，測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：10成分の定量値は地質調査所の標準試料ＪＡ－1(安山岩)，ＪＧ－1a(花崗岩)，ＪＲ－1(流紋岩)，ＪＢ－1a(玄武岩)，ＪＦ－1(長石)の５個の試料を用いて検量線を作成し，定量値を算出した。

測定試料：分析試料は，土器表面の汚れを除去後(研磨機)，乾燥した試料を乳鉢(タングステンカーバイト製)で粉末(100～200ﾒｯｼｭ)にしたものを加圧成形機で約 15tの圧力をかけ，コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって，一部破壊分析である。

分析結果の比較(差異)は，有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり，散布図を描き，各遺跡の差異やまとまりについて検討した。

東野土居遺跡出土ヒビノキ式土器の分析試料は，図５－１～４表に示した100点である。また，比較したヒビノキ式土器の遺跡は高知県介良野遺跡，ミトロ遺跡，祈年遺跡，伏原遺跡，ひびのきサウジ遺跡，田村西遺跡，田村遺跡Ⅲ，具同中山遺跡Ⅳの８ヵ所である。

3. 分析結果

この分析では測定した10成分のうち，分析試料に顕著な差がみられたのは，Fe_2O_3，CaO，K_2Oの3成分であった。この3成分を用いて散布図を作成し，胎土の違いを検討した。

図5－1のK_2O－CaO，図5－2のK_2O－Fe_2O_3散布図では，東野土居遺跡と高知県中央部(高知市，南国市，香美市，香南市)の各遺跡から出土したヒビノキ式土器の比較を行った。

その結果，東野土居は，田村西や介良野と分布域が半分ほど重なる。つまり東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野の各遺跡は，CaO量の違いで分布域(平均値)が少しずつ異なっている。また，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロと東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野の各遺跡は，K_2O量の違いで分類が可能である。それは，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロはK_2O量が約2%より低いところに分布し，東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野はそれより多いところに分布する傾向がみられた。

そして，図5－2のK_2O－Fe_2O_3散布図でも東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野はFe_2O_3量が約8％より低く，K_2O量が約1.6%より多いところに分布し，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロの各遺跡とは異なっていた。

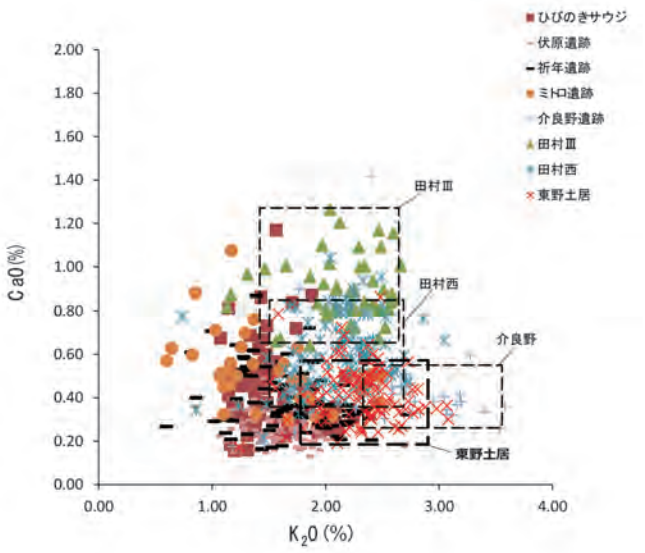


図5－1　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較1

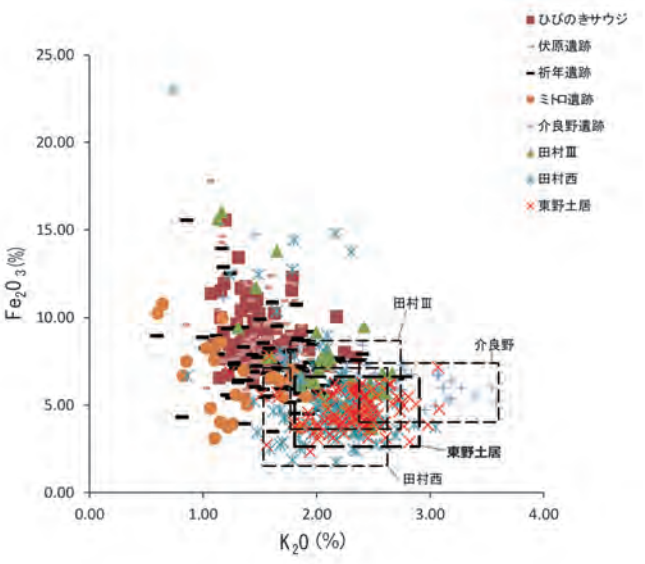


図5－2　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較2

図5－3のK_2O－CaO，図5－4のK_2O－Fe_2O_3散布図では，高知県西部の四万十市具同中山遺跡Ⅳと高知県中央部(高知市，南国市，香美市，香南市)の各遺跡から出土したヒビノキ式土器の比較を行った。

その結果，図5－3のK_2O－CaO散布図では，東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野の分布領域に具同中山が分布している。また図5－4のK_2O－Fe_2O_3散布図で具同中山は，東野土居，田村西，田村Ⅲ，介良野の各遺跡とも分布域が異なっていた。つまり，Fe_2O_3量が他より多く，分布の集中域(平均値)はほぼ一つのグループをつくり，他の遺跡と識別が可能であった。

4. 考察

蛍光X線分析により東野土居遺跡出土土器の胎土分析を行った結果，以下のことが推定された。

高知県中央部のひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロ，田村西，田村Ⅲ，介良野の7遺跡出土のヒビノキ式土器との比較では，東野土居の分布集中域(平均値)はほぼ一つのグループをつくり，他の遺跡と識別が可能であった。また，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロの各遺跡に比べ，田村西，田村Ⅲ，介良野と同じようにK_2O量が多く含まれ，Fe_2O_3量が少ないことがわかった。

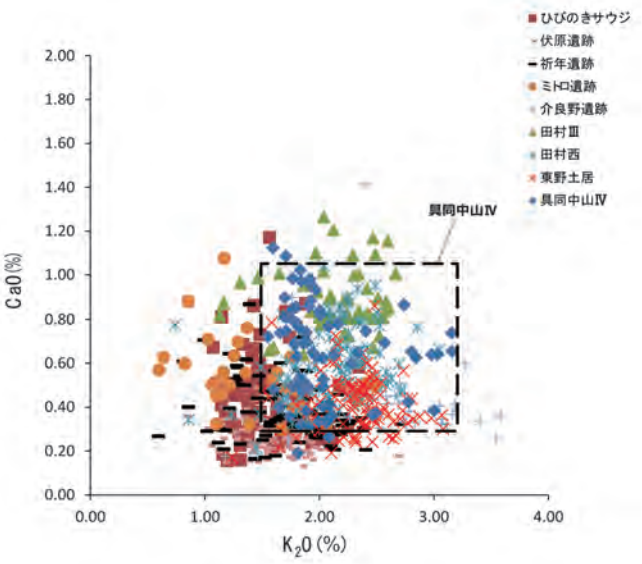


図5－3　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較3

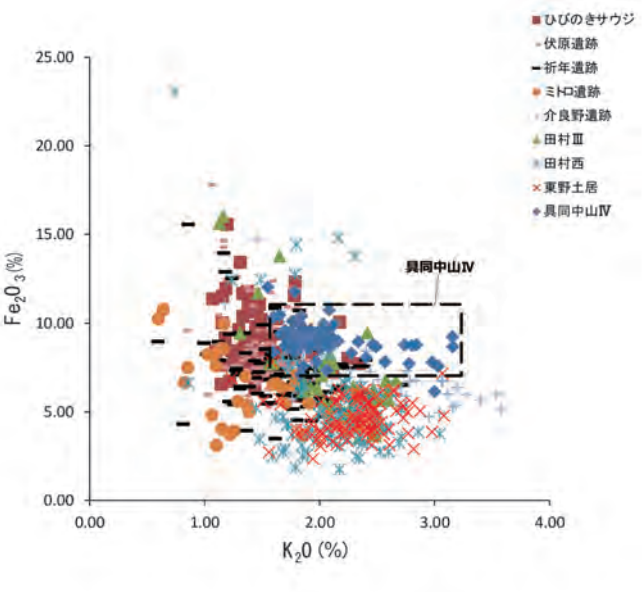


図5－4　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較4

以上のように，東野土居遺跡出土の「ヒビノキ式土器」も遺跡内で生産されていることが推定された。また高知県中央部の各遺跡の比較では，各遺跡とも分布集中域(平均値)はほぼ一つにまとまり，それぞれの分布域が少しずつ異なることから，「ヒビノキ式土器」は遺跡ごとに生産されていることが推定された。そして，K_2O(カリウム)，Fe_2O_3(鉄)の違いから，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロと田村西，田村Ⅲ，介良野，東野土居の２つに大きくわかれる傾向がみられた。この違いがみられた理由としては，各遺跡の立地状況をみると，ひびのきサウジ，伏原，祈年，ミトロは，高知県中央部の北側に，田村西，田村Ⅲ，介良野，東野土居は南側に位置していることがわかる。この遺跡の立地の違いが胎土にも現れた可能性が考えられる。

また，高知県西部の四万十市具同中山遺跡出土の「ヒビノキ式土器」は，遠距離にもかかわらず中央部のものとは胎土的に明確な差はみられないものの分布域が異なることから，遺跡内で生産されたと推定される。このように，今回の分析でも「ヒビノキ式土器」は各遺跡内で生産されていることが推定された。

この分析の機会を与えていただいた久家隆芳氏をはじめ，高知県埋蔵文化財センターの職員の方々には，いろいろとお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

註

⑴　白石　純　2010「伏原遺跡Ⅱ出土土器の胎土分析－ヒビノキ式土器の胎土分析－」『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第109集

第Ⅵ章　考察

1. 弥生時代

東野土居遺跡では弥生時代前期末から中期初頭と後期後葉から古墳時代前期の遺構と遺物が確認されている。遺構は前期末から中期初頭の土坑や後期後葉から古墳時代前期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡，土坑などがⅢＢ－１・２区とⅣ区で検出されており，当該期の集落が存在していたと考えられる。遺物も当該期のものが出土しており，本遺跡から出土した遺物のなかでは最も多い。その他，後期後葉から古墳時代前期の搬入土器なども多量に出土しており，特に山陰からの搬入土器が確認されたことは，本遺跡の特徴としてあげられる。

ここでは，遺構に関しては集落，遺物に関しては弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器と壺棺墓について取り上げ，考察を試みた。

⑴ 弥生時代後期後葉から古墳時代前期の集落

① 居住域の範囲

東野土居遺跡は野市台地の南東部に位置する。調査範囲は東西方向に長いため，弥生時代の居住域の東西方向の範囲については確定することができた。一方，北あるいは南へは調査区外にも竪穴建物跡が存在すると考えられ，南北方向への広がりについては確定できないが，微地形や香南市の調査成果[1]を参考に弥生時代における居住域は最大で東西約 370m，南北約 330m の範囲になると推定した(図6－1)。後述のように水田域として利用されていた香宗川の氾濫原に近い東部に居住域を展開させていることから，推定範囲よりも野市台地の東端に沿って南北方向に長い居住域を形成していた可能性がある。また，居住域の内と外を区画する溝等の遺構は確認されていない。

② 集落構造の検討

東野土居遺跡では弥生時代前期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡を86軒検出した。中央部(ⅣB区)では竪穴建物跡が重複し，密度も高い。少し遺構密度の低い場所を挟んで西部(Ⅲ区)の居住域となる。西部(Ⅲ区)は居住域の西端部に該当するため遺構密度は低い。一方，東部(ⅣC区)は遺構検出面と遺構埋土がよく似ていることから遺構の検出が困難であり，竪穴建物跡が存在していた可能性もあるものの，ST108 以東は標高からみて竪穴建物跡があった可能性は低い。竪穴建物跡の検出数と密

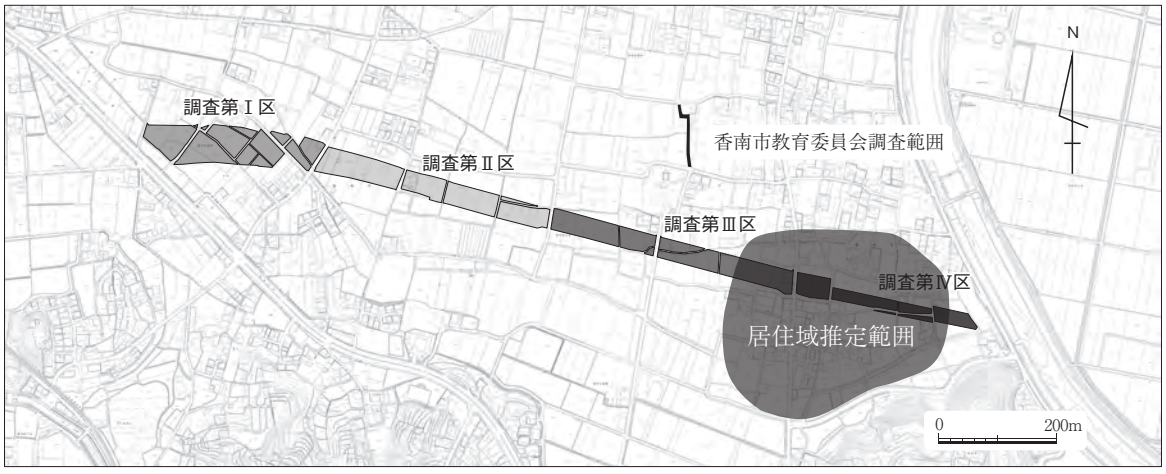


図6－1　弥生時代の最大居住域

度からⅣB区が居住域として最適地であったと考えられる。また，ⅣB－2区ではヒビノキⅠ式期の土器棺墓群が検出されている。詳細は，「(3) 土器棺墓」で述べられている。この項では，弥生時代後期後葉から古墳時代前期までを対象として時期別の居住域の構造とその変遷について述べてみたい。「(2) 弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器」で東野土居遺跡出土土器について弥生時代後期後葉から古墳時代前期までを4期8小期の編年案が提示されている。この編年案を基に個々の竪穴建物跡を4期編年に当てはめ，時期毎の竪穴建物跡の分布を示し，その変遷を図示した[2]。

ⅰ ヒビノキⅠ式段階

ヒビノキⅠ式段階はⅣB－2区を中心に居住域が形成される。この時期に属する竪穴建物跡は9軒である。東に1軒，西に1軒，やや離れて存在しているが東西方向に概ね100mの範囲に分布する。調査区外にも居住域が広がっているため，厳密ではないものの東野土居遺跡に移住してきた初期の様相を示している。円形基調の竪穴建物跡が3軒，隅丸方形のものが5軒，平面形が不明のもの1軒であり，隅丸方形の割合が多い。ヒビノキⅠ式段階は円形が主体であることが多く，東野土居遺跡ではすでに隅丸方形が過半数を占めていることには注意しておきたい。円形基調の竪穴建物跡は正円ではなく，やや歪な不整円形を呈し，床面積が判明しているものは標準(ST108)と小型(ST69)であるが両者の差はほとんどない。隅丸方形のもので床面積が判明しているものは3軒であり，標準(ST46･84)と小型(ST79)に分かれる。主軸方位は真北(0°)前後のもの(ST69･84･100･108)，西に振れるもの(ST46)，西へ大きく振れるもの(ST68)と東へ大きく振れるもの(ST79･93)がある。軒数は少ないものの統一性に欠ける。中央ピットが検出されているものは少ないが，検出されたものはA類(ST68･108)とC3類(ST46･69･79)に分類できる[3]。

ⅱ ヒビノキⅡ式段階

ヒビノキⅡ式段階には居住域が最大規模となる。東西方向に約300mの範囲に広がる。遺構の希薄な地域を挟む。この地域は南北方向に道路が走っており，発掘調査を実施していないことに関連する。この区域にも本来は竪穴建物跡が存在していたと考えられるが，調査範囲の分布をみるとやや希薄な部分となっていた可能性がある。竪穴建物跡は21軒となり，前段階の居住域が西方に拡大し，新たに2つの核が形成される。また，西部(Ⅲ区)に新たな居住域が出現し，合計で3つのグループを形成する。この時期になると大型の竪穴建物跡が出現し，床面積では3区分できる。大型のものは円

表6－1　ヒビノキⅠ式段階の竪穴建物跡一覧

※ST69･108は中央ピットで主軸方向を計測

遺構名	調査区	平面形	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	分類	床面標高(m)	主軸方向(GNから)	中央ピット
ST46	ⅣB－1区	隅丸方形	5.1	4.8	24.0	標準	4.8	27°W	C3
ST68	〃	隅丸楕円形	(5.6)	4.1	－	－	4.4	42°W	A
ST69	ⅣB－2区	不整円形	4.9	(4.6)	(18.8)	小型	4.1	4°E	C3
ST79	〃	隅丸方形	3.6	3.4	12.3	〃	4.2	36°E	〃
ST84	〃	〃	4.8	(3.8)	(23.0)	標準	4.4	0°	－
ST93	〃	隅丸方形か	－	－	－	－	4.5	59°E	－
ST100	〃	〃	－	－	－	－	4.2	4°W	－
ST102	〃	－	－	－	－	－	4.1	－	－
ST108	ⅣC区	不整円形	5.2	(4.9)	21.2	標準	4.1	0° or 90°E	A

形及び多角形の竪穴建物跡である[4]。新たに居住域とされた西部(Ⅲ区)には，隅丸方形の標準型と小型のみで構成され，このエリアに居住する集団の性格を示唆している。主軸方位は真北(0°)前後のもの(ST11･18･48･50･55B･70･74･92)，東へ振れるもの(ST1･5･8･13)，東へ大きく振れるもの(ST43)，西へ大きく振れるもの(ST47)がある[5]。中央ピットの分類ではＡ類６軒(ST1･8･48･71･73･107)とC2類４軒(ST5･47･50･55B)とC3類７軒(ST13･18･43･48･55B･70･74)がある。

ⅲ ヒビノキⅢ式段階

続くヒビノキⅢ式段階の竪穴建物跡の分布はヒビノキⅡ式段階の分布を継承する。この時期に属する竪穴建物跡は31軒であり，最も多く最盛期を迎える。近接して同時併存が難しいものもあることから，編年案の２小期に対応している。この時期にも４つの竪穴建物グループに区分できる。平面形は隅丸方形のものにほぼ統一される。床面積による区分では，４区分となる。前段階まで標準型と小型のものであった隅丸方形の竪穴建物跡にも特大型・大型のものが出現し，特大型の竪穴建物跡は３軒(ST30･51A･75)あり，約60mずつの間隔で一直線に並んでいる。Ｂ群・Ｃ群・Ｄ群に各１軒ずつ存在する。Ａ群には特大型の竪穴建物跡が現状ではみられないが，特大型の竪穴建物跡が直線的に並んで存在しているのならば，調査対象外に位置し，おそらくＡ群にも特大型の竪穴建物跡が存在

表６－２　ヒビノキⅡ式段階の竪穴建物跡一覧

※ST43･47･70は中央ピットで主軸方向を計測

遺構名	調査区	平面形	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	分類	床面標高(m)	主軸方向(GNから)	中央ピット
ST1	ⅢＢ－２区	隅丸方形	3.7	3.0	11.4	小型	5.9	24°E	A
ST5	〃	〃	5.4	(5.4)	29.1	標準	5.8	10°E or 18°E	C2
ST8	〃	〃	3.8	3.8	14.5	小型	5.9	29°E	A
ST11	ⅢＢ－１区	〃	(4.8)	(3.8)	(18.2)	〃	5.5	5°E	－
ST13	〃	〃	4.7	(4.4)	(21.1)	標準	5.6	15°E	C3
ST17	〃	多角形か	(4.7)	(3.6)	(16.9)	小型	5.7	－	－
ST18	〃	隅丸方形か	4.9	4.9	24.0	標準	5.5	7°E	C3
ST35	ⅣＢ－１区	隅丸方形	(3.5)	(1.3)	－	－	4.6	－	－
ST43	〃	円形	6.2	4.8	30.0	大型	4.6	45°E	C3
ST47	〃	多角形	7.6	－	45.0	〃	4.7	85°W	C2
ST48	〃	隅丸方形	5.3	(3.9)	(28.0)	標準	4.7	0°	A or C3
ST50	〃	多角形	8.0	－	41.5	大型	4.7	2°E	C2
ST55B	〃	隅丸方形	4.9	(4.6)	(24.0)	標準	4.5	9°E	C2 or C3
ST61	〃	－	－	－	－	－	4.6	－	－
ST70	ⅣＢ－２区	多角形	6.2	5.6	27.3	標準	4.0	0°or 90°E	C3
ST71	〃	不整円形	4.7	(4.7)	17.3	小型	4.2	－	Aか
ST73	〃	〃	6.2	5.8	28.3	標準	4.0	－	〃
ST74	〃	不整隅丸方形	5.4	4.6	24.8	〃	4.3	7°E	C3
ST76	〃	－	－	－	－	－	4.6	－	－
ST92	〃	隅丸方形か	4.1	(4.2)	(17.2)	小型か	4.4	0°	－
ST107	ⅣＣ区	円形か	(3.4)	(2.9)	(36.2)	大型	4.2	－	Aか

している可能性が高い。A群は大型1軒(ST4)と標準型3軒(ST2･7･14)と小型2軒(ST10･12)で構成される。東群(ST2･4･7)と西群(ST10･12･14)に細分可能である。また，上述のように調査区外に特大型の竪穴建物跡が存在する可能性がある。B群は特大型1軒(ST30)と大型2軒(ST29･32)と標準型5軒(ST25･28･33･37･39)と小型2軒(ST26･27)と計測不能1軒(ST34)で構成される。ST27は平面形が長方形を呈

表6－3　ヒビノキⅢ式段階の竪穴建物跡一覧

遺構名	調査区	平面形	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	分類(m)	床面標高(m)	主軸方向(GNから)	中央ピット
ST2	ⅢB－2区	隅丸方形	5.3	(4.6)	28.1	標準	5.9	13°E	A
ST4	〃	隅丸長方形	6.7	5.9	39.8	大型	6.0	9°E	－
ST7	〃	隅丸方形か	4.8	(3.1)	(22.5)	標準	5.8	10°E	A
ST10	ⅢB－1区	隅丸方形	(4.5)	(2.7)	(12.1)	小型	5.6	0°	C3
ST12	〃	〃	(4.8)	(3.9)	(19.1)	〃	5.7	20°E	－
ST14	〃	〃	4.9	4.3	(21.0)	標準	〃	15°E	－
ST25	ⅣA区	〃	5.2	5.0	26.0	〃	4.8	0°	C3
ST26	〃	〃	4.2	3.3	13.9	小型	5.2	〃	－
ST27	〃	〃	4.0	3.3	13.2	〃	5.1	4°E	－
ST28	〃	〃	5.6	5.3	29.7	標準	4.8	3°E	A or C3
ST29	〃	〃	5.9	5.5	32.3	大型	4.7	48°E	C1 or C3
ST30	〃	〃	7.1	－	(50.4)	特大型	〃	0°	A
ST32	〃	〃	5.7	5.4	30.8	大型	〃	12°E	C3
ST33	〃	〃	4.7	4.6	21.6	標準	4.8	0°	A
ST34	〃	不整円形	－	－	－	－	〃	10°E	〃
ST37	ⅣB－1区	隅丸方形	4.9	(2.6)	(24.0)	標準	4.5	0°	〃
ST39	〃	〃	5.0	4.2	21.0	〃	4.6	10°E	〃
ST51A	〃	〃	8.0	8.0	64.0	特大型	〃	15°E	C3
ST58A	〃	〃	6.6	6.4	42.0	大型	4.5	0°	C2 or C3
ST59	〃	〃	4.7	4.6	21.0	標準	4.7	3°W	A
ST65	〃	方形	5.3	4.9	26.0	〃	4.5	14°W	〃
ST67	〃	隅丸方形	5.6	(1.7)	(31.3)	大型	4.3	0°	－
ST72	ⅣB－2区	－	－	－	－	－	4.2	－	－
ST75	〃	隅丸方形	7.5	－	(56.2)	特大型	4.3	8°E	－
ST81	〃	隅丸長方形	4.8	4.0	19.2	小型	〃	27°E	A
ST83	〃	－	(3.1)	(2.2)	－	－	4.1	10°W	Aか
ST91	〃	－	(3.1)	(2.4)	－	－	4.4	47°E	－
ST99	〃	隅丸長方形か	5.0	2.2	11.0	小型	4.2	14°E	－
ST104	〃	－	(3.8)	－	－	－	4.2	6°E	－
ST105	〃	隅丸方形か	5.0	－	－	－	4.0	7°E	－
ST109	ⅣC区	円形～楕円形	(5.0)	(2.6)	－	－	〃	－	－

し，主柱穴が2個のものである。C群は特大型1軒（ST51A）と大型2軒（ST58A・67）と標準型2軒（ST59・65）と小型1軒（ST81）で構成される。D群は特大型1軒（ST75）と小型2軒（ST81・99）と計測不能6軒（ST72・83・91・104・105・109）で構成される。主軸方位は真北（0°）前後のもの19軒（ST4・7・10・25～28・30・33・34・37・39・58A・59・67・75・83・104・105），西に振れるもの1軒（ST65）と東に振れるもの7軒（ST2・12・14・32・51A・81・99）と東に大きく振れるもの2軒（ST29・91）がある。中央ピットの分類ではA類12軒（ST2・7・28・30・33・34・37・39・59・65・81・83）とC1類1軒（ST29）とC2類1軒（ST58A）とC3類7軒（ST10・25・28・29・32・51A・58A）がある。すべての竪穴建物跡の燃焼施設が判明しているわけではないが，単独型のものが多くを占めている。

表6－4　馬場末式段階の竪穴建物跡一覧

遺構名	調査区	平面形	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	分類	床面標高（m）	主軸方向（GNから）	中央ピット
ST57	ⅣB－1区	方形	5.8	5.1	29.0	標準	4.7	24°W	A
ST64	〃	隅丸方形	4.9	4.5	22.0	〃	4.6	4°W	－
ST78	ⅣB－2区	－	－	3.8	（14.4）	小型	4.2	20°E	Aか
ST82	〃	隅丸方形	3.7	3.5	13.0	〃	4.5	44°E	－
ST97	〃	隅丸方形か	4.2	（3.2）	（17.6）	〃	4.3	0°	－
ST101	〃	〃	4.0	3.7	14.6	〃	4.1	6°W	A

表6－5　時期不明の竪穴建物跡一覧

遺構名	調査区	平面形	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	分類	床面標高（m）	主軸方向（GNから）	中央ピット
ST9	ⅢB－1区	隅丸方形か	（1.9）	（3.5）	（6.8）	小型	5.7	6°W	－
ST31	ⅣA区	隅丸方形	－	－	－	－	4.7	－	－
ST36	ⅣB－1区	〃	3.2	（1.2）	（10.2）	小型	4.9	9°E	－
ST42	〃	〃	（4.0）	（1.2）	－	－	4.6	0°	－
ST51B	〃	方形	（6.7）	－	－	－	〃	0°	A
ST54	〃	－	（2.9）	（0.9）	－	－	－	－	－
ST66	〃	－	（4.3）	（0.8）	－	－	－	－	－
ST77	ⅣB－2区	－	－	－	－	－	4.3	－	－
ST80	〃	隅丸長方形	（4.2）	2.9	－	小型	〃	6°E	A
ST86	〃	隅丸方形	4.9	－	（24.0）	標準	〃	10°E	－
ST88	〃	－	－	－	－	－	4.5	－	－
ST89	〃	隅丸方形か	3.9	（3.3）	（15.2）	小型	4.6	32°E	－
ST90	〃	〃	2.5	（1.8）	－	－	〃	16°W	－
ST94	〃	〃	（2.8）	（2.5）	－	－	4.5	28°W	－
ST95	〃	〃	3.2	3.0	9.3	小型	4.4	6°E	－
ST96	〃	〃	（3.7）	（3.1）	－	－	4.6	17°W	－
ST106	〃	－	（3.0）	（0.6）	－	－	4.2	0°	－
ST110	ⅣC区	－	（1.4）	（0.8）	－	－	4.0	－	－

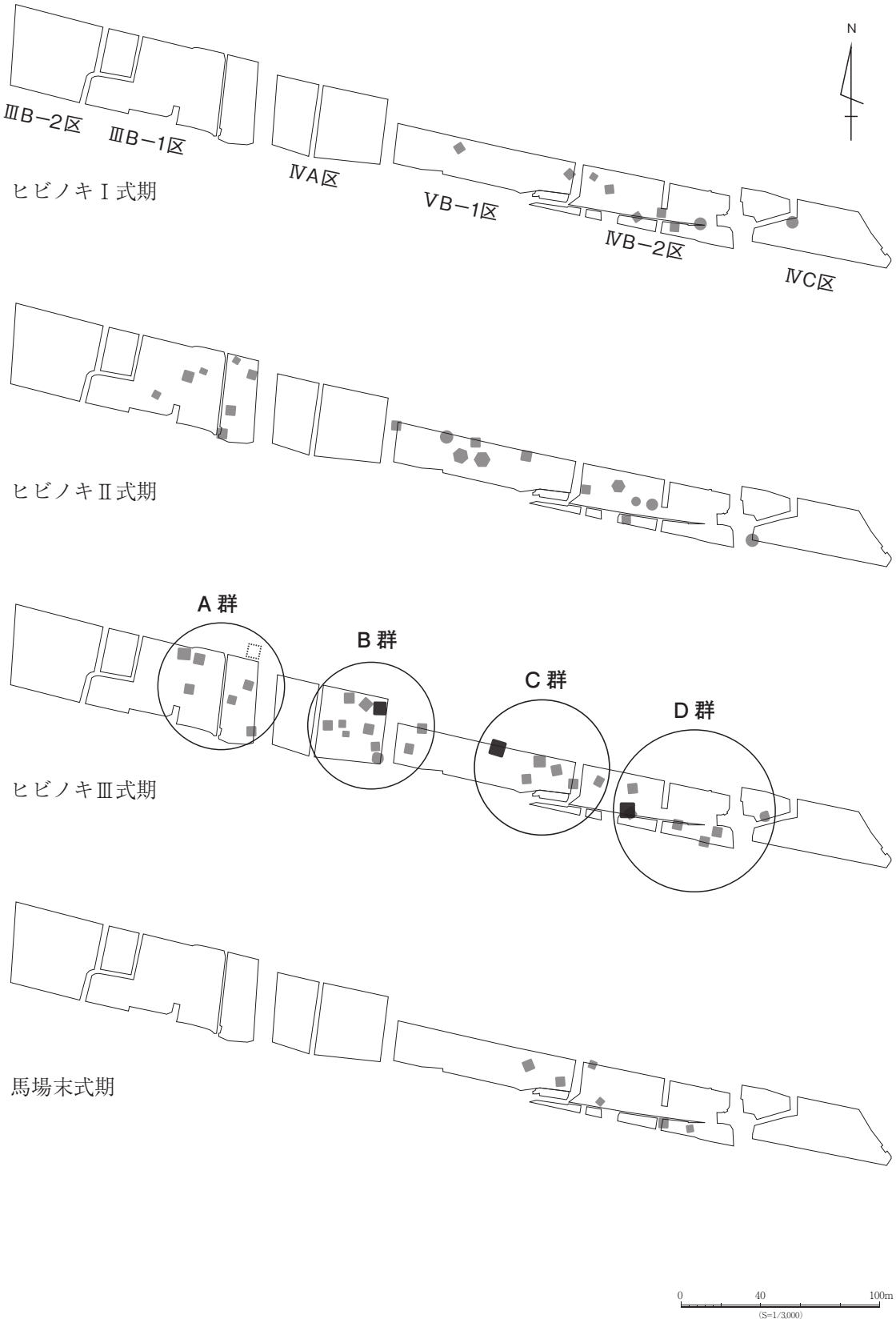


図6－2　時期別の竪穴建物跡分布図

ⅳ 馬場末式期

馬場末式期に属する竪穴建物跡は6軒である。竪穴建物跡の分布範囲は東西方向に約80mであり，ヒビノキⅠ式期段階の居住域の分布とほぼ重なる。すべて方形基調のものであり，特大型・大型のものはなく，標準型が2軒(ST57･64)，小型が4軒(ST78･82･97･101)で構成される。小型2軒が近接し，約30m離れて4軒の建物跡が分布する。主軸方位は真北(0°)前後のもの3軒(ST64･97･101)，西へ振れるもの1軒(ST57)と東へ振れるもの1軒(ST78)と東へ大きく振れるもの1軒(ST82)がある。中央ピットの分類は判明している3軒(ST57･78･101)はすべてA類である。床面規模の特大型・大型・標準・小型の4区分が標準・小型の2区分になり，3あるいは4グループは1グループとなるなどヒビノキⅢ式段階と馬場末式期の間に集落構造に大きな画期があり，明らかに衰退している。2グループ分が移動したか，あるいは各グループとも人口が減少し，1ヵ所にまとまったと考えられる。

ⅴ 小結

ここで東野土居遺跡の弥生時代における居住域について簡単にまとめておきたい。弥生時代前期末～中期初頭にⅣC区で竪穴建物跡1軒(ST108)が土坑とともに検出されており，小規模な集落を形成していた。今回の調査対象地では最も現地標高の低い地域に該当する。その後，後期後葉まで居住域としては利用されなかった。ヒビノキⅠ式期(後期後葉)になるとⅣB－2区を中心に集落が形成される。床面積では標準型と小型のもので構成される。ヒビノキⅡ式期になると居住域が拡大するとともに竪穴建物跡の数も増加する。床面積では大型のものが出現し，3区分できる。ヒビノキⅢ式期には竪穴建物跡の数が最多となり最盛期を迎え，4つのグループを形成する。想定した居住域全体では最大で9つのグループが存在していたと推測される。特大型の竪穴建物が出現し，床面積では4区分できる。馬場末式期になると居住域は縮小しヒビノキⅠ式期の居住域とほぼ同じとなる。特大型・大型の竪穴建物跡はなくなり，標準型と小型のもののみで構成される。この段階には人口が激減し，質・量とも明らかに衰退している。その後，古墳時代後期(6世紀後半)まで居住域としては利用されていない。古墳時代後期と弥生時代の集落域がほぼ重なっていることは居住域の選地に時代を超えた原理が働いていることを示している。

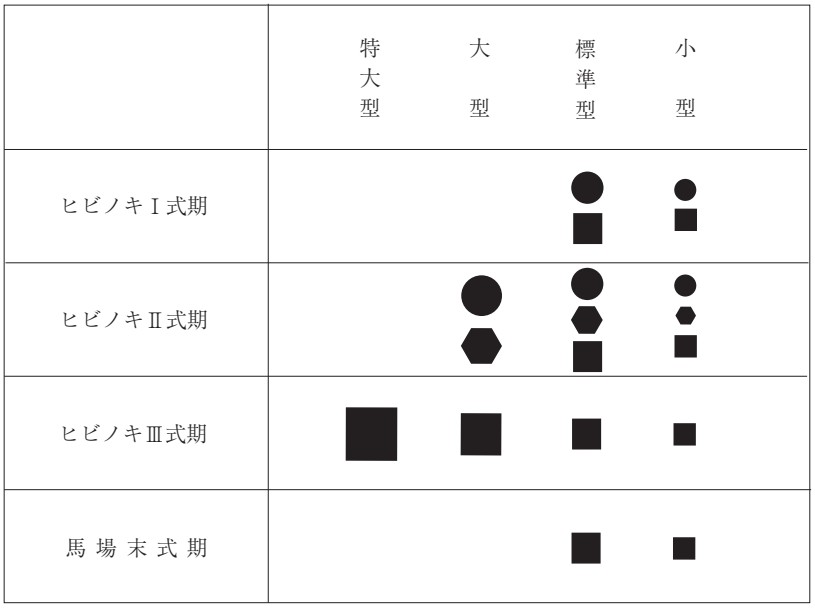


図6－3　時期別の竪穴建物跡群模式図

③ 香宗川下流域の遺跡動向

南国安芸道路の建設に伴う調査対象地は香宗川を挟んで東にものび，西から花宴遺跡，徳王子大崎遺跡，徳王子広本遺跡，徳王子前島遺跡で発掘調査が実施され，弥生時代の遺構・遺物が検出され

ている。この範囲には低位段丘・香宗川・氾濫原・低湿地などバラエティーに富んだ地形となっており，地形毎にどのように利用されていたのかを明らかにするのには最適な空間である。このような視点で，古環境の復原などを目的とした自然科学分析が積極的に実施され，その成果については各遺跡の報告書で詳細に述べられている[6]。

ⅰ 花宴遺跡

花宴遺跡は香宗川の氾濫原に位置する。北方向から南方向への流路跡(SR)が6条検出されており，遺跡一帯には水田が広がっていた可能性が高い。弥生時代前期から中期後半までにはSR1 ～ 4は埋没し，再掘削などの維持管理が行われなくなっている。SR5は幅31 ～ 45mの自然流路であり，SR1 ～4と規模は大きく異なっている。香宗川の旧流路，あるいはそれに準ずるようなものの一つと考えられ，基幹水路として位置付けることができる。ところで，流路跡を中心とした調査成果はやや広い範囲の状況を反映していると考えられる。周辺の調査区では出土していない時期の遺物も含まれており，花宴遺跡周辺に当該期の集落が展開していたことを示唆している。また，中期末(凹線文期)の遺物はほとんど出土しておらず，周辺の発掘調査においても同様であり，当該期には周辺での人間活動の痕跡が希薄となる。さて，SR5は弥生時代を通じて機能していたが弥生時代後期後半から終末にかけての大規模な洪水により埋没する。堰を構築し水田の復旧を行っているが比較的短期間に埋没し，放棄されている[7]。SR5の後期後半に属する遺物の出土量からは，中規模程度の集落が存在していたことを示している。SR5の推定流路方向や微地形を考慮にいれると現在の大熊・本村あたりに当該期の集落が存在した可能性がある。

ⅱ 徳王子大崎遺跡

徳王子大崎遺跡は北西方向から南東方向へ標高を減じながらのびる舌状の丘陵上に立地する。後世の改変による削平が著しい場所もあり，当時の微地形を復元することは困難である。現況の等高線などを参考に復元を試みると最大幅90m程の舌状の微高地上に居住域を展開させていたものと推測できる。Ⅱ区からⅠ区にかけて緩やかな谷状地形を呈していたと推測できる。Ⅱ区の竪穴建物跡の床面標高は4.2 ～ 3.6m，Ⅲ区では約3mであり[8]，弥生時代の地形もⅡ区からⅢ区へむかって標高が下がっていたと推測される。弥生時代の検出遺構としては前期の土坑，後期後半～後期末の竪穴建物跡をあげることができる。後期後半から末期では竪穴建物跡を6軒検出しており東野土居遺跡の衛星的な集落と位置付け，花宴遺跡を生産域としている[9]。Ⅱ区では4軒の竪穴建物跡が検出されている[10]。多角形，方形の竪穴建物跡が混在する。Ⅱ区のST－2とST－3，ST－1とST－2はそれぞれ近接し，同時併存は難しく，竪穴建物跡の平面形と配置から2時期程度に分けることができそうである。

ⅲ 徳王子広本遺跡

徳王子広本遺跡は舌状に南にのびる丘陵を挟んだ平地部が該当する。丘陵の東側がⅠ区，西側がⅡ区である。そして，Ⅱ区の東隣にⅢ区が設定されている。Ⅰ区とⅡ区の間は完全に削平を受けており，本調査の対象から除外されている。Ⅰ区とⅡ区では検出遺構・出土遺物の時期に違いがみられる。Ⅰ区では標高が0.9～1.5mの間(下面)で遺構を検出し，特に1.2～1.4mの範囲で等高線に沿って溝跡・溝状の遺構など遺構を検出しており，不整形の遺構が多い。前期末～中期初頭の溝跡4条・土坑2基，後期末～古墳時代初頭の土坑2基が検出されている。Ⅰ区の遺構を検出できる標高が低いことからも竪穴建物跡などの遺構が完全に削平されているのではなく居住域としては利用されていないと考

図6－4　徳王子広本遺跡調査区配置図

えられる。Ⅱ区では標高が3.4～4.3mの間(下面)で遺構を検出している。調査区全域で遺構を検出しているが，弥生期の遺構は北半部に分布する。前期の土坑2基・溝跡1条・ピット1個が検出されている。これらの他にも弥生土器片のみが出土している遺構がある。Ⅲ区では遺構は検出されていない。図示されている包含層出土の弥生時代の遺物はⅠ区が最も多く約100点であり，多くは後期後葉から末のものである。Ⅱ区では約20点であり，前期末から中期初頭のものが多い。Ⅲ区では15点で，前期から中期初頭と後期後葉から古墳時代初頭のものがほぼ同じくらいである。さて，後期後葉の明確な遺構が検出されていないがⅠ区では後期後葉の土器がまとまって出土している。このことから完全に削平を受けているⅠ区とⅡ区の間(丘陵上)に竪穴建物跡などの集落に関連する遺構が広がっていたと推測される。ただ，丘陵の幅は100～150mと推測され，北方向へは比較的急に標高が上がっていることから居住域とできる面積は小さく，竪穴建物跡数軒で構成される小規模な集落跡であったと考えられる[11]。

ⅳ 徳王子前島遺跡

徳王子前島遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭のため池状の遺構が検出されているのみで，いずれも自然に形成されたもので積極的に利用されたかは不明である[12]。前島遺跡の周囲については弥生時代の利用度は総じて低い。徳王子広本遺跡では丘陵の西側の方が遺物の出土量が多く，東側は少ないこととも整合的である。弥生時代には徳王子前島遺跡よりも西部を主に利用していたようである。

④ まとめにかえて

最後に香宗川下流域における弥生時代の遺跡の動向について少しまとめてみたい。香宗川は氾濫原内で流路方向を変え，人間活動に大きな影響を与えていたと考えられる。花宴遺跡の検出遺構から氾濫原を水田として利用したと考えられ，現在においても水田域が広がり生産域としては適地であったことが窺われる。時期によってどの程度，水田として利用されていたかは海からの影響も考慮しなければならず，検討の余地はあるものの，周辺の集落遺跡の分布から継続的に利用されていたことは明らかである。香宗川の氾濫原を生産域とし，時期毎に移動しながら周辺の低位段丘上に集落を形成する状況は凹線文期を除いた弥生時代を通じての景観であった。徳王子大崎遺跡・徳王子広本遺跡で弥生時代前期(遠賀川式期)の土坑などの遺構が検出され，複数存在する低位段丘上には前期の集落が点在している可能性が指摘されている[13]。前期末～中期初頭には東野土居遺跡内では最も標高が低く，香宗川の氾濫原に近い地点で土坑などの遺構が検出されている。遺構密度は低く，数軒の竪穴建物跡などで構成される集落が営まれていたと考えられる。中期は中期末(凹線文期)を除くと花宴遺跡の流路跡から遺物の出土が認められ，周辺に当該期の集落が分布していると考えられる。香宗川下流域では中期末(凹線文期)の遺物はほとんど認められない。この時期は田村遺跡群の居住域が急拡大する時期であり，高知平野東部域の集落動向を検討する上では考慮する必要がある。花宴遺跡の後期に属する遺物量は中期のものよりも増加し，中期の集落規模よりも後期は拡大した

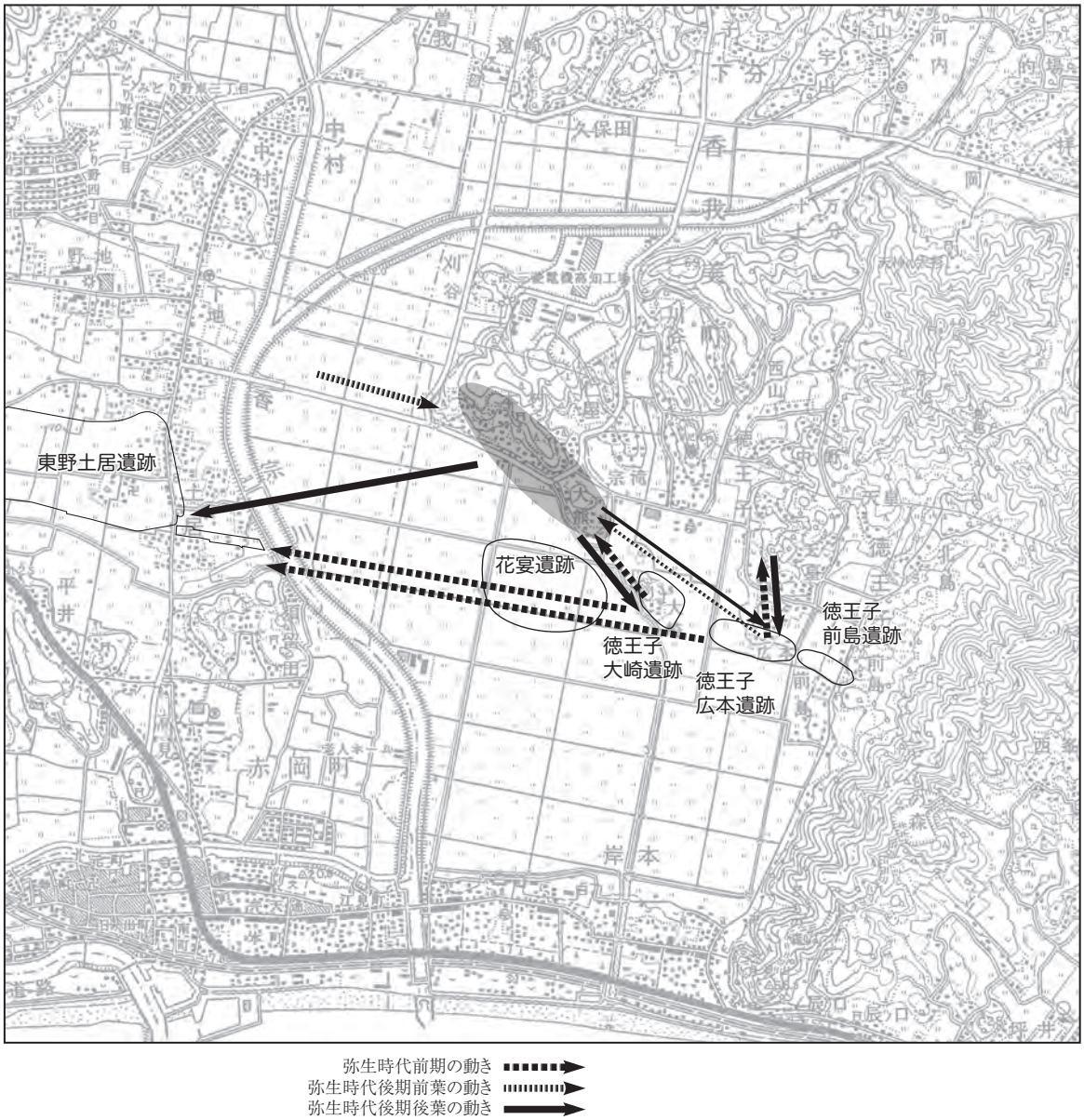


図6－5　時期別の動向模式図

ことを示し，弥生時代後期末から古墳時代初頭へ次第に人口が増加していく傾向は香宗川下流域のみならず高知平野全域において認められる。東野土居遺跡が拠点的な集落へと発展していく一つの理由は人口増加への対応により広い居住域を確保できたことである。

註

(1) 弥生時代のものでは土器の底部片が1点図示されているのみである。この調査地点の南側に該当する調査区でも弥生時代の竪穴建物跡は検出されていないことと調和的である。　宮地啓介2013年『東野土居遺跡』香南市教育委員会

(2) 時期比定が困難な竪穴建物跡が18軒あり，これらがそれぞれ該当する時期に区分されたら，本小文の内容を再考しなければならない可能性がある。

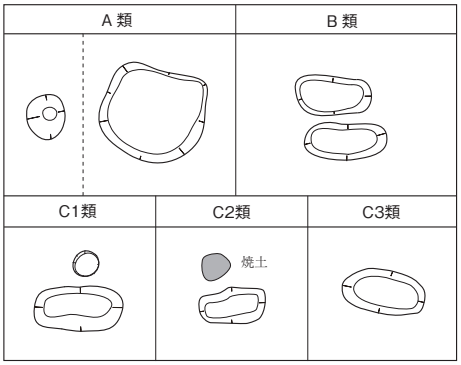


図6－6　燃焼施設分類図

⑶ 久家隆芳 2017 年「南四国における竪穴建物跡内の燃焼施設について」『高知考古学研究　創刊号』で行った分類に従う（図6－6）。

⑷ ST43・107も多角形の可能性があり，大型の竪穴建物跡はすべて多角形であることも考えられる。大型の竪穴建物跡が今までとは異なる型式（外観）のものであることは，単に規模が大きいだけではない。

⑸ 竪穴建物跡の床面遺構の配置をみると方位・方向を意識していることが見受けられる。高知県内の弥生時代においては集落内に建物を直線的に配置する規制が存在する可能性は低いと考えられ，日差し，風向き等の自然環境・微地形の違いや住居構造の変化など様々な要因によるものと推測される。主軸方位は座標北（真北）から東か西へ何度ズレているかで表記した。円形基調・多角形のものは中央ピットの長軸方向で計測し，方形基調のものについては壁を計測した。主軸方位によるグルーピングは集落構造を検討するうえで有効な視点であるのか，あるいは同一方位を取るグループに有意な関係があるかについて検討してみたく計測を試みた。その結果，24～28度西へ振っているもの，14～17度西へ振っているもの，1～10度西へ振っているもの，0～10度東へ振っているもの，12～20度東へ振っているもの，24～29度東へ振っているもの，44～48度東へ振っているものの7つに区分することが可能である。真北を意識しているものが多いものの，重複・近接などで同時併存は不可能なものもあることから，数時期のものが集積している。24～29度東へ振っているものは2軒のみであり，これらの竪穴建物跡はⅢ区にのみ分布し，主軸方位と竪穴建物跡の位置には関連がある可能性があることなどが指摘できる。大きく東あるいは西に振っているものは景観においても他の主軸方位を取る建物と同時に存在していれば見た目でも大きく違ってくるであろう。古代以降のように時期と主軸方位に有意な関連は見いだせなかった。主軸方位による検討を有意なものとするには時期と主軸方位との対応だけではなく，他のファクターも組み合わせる必要がある。

⑹ それらの成果を小文に反映させることができれば，より深い検討を行うことが可能であるが，十分に理解できていないため，部分的に参考としているのみである。

⑺ 廣田佳久2010年「第Ⅴ章　総括」『花宴遺跡』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

⑻ Ⅱ区の検出標高は約4m，Ⅲ区は約3mであるがⅢ区のST－1の壁高は10～20㎝であり削平を受けている。

⑼ 下村裕2013年「第Ⅴ章　考察」『徳王子大崎遺跡』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

⑽ ST－5は竪穴建物跡にするには，根拠が少ないため，今回は対象から除外した。

⑾ 出土した弥生時代後期の遺物量からも肯定できる。

⑿ 島内洋二 2011年「第Ⅶ章　まとめ」『徳王子前島遺跡』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

⒀ 下村裕 2014年「第Ⅴ章　考察」『徳王子広本遺跡』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

⑵ 弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器

東野土居遺跡においては，調査対象区域東側を中心に当該期の土器が多量に出土している。その特徴は，東阿波型土器や庄内式土器などの搬入土器が数多く出土したことであり，特に山陰系の土器が高知県内で初めて確認されている。また，在地の土器も数多く出土しており，既存の土器編年を基に東野土居遺跡出土の壷・甕・鉢・高杯などについての編年試案を作成し，若干の考察を試みた。

① はじめに

高知平野における弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器様相は岡本健児氏の研究をはじめとして，深渕遺跡や小籠遺跡の調査などをもとにした出原恵三氏の研究によってほぼ確立されている。今回，東野土居遺跡の調査を通じて多くの土器が出土しており，これまでⅤ－5様式(ヒビノキⅠ式)，Ⅵ－1様式(ヒビノキⅡ式古)，Ⅵ－2様式(ヒビノキⅡ式新)とされていた編年観[1]を基礎として，当遺跡で確認されているヒビノキⅠ式から馬場末式までの土器様相を細分した。また，ヒビノキⅢ式土器は土器組成及び形態的特徴から南四国における最古の土師器[2]とされており，古式土師器の概念は，「ヒビノキⅢ式を古式土師器Ⅰ期とすれば馬場末式がⅡ期」[3]とする出原恵三氏の見解に従っている。

東野土居遺跡における調査で出土した甕形土器は全体の形状が復元できたものも多く，竪穴建物跡から出土した遺構一括資料を基に甕形土器を抽出し，土器編年の基準とした。その他の器形は基準とした甕形土器との共伴を基に編年を試みている。

② 土器の分類

【甕形土器】

いわゆる「伝統的第Ⅴ様式」の系譜に繋がるもので，器高を基準に以下のように4分類した。

A類　器高30㎝以上の超大型甕

B類　器高25㎝以上30㎝未満の大型甕

C類　器高20㎝以上25㎝未満の中型甕

D類　器高20㎝未満の小型甕

【壷形土器】

A類　長頸壷

平底で球形状の胴部をもち，頸部が垂直に長く立ち上がるもの

B類　広口壷

玉葱状または球形状の胴部から大きく外反する口縁部を有するもの

B1類　口縁部が単純に外反して大きく開くもので，口縁端部に加飾したものも存在する。

B2類　口縁端部を上下に拡張したもので，波状文を施すものが多い。

C類　直口壷

口縁部が直線的または緩やかに外反しながら立ち上がるもの

C1類　口縁部が直線的またはやや外反しながら立ち上がるもの

C2類　口縁部が直線的に比較的長く立ち上がるもの

C3類　細頸で，口縁部がやや外傾し直線的に立ち上がるもの

D類　複合口縁壷

広口壷の口縁端部に口縁部を付加し，内傾する口縁部をもつもの

D1類　広口壷の口縁端部に内傾する口縁部を付加したもの

D2類　広口壷の口縁端部に上方に直線的に長く立ち上がる口縁部を付加したもの

E類　二重口縁壷

広口壷の口縁端部に口縁部を付加し，二重に外反する口縁部をもつもの

F類　台付壷

底部に脚部を付加したもの

【鉢形土器】

A類　鉢形の体部に平底または丸底をもつ鉢で，タタキ成形を基本とする。

B類　椀形の体部に平底をもつ鉢

C類　皿形の体部に平底または丸底をもつ鉢

D類　椀形または半球形の体部から口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がる大型の鉢で，片口をもつものが多い。

E類　コップ状を呈し，体部が垂直気味に立ち上がる鉢

F類　台及び脚の付くもので，体部が斜め上方に直線的に立ち上がる鉢

G類　椀形または半球形の体部から，口縁部が屈曲して斜め上方に短く立ち上がる鉢

H類　半球形の体部から，口縁部が屈曲して斜め上方に比較的長く立ち上がる鉢

【高杯形土器】

A類　有稜高杯

杯部が稜線によって口縁部と体部に分けられた高杯

A1類　いわゆる一般的な有稜高杯

A2類　口縁部外面に粘土帯を貼付するもの

A3類　口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるもの

B類　椀形高杯

杯部が椀状を呈するもの

C類　有段高杯

杯部に段を有して口縁部が斜め上方に立ち上がるもの

【器台形土器】

壷形土器などを置くための受部をもつもの

A類　受部と脚部が貫通するもの

B類　浅い皿状の受部と円錐状の脚部をもつもの

③ 甕形土器の変遷

ⅰ 甕形土器の形態と調整の分類

今回の編年試案では基本的に甕形土器の変遷を基軸とした。当該期の甕形土器の変遷は型式分類がある程度確立しているため，当遺跡から出土している甕形土器のうち全体の形状が復元できた63点(表6－6)を抽出し，各型式に当てはめた。その後，この型式変化を探るために形態と調整の出現頻度をグラフ化した(図6－7･8)。それぞれの分類は下記のとおりであるが，馬場末式のサンプル数が少なく，形態及び調整の変化が極端になってしまっている。

【形態分類】

口縁端部形態

A類　口縁端部を拡張するもの

B類　口縁端部を面取りし，断面方形を呈するもの

C類　口縁端部を丸く仕上げるもの

D類　口縁部外面に粘土帯を貼付するもの

E類　口縁端部を上方に摘み上げるもの

胴部形態

A類　砲弾形

B類　長胴形

C類　球形

底部形態

A類　平底

B類　擬丸底

C類　丸底

表6－6　抽出した甕形土器一覧

No.	時期	調査区	遺構・遺物包含層	図版番号
1	ヒビノキⅠ式	ⅣＢ－2区	ST79	265
2	〃	〃	〃	266
3	〃	〃	〃	267
4	〃	〃	〃	268
5	〃	〃	〃	269
6	〃	〃	〃	270
7	〃	〃	〃	271
8	〃	〃	〃	325
9	〃	〃	SK14	407
10	〃	〃	SD3	423
11	〃	〃	SG5	459
12	〃	〃	Ⅴ1層	892
13	〃	〃	Ⅴ3層	945
14	〃	〃	Ⅴ5層	969
15	ヒビノキⅡ式	ⅢＢ－2区	ST5	371
16	〃	〃	ST7	415
17	〃	ⅢＢ－1区	ST18	773
18	〃	〃	SK229	533
19	〃	ⅣＡ区	ST27	106
20	〃	〃	ST30	291
21	〃	ⅣＢ－1区	ST35	894
22	〃	〃	ST40	968
23	〃	〃	SX9	1518
24	〃	〃	〃	1521
25	〃	〃	遺物包含層	1542
26	〃	ⅣＢ－2区	Ⅲ層	579
27	〃	〃	ST93	1000
28	〃	〃	ST100	1058
29	ヒビノキⅢ式	ⅢＢ－2区	ST1	299
30	〃	ⅢＢ－1区	ST10	668
31	〃	ⅣＡ区	ST25	38
32	〃	〃	ST29	208

No.	時期	調査区	遺構・遺物包含層	図版番号
33	ヒビノキⅢ式	ⅣＡ区	ST29	209
34	〃	〃	〃	232
35	〃	〃	〃	233
36	〃	〃	ST30	289
37	〃	〃	〃	290
38	〃	〃	ST31	303
39	〃	〃	ST34	400
40	〃	〃	SK47	484
41	〃	〃	Ⅴ層	768
42	〃	ⅣＢ－1区	ST37	910
43	〃	〃	〃	911
44	〃	〃	ST39	934
45	〃	〃	SK6	1358
46	〃	〃	〃	1359
47	〃	〃	〃	1360
48	〃	〃	〃	1361
49	〃	〃	〃	1362
50	〃	〃	〃	1363
51	〃	〃	〃	1364
52	〃	〃	〃	1365
53	〃	ⅣＢ－2区	Ⅲ層	578
54	〃	〃	Ⅳ層	651
55	〃	〃	〃	652
56	〃	〃	Ⅴ層	800
57	〃	〃	Ⅴ5層	970
58	〃	〃	ST105	1109
59	〃	〃	SD24	1153
60	〃	〃	トレンチ	1170
61	馬場末式	〃	Ⅳ層	650
62	〃	〃	〃	703
63	〃	〃	ST64	1220

【成形・調整分類】

内面

A類　ヘラケズリ調整

B類　ナデ調整

外面

A類　タタキ成形

B類　ハケ調整

B1類　ハケ調整の及ぶ範囲が器面の半分以上のもの

B2類　ハケ調整の及ぶ範囲が器面の半分程度のもの

B3類　ハケ調整の及ぶ範囲が器面の一部もしくは認められないもの

ⅱ 甕形土器の属性変化

甕形土器の各部位におけるヒビノキⅠ式から馬場末式までの形態変化をみると，口縁部ではA類が減少し，C類が増加する傾向がみられる。B類は普遍的に存在し，D・E類はヒビノキⅢ式にのみ出現する。胴部ではB類が増加する傾向がみられる。A類はヒビノキⅠ式のみにみられ，C類はヒビノキⅢ式から出現する。底部ではA類が減少し，B類がヒビノキⅡ式以降，C類がヒビノキⅢ式以降出現することが読み取れる。

調整変化についてみると，内面ではA類がヒビノキⅠ式で認められるが，ヒビノキⅡ式では消滅し，ヒビノキⅢ式以降再度出現する。なお，B類は増加傾向を示す。外面ではA類がヒビノキ式を通して普遍的に存在しているが，馬場末式では消滅している。また，B1類は全型式をとおして普遍的に存在しているが，B2・B3類は増加傾向を示している。

これらの形態と調整の変遷はヒビノキⅠ式から馬場末式にかけての変化に沿ったもので，それぞ

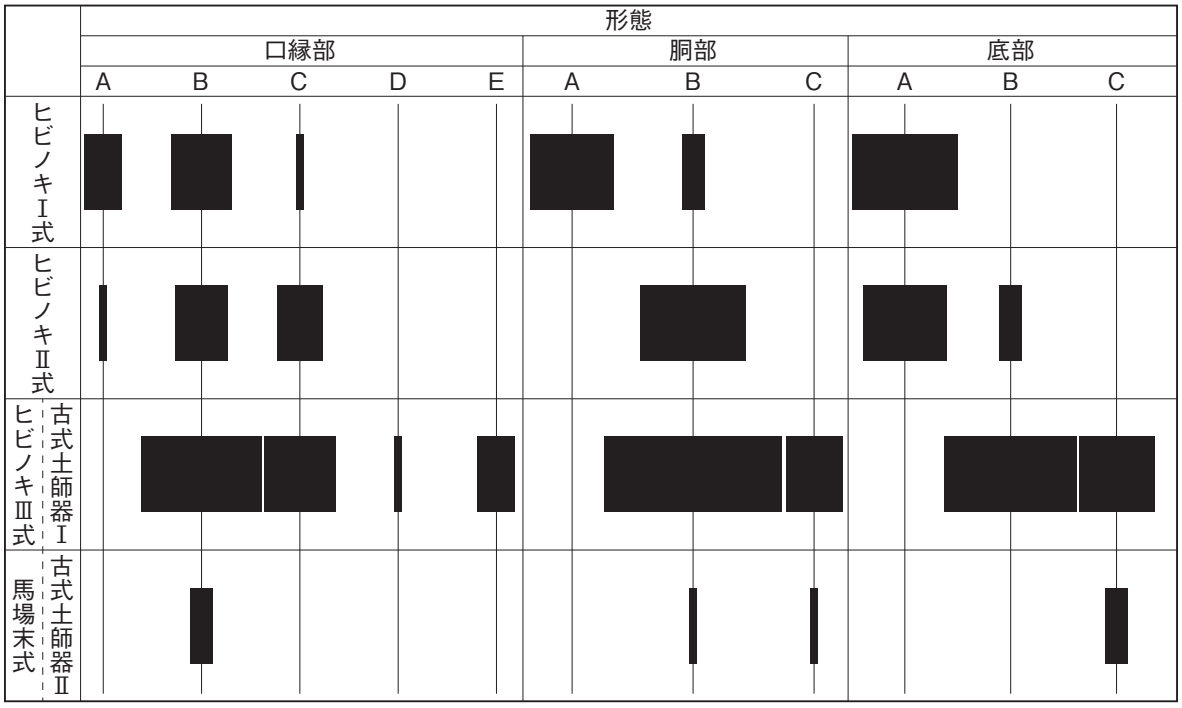


図6－7　各形態の出現頻度

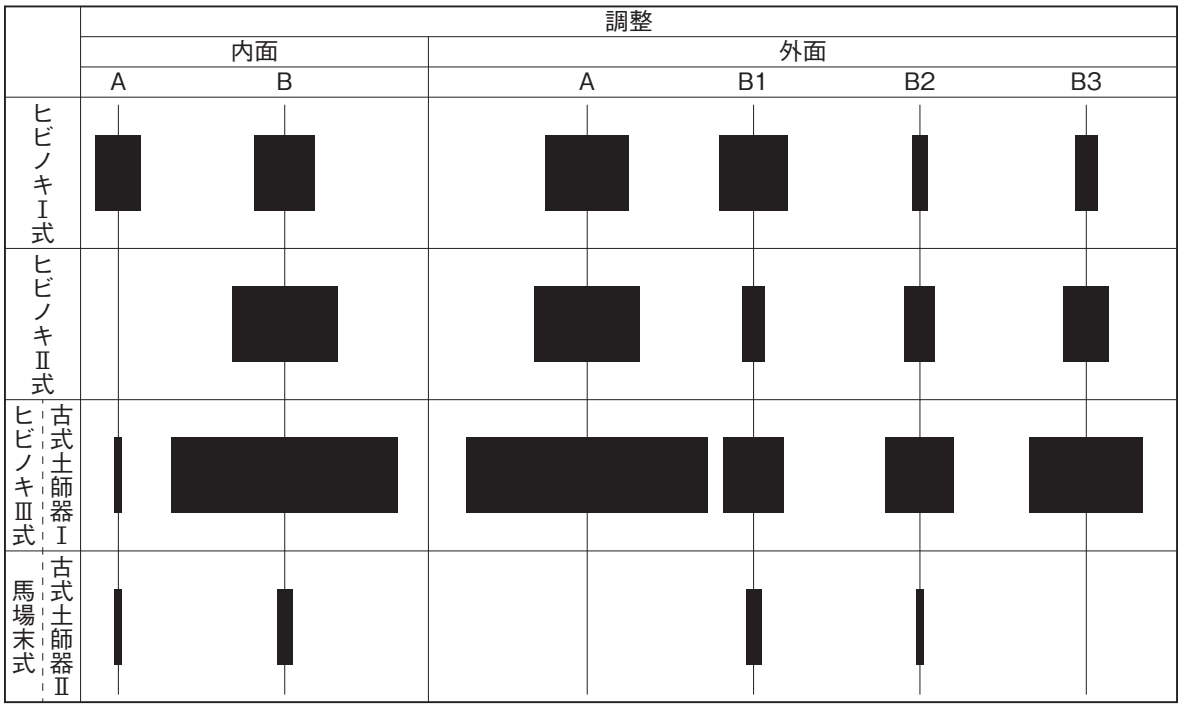


図6－8　各調整の出現頻度

れの属性変化が緩やかに進行していくものと仮定される。このことから，東野土居遺跡における甕型土器の変遷は下記のように設定した。

【ヒビノキⅠ式】

しっかりとした平底である。胴部上半もしくは胴部中央に最大径があり，いわゆる砲弾形を呈する。また，口縁端部を面取りするものが多いが，拡張するものや丸くおさめるものも存在する。内面調整はヘラケズリとナデともに存在し，外面調整ではタタキのあとのハケ調整が及ぶ範囲が広い傾向を示す。

【ヒビノキⅡ式】

ヒビノキⅠ式に比べ底部径が縮小し，擬丸底のものが出現する。胴部中央に最大径があり，いわゆる長胴形を呈し，胴径に比べ器高が高い傾向がみられる。口縁端部は拡張するものが減少し，丸くおさめるものが増加する。外面調整ではタタキのあとのハケ調整が及ぶ範囲が狭くなる傾向が認められる。また，内面のヘラケズリ調整が認められなくなり，ナデ調整となる。

【ヒビノキⅢ式】

底部は丸底もしくは丸底を指向した擬丸底のみとなる。胴部は球形を指向するため，ヒビノキⅡ式よりやや張った形状を呈し，胴径に比べて器高は低い傾向を示す。口縁端部を丸くおさめるものが増加し，粘土帯を貼付するものと上方に摘み上げるものが出現する。外面調整はタタキのあとのハケ調整が及ぶ範囲がさらに狭くなる傾向を示す。内面は前型式と同様ナデ調整であるが，ヘラケズリも極少数存在する。

【馬場末式】

底部は丸底に統一され，胴部は球形状を呈するが，長胴形のものも認められる。口縁端部は断面方形を呈するもののみ確認されている。外面調整はタタキがみられなくなり，ハケ調整が目立つ。内面

には再びヘラケズリ調整がみられるようになる。

④ 編年試案

上記で設定した甕形土器の形態と調整の変遷が緩やかに進行すると想定して，各型式の古段階と新段階を下記のとおり想定した(図6－9)。壷形土器，鉢形土器，高杯形土器，器台形土器，搬入土器については，甕形土器の共伴関係を基本とし，図6 － 10 ～ 13のとおり編年を試案している(各遺物の図版番号等は付図6に記載)。

ⅰ ヒビノキⅠ式

【古段階】

甕形土器は胴部最大径が胴部上半にあり，いわゆる砲弾形を呈す。しっかりとした平底で，外底面がやや窪むものも存在し，口縁端部は面取りもしくは拡張される。外面はタタキのあとハケを全面に施すものが多く，内面にはヘラケズリ調整が認められる。壷形土器には頸部が比較的長く立ち上がるA・B1・B2類がみられ，B類の口縁端部は拡張されるものが多い。鉢形土器にはA・D・E・F類がみられ，A類は平底で，器高指数が高いものが多い。高杯形土器ではA1・A2・B類がみられる。A類は口縁部が短く外反し，脚部は円錐状を呈する。

【新段階】

甕形土器の胴部最大径は前段階に比べ位置がやや下がってきており，胴部中央に近くなるため長胴形を呈するものが増加する。底部はしっかりした平底であるが前段階に比べやや径が縮小し，口縁端部を丸く仕上げるものも少量認められる。外面と内面の調整は前段階とほぼ同じ傾向を示す。壷形土器にはB1類が引き続きみられるが，B2類も存在すると考えられる。B類は頸部が前階段に比べ短くなる傾向が認められる。鉢形土器は前階段に引き続き，A・E・F類が存在すると考えられ，A類は前階段に比べ器高指数が低くなる傾向がみられる。高杯形土器も前段階と同様A1・B類が存在すると考えられる。

ⅱ ヒビノキⅡ式

【古段階】

甕形土器の胴部最大径は位置がさらに下がり，ほぼ胴部中央に位置するようになる。砲弾形を呈するものは姿を消し，長胴形に統一される。底部は前段階に比べ径がさらに小さくなる。口縁端部は拡張するものが少なくなり，粘土帯を貼付するB2類が認められる。外面のハケ調整は全面に施すものが少なくなり，内面のヘラケズリ調整はほとんどみられなくなる。壷形土器は前段階と同様にB1類がみられるが，明瞭な頸部が認められなくなる。鉢形土器は前段階に引き続きA類がみられるが，底部径が小さくなり丸底に近い形態を示すものが多くなる。その他にはE・F類が存在すると考えられる。高杯形土器は前段階に引き続きA1・B類がみられ，A1類に認められる稜は前段階よりさらに下がる。A類の口縁部は斜め上方に直線気味に立ち上がるようになり，脚部は屈曲して開く形状になる。また，器台形土器ではA類が出現する。

【新段階】

甕形土器の胴部最大径は胴部中央に位置し，形状は長胴形を呈するが，前段階より胴部が張る傾向を示す。底部径はさらに縮小し，丸底に近いものが多くなる。外面のハケ調整が及ぶ範囲は前段階に比べ縮小する。壷形土器にはB1・B2類がみられるが，B1類の頸部がほぼ消滅し，口縁部が胴部から直接立ち上がるようになる。鉢形土器は引き続きA類がみられるが，底部は丸底となる。その他は

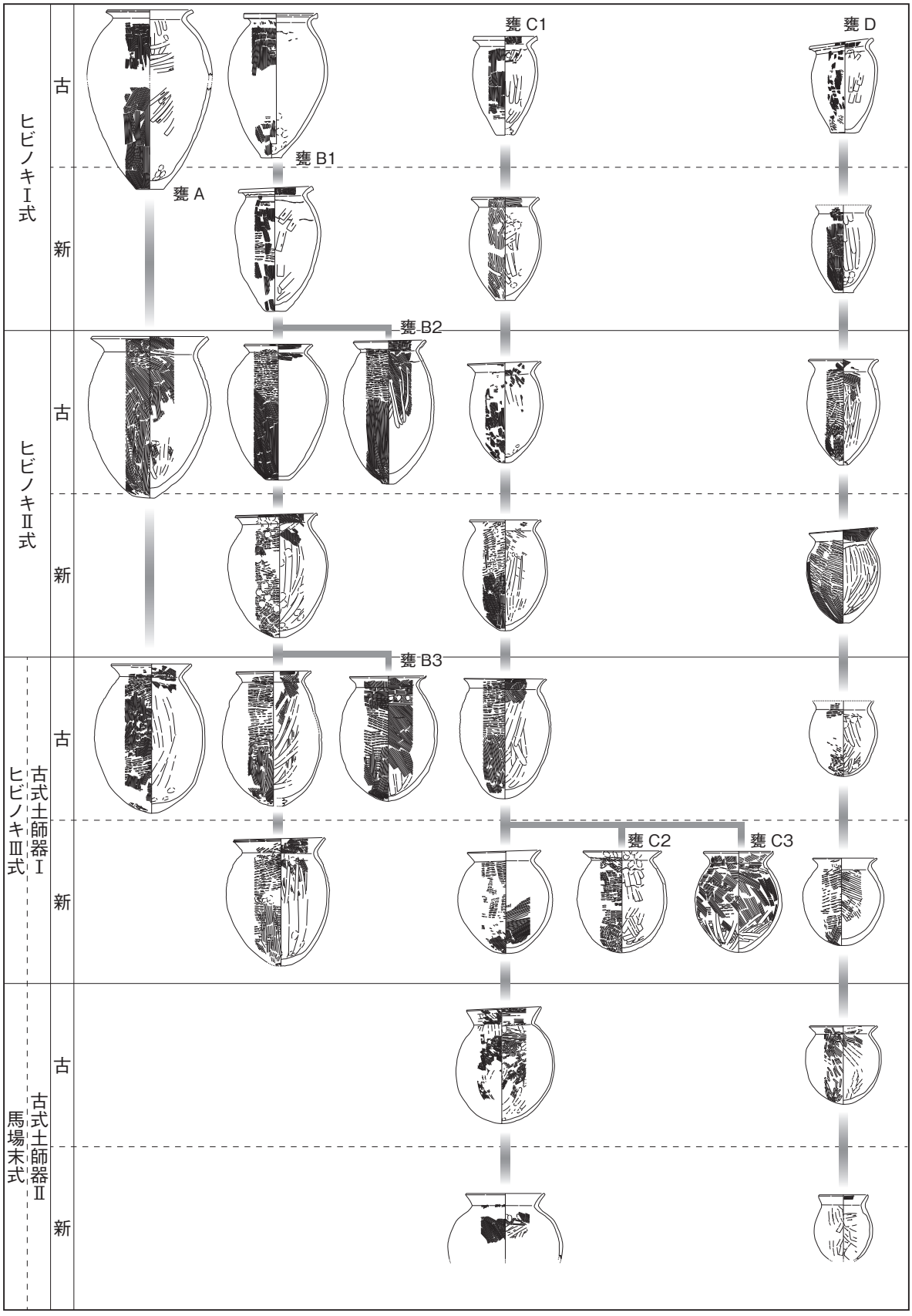


図6－9　甕形土器の編年試案(S=1/12)

前段階と同様にE・F類がみられ，新たにG類が出現する。高杯形土器は前段階と同様にA1・B類が認められ，器台A類も存在すると考えられる。

ⅲ ヒビノキⅢ式

【古段階】

東野土居遺跡の最盛期にあたる時期である。各器形の構成が多様になり，この時期から搬入土器が認められる。甕形土器は底部が丸底か擬丸底となり，平底は完全に消滅する。全体の形状は丸底を指向するため，底部外面が外側に張るようになり，ナスビ状を呈するものが出現する。また，口縁端部を上方に摘み上げるB3類がこの時期のみ認められる。また，外面のハケ調整が及ぶ範囲は前段階に比べさらに縮小する。壺形土器には前段階に引き続きB1・B2類がみられるが，この時期から新たにC1・C3・D1・E類が出現する。鉢形土器には前段階に引き続きA・E・F・G類がみられるが，新たにB・C類が出現する。なお，椀状を呈するB類と皿状を呈するC類の出現は当該期を指し示す指標と考えられる。高杯形土器には前段階に引き続きA1・B類がみられるが，新たにC類が出現する。高杯形土器A3類はこの時期のみ存在し，器台形土器B類が認められる。

【新段階】

甕形土器は胴部が前段階よりさらに張り，球形に近い形状を呈する。また，前段階と同様にC1類が認められ，C2・C3類がこの時期のみ出現する。外面調整でハケの及ぶ範囲がさらに小さくなり，一部もしくは全く施されないものが主流となる。壺形土器は前段階に引き続きB1・C1・D1・E類がみられ，新たにF類が出現する。鉢形土器も前段階に引き続きA・B・C・E・F・G類がみられる。高杯形土器も前段階と同様にA1・B・C類がみられ，畿内系の搬入土器が認められる。

ⅳ 馬場末式

【古段階】

甕形土器は胴部の形状が球形となり，タタキ目が消滅する。外面の調整はナデとハケのみとなる。壺形土器はC1・E・F類が引き続き存在し，新たにD2類が出現する。鉢形土器は引き続きB・C類は存在するが，A・E・F類が消滅し，新たにH類が出現する。高杯形土器で確認されているのはA1類のみであるが，他の形態も存在するものと想定される。

【新段階】

甕形土器には全体の形状が球形を呈するC1類が存在するが，D類は長胴形を呈す。内面には再びヘラケズリを施すようになる。壺形土器は布留系の壺を模倣したと考えられる口縁部が斜め上方に長くのびるC2類が新たに出現するが，C1・D2・E類も存在すると考えられる。鉢形土器も前段階に引き続きH類が存在しているが，B類も存在するものと想定される。高杯形土器も稜がほぼ消滅し，脚部の屈曲が強くなりほぼ水平となるA1類のみ確認されている。また，搬入土器には布留系のものが認められる。

ⅴ まとめ

今回，東野土居遺跡から出土した弥生後期後半から古墳時代初頭の土器についての編年試案を試みた。甕形土器の変遷は極めて漸進的であるが，特定の型式間では重要な転換期が存在する。それは，平底の消滅と球形を呈する胴部形状の出現である。平底から丸底への変化は各型式を俯瞰的にみると極めて漸進的な変化ではあるが，明確な転換点はヒビノキⅡ式とヒビノキⅢ式の間に設定できる。また，球形を呈する胴部形状の出現はヒビノキⅢ式と馬場末式の間に認められる。これらの転換点

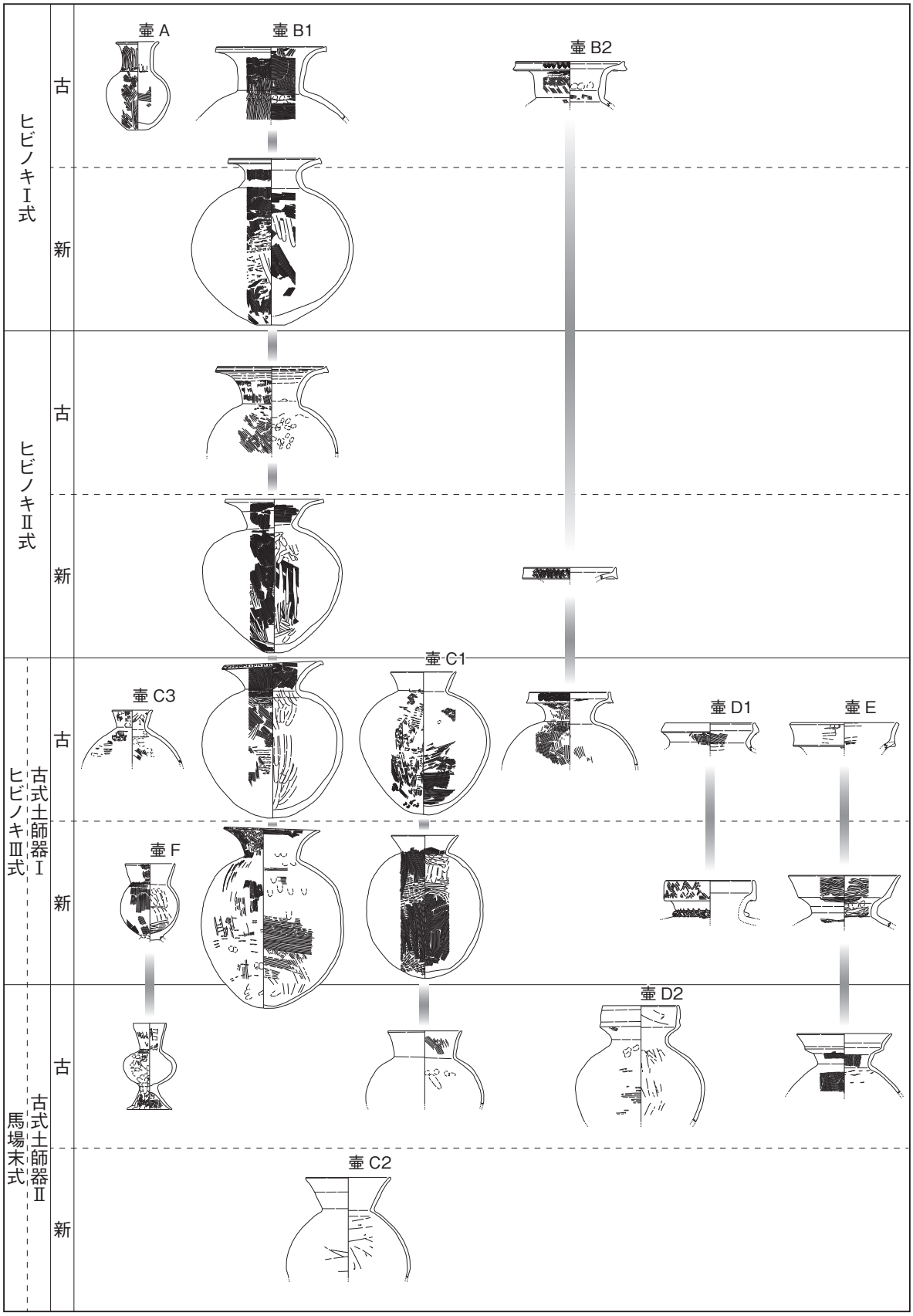


図6－10　壷形土器の編年試案(S=1/12)

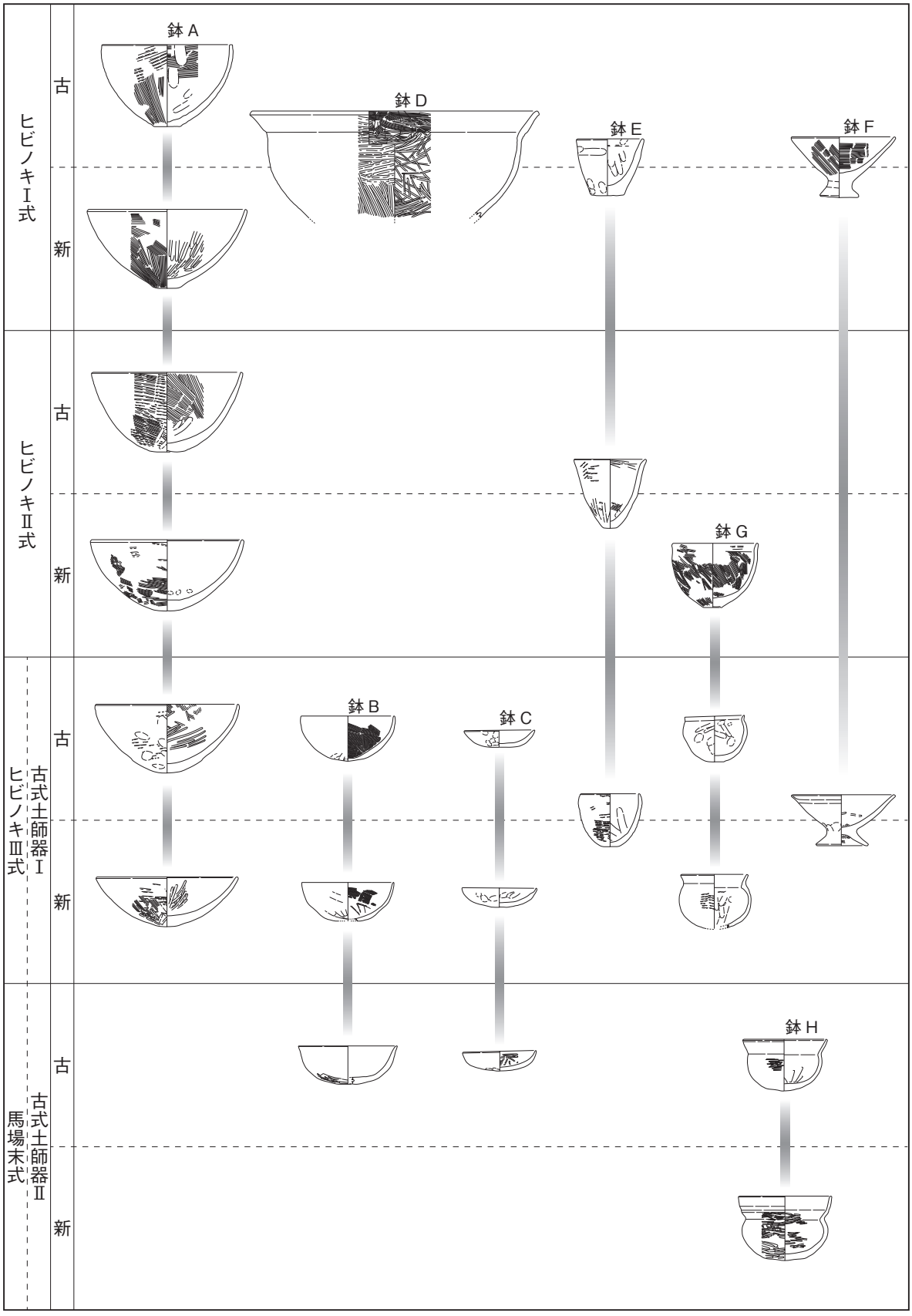


図6－11　鉢形土器の編年試案(S=1/8)

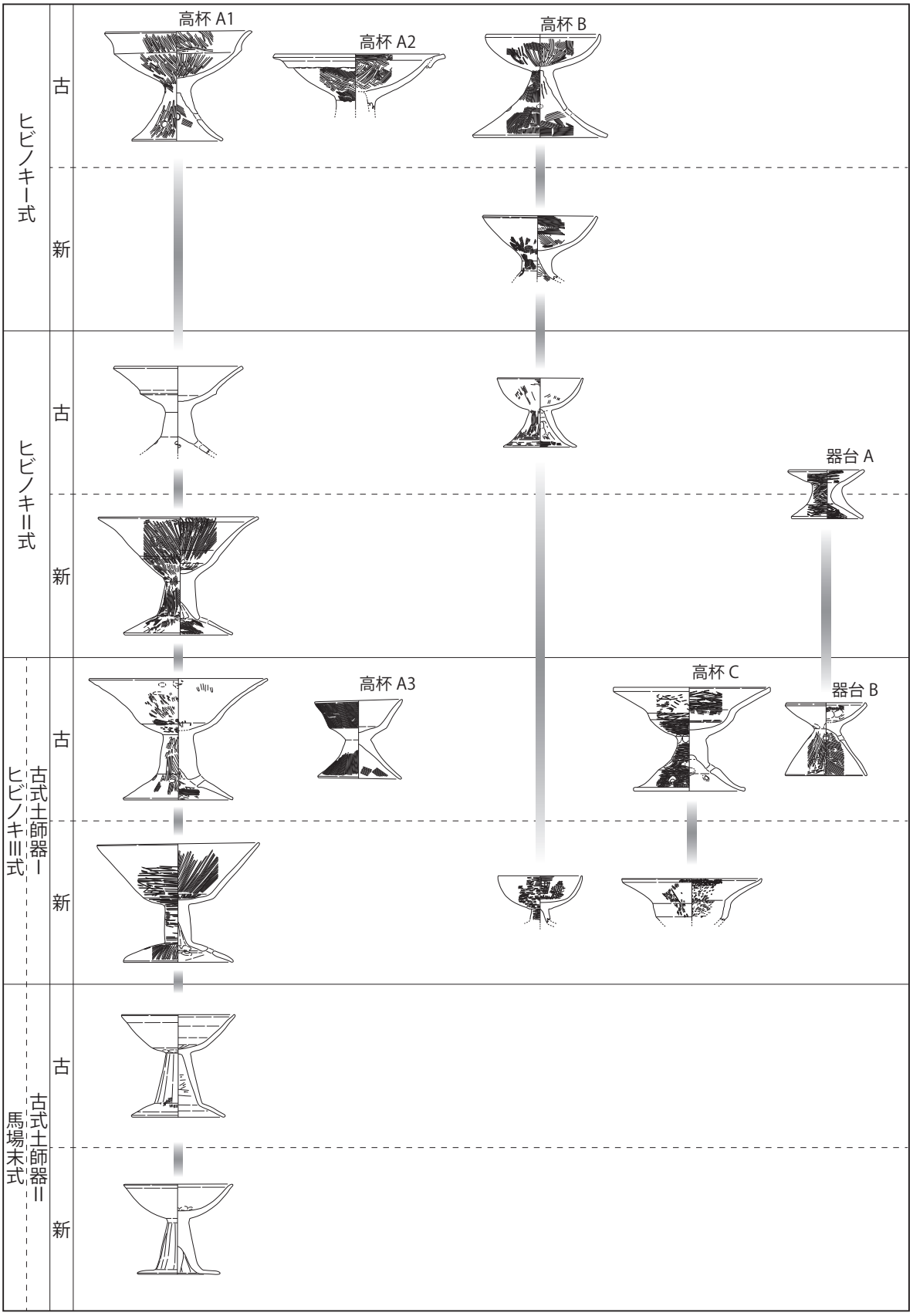


図6－12　高杯・器台形土器の編年試案(S=1/8)

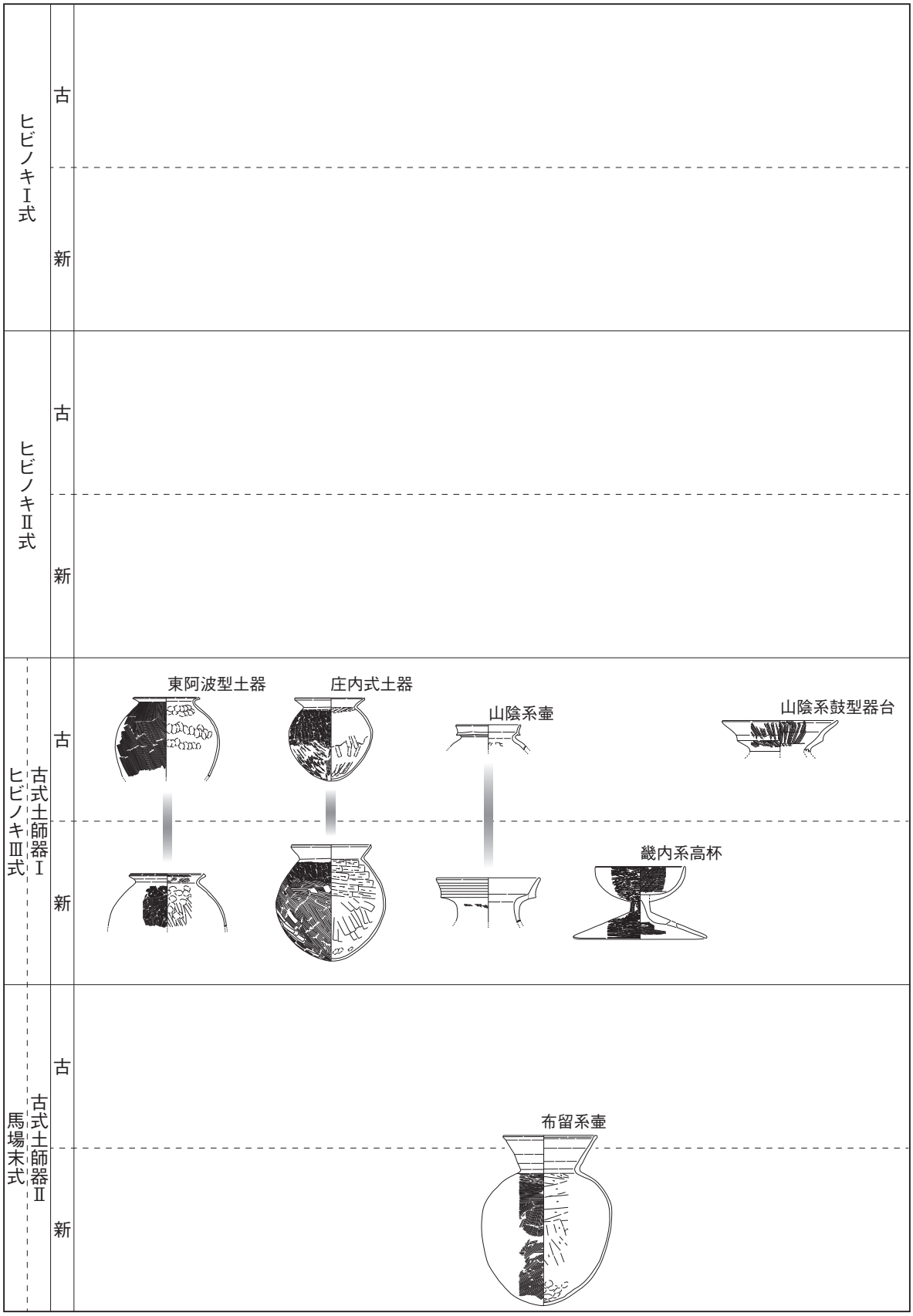


図6－13　搬入土器の編年試案(甕・壷形土器:S=1/12, 高杯・器台形土器:S=1/8)

は，既存の編年観のなかでも認識されていたことではあるが，東野土居遺跡における編年試案を考案するにあたり抽出した形態と調整の属性変化は，既存の編年観を補完するものと考えられる。そのほか当該期の指標と考えられるものは，鉢形土器のＢ・Ｃ類の出現である。これらの器形はヒビノキⅢ式から認められ，同型式の始まりを示す重要な器形である。特に鉢形土器Ｂ類は古式土師器Ⅱ・Ⅲ期に続く器形とみられ，土佐における古墳時代の始まりを示す資料になると考えられる。

また，東野土居遺跡の特徴としてあげられるものは搬入土器であるが，在地の土器に絶対的な影響を及ぼすまでにはいたっていない。その影響を受けたと考えられる土器も少量認められるが，極めて少数である。このことは，「すなわち高知平野においては，叩き技法が全面的に展開する弥生後期後半以降，古式土師器Ⅰ期までは，いわゆる伝統的第Ⅴ様式の諸段階として理解できる。」(4)とした出原恵三氏の見解に合致する。

当該期の遺跡は当遺跡のほか，物部川流域の深渕遺跡や西野遺跡群，香宗川流域の拝原遺跡，長岡台地上のひびのき遺跡やひびのきサウジ遺跡，小籠遺跡，祈年遺跡など数多くの遺跡が確認されている。各属性の変化も取り上げる資料の数に比例するため，今回試案した編年と前述したそのほかの遺跡から出土した資料を比較し各遺跡の資料をできる限り抽出することにより，正確な編年を組むことができると思われる。当遺跡で試案した編年は東野土居遺跡から出土した資料により組んだものであり，他の遺跡にそのまま当てはめることは難しいと考えられる。筆者の力量不足もありとりとめのない考察となってしまったが，今回の試案がひとつの比較資料となれば幸いである。

註

(1) 出原恵三 2000年「土佐地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社
(2) 岡本健児 1982年「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集　下』
(3) 出原恵三 1990年「第Ⅴ章　考察」『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会
(4) 出原恵三 1996年「第Ⅲ章　考察」『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

(3) 土器棺墓

東野土居遺跡の調査ではⅣＢ－２区において７基の壷棺墓を検出した。県内でもこのように７基もの壷棺墓の出土が確認できたのは，祈年遺跡・伏原遺跡・ひびのきサウジ遺跡に次ぐ多さである。今回出土した壷棺墓の資料と，現在までに報告された高知県内の壷棺墓の資料を集約し，特徴点について考察したい。

弥生時代前期の遺跡で壷棺墓が確認された例は少なく，田村遺跡群Loc16で１基(SK4)確認された。SK4(壷棺墓)は，調査区の中央部西壁近く，SB3の北西3.6ｍの位置で検出された。棺本体の壷と，蓋として使用されたと考えられる壷が確認された。

弥生時代中期でも確認された例は田村遺跡群のみで，田中地区で１基(SK9)確認された。SK9(壷棺墓)では蓋はみられず棺本体の壷のみ出土している。

弥生時代後期から古墳時代初頭では東野土居遺跡を含むいくつかの遺跡で壷棺墓が確認されている。

下ノ坪遺跡ではＨ区の拡張区で検出された(壷棺墓1･2)。出土した２基の壷棺は，ともに蓋として甕が使用されている。東野土居遺跡では調査区の東側(ⅣＢ－2区)で７基(SG1～7)の壷棺墓が出土しており，１基(SG7)は甕が棺本体として使用されている。蓋が確認できたのは４基で，そのう

ち２基(SG1･2)が壷を蓋として使用し，１基(SG4)が高杯と甕を蓋として使用し，１基(SG7)が甕と壷を蓋として使用している。祈年遺跡Ⅶ区では２基の壷棺墓(SG1･2)が出土しているが棺本体のみで蓋として使用されたと思われる土器は出土していない。祈年遺跡Ⅷ区では調査区の中央部に集中して18基の壷棺墓(SG1～18)が出土している。18基全てに棺本体として壷が使用されている。そのうち蓋として使用された土器が確認できたのは11基みられ，壷を使用しているのが５基(SG1･8･9･12･14)，鉢を使用しているのが6基(SG2･4～6･15･17)であった。祈年遺跡Ｘ区では2基の壷棺墓(SG1･2)が出土しており，棺本体のみで蓋として使用された土器はみられない。五軒屋敷遺跡では２基の壷棺墓(SK4･5)が出土しており，そのうちの１基(SK5)は甕を蓋として使用している。深淵遺跡では２基の壷棺墓(壷棺1･2)が出土しており，それぞれ蓋として甕が使用されている。ひびのきサウジ遺跡では９基の壷棺墓(SK8･12･19～24･32)が出土しており，SK8・12は調査区中央部より西側で，他

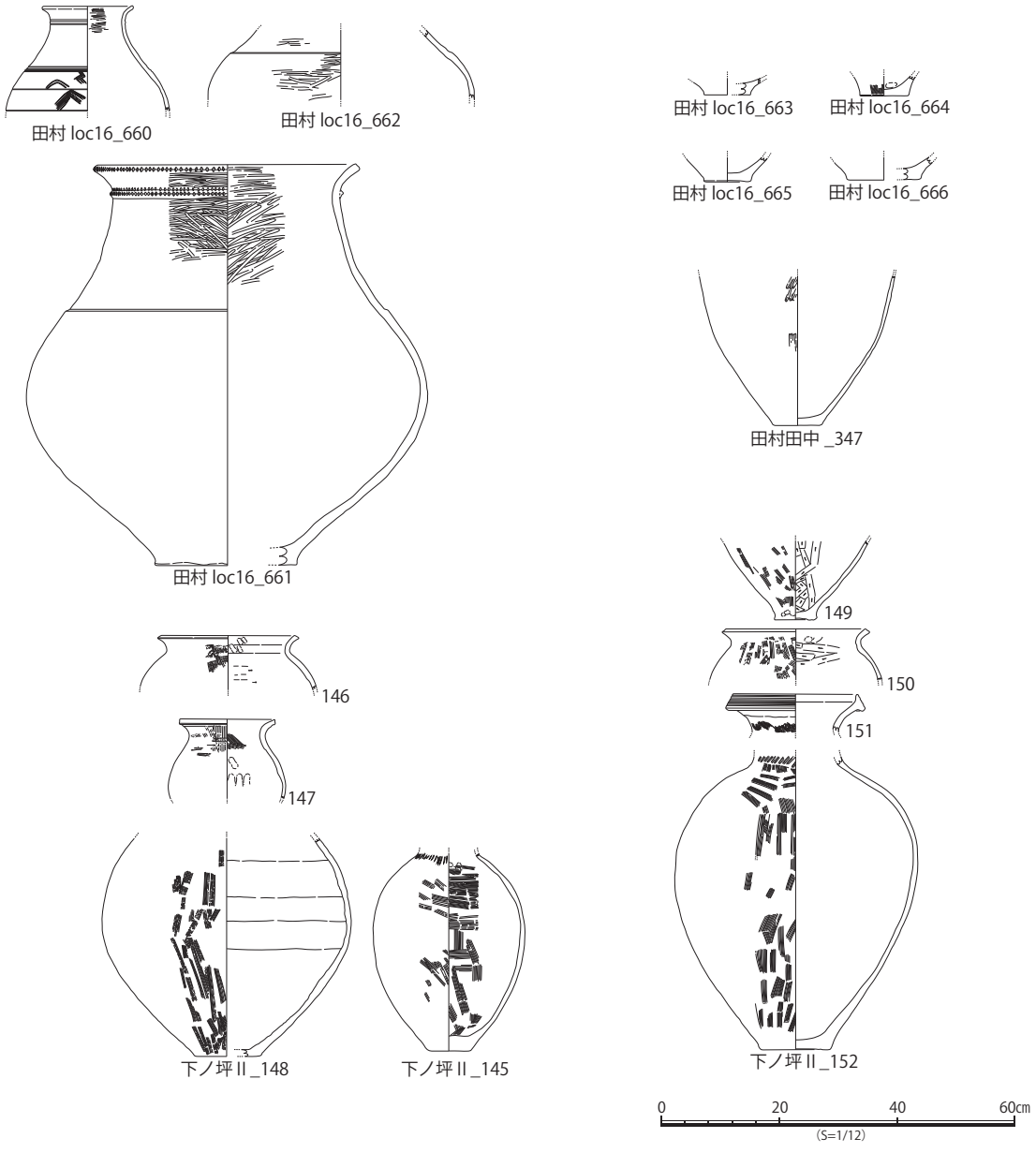


図６－14　土器棺墓1(田村遺跡群･下ノ坪遺跡)

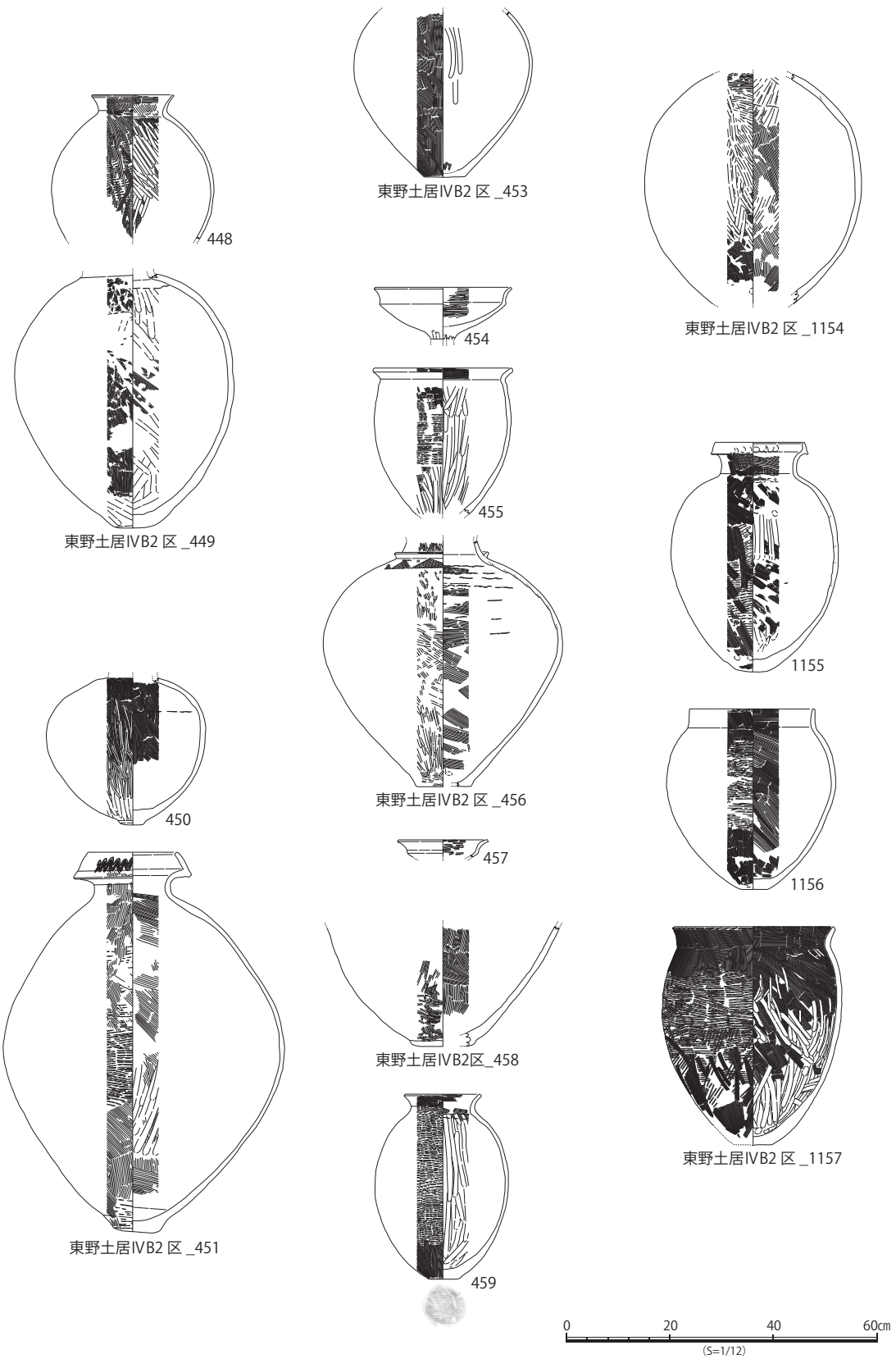


図6－15　土器棺墓2(東野土居遺跡)

図6－16　土器棺墓3(祈年遺跡1)

図6－17　土器棺墓4(祈年遺跡2)

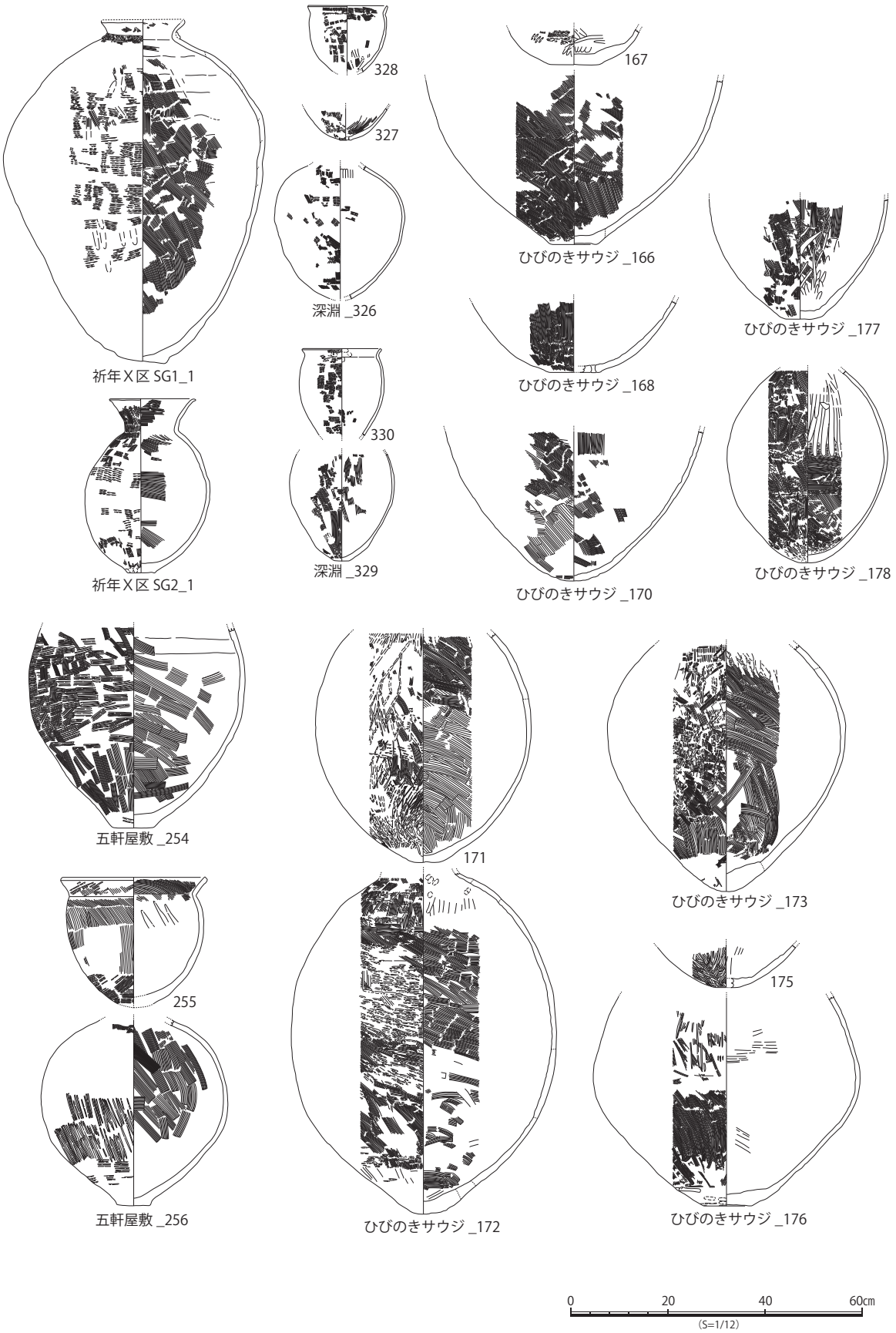


図6－18　土器棺墓5(祈年遺跡3･深渕遺跡･ひびのきサウジ遺跡･五軒屋敷遺跡)

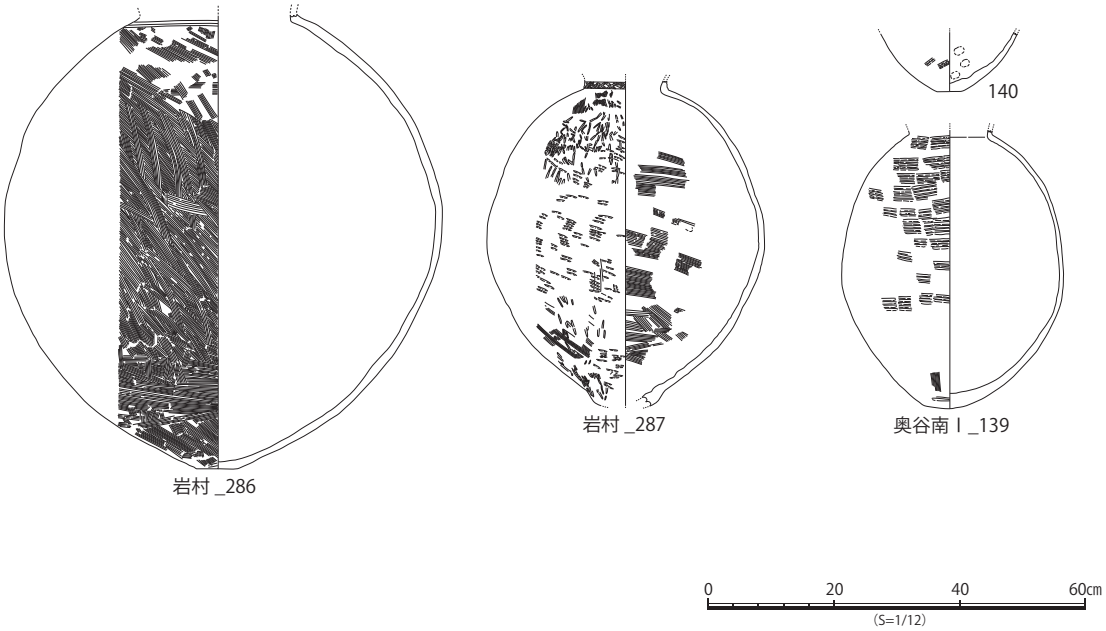


図6－19　土器棺墓6(岩村遺跡・奥谷南遺跡)

7基は北東部で検出された。そのうち3基(SK8･21･20)で蓋として壷が使用されている。岩村遺跡群では2基の壷棺墓(壷棺1･2)が出土しており，そのうちの1基(壷棺1)は高松平野からの搬入品の壷が棺本体として使用されている。蓋として使用された土器は出土していない。奥谷南遺跡では1基(SK4)の壷棺墓が出土しており，蓋として鉢が使用されている。伏原遺跡Ⅴ区では墓域内に14基(SG1～3･5～10･12～16)の壷棺墓が出土しており，1基(SG7)は棺本体に甕が使用されている。14基のうち3基(SG7･9･15)で蓋として壷が使用されていた。東崎遺跡では2基の壷棺墓(壷棺墓1･2)が出土しており，1基(壷棺墓1)は壷の底部を上にして蓋とし，棺本体の開口部と合口にした状態で出土している。

以上，これまでに確認された壷棺墓を列挙してみた。弥生時代前期と中期は資料が少ないが，棺本体として確認されたものは全て壷が使用されている。最も資料の多い弥生時代後期から古墳時代初頭の棺本体に使用されている弥生土器は壷が主体で，甕の使用はわずかにみられる。蓋に使用される土器は壷が比較的多く，次いで甕と鉢が使用され，高杯の使用は東野土居遺跡で検出されたSG4の1例のみである。四国の他3県でも棺本体には壷が主に使用されている。蓋に使用される土器は3県で特徴が分かれ，愛媛県では壷が圧倒的に多く使用される。香川県では鉢が多く，次いで壷が使用される。徳島県では壷と鉢が使用されている(1)。

高知県で棺本体に壷が多く使用される特徴は他3県とも同じであるが，蓋については壷の使用が多いものの，次いで甕と鉢も使用されており，四国4県で特徴がそれぞれ分かれると考えられる。しかし県内の資料数は他県に比べ少ないため，今後報告される資料が加わることによりさらに検討が必要と考えられる。

図6－20　土器棺墓7（伏原遺跡・東崎遺跡）

表6－7　土器棺墓一覧1

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
田村遺跡群 Loc16	SK4	660	壷	15.0	(17.8)	－	－	よく張った胴部から上胴部に段をもち，なめらかに外反する。頸部に2条，段部の上下に1条と2条，上胴部に2条の沈線が施される。内外面にヨコ方向のヘラミガキ	蓋として使用か？
〃	〃	661	〃	22.3	34.4	34.4	12.1	最大径を中心にもつ。よく張った胴部から上胴部に段をもち，口縁部は強く外反する。頸部の貼付突帯と口縁端部に刻目を施す。内外面にヘラミガキ。口縁部はヨコ方向，外面頸部は左上がり，内面は右上がり	棺本体
〃	〃	662	〃	－	(12.0)	45.1	－	よく張りをもつ胴部で，弱い段部がみられる。内外面とも摩耗しているが，ヘラミガキが認められる。	蓋として使用か？
〃	〃	663	〃	－	(2.8)	－	7.9	円盤状の平底から大きく立ち上がる。	
〃	〃	664	甕	－	(3.4)	－	8.3	外面にタテハケ。平底	
〃	〃	665	壷	－	(4.1)	－	7.5	内外面ともにナデ。中央部が凹む平底	
〃	〃	666	〃	－	(3.8)	－	12.5	内外面ともにナデ。平底	
田村遺跡田中地区	SK9	347	〃	－	(25.0)	－	8.2	外面に一部ミガキが認められる。	棺本体
下ノ坪遺跡	壷棺墓1	145	〃	－	(33.5)	25.8	6.9	頸部にハケ原体による列点文を施す。外面はタテハケ・ナデ。内面にはハケ	棺内から出土
〃	〃	146	甕	22.5	(9.3)	－	－	口縁端部を摘み出しヨコ方向に強くナデる。外面はタテハケ。内面にはヨコ方向のヘラケズリ・ナデ	蓋として使用
〃	〃	147	壷	16.0	(14.5)	19.8	－	口縁端部はヨコ方向のナデ。内面口縁部～頸部はヨコハケ，胴部は指ナデ。口縁部内外面ヨコナデ，外面上半部はタテ方向・下半部はヨコ方向のハケ	棺内から出土
〃	〃	148	〃	－	(37.1)	42.0	11.3	外面はタテハケ，内面には粘土帯接合痕	
〃	壷棺墓2	149	甕	－	(13.5)	－	6.4	外面はタテハケ。内面には粗いヘラケズリ	蓋として使用

表6－8　土器棺墓一覧2

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
下ノ坪遺跡	壷棺墓2	150	甕	23.5	(8.8)	－	－	口縁端部を摘み出しヨコ方向に強くナデる。外面はタテハケ。内面には頸部直下までヨコ方向のヘラケズリ	棺内から出土，蓋として使用
〃	〃	151	壷	20.9	(6.6)	－	－	口縁端部を上下に拡張し，5条の沈線化した凹線を巡らせる。頸部にハケ原体によるRの列点文を施す。外面頸部ヨコナデ。内面は剥離	棺本体152の口縁部
〃	〃	152	〃	－	(49.7)	41.0	11.4	頸部下端にハケ原体による列点文を施す。外面はタテハケ。底部に葉脈痕	棺本体
東野土居遺跡ⅣB－2区	SG1	448	〃	15.4	(28.2)	31.4	－	口縁部内外面にハケ，内面胴部にハケ後ナデ，外面はタタキ後ハケ	蓋として使用
〃	〃	449	〃	－	(49.1)	42.4	8.2	内面はハケ後ナデ調整。外面タタキ後ハケ，下端にナデ	棺本体
〃	SG2	450	〃	－	(28.5)	30.7	4.7	内面上半部にハケ，下半部はナデ。外面は上半部にハケ後ヘラミガキ，下半部はナデ	蓋として使用
〃	〃	451	〃	17.2	73.6	54.4	9.1	複合口縁壷。口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ。内面胴部にハケ，外面にタタキ	棺本体
〃	SG3	453	〃	－	(32.1)	34.4	8.0	内面胴部にハケ後ナデ，外面にタタキ後ハケ，底部にナデ	棺本体
〃	SG4	454	高杯	26.2	10.2	－	－	器面摩耗。内面全体にヘラミガキ，外面口縁部にヨコナデ	蓋として使用
〃	〃	455	甕	26.4	(28.3)	26.5	－	内面口縁部にハケ，胴部はナデ。外面口縁部にヨコナデ，胴部はタタキ，胴上端部にハケ，下半部にはナデ	蓋として使用
〃	〃	456	壷	－	(47.6)	46.3	10.8	外面胴上端部に断面長方形の突帯を貼付，端部に半竹管状の刺突文，その下方に鋸歯文。内面頸部にナデ，胴部にハケ，外面全体に丁寧なヘラミガキ	棺本体
〃	〃	457	高杯	17.1	(3.4)	－	－	器面摩耗。口縁端部にヨコナデ，内面にヘラミガキ	
〃	SG5	458	壷	－	(23.3)	－	12.0	内面にハケ，外面にハケ後ヘラミガキ	棺本体

表6－9　土器棺墓一覧3

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
東野土居遺跡ⅣB－2区	SG5	459	甕	14.3	35.7	25.8	6.0	口縁部内外面にハケ，内面胴部にナデ，外面にタタキ，下端にハケ調整を加える。	
〃	SG6	1154	壷	－	(44.5)	42.0	－	内面上部ナデ，中央部から下部はハケ・ナデ。外面上部から中央部ミガキ，下部はタタキ後ハケ	棺本体
〃	SG7	1155	〃	17.1	44.4	32.5	5.9	複合口縁部受口状部分から口縁端部までナデ，頸部内面は粗いヨコハケ，外面は粗いタテハケ。胴部内面はハケ・ナデ，粘土帯接合部を確認。外面胴上部はタタキをハケで消し，中央部から下部はタタキ後ハケ。底部は粗いハケでタタキを消す。煤付着	蓋として使用
〃	〃	1156	甕	23.3	34.9	32.7	5.0	内面口縁部ヨコハケ，口縁端部はナデにより面をなす。胴部２種類のハケ，内底部ナデ。外面口縁部タタキ後ハケ，胴上部～中央部タタキ，下部タタキ後ハケ，底部は成形時のタタキ目が残る平底	蓋として使用
〃	〃	1157	〃	30.7	42.3	34.8	7.4	内面口縁部はハケとナデ，端部ヨコナデ，胴上部から中央部にハケとナデ，中央部から底部はナデ。外面は口縁端部直下にタタキ，肩部までハケ，胴上部にタタキ後ハケ，中央部タタキ，下部タタキ後ハケとタタキ原体によるナデ，底部付近はハケ。底部摩耗	棺本体
祈年遺跡Ⅶ区	SG1		壷	14.0	32.3	24.1	5.4	二重口縁壷。受口状を呈し，底部は丸みを帯びた平底。外面はタタキ・ナデ。内面口縁部はハケ，体部にはナデ・ハケ	棺本体 ST2に伴うか不明
〃	SG2		〃	－	(54.5)	57.9	－	外面はタタキ・ナデ・ミガキ。内面は粗いハケ	棺本体，ST1ベッド際
祈年遺跡Ⅷ区	SG1	1	〃	－	(42.6)	60.5	10.3	外面は上半部タタキ・ハケ・ナデ，下半部ハケ・一部タタキ。内面は粗いハケ・ナデ。平底	棺本体
〃	〃	2	〃	－	(20.4)	43.1	7.8	外面はハケ・ナデ。内面下半部にはハケ。平底	蓋として使用か？
〃	SG2	1	〃	－	(47.0)	39.1	8.4	外面はタタキ・ハケ。内面上半部強いナデ・ハケ。	棺本体
〃	〃	2	鉢	26.2	(13.7)	27.7	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は面をなす。外面口縁部ナデ・ハケ，胴部はタタキ・ハケ。内面にはハケ	蓋として使用
〃	〃	3	壷	－	(16.9)	27.8	－	外面はタタキ・ハケ・ナデ。内面上半部には強いナデ，下半部ヘラケズリ	棺本体の下から出土
〃	SG3	1	〃	－	(32.0)	55.8	－	外面はタタキ・ハケ，下半部にはミガキ。内面ハケ・ヘラケズリ	棺本体

表6－10　土器棺墓一覧4

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
祈年遺跡Ⅷ区	SG4	1	壷	－	(43.0)	36.5	8.2	外面はタタキ・ハケ。内面ハケ，上半部には指頭。平底	棺本体
〃	〃	2	鉢	31.0	(22.0)	－	7.4	口縁部は緩やかに外反し，端部は面をなす。片口1ヵ所。外面は幅広のタタキ，内面にはハケ。平底	蓋として使用
〃	SG5	1	壷	－	(53.5)	45.0	11.1	外面はタタキ・ハケ，下半部にはミガキ。内面ケズリ・ハケ	棺本体
〃	〃	2	鉢	29.6	21.0	－	6.6	口縁部は緩やかに外反し，端部は面をなす。片口1ヵ所。外面口縁部と上半部はハケ，中央部にはタタキ・ハケ，下半部はハケ。内面にはハケ。平底	蓋として使用
〃	SG6	1	壷	23.0	58.8	44.0	8.4	阿波搬入品。複合口縁壷。山形鋸歯文が1ヵ所認められる口縁部は直立し，端部は面をなす。頸部には刻目突帯を有する。外面口縁部はナデ，頸部はミガキ，胴部はハケ・ミガキ。内面口縁部はハケ，胴上半部には指頭・ハケ，下半部はハケ。平底	棺本体，打ち欠いた口縁部を蓋2の支えに使用
〃	〃	2	鉢	36.6	(18.7)	－	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はわずかに拡張し面をなす。外面口縁部ナデ，胴部はタタキ・ナデ。内面口縁部はハケ，上半部には粗いハケ，下半部にはヘラケズリ	蓋として使用
〃	SG7	1	壷	－	(35.0)	59.7	－	外面はハケ・ミガキ。内面にはハケ	棺本体
〃	SG8	1	〃	－	(49.0)	41.6	9.2	外面はハケ・ミガキ，肩部に放射線状のミガキ。内面にはハケ	棺本体
〃	〃	2	〃	－	(37.0)	31.7	5.6	外面は摩耗，タタキ・ハケ。内面上半部にはナデ・ハケ，下半部はハケ	蓋として使用
〃	SG9	1	〃	－	(40.5)	33.0	6.5	外面は上半部タタキ・ハケ，下半部ハケ・ミガキ。内面はハケ。平底	棺本体
〃	〃	2	〃	－	(25.0)	46.1	－	外面は上半部ハケ・ミガキ，下半部タタキ・ハケ・ミガキ。内面はハケ	打ち欠いたもで，棺本体を入り子状に被せる。
〃	SG10	1	〃	－	(28.2)	29.2	4.4	外面はタタキ・ハケ。内面胴中央部にはハケ，下半部はヘラケズリ。平底	棺本体
〃	SG11	1	〃	－	(43.9)	38.8	－	外面はタタキ・ハケ。内面にはナデ・ハケ	棺本体

表6－11　土器棺墓一覧5

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
祈年遺跡Ⅷ区	SG12	1	壷	－	(41.2)	36.1	11.6	外面はタタキ・ハケ・ミガキ。内面にはハケ・ナデ	棺本体
〃	〃	2	〃	－	(14.7)	－	－	外面はタタキ・ハケ・ミガキ。内面にはハケ・ナデ	蓋として使用
〃	SG13	1	〃	－	(22.6)	－	10.0	外面はタタキ・ハケ。内面にはハケ，大部分は剥落。平底	棺本体
〃	SG14	1	〃	－	(56.5)	47.3	－	外面はタタキ後上半部にミガキ・一部ハケ，下半部にハケ・一部にミガキ。内面剥落，上半部にナデ・ハケ，下半部はハケ	棺本体
〃	〃	2	〃	19.7	(9.3)	－	－	複合口縁壷。口縁部外面に櫛描波状文2条，頸部には列点文1条。内外面にハケ。内面の一部に指頭圧痕	1と同一個体か？
〃	〃	3	〃	15.6	34.4	28.6	－	直口壷。外面口縁部にハケ，胴部はタタキ，下半部にはハケ。内面はハケ・ナデ。丸底	蓋として使用
〃	〃	4	〃	－	(24.3)	30.0	－	外面はタタキ，内面にはハケ・ナデ	支えに使用か？
〃	SG15	1	〃	－	(37.0)	36.2	8.0	外面はわずかにタタキ痕・タテハケ。内面上半部には指頭圧痕，中央部以下はハケ	棺本体
〃	〃	2	鉢	31.6	(14.4)	－	－	口縁部はタタキのばし，短く外傾，端部は面をなす。外面はタタキ，内面にはハケ	蓋として使用
〃	〃	3	壷	－	(13.9)	－	－	外面はわずかにタタキ・ハケ。内面にはハケ・ナデ	支えに使用か？
〃	SG16	1	〃	－	(38.5)	33.5	5.0	外面はタタキ・ハケ，内面にはハケ	棺本体
〃	SG17	1	〃	－	(63.9)	65.2	13.2	外面胴上半部はハケ・ミガキ，下半部はハケ。内面剥離，ハケ。平底	棺本体
〃	〃	2	鉢	42.6	(22.8)	－	－	口縁部はタタキ伸ばし，短く外傾，端部は面をなす。外面はやや剥落，タタキ・ハケ。内面にはハケ	蓋として使用

表6－12　土器棺墓一覧6

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
祈年遺跡Ⅷ区	SG18	1	壷	－	(51.7)	52.1	13.1	外面はタタキ・ハケ。内面にはナデ・ハケ，底部に強いナデ痕	棺本体
〃	〃	2	〃	23.3	(14.1)	－	－	複合口縁。口縁部は内湾気味，端部は面をなし頸部は強く外反する。外面はハケ・ミガキ，内面にはハケ	1と同一個体か？
祈年遺跡Ⅹ区	SG1	－	〃	(17.0)	(71.0)	53.2	10.2	頸部に刻目突帯。外面はタタキ・ハケ。内面はハケ。平底	棺本体
〃	SG2	－	〃	16.7	35.9	25.6	5.5	広口壷。外面口縁部はハケ，胴部タタキ・ハケ。内面ハケ。平底	棺本体
五軒屋敷遺跡	SK4	254	〃	－	(41.2)	44.4	8.4	外面タタキ後ハケ。内面ハケ後粗いナデ	棺本体
〃	SK5	255	甕	29.2	(26.2)	28.0	－	外面タタキ後タテ方向の粗いハケ。内面口頸部は右下がりのハケ，胴部は指ナデ	蓋として使用
〃	〃	256	壷	－	(38.0)	38.2	7.4	外面タタキ後ハケ，胴部には右下がり方向の細長いヘラミガキ。内面はハケ後粗いナデ	棺本体，ヒビノキⅡ式
深淵遺跡	壷棺1	326	〃	－	(55.2)	53.8	－	外面はタタキ後ハケ後ナデ	棺本体
〃	〃	327	鉢	－	(13.2)	－	4.6	外面はタタキ後ハケ。内面は強いナデ	棺本体を固定するように分散して置かれていた。
〃	〃	328	甕	32.2	(27.6)	31.8	－	口縁部外面はタテ方向，内面はヨコ方向のハケ。外面胴部はタタキ後ハケ，内面はハケ，中央部はナデ消す。	蓋として使用
〃	壷棺2	329	壷	－	(44.4)	43.2	6.0	外面胴部タタキ後2種類のハケ。内面は粗い原体によるハケ	棺本体
〃	〃	330	甕	31.6	(36.2)	35.2	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。外面は口縁部までタタキを施し，内面は器面が摩耗著しいが一部ハケが認められる。	蓋として使用か？
ひびのきサウジ遺跡	SK8	166	壷	－	(34.8)	－	10.0	外面胴部タタキ後右下がりのハケ。内面胴部右下がりのハケ	棺本体

表6－13　土器棺墓一覧7

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
ひびのきサウジ遺跡	SK8	167	壷	－	(7.6)	－	11.0	外面胴部はタタキ後ハケ後ヘラミガキ，底部はナデ。内面は指頭による強いナデ	蓋として使用
〃	SK12	168	〃	－	(14.9)	－	10.4	外面胴部は丁寧なタテ方向のハケ。内面は器面摩耗著しい。底部は平底，焼成後1孔を穿つ。	棺本体
〃	SK19	169	〃	13.8	(8.2)	－	－	二重口縁壷。外反して立ち上がり稜をもって内傾，口縁端部は外反し，口唇部は面をなしわずかに凹む。口縁端部はヨコ方向のナデ，外面は粗いハケ原体によるハケ。内面は右下がりのハケ，稜部分はヨコ方向のナデ	壷棺に伴うものか不明，SK32出土土器と接合
〃	〃	170	壷？	－	(31.0)	－	5.6	外面胴部はタタキ後ハケ，胴部下端はナデで仕上げる。内面にはハケ。わずかに平底が残る。	棺本体
〃	SK21	171	壷	－	(47.3)	44.3	5.6	外面胴部はタタキ後ハケ後ヘラミガキ。内面上部は細いハケ原体による調整，一部指頭による強いナデ。下半部は粗いハケ原体による調整	蓋として使用
〃	〃	172	〃	－	(70.3)	54.5	5.8	外面胴部はタタキ後ハケ，端部より下はナデ。内面肩部と底部には指頭による強いナデ，胴部はハケ	棺本体
〃	SK22	173	〃	－	(51.0)	49.0	2.4	外面胴中央部～上部はタタキ後ハケ後ナデ後ヘラミガキ，下部はタタキ後ハケ，下端はハケ後ナデ。内面肩部は指頭による強いナデ，胴部はハケ，底部はナデ・指頭圧痕	棺本体
〃	SK20	175	〃	－	(8.9)	－	5.4	外面はハケ後丁寧なヘラミガキ，内面摩耗。平底	蓋として使用
〃	〃	176	〃	－	(43.0)	54.8	9.8	外面胴上半部は右下がりのハケ後タテ方向の粗いヘラミガキ，下半部はハケ。内面上半部は指頭によるヨコ方向の強いナデ，下半部はハケ後ナデ	棺本体
〃	SK23	178	〃	－	(39.7)	33.0	4.0	外面胴部はタタキ後ハケ，下半部はヘラミガキで仕上げる。内面胴上半部はハケ後指頭による強いナデ，下半部はハケ後一部ナデ	棺本体
〃	SK24	177	〃	－	(25.2)	－	6.0	外面胴部はタタキ後ハケ，底部はナデ。内面はハケ後指頭による強いナデ	棺本体
岩村遺跡群	壷棺1	286	〃	－	(75.6)	73.2	7.2	内外面に粗いハケ	棺本体，高松平野からの搬入品
〃	壷棺2	287	〃	－	(54.2)	46.2	8.0	頸部に斜格子状の刻目を施す突帯を貼付。外面胴上部ハケ・ヘラミガキ，胴中部～下部はタタキ・ハケ。内面はハケ	棺本体

表6－14　土器棺墓一覧8

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
奥谷南遺跡	SK4	139	壷	－	(44.2)	35.2	6.0	最大径が胴中部に来る卵形の器形。外面全体にタタキ，底部付近にハケが認められ，わずかに平底を残す。ヒビノキⅡ式の特徴をもつ。	棺本体
〃	〃	140	鉢	－	(9.2)	－	4.8	器面摩耗。外面にタタキ，内面には指頭圧痕。底部はわずかに平底を残す。ヒビノキⅡ式の特徴をもつ。	蓋として使用
伏原遺跡	SG1	719	壷	－	(41.0)	39.8	－	外面はミガキ，内面にはナデ	棺本体
〃	SG2	720	〃	－	－	－	－	器面摩耗。外面はタタキ後ナデ	棺本体？
〃	SG3	721	〃	－	(23.3)	34.2	6.0	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	棺本体
〃	SG5	722	〃	－	(30.3)	33.2	9.5	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体
〃	SG6	723	〃	－	(24.9)	37.2	－	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体
〃	SG7	724	〃	21.0	(7.1)	－	－	口唇部には斜格子文が施される。	蓋？
〃	〃	725	甕	－	(23.2)	20.8	5.0	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体？
〃	SG8	726	壷	－	(32.0)	29.8	－	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体
〃	SG9	727	鉢	22.0	(10.7)	－	－	深めの体部から口縁部は外反する。外面はタタキ後ナデ。内面はハケ	
〃	〃	728	壷	－	(20.4)	－	－	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	蓋として使用
〃	〃	729	〃	－	(37.2)	34.2	8.0	体部は球形を呈し，外面はタタキ後ミガキ。内面にはハケ。下半部に穿孔が認められる。	棺本体

表6－15　土器棺墓一覧9

遺跡名	遺構名	図版番号	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
伏原遺跡	SG9	730	壷	－	(17.4)	－	6.4	外面はタタキ後ハケ・ミガキ。内面にはハケ・ナデ	蓋として使用
〃	SG10	731	〃	－	(67.4)	53.6	5.0	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	棺本体
〃	SG12	732	〃	－	(9.8)	－	－	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	棺本体？
〃	SG13	733	〃	－	(46.0)	45.0	5.0	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体
〃	SG14	734	〃	－	(22.4)	35.6	10.0	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	棺本体
〃	SG15	735	〃	－	(18.9)	－	－	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	蓋として使用
〃	〃	736	〃	－	(61.1)	50.0	8.5	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ	棺本体
〃	SG16	737	〃	－	(22.0)	30.0	7.2	外面はタタキ後ハケ。内面にはハケ後ナデ	棺本体
東崎遺跡	壷棺墓1	395	〃	－	(29.8)	26.2	4.2	外面はタタキ・ハケ・ナデ。内面にはハケ・ナデ	棺本体
〃	〃	396	〃	－	(19.6)	21.1	3.4	外面はタタキ・ハケ・ナデ。内面にはハケ・ナデ	底部を上にして蓋とし，395の開口部と合口
〃	壷棺墓2	397	〃	12.8	35.3	26.9	4.8	外面は丁寧なハケ・ナデ。内面にはハケ・ナデ・指頭圧痕	棺本体

参考文献

1986年『田村遺跡群 第2分冊』高知県教育委員会
1986年『田村遺跡群田中地区』高知県教育委員会

1988年『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会
2012年『祈年遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2012年『祈年遺跡Ⅳ』(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2012年『祈年遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
1984年『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会
1989年『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会
1990年『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会
1999年『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会
1999年『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2010年『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
1991年『東崎遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団
2002年 山本純代「高知平野の弥生墓制」『犬飼徹夫先生古稀記念論集』

註

⑴ 2005年 角南聡一郎「瀬戸内沿岸弥生時代土器棺葬の展開」『季刊考古学 第92号』雄山閣

2. 古墳時代

⑴ 遺構

古墳時代の遺構は調査対象区域の東部のみで確認されており，29軒あまりの竪穴建物跡など古墳時代後期に属する遺構が検出されているが，弥生時代と比べ遺構密度は低い。また，東野土居遺跡だけではなく高知県において全般的にいえることだが，古墳時代中期の遺構は確認されておらず，東野土居遺跡の古墳時代における空白期となっている。厳密にいえば古墳時代前期も存在しているが，本報告書では弥生時代に続く時期として「1. 弥生時代」で記述している。

確認された多くの竪穴建物跡は削平を受けており残存状態はあまりよくなかったが，竪穴建物跡に伴うカマド跡が確認されたものはST3・6・16・38・40・44・45・49・63の9軒である。いずれも竪穴建物跡内の北側で検出されており，明確なカマドのプランが確認されたものはST3・6であった。ST3のカマド跡は竪穴建物跡内の北側ほぼ中央に位置し，焚口幅15㎝，焚口から奥壁までの距離は47～63㎝を測る。また，ST6のカマド跡は竪穴建物跡北西部に位置し，平面形は馬蹄形を呈する。焚口幅は67㎝，焚口から奥壁までの距離は64㎝を測る。ST3で確認されたカマド跡では，奥壁側に炎焼部が二股状になっており，煮沸具を2個並列して使用した可能性も考えられる。いずれのカマド跡も煙道は確認されず，削平されたとみられる。

当該期のカマド跡は土佐国衙跡[1]や小籠遺跡[2]，下ノ坪遺跡[3]，ひびのきサウジ遺跡[4]，祈年遺跡[5]，伏原遺跡[6]などで確認されているが，ほとんどが竪穴建物跡の北壁で確認されている。当遺跡で確認されているカマド跡も設置場所についてはこれまでの例に沿っているが，カマドの構築に用いた石材は認められなかった。しかし，竪穴建物を放棄した段階で抜き取った可能性も否定できないため，詳細は判然としない。

⑵ 遺物

確認されている遺物は土師器の甕・甑や須恵器の杯蓋・杯身・高杯・甕，石製品の紡錘車などで，出土している須恵器からみて6世紀後半から7世紀前半と考えられる。須恵器杯蓋や杯身で時期を比定できる竪穴建物跡のうち，6世紀後半に属するものはST20・23・38・52・53・55・58・60・61・

63・87で，7世紀前半に属するものはST6・24・49である。当該期の遺物は全体的に出土量が少なく，竪穴建物跡からもまとまった量の遺物は出土していないが，ST58から出土している滑石製紡錘車(1178)は，特筆すべき遺物である。

この滑石製紡錘車はいわゆる鋸歯文紡錘車で，古墳時代中期以降に出現する特徴的な石製模造品である。他県では古墳の墳丘や周溝に供献される例や小規模な横穴式石室内に副葬される例が多いことから，このものには祭祀具としての概念が存在していたと想定されている。また，鋸歯文は弥生時代の銅鐸や祭祀用土器などに用いられ，本報告に掲載したSG4の土器棺墓本体(456)にも施されている文様である。その性格には結界的要素があると考えられているが，その意味するところはいまだ明らかになっていない。しかし，貯蔵具である壷に鋸歯文を施すことによってその性格が土器棺に変質することから，生産具である紡錘車に鋸歯文が施されることによって仮器としての使用が想定される。また，この製品を所有する階層は地域ごとの家父長層と考えられている(7)が，同様のものが竪穴建物跡の可能性も指摘されている伏原遺跡SK77から出土している。伏原遺跡から出土したものは鋸歯文内が斜格子となっており，いわゆる画一化された鋸歯文紡錘車であるが，本遺跡から出土したものは鋸歯文内に平行斜線を施し，伏原遺跡出土例とは異なっている。この差異が何を意味するものか，この2例をもって断定することは難しいが，周辺に多くの後期古墳が築造され，規模や副葬品などから盟主的な古墳と位置付けられる伏原大塚古墳が存在する伏原遺跡と周辺に古墳が認められない本遺跡に居住した集団の違いによるものではなかろうか。

註

(1) 1981年『土佐国衙跡発掘調査報告書第2集　内裏地区の調査』高知県教育委員会
　1982年『土佐国衙跡発掘調査報告書第3集　府中地区の調査』高知県教育委員会
　1984年『土佐国衙跡発掘調査報告書第5集　堂ヶ内・クゲ地区の調査』高知県教育委員会
(2) 1996年『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター
(3) 1997年『下ノ坪遺跡Ⅰ』高知県野市町教育委員会
(4) 1990年『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会
(5) 2012年『祈年遺跡Ⅳ』(公財)高知県埋蔵文化財センター
(6) 2010年『伏原遺跡Ⅰ』(財)高知県埋蔵文化財センター
　2010年『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター
(7) 2006年 中山学「滑石製鋸歯文紡錘車消息の意義」『季刊考古学第96号』雄山閣

3. 古代

東野土居遺跡において検出された古代に位置付けられる主な遺構は，掘立柱建物跡，土坑，溝跡，柱穴などである。遺構はⅢ区からⅣ区にかけて検出されており(表6－16参照)，弥生時代から古墳時代，中世・近世に比較すると密度は低いが東野土居遺跡の性格を考えていくうえで貴重な資料である。ここでは主な遺構・遺物を抽出し，その概要をまとめる。また，周辺の遺跡と比較し，遺跡の様相を考えてみたい。

(1) 東野土居遺跡において検出された古代の遺構(付図5)

① 建物跡

調査で確認された掘立柱建物跡は総数21棟にのぼる。その殆どは土居地区にあたるⅢ区とⅣ区に

位置している。柱穴の掘方は方形が多い。

ⅰ Ⅲ区

3棟の掘立柱建物跡を確認している。SB59・60・89であるが，出土遺物が乏しく明確な時期は不明である。

規模はSB59が桁行2間，梁行2間の総柱を呈すると考えられる南北棟建物跡である。掘方は円形から隅丸方形を呈する。SB60は北側柱と考えられる2間分を確認した。掘方は隅丸方形を呈する。SB89は桁行3間，梁行3間の南北棟建物跡で，掘方は隅丸方形，円形を呈する。棟方向はともにN－4°－Eである。

表6－16　東野土居遺跡古代建物跡一覧

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	備考
			桁行×梁行（間）	桁行×梁行（m）	桁行（m）	梁行（m）			
東野土居遺跡	SB59	ⅢB－2区	2×2	5.2×3.85	1.7～2.2m	2.5	N－4°－E	隅丸方形・円形	総柱建物跡
〃	SB60	〃	（2×－）	4.95×－	2.15～2.8	－	－	隅丸方形	
〃	SB89	ⅢB－1区	3×3	4.9×3.9	1.5～1.7	1.1～1.4	N－4°－E	隅丸方形・円形	南北棟建物跡
〃	SB3	ⅣA区	3×2	4.5×3.45	1.5	1.65～1.8	N－0.5°－W	不整隅丸方形	〃
〃	SB4	〃	3×3	4.95×3.9	1.65	1.2～1.35	N－1°－W	隅丸方形	〃
〃	SB5	〃	（2×1）	－	1.65	1.35	N－89.5°－E	不整隅丸方形	
〃	SB6	〃	（3×1）	－	1.35～1.65	1.35	N－82.5°－W	〃	東西棟建物跡
〃	SB7	〃	3×2	4.95×4.2	1.65	2.1	N－5°－W	布堀状	南北棟建物跡
〃	SB1	ⅣB－1区	（2×1）	（2.9×2.5）	（1.4～1.5）	2.4	－	円形	
〃	SB2	〃	（2×1）	（2.9×1.75）	2.35～2.90	1.75	－	円形・楕円形	
〃	SB4	〃	4×2	7.0×4.6	1.5～2.2	2.2～2.4	N－11°－E	円形	南北棟建物跡
〃	SB6	〃	3×2	5.3×3.2	1.6～1.9	1.5～1.7	N－76°－E	円形・隅丸方形	東西棟建物跡
〃	SB7	〃	2×2	3.85×2.95	1.65～2.1	1.3～0.65	N－13°－E	〃	総柱建物跡
〃	SB8	〃	3×2	4.3×3.9	1.3～1.6	1.95	N－83°－W	〃	〃
〃	SB1	ⅣB－2区	3×3	5.7×5.1	1.80～1.95	1.65～1.80	真北に沿う	楕円形 隅丸方形	南北棟建物跡
〃	SB2	〃	4×3	7.8×4.5	1.65～2.10	1.50	N－1°－E	不整隅丸方形	総柱建物跡
〃	SB3	〃	〃	9.0×6.0	2.10～2.40	1.95～2.10	N－0.5°－E	〃	〃
〃	SB1	ⅣC区	3×3	6.5×4.8	2.15～2.2	1.5～1.7	N－4.5°－W	方形・楕円形	南北棟建物跡
〃	SB2	〃	（3×2）	（4.6×3.7）	1.45～1.65	1.6～1.9	N－0.5°－W	〃	〃
〃	SB6	〃	2×1	5.1×3.35	2.5～2.6	3.35	N－1°－W	方形・隅丸方形	〃
〃	SB8	〃	2×－	－	2.4～2.6	－	－	〃	

ⅱ　Ⅳ区

16棟の掘立柱建物跡を確認している。ⅣA区SB3～7，ⅣB－1区SB1･2･4～7，ⅣB－2区SB1～3，ⅣC区SB1・2・6である。

規模はⅣA区SB3が桁行3間，梁行2間の南北棟建物跡で，掘方は不整隅丸方形である。SB4は桁行3間，梁行3間の南北棟建物跡で隅丸方形の掘方をもつ。ともに棟方向はN－0.5～1°－Wである。SB5は北側柱2間，西側柱1間を確認している。柱穴の掘方は不整隅丸方形で他の建物跡の掘方と比較すると大型である。SB6は北側柱を3間，西側柱1間，東側柱1間を確認している。掘方は不整隅丸方形である。これらSB5・6は調査区外に続くと考えられるため規模は不明である。SB7は桁行3間，梁行2間の南北棟建物跡で掘方は布掘り状を呈する。棟方向はN－5°－Wである。

ⅣB－1区のSB1は西側柱2間，南側柱1間を確認している。掘方は円形を呈する。SB2は北側柱2間，東西側柱1間を確認している。掘方は円形から楕円形である。SB4は梁行4間，桁行2間の南北棟建物跡で掘方は円形を呈し，棟方向はN－11°－Eである。SB6は梁行3間，桁行2間の東西棟建物跡で，掘方は円形から隅丸方形を呈する。棟方向はN－76°－Eである。SB7は桁行2間，梁行2間の南北棟総柱建物跡である。掘方は円形から隅丸方形で，棟方向はN－13°－Eである。SB8は桁行3間，梁行2間の総柱建物跡である。掘方は円形から隅丸方形を呈し，棟方向はN－83°－Wである。SB9は西側柱2間，南側柱1間を確認しており，南北棟建物跡と考えられる。掘方は円形から楕円形である。

ⅣB－2区のSB1は道路を隔てて確認された建物跡で桁行3間×梁行3間と推定される。掘方は隅丸方形で，軸方向はほぼ真北に沿っている。SB2は桁行4間，梁行3間の南北棟総柱建物跡である。東野土居遺跡で確認された建物跡の中では大型の建物跡であり，掘方は不整隅丸方形で，棟方向は

図6－21　東野土居遺跡周辺の古代遺跡

N－1°－Eである。SB3はこのSB2の南側において検出されており，桁行4間，梁行3間の総柱建物跡と推定される。掘方は不整隅丸方形を呈し，当遺跡の中では最も大型の建物跡である。棟方向はN－0.5°－Eである。この2棟(SB2･3)はほぼ同規格をもち，南北に直列することから同時期に機能した建物であったと考えられる。

ⅣC区は当遺跡の東端にあたる調査区である。SB1は桁行3間，梁行3間の南北棟建物跡で，北西隅部の柱穴は確認できていない。掘方は方形から楕円形を呈し，棟方向はN－4.5°－Wである。SB2はSB1の南方向において検出された建物跡で，北側柱3間，東側柱2間，西側柱2間を確認した。まだ調査区外にのびると考えられる。掘方は方形から楕円形を呈し，棟方向はN－0.5°－Wである。これらはともに出土遺物が乏しく明確な時期が不明であるが，包含層や周辺遺構出土の遺物から考えると，概ね8世紀後半から11世紀代に機能したと考えられる。

建物跡の規模は調査区外に続くものを除くと，2間×1間が1棟，2間×2間が1棟，3間×2間が4棟，3間×3間が5棟，4間×2間が1棟，4間×3間が2棟みられる。3間×3間と3間×2間の規模のものが約半数を占めている。また4間×3間の建物跡はともに総柱建物跡で棟方向(N－0.5～1°－E)を同じくし，直列した配置がなされている。

表6－17　下ノ坪遺跡建物跡一覧

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	主な掘方	備考
			桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)	梁行(m)	桁行(m)			
下ノ坪遺跡	SB8	H区	(2×2)	(4.7×4.2)	1.8	2.1	N－4°－W	円形	総柱建物跡
〃	SB9	〃	7×3	17.5×6.6	1.8	2.4	N－12°－E	方形	南北棟建物跡 SB20と並ぶ最大建物跡
〃	SB10	〃	4×3	8.2×5.4	1.47	1.95	N－14°－E	方形 不整方形	南北棟建物跡 SB20に切られる。礎盤石使用
〃	SB11	〃	3×2	8.5×5.4	2.25	2.25～2.7	N－78°－W	方形 長方形	東西棟建物跡 SB19に切られる。
〃	SB12	〃	4×2	10.2×5.6	2.0～2.4	2.4	N－75°－W	方形	東西棟建物跡
〃	SB13	〃	6×3	14.8×6.1	1.8	2.2～2.6	N－17°－E	〃	〃
〃	SB14	〃	(2×3)	4.1×5.1	1.2～1.5	1.0	N－15°－E	方形 円形	〃
〃	SB15	〃	桁行6	12.15×4.6	－	2.03	N－15°－E	方形 隅丸方形	〃
〃	SB16	〃	(2×1)	(4.4×2.7)	1.7	1.95～2.1	N－75°－E	方形	
〃	SB17	〃	3×3	6.1×5.3	1.3～1.5	1.65～1.8	N－12°－E	〃	総柱建物跡
〃	SB18	〃	5×3	10.7×6.2	1.8	1.86～2.25	N－12°－E	〃	南北棟建物跡
〃	SB19	〃	4×3	10.2×7.1	2.0	2.2～2.4	N－77°－E	〃	総柱建物跡 SB11を切る。
〃	SB20	〃	7×3	18.0×6.6	1.6～2.0	1.8～2.9	N－13°－E	〃	最大建物跡 西側庇付。P2より八稜鏡出土
〃	SB21	〃	5×2	13.8×6.9	2.8～2.9	2.4～2.8	N－13°－E	〃	総柱建物跡
〃	SB22	〃	5×2	12.4×6.3	2.6	2.2	N－76°－W	〃	東西棟建物跡

掘方をみてみると方形(隅丸方形･不整隅丸方形を含む)を主体とするものと，円形を主体とするもので区別できる。同じく古代の建物跡を検出した田村遺跡群では方形を主体とする掘方をもつ建物の時期を8世紀後半から9世紀前半代，円形の掘方をもつ建物の時期を10～11世紀に位置付けている。東野土居遺跡では前者については出土遺物が乏しく明確な時期は不明であるが，後者はⅣＢ－1区において検出されたSB1～4があてはまる。SB2では土師質土器の椀や皿が出土しており，概ね11世紀代と考えられる。

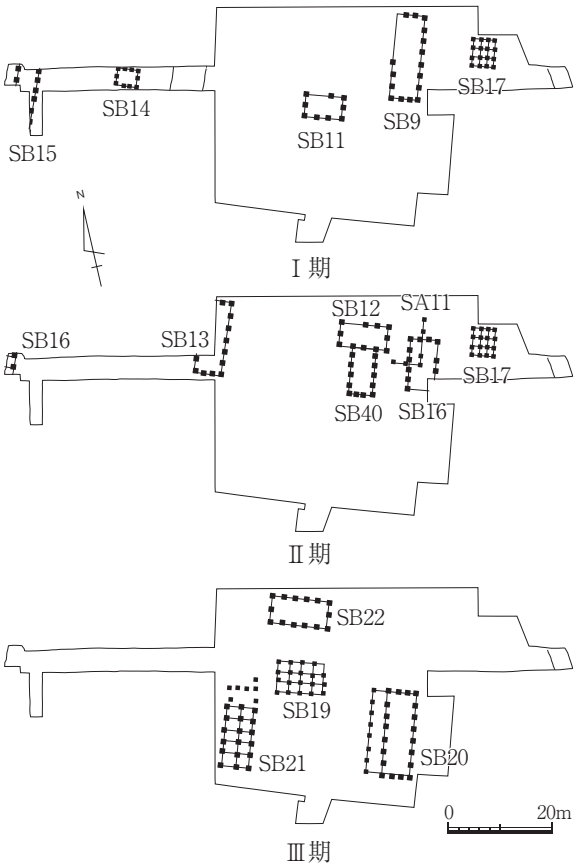


図6－22　下ノ坪遺跡建物変遷図

② 土坑

調査区からは古代に位置付けられる土坑が15基確認されている。ここでは主なものについて記述する。これらはⅢＢ－3区，ⅢＢ－2区，ⅣＡ区，ⅣＢ区において検出されており，掘立柱建物跡と同じく当遺跡の東側にあたる調査区で確認され，特にⅢＢ－3区，ⅢＢ－2区にかけて集中している。土坑の平面形は方形，隅丸方形，不整方形，円形を呈するものがみられる。特にSK134・145からは一括遺物が出土している。

SK134は長軸約1.7m，短軸1.4mで平面形は隅丸方形を呈した土坑で，埋土中から土師器甕と土師器杯が出土している。甕は口縁部を上にした状態でその周囲からは土師器杯片が出土しており，意図的に廃棄された可能性が考えられる。SK145は長軸1.66m，短軸約1.5mの不整方形を呈しており，埋土中からは土師器杯，黒色土器椀，土師器羽釜などが出土している。黒色土器は内面内黒の椀で胎土等から搬入品と考えられ，外面と高台内面に墨書が施されている。

③ 溝跡

古代に位置付けられる溝跡は2条確認されている。ⅣＡ区(SD39)とⅣＢ－1区(SD26)で検出されており，ⅣＡ区SD39は確認延長45.4m，幅0.7～1.2m，深さ36～76cmを測る溝跡で逆Ｌ字状を呈する。出土遺物は弥生土器の他土師器，須恵器が出土している。溝の南北の軸方向はＮ－4°－Ｗで，調査

表6－18　深渕遺跡建物跡一覧

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	備考
			桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)	梁行(m)	桁行(m)			
深渕遺跡	SB3	C－a区	1×1	3.75×2.25	－	－	N－19.2°－E	円形	南北棟建物跡
〃	SB4	〃	(2×1)	(4.36×2.2)	2.20	2.16～2.20	N－13.6°－W	〃	〃
〃	SB2	E区	1×3	3.54×3.82	1.46～2.08	－	N－16°－E	隅丸方形 楕円形	〃

表6－19　田村遺跡群建物跡一覧1

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	時期	備考
			桁行×梁行（間）	桁行×梁行（m）	梁行（m）	桁行（m）				
田村遺跡群	SB18	Loc.30B	3×2	6.15×4.6	2.25～2.35	1.95～2.15	N－71°－W	方形・円形		総柱建物跡
〃	SB22	〃	3×2	6.8×4.4	2.2	2.1～	N－16°－E			
〃	SB33	〃	2×1	4.1×2.25	2.25	2.0～2.1	N－76°－W			
〃	SB34	〃	2×2	4.2×2.3	2.15～2.3	2.0～2.2	N－75°－W			
〃	SB36	〃	3×1	6.5×4.4	3.95～4.4	1.8～2.6	N－17°－E	方形 楕円形		
〃	SB38	〃	3×2	5.0×3.2	1.5～1.7	1.55～1.75	N－15°－E	方形 円形		
〃	SB1	Loc.39	2×1	4.8×3.6	3.6	2.4	N－14°－E	方形	8世紀後半～ 9世紀前半	
〃	SB2	〃	3×2	4.2×3.0	1.5	1.38	N－14°－E	〃	〃	
〃	SB3	〃	5×2	10.5×4.2	4.2	2.1	N－68°－W	方形 円形	〃	
〃	SB4	〃	3×2	5.1×3.6	1.8	1.5～1.95	N－19°－E	方形・円形 楕円形	〃	
〃	SB5	〃	3×2	4.5×3.9	1.8～2.1	1.35～1.65	N－22°－E	方形	〃	
〃	SB6	〃	4×2	6.0×3.6	1.8	1.2～1.8	N－16°－E		〃	
〃	SB7	〃	3×3	4.5×3.3	1.65	1.5	N－22°－E	方形	〃	
〃	SB8	〃	3×3	6.6×4.8	1.6	2.1～2.3	N－19°－E	〃	〃	
〃	SB9	〃	5×2	11.4×5.1	2.4～2.7	2.2～2.4	N－22°－E	〃	8世紀後半	
〃	SB10	〃	3×2	5.7×4.2	2.1～2.2	1.8～1.95	N－21°－E	〃	8世紀後半～ 9世紀前半	総柱建物跡
〃	SB11	〃	4×2	8.4×4.2	2.1	1.8～2.4	N－20°－E	〃	〃	
〃	SB12	〃	（2×3）	（8.1×6.3）	2.1	2.25～	N－72°－W	〃	〃	
〃	SB13	〃	5×3	9.3×7.2	2.25×2.7	1.86	N－20°－E	〃	8世紀後半	総柱建物跡
〃	SB14	〃	3×2	4.38×3.3	3.3	1.6	N－21°－E	〃	8世紀後半～ 9世紀前半	
〃	SB401	F4区	5×3	9.4×4.8	1.6～1.68	1.76～1.92	N－80°－W	〃	8世紀後半	
〃	SB402	〃	4×3	8.0×4.7	1.5～2.15	1.4～2.1	N－81°－W	〃	〃	
〃	SB403	〃	2×2	3.14×4.7	1.44～1.68	2.16～2.8	N－81°－W	〃	8世紀末～ 9世紀初頭	
〃	SB404	〃	1×1	2.8×3.1	3.12	2.8	N－9°－E	〃	8世紀後半	
〃	SB405	〃	3×2	5.5×3.7	1.76～2.0	1.6～2.24	N－81°－W	〃	〃	
〃	SB406	〃	5×3	9.8×4.9	1.52～1.84	1.76～2.4	N－10°－E	方形 不整形	〃	

表6－20　田村遺跡群建物跡一覧2

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	時期	備考
			桁行×梁行（間）	桁行×梁行（m）	梁行（m）	桁行（m）				
田村遺跡群	SB407	F4区	4×2	8.2×4.6	2.32	1.84～2.24	N－8°－E	方形 楕円形	8世紀後半	
〃	SB408	〃	3×1	4.4×3.4	3.28～3.36	1.4～1.6	N－10°－E	方形	8世紀末～ 9世紀初頭	
〃	SB409	〃	5×3	8.9×5.1	1.52～2.16	1.6～2.0	N－10°－E	〃	8世紀後半	
〃	SB410	〃	4×3	7.8×4.7	1.44～1.92	1.84～2.12	N－11°－E	〃	〃	
〃	SB411	〃	3×2	6.46×4.4	2.04～2.4	2.0～2.4	N－13°－E	〃	8世紀末～ 9世紀初頭か	
〃	SB412	〃	5×3	9.1×4.9	1.92	1.36～2.32	N－10°－E	〃	8世紀後半	
〃	SB413	〃	3×1	4.4×3.36	1.4～2.4	3.36～3.4	N－13°－E	方形 円形	8世紀末～ 9世紀初頭か	
〃	SB414	〃	2×2	4.0×3.7	1.76～1.92	1.36～1.4	N－10°－E	方形 隅丸方形	8世紀後半	
〃	SB415	〃	(3×)	(6.12×)	－	2.0～2.1	N－9°－E	方形	8世紀後半～ 9世紀初頭か	
〃	SB416	〃	(×1)	3.4×3.5	3.36	2.0～2.1	N－80°－W	方形 円形	8世紀末～ 9世紀初頭か	
〃	SB417	〃	(4×2)	(6.8×)	－	－	N－10°－E	〃	8世紀後半～ 9世紀初頭か	
〃	SB418	〃	(2×1)	(3.6×)	－	－	N－80°－W	〃	〃	
〃	SB419	〃	1×1	4.2×3.54	3.52	4.2	N－83°－W	方形	〃	

表6－21　曽我遺跡建物跡一覧

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	時期	備考
			桁行×梁行（間）	桁行×梁行（m）	梁行（m）	桁行（m）				
曽我遺跡	SB1	7区	5×3	10.4×5.4	1.66～1.88	1.96～2.10	N－14°－E	隅丸方形 不整形	8世紀後半～ 9世紀初頭	南北棟建物跡
〃	SB2	〃	3×3	4.95×4.05	1.24～1.44	1.45～1.65	N－16°－E	〃	9世紀中～ 後期	〃
〃	SB3	〃	(3×1)	(4.35×1.3)	1.3	1.05～1.82	N－15°－E	隅丸方形		総柱建物跡
〃	SB4	〃	(5×1)	(10.35× 2.10)	2.1	2.1	N－14°－E	〃		南北棟建物跡
〃	SB5	〃	(6×1)	(12.45× 2.0)	－	1.8～2.2	N－14°－E	隅丸方形 円形		〃
〃	SB6	〃	4×3	7.3×4.4	1.3～1.7	1.63～2.0	N－16°－E	隅丸方形	9世紀中～ 後期	〃
〃	SB7	6区	(2×1)	(5.7×2.2)	2.2～3.7	2.2	N－20°－E	隅丸方形 不整形		
〃	SB8	〃	－	－	－	－	－			
〃	SB9	7区	(2×1)	(3.9×1.38)	1.45	1.8	N－14°－E	礎石		据住礎石 建物跡

表6－22　十万遺跡建物跡一覧

遺跡名	遺構名	調査区	規模		柱間距離		棟方向	掘方	時期	備考
			桁行×梁行（間）	桁行×梁行（m）	梁行（m）	桁行（m）				
十万遺跡	SB1		3×2	6.56×4.24	2.13～2.14	2.2	N－60°－E	隅丸方形 不整形		東西棟建物跡
〃	SB2		5×3	9.60×6.08	2.0～2.3	1.80～2.10	N－30°－E	隅丸方形 円形		南北棟建物跡
〃	SB3		6×3	12.7×4.65	1.35～1.73	1.85～2.95	N－32°－E	方形・隅丸方形・不整形	10世紀代	〃
〃	SB4		3×3	6.70×4.60	1.50～1.70	1.90～1.95	N－32°－E	方形 不整形		〃
〃	SB5		5×3	20.5×5.45	1.65～1.90	1.90～2.10	N－31°－E	不整形		西庇付南北棟建物跡
〃	SB6		4×2	8.35×5.32	1.40～3.97	2.0～2.32	N－61.5°－W	方形		東西棟建物跡
〃	SB7		3×3	4.75×4.05	1.25～1.50	1.5～1.6	N－30°－E	〃		南北棟建物跡
〃	SB8		2×2	3.7×3.6	1.1	1.7～2.0	N－29°－E	〃		〃
〃	SB9		2×2	3.80×3.33	1.35～1.8	3.8	N－61.5°－W	方形・円形 不整形		東西棟建物跡
〃	SB10		3×2	5.15×4.8	1.60～3.20	1.55～1.85	N－25°－E	方形 不整形		南北棟建物跡
〃	SB11		－	－	－	－	－	方形		
〃	SB12		（3×2）	5.15×3.65	1.75～1.90	1.70～1.73	N－31°－E	方形 不整形		総柱建物跡と推定
〃	SB13		2×2	4.75×4.25	2.10～2.15	2.10～2.45	N－59°－W	隅丸方形 円形・不整形		東西棟建物跡
〃	SB14		2×2	6.97×4.32	2.12～2.20	2.50～4.47	N－59°－W	円形 方形		〃

区で検出された掘立柱建物跡SB3・4・7の棟方向（N－1～5°－W）と概ね軸方向が揃っている。ⅣA区の東側に位置するⅣB－1区からは調査区を縦断するSD26を検出している。確認延長は20.5m，幅3.0～3.5m，深さは概ね68㎝を測る。埋土からは弥生土器の他須恵器，緑釉陶器，貿易陶磁器，瓦質土器，備前焼，瓦などが出土しており，そのうち布目瓦や円面硯が溝の底面からみつかっている。溝跡の軸方向はN－1°－Eで，周辺の掘立柱建物跡とは軸方向がずれている。しかし，東側に隣接するⅣB－2区の総柱建物跡SB2・3の棟方向（N－0～2°－E）とほぼ同軸方向を示している。

（2）東野土居遺跡と周辺の古代遺跡

当遺跡が位置する香南市には下ノ坪遺跡を初め深渕遺跡，曽我遺跡など古代の遺構・遺物が確認された遺跡が位置している。また香南市に隣接する南国市には国府跡に推定されている土佐国衙跡や古代の建物群が確認された田村遺跡群が所在する。ここでは東野土居遺跡と同時期に機能したと思われる周辺遺跡の概要を述べ，当遺跡との相違点にふれてみたい。

① 物部川流域

ⅰ 下ノ坪遺跡（表6－17，図6－22）

香南市野市町上岡に所在する。物部川下流域の左岸，河口から約3㎞上流の段丘上にあり，東野土居遺跡からは西方約2.2㎞に位置する。調査区H区では15棟に及ぶ建物跡が確認されている。これら建物の機能した時期は8世紀中頃前後，8世紀後半から9世紀初頭，9世紀前半～中頃の3時期に区

分されている。9世紀前半～中頃は，県下でも最大級の大型建物跡SB20(桁行7間×梁行3間)が出現し，建物も企画的な配置がなされており，遺跡の中心時期である。このSB20からは四仙騎獣鏡片が出土しており，注目された。さらに，遺跡からは土師器・須恵器の供膳具の他，緑釉陶器の火舎，硯(円面硯)，鉈尾などの特殊遺物，そして他地域からの製品が多く出土しており，遺跡の立地等からも水運の利を活かした「津」的な機能を有した遺跡であったと考えられている。

ⅱ 深渕遺跡(表6－18)

香南市野市町深渕に所在する。物部川下流域の左岸，河口から4㎞ほど上流の段丘上にあり，前述した下ノ坪遺跡の北方約900mに位置する。調査区では掘立柱建物跡2棟，柵列，土坑，溝跡などを確認しているが，トレンチ状での調査のため遺構の詳細までは掴めていない。しかし，二彩・三彩陶器，緑釉陶器，刻書土器，墨書土器，硯，鉈尾等の特殊遺物が出土しており，律令期における郡司クラスの豪族の存在が示唆されている。

ⅲ 田村遺跡群(表6－19･20，図6－23)

南国市田村に所在する。物部川下流域の右岸にあり，東野土居遺跡からは西方約3.6㎞に位置している。高知空港拡張に伴い発掘調査が実施され，企画的な配置がなされた建物跡群が検出されている。遺跡では8世紀後半に「コ」の字状の配置または企画的な建物群が出現し，8世紀後半から9世紀前半代にかけては大型建物群が出現し，盛行する。その後衰退していくと考えられるが，11世紀代に属する建物跡が数棟みられることから，小規模ながら集落が存在していたものと考えられる。

② 香宗川流域

ⅰ 曽我遺跡(表6－21，図6－24)

香南市野市町中ノ村に所在する。香宗川と山北川に挟まれた地点にあり，東野土居遺跡からは北東方向約1.3㎞に位置している。掘立柱建物跡9棟の他，柵列，溝跡を検出しており，柱根なども残存していた。遺物では緑釉陶器の出土量が多く注目される遺跡である。これら建物は8世紀後半から9世紀前半と9世紀中頃以降の2時期が考えられている。建物には柱筋を揃えたり建物やその間隙の寸法を統一するような企画性がみられる。規模は8世紀後半から9世紀前半に属するSB1(桁行5間×梁行3間)が最大規模を測り，その後に建物は小規模化している。

ⅱ 十万遺跡(表6－22，図6－24)

香南市香我美町上分に所在する。香宗川の左岸にあり，東野土居遺跡からは北東方向約1.8㎞に位置している。掘立柱建物跡14棟，竪穴建物跡，柵列，土坑などを検出

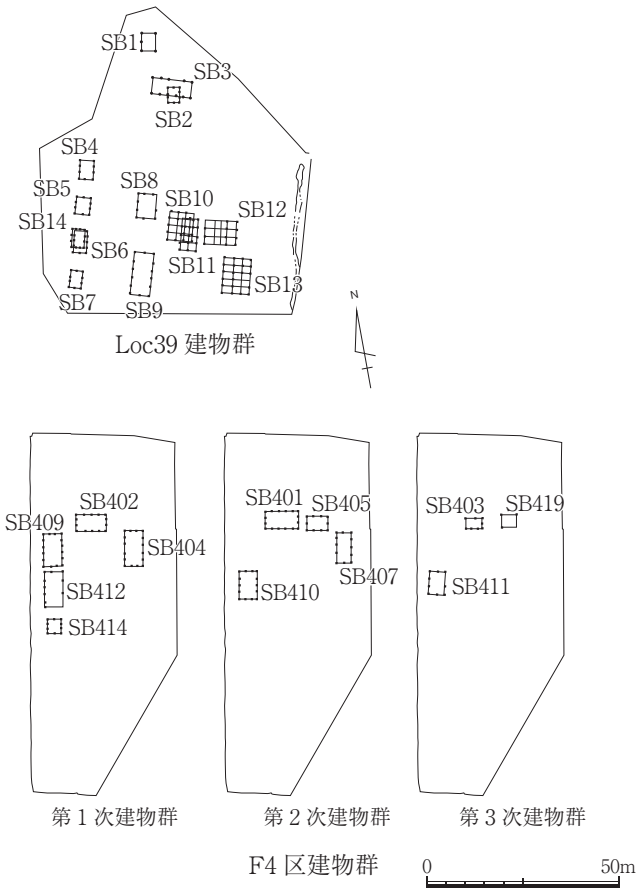
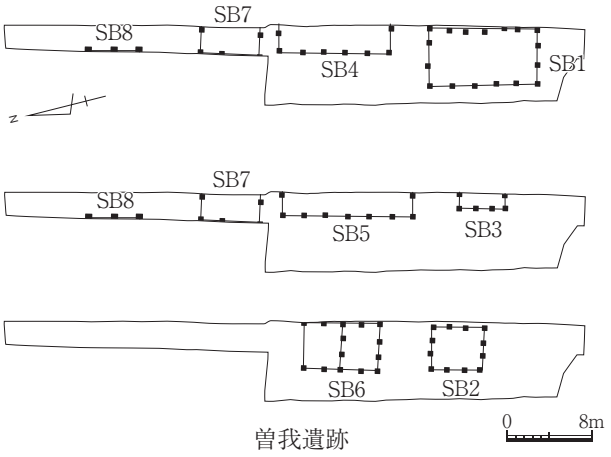
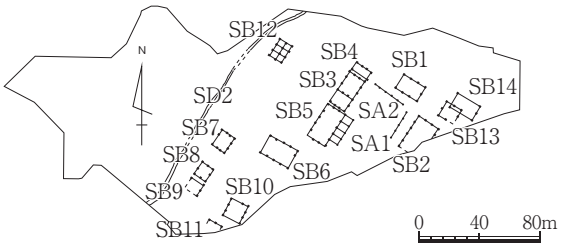


図6－23　田村遺跡群(Loc39・F4区)古代建物変遷図

している。建物は8世紀代に出現しており，桁行5間×梁行3間の規模を有する建物跡も確認されている。これら建物跡のうち1棟には庇がみられる。これらの建物群は「コ」の字状の配置をなし，柱筋の延長線が一致するなど企画性をもつ。さらに西部には倉庫または屋と考えられる建物が直線上に並んでいる。また建物群の西側に平行して幅約1mを測る溝が確認されており，区画溝と考えられる。この溝から石製巡方，灰釉陶器など10世紀代の遺物が出土しており，遺跡は8世紀から10世紀にかけて営まれたものと考えられている。建物は概ね8世紀代で終焉を迎えていることから，この後曽我遺跡に中心が移ったものと考えられている。



曽我遺跡



十万遺跡

図6－24　曽我遺跡・十万遺跡古代建物変遷図

下ノ坪遺跡と深渕遺跡は物部川，曽我遺跡と十万遺跡は香宗川流域とともに河川交通の要衝と考えられる場所に立地している。東野土居遺跡の建物群は遺跡の東方，香宗川に近いⅢ区とⅣ区に集中しており，それより西方においては遺構は希薄になる。香宗川に近いⅣB－2区では収納施設と考えられる総柱建物跡SB2とSB3が直列して検出されている。ともに桁行4間×梁行3間の規模である。総柱建物跡が検出された遺跡は物部川流域では下ノ坪遺跡と田村遺跡群，香宗川流域の十万遺跡があげられる。十万遺跡は桁行3間×梁行2間と推定され，東野土居遺跡と比較すると小規模である。下ノ坪遺跡は桁行5間×梁行2間で柱間距離が長く，非常に大きい。田村遺跡群Loc39は桁行5間×梁行3間の規模を持ち，柱間距離は東野土居遺跡のSB2･3と似ている。池澤俊幸氏は田村遺跡群Loc39と下ノ坪遺跡では規模や時期に差異はあるものの，遺跡の立地と収納施設の規模は，物資を集積あるいは集散する機能を示唆し，これは早くから開発の進んだ物部川流域の高い生産力にも関係がある。また，十万遺跡については建物の規模やその消長などから居宅的性格の強い建物群であると考えられており，東野土居遺跡のこれらの建物跡の規模及び遺跡の立地などから考えると香宗川を利用した物資の集積あるいは集散する機能をもっていたものと思われる。

東野土居遺跡から検出された掘立柱建物跡は21棟にのぼり，これら建物跡が機能した時期は，遺構や包含層出土遺物等から概ね8～9世紀，11世紀の大きく2時期が考えられ，曽我遺跡や十万遺跡の機能した時期と重なる。この両遺跡は8～9世紀以降衰退していくが，当遺跡では10世紀代の土坑や11世紀代の建物跡が検出されていることから集落の規模は縮小しながらも，存続していたものと考えられる。

(3) 遺物

① 土器

各遺構からは土師器, 土師質土器, 須恵器, 黒色土器などが出土している。ここでは比較的まとまった状態で出土した遺構(SK134･145)を取り上げて周辺遺跡と比較検討を行い, 当遺構の機能した時期について考えてみたい。

SK134

SK134は東側調査区であるⅢＢ－３区において検出した方形状のプランをもつ土坑で, 土師器皿･杯･甕, 須恵器甕, 黒色土器椀が出土している。土師器皿・杯は回転台成形によるもので, 底部まで認められるものは回転ヘラ切り痕が残る。杯は体部から口縁部にかけて外上方に開くものと端部が少し外反するものがみられ, 内外面にナデ調整を施す。甕は長胴を呈し, 底部は丸底をなす。口縁部は「く」の字状で端部は上方に短くのびる。黒色土器は内面黒色のＡ類椀で, 内外面にはヘラミガキがみられる。

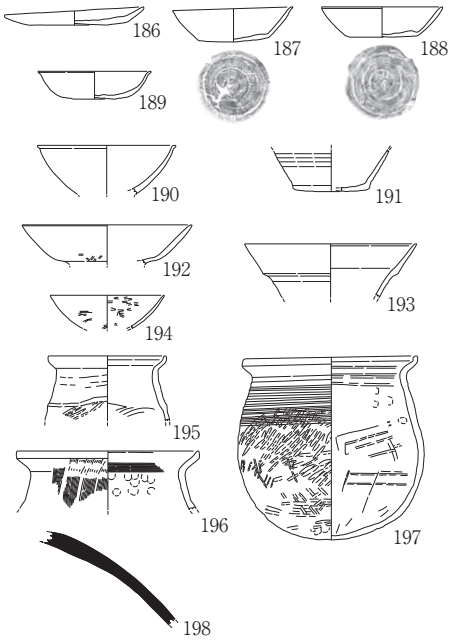


図6－25　SK134出土遺物実測図(S=1/8)

SK145

SK145は東調査区であるⅢＢ－２区において検出した不整方形状の土坑である。土師器皿・杯・羽釜, 黒色土器椀が出土している。土師器皿・杯は回転台成形によるもので底部までみられるものは回転ヘラ切り痕が残る。杯は体部から口縁部にかけて外上方に開き, 端部がやや外反する。内外面はナデ調整が施されている。羽釜は摂津型と考えられる。黒色土器は内面黒色のＡ類椀で, ともに内外面に丁寧なヘラミガキが施され, 器壁は薄い。内１点の外面には墨書が認められる。黒色土器は胎土などから搬入品と考えられる。

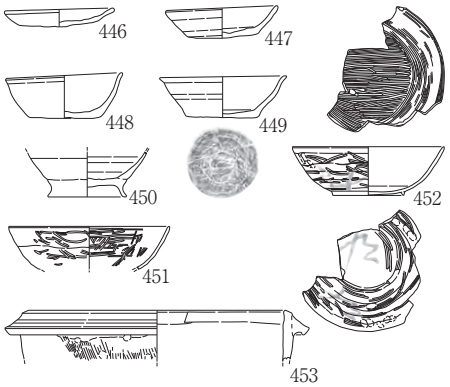


図6－26　SK145出土遺物実測図(S=1/8)

これら土坑と類似した出土例として南国市小籠に所在する小籠遺跡のSK130とSK136があげられる。一辺が2.2m前後を図る方形状のプランを呈し, 壁際にテラス状の張出しをもつ土坑で, 同じく土師器皿･杯･甕, 黒色土器Ａ類椀, 灰釉陶器などが出土しており, 高知平野における古代土器編年の基準となる資料である。供膳具は, 土師器皿･杯は回転台成形で, 器面は回転ナデ調整が顕著にみられる。また器高が高く底部から体部にかけて外上方に大きく開く。さらにこの杯に高台を貼付したタイプもみられるようになる。律令的な土器様式が崩れ, 食膳具から須恵器が減少する時期に位置づけられている。

東野土居遺跡で確認されたSK134・145の土師器と比較すると, 回転台成形, 回転ナデ調整が顕著である点など基本的な成形技法は類似している。小籠遺跡の杯の法量は口径12～13.5㎝前後(ＡⅠ)で, 器高3.0㎝前後のものと4.5～5.3㎝前後を測る器高の高いタイプ(ＡⅡ)があり, また, この器高

の高いタイプの杯に高台を貼付したものもみられる。東野土居遺跡の杯はSK134で口径12～12.8cm，器高3.2～3.6cm，SK145は口径12cm，器高3.2cmと口径12～13.2cm，器高4.16～4.64cmを測る。SK145では小籠遺跡ＡⅠ類の杯とともにＡⅡ類（成形技法はＡⅠ類と同様。底部との立ち上がりに段を有し，体部は外上方に直線的にのびる）が出土している。器高指数は小振りのものが29.0～31.0，大振りのものが33.1～38.7を示す。またSK145からはＡⅡに高台を貼付したタイプが出土しており，共伴遺物からもほぼ小籠遺跡と同様に概ね9世紀から10世紀初頭に位置付けることができるのではないかと考えられる。さらに注目される遺物としてはⅢＢ－2区SK224出土の土師器杯（杯C）とⅢＢ－1区SX30出土の土師器皿（皿A）があげられる。皿・杯ともに回転台不使用で胎土が在地のものとは違う特徴をもつことから，畿内からの搬入品と考えられる。土師器杯は口径13.3cm，器高4.2cm，底径3.3cmで内面に放射線状，内底面に螺旋状のヘラミガキを施し，体部外面にはナデ調整，底部にはヘラケズリが施されるもので，平面形が隅丸長方形を呈する土坑墓と考えられる遺構から出土している。また土師器皿は口径25cm，器高4.2cm，底径15.4cmで内面に放射線状，内底面に螺旋状のヘラミガキ，外面にはヘラケズリとヘラミガキが施される。ともに7世紀中葉から後半代に位置付けられる。県内においてこの時期の土師器の食器は希少である。香宗川の中流域に位置し，東野土居遺跡の北東約2.5kmに立地する拝原遺跡のSD1から同じく杯Cが出土しており，この時期に畿内方面との交流が考えられる。これらは古墳時代後期から続く香宗川流域における地域支配のありかたを考えるうえで貴重な資料である。

参考・引用文献

1996年『小籠遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
1997年 吉成承三「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相－高知平野を中心に－」『中世土器の基礎研究XII』
杯C，皿Aについては『古代の土器1　都城の土器集成』古代の土器研究会編に準じた。
2000年 池澤俊幸「土佐における古代前期の建物群－研究の現状と課題ー」『古代文化　第52巻第6号』
1998年『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会
1989年『曽我遺跡』高知県香美郡野市町教育委員会
1988年『十万遺跡』高知県香美郡香我美町教育委員会
2006年「XI　古代の掘立柱建物跡と遺物」『田村遺跡群Ⅱ　第九分冊　総論』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

(4) 古代の瓦について

今回の調査でⅣＢ－2区のSX2から出土した軒丸瓦（1167）は，藤原宮（694年遷都）の造営時に造瓦された八葉複弁蓮華文軒丸瓦（讃岐の古瓦展より）の瓦当文様の影響を受けた藤原宮式の同系瓦と思われる。藤原宮式軒丸瓦の文様の特徴は，内区の中央に中房を置き，中に蓮子を二重に巡らせる。中房の周囲には複弁八葉の蓮華文を配し，外区には珠文を巡らせ，周縁には鋸歯文が巡る。

当遺跡から出土した軒丸瓦の文様の特徴は，内区中央には中房を置き，その中に蓮子を二重に巡らせ，中房の周囲には弁端の盛り上がりが強い複弁八葉の蓮弁が巡る。外区には珠文が，周縁を線鋸歯文が密に巡り，珠文帯と線鋸歯文の間に二重圏線が巡る。胎土は緻密，色調は灰白色。焼成は須恵質。笵型の摩耗によるものか，花弁端部と子葉・間弁の稜・珠文・線鋸歯文の一部欠損がみられ，中房の蓮子も文様が乱れる。丸瓦部凸面にはヘラケズリ痕がみられ，凹面は摩耗する。

・瓦当径　　直径17.0cm，厚さ3.7cm

・中　房　　直径5.0㎝
・蓮　子　　1+5+9(周環あり)
・外　区　　珠文35
・周　縁　　高さは中房と同じ。三角縁(先端を丸くおさめる)
・丸瓦部　　瓦当周縁の 2/3 程度を覆う

古代の土佐では寺院数が四国の他の3県に比べ圧倒的に少なく，県内で古代の瓦が出土している寺院跡や遺跡は以下の通りである。

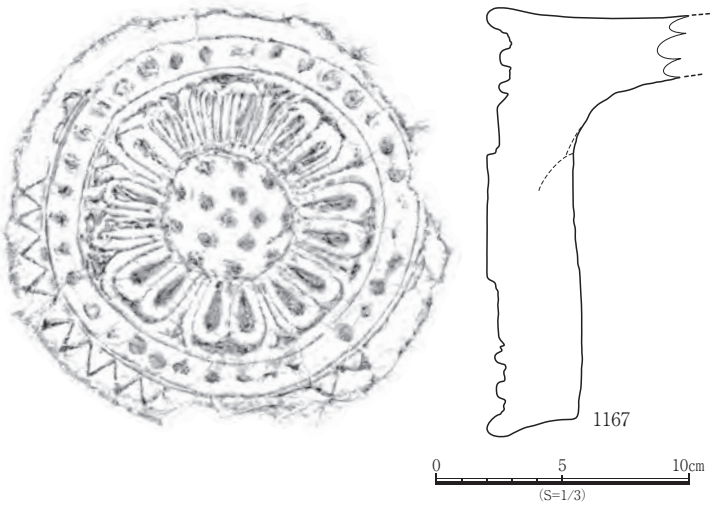


図6－27　SX2出土八葉複弁蓮華文軒丸瓦

加茂ハイタノクボ遺跡では，香美郡土佐山田町に位置する奈良時代の窯業関連遺跡で，八葉複弁蓮華文軒丸瓦が出土しており，文様の特徴は中房蓮子が一重，外区の珠文がなく，周縁に線鋸歯文が巡り，藤原宮式とは異なる特徴をもつ。

大寺廃寺は，吾川郡春野町に位置する奈良時代に創建された寺院跡で，発掘調査はされていないが，表採で素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

コゴロク廃寺は，安芸郡奈半利町に位置する寺院跡で，遺物は7～9世紀頃のものが出土しており，瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦，中房蓮子が二重，外区の珠文がなく，周縁も素文となっている複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。奈半利窯跡で瓦を焼いたとされている。秦泉寺廃寺は，高知市中秦泉寺に位置する白鳳時代に創建されたと思われる寺院跡で，有稜線素弁八葉蓮華文軒丸瓦・細素弁十六弁蓮華文軒丸瓦が出土している。土佐国分寺跡は，南国市国分に所在する宗教法人土佐国分寺の境内地に位置し，奈良時代末～平安時代初頭に完成。素弁八葉蓮華文軒丸瓦・素弁十六葉蓮華文軒丸瓦・単弁十二葉蓮華文軒丸瓦・六葉半の複弁蓮華文軒丸瓦が出土している。出土した瓦の一部は東谷古窯跡群(土佐山田町史より)で製造された。野田廃寺は，土佐市高岡町に位置する奈良時代に創建された寺院跡で，素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。比江廃寺は，南国市比江に位置する白鳳期以前に創建された寺院跡で，重弁文軒丸瓦・単弁八葉蓮華文軒丸瓦，外区の珠文がなく周縁に鋸歯文が巡る特徴を持つ複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており，香美郡土佐山田町に位置する植タンガン窯跡で同型の単弁蓮華文軒丸瓦が出土している。瓦の製造時期は奈良時代前期と思われる。

以上，これまでに調査された寺院跡などから出土した軒丸瓦には，藤原宮式軒丸瓦と同系の瓦がみられない。このことから東野土居遺跡で出土した八葉複弁蓮華文軒丸瓦は，高知県下では初めての藤原宮式軒丸瓦の同系瓦となる。また，これまでに調査された高知県下の瓦窯跡などでは藤原宮式の八葉複弁蓮華文軒丸瓦を生産していた痕跡は確認できておらず，近隣では兵庫県と香川県の遺跡において当遺跡の瓦と類似した藤原宮式軒丸瓦の同系瓦が出土している。

兵庫県洲本市にある土生寺瓦窯は藤原京所用瓦焼成窯として7世紀中頃～8世紀初め頃まで操業されており，この窯で生産された軒丸瓦は藤原宮造営時に使用されている。香川県三豊市三野町にある宗吉瓦窯は藤原京所用瓦焼成窯として7世紀中頃～8世紀前半頃まで操業されており，この窯で生産された

軒丸瓦も藤原宮造営時に使用されている。高知県内の同時期に操業されていた瓦窯では藤原宮式の軒丸瓦は生産されておらず，当遺跡で出土した軒丸瓦は土生寺瓦窯もしくは宗吉瓦窯の瓦である可能性も考えられる。特に土生寺瓦窯で生産された軒丸瓦は類似点が多く認められる。

当遺跡の八葉複弁蓮華文軒丸瓦の文様は不明瞭な箇所があるが，中房の大きさや蓮子の数・複弁の仕切りと間弁の明確さ，珠文・鋸歯文ともに丁寧に配されていることから瓦自体の製作年代は古く，近隣の瓦窯の操業年を考えると７世紀中頃～８世紀前半までとなるが，製作年代と供給年代の差もあり，他の出土遺物から８世紀代には当遺跡で使用されていたと考えられる。

他に当遺跡から出土した同時期の瓦は，扁行忍冬唐草文（讃岐の古瓦展より）と思われる軒平瓦１点のみで，この組み合わせの瓦を葺いていた建物が存在していた可能性は考えられるが，瓦の出土量があまりにも少なく定かではない。当時建物の解体の際に貴重であった瓦は他の建物へ再利用されることも多く，出土量からみてもその可能性は高い。しかしこの瓦を使用したと思われる寺院関係遺構などが県内では現在のところみつかってはおらず，今後県内の発掘調査が進むことにより発見される可能性もあり，今後の調査に期待したい。

参考文献

1997年 上原真人『歴史発掘⑪　瓦を読む』講談社
1940年 近藤義郎・上田正昭『古代の日本４ 中国・四国』角川書店
1991年 森郁夫『日本の古代瓦』雄山閣
1993年 森郁夫『続・瓦と古代寺院』臨川書店
2011年 山崎信二『古代造瓦史－東アジアと日本－』雄山閣
1996年『第11回特別展 讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
1968年『高知県史　考古編』高知県
1978年『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ』奈良国立文化財研究所
1979年『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会
1988・1989・1991・2009年『土佐国分寺跡』南国市教育委員会
1991年 出原恵三『比江廃寺跡発掘調査概報』高知県教育委員会
2000年 川端清司『加茂ハイタノクボ遺跡』土佐山田町教育委員会
2003年『コゴロク遺跡群』奈半利町教育委員会
2004年『秦泉寺廃寺（第６次調査）』高知市教育委員
2005年『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
2007年『比江廃寺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
2009年『宗吉瓦窯跡調査・保存整備報告』香川県三豊市教育委員会
2016年『東野土居遺跡Ⅲ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

4. 中世

平成21～23年度に実施された東野土居遺跡において検出された主な遺構は掘立柱建物跡，土坑，溝跡，井戸跡，柱穴などである。遺構の密度等には若干差はあるものの，ⅡＣ区からⅢ区・Ⅳ区の大半において検出されている。溝のなかには区画を呈するものがあり，その区画内に掘立柱建物跡などが検出され，溝で囲まれた屋敷の存在が推定される。今回はこれら屋敷跡をSHと名称付けそれぞれの区画での特徴を述べる。SHの番号は調査区の西部から東部にかけて表記する（各屋敷区画内の

建物跡については表6－23にまとめた)。中世の遺構遺物の密集度が高い区域はⅢ区とⅣ区である。Ⅲ区は 道を挟んでⅢＡ区(ⅢＡ－5･6･7)とⅢＢ区(ⅢＢ－1･2･3･4)に大きく分かれる。なかでもⅢＡ－6・7区で検出された屋敷跡は当遺跡で確認されたなかで規模が最も大きい。

(1) 東野土居遺跡で検出された主な屋敷跡

① 屋敷跡

SH1

ⅢＡ区の中央部ⅢＡ－6区において検出した。小字は「野々土居」にあたる。調査区を南北に縦断する堀状の溝SD1によって囲まれた屋敷跡であったと推定される。なおこのSD1の西側には同調査区を縦断する南北溝SD25，SD1の東側にはⅢＡ－5区を縦断する南北溝SD56が併走しているが，SH1に伴うものかは不明である。

SD1の規模は西側が幅3.5～4.5m，深さ1.9～2.0m，東側は幅2.4～3.2m，深さ1.0mでこの溝により囲繞された敷地面積は約1,900㎡(発掘調査範囲内における面積)を測る。当遺跡で確認された屋敷跡の中で最も広い敷地面積である。敷地内には北西部から北部，さらに南東部にかけてSD8が巡り，さらに囲繞された中央部には逆Ｌ字状を呈する区画溝SD15が掘られる。区画内部では掘立柱建物跡を10棟，柵列跡1列，井戸跡2基，土坑を確認している。これら検出された掘立柱建物跡の中ではSB17は桁行3間，梁行2間で西と南北に3面に庇をもつ建物跡でその規模等からは中心建物であったと考えられる。井戸は2基とも素掘りの井戸である。遺物では，西側のSD1からは13世紀前後のものがみられ，東側のSD1では14世紀前半から15世紀代のものが多く確認されている。これには埋没の仕方と時期の違いが投影されていると考えられている。

SH2

ⅢＡ－6区の東側において検出した。小字は「宮ノ前」にあたる。区画の北側には「立山神社」が鎮座している。南側はSD42，東側をSD46により区画される。北側と西側は不明である。SD42は東西溝で確認延長は約38m，幅2.56～3.41m，深さは37～47㎝を測る。SD46は南北溝で確認延長は約35m，幅1.32～2.07m，深さは23～51㎝を測る。区画内からは6棟の重複した掘立柱建物跡と柵列跡，井戸跡が2基確認されている。

SH3

ⅢＢ－4区の南部において検出した。小字は「次郎三郎邸」にあたる。SD33とSD50によって区画されており，区画の西側から北側に向かい，その後東側に曲がり東西にのびる。SD33と屋敷区画のほぼ中央を縦断するSD50を境にSH4と2区画が併存していたと考えられる。SD33の規模は幅0.7～1.7m，深さは30～46㎝を測る。南側は調査区外のため不明である。区画内には掘立柱建物跡1棟を確認している。

SH4

ⅢＢ－4区の南部において検出した。小字は「次郎三郎邸」にあたる。北側はSD33，東側はSD61，西側をSD50によって区画される。南側は調査区外のため不明である。SH3と一連の屋敷区画と考えられる。溝内側の距離は北部が28.5m，南部は30.5mを測る。区画内には掘立柱建物跡2棟を確認している。

SH5

ⅢＢ－3区において検出した。小字は「藤四郎」にあたる。SD72により「コ」の字状の区画を呈する。南側は調査区外のため不明である。溝は約22mのびて東側に曲がり，約31mのびて南方向に曲がって調査区外に続く。溝の規模は幅1.2～2.3m，深さ24～42㎝で，調査区内において囲繞された敷地面

積は約780㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡が11棟と柵列跡，土坑などが確認されている。

SH6

ⅢＢ－３区において検出した。小字は「藤四郎」にあたる。SH5と同様に「コ」の字状の区画を呈する。SD77により区画され溝の規模は，幅0.5～1.2m，深さは15㎝で，調査区内において囲繞された敷地面積は約760㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡11棟と柵列跡，土坑が確認されている。SH5に付属する遺構の可能性も考えられる。SD77の出土遺物は16世紀後半代のものがみられることから，SH5の後に成立した区画と考えられる。

SH7

ⅢＢ－４区の北部において検出した。小字は「次郎三郎邸」にあたる。SD7とSD3，SD6が繋がるL字状を呈した溝で区画されており，溝の東側と北側は調査区外のため不明である。SD7の規模は幅1.1m，深さ22㎝，SD6は幅0.9m，深さ28㎝を測り，これら区画内からは掘立柱建物跡４棟，柵列跡が確認されている。

SH8

ⅢＢ－４区の北部において検出した。小字は「次郎三郎邸」にあたる。SD8とSD10が繋がりSH7と同様な区画域をもつものと考えられる。SD8は幅1.9m，深さ14㎝，SD10は幅1.0m，深さ20㎝を測り，溝の東側と北側については調査区外のため不明である。区画内からは掘立柱建物跡４棟，柵列跡，井戸跡が確認されている。掘立柱建物跡のなかにはSH7に付属するものも存在する可能性がある。井戸は素掘りでSH8に属すると考えられる。

SH9

ⅢＢ－２区とⅢＢ－３区の北部において検出した。小字は「藤四郎」にあたる。SD94により「コ」の字状の区画を呈する。SD94の東西確認長は約50mを測り，幅は0.8～1.6m，深さは20～30㎝で区画の北側は調査区外のため不明である。調査区内でSD94に区画された敷地面積は約570㎡で，区画内に重複した掘立柱建物跡７棟と柵列跡，井戸跡が確認されている。出土遺物は緑釉陶器，東播系須恵器などが出土している。

SH10

ⅢＢ－２区とⅢＢ－３区の北部において検出した。小字は「藤四郎」にあたる。SD95により「コ」の字状の区画を呈する。SH9と同様の区画を呈し，北側は調査区外のため不明である。溝の東西確認長は約47mで，幅は1.8～3.2m，深さは15～40㎝である。調査区内において区画された敷地面積は約530㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡と柵列跡，井戸跡が確認されており，井戸は素掘りを呈し，SD95に接するように位置している。これらはSH9とSH10に付属した遺構の存在が考えられる。

SH11

ⅢＢ－２区とⅢＢ－３区の南部において検出した。小字は「藤四郎」にあたる。SD97により「コ」の字状の区画を呈する。SD97の東西確認長は約47mで幅は1.8～3.2m，深さは15～60㎝である。南側の区画は調査区外のため不明である。調査区内において区画された敷地面積は約950㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡８棟，柵列跡，土坑が確認されている。SD97からの出土遺物は14世紀から16世紀代のものがみられる。さらにSH10とSH11の東側には区画の南北方向にSD139・140が並行する。屋敷区画に関連する可能性も考えられる。

表6－23　東野土居遺跡屋敷区画一覧

調査区	屋敷名	遺物時期	所在地（小字）	敷地面積（㎡）	区画溝	区画溝軸方向	併行建物棟数	付属施設			備考
								溝	井戸（位置）	屋敷墓	
ⅢA－6区 ⅢA－7区	SH1	13世紀前後 15世紀代	野々土居	約1,900	SD1E・W SD8・SD15	N－9°－W（SD1E） N－5～19°－E N－13°－E（SD15）	10	2	中央東		区画内に2条の区画溝を確認。北部南部は調査区外
ⅢA－5区	SH2	16世紀 前半～中頃	宮ノ前	－	SD46・SD42	N－10°－E（SD46）	4？		中央南		北部調査区外 井戸2基
ⅢB－4区	SH3	15世紀代	次郎 三郎邸	約700	SD33・SD50	N－19°－E（SD33） N－13°－E（SD50）	1				南部調査区外
〃	SH4	〃	〃	－	SD33・SD61	N－7°－E（SD61） N－13°－E（SD50）	2				〃
ⅢB－3区	SH5	16世紀代 に埋没	藤四郎	780	SD72	N－4°－E（SD72）	9～11				〃
〃	SH6	16世紀後半	〃	約760	SD77	N－7°－E（SD77）	〃				〃
ⅢB－4区	SH7	15～16世紀	次郎 三郎邸	－	SD7・SD3・SD6	N－3°－E（SD7）	4か				北部・東部調査区外
〃	SH8	－	〃	－	SD8・SD10	N－3°－E（SD8）	〃				〃
ⅢB－2区	SH9	－	藤四郎	567	SD94	N－11°－E	7か		中央南		SH9・10に付属する。北部調査区外
〃	SH10	16世紀代	〃	528	SD95	〃	〃		〃		〃
〃	SH11	15～16世紀	〃	950	SD97	〃	9か				南部調査区外
ⅢB－1区 ⅣA区	SH12	15世紀後半 ～ 16世紀初頭	興右衛門邸	発掘面積806	SD155（ⅢB－1） SD17・18（ⅣA）	N－6°－E（SD155） N－11°－E（SD18）	7か				掘立柱建物跡は先後関係あり。北部調査区外
〃	SH13	14～15世紀	〃	540	SD37	N－10°－E	2か				〃
〃	SH14	〃	〃	251	〃	〃	2				南部調査区外
ⅣB区	SH15	14世紀代	倉ノ神邸	－	SD5・SD11	N－6°－E（SD5）					北部調査区外
〃	SH16	14世紀後半 ～15世紀	〃	－	SD25	N－6°－E	3				〃

SH12

ⅢＢ－１区とⅣＡ区において検出した。小字は「興右衛門邸」にあたる。ⅢＢ－１区を縦断する南北溝SD155とⅣＡ区を縦断する南北溝SD18によって囲繞されたと考えられる区画である。SD155は確認長39.4m，幅1.2～1.8m，深さ25～35㎝で区画の北側と南側の一部は調査区外のため不明である。SD18は同調査区のSD17と繋がり，確認延長は36.2m，幅0.8～1.8m，深さ9～29㎝で，調査区内において区画された敷地面積は約800㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡8棟，柵列跡2列，土坑が確認されている。

SH13

ⅣＡ区において検出した。小字は「興右衛門邸」にあたる。ⅣＡ区SD37によって逆Ｌ字状に囲繞されている。SD37を境に北側と南側に区画が存在したと考えられ，このSH13は北側の囲繞部分にあ

図６－28　土居地区小字図(S=1/5,000)

たる。SD37の確認延長は58.4m，幅0.9～1.7m，深さ33～53㎝で溝の延長は調査区外のため不明である。この溝の西側に南北溝のSD19が位置しており，規模は確認延長28.8m，幅0.6～1.7m，深さ18～42㎝を測る。SH13を区画する一連の溝の可能性が考えられる。調査区内において区画された敷地面積は約540㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡2棟が確認されている。

SH14

ⅣA区において検出した。小字は「興右衛門邸」にあたる。SD37を境に北側と南側に区画が存在したと考えられ，このSH14は南側の区画にあたる。西側はSD21によって囲繞されていると考えられる。調査区内において区画された敷地面積は約250㎡を測る。区画内には重複した掘立柱建物跡2棟が確認されている。SH13・14は同時期に併存した屋敷地と推定される。

SH15

ⅣB－1区において検出した。小字は「倉ノ神邸」にあたる。ⅣB－1区SD7とSD11によりL字状に区画される。SD7の規模は幅0.6～0.9m，深さ22～48㎝，SD11は幅約0.5～1.1m，深さ8～15㎝で区画の北側は調査区外のため不明であり，東側については確認することはできなかった。区画溝の西側には調査区を縦断する南北溝SD5が位置する。SD7とほぼ並行しており，二重の区画溝であった可能性もある。

SH16

ⅣB－1区において検出した。ⅣB－1区SD25は逆L字状を呈した区画溝である。SD25の西側はSD26に接し，その西側にはSD19が位置する。SD25の規模は幅0.7m，深さは20～28㎝で，北側は調査区外のため不明である。SD25の南北延長の東側には調査区を縦断するSD24が並行しており，二重の溝に囲まれていた可能性もある屋敷区画である。区画内には重複した掘立柱建物跡も含め4棟が確認されている。

② 出土遺物から見た遺構の廃絶時期

以上検出された屋敷地の概要を述べたが，屋敷地を構成する掘立柱建物跡からの遺物は少なく，検出された屋敷の時期は屋敷を区画する溝等の出土遺物から検討した。

SH1を構成するSD1は屋敷地の東側と西側を南北方向に走る。東側の溝からは主なものとして土師質土器の他，瓦質土器，備前焼，瀬戸美濃焼が出土している。土師質土器は杯の他，播磨系の釜，瓦質土器は在地産の鍋の他釜がみられる。備前焼は第Ⅲ期及び第Ⅴ期の擂鉢と第Ⅳ期の甕が出土している。西側の溝からは同じく土師質土器の他，常滑焼や白磁，青磁などが出土している。白磁は口縁端部が玉縁状をなす碗や壷の口縁部，青磁は内面に劃花文が施された碗や内面見込みに印花文を施した碗が出土している。東側は14世紀前半から15世紀，16世紀と西側では12世紀から13世紀，そして15世紀代の遺物が確認できた。出土遺物には時期差がみられるが，規模等からは同一溝と考えられる。埋没時期とその仕方に違いがあったものと考えられる。さらにSD1の東側を南北方向に走るSD56，西側にも同じく南北方向に走る溝SD25を検出した。SD56の幅は約2.4～3.0mで深さは約1.3mを測る。遺物は主なものとして土師質土器の他，土師器の手づくね皿，備前焼，瀬戸美濃焼，白磁，青磁，青花が出土している。土師質土器は鍋や茶釜，備前焼は擂鉢と甕，瀬戸美濃焼は天目茶碗等，白磁は口縁端部が外反する端反りの皿，青磁は外面線描きの蓮弁文を施した碗や内面見込みに印花文がみられる碗である。また青花では碁笥底の皿が出土している。備前焼は第Ⅴ期に位置付けられ，16世紀前半代，白磁皿は16世紀初頭頃，青磁は15世紀後半から16世紀前半代と考えられる。西側の

SD25は幅3.0～3.5m，深さ1.2mを測る。出土遺物は土師質土器，瓦器，瓦質土器，常滑焼，白磁が出土している。土師質土器は皿と杯，瓦器は椀で底部外面に断面三角形の高台を貼付する。瓦質土器は地元産の鍋の他羽釜もみられる。常滑焼は甕の底部，白磁は碗で内面見込みに印花文が施されている。これらの出土遺物は概ね14世紀～15世紀代に位置付けられる。

SH2を構成するSD42からは土師質土器の他瓦質土器，備前焼，瀬戸美濃焼，白磁，青磁，石製品などが出土している。土師質土器は杯・鍋・釜，瓦質土器は擂鉢，備前焼は擂鉢と甕，瀬戸美濃焼は折縁皿と考えられる口縁部，白磁は口縁部が端反りする皿の底部，青磁では碗の底部がみられる。SD46は屋敷の東側を南北方向に走る溝で主なものとして，土師質土器，土師器，瀬戸美濃焼，白磁，瓦などが出土している。土師質土器は皿や鍋，土師器は手づくね皿や摂津系の羽釜，瀬戸美濃焼では天目茶碗の底部，白磁は皿の底部で胎土がやや陶器質のものである。

SH3を構成するSD33からは土師質土器，瓦質土器，備前焼，白磁が出土している。土師質土器は断面三角形の鍔が付いた摂津系の釜，瓦質土器は擂鉢で口縁端部は内面に摘み出す。備前焼は擂鉢・壷・甕がみられ，擂鉢は第Ⅳ期と考えられる。白磁は口縁端部が玉縁状を呈した碗と，口縁部が外方に開き端部を丸くおさめる皿が出土している。またSD33との切り合い関係をもつSD57から土師質土器の杯や口縁下方部位に断面三角形の鍔が巡る釜が出土しており，その形状からはSD33よりは古い様相をもつものと考えられる。

SH4を構成するSD61は出土遺物が少なくその時期については不明である。しかし，SD33が北側の区画を構成していることからSH3とは同時期に並存していたと考えられる。

SH5を構成するSD72から土師質土器の他，瓦質土器，備前焼，瀬戸美濃焼が出土している。土師質土器は口縁部が内傾し，口縁端部は平坦面をなし，体部外面にはワッフル状のタタキ目がみられる鍋や断面三角形の鍔が付く釜がみられる。また瓦質土器は体部に最大径をもち口縁部が直立して立ち上がる地元産の鍋（土佐型鍋），備前焼は第Ⅴ期と考えられる擂鉢の口縁部が出土している。瀬戸美濃焼は天目茶碗と考えられる口縁部と底部がみられ，大窯期のものと考えられる。出土遺物からは16世紀代に埋没したものと考えられる。

SH6を構成するSD77からは土師質土器，土師器，瀬戸美濃焼が出土している。土師質土器の皿は底部が回転糸切りによる切り離しである。瀬戸美濃焼は丸皿と天目茶碗である。出土遺物からは16世紀後半代に埋没したものと考えられ，SH5が廃絶した後SH6が機能したものと考えられる。

SH7はSD7とSD3，SD6によって区画された屋敷地で，SD7からは土師質土器，瓦質土器，白磁などが出土している。土師質土器は断面三角形の鍔が付いた釜，瓦質土器は口縁部が直立してのび，端部は平坦面を呈する鍋や口縁部が玉縁状を呈した白磁の碗がみられる。SD6からは土師器，土師質土器，瓦質土器，須恵器，白磁が出土しており，土師器は手づくね皿，土師質土器と瓦質土器は断面三角形の鍔が付いた釜や口縁部が端反りの白磁皿がみられる。SD7とSD6の出土遺物からは15世紀から16世紀初頭に機能していたものと考えられる。

SH8はSD8とSD10によって区画された屋敷地で，SD8からは瓦質土器が出土している。口縁部がやや外反するタイプの鍋である。SH7とSH8は同様な区画域をもつ。

SH9を構成するSD94からは東播磨系須恵器や緑釉陶器などが出土している。東播磨系須恵器は捏鉢の口縁部である。

SH10を構成するSD95からは土師器，土師質土器，瓦質土器，青磁，青花が出土している。土師器

は手づくね成形の皿，土師質土器は鍋と甕，瓦質土器には口縁部下方の外面に菊のスタンプ文を施した茶釜が出土している。青磁は口縁部が内湾する無文の碗と線描きの細蓮弁文碗，外面に蓮弁文を施し，口縁部が大きく外反する杯がみられる。また青花には外面に牡丹状の文様を施した皿などがある。

SH11を構成するSD97は他の区画溝の中でも出土遺物が多く，土師質土器の他瓦質土器，備前焼，常滑焼，瀬戸美濃焼，白磁，青磁などが出土している。土師質土器は鍋や断面三角形の鍔が巡る釜，瓦質土器は体部に最大径をもち口縁部が直立する鍋や口縁端部が平坦面を呈する擂鉢，備前焼は第Ⅳ期と考えられる擂鉢と甕がみられる。また，瀬戸美濃焼では深皿や卸し皿，青磁は碗や稜花皿の他盤が出土している。SD97の出土遺物から，15世紀から16世紀代に機能していたものと考えられる。

SH12の西側域を構成するSD155は出土遺物は少なく，土師質土器の細片の他白磁皿が出土している。白磁の皿は口縁部が端反りを呈するものである。さらに東側溝のSD18からは瀬戸美濃焼の天目茶碗の他青磁皿が出土している。青磁皿は稜花皿の他，内面に櫛描文を施した同安窯系の皿がみられるが，溝の時期は概ね15世紀後半から16世紀と考えられる。

SH13・14はSD37により構成されており，溝を境として南北に区画が存在していたと考えられる。SD37からは土師質土器や手づくね皿の他，瓦質土器鍋が出土している。瓦質土器の鍋は口縁部が外反するもので14世紀から15世紀に位置付けられる。

SH15は西側をSD5，南側をSD11により構成されており，東側を区画する溝は確認できなかった。出土遺物はSD11から土師器の手づくね皿と瓦質土器の擂鉢と鍋が出土している。鍋は体部に最大径をもち口縁部が直立する土佐型を呈し，外面には指頭圧痕が顕著である。14世紀代に属すると考えられる。

SH16はSD25により構成されている。土師質土器，土師器，瓦質土器，青磁などが出土している。土師質土器では杯，土師器は手づくね皿，瓦質土器では鍋がみられる。青磁は櫛描文を施した皿が出土しており，12世紀から15世紀代に位置付けられる遺物が出土している。SD25の東側にはSD24が併走しており，二重の溝に囲まれていた可能性も考えられる区画である。このSD24からは石製品や金属製品の他，口縁端部が口禿を呈した白磁片が出土している。

以上各々の屋敷区画の概要について若干述べた。出土遺物は古くは12世紀，14世紀から16世紀のものがみられるが，中心時期は15世紀代と考えられる。そのうち16世紀後半代についてはSH6とした区画周辺において遺物の出土がみられるが，全般に少ない状況である。

③ 東野土居遺跡と県内の中世屋敷群

当遺跡では16区画におよぶ屋敷区画を検出した。県内では田村遺跡群（昭和55～58年・平成8～13年調査）において約31区画におよぶ屋敷跡を確認しており，屋敷跡の分類・編年が行われている。ここでは，県内における主な発掘例を取り上げ，東野土居遺跡の様相を考えてみたい。

ⅰ 田村遺跡群

南国市田村に所在する。物部川下流域の右岸にあり，東野土居遺跡からは西方約3.6㎞に位置している。田村遺跡群の北方には室町時代に土佐国守護代であった細川氏の居館と伝えられる田村城跡が位置する。発掘調査では溝で区画された31区画におよぶ屋敷跡を確認している（表6－24・25）。これら屋敷跡は14世紀代に成立したものから17世紀代に廃絶したものまで確認されており，大きくA群からC群に分類されている。A群は守護代細川氏の土佐入部（1380年頃）以前から存在し応仁の乱

表6－24　田村遺跡群屋敷区画一覧1

調査区	屋敷名	存続時期	所在地（小字）	敷地面積（㎡）	屋敷区画溝軸方向	併行建物棟数	付属施設			備考
							溝	井戸（位置）	屋敷墓（位置）	
Loc34	SH1	15～17世紀初頭	横手	1,488	N－20°－E	11	4	SE1（南東部）		B3群
Loc33	SH2	15～16世紀	横手前	1,197	N－18°－E	21	1	SE1（南東部）	SK40（南西部）	B2群
Loc31A	SH3	14～15世紀初頭	コキカ内	1,360	N－16°－E	17	〃	SE1（南部）	SK28（南東部）	A群，区画明瞭
Loc31B	SH4	16～17世紀初頭	〃	1,189	N－12°－E	6	〃			C2群，南西部調査区外
Loc30	SH5	14～15世紀初頭	柿の木	1,217	N－11°－E	14	〃			A群，東部調査区外
Loc39A	SH6	16～17世紀初頭	寺の前	389	N－18°－E	2	0			C2群，北西部調査区外 区画不明瞭
〃	SH7	〃	〃	687	N－17°－E	8	〃		SK2～5（北西部）	C2群，北部調査区外 区画不明瞭
〃	SH8	〃	〃	1,180	〃	11	〃	SE1（南東部）		C2群，北部調査区外
〃	SH9	〃	〃	1,728	N－20°－E	12	〃		SK18（南東部）	C2群，区画不明瞭
Loc39B	SH10	16世紀	〃	1,920	〃	33	2	SE1（南東部）		C1群，区画明瞭 北部溝は堀状を呈す
Loc39C	SH11	15～16世紀	〃	1,640	N－22°－E	6	3	SE2（南寄り）		B2群
〃	SH12	15～17世紀初頭	〃	1,056	N－20°－E	7	7	SE1（南東部）		C1群
Loc40	SH13	16世紀	桑の本	1,872	〃	37	0			C1群，SD1南辺が曲北屋敷を細分
〃	SH14	〃	〃	640	〃	12	〃			C1群
Loc21	SH15	〃	正吉	690	N－15°－E	15	〃	SE2（南東部）		C1群，北東部調査区外
〃	SH16	〃	〃	1,296	〃	29	〃	SE3（南部）		C1群
Loc20	SH17	15～16世紀後半	〃	1,232	N－20°－E	13	1	SE1（南東部）	SK17（東部）	B2群
Loc19	SH18	16世紀	〃	377	N－18°－E	7	0			C1群，西部調査区外
〃	SH19	〃	〃	324	N－20°－E	7	〃			C1群
〃	SH20	〃	〃	391	〃	7	〃			〃
〃	SH21	〃	〃	323	〃	8	〃			〃

表6－25　田村遺跡群屋敷区画一覧2

調査区	屋敷名	存続時期	所在地（小字）	敷地面積（㎡）	屋敷区画溝軸方向	併行建物棟数	付属施設			備考
							溝	井戸（位置）	屋敷墓（位置）	
Loc18	SH22	15～16世紀	スエン坊	672	N－22°－E	6	0	SE1（南東部）		B2群
〃	SH23	〃	〃	312	〃	6	〃			〃
Loc4	SH24	14～15世紀初頭	下窪田	462	N－15°－E	6	〃	SE1（南部）		A群
〃	SH25	〃	〃	640	N－22°－E	9	1			〃
Loc25	SH26	15世紀	ワカサカ内	1,111	N－21°－E	7	〃	SE1（南東部）		B1群，西部調査区外
〃	SH27	〃	〃	1,758	〃	4	0	SE2（南東部）		B1群
Loc13	SH28	15～16世紀	東松木	1,268	N－20°－E	19	3	SE1（中央東）	SK2（北西部）	B2群
Loc14	SH29	〃	フクナカ	1,330	N－18°－E	15	0		SK32～34（北部）	〃
Loc6	SH30	14～15世紀初頭	フクタ	698	N－19°－E	10	〃	SE1（南東部）	SK1・2（北西部）	A群
Loc10	SH31	16世紀	河原田	346	N－4°－E	13	〃			C1群，南西部調査区外

(1467年)以前に完全に消滅するもの。B群は守護代細川氏の隆盛期に成立。そのなかでB1～B3群に細分し，B1・B2群は長宗我部氏の検地(1589年)以前に消滅したものとしている(15世紀に成立した屋敷のうち検地段階まで存続した屋敷はSH1･12･17の3例)。C群は16世紀代の盛行。地検帳内のヤシキとの関連が想定される屋敷群でそのうち2類に細分されている。C1群は検地施行後すぐ廃絶したもの，C2群は近世初期に消滅したものと考えられている。

屋敷の規模はA群はSH3・5が該当し，敷地面積1,200㎡，その他は700㎡未満である。B群はB1・B3群は敷地面積1,000㎡以上，B2群はSH22・23の他は1,100㎡以上に及ぶ。C群では敷地面積1,100㎡以上が6区画で(そのうち1,700㎡以上が3区画)600㎡代が3区画，300㎡代が6区画である。

屋敷を囲む溝の規模の差異はあるが，南北軸方向は14世紀代から17世紀代のものまで類似した数値を示す。区画内の建物の方向もこれにほぼ平行を示し，区画が古代の条里制に強く規定されていたと考えられている。

屋敷に付属する遺構では建物跡以外に井戸，屋敷墓などがみられる。井戸は31区画のうちで16区画にて検出されており，内訳は16区画中15区画が石組みで井戸の底部に木製の井筒を固定している状況もみられた。井戸所有の屋敷は規模の大きい屋敷が多く，敷地面積1,000㎡未満は3例のみである。大半の井戸は敷地内の南東部に構築されており，北部と西部にはみられない状況である。

屋敷墓は8例を検出しており，遺構の上部や埋土中には集石を伴う。区画溝のコーナー部内側に隣接して位置する場合が多い状況である。

ⅱ 十万遺跡

高知平野東端部，香南市香我美町十万に所在し，香宗川左岸の段丘上に位置する。東野土居遺跡からは北東方向約 1.8 ㎞に位置しており，中世では 14 世紀頃から遺構を確認し，15 世紀代に遺跡は全盛期を迎え，二重の堀跡で区画された館跡が特筆される。

堀は確認長 45m，幅 2m を測る外堀と確認長 22m，幅 4m を測る内堀によって構成されており，内堀の埋土からは多量の川原石が出土していることから，これらの礫を使用した塀が存在していたと考えられており，周辺に位置する十万城，あるいは東十万城との関係性も重要視されている。堀に囲繞される推定面積は 5,000 ㎡を測る。

十万遺跡の館跡の存在した 15 世紀前葉は大忍庄内において脇名の成立や小領主化の進行がみられ，在地勢力が強大化し，荘園制そのものが崩壊する構造的変質を遂げる時期でもある。

ⅲ 岩井口遺跡

県西部の佐川町に立地する岩井口遺跡からは 13 世紀に成立した溝に囲まれた屋敷跡が発掘調査されている。規模は東西約 45m，南北約 45m，敷地面積は 2,025 ㎡と推定され，当時の表記ではほぼ一段三十代に相当し，田村遺跡群の屋敷跡と比較しても 2,000 ㎡を上回るものはないことから比較的規模の大きな屋敷であったと考えられている。『長宗我部地検帳』（天正18年）段階では水田（中下田）となっているが，「土ゐヤシキ」の地名がみうけられる。遺物からの時期は 13 世紀中頃に館が造られ，13 世紀後半ないし 14 世紀初めには内側の溝が掘り直され，屋敷が拡張されている。14 世紀をとおして屋敷が機能し，15 世紀の早い段階で廃絶したものと思われ，一部は 16 世紀初頭まで機能していたものと考えられている。

東野土居遺跡の調査で検出された屋敷区画は 16 区画にのぼり，田村遺跡群の調査以降，広範囲における屋敷区画の確認となった。これら屋敷地が機能した時期としては出土遺物から大きく 14 世紀から 16 世紀が考えられる。これら屋敷跡のなかで西端にあたる SH1 は区画溝幅及び深さともに他の区画と比較すると規模が大きく，確認敷地面積は約 1,900 ㎡を測る。他の屋敷跡は全体が分かるものが殆どなく，明確な敷地面積は不明である。敷地面積が 1,000 ㎡を超えると推定される区画は数区画存在すると思われるが，2,000 ㎡に近い区画はこの SH1 のみである。SH1 を構成する SD1 の西側に併走する SD25 及び SD1 の東側に併走する SD56 は，ともに調査区外にのびるため SH1 に伴うものかは不明であり，また SD25 の西側には掘立柱建物跡が数棟存在する事から，新たな区画を構成する溝の可能性も考えられる。

④ 小結

東野土居遺跡の所在する土居地区には遺跡から北東約 300m に中世に活躍した香宗我部氏の居城である香宗城跡，そして城跡の南には香宗我部氏の菩提寺である宝鏡寺跡が所在している。さらに遺跡の北側には創建は不明であるが香宗我部郷の総鎮守である立山神社が鎮座している。この立山神社は香宗我部氏の保護を受けた神社である。このように土居地区は香宗我部氏との関係が深い地域である。

香宗我部氏は鎌倉時代に香美郡宗我部・深淵両郷の地頭職に補任され，鎌倉末期から南北朝期にかけては足利氏の傘下に入り，その後土佐の守護代である細川氏と結び付き，所領の拡大に努めたようである。それ以後戦国期に至るまでこの地を治め，長宗我部氏に並ぶ土佐国の有力国人である。東野土居遺跡の中心時期である中世後期は香宗我部氏が発展をする時期で，とくに屋敷区画が機能

した15世紀から16世紀は香宗我部通長＿親秀＿秀通＿親泰の時期にあたると考えられる。親秀は通長を父，細川勝元の女を母にもつなど，香宗我部氏と守護代細川氏との良好な関係が推測される。しかし，親秀の代に安芸氏に敗戦，また，長宗我部国親の台頭による状況悪化を恐れ，永禄元年(1558)に長宗我部氏の三男親泰(元親の弟)を養子に迎え，家督を相続させるなど状況の変化がみられる。

今回，屋敷跡を設定するにあたり，東西の区画については確認できたものが多かったが，南北の区画については調査区外にのびるものが殆どである。したがって大きな枠で区画を推定し，それぞれの区画についての特徴を述べた。屋敷区画の中でも西端に位置するSH1が遺構の規模，あるいは敷地面積ともに突出している。出土遺物は他の屋敷跡よりやや古い様相も示すが，これら屋敷群の中心となるものと考えられる。屋敷群が機能したと考えられる14世紀から16世紀はこの鎌倉初期に地頭職を補任し発展を遂げた香宗我部氏が活躍した時代であり，これらの屋敷は香宗我部氏に関連した遺構である可能性が高いものと考えられる。しかし，出土遺物からは16世紀後半以降の遺物が少なくなるため，屋敷地も小規模となってくると思われる。

『長宗我部地検帳』をみてみると，天正16年(1588)に土居地区の検地を実施しており，Ⅲ～Ⅳ区では「中ヤシキ」と「下ヤシキ」の記載がみられる。小字図にあわせて検討すると，SH1がある「野々土居」は不明，SH2が検出された「宮ノ前」は下やしき，SH3・4・7・8の検出された「次郎三郎邸」は地検帳では「二良三良」に相当し，下やしきの記載がみられる。また，SH5・6・9～11が検出された「藤四郎」は地検帳の「藤四良やしき」に相当し，中やしきと下やしき，SH12～14が検出された「興右衛門邸」は不明，SH15・16が検出された「倉ノ神邸」は地検帳では「クラノ神やしき」に相当すると考えられ，下やしきの記載がされている。長宗我部氏による検地段階(16世紀後半)ではこれら調査区には屋敷群が存在していたと考えられる。検出された屋敷跡はその殆どが15世紀代を中心に機能していたと考えられ，検地段階ではすでに廃絶していた可能性も考えられる。その中でもSH6とした区画周辺においては16世紀代の遺物が出土しており，16世紀代においても屋敷が存続していたものと思われる。

(2) 東野土居遺跡出土の遺物について

東野土居遺跡では多量の遺物が出土しており，遺構密度と同じくⅢ区とⅣ区から多く出土している。中でも土器の出土量が最も多く，土師器，土師質土器，瓦器，瓦質土器，国内産陶器，貿易陶磁器が出土している。

① 土師器・土師質土器

器種では皿，杯，椀，鍋，釜がある。皿はロクロ成形と非ロクロの手づくね皿がみられる。ロクロ成形の皿は口径6.6～8.1㎝，器高5.0㎝前後を測るものが多く，口径及び口縁部の形態により大きく分類できる。体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がるものと体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，端部が外反するものがみられる。非ロクロ成形の手づくね皿は口径が12～17㎝，器高3.0～5.0㎝前後が中心であるが，器高8㎝，器高2.0㎝前後を測る小型のタイプがみられる。これら手づくね皿については後述する。

杯は殆どがロクロ成形で口径が10～17㎝，器高3.0～4.5㎝前後を測り，皿と同じく口径及び口縁部の形態により大きく分類できる。口縁部が外反するもの，体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がるもの，体部から口縁部にかけ内湾気味に立ち上がるものがみられる。鍋は皿・杯と比べ形になる

ものが少ないが胴部が内湾して立ち上がり，口縁部が横ナデにより内傾するものと口縁部が内傾し，胴部外面に格子状のタタキ目が残るものがみられる。釜は羽釜と茶釜が出土している。羽釜は口縁部下に鍔を有し，口縁部が内傾し，口縁端部に面取りを施すものが大半であるが，口縁部が直立して立ち上がるものもみられる。

② 瓦器

椀が出土している。底部に断面三角形の高台を貼付している。内面にはヘラミガキによる暗文がみられる。

③ 瓦質土器

鉢（擂鉢）・鍋・釜があり，中でも鍋の出土量が多い。鉢は口縁端部は平坦面をなし，内面には4条から5条単位の摺目が施される。鍋は地元系のもので占められる。胴部が球形を呈し，頸部で屈曲したのち口縁部が直立気味に立ち上がるものと，外反するものがみられる。釜は羽釜と茶釜が出土している。羽釜は口縁部下に鍔を有し，三足の脚が付くものとそうでないものがみられる。

④ 国内産陶器

備前焼・常滑焼・瀬戸美濃焼がある。備前焼は擂鉢・壷・甕が出土している。擂鉢は古くはⅢ期のものもみられる。常滑焼は壷と甕が出土している。瀬戸美濃焼は皿・碗が主体である。

⑤ 貿易陶磁器

白磁・青磁・青花が出土している。白磁は皿と碗が出土しており，皿は口縁部口禿を呈するⅨ類とD類とE類が数点であるがみられる。青磁は碗･皿･盤が出土している。碗は鎬蓮弁文の碗の他，A類，D類，E類の碗がみられる。青花は碗・皿の出土がみられる。

東野土居遺跡では中世の遺物が多く出土しているが，その主体は中世後期である。しかし若干ではあるが白磁Ⅳ類・Ⅴ類・同安窯系の青磁皿，瓦器椀などがⅢA－6・7区を中心に出土しており，古代末から中世前期において当遺跡が機能していたことが分かってきた。

⑶ 東野土居遺跡出土の手づくね皿について

東野土居遺跡では土師器の手づくね皿が多く出土している。特にⅢA－6・7区のSK14，SK30，SK43，SK87とⅢB－3区のSK91からまとまって出土している。手づくね皿の法量と形態をみてみると，SK14は口径11.8～14.7㎝，器高3.1～4.2㎝を測るものがみられ，口縁部の形態は口縁端部が外反するもの，口縁部がやや内傾するもの，口縁部が外方に開くものに大きく分類される。

SK30では小型の小皿タイプと皿が出土している。小皿タイプは口径6.9～7.6㎝，器高1.9～2.0㎝，口縁部は内湾する。皿は12.5～14.9㎝，器高3.4～5.2㎝がみられ，口縁部の形態は口縁端部が外反するもの，口縁部がやや内傾するものに分類される。

SK87は口径14.2～16.8㎝，器高3.3～4.6㎝で，口縁部の形態は口縁端部が外反するもの，口縁部が外方に開くものに大きく分類され，他と比べるとやや大振りである。

ⅢB－3区SK91でⅢA－6・7区のSK30と同様に小皿と皿が出土している。小皿タイプは口径7.5～8.6㎝，器高1.7～2.6㎝で口縁部の形態は内湾するものと外上方に直線的に立ち上がるタイプがみられる。皿は口径13.0～14.9㎝，器高3.5～4.9㎝，口縁部の形態は端部が外反するものと直線的に立ち上がるものがみられる。

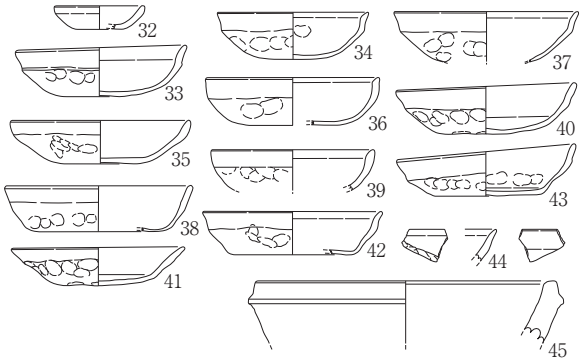
県内において手づくね皿が出土した遺跡は24遺跡を確認しており，土佐市の上ノ村遺跡，京間遺跡，津野町の姫野々城跡以外は南国市，香南市，香美市に集中し，その殆どは高知平野東部の遺跡で

ある。そのうちまとまった出土例として，十万遺跡SK11・SD1と田村遺跡群Loc42SK96があげられる。ここではこれらの手づくね皿の特徴等から東野土居遺跡出土の手づくね皿の時期について考えたい。

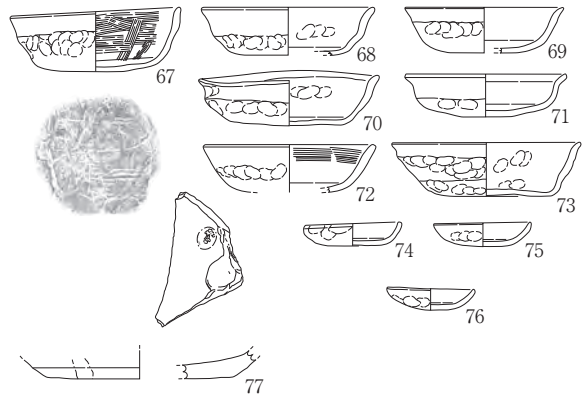
十万遺跡は高知平野東端部，香南市香我美町十万に所在し，香宗川左岸の段丘上に位置する遺跡で中世では14世紀頃から遺構を確認し，15世紀代に全盛期を迎えている。特に二重の堀跡で区画された方形区画屋敷地を確認しており，南方に存在する十万城，あるいは東十万城との関係性が重要視されており，この時代における地域の拠点として機能していたと示唆されている。また，古代・中世を通して香宗川の水運と密接な関係をもって出現した遺跡と捉えることができる。

遺跡から出土している手づくね皿は形態と手法によりC類とD類に分類している。C類はその形状によりC1からC5類に細分され，D類はC類より大型を呈し，さらに2分類に細分されている。SK11は14世紀代と考えられる土坑で，出土遺物には手づくね皿が多く出土している。内訳はC2類(丸底風の底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る，丁寧なナデ調整，口縁部内外面にヨコ方向の強いナデ調整)とC4類(口縁部は外反，内面外面を押さえて強くヨコ方向にナデ調整)，C3類(体部上位で口縁部が内側に屈曲し立ち上がる。内外面のナデ調整がC2類より弱いが口縁部のヨコ方向のナデ調整は強い)がみられ，杯はロクロ成形，皿は非ロクロの手づくね皿で構成されている。SK11出土の手づくね皿の口径は概ね11～13㎝前後で器高は2.8～3.8㎝を測る。SD1はC類より大振りのD類が出土している。口径は13.5～16㎝，器高は3.3～4.2㎝を測る。D類はD1類(口縁部は直立し，内湾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる)とD2類(口縁部は外反する)がみられる。

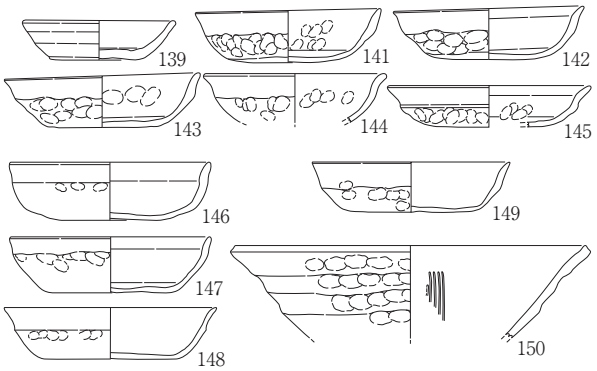
田村遺跡群は高知平野東部，南国市田村に



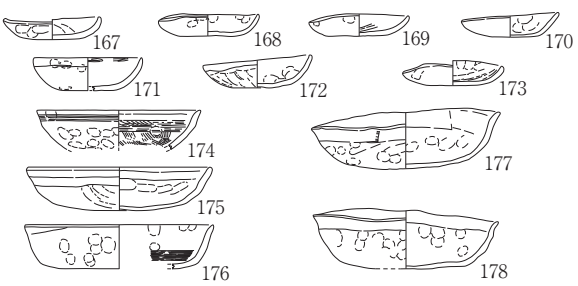
ⅢA－6・7区 SK14



ⅢA－6・7区 SK30



ⅢA－6・7区 SK87



ⅢB－3区 SK91

図6－29　東野土居遺跡出土の手づくね皿(S=1/6)

所在する。物部川右岸の標高８～９mを測る自然堤防上の微高地に立地した遺跡である。中世では土佐の守護代であった細川氏の居館とされる田村城跡の南側を中心に溝で区画された屋敷跡が30数ヵ所発見されている。古くは14世紀代から出現し，15世紀代，16世紀代に存続時期がみられる。このLoc42のSK96から手づくね皿がまとまって出土している。

SK96からはロクロ成形の杯と非ロクロ成形の手づくね皿がみられる。手づくね皿には小型の小皿タイプがみられ，口径は6.6～9.9㎝，器高は1.4～2.1㎝を測る。口縁部の形態は端部がやや内湾するものと，直線的にのびるものがある。皿は口径12～14㎝代と15～17㎝代のものがみられ，器高は前者が2.4～3.1㎝，後者は2.4～2.8㎝である。口縁部の形態は端部が外反するもの，やや内傾するもの，外方に開くものに大きく分類される。

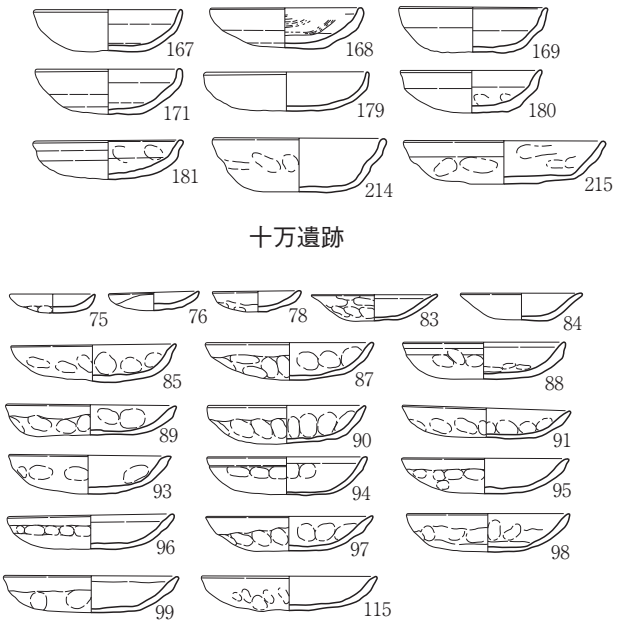


図6－30　十万遺跡・田村遺跡群出土の手づくね皿(S=1/6)

十万遺跡と田村遺跡群はそれぞれ共伴遺物から，十万遺跡SK11が14世紀代，SD1は15世紀代，さらに田村遺跡群Loc42SK96は15世紀後半から16世紀前半に位置付けられている。東野土居遺跡ⅢＡ－6区SK14出土の手づくね皿は十万遺跡のSK11出土の手づくね皿の法量に似ている。SK30には口径が15㎝前後で器高が4㎝を超える十万遺跡SD1において出土している大振りのものもみられ，SK87も口径が16㎝前後で器高が4㎝を超える皿がまとまってみられる。このSK87からは14世紀後半から15世紀にみられる瓦質土器の擂鉢が出土している。SK96もSK87と同様の皿がみられる。また田村遺跡群の器高が低いタイプの手づくね皿は少数である。

東野土居遺跡の手づくね皿はその法量及び形態から考えると，十万遺跡のSK11およびSD1の時期におさまるものと考えられる。

参考・引用文献

2016年 松田直則「高知県の中世考古学研究と長宗我部地検帳」『駒澤考古　第41号』駒澤大学考古学研究室
2015年『東野土居遺跡Ⅱ』高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2016年『東野土居遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
1986年『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　田村遺跡群　第10分冊』高知県教育委員会
1989年『十万遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会
1995年『岩井口遺跡，二ノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会
1992年『野市町史　上巻』野市町教育委員会
1971年『高知県史　古代・中世編』高知県

1962年『長宗我部地検帳　香美郡　上』高知県立図書館
1995年『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
1993年『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4　日本出土の貿易陶磁』国立歴史民俗博物館
2005年 重根弘和「中世の備前焼」『備前焼研究最前線Ⅱ』備前市歴史民俗資料館紀要7
2007年 吉成承三「四国の土製甕・羽釜・鍋－古代末から中世の土製煮炊具の様相－」『中近世土器の基礎研究21』日本中世土器研究会編

溝で囲まれた区画に対して，田村遺跡群を例に，便宜上SHの略号を付して表した。

SH1のSD1については，他の溝跡と比較すると，幅・深さともに規模が大きく，堀としての機能をもつとも考えられるが，ここでは溝跡として記した。

5. 近世

近世の遺構と遺物はⅠ区に集中して検出されている。

(1) 遺構

① 各調査区の様相

ⅠA区では掘立柱建物跡5棟，土坑23基，溝跡21条などが検出されている。遺物は陶磁器類が主に出土しており，18世紀代のものが主体である。掘立柱建物跡からは，肥前産の陶器鉢や碗，内野山窯産銅緑釉小皿，備前擂鉢などが出土している。土坑からは肥前産の陶器碗，磁器染付蓋，肥前内野山窯産小皿，鉄釉陶器壷などが出土し，溝からは肥前波佐見産染付小皿，内野山窯陶器小皿，唐津系灰釉陶器小皿，肥前産陶器皿・碗などが出土している。出土遺物から掘立柱建物1棟(SB1)とその区画溝と思われる溝(SD5)が先行して営まれ，次に掘立柱建物4棟(SB2～5)と区画溝(SD4)が営まれたと考えられる。

ⅠB区では掘立柱建物跡5棟，土坑95基，溝跡24条などが検出されている。遺物は陶磁器類が多く出土しており，概ね18世紀代のものが主体である。掘立柱建物跡からは主に土師質土器や磁器などが出土している。調査区南東部では，唐津焼の出土した土坑(SK2～4)の覆屋と考えられる掘立柱建物跡(SB4)が確認された。調査区北辺では，現在の水路に先行すると考えられる溝跡(SD5･10･13)から陶器や磁器の碗や皿，鉢，香炉，堺産の擂鉢などが多く出土し，西側では明確な掘立柱建物跡はみつかっていないが，溝で囲まれた屋敷地が確認された。

ⅠC区では掘立柱建物跡8棟，土坑75基，溝跡13条などが検出されている。検出面が浅く，現代撹乱が多く，残り具合は悪い。掘立柱建物跡からは主に磁器や肥前系の陶器などが出土し，土坑からは肥前系の磁器や陶器，備前焼，堺産擂鉢，近世磁器，瓦などが出土している。調査区東部では，近世陶磁器や瓦などが出土した土坑(SK27･36･39･42)の覆屋と考えられる柱穴が並ぶ。屋敷の区画溝と思われる溝跡(SD3･5･7～9)からは磁器や肥前産陶器，堺産擂鉢，近世磁器などが多く出土し，遺構・遺物ともに18世紀代のものを主体として19世紀から近代までみられる。

ⅠD区では掘立柱建物跡3棟，土坑77基，溝跡45条などが検出されている。遺物は主に土坑や溝跡から出土し，19世紀代のものが主体である。土坑からは主に能茶山窯の磁器，肥前系の磁器，瀬戸系の磁器，近世陶磁器，瓦，銭貨などが出土している。遺構は調査区南西部に集中し，掘立柱建物とその周りを囲む区画溝は，ほぼ同時期に存在していたと考えられる。

ⅠE区では土坑26基，溝跡9条などが検出されている。遺物は土坑や溝跡から主に近世陶磁器などが出土している。調査区東側に位置する溝跡(SD3･4)は，ⅠC区の区画溝跡(SD7･8)に続く。

② まとめ

Ⅰ区で確認された掘立柱建物跡とその周囲を囲む区画溝を有する屋敷跡は,「東野土居遺跡Ⅰ」で述べられたように,『長宗我部地検帳』に記載がみられず, 先行する遺構が確認されていないことから, 成立期の村落遺構として捉えられる。

(2) 遺物

ⅢＢ－４区では立山神社の旧参道と関連していたと考えられる暗渠４は瓦を使用し水路を形成しており, 銘の確認できる瓦が多く出土している(図6－30～32)。

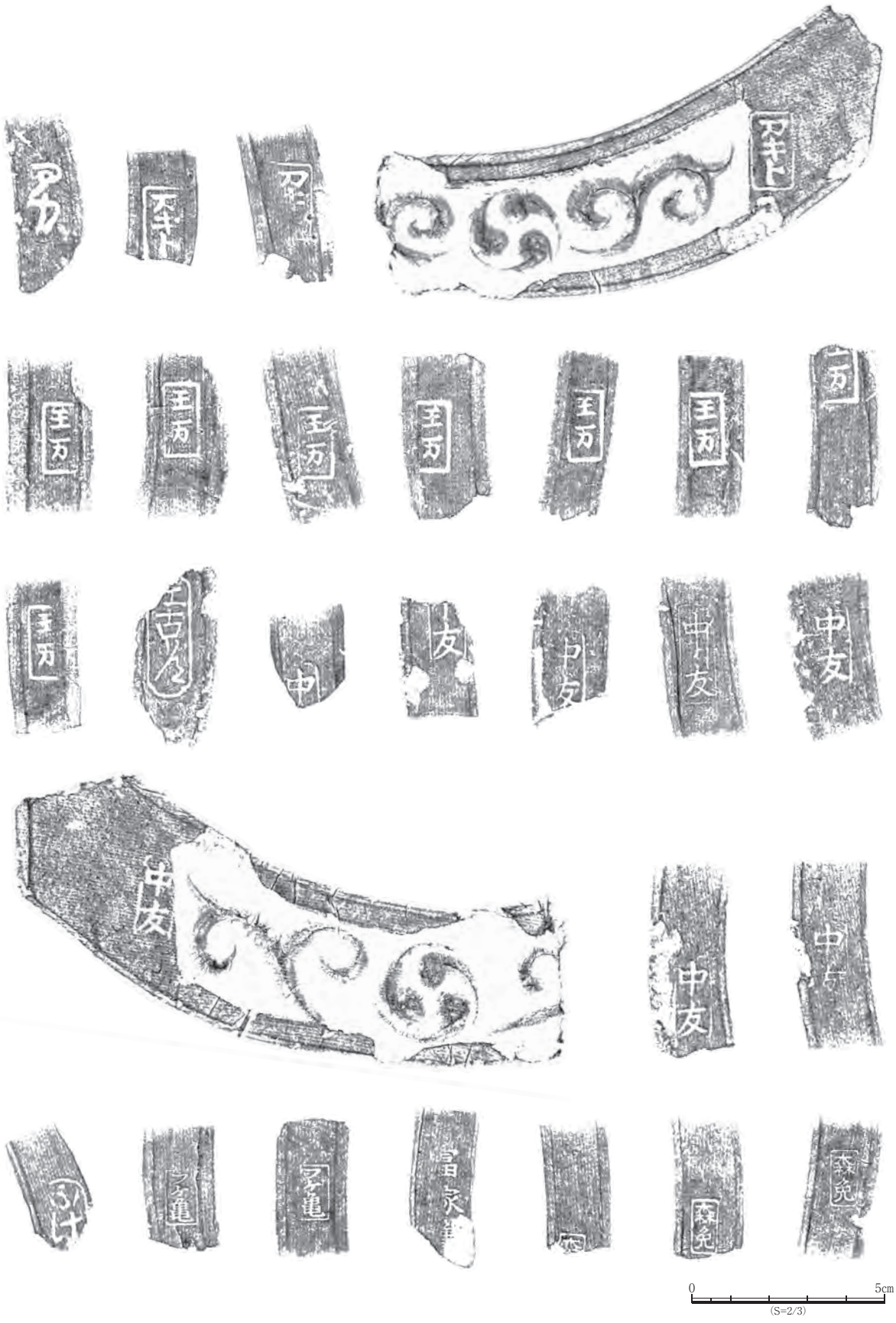


図6－31　銘瓦1(暗渠4)

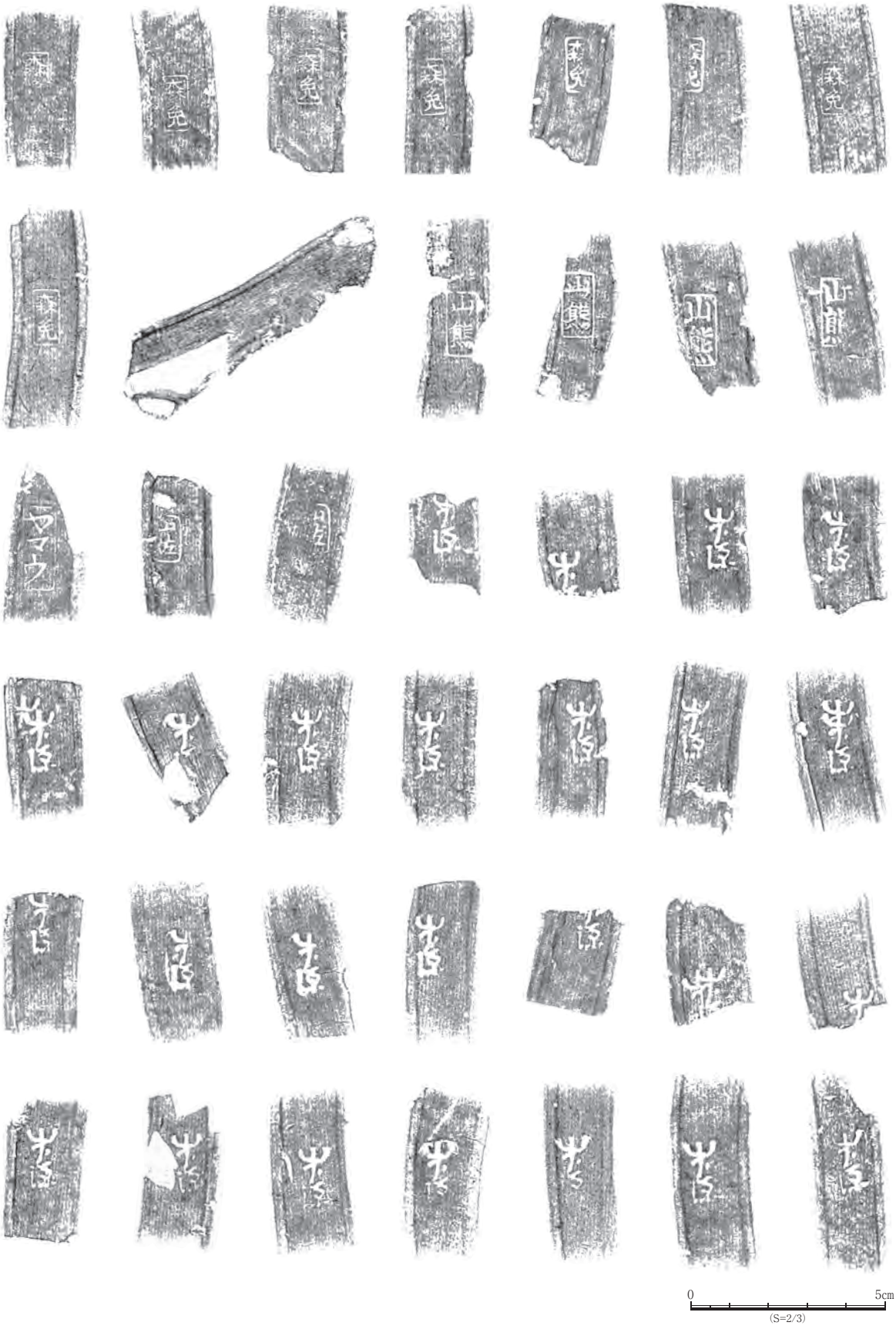


図6－32　銘瓦2(暗渠4)

図6－33　銘瓦3(暗渠4)

遺物観察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが，土製品・石製品・金属製品の場合は口径が全長(cm)，器高が全幅(cm)，底径が全厚(cm)，銭貨の場合は口径が銭径(cm)，器高が内径(cm)，底径が銭厚(cm)と読み替えている。それ以外の値については，特徴・備考または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

Ⅳ A 区

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1	ST69	弥生土器 壷	13.4	(4.0)	−	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
2	〃	〃 〃	17.2	(3.0)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，口縁端部は凹線状に凹む。	
3	〃	〃 〃	20.0	(2.7)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，口縁端部は凹線状に凹む。	
4	〃	〃 〃	12.6	(6.0)	−	−	複合口縁。口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ	
5	〃	〃 〃	−	(10.3)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にタタキとハケ	
6	〃	〃 甕	−	(5.1)	−	−	口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にヨコ方向のヘラケズリ，胴部外面にハケとヨコナデ	
7	〃	石製品 砥石	9.1	3.7	3.2	−	断面五角形を呈し，石材は流紋岩	重量93.7g
8	〃	弥生土器 壷	−	(4.5)	−	−	内面にナデ，外面にハケと3条の沈線	
9	〃	〃 甕	16.7	(6.2)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデのち指オサエ，胴部外面にハケ	
10	〃	〃 〃	−	(7.4)	−	3.7	胴部内面にナデ，胴部外面にハケ，底部外面にナデ	
11	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	3.4	胴部内面にナデ，胴部外面にハケ，底部外面にナデ	
12	〃	〃 〃	−	(4.1)	−	3.7	胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキ	
13	〃	〃 鉢	9.0	4.5	−	3.3	摩耗のため調整は不明	
14	〃	〃 〃	12.1	6.9	−	3.4	摩耗のため調整は不明	
15	〃	〃 〃	19.6	(3.8)	−	−	内面にハケ，口縁部外面にヨコナデ，体部外面にタタキ	
16	〃	〃 〃	21.0	(5.2)	−	−	口縁部内面にハケ，口縁部外面にナデ，体部内外面にヘラミガキ	
17	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	2.9	全体的に摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケ	
18	〃	〃 〃	−	(3.4)	−	4.6	体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデ，底部外面にナデ	
19	〃	石製品 石庖丁	7.9	5.1	1.3	−	打製。両端にわずかな抉り。石材は砂岩	重量59.3g
20	〃	弥生土器 壷	−	(2.9)	−	2.0	摩耗が著しく調整は不明瞭だが，胴部内面にハケ，底部内面に指頭圧痕	
21	〃	〃 〃	−	(6.4)	−	5.0	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
22	〃	〃 〃	−	(13.1)	20.5	6.1	胴部下端と底部の内面に強いナデ，胴中央部内面と胴部外面にハケ，底部外面にナデ	
23	〃	〃 甕	−	(4.4)	−	6.1	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
24	〃	石製品 石錘	5.2	4.5	1.3	−	両端に抉り。石材は砂岩	重量32.1g
25	〃	弥生土器 甕	−	(31.2)	25.6	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部下半の内面にナデ，外面にタタキとナデ	

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
26	ST69	弥生土器 甕	−	(4.1)	−	4.2	内面にナデ，外面にハケ	
27	〃	〃 鉢	12.6	6.0	−	1.0	口縁部内外面にヨコナデ，体上半部内面にハケと底部内面に指オサエ，体部から底部外面にナデと指頭圧痕	
28	〃	〃 〃	13.9	8.0	−	4.9	口縁部内面にハケ，底部内面に指オサエ，外面全体にタタキ，体部外面下半に指オサエを加える。	
29	〃	〃 〃	14.1	8.4	−	5.2	台付き。口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケ，台部にナデ	
30	〃	〃 〃	18.0	(7.4)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁端部内外面にヨコナデ，外面にタタキ	
31	〃	〃 ミニチュア	−	(10.0)	8.4	3.0	丁寧な調整を施す。頸部内外面にヨコナデ，胴部内外面にナデ調整と指頭圧痕	
32	ST70	〃 壺	19.0	(10.9)	−	−	口縁端部はヨコナデのため面をなす。口縁部内外面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ	
33	〃	〃 〃	−	(3.4)	−	3.9	内面にナデ，外面にタタキ	
34	〃	〃 甕	−	(2.8)	−	3.2	内面にナデ，外面にハケのちナデ，底部外面にナデ	
35	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	3.4	内面にナデ，外面にハケのちナデ，底部外面にナデ	
36	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	3.5	内面に指オサエ，外面にハケ，底部外面にナデ	
37	〃	〃 〃	−	(4.9)	−	4.7	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にハケ，底部外面にナデ	
38	〃	〃 鉢	10.8	6.1	−	1.0	口縁部から体部内面にハケ，口縁部に指オサエ，底部内面と外面全体にナデ，体部下半に指オサエを加える。	
39	〃	〃 〃	12.5	6.6	−	2.6	完存。口縁部から体部内面にハケ，底部内面と外面全体にナデ	
40	〃	〃 〃	13.6	6.8	−	2.8	内面全体にハケのちナデ，口縁部から体部外面にタタキ，底部外面にナデ	
41	〃	〃 〃	12.4	(7.1)	−	−	内面にハケ，外面にナデ，体部内面下半にナデ調整を加える。	
42	〃	〃 〃	17.6	(5.9)	−	−	内面に丁寧なヘラナデ，外面にタタキ	
43	〃	〃 〃	17.8	(7.1)	−	−	口縁端部がヨコナデのため面をなし，口縁部内外面にハケ，体部内面下半にナデ，体部外面下半にタタキのちハケ	
44	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	3.6	内面にハケ，外面にナデ	
45	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	4.6	内面に丁寧なナデ，外面にタタキ，底部外面にナデ	
46	〃	〃 〃	9.4	3.9	−	3.8	手づくね成形。内面全体にハケ，外面全体に指オサエとナデ，底部内外面にナデ	
47	〃	〃 〃	10.4	3.6	−	2.2	手づくね成形。摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデ	
48	〃	〃 〃	−	(5.8)	−	−	脚付き。摩耗のため調整は不明	
49	〃	〃 高杯	−	(4.6)	−	14.0	穿孔は5孔。摩耗のため調整は不明	
50	〃	土製品 支脚または土錘	−	8.2	−	6.3	ほぼ完存。中央に穿孔。表面にタタキとナデ	上部径7.0㎝ 孔径2.1㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
51	ST70	弥生土器 壺	−	(5.4)	−	1.8	胴部内外面に丁寧なハケ，底部外面にナデ	
52	〃	〃 鉢	−	(4.4)	−	4.6	内面にハケのちナデ，外面に丁寧なハケ，底部外面にナデ	
53	〃	〃 〃	7.6	6.1	−	2.4	手づくね成形。内面全体にハケ，外面にタタキのちナデ，底部外面にナデ	
54	〃	庄内式土器 甕	17.8	(6.1)	−	−	口縁部内面にハケ，口縁部外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ調整，胴部外面にタタキとハケ	
55	〃	弥生土器 壺	−	(1.7)	−	−	口縁端部に凹線，内面に密なヘラミガキ，外面にヨコナデ	
56	〃	〃 甕	−	(3.2)	−	8.1	底部外面がやや凹む。摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にナデ	
57	〃	〃 〃	−	(7.1)	−	3.4	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にタタキ	
58	〃	〃 〃	−	(5.7)	−	1.9	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
59	〃	〃 鉢	11.9	6.9	−	2.7	口縁端部内外面にヨコナデ，内面全体にハケ，外面全体にナデ，内面下半にナデ	
60	〃	石製品 台石	25.4	15.0	12.0	−	片面に弱い使用痕。石材は砂岩	重量6.4kg
61	ST71	弥生土器 壺	17.8	(17.6)	26.2	−	広口壺。口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部から肩部内面にヨコナデ，胴部内面にナデ，外面全体にハケ	
62	〃	土製品 支脚または土錘	−	6.5	−	5.6	半分を欠損。中央に穿孔。表面にナデとヘラナデ	上部径(6.2)㎝ 孔径(1.6)㎝
63	〃	弥生土器 甕	−	(14.6)	15.6	1.7	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴部外面にハケ調整とナデ調整を加え，胴部外面中位に煤が付着	
64	ST72	〃 〃	13.5	(14.9)	15.0	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴部内面上半に指オサエ，胴部内面下半に指オサエとナデ調整を加える。	
65	〃	〃 鉢	−	(4.0)	−	3.8	摩耗のため調整は不明	
66	〃	石製品 石庖丁	(3.7)	(5.1)	1.4	−	約1/3のみ残存。端部に抉り。石材は砂岩	重量(29.6)g
67	〃	弥生土器 鉢	−	(2.1)	−	2.5	内面にハケ，外面にタタキ	
68	ST73	〃 壺	−	(6.0)	−	−	内外面ともハケのちヨコナデ，頸部下端の屈曲部外面に不整形の刺突を施す。	
69	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	5.7	底部外面がやや凹む。胴部内外面にハケ，胴部外面下端にナデと指オサエ，底部内面にナデと指頭圧痕	
70	〃	〃 〃	−	(5.4)	−	5.2	内面にナデ，外面にタタキのちヘラナデ	
71	〃	〃 〃	−	(5.5)	−	5.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
72	〃	〃 〃	−	(4.4)	−	4.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
73	〃	〃 甕	15.0	(8.0)	−	−	口縁端部はヨコナデにより面をなす。内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴部外面にハケ	
74	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	7.0	内面にヘラナデ，外面にハケのちナデ，底部外面にナデ	
75	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	2.6	内面にナデ，外面にハケ	

遺物観察表4

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
76	ST73	弥生土器 甕	−	(6.2)	−	1.6	胴部内面にナデ，底部内面にハケと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
77	〃	〃 鉢	13.5	5.5	−	2.7	内面全体にハケ，外面全体にナデ，底部内面にヘラミガキ調整を加える。	
78	〃	〃 〃	−	(2.0)	−	4.2	底部外面に円盤状の粘土板を貼付し，内面にナデ，外面に指オサエ	
79	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	2.0	内外面にナデ，体部外面下端にハケ	
80	〃	〃 高杯	−	(3.6)	−	−	杯部と脚部の接合部分が残存。外面全体に丁寧なヘラミガキ，脚部内面にナデ	
81	〃	〃 〃	−	(6.6)	−	−	外面全体に丁寧なヘラミガキ，脚裾部内面にヨコナデ，脚柱部内面にナデ	
82	〃	〃 〃	−	(3.4)	−	8.6	摩耗のため調整は不明	
83	〃	土製品 支脚	−	(11.6)	−	8.9	中実。摩耗のため調整は不明	
84	〃	〃 支脚または土錘	−	6.6	−	6.5	ほぼ完存。中央部に穿孔。表面にナデ，被熱痕が認められる。	上部径6.5㎝ 孔径1.8㎝
85	〃	石製品 石庖丁	7.3	4.6	1.5	−	完存。両端に抉り。石材は細粒砂岩	重量49.4g
86	〃	〃 叩石	12.1	9.4	3.5	−	片面に明瞭な敲打痕。石材は砂岩	重量584.8g
87	〃	庄内式土器 甕	15.0	(3.2)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にタタキ	
88	〃	弥生土器 鉢	7.8	5.6	−	3.4	ほぼ完存。手づくね成形。内外面に明瞭なナデと指頭圧痕	
89	〃	石製品 台石	29.8	24.7	6.9	−	片面に明瞭な使用痕。石材は砂岩	重量7.4kg
90	〃	〃 砥石	17.8	7.1	3.0	−	3面に使用痕。石材は粗粒砂岩	重量597.2g
91	ST74	弥生土器 壺	−	(4.4)	−	4.2	内面にナデ，外面にハケ，底部外面にタタキ	
92	〃	〃 〃	−	(5.1)	−	5.0	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
93	〃	〃 〃	−	(10.4)	−	4.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，内外面にハケ	
94	〃	〃 〃	−	(7.8)	−	4.4	内外面に丁寧なハケ，底部外面にナデ	
95	〃	〃 甕	14.1	21.4	16.2	1.6	口縁部内面にハケ，胴部にハケとナデ，口縁部外面にハケのち指オサエ，胴部外面全体にタタキのちナデとハケ	
96	〃	〃 〃	14.5	29.6	18.7	2.9	口縁部にハケ，胴部内面にハケとナデ，胴部外面にタタキのちハケ，口縁部と胴上半部の外面に煤が付着	
97	〃	〃 〃	10.6	(10.2)	14.7	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケ	
98	〃	〃 〃	14.0	(10.4)	17.0	−	口縁部内面にナデ，胴部内面に強いナデ，外面全体にタタキ，胴中央部外面に煤が付着	
99	〃	〃 〃	14.2	(13.6)	15.6	−	口縁部内面にナデ，胴部内面に強いナデ，外面全体にタタキ，胴下半部にハケ調整を加え，煤が付着	
100	〃	〃 〃	15.2	(15.0)	16.1	−	口縁部内面にハケ，胴部内面に粗いハケ，外面全体にタタキのちナデ，胴上半部外面に煤が付着	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
101	ST74	弥生土器 甕	16.0	(7.2)	−	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキ，口縁部外面に指オサエ，胴部外面にハケ調整を加える。	
102	〃	〃 〃	16.0	(10.9)	21.8	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキ，口縁屈曲部内面にヘラケズリ，内面の一部に煤が付着	
103	〃	〃 〃	−	(3.3)	−	2.0	内面にハケ，外面にタタキのちハケ，底部外面にタタキ	
104	〃	〃 〃	−	(7.3)	−	2.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデ，外面にハケ	
105	〃	〃 〃	−	(6.9)	−	−	内面にナデ，外面にタタキのちナデ	
106	〃	〃 鉢	10.6	5.3	−	2.3	口縁部から体部内面にハケ，外面全体にタタキのちナデ，底部内面にナデ，口縁部外面に煤が付着	
107	〃	〃 〃	11.2	6.0	−	2.0	内面全体に丁寧なハケ，外面全体にタタキ，底部内面にナデ	
108	〃	〃 〃	12.8	7.3	−	1.5	手づくね成形。内面全体にハケ，外面全体にタタキ，口縁部外面にヨコナデ調整を加える。	
109	〃	〃 〃	14.8	9.7	−	4.6	内面全体にハケ，外面にタタキのちナデと指オサエ，底部外面にナデ，体下半部と底部の内面にナデ調整を加える。	
110	〃	〃 〃	15.7	7.4	−	3.5	口縁部と体上半部内面にハケ，底部内面にナデ，外面全体にタタキ，体下半部外面に煤が付着	
111	〃	〃 〃	16.5	6.4	−	2.0	内面に粗いハケのちナデ，外面にタタキ，外面にナデ調整と指オサエを加える。	
112	〃	〃 〃	16.5	8.1	−	5.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，体部外面にタタキ，底部外面にナデ	
113	〃	〃 〃	18.3	10.9	−	2.3	ほぼ完存。内面全体にハケ，外面全体にタタキ，体部から底部の内面と口縁部外面にナデ調整を加える。	
114	〃	〃 〃	9.6	6.8	−	3.2	手づくね成形。内面全体にハケ，外面全体にナデ，底部内面にナデ，体部外面下端にタタキ	
115	〃	〃 〃	16.0	8.5	−	4.1	ほぼ完存。口縁部内面にヘラナデ，体部から底部の内面にハケ，底部外面にナデ，体部外面下端にタタキ	
116	〃	〃 〃	28.6	(10.0)	−	−	内面にハケ，外面にタタキのちナデ	
117	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	1.2	内面にナデ，外面にタタキのちナデ調整を加え，底部外面にナデ	
118	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	4.1	内外面に丁寧なナデ	
119	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	4.0	内外面に丁寧なナデ	
120	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	4.3	内外面に丁寧なナデ	
121	〃	〃 〃	−	(3.4)	−	2.6	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面に丁寧なナデ	
122	〃	〃 〃	−	(4.1)	−	−	内面にハケのちナデ，外面に丁寧なナデ	
123	〃	〃 高杯	−	(7.6)	−	−	杯部内面にナデ，杯部と脚部の接合部にヨコナデ，脚部にハケ	
124	〃	土製品 支脚	−	(10.7)	−	−	脚部と指部を欠損。摩耗のため調整は不明	
125	〃	石製品 叩石	11.9	9.8	4.4	−	両端部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量746.9g

遺物観察表6

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
126	ST74	弥生土器 甕	14.4	(7.3)	−	−	口縁部から胴上端部内面にハケ，胴中央部内面にナデ，外面全体にタタキ	
127	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	2.8	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデ調整，外面にタタキ	
128	〃	〃 〃	−	(10.5)	−	2.4	内面にナデ，胴部外面にタタキとハケ。胴中央部外面にハケとヘラナデ，胴下半部外面にヘラナデを加える。	
129	ST75	〃 壺	16.4	(7.4)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にハケ	
130	〃	〃 〃	11.3	18.1	16.4	3.0	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケとヘラケズリ，胴部外面にタタキのちヘラケズリとヘラナデ	
131	〃	〃 〃	12.2	24.2	20.9	2.9	口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にタタキ，胴部外面にハケとタタキ。外面に煤が付着	
132	〃	〃 〃	13.6	29.4	24.0	1.8	口縁部内面にハケ，胴上端部にヘラケズリ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ，胴部内面にはナデ調整を加える。	
133	〃	〃 〃	17.1	31.1	25.6	1.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケとナデ，外面にタタキ	
134	〃	〃 〃	20.0	31.6	28.8	4.1	口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデとハケのちナデ。胴部外面全体にタタキのちハケとヘラミガキ	
135	〃	〃 〃	19.7	32.5	28.9	2.0	口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，外面は上半部にハケのちヘラミガキ，下半部にタタキのちナデ，底部外面にナデ	
136	〃	〃 〃	−	(31.0)	28.7	6.0	内面全体にナデ，外面全体にタタキ，外面上下端にハケ調整を加える。	
137	〃	〃 〃	15.0	(7.5)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にタタキ	
138	〃	〃 〃	13.6	(22.2)	24.6	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケとナデ，胴部外面にタタキ，胴中央部から下半部外面にナデ調整を加える。	
139	〃	〃 〃	19.8	(2.6)	−	−	広口壺。内外面にハケ	
140	〃	〃 〃	17.8	(7.9)	−	−	複合口縁壺。口縁部外面に3条単位の波状文を2重に配する。頸部と胴部の境に粘土帯を貼付し，刻みを施す。	
141	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	−	口縁端部を上方に拡張し，3条の波状文を配する。	
142	〃	〃 〃	−	(14.8)	15.1	1.6	内面全体にナデ，胴上半部外面にハケ，胴下半部にタタキ，胴下半部外面にハケ調整を加える。	
143	〃	〃 〃	−	(19.9)	20.2	1.4	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケとナデ，外面にタタキとハケ	
144	〃	〃 〃	−	(18.1)	28.5	−	内面にハケ，外面にタタキ，内面下端にヘラナデ，外面にハケ調整を加え，中央部に煤が付着	
145	〃	〃 〃	−	(11.8)	−	4.0	内面にナデ，外面は胴中央部にハケ，胴下半部にタタキ，胴下半部にハケ調整を加える。	
146	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	2.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデと指オサエ，外面にタタキ	
147	〃	〃 甕	15.6	21.2	16.9	1.9	胴部内面にナデ，外面全体にタタキ，胴下半部外面にハケ調整を加え，口縁部から胴中央部外面に煤が付着	
148	〃	〃 〃	12.4	23.4	19.1	1.6	胴部内面にナデ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にタタキ，口縁部から胴下半部の外面に煤が付着	
149	〃	〃 〃	13.6	(8.1)	14.4	−	口縁部内面にナデ，胴上半部にハケ，胴中央部にヘラケズリ，口縁部外面に指オサエ，胴部外面にタタキのちハケ	
150	〃	〃 〃	13.0	(11.7)	15.4	−	口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にハケとヘラナデ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキ，胴部上端にハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
151	ST75	弥生土器 甕	14.4	(14.8)	17.7	−	口縁部内面にナデと指オサエ，胴部内面にナデ，口縁部外面にナデ，胴部外面にタタキのちナデ	
152	〃	〃 〃	14.2	(9.2)	−	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面全体にタタキ，胴部外面にハケ調整を加える。	
153	〃	〃 〃	14.7	(5.3)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁部外面にハケとヨコナデ，胴部外面にタタキとナデ	
154	〃	〃 〃	15.6	(5.9)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケ，口縁部外面に煤が付着	
155	〃	〃 〃	−	(7.5)	−	0.9	内面にヘラナデ，外面にタタキのちハケ	
156	〃	〃 〃	−	(12.9)	15.3	2.1	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケとナデ	
157	〃	〃 〃	−	(3.0)	−	3.0	内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
158	〃	〃 鉢	8.0	5.0	−	3.0	コップ状。内外面にナデ	
159	〃	〃 〃	−	(6.9)	−	1.2	コップ状。手づくね成形。摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面下端にタタキ	
160	〃	〃 〃	11.4	5.2	−	5.2	口縁部から体部内面に粗いハケ，底部内面と外面全体にナデ	
161	〃	〃 〃	11.3	5.0	−	3.6	口縁部内外面にヨコナデ，その他の部位にナデ	
162	〃	〃 〃	13.2	6.3	−	2.0	口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面にハケとナデ，体部外面下端に静止ヘラケズリ	
163	〃	〃 〃	16.7	7.8	−	4.0	手づくね成形。口縁部内面にヨコナデ，体部から底部内面にハケのちヘラミガキ，外面全体にタタキのちナデと指オサエ	
164	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	3.4	内面に粗いハケ，外面にタタキのち指オサエ，底部外面にナデ	
165	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	5.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面に丁寧なヘラミガキ	
166	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	7.6	内面にナデ，外面に密なヘラミガキ	
167	〃	〃 〃	7.7	4.3	−	1.8	口縁部内面にヘラミガキ，底部内面に指オサエ，外面全体に指オサエとナデ	
168	〃	〃 〃	7.6	5.1	−	−	ほぼ完存。手づくね成形。内外面に指オサエとナデ	
169	〃	〃 〃	11.2	5.3	−	−	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケ，体部外面と底部内外面にナデ	
170	〃	〃 〃	12.1	4.4	−	1.3	手づくね成形。内面にナデのちヘラミガキ，外面にナデ	
171	〃	〃 〃	12.3	6.2	−	3.0	ほぼ完存。摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケ，外面にタタキとナデ	
172	〃	〃 〃	13.2	5.1	−	2.0	口縁部内面にナデ，体部内面に指オサエ，体部外面にタタキ，底部外面にナデ，口縁部から体部外面にナデ	
173	〃	〃 〃	11.4	(5.0)	−	−	手づくね成形。口縁端部はヨコナデにより面をなし，口縁部内面と外面全体にナデ，体部から底部内面にヘラミガキ	
174	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	2.8	体部内面にハケ，底部内面と外面全体にナデ	
175	〃	〃 〃	−	(4.1)	−	2.0	体部内面にハケ，体部外面にハケのちナデ，底部内外面にナデ	

遺物観察表8

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
176	ST75	弥生土器 鉢	8.1	2.7	−	−	ほぼ完存。内外面に指頭圧痕	
177	〃	〃 〃	9.5	2.4	−	2.8	内面に丁寧なナデ，外面に指オサエ	
178	〃	〃 〃	9.6	3.5	−	2.2	ほぼ完存。調整は摩耗のため不明	
179	〃	〃 〃	−	(2.8)	−	4.6	脚付き。内面にヘラミガキ，外面にナデ	
180	〃	〃 〃	6.8	4.0	−	2.9	内面と口縁部外面に指オサエ，体部外面にハケ，底部外面にナデ	
181	〃	〃 〃	7.4	3.5	−	3.0	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面に指オサエ，体部外面にナデ	
182	〃	〃 〃	14.2	9.5	13.2	3.9	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケ	
183	〃	〃 〃	27.6	(11.3)	−	−	口縁部内面にナデとハケ，体部内面にナデ，口縁部外面にハケ，体部外面にタタキ	
184	〃	〃 高杯	13.4	(3.7)	−	−	内外面にヨコナデ，内面に丁寧なヘラミガキ	
185	〃	〃 〃	−	(8.6)	−	10.9	杯部内外面に丁寧なヘラミガキ，脚柱部内外面にナデ，脚裾部内外面にヨコナデ，脚裾部外面の一部にヘラミガキ	
186	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，脚裾部内面にハケ	
187	〃	〃 〃	−	(5.5)	−	9.3	穿孔が3ヵ所。外面と脚裾部内面にヨコナデ，脚柱部内面にナデ，外面全体に粗いヘラミガキ	
188	〃	〃 〃	−	(2.6)	−	12.7	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にヘラミガキ	
189	〃	〃 器台	−	(5.2)	−	10.1	脚裾部内外面にヨコナデ，脚部内外面にナデ	
190	〃	〃 ミニチュア	−	(5.8)	10.1	1.1	内外面にナデ，底部外面に指オサエを加える。	
191	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	2.5	内面にヘラナデとナデ，外面にタタキのちハケ，底部内面にナデ	
192	〃	土製品 支脚	−	(7.3)	−	−	内面にナデ，外面にハケ	
193	〃	石製品 石庖丁	7.6	4.5	1.4	−	両端に弱い敲打痕がみられ，刃部の一部に研磨痕。石材は粘板岩	重量46.7g
194	〃	〃 叩石	13.7	10.6	2.9	−	片側に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量656.2g
195	〃	〃 〃	17.4	8.2	3.9	−	片面と片側に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量866.0g
196	〃	〃 〃	19.7	6.3	5.5	−	両端に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量940.1g
197	〃	〃 磨石	5.5	4.9	4.8	−	片面のみに使用痕。石材は石灰岩	重量200.8g
198	〃	〃 〃	9.3	7.8	4.8	−	ほぼ全体に使用痕。石材は泥岩	重量512.1g
199	〃	〃 砥石	(7.2)	7.4	1.2	−	片側を欠損。片面に使用痕。石材は砂岩	重量(86.1) g
200	〃	〃 〃	18.2	10.2	5.3	−	両面に弱い使用痕。石材は粗粒砂岩	重量1,153.8g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
201	ST75	石製品 台石	25.4	22.0	7.4	−	片面の中央部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量5.6kg
202	〃	庄内式土器 甕	13.5	(2.7)	−	−	摩耗のため調整は不明	
203	〃	東阿波型土器 甕	15.2	(6.7)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴上端部外面にハケ調整	
204	〃	〃 〃	15.0	(11.0)	−	−	口縁部内面にハケのちヨコナデ，胴部内面にナデのち指オサエ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にハケ，外面に煤	
205	〃	弥生土器 甕	16.0	(10.1)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁部外面にタタキのちヨコナデ，胴部外面にハケ，外面全体に煤が付着	
206	〃	〃 鉢	33.2	(16.7)	27.4	−	内外面にハケ，体部内面にヘラミガキを加える。	
207	〃	石製品 叩石	12.0	8.9	5.6	−	両端部に弱い敲打痕。側面に赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量848.2g
208	〃	〃 台石	25.1	23.5	14.2	−	中央部に明瞭な使用痕。石材は砂岩	重量11.2kg
209	〃	弥生土器 鉢	9.5	5.5	−	1.6	内面にハケ，外面にタタキ，体部から底部内面と底部外面にナデ	
210	ST76	〃 壷	17.8	(2.1)	−	−	口縁端部に３条単位の波状文。内面にハケ，外面にタタキのちハケ	
211	〃	〃 〃	21.2	(2.7)	−	−	口縁端部に凹線がみられる。内外面にヨコナデ，外面に幅広のヘラミガキ調整を加える。	
212	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	4.8	内面にナデ，外面にハケ，底部外面にはナデ	
213	〃	〃 甕	−	(2.5)	−	5.2	底部内外面にナデ，胴部外面にハケ	
214	〃	〃 〃	−	(4.3)	−	2.4	底部内外面にナデ，胴部外面にハケ	
215	〃	〃 〃	−	(5.8)	−	3.2	底部内外面にナデ，胴部外面にハケ，外面に煤が付着	
216	〃	〃 鉢	38.3	(10.0)	35.1	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，体部内面にハケ，体部外面にタタキのち極太のハケ調整を加える。	
217	〃	〃 〃	−	(1.9)	−	2.8	底部内面に指オサエ，体部外面にハケ，底部外面にナデ	
218	〃	〃 〃	−	(2.1)	−	3.4	内面に粗いハケ，外面にナデ	
219	〃	〃 〃	−	(1.4)	−	5.4	手づくね成形。内面に指オサエとナデ，体部外面にタタキ，底部外面にナデ	
220	〃	〃 〃	−	(5.4)	−	2.6	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケ，外面にタタキ	
221	〃	〃 〃	−	(3.7)	−	5.2	脚部を有する。内面と体部外面にナデ，脚部外面に指オサエ	
222	〃	〃 高杯	−	(2.4)	−	−	内外面に丁寧なヘラミガキ	
223	〃	〃 〃	−	(2.9)	−	−	内外面に丁寧なヘラミガキ	
224	〃	〃 器台	−	(3.6)	−	7.8	内面にナデ，外面にナデと指オサエ	
225	〃	〃 ミニチュア	−	(1.8)	−	3.8	内面にナデ，体部外面にハケ，底部外面にナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
226	ST76	石製品 石庖丁	7.0	4.9	1.1	−	両端に抉り。石材は砂岩	重量49.4g
227	〃	〃 〃	(5.3)	5.4	1.5	−	約1/2を欠損。石材は砂岩	重量(48.8) g
228	〃	〃 叩石	9.3	8.7	2.8	−	側面1ヵ所に弱い敲打痕。石材は砂岩。	重量329.0g
229	〃	金属製品 鉄鏃	(4.4)	1.3	0.3	−	茎部を欠損。鏃身外形は圭頭形。断面は錆のため不明	重量(4.9) g
230	〃	石製品 叩石	9.6	8.8	2.9	−	片面と側面全周に敲打痕。石材は粗粒砂岩	重量384.3g
231	〃	〃 台石	26.4	19.6	11.4	−	片面に使用痕。石材は砂岩	重量7.0kg
232	ST77	弥生土器 鉢	−	(2.6)	−	3.7	内面にハケ，外面にナデ，底部外面にタタキ	
233	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	4.0	内面全体と体部外面にナデ，体下端部と底部外面にヘラケズリ	
234	〃	石製品 叩石	11.4	9.9	3.4	−	側面の一部に敲打痕。側面を中心に赤色顔料が付着。石材は細粒砂岩	重量575.0g
235	ST78	弥生土器 壷	−	(13.5)	−	−	内面全体に強いナデ，外面全体にタタキ，胴下半部内面に指オサエ，外面全体に丁寧なナデ	
236	〃	〃 甕	14.9	(4.0)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にタタキ，一部に煤が付着	
237	〃	〃 〃	13.2	(7.7)	−	−	内面全体と口縁部外面にナデ，胴部外面にタタキ	
238	〃	〃 〃	13.6	(7.5)	17.3	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面に指ナデとヘラナデ，胴部外面にタタキ，外面の一部に煤が付着	
239	〃	〃 〃	16.1	(11.4)	16.4	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキ，胴外面下半部にハケ調整を加え，一部に煤が付着	
240	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	5.2	内面にナデ，外面に丁寧なハケ	
241	〃	〃 鉢	14.1	4.4	−	3.1	口縁部内外面にヨコナデ，底部外面にナデ，体部から底部内面と体部外面に雑なヘラミガキ	
242	〃	〃 〃	15.4	6.5	−	6.6	手づくね成形。摩耗のため調整は不明瞭だが，器面全体にナデ調整	
243	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	1.4	内面に丁寧なナデ，外面に雑なナデ	
244	〃	〃 〃	12.9	4.6	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面に丁寧なナデ，外面全体に雑なナデ	
245	〃	〃 〃	6.6	(3.6)	−	−	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデ	
246	〃	〃 〃	−	(8.1)	10.0	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部から底部内面にナデ，体部から底部外面に丁寧なヘラミガキ	
247	〃	〃 高杯	−	(2.5)	−	−	内外面に雑なヘラミガキ	
248	〃	〃 〃	−	(3.7)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にヨコナデ，穿孔は3孔と考えられる。	
249	〃	〃 製塩土器	−	(6.1)	−	4.4	台付き。内面全体にハケ，体部外面にタタキのち指オサエ，台部外面に指オサエ	
250	〃	土師器 甕	12.4	(11.5)	16.8	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にヘラケズリ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にナデ，胴部外面の一部に煤が付着	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
251	ST78	石製品 叩石	13.2	9.2	2.9	−	側面に強い敲打痕。石材は中粒砂岩	重量481.3g
252	〃	〃 〃	11.1	10.4	5.2	−	側面全体に明瞭な敲打痕。石材は粗粒砂岩	重量872.6g
253	ST79	弥生土器 壺	8.4	18.3	13.1	4.1	口縁端部内外面にヨコナデ，頸部内面にナデ，胴部内面にハケ，外面にハケとヘラミガキ，胴部外面の一部に煤が付着	
254	〃	〃 〃	22.4	(38.3)	−	8.8	胴部を欠損。内面全体と頸部外面にハケ，口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面と胴部外面にヘラミガキ調整を加える。	
255	〃	〃 〃	14.8	(8.2)	−	−	口縁端部はヨコナデにより面をなし，内面全体にハケ，外面全体にタタキ，外面にハケ調整を加える。	
256	〃	〃 〃	13.4	(21.3)	22.7	−	口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのち指オサエにハケ	
257	〃	〃 〃	−	(2.2)	−	−	口縁端部の拡張部内外面に交差する刻みを配する。内外面にヘラミガキ	
258	〃	〃 〃	−	(9.2)	−	−	内面にナデ，外面にヘラミガキ	
259	〃	〃 〃	−	(28.0)	20.0	−	口縁部を欠損。内面全体にナデ，外面全体にタタキのちハケ	
260	〃	〃 〃	−	(6.8)	−	4.9	胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にタタキとハケ	
261	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	5.1	胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケ，底部外面にタタキ	
262	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	5.2	内面にナデ，外面にハケのちナデ，底部外面にタタキとナデ	
263	〃	〃 〃	−	(13.4)	−	5.6	胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキ，胴中央部外面にハケ，胴下半部外面と底部外面にナデ	
264	〃	〃 〃	−	(3.9)	−	6.3	内面にナデ，外面にタタキのちナデ，底部外面にナデ	
265	〃	〃 甕	12.8	19.6	13.7	5.8	口縁部内面にハケ，胴上半部内面にヘラナデ，ヘラケズリ，ナデ。口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にタタキのちハケ	
266	〃	〃 〃	14.8	25.8	17.7	4.6	口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
267	〃	〃 〃	12.9	20.4	13.5	3.9	口縁部外面にヨコナデ，口縁部から胴上端部内面にハケ，胴部外面にタタキのちナデとハケ。胴部外面に煤	
268	〃	〃 〃	14.4	21.4	16.3	4.0	口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケのちヨコナデ，胴部外面はタタキ，胴部外面全体にハケ調整を加える。	
269	〃	〃 〃	14.6	20.4	15.0	4.4	口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面はヨコナデとハケ，ナデ，外面全体にタタキ	
270	〃	〃 〃	14.6	17.9	14.6	2.7	口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのち指オサエ，胴部外面にタタキのち一部にハケ調整を加える。	
271	〃	〃 〃	15.0	29.7	20.5	4.1	口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にナデ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ，胴上半部外面の一部に煤が付着	
272	〃	〃 〃	−	(9.6)	14.1	−	胴部内面は上端部にナデ，中央部にナデのちヘラケズリ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ，外面に煤	
273	〃	〃 〃	15.6	(13.5)	22.7	−	口縁部内外面にハケ，胴部内面は中央部にハケのちヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケとナデ，外面全体に煤が付着	
274	〃	〃 〃	14.0	(8.8)	−	−	口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ	
275	〃	〃 〃	14.4	(8.9)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ，外面全体に煤が付着	

遺物観察表12

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
276	ST79	弥生土器 甕	15.1	(9.4)	14.9	−	口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面はナデとハケ，胴部外面にタタキのちハケ。外面全体に煤	
277	〃	〃 〃	15.4	(4.5)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内外面にハケ	
278	〃	〃 〃	15.8	(10.5)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケ，一部にナデ，胴部外面にタタキ，一部にハケ	
279	〃	〃 〃	16.0	(16.4)	19.6	−	口縁端部と口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面はナデとハケ。胴部外面全体にタタキのちハケ	
280	〃	〃 〃	17.4	(6.8)	−	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴部外面にハケ調整を加え，一部に煤が付着	
281	〃	〃 〃	−	(7.9)	−	3.3	摩耗のため調整は不明瞭だが，底部内面に指頭圧痕とナデ	
282	〃	〃 〃	−	(3.9)	−	3.7	胴部内面にナデ，胴部外面にハケ，底部外面にナデ	
283	〃	〃 〃	−	(10.9)	−	4.3	胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にハケ	
284	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	4.4	胴部内面にヘラナデ，胴部外面にハケのちナデ，底部外面にナデ	
285	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	4.4	胴部内外面にハケ，底部外面にナデ	
286	〃	〃 〃	−	(11.7)	−	4.9	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
287	〃	〃 〃	−	(6.1)	−	5.1	胴部内面にナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
288	〃	〃 〃	−	(9.7)	−	5.1	胴部内面にハケのちナデと指オサエ，胴部外面にタタキのちハケを施し，指ナデとヘラナデを加え，底部外面にタタキのちナデ	
289	〃	〃 〃	−	(2.7)	−	5.8	底部内面にナデ，胴部外面にハケのちナデ，底部外面にナデ	
290	〃	〃 〃	−	(7.0)	−	6.0	胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
291	〃	〃 〃	−	(11.2)	−	6.0	胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ	
292	〃	〃 〃	−	(15.7)	−	6.3	胴部内面にナデとヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケとナデ，底部外面にナデ，胴中央部外面に煤が付着	
293	〃	〃 〃	−	(11.1)	−	6.6	胴部内面にハケとナデ，胴部外面にタタキのちハケとナデ，底部外面にナデ，胴中央部外面に煤が付着	
294	〃	〃 鉢	10.7	5.2	−	3.8	手づくね成形。体部内面にハケのちヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
295	〃	〃 〃	12.3	5.6	−	3.2	手づくね成形。内面全体にヘラナデ，外面全体にナデ	
296	〃	〃 〃	13.4	6.2	−	3.6	内面全体にハケ，体部外面にタタキ，器面全体に幅広い原体によるヘラミガキ調整を加える。	
297	〃	〃 〃	16.6	11.0	−	4.6	口縁部から体部内面にハケ，底部内面にナデ，口縁部から体部外面にタタキのちナデ，底部外面にナデ	
298	〃	〃 〃	23.1	10.2	−	5.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，体部外面にハケ	
299	〃	〃 〃	21.6	(8.1)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケのち丁寧なヘラミガキ調整を加える。	
300	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	5.6	高台を有する。内外面に丁寧なナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
301	ST79	弥生土器 鉢	−	(2.9)	−	5.7	高台を有する。体部外面にハケのちナデ，底部内外面にナデ	
302	〃	〃 〃	−	(3.4)	−	4.0	内面全体に丁寧なヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
303	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	6.2	体部内外面にハケのちヘラミガキ，底部外面にナデ	
304	〃	〃 〃	−	(9.3)	−	6.5	体部内面にハケのちナデ，体部外面にタタキのちハケとナデ，底部外面にタタキ	
305	〃	〃 〃	−	(9.3)	−	8.0	体部内外面にハケのちヘラミガキ，底部外面にナデ	
306	〃	〃 高杯	15.6	14.2	−	18.2	杯口縁部内外面にヨコナデ，杯体部内外面にハケのちヘラミガキ，脚部内外面にハケ	
307	〃	〃 〃	19.2	(7.0)	−	−	口縁部外面にヨコナデ，体部外面と内面全体にハケのち丁寧なヘラミガキ	
308	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	−	体部内外面にハケのちヘラミガキ	
309	〃	〃 〃	−	(4.3)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
310	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，脚部外面にヘラミガキ，脚部内面にナデ	
311	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	−	外面にヘラミガキ，内面にヘラナデ，内面の一部に爪形状圧痕	
312	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	−	摩耗のため調整は不明だが，内面に絞り目	
313	〃	〃 〃	−	(7.1)	−	−	脚柱部外面にハケ，脚裾部外面にヘラミガキ，脚裾部内面にハケのちヨコナデ	
314	〃	石製品 石庖丁	8.5	3.4	1.1	−	完存。表面に研磨痕。石材は粘板岩	重量36.4g
315	〃	〃 〃	(5.5)	6.2	1.8	−	片側を欠損。石材は砂岩	重量(69.8) g
316	〃	〃 叩石	11.1	9.4	3.9	−	片面と側面の一部に敲打痕。石材は砂岩	重量581.6g
317	〃	〃 〃	12.4	9.1	3.7	−	側面の4ヵ所に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量616.7g
318	〃	〃 台石	48.5	19.7	9.5	−	3面に使用痕。石材は砂岩	重量10.2kg
319	〃	弥生土器 壺	18.5	34.4	33.2	6.0	口縁端部内外面にヨコナデ，内面はナデとハケ，外面はハケ，とタタキ	
320	〃	〃 〃	17.7	51.2	39.5	8.8	口縁部内外面にヨコナデ，内面はハケとナデ，外面はタタキのちハケとナデ，胴下半部にハケ	
321	〃	〃 甕	−	(16.4)	22.4	7.2	内面は胴中央部にハケのちヘラケズリ，胴下半部にヘラケズリ，外面は全体にタタキのちハケ	
322	〃	〃 鉢	39.0	(14.7)	34.8	−	注口を有する。内面は全体にハケのちヘラミガキ，外面は全体にタタキ，口縁部外面にヨコナデ，体下半部にハケを加える。	
323	〃	〃 高杯	19.8	15.2	−	12.2	杯口縁部内外面にヨコナデのちヘラミガキ，杯体部内外面と脚部外面にハケのちヘラミガキ，脚部内面にハケ	
324	〃	〃 〃	15.4	(8.8)	−	−	口縁端部はヨコナデにより面をなす。器面の内外面にハケ，杯口縁部外面にヨコナデ調整を加える。	
325	〃	〃 甕	17.2	(34.5)	25.8	5.6	口縁部内外面にヨコナデ，内面はナデとヘラケズリ，胴下端部にナデと指オサエ，外面は全体にハケ，底部外面にはナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
326	ST80	弥生土器 高杯	15.8	(5.7)	−	−	内面は口縁部から体部にかけてハケ，底部はナデ，外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ，体下端部にハケ	
327	ST81	〃 壺	13.4	(4.2)	−	−	内外面にヨコナデ	
328	〃	〃 甕	14.8	(7.3)	15.8	−	口縁端部はヨコナデにより面をなす。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケ	
329	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	−	内面にヘラケズリ，外面にハケのちナデ	
330	〃	〃 甑	−	(7.1)	−	−	底部に孔が認められ，内面にハケと指オサエ，外面にナデとタタキ	
331	〃	〃 鉢	−	(6.5)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケとナデ	
332	〃	〃 〃	7.8	2.2	−	3.4	手づくね成形。内外面に指オサエとナデ	
333	〃	〃 〃	12.0	3.4	−	−	手づくね成形。内面にナデとヘラナデ，外面にナデ	
334	〃	〃 高杯	15.2	(11.6)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，脚柱部外面にヘラミガキ，脚裾部外面にハケ	
335	〃	〃 器台	−	(5.8)	−	12.2	内面にハケ，外面にヨコナデ，内面下半部にヨコナデ，外面全体にヘラミガキ調整を加える。	
336	〃	石製品 叩石	11.9	10.2	3.2	−	両端に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量549.5g
337	〃	〃 〃	15.1	7.3	4.3	−	両端に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量680.0g
338	〃	〃 〃	10.8	9.7	5.4	−	片面と両端に敲打痕。石材は砂岩	重量807.9g
339	〃	〃 〃	19.8	13.9	5.4	−	側面１ヵ所に強い敲打痕，端部と片面に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量2,344.3g
340	〃	〃 砥石	(9.2)	(10.7)	(4.4)	−	3面に使用痕。石材は細粒砂岩	重量(717.4) g
341	〃	〃 台石	33.0	25.4	7.5	−	片面に使用痕がみられ，赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量8.0kg
342	ST82	弥生土器 甕	13.7	(5.0)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にタタキ，口縁部と胴部外面の一部に煤が付着	
343	〃	〃 〃	−	(6.6)	−	1.2	内面にハケ，外面にタタキのちハケ	
344	〃	〃 鉢	11.0	6.2	11.0	−	摩耗のため調整は不明	
345	〃	〃 〃	11.3	7.1	10.3	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデと指ナデ，体部外面にナデ，外面の一部にヘラミガキ	
346	〃	〃 高杯	−	(3.2)	−	12.6	内外面にヨコナデ	
347	〃	土製品 土玉	2.3	2.8	2.6	−	完存。表面にナデと指オサエ	重量17.0g 孔径0.4cm
348	〃	石製品 磨石	12.3	8.2	3.9	−	表面に赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量529.5g
349	ST83	弥生土器 甕	15.1	(4.5)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケ	
350	〃	〃 〃	−	(8.1)	−	4.9	胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
351	ST83	弥生土器 鉢	8.8	4.1	−	0.6	口縁部内外面にヨコナデ，他の器面にナデ	
352	〃	〃 〃	−	(1.6)	−	2.2	器面にナデ，底部外面に葉脈の圧痕	
353	〃	〃 高杯	−	(6.7)	−	11.2	脚裾部内外面にヨコナデ，脚部内面にハケ，脚部外面にヘラミガキ，杯部内面にハケのちヘラミガキ	
354	〃	〃 ミニチュア	3.8	2.8	−	−	器面に指オサエとナデ	
355	〃	石製品 台石	30.8	24.6	13.0	−	断面三角形を呈し，片面にのみ使用痕。石材は砂岩	重量14.2kg
356	ST84	弥生土器 甕	−	(17.8)	13.1	4.3	内面は胴部にナデ，底部に指オサエ，外面はタタキのちハケ，底部外面にナデ，胴中央部外面に煤が付着	
357	〃	石製品 台石	38.6	30.0	9.6	−	両面に使用痕。石材は砂岩	重量14.6kg
358	ST86	弥生土器 壺	16.2	(4.0)	−	−	口縁端部はヨコナデにより面をなし，内面外面にハケ	
359	〃	〃 鉢	−	(4.9)	−	3.8	体部内面にナデ，体部外面にタタキ，底部外面にナデ	
360	〃	〃 高杯	−	(2.5)	−	−	体部内面にハケ，体部外面にヨコナデのちナデ，体部外面下端にヘラケズリ	
361	〃	〃 〃	−	(4.3)	−	−	外面にヘラミガキ，内面にナデ	
362	〃	須恵器 甕	51.6	(3.6)	−	−	器面に回転ナデ，外面に斜行するヘラ描文様	
363	〃	石製品 石庖丁	6.1	4.5	0.7	−	片側のみ抉り。石材は砂岩	重量25.7g
364	〃	〃 叩石	(7.9)	7.9	2.0	−	約1/2残存。端部に敲打痕。石材は砂岩	重量(161.9) g
365	〃	〃 〃	14.3	5.0	4.5	−	端部の片側に敲打痕，もう片側に使用痕がみられ，磨石としての使用も想定される。石材は砂岩	重量469.8g
366	〃	庄内式土器 甕	−	(12.0)	30.9	−	内面にはヘラケズリ，外面にはハケ	
367	〃	石製品 叩石	11.9	8.8	3.9	−	片面と両端部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量583.9g
368	〃	〃 〃	18.2	6.8	4.0	−	片面と両端部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量776.0g
369	ST87	須恵器 杯身	12.4	3.3	−	7.2	ほぼ完存。器面に回転ナデ，底部内面にナデ調整を加え，底部切り離しは回転ヘラ切り	受部径15.0㎝
370	〃	〃 〃	12.4	4.1	−	−	ほぼ完存。器面に回転ナデ，底部内面にナデ調整を加え，底部切り離しは回転ヘラ切り	受部径14.6㎝
371	ST88	弥生土器 壺	−	(4.6)	−	−	内外面にハケ	
372	SB1 P2	須恵器 小壺	4.6	(4.5)	5.4	−	器面に回転ナデ	
373	SB2 P1	弥生土器 高杯	−	(4.8)	−	−	内面にナデとヘラナデ，外面にヘラミガキ	
374	〃 〃	須恵器 杯身	−	(2.7)	−	2.6	内面に回転ナデ，外面に回転ヘラケズリ，底部内面にナデ	
375	〃 P5	〃 〃	12.2	3.1	−	7.4	器面に回転ナデ，底部外面に回転ヘラケズリ	受部径14.9㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
376	SB2 P6	石製品 石庖丁	5.6	3.5	0.9	−	両端の抉りが明瞭ではなく，未成品とみられる。石材は砂岩	重量15.4g
377	〃 P7	瓦 平瓦	(6.7)	2.6	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，端部にヘラケズリ，凹面に布目圧痕，凸面に縄目状のタタキ	
378	〃 P11	石製品 叩石	12.2	7.6	3.6	−	側面6ヵ所に敲打痕。石材は砂岩	重量490.4g
379	〃 P19	弥生土器 甕	−	(2.9)	−	4.9	内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちナデ	
380	〃 P5	石製品 礎盤	38.7	26.3	15.0	−	台石の転用と考えられる。断面は三角形を呈し，1面に使用痕。石材は砂岩	重量20.8kg
381	〃 P12	〃 〃	21.7	16.6	11.3	−	台石の転用と考えられる。全面に使用痕。石材は砂岩	重量5.6kg
382	〃 〃	〃 〃	47.0	21.2	13.8	−	断面三角形を呈し，1面に使用痕と被熱痕。石材は砂岩	重量18.4kg
383	〃 P18	〃 〃	(26.6)	28.5	17.3	−	断面は方形を呈する。石材は花崗岩	重量(23.2) kg
384	SB3 P1	須恵器 杯身	12.7	(2.8)	−	−	器面に回転ナデ	受部径14.6㎝
385	〃 〃	〃 甕	−	(4.8)	−	−	内外面に回転ナデ，外面に沈線と2段の波状文	
386	〃 〃	瓦 平瓦	(7.3)	(6.7)	2.5	−	凹面に布目圧痕，凸面に格子状のタタキ目，凹凸面ともにナデ	
387	〃 P7	須恵器 壺	10.0	(2.3)	−	−	器面に回転ナデ	
388	〃 〃	〃 高杯	−	(2.0)	−	−	外面下端に回転ヘラケズリ，他の部位に回転ナデ，外面下端部に透かしの痕跡	
389	〃 P10	石製品 太型蛤刃石斧	(10.4)	(7.5)	(4.5)	−	基部を欠損。刃部は使用により破損。石材は蛇紋岩	重量(533.6) g
390	〃 P11	須恵器 杯身	12.2	(3.1)	−	−	内外面に回転ナデ	受部径14.5㎝
391	〃 〃	〃 甕	−	(3.9)	−	−	器面に回転ナデ，外面に波状文	
392	〃 P12	石製品 石庖丁	7.9	4.6	1.0	−	未成品と考えられ，両端の抉りは認められない。石材は砂岩	重量49.3g
393	〃 P13	〃 叩石	8.8	8.2	3.1	−	側面の一部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量330.4g
394	〃 P14	土師器 壺	−	(11.3)	14.4	3.4	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面は胴上半部に指オサエとナデ，下半部にハケ，外面にハケ	
395	〃 P15	東阿波型土器 甕	13.7	(3.0)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
396	〃 〃	須恵器 杯蓋	12.6	(2.7)	−	−	器面に回転ナデ	
397	SK5	弥生土器 壺	−	(2.8)	−	−	口縁端部にヨコナデ，内面にヘラミガキ，外面にハケ，口縁端部に波状文	
398	〃	〃 甕	−	(3.3)	−	2.8	内面にナデ，外面にハケ，底部外面にナデ	
399	SK7	〃 壺	9.2	(4.2)	−	−	口縁端部にヨコナデ，外面にハケ，外面に2条の指頭摘み出しによる刻目突帯を貼付し，端部に2孔単位の穿孔	
400	〃	〃 〃	−	(4.9)	−	−	内面にヨコナデ，外面にハケ，外面に微隆起突帯と沈線を配する。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
401	SK7	弥生土器 甕	−	(9.9)	−	−	内外面にナデ，胴上部外面に微隆起突帯	
402	SK8	〃 〃	−	(3.0)	−	1.9	内面にハケのちナデ，外面にハケ	
403	SK10	〃 〃	−	(24.1)	21.0	−	内面は口縁部から胴上端部にハケ，胴中央部から下半部にヘラケズリ，外面はタタキのちハケ，胴上半部外面に煤が付着	
404	SK14	〃 壺	13.6	(5.6)	−	−	口縁端部は凹線状を呈する。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキのちヨコナデ	
405	〃	〃 〃	20.6	(2.8)	−	−	広口壺。口縁端部内外面にヨコナデ，内面にハケ，外面にナデ	
406	〃	〃 〃	−	(2.9)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に複線山形文	
407	〃	〃 甕	13.6	28.0	20.8	4.8	口縁部内面にハケ，口縁部と胴部外面にタタキ，口縁部外面にヨコナデ，胴下半部外面にハケ調整を加える。	
408	〃	〃 〃	−	(2.3)	−	4.5	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデ，外面にタタキ	
409	〃	〃 〃	−	(6.7)	−	3.4	内面に指オサエとナデ，外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
410	〃	〃 〃	−	(6.8)	−	3.8	胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ，底部内外面にナデ	
411	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	7.4	内面に指オサエとナデ，外面にハケとナデ	
412	〃	〃 高杯	18.8	(9.2)	−	−	口縁端部は凹線状を呈し，内面は口縁部にハケ，体部にヘラミガキ，外面はタタキのちヨコナデとハケ	
413	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	−	内面に明瞭な絞り目。内面にヘラケズリのちヘラミガキ，外面にヘラミガキ	
414	〃	〃 ミニチュア	4.0	5.9	4.6	2.2	ほぼ完存。口縁部内外面にハケのちヨコナデ，胴部内外面に指オサエとナデ，底部外面にナデ	
415	〃	石製品 石庖丁	7.7	5.6	1.6	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量79.7g
416	SK16	弥生土器 壺	−	(1.2)	−	−	内面にヨコナデ，外面に粘土帯を貼付し，粘土帯端部に刻目，タテ方向の沈線文を配する。	
417	〃	〃 〃	−	(1.9)	−	−	摩耗のため調整は不明だが，口縁部外面に粘土帯を貼付	
418	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	−	内外面にナデ，外面にヘラ描沈線文	
419	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	8.5	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケとナデ	
420	〃	石製品 石庖丁	(6.6)	4.4	1.2	−	片側を欠損。端部に明瞭な抉りが認められない。石材は砂岩	重量(40.5)g
421	SD1	弥生土器 壺	−	(4.1)	−	6.2	摩耗のため調整は不明	
422	SD3	〃 〃	14.8	(3.6)	−	−	口縁端部は凹線状を呈する。口縁部内外面にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキ	
423	〃	〃 甕	12.8	17.7	14.5	3.2	口縁部内外面にハケのちヨコナデ，胴上端部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケ	
424	〃	須恵器 杯身	12.5	3.5	−	3.9	底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ	受部径14.6㎝
425	〃	土師質土器 椀	−	(2.0)	−	5.0	底部外面下端に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
426	SD3	瓦 平瓦	(9.8)	(10.0)	2.3	−	凹面に布目圧痕，凸面にナデ	
427	SD6	弥生土器 壺	14.7	(2.9)	−	−	口縁端部と内面にヨコナデ，外面にハケのちヨコナデ，幅広の沈線を配する。	
428	〃	〃 〃	18.2	(6.6)	−	−	口縁部内面と外面全体にヨコナデ，胴部内面にナデ	
429	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に多重沈線と複線山形文を配する。	
430	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に多重沈線とタテ方向のヘラ描直線文，上弦と下弦の重弧文を配する。	
431	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に多重沈線と複線山形文を配する。	
432	〃	〃 〃	−	(17.8)	24.4	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にハケのちナデ，外面には多重沈線と斜格子文を配する。	
433	〃	〃 〃	−	(6.1)	−	−	内面にヘラナデ，外面に粗いヘラミガキ	
434	〃	〃 〃	−	(6.4)	−	10.4	胴部内外面にヘラミガキ	
435	〃	〃 甕	17.1	(9.8)	16.8	−	内面と口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にナデ，胴部外面上端に微隆起突帯を貼付，突帯下方に煤が付着	
436	〃	〃 〃	17.4	(10.5)	16.1	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面上端にハケ，胴部内面下半にナデ，外面にハケ，口縁端部に刻目，外面全体に煤	
437	〃	〃 〃	−	(2.2)	−	−	摩耗のため調整は不明。外面に突帯を貼付	
438	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	−	口縁端部にヨコナデ，内外面にハケ，口縁端部外側に刻目	
439	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	5.7	内面にヘラナデ，外面にナデ	
440	〃	〃 〃	−	(5.7)	−	7.0	内面にナデ，外面にハケとナデ，ヘラミガキ調整を加える。	
441	〃	〃 〃	−	(6.1)	−	7.1	内面にナデ，外面に強いナデ	
442	〃	〃 〃	−	(4.6)	−	9.0	内面にナデ，外面に強いナデ，底部内面に指頭圧痕	
443	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	9.3	内面にヘラナデ，外面にハケ	
444	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	9.4	内外面にナデ	
445	〃	〃 〃	−	(4.6)	−	10.2	内外面にナデ	
446	〃	石製品 叩石	14.1	5.9	4.5	−	両端に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量418.5g
447	〃	〃 石錘	8.2	4.2	1.4	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量76.7g
448	SG1	弥生土器 壺	15.4	(28.0)	31.4	−	蓋に転用されたと考えられる。口縁部内外面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ	
449	〃	〃 〃	−	(49.1)	42.4	8.2	棺本体と考えられる。内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケ，胴部外面下端にナデ	
450	SG2	〃 〃	−	(28.5)	30.7	4.7	蓋に転用されたと考えられる。内面は上半部にハケ，下半部にナデ，外面は上半部にハケのちヘラミガキ，下半部にナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
451	SG2	弥生土器 壺	17.2	73.6	54.4	9.1	複合口縁壺。口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキ	
452	〃	石製品 扁平片刃石斧	(5.9)	4.7	1.7	−	基部と刃部を欠損。両面に調整痕。石材は蛇紋岩	重量(84.8) g
453	SG3	弥生土器 壺	−	(32.1)	34.4	8.0	棺本体と考えられる。胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキのちハケ，底部外面にナデ	
454	SG4	〃 高杯	26.2	(10.2)	−	−	蓋に転用されたと考えられる。摩耗のため調整は不明瞭だが，内面全体にヘラミガキ，口縁部外面にヨコナデ	
455	〃	〃 甕	26.4	(28.3)	26.5	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面にタタキのちハケとナデ	
456	〃	〃 壺	−	(47.6)	46.3	10.8	胴上端部外面に断面長方形の突帯を貼付，端部に半竹管状の刺突文，その下方に鋸歯文	
457	〃	〃 高杯	17.1	(3.4)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁端部にヨコナデ，内面にヘラミガキ	
458	SG5	〃 壺	−	(23.3)	−	12.0	棺本体と考えられる。内面にハケ，外面にハケのちヘラミガキ	
459	〃	〃 甕	14.3	35.7	25.8	6.0	口縁部内外面にハケ，胴部内面にナデ，胴部外面にタタキ，胴部外面下端にハケ調整を加える。	
460	〃	〃 壺	13.2	(4.6)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケのちヨコナデ	
461	〃	〃 〃	−	(5.1)	−	6.6	内面にヘラケズリのちナデ，外面にナデ	
462	〃	〃 〃	−	(7.1)	−	6.6	内面にハケのちナデ，外面にハケ	
463	〃	〃 甕	16.4	(7.9)	−	−	内面にハケ，外面にタタキ，胴中央部内面にナデ調整を加える。	
464	〃	〃 〃	−	(2.3)	−	6.6	器面にナデ，底部外面下端に指頭圧痕	
465	〃	〃 鉢	−	(4.6)	−	4.0	内面にハケのちナデ，外面にナデ	
466	〃	〃 高杯	17.0	(9.9)	−	−	内外面にハケ，杯体部外面にはヨコナデ調整を加える。	
467	〃	〃 〃	−	(6.5)	−	−	脚柱部内外面にナデ，脚裾部内面にヨコナデ，脚裾部外面にハケ	
468	〃	〃 〃	−	(5.1)	−	−	内面にナデ，その他の部位にヘラミガキ	
469	〃	石製品 石庖丁	5.9	3.8	0.9	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量23.3g
470	P1	弥生土器 鉢	14.6	8.4	−	5.4	手づくね成形。内面に粗いハケ，外面にタタキのちナデ	
471	〃	〃 〃	15.9	7.2	−	4.0	口縁部内面にハケ，体部内面にハケのちヘラミガキ，外面全体にタタキ，体部外面にナデ調整を加える。	
472	P2	須恵器 壺	−	(5.3)	−	13.7	内面に回転ナデ，外面に回転ヘラケズリ，内面に自然釉が認められる。	
473	〃	〃 甕	15.9	(4.7)	−	−	口縁部と胴上端部内外面に回転ナデ，胴部内面にタタキ，胴部外面にハケ	
474	P3	瓦 平瓦	(9.1)	(8.0)	2.3	−	凹面に丁寧なナデ，凸面に縄目状の圧痕	
475	P4	土師器 甕	21.8	(4.1)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にハケ，胴部内面上端にヨコナデ調整を加える。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
476	P5	土師質土器 杯	−	(1.6)	−	3.5	摩耗のため調整は不明	
477	P6	弥生土器 甕	18.6	(4.8)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケ	
478	P7	〃 壷	−	(5.1)	−	−	頸部内面にナデ，胴部内面にハケ，外面全体にヘラミガキ	
479	P8	土製品 支脚	−	(5.2)	−	−	表面にナデ，指頭圧痕	
480	P9	弥生土器 鉢	−	(2.5)	−	6.6	摩耗のため調整は不明	
481	P10	須恵器 杯身	10.2	(2.8)	−	−	器面に回転ナデ	受部径12.6㎝
482	P11	弥生土器 甕	19.1	(25.0)	23.2	−	口縁端部内外面にヨコナデ，口縁部内面にハケ，胴部内面に指オサエとナデ，胴部外面にハケ	
483	P12	〃 鉢	9.2	7.3	−	4.4	台付き。内面に丁寧なナデ，外面に粗いハケ	
484	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	3.5	台付き。手づくね成形。内面に指ナデとヘラナデ，外面にタタキのちナデ	
485	P13	〃 壷	11.6	(3.7)	−	−	内面にヨコナデ，外面にヘラミガキ，外面に多重沈線と刺突文を配する。	
486	P14	土製品 円盤	3.1	0.5	−	−	高杯の転用。内外面に丁寧なヘラミガキ	
487	P15	弥生土器 高杯	19.4	(4.2)	−	−	口縁部内外面にハケのちヨコナデ，体部内外面にハケのちヘラミガキ	
488	SX1	〃 甕	−	(6.2)	−	7.4	器面にナデ，底部外面下端には指頭圧痕	
489	〃	須恵器 高杯	−	(1.8)	−	−	器面に回転ナデ，杯底部内面にナデ調整を加える。	
490	〃	土師質土器 杯	16.6	(4.7)	−	−	摩耗のため調整は不明	
491	第Ⅰ層	弥生土器 壷	14.7	(5.1)	−	−	内外面にヨコナデ，端部が凹線状に凹む。	
492	〃	〃 〃	15.0	(4.0)	−	−	端部にハケ，内外面にハケのちヨコナデ，端部に刻目	
493	〃	〃 〃	19.0	(6.4)	−	−	複合口縁壷。内面は上半部にナデ，下半部に指オサエのちナデ，外面は上半部にヨコナデ，下半部にハケのちヨコナデ	
494	〃	〃 〃	−	(2.6)	−	−	内面にナデ，外面にハケのちヨコナデ，端部内面に楕円状の突帯を貼付，端部外側に刻目	
495	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	−	内面にヘラミガキ，外面にタタキ原体によるハケのちナデ	
496	〃	〃 〃	−	(9.6)	−	−	内外面にハケ，外面の上端部と下端部にはヨコナデ調整を加える。	
497	〃	〃 〃	−	(6.3)	−	−	内面にハケ，外面にタタキのちハケ，内面にナデ	
498	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	−	器面にナデ，外面には列点文と多重沈線，複線山形文を配する。	
499	〃	〃 〃	−	(10.6)	−	3.7	内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
500	〃	〃 甕	13.9	(5.2)	−	−	内外面にハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
501	第Ⅰ層	弥生土器 甕	−	(6.8)	−	2.9	内面にハケのちナデ，外面にハケ	
502	〃	〃 〃	−	(7.7)	−	7.3	内面に強いナデ，外面にナデのちハケ	
503	〃	〃 〃	−	(8.8)	−	8.0	胴部内外面にナデ，底部内面と胴部外面下端に指オサエ	
504	〃	〃 鉢	−	(4.1)	−	2.6	内面にハケ，外面にヘラケズリ	
505	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	4.0	手づくね成形。内面にヘラナデ，外面にナデ	
506	〃	〃 〃	−	(6.1)	9.2	1.4	摩耗のため調整は不明	
507	〃	須恵器 杯身	14.0	(3.4)	−	−	器面に回転ナデ，底部外面には回転ヘラケズリ	受部径16.4㎝
508	〃	瓦 平瓦	(9.8)	(12.0)	2.4	−	凹面に布目圧痕，凸面には縄目状のタタキ目がみられるが丁寧にナデ消される。全体に自然釉	
509	〃	石製品 石庖丁	7.2	5.0	1.1	−	両端に明瞭な抉り。石材は蛇紋岩	重量44.2g
510	〃	〃 〃	8.5	3.3	1.2	−	両端に明瞭な抉り。石材は結晶片岩	重量51.7g
511	〃	〃 叩石	10.3	9.9	5.3	−	側面と両面に明瞭な敲打痕。石材は砂岩	重量756.1g
512	〃	〃 砥石	9.2	4.7	1.2	−	全面に使用痕。石材は砂岩	重量85.6g
513	〃	〃 〃	(6.0)	(8.7)	(1.5)	−	片面に使用痕。石材は砂岩	重量(110.7)ｇ
514	〃	〃 〃	11.8	5.9	5.7	−	3面に使用痕。石材は砂岩	重量581.5g
515	第Ⅱ層	弥生土器 壺	16.6	(6.1)	−	−	内面にヘラナデと指ナデ，外面にハケ	
516	〃	〃 〃	21.5	(5.1)	−	−	端部内外面にヨコナデ，口縁部内外面にハケ，端部に２列の波状文を配する。	
517	〃	〃 〃	−	(1.9)	−	−	ヨコナデ	
518	〃	〃 〃	−	(2.8)	−	−	端部にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケ，端部には刻目がみられる。	
519	〃	〃 〃	−	(4.1)	−	−	外面にナデがみられ，微隆起突帯とその上部に櫛描きによる上弦の弧文を施す。	
520	〃	〃 〃	−	(4.9)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に多重沈線と下弦の弧文，垂直方向の沈線文を配する。	
521	〃	〃 〃	−	(7.0)	−	2.8	内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
522	〃	〃 甕	12.8	16.4	15.1	1.5	内面は口縁部と胴上半部にハケ，下半部にナデ，外面はタタキ，胴上半部内面にナデ，胴下半部外面にハケ	
523	〃	〃 〃	18.4	(5.0)	−	−	口縁部を肥厚させ，端部外側に刻みを施す。内面にハケ，外面にハケとヨコナデ	
524	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	6.8	胴部外面にハケ，底部外面にナデ，胴部外面下端に指頭圧痕	
525	〃	〃 鉢	10.4	4.8	−	6.0	内面にハケのちナデ，外面にタタキのちナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
526	第Ⅱ層	弥生土器 鉢	−	(3.4)	−	4.8	内面にナデ，外面にタタキのちナデ，底部外面に並行する4列の刻みがみられる。	
527	〃	〃 〃	−	(3.0)	−	−	内面にナデ，外面にタタキのちナデ	
528	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	4.4	脚付き。内面にハケ，外面にヘラケズリ	
529	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	5.4	脚付き。内面に丁寧なナデ，外面に指オサエとナデ	
530	〃	〃 高杯	14.9	(5.4)	−	−	器面にヨコナデ，底部内面にナデ	
531	〃	〃 〃	−	(6.5)	−	−	内面にハケのちヨコナデ，外面に丁寧なヘラミガキ	
532	〃	土師器 甕	13.6	(4.3)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内外面にナデ	
533	〃	〃 高杯	14.5	(5.0)	−	−	杯部内面にハケ，口縁部内外面と杯部外面にヨコナデ，杯部外面下端にヘラケズリ	
534	〃	須恵器 杯身	11.2	3.2	−	5.1	底部外面に回転ヘラケズリ，他の部位に回転ナデ	受部径13.3㎝
535	〃	〃 〃	11.4	3.0	−	2.8	底部外面に回転ヘラケズリ，他の部位に回転ナデ	受部径14.0㎝
536	〃	〃 高杯	−	(3.4)	−	−	器面に回転ナデ，杯部外面下端に1条の沈線	
537	〃	〃 壷	−	(4.8)	−	−	器面に回転ナデ，外面に円形浮文を貼付	
538	〃	〃 鉢	−	(5.0)	−	8.6	底部中央に意図的な穿孔がみられる。体部内外面に回転ナデ，底部外面に回転ヘラケズリ	
539	〃	土師質土器 杯	13.4	4.3	−	7.4	底部に意図的な穿孔がみられる。焼成が極端に悪く，著しく摩耗するが，底部切り離しは回転糸切り	
540	〃	〃 〃	16.0	4.9	−	6.1	高台を有する。調整は摩耗のため不明	
541	〃	〃 〃	16.2	(4.8)	−	−	器面に回転ナデ，体部内面に丁寧なヘラミガキ	
542	〃	〃 〃	−	(1.8)	−	6.9	器面に回転ナデ，底部切り離しは回転糸切り	
543	〃	〃 椀	−	(2.7)	−	6.4	内外面に丁寧なヘラミガキ	
544	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	6.4	摩耗のため調整は不明瞭だが，体部外面下端に回転ヘラケズリ調整，底部外面に回転ナデ	
545	〃	瓦質土器 鍋	18.6	(4.9)	20.8	−	内面全体と胴部外面にナデ，口縁部外面にヨコナデ	
546	〃	〃 〃	25.0	(6.5)	−	−	断面三角形の鍔を有す。摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁部外面にヨコナデ，胴部外面に煤が付着	
547	〃	〃 擂鉢	29.0	(5.7)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面に指頭圧痕とナデ	
548	〃	白磁 碗	−	(2.3)	−	6.6	削り出し高台。見込みに段を有する。	
549	〃	土製品 支脚	−	4.1	−	8.2	断面台形を呈し，上部は凹む。表面にナデと指オサエ，側面に被熱痕	上部径6.0㎝
550	〃	〃 土錘	(3.4)	1.4	1.3	−	全体的に摩耗	重量(4.6)ｇ 孔径0.5㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
551	第Ⅱ層	土製品 土錘	(5.3)	1.8	1.7	−	粗雑な作り，表面に指頭圧痕	重量(14.6) g 孔径0.4㎝
552	〃	石製品 石庖丁	3.9	6.3	0.9	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量28.3g
553	〃	〃 〃	3.8	7.3	1.1	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量32.8g
554	〃	〃 〃	8.2	4.9	1.0	−	両端に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量44.8g
555	〃	〃 〃	(6.5)	4.6	0.8	−	一部を欠損。片側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量(32.7) g
556	〃	〃 〃	8.4	5.2	1.6	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量85.5g
557	〃	〃 〃	6.3	7.9	1.5	−	片側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量92.8g
558	〃	〃 〃	8.7	5.4	1.7	−	両端に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量84.3g
559	〃	〃 〃	8.4	6.2	1.3	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量85.6g
560	〃	〃 穿孔具	7.6	4.8	4.5	−	先端部に使用痕，鉄分が付着。石材は砂岩	重量203.2g
561	〃	〃 叩石	13.2	9.5	3.2	−	両側面と両面に明瞭な敲打痕。石材は砂岩	重量631.0g
562	〃	〃 砥石	5.0	3.7	0.5	−	両面に使用痕。石材は泥岩	重量15.0g
563	〃	〃 〃	(5.2)	8.7	1.5	−	大部分が欠損。片面と側面に使用痕。石材は細粒砂岩	重量(83.8) g
564	〃	ガラス製品 ガラス玉	(0.2)	0.4	0.2	−	約1/2が残存。色調は青色	孔径0.2㎝
565	第Ⅲ層	弥生土器 壺	13.8	(7.5)	−	−	広口壺。摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁部内面にハケ	
566	〃	〃 〃	15.4	(4.0)	−	−	広口壺。口縁端部にヨコナデ，口縁部内面にハケのちヘラミガキ，口縁部外面にヘラミガキ	
567	〃	〃 〃	20.2	(4.5)	−	−	広口壺。口縁端部にヨコナデ，口縁部内外面にハケ	
568	〃	〃 〃	21.4	(4.0)	−	−	広口壺。口縁端部外面に粘土帯を貼付，口縁部内面にナデ，口縁端部内外面と口縁部外面にヨコナデ	
569	〃	〃 〃	16.8	(6.0)	−	−	広口壺。口縁端部に２条の沈線，口縁部内面に粗雑な沈線山形文を配する。内外面ともヨコナデ，外面の一部に煤が付着	
570	〃	〃 〃	16.8	(9.9)	−	−	頸部下端に２条の沈線，口縁端部に指オサエ，内面全体にハケのち粗雑なヘラミガキ，外面全体に粗雑なヘラミガキ	
571	〃	〃 〃	−	(6.9)	−	−	頸部と胴部の境に幅広の突帯を貼付し，ハケ原体による交差する刻みを施す。頸部内面と外面全体にハケ，胴部内面にナデ	
572	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	−	肩部外面に刺突文と鋸歯文。内面にナデ，外面にヘラミガキとヨコナデ	
573	〃	〃 〃	−	(4.1)	−	−	外面に竹管状の列点文と多重ヘラ描沈線文	
574	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	−	外面に断面三角形の穿孔された突帯を貼付し，突帯上方に波状文。内面にナデ，外面にハケ	
575	〃	〃 〃	−	(5.3)	−	−	外面に微隆起突帯を貼付し，多重沈線と複線山形文を配する。内面にナデ，外面にハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
576	第Ⅲ層	弥生土器 壷	−	(4.2)	−	5.7	内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
577	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	10.6	内面にナデ，外面にハケのちヨコナデ	
578	〃	〃 甕	13.7	18.6	17.6	3.3	内面全体にハケ，外面全体にタタキのちハケ，胴下半部内面にヘラナデ調整を加え，胴部外面の一部に煤が付着	
579	〃	〃 〃	16.5	25.7	20.7	2.1	内面はハケとナデのち指オサエ，外面全体にタタキ，胴部内面上端にヘラナデ，胴部上半部にハケ調整を加える。	
580	〃	〃 〃	14.7	(15.7)	21.1	−	内面全体にハケ，口縁部外面に指オサエとナデ，胴部外面にタタキ，胴中央部外面にハケ	
581	〃	〃 〃	16.2	(5.9)	−	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴上端部外面にハケ調整を加える。	
582	〃	〃 〃	21.8	(8.5)	−	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキのちハケ，口縁部の一部に煤が付着	
583	〃	〃 〃	17.9	(4.8)	−	−	口縁端部外面に粘土帯を貼付。口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にハケのちヨコナデ，頸部外面にハケ	
584	〃	〃 〃	−	(10.6)	13.5	3.5	内面にハケ，外面にタタキ	
585	〃	〃 鉢	11.2	5.2	−	−	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラミガキ，体部外面にヘラケズリのちヘラミガキ	
586	〃	〃 〃	7.7	6.0	7.4	1.1	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面に指オサエとナデ	
587	〃	〃 高杯	13.5	(5.5)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部外面にナデ	
588	〃	〃 〃	23.1	(4.9)	−	−	口縁端部外面に扁平な粘土帯を貼付。内外面にハケのちヘラミガキ	
589	〃	〃 〃	25.3	(3.7)	−	−	内面にヘラミガキ	
590	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	−	内面に絞り目，外面にヘラミガキ	
591	〃	〃 〃	−	(11.1)	−	20.2	杯部内外面にハケのち丁寧なヘラミガキ，脚部外面にハケのち丁寧なヘラミガキ	
592	〃	〃 器台	−	(6.1)	−	−	穿孔は3ヵ所。内面にヘラケズリとヘラナデ，外面に丁寧なヘラミガキ	
593	〃	〃 ミニチュア	−	(4.1)	−	2.8	手づくね成形。内面にナデ，外面にタタキ	
594	〃	〃 〃	4.4	6.2	6.2	1.0	手づくね成形。内面にナデ，外面に指オサエとナデ	
595	〃	東阿波型土器 甕	15.1	(8.7)	19.6	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケ	
596	〃	須恵器 杯蓋	15.0	4.4	−	−	ボタン状の摘み。天井部外面に回転ヘラケズリ，他の部位に回転ナデ	摘み径2.4㎝
597	〃	〃 𤭯	−	(6.8)	11.0	−	胴下半部外面に回転ヘラケズリ，他の部位には回転ナデ	
598	〃	〃 鉢	−	(4.7)	−	12.0	内面全体に回転ナデ，外面全体にタタキのち回転カキ目，底部外面下端に回転ヘラケズリ	
599	〃	土師質土器 杯	15.4	4.5	−	7.8	ほぼ完存。器面に回転ナデ，底部切り離しは回転糸切り，板状圧痕が残る。	
600	〃	〃 小皿	7.5	1.6	−	5.5	摩耗のため調整は不明だが，底部切り離しは回転糸切り	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
601	第Ⅲ層	土製品 支脚	−	(15.9)	−	−	脚付き。ほぼ完存。内面にハケとナデ，外面にタタキのちナデ，外面の一部に被熱痕	
602	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	11.0	脚付き。表面に指頭圧痕とナデ	
603	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	−	断面台形を呈し，中空。手づくね成形。上部平坦面は面取りのため多角形を呈する。ヘラナデとナデ	
604	〃	〃 〃	−	5.7	−	7.5	断面方形を呈し，中空。指オサエとナデ，外面に被熱痕	上部径8.0㎝ 孔径4.7㎝
605	〃	〃 〃	−	10.3	−	7.2	ほぼ完存。手づくね成形。指オサエとナデ，外面に被熱痕	上部径7.9㎝
606	〃	石製品 石庖丁	5.8	3.4	0.8	−	両端に粗雑な抉り。石材は砂岩	重量23.2g
607	〃	〃 〃	8.7	4.7	2.2	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量101.9g
608	〃	〃 〃	5.5	4.5	0.8	−	片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量19.6g
609	〃	〃 〃	5.3	4.1	1.1	−	抉りがみられず未成品の可能性。石材は砂岩	重量26.1g
610	〃	〃 〃	5.7	4.9	1.0	−	抉りがみられず未成品の可能性。石材は砂岩	重量27.4g
611	〃	〃 〃	6.1	4.7	0.9	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量31.6g
612	〃	〃 〃	6.9	4.9	1.2	−	両端に弱い抉り。石材は蛇紋岩	重量43.0g
613	〃	〃 〃	7.1	5.7	1.0	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量43.4g
614	〃	〃 〃	6.6	4.7	1.5	−	両端に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量48.4g
615	〃	〃 〃	7.1	5.5	1.4	−	両端に粗雑な抉り。石材は砂岩	重量50.0g
616	〃	〃 〃	7.5	5.1	1.5	−	両端に粗雑な抉り。石材は砂岩	重量57.8g
617	〃	〃 〃	8.2	5.1	1.3	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量59.7g
618	〃	〃 〃	7.8	5.5	1.2	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量61.6g
619	〃	〃 〃	7.3	5.7	1.4	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量70.2g
620	〃	〃 〃	(6.2)	6.7	1.7	−	片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量(96.3) g
621	〃	〃 叩石	9.2	8.6	3.0	−	片面に敲打痕。石材は砂岩	重量349.6g
622	〃	〃 〃	14.3	6.7	3.9	−	両側面に敲打痕。石材は砂岩	重量494.8g
623	〃	〃 〃	11.8	9.0	3.9	−	両側に敲打痕と片側に摩滅痕。赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量639.8g
624	〃	〃 〃	14.6	9.4	4.0	−	両面と両側面に敲打痕。石材は砂岩	重量(799.7) g
625	〃	〃 砥石	(11.1)	(9.3)	2.6	−	大部分を欠損。片面に弱い使用痕。石材は砂岩	重量(299.1) g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
626	第Ⅲ層	石製品 母材	12.9	11.1	4.0	−	石庖丁の母材と考えられ，剥離痕が残る。石材は砂岩	重量774.2g
627	〃	ガラス製品 ガラス玉	0.3	0.3	0.2	−	完存。色調は青色	孔径0.2㎝
628	第Ⅳ層	弥生土器 壷	14.6	29.0	25.6	1.2	内面全体にタタキ原体によるハケ，外面全体にタタキ，外面の胴上端部と下半部にタタキ原体によるハケ	
629	〃	〃 〃	14.0	(6.5)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ	
630	〃	〃 〃	17.2	(7.2)	−	−	長頸壷。口縁端部に刻目。内面は口縁部にハケのちナデ，頸部にナデ，外面は口縁部にヨコナデ，頸部にハケ	
631	〃	〃 〃	16.3	(6.3)	−	−	口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にハケ，胴部内面にナデ，口縁部外面にハケのちヨコナデ，頸部外面にハケ	
632	〃	〃 〃	17.5	(8.5)	−	−	内面は頸部にハケのちヘラミガキ，胴部にハケ，外面は口縁部にハケ，頸部にヨコナデ，胴部にタタキのちナデ	
633	〃	〃 〃	17.0	(2.9)	−	−	広口壷。口縁端部にハケ状原体による刻目，口縁端部内面に櫛描山形文を配する。器面にヨコナデ	
634	〃	〃 〃	18.4	(4.6)	−	−	広口壷。口縁上端に刻み。内面にハケ	
635	〃	〃 〃	18.8	(2.4)	−	−	広口壷。口縁端部に波状文。器面にヨコナデ	
636	〃	〃 〃	19.4	(6.5)	−	−	広口壷。口縁端部にハケ，竹管状の刺突文を配する。口縁部内外面にヨコナデ，内面にハケのちナデ，外面にハケ	
637	〃	〃 〃	19.0	(8.0)	−	−	二重口縁壷。口縁部内面にハケのちヨコナデ，口縁部外面にヨコナデ，頸部外面にハケ	山陰系土器の模造
638	〃	〃 〃	18.7	(4.5)	−	−	二重口縁壷。器面にヨコナデ，外面の一部にハケ	
639	〃	〃 〃	−	(7.2)	−	−	二重口縁壷。内外面にヨコナデ	搬入品
640	〃	〃 〃	−	(10.5)	−	−	複合口縁壷。頸部内面と口縁部外面にヨコナデ，頸部外面にハケのちヨコナデ	搬入品の可能性
641	〃	〃 〃	13.0	(13.5)	18.0	−	口縁部内面と外面全体にヘラミガキ，胴部内面にハケ，口縁部外面と胴中央部外面に煤が付着	
642	〃	〃 〃	−	(14.6)	−	−	長頸壷。摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にタタキ	
643	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	−	口縁端部にハケ原体による交差する刻み，内面にヨコナデ，外面にヨコナデとヘラミガキ	
644	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	−	内外面にナデ，外面に竹管並列刺突文と半円状の多重沈線文，刻目を伴う微隆起突帯，多重沈線	
645	〃	〃 〃	−	(13.2)	−	−	内面にナデ，外面にハケのちナデ，外面に２列の刺突文と多重沈線がみられる。	
646	〃	〃 〃	−	(11.7)	16.1	2.5	内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキ，外面の一部に煤が付着	
647	〃	〃 〃	−	(15.3)	−	6.8	内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケ	
648	〃	〃 〃	−	(5.3)	−	8.4	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にタタキ，胴部外面にハケ調整，底部外面にナデ	
649	〃	〃 〃	−	(46.0)	43.1	10.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，内外面にハケ	
650	〃	〃 甕	13.6	15.4	15.6	1.0	内面は口縁部にハケのちヨコナデ，胴部にハケとナデ，外面は口縁部にヨコナデ，胴部にハケのちヘラミガキ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
651	第Ⅳ層	弥生土器 甕	−	(15.5)	14.0	2.6	内面全体にナデ，外面全体にタタキ，胴上半部外面にナデ	
652	〃	〃 〃	11.7	(19.7)	16.3	6.4	口縁部と胴上端部の内面にナデ，胴部内面にヘラナデ，外面全体にタタキのちハケ	
653	〃	〃 〃	15.6	(23.8)	19.8	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケとナデ，外面全体にタタキのちナデとハケ。胴上半部に煤	
654	〃	〃 〃	12.1	(12.7)	14.7	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にタタキ	
655	〃	〃 〃	16.2	(17.9)	19.5	−	口縁部と胴上半部の内面，外面全体にハケ，胴下半部内面にナデ	
656	〃	〃 〃	12.5	(6.2)	−	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキのち，口縁部外面にナデ，胴部外面にハケ	
657	〃	〃 〃	15.3	(6.0)	−	−	口縁端部に擬凹線。口縁端部と口縁部内面にヨコナデ，胴部内面にハケ，口縁部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ	
658	〃	〃 〃	−	(13.4)	13.5	1.8	内面にナデ，外面にタタキのちナデとハケ	
659	〃	〃 鉢	8.8	4.2	−	2.9	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面にナデ	
660	〃	〃 〃	10.4	4.9	−	3.0	手づくね成形。摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にナデ	
661	〃	〃 〃	12.8	6.8	−	2.9	口縁部内面にハケのちナデ，体部内面にナデ，外面全体にタタキのちナデ	
662	〃	〃 〃	14.2	7.1	−	2.4	手づくね成形。口縁部と体部内面にハケ，底部内面にナデと指オサエ，外面全体にタタキのちナデ	
663	〃	〃 〃	14.6	6.9	−	3.4	内外面にナデと指オサエ	
664	〃	〃 〃	17.0	5.8	−	2.3	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケ，体部外面にヘラケズリ	
665	〃	〃 〃	17.8	7.5	−	5.5	内面全体にナデ，外面全体にタタキ，外面にナデ調整を加える。	
666	〃	〃 〃	18.3	7.7	−	2.5	内外面にハケのちヘラミガキ，底部外面にナデ	
667	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	3.5	内面にハケのち丁寧なヘラミガキ，外面に丁寧なヘラミガキ	
668	〃	〃 〃	−	(9.2)	−	4.7	内面にハケのちナデ，外面にタタキ	
669	〃	〃 〃	9.2	4.9	−	−	手づくね成形。内面にハケ，外面にナデ	
670	〃	〃 〃	16.1	6.4	−	−	内面にハケのちナデ，外面にナデ	
671	〃	〃 〃	10.3	6.9	−	1.0	内面にナデ，外面にタタキ，体上半部外面にナデ	
672	〃	〃 〃	18.6	13.0	−	5.0	口縁端部にヨコナデ，内面にハケとヘラミガキ，外面にタタキとナデ	
673	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	3.0	内面にハケ，外面にナデ，体下端部と底部の外面にナデ	
674	〃	〃 〃	7.0	3.1	−	1.0	手づくね成形。内面にヘラナデ，外面に指オサエ	
675	〃	〃 〃	9.9	3.1	−	0.8	内面にナデ，外面に指オサエ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
676	第Ⅳ層	弥生土器 鉢	12.5	2.8	−	8.0	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面に指オサエとナデ	
677	〃	〃 〃	9.3	(5.0)	−	−	脚付き。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面に指オサエ	
678	〃	〃 〃	−	(3.0)	−	−	脚付き。器面にナデ	
679	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	−	脚付き。内面にナデ，外面にタタキのちナデ	
680	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	7.4	脚付き。杯部内面と脚部外面にナデ，脚部外面にヘラミガキ調整を加える。	
681	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	7.4	脚付き。杯部内外面にナデ，脚部内外面にヨコナデ	
682	〃	〃 〃	7.4	7.2	8.4	2.1	口縁部内外面に指オサエ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデ	
683	〃	〃 〃	8.5	6.7	7.8	1.4	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面に指オサエとナデ，体部外面にナデ	
684	〃	〃 〃	9.0	8.1	8.6	3.7	口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデ，底部外面に静止ヘラケズリ	
685	〃	〃 〃	−	(6.0)	7.1	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にハケのちナデ	
686	〃	〃 〃	−	(5.2)	7.5	2.5	内面に丁寧なナデ，外面に指オサエとナデ	
687	〃	〃 〃	−	(4.2)	7.1	0.9	内面にナデ，外面にヘラミガキ	
688	〃	〃 〃	−	(4.2)	8.3	−	指ナデとヘラナデ，外面にヘラミガキ	搬入品
689	〃	〃 〃	−	(4.3)	8.0	−	器面にナデ	
690	〃	〃 高杯	14.0	(4.6)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケ	
691	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	−	穿孔は4ヵ所。内面にハケ，外面にハケのちヘラミガキ	
692	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	−	内面にナデ，外面に丁寧なヘラミガキ	
693	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	12.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，器面にハケ	
694	〃	〃 器台	10.1	6.7	−	9.8	脚柱部内面にヨコナデ，その他の部位に丁寧なヘラミガキ	
695	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	7.8	内外面に粗いナデ	
696	〃	〃 〃	−	(6.2)	−	9.1	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
697	〃	〃 ミニチュア	5.0	2.7	−	1.2	ほぼ完存。手づくね成形。器面にナデと指オサエ	
698	〃	〃 〃	6.1	2.8	−	−	ほぼ完存。手づくね成形。器面にナデと指オサエ	
699	〃	〃 〃	3.8	2.9	−	1.0	ほぼ完存。手づくね成形。器面にナデと指オサエ	
700	〃	〃 〃	4.9	3.6	−	−	ほぼ完存。手づくね成形。器面にナデと指オサエ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	法量	底径		
701	第Ⅳ層	東阿波型土器 甕	18.6	(4.9)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケ	
702	〃	土師器 壷	8.0	(9.5)	13.1	−	胴部に穿孔。口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面に指オサエとナデ，胴部外面にハケ	搬入品の可能性
703	〃	〃 甕	14.4	27.1	20.4	1.1	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面はハケとヘラケズリのちヘラナデ。胴部外面にハケのちヘラミガキ	
704	〃	〃 〃	17.4	(10.7)	−	−	内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケ	
705	〃	〃 〃	22.4	(5.0)	−	−	内外面にヨコナデのちヘラミガキ	
706	〃	〃 甑	29.0	(7.5)	−	−	単孔式。器面にヨコナデ，内面の一部に煤が付着	
707	〃	須恵器 杯蓋	9.9	3.7	−	−	器面に回転ナデ，天井部内面にナデ	
708	〃	〃 〃	12.3	4.3	−	−	器面に回転ナデ，天井部外面に回転ヘラケズリ	
709	〃	〃 〃	13.2	3.7	−	−	天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，天井部内面にナデ	
710	〃	〃 〃	14.6	4.6	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面に回転ナデ，天井部内面にナデ	
711	〃	〃 〃	14.9	4.7	−	−	天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，外面に自然釉が残る。	
712	〃	〃 〃	15.4	5.0	−	−	口縁端部に明瞭な段を有し，天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ	
713	〃	〃 〃	−	(2.8)	−	−	ボタン状の摘み。器面に回転ナデ，天井部内面にナデ調整を加える。	摘み径2.9㎝
714	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	−	ボタン状の摘み。器面に回転ナデ，天井部内面にナデ調整を加える。	摘み径2.3㎝
715	〃	〃 杯身	11.8	(2.4)	−	−	器面に回転ナデ	受部径13.8㎝
716	〃	〃 〃	12.0	3.7	−	4.4	底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，底部内面に回転ヘラケズリ	受部径14.0㎝
717	〃	〃 〃	12.2	4.2	−	7.8	体部外面下端に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，底部切り離しは回転ヘラ切り	受部径14.6㎝
718	〃	〃 〃	12.7	4.6	−	−	底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，底部内面にナデ	受部径15.0㎝
719	〃	〃 〃	13.0	(4.2)	−	−	底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ	受部径16.0㎝
720	〃	〃 〃	13.2	4.7	−	4.8	底部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，底部内面にナデ	受部径15.6㎝
721	〃	〃 高杯	10.9	(4.3)	−	−	体部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ	受部径13.2㎝
722	〃	〃 〃	−	(4.3)	−	−	脚部内面にナデ，その他の部位に回転ナデ，外面に自然釉が残る。	
723	〃	〃 器台	30.0	(5.0)	−	−	口縁端部に段を有し，器面に回転ナデ，外面に沈線と波状文	
724	〃	〃 壷	12.9	(3.4)	−	−	器面に回転ナデ	
725	〃	〃 〃	21.4	(6.3)	−	−	器面に回転ナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
726	第Ⅳ層	須恵器 壷	−	(7.2)	19.2	−	器面に回転ナデ	
727	〃	〃 甕	19.0	(4.7)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面に回転ナデ，外面にタタキ	
728	〃	〃 転用硯	11.1	(3.0)	−	−	器面に回転ナデ，内面に墨痕が認められる。	受部径13.4㎝
729	〃	土師質土器 杯	−	(2.9)	−	6.6	器面に回転ナデ，底部切り離しは回転糸切り	
730	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	5.7	器面に回転ナデ，底部切り離しは回転糸切り	
731	〃	近世磁器 碗	−	(3.2)	−	4.0	削り出し高台で，外面下部と高台は露胎。器面に透明釉	
732	〃	瓦 丸瓦	(14.9)	(7.5)	2.0	−	玉縁部が残存。凹面に明瞭な布目圧痕，凸面に丁寧なヘラケズリ	
733	〃	〃 平瓦	(9.8)	(8.2)	1.9	−	凹面にヘラナデ，凸面に縄目状のタタキ目	
734	〃	〃 〃	(6.6)	(8.9)	1.9	−	凹面に布目圧痕，凸面にナデ	
735	〃	〃 〃	(15.8)	(17.0)	2.6	−	凹面にヘラケズリ調整，凸面に縄目状のタタキ目	
736	〃	土製品 支脚	−	(17.4)	−	−	指を有する。中空。外面にタタキ，脚部上端に穿孔	孔径1.7㎝
737	〃	〃 〃	−	(12.4)	−	−	指を有するが，指部は欠損。中空。表面にナデと指頭圧痕	
738	〃	〃 〃	−	(8.2)	−	−	指を有する。中空。表面にタタキのちナデ，内面に絞り目，脚部上端に穿孔	
739	〃	〃 〃	−	11.4	−	7.0	ほぼ完存。指を有する。中実。表面にナデと指頭圧痕	
740	〃	〃 〃	−	(7.6)	−	11.1	受部を有する。中空。表面にタタキとナデ	
741	〃	〃 〃	−	(9.7)	−	−	中空。表面にタタキ	
742	〃	〃 〃	−	2.6	−	4.6	ほぼ完存。断面台形を呈し，中空。表面に指頭圧痕とナデ	上部径3.5㎝
743	〃	〃 支脚または土錘	−	8.7	−	4.8	土錘状。中央に穿孔。表面にタタキとナデ，上端部に被熱痕	上部径5.4㎝ 孔径1.6㎝
744	〃	〃 〃	−	7.1	−	5.0	土錘状。横断面は五角形を呈し，中央に穿孔。表面にナデと指頭圧痕	上部径6.4㎝ 孔径1.9㎝
745	〃	〃 〃	−	7.2	−	5.6	土錘状。中央に穿孔。表面にタタキとナデ，横側に被熱痕	上部径6.0㎝ 孔径1.8㎝
746	〃	〃 〃	−	7.3	−	5.6	土錘状。中央に穿孔。表面にタタキとナデ，横側に被熱痕	上部径6.6㎝ 孔径1.7㎝
747	〃	〃 〃	−	8.0	−	5.8	土錘状。横断面は五角形を呈し，中央に穿孔。表面にナデ調整	上部径5.6㎝ 孔径2.0㎝
748	〃	〃 〃	−	8.6	−	6.0	土錘状。横断面は多角形を呈し，中央に穿孔。表面にナデと指頭圧痕，部分的に被熱痕	上部径5.9㎝ 孔径1.7㎝
749	〃	〃 〃	−	7.7	−	6.0	土錘状。横断面は多角形を呈し，中央に穿孔。表面にナデと指頭圧痕	上部径6.0㎝ 孔径1.6㎝
750	〃	〃 〃	−	7.6	−	6.0	土錘状。表面にタタキのちナデ，上端部にタタキ，部分的に被熱痕	上部径6.0㎝ 孔径1.9㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
751	第Ⅳ層	土製品 支脚または土錘	−	9.0	−	6.2	土錘状。横断面は五角形を呈し，中央に穿孔。表面にタタキのちナデとヘラナデ，側面と上面に被熱痕	上部径6.8㎝ 孔径2.1㎝
752	〃	〃 〃	−	6.1	−	6.5	土錘状。中央に穿孔。表面にタタキとナデ	上部径6.6㎝ 孔径1.8㎝
753	〃	〃 〃	−	6.7	−	5.7	土錘状。中央に穿孔。表面にタタキとナデ，部分的に被熱痕	上部径6.3㎝ 孔径1.5㎝
754	〃	〃 〃	−	8.2	−	6.7	土錘状。中央に穿孔。表面にナデとヘラナデ，横側の一部が面をなし，被熱痕がみられる。	上部径6.2㎝ 孔径1.7㎝
755	〃	〃 〃	−	7.5	−	7.5	土錘状。横断面は五角形を呈し，中央に穿孔。表面にナデ	上部径5.9㎝ 孔径1.5㎝
756	〃	〃 〃	−	7.6	−	7.0	土錘状。横断面は多角形を呈し，中央に穿孔。表面にタタキのちナデ	上部径6.0㎝ 孔径1.6㎝
757	〃	〃 土錘	8.3	3.4	3.1	−	完存。表面にヘラケズリを施し，明瞭な面を作り出す。	重量95.0g 孔径0.8㎝
758	〃	〃 盤	(4.1)	3.7	0.9	−	平面形は方形を呈し，中央に穿孔	重量(12.8)ｇ 孔径0.3㎝
759	〃	石製品 石鏃	3.0	2.3	0.4	−	平基式。石材はサヌカイト	重量2.5g
760	〃	〃 扁平片刃石斧	8.4	1.0	1.4	−	表面を丁寧に磨き，成形する。刃部に使用痕。石材は蛇紋岩	重量22.5g
761	〃	〃 石庖丁	6.6	3.5	0.6	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量15.8g
762	〃	〃 〃	6.6	4.0	0.9	−	片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量21.8g
763	〃	〃 〃	9.0	4.4	1.0	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量37.4g
764	〃	〃 〃	7.4	4.8	1.1	−	両側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量43.8g
765	〃	〃 〃	7.4	4.6	0.9	−	両側に抉りが認められず，未成品の可能性。石材は砂岩	重量43.9g
766	〃	〃 〃	8.0	4.6	1.1	−	片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量47.5g
767	〃	〃 〃	6.8	4.8	1.4	−	両側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量56.2g
768	〃	〃 〃	8.7	5.3	1.4	−	両側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量68.0g
769	〃	〃 〃	7.8	5.2	1.6	−	両側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量75.6g
770	〃	〃 〃	8.7	5.9	1.1	−	両側に抉りが認められず，未成品の可能性。石材は砂岩	重量(76.2)ｇ
771	〃	〃 〃	8.7	5.7	1.2	−	両側に明瞭な抉り。石材は泥岩	重量76.3g
772	〃	〃 〃	8.0	5.4	1.4	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量80.1g
773	〃	〃 〃	6.7	4.7	0.8	−	両側に抉りが認められず，未成品の可能性。石材は砂岩	重量23.4g
774	〃	〃 〃	5.7	4.5	1.1	−	両側に抉りが認められず，未成品の可能性。石材は砂岩	重量27.9g
775	〃	〃 〃	6.9	5.2	1.1	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量44.6g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
776	第Ⅳ層	石製品 石庖丁	7.9	5.2	1.1	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量48.3g
777	〃	〃 〃	7.0	5.4	1.2	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量51.5g
778	〃	〃 〃	(5.6)	7.2	2.0	−	片側を欠損し，片側に抉り。石材は砂岩	重量(71.9) g
779	〃	〃 〃	8.1	5.8	1.4	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量73.7g
780	〃	〃 〃	(7.9)	5.6	1.7	−	両側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量(85.8) g
781	〃	〃 〃	7.7	6.1	1.6	−	両側に抉りが認められず，未成品の可能性。石材は砂岩	重量89.1g
782	〃	〃 叩石	12.1	9.0	3.9	−	両端の頂部に敲打痕。石材は砂岩	重量583.8g
783	〃	〃 〃	11.4	11.1	3.8	−	側面の一部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量687.9g
784	〃	〃 〃	16.7	9.0	3.2	−	両端と両面に敲打痕。石材は砂岩	重量771.7g
785	〃	〃 〃	20.5	9.0	7.1	−	両端に弱い敲打痕，片側に赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量2,229.6g
786	〃	〃 磨石	(7.4)	6.1	6.6	−	全面に使用痕，一部に赤色顔料が付着。石材は細粒砂岩	重量(486.1) g
787	〃	〃 砥石	(7.2)	8.5	1.9	−	両面に使用痕。石材は細粒砂岩	重量(163.1) g
788	〃	〃 〃	13.7	11.8	8.7	−	有溝砥石と考えられ，4条の溝が認められる。石材は砂岩	重量1,925.0g
789	〃	〃 台石	20.2	16.9	5.1	−	片面に弱い使用痕。石材は砂岩	重量2,709.6g
790	〃	〃 母材	11.1	10.6	1.9	−	石材はサヌカイト	重量186.0g
791	〃	金属製品 鉇	5.6	1.5	1.1	−	錆膨れのため，詳細な形状は不明	重量12.0g
792	第Ⅴ層	弥生土器 壷	17.2	(7.5)	−	−	内面全体にヨコナデ，外面全体にハケ，内面にハケとヘラミガキ，外面にヘラミガキ	
793	〃	〃 〃	16.0	(15.8)	29.0	−	胴部内面にナデ，口縁部外面にハケのちヨコナデ，胴部外面にタタキのちヘラミガキ	
794	〃	〃 〃	14.0	(7.2)	−	−	複合口縁壷。口縁部内面にヨコナデ，頸部内面にハケとナデ，外面全体にハケ，頸部外面にヨコナデ	搬入品
795	〃	〃 〃	28.6	(5.5)	−	−	内面にヨコナデ，外面にナデ，口縁端部外側に微隆起突帯を貼付	
796	〃	〃 〃	−	(5.3)	−	−	口縁端部内面にヨコナデ，口縁部内面にナデ，外面全体にハケ，外面に2条の沈線	
797	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	−	器面にナデ，外面に多重沈線と複線山形文	
798	〃	〃 〃	−	(28.0)	34.1	−	内面にハケ，外面にタタキのちハケ	
799	〃	〃 甕	11.0	16.8	13.7	2.1	内面は口縁部にハケ，胴部にハケのちヘラナデ，外面はタタキのちハケ	
800	〃	〃 〃	16.0	21.0	18.5	1.6	口縁部内外面に指オサエ，胴部内面に指ナデとヘラナデ，外面全体にタタキ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
801	第Ⅴ層	弥生土器 甕	15.9	(9.1)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケ	
802	〃	〃 〃	16.2	(8.5)	−	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキ	
803	〃	〃 〃	16.2	(12.3)	19.6	−	口縁部内面にハケ，胴部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキ，口縁部外面にハケ調整を加え，一部に煤が付着	
804	〃	〃 〃	−	(16.0)	15.4	1.9	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，胴中央部外面に煤が付着	
805	〃	〃 〃	−	(9.0)	−	3.2	内面にヘラナデ，外面にタタキのちヘラナデ	
806	〃	〃 〃	−	(11.4)	16.2	5.2	内面は胴中央部にヘラケズリ，胴下半部にナデ，外面はハケのちヘラナデ，外面全体に煤が付着	搬入品の可能性
807	〃	〃 鉢	−	(6.4)	−	2.2	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にタタキ	
808	〃	〃 〃	14.8	(6.9)	−	6.0	手づくね成形。口縁端部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデ	
809	〃	〃 〃	15.2	5.6	−	1.8	摩耗のため調整は不明瞭だが，口縁部内面にハケ	
810	〃	〃 〃	15.5	7.9	−	2.0	口縁端部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデ，底部外面にヘラケズリ	
811	〃	〃 〃	15.7	6.3	−	4.8	口縁部内面にヨコナデ，体部内面にハケと指オサエ，口縁部外面にナデとヨコナデ，体部外面に指オサエとナデ	
812	〃	〃 〃	12.1	7.0	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデのちヘラミガキ，体部外面にハケ	
813	〃	〃 〃	14.4	8.1	−	1.0	手づくね成形。内面全体にハケ，外面全体にタタキのちナデ	
814	〃	〃 〃	14.7	(5.9)	−	−	内面全体にハケ，口縁部外面にヨコナデ，体部外面にナデと指オサエ	
815	〃	〃 〃	17.4	(5.5)	−	5.8	手づくね成形。口縁部から体部の内面にヘラナデ，底部内面に指ナデ，外面全体にタタキのちヘラナデ	
816	〃	〃 〃	15.7	(5.0)	−	−	器面にハケ，口縁端部外面にヨコナデ，その他の部位にヘラミガキ	
817	〃	〃 〃	18.0	(8.7)	−	−	手づくね成形。内面全体にナデ，外面全体にタタキのちナデ	
818	〃	〃 〃	14.8	9.1	−	3.8	手づくね成形。内面全体にハケ，外面全体にナデのち粗いヘラナデ	
819	〃	〃 〃	−	(4.6)	−	3.0	内面にハケ，外面にナデ	
820	〃	〃 〃	−	(5.1)	−	1.4	手づくね成形。内面にハケのちナデ，外面にタタキのちナデ	
821	〃	〃 〃	−	(6.2)	−	1.0	内面全体にナデ，外面全体にハケ	
822	〃	〃 〃	10.6	4.4	−	1.2	皿状。口縁部内外面にヨコナデ，底部内面にヘラナデ，底部外面にヘラケズリ	
823	〃	〃 〃	12.6	4.4	−	1.2	皿状。内面にハケ，外面にタタキ	
824	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	−	脚付き。鉢底部内面にヘラナデ，脚部内面に指オサエとナデ，外面全体にナデ	
825	〃	〃 〃	−	(5.9)	−	−	脚付き。鉢底部内面にヘラミガキ，脚部内面にヘラナデ，外面全体にナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
826	第Ⅴ層	弥生土器 鉢	8.9	(7.5)	9.9	−	口縁部内面にナデ，体部内面にナデと指オサエ，外面全体にタタキのちヨコナデ	
827	〃	〃 〃	10.0	6.5	9.3	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面にヘラケズリのちヘラミガキ	搬入品の可能性
828	〃	〃 〃	−	(6.0)	8.0	−	胴上端部外面にヨコナデ，その他の部位にナデ	
829	〃	〃 〃	−	(5.3)	8.7	3.0	内面に指オサエとナデ，外面にナデ	
830	〃	〃 〃	27.2	(9.5)	30.0	−	大型の鉢と考えられる。内面全体にハケ，口縁部外面にハケ，体部外面にタタキのちハケ	
831	〃	〃 高杯	−	(3.2)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，外面にハケ	
832	〃	〃 〃	−	(7.1)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にナデ，外面にハケ	
833	〃	〃 〃	−	(8.3)	−	−	内面にナデ，外面にヘラミガキ	搬入品
834	〃	〃 ミニチュア	5.0	3.3	−	−	手づくね成形。鉢状。内外面に指オサエとナデ	
835	〃	〃 〃	5.8	3.8	−	−	手づくね成形。鉢状。内面にナデ，外面に指オサエ	
836	〃	〃 〃	6.1	4.3	−	−	手づくね成形。鉢状。内面に指オサエとナデ，外面にタタキのち指オサエとナデ	
837	〃	〃 〃	−	(5.4)	−	3.0	手づくね成形。コップ状。内面にナデ，外面に指オサエ	
838	〃	東阿波型土器 甕	10.0	(3.6)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にナデ，胴部外面にハケのちヘラミガキ	
839	〃	〃 〃	15.0	(6.4)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面にハケのちナデ，胴部外面にハケ，口縁部外面に煤が付着	
840	〃	土師器 壺	−	(10.5)	13.4	2.0	内面は上端部にナデと指オサエ，下半部にナデ，外面全体にナデ	
841	〃	〃 甕	18.4	(8.5)	−	−	摩耗のため調整は不明	
842	〃	〃 高杯	14.8	12.4	−	11.2	杯口縁部と脚裾部の内外面とにヨコナデ，杯体部内外面と脚部内面にナデ，脚柱部外面にヘラナデ	
843	〃	〃 〃	−	(5.4)	−	12.6	脚柱部外面にナデ，脚裾部外面にハケ，脚端部内外面と脚裾部内面にヨコナデ	
844	〃	〃 〃	−	(8.2)	−	10.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面に絞り目	
845	〃	須恵器 杯蓋	10.4	(3.7)	−	−	器面に回転ナデ	
846	〃	〃 〃	12.5	4.2	−	−	天井部外面下端にヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を加える。	
847	〃	〃 〃	15.3	(3.2)	−	−	天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，天井部内面にナデ調整を加える。	
848	〃	〃 〃	13.4	4.2	−	−	ボタン状の摘みを有する。天井部外面に回転ヘラケズリ，その他の部位に回転ナデ，天井部内面にナデ調整を加える。	摘み径2.8㎝
849	〃	〃 杯身	11.2	(2.7)	−	−	器面に回転ナデ	受部径13.8㎝
850	〃	〃 〃	12.0	(3.8)	−	−	器面に回転ナデ	受部径14.4㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
851	第Ⅴ層	須恵器 高杯	12.1	(5.0)	−	−	器面に回転ナデ，底部内面にナデ	
852	〃	土師質土器 杯	14.0	4.7	−	6.9	器面に回転ナデ，底部切り離しは回転糸切り	
853	〃	〃 皿	10.1	1.9	−	6.7	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，底部内外面に指オサエ	
854	〃	〃 〃	9.8	2.5	−	4.9	手づくね成形。口縁部内外面にヨコナデ，底部内外面にナデ	
855	〃	瓦 平瓦	(10.5)	(7.8)	2.1	−	凹面に丁寧なヘラケズリ，凸面に縄目状のタタキ	
856	〃	土製品 支脚	−	(13.6)	−	7.5	中空。指を有するもので，指部と脚の一部を欠損。表面にタタキ	
857	〃	〃 〃	−	(6.3)	−	−	中空。指を有するもので，指部と脚部を欠損。表面にタタキのちナデ	
858	〃	〃 〃	−	(13.6)	−	8.0	中空。受部を有するもので，受部内面にハケ，外面にタタキのちナデ	
859	〃	〃 〃	−	(6.4)	−	−	中空。上端に平坦な面を有するもので，脚部を欠損。表面にはタタキのち丁寧なナデ	
860	〃	〃 〃	−	(11.0)	−	−	中空。内面にナデ，外面にタタキ	
861	〃	〃 〃	−	(7.4)	−	−	中空。外面に丁寧なヘラミガキ	
862	〃	〃 〃	−	(6.6)	−	−	中実。内外面に指オサエとナデ	
863	〃	〃 支脚または土錘	−	(5.4)	−	5.4	土錘状を呈するもので，約1/2を欠損。指オサエとナデ	孔径2.2㎝
864	〃	〃 土錘	3.7	0.8	0.7	−	完存。表面に指頭圧痕	重量2.9g 孔径0.2㎝
865	〃	石製品 石庖丁	11.5	4.4	1.2	−	磨製。両端に明瞭な抉りがみられ，刃部を丁寧に作り出す。石材は片岩	重量83.4g
866	〃	〃 〃	5.6	3.0	1.0	−	打製。片側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量16.5g
867	〃	〃 〃	8.6	5.8	1.8	−	打製。両端に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量96.3g
868	〃	〃 〃	9.8	5.7	1.6	−	打製。両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量111.8g
869	〃	〃 〃	7.5	6.1	1.2	−	打製。片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量70.8g
870	〃	〃 叩石	10.8	9.8	3.7	−	片側に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量596.1g
871	〃	〃 〃	11.2	9.4	5.0	−	片側に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量714.4g
872	〃	〃 〃	13.1	12.4	4.3	−	両面と片側に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量1,050.1g
873	〃	〃 〃	14.5	11.8	4.7	−	側面の一部に弱い敲打痕。部分的に赤色顔料が付着。石材は砂岩	重量1,108.0g
874	〃	〃 〃	(11.9)	12.8	5.1	−	片面と側面の一部に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量(1,141.9) g
875	〃	〃 〃	15.0	8.3	2.9	−	両端と片面に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量557.6g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
876	第Ⅴ層	石製品 叩石	15.3	8.7	4.5	−	片側端部と側面に明瞭な敲打痕。石材は砂岩	重量938.6g
877	〃	〃 砥石	17.2	21.9	6.4	−	片面と側面に使用痕。石材は片岩	重量3.2kg
878	第Ⅴ1層	弥生土器 壷	17.8	(8.7)	−	−	内面は口縁部にヨコナデ，頸部上半にハケ，頸部下半にナデ，外面全体にハケ，頸部に1条の沈線	
879	〃	〃 〃	19.1	(3.2)	−	−	広口壷。口縁端部内外面にヨコナデ，内面にナデ，外面にハケのちヨコナデ	
880	〃	〃 〃	22.0	(4.3)	−	−	広口壷。口縁端部内外面にヨコナデ，内面にハケ，外面にタタキのちハケ	
881	〃	〃 〃	−	(3.0)	−	−	広口壷。内面にヨコナデ，外面にヨコナデのちヘラミガキ	
882	〃	〃 〃	−	(2.2)	−	−	内外面にナデ，外面にタテ方向の刻みを施す微隆起突帯を貼付し，下方に2条の沈線を配する。	
883	〃	〃 〃	−	(3.7)	−	−	器面にナデ，外面に多重沈線と刺突文	
884	〃	〃 〃	−	(17.1)	21.6	4.5	胴内面にハケのちナデとナデのち粗いヘラミガキ，外面全体にタタキのちハケと粗いヘラミガキ	
885	〃	〃 〃	−	(16.9)	23.2	6.0	内外面にハケ	
886	〃	〃 〃	−	(18.2)	19.4	6.1	胴上半部と下半部内面にナデ，胴中央部内面にハケのちナデ，外面全体にタタキのちハケ，胴上半部外面に煤が付着	
887	〃	〃 〃	−	(10.2)	−	7.6	内面にナデ，外面にハケのちナデ	搬入品の 可能性
888	〃	〃 〃	−	(6.2)	−	8.5	内面にナデ，外面にハケのちヘラミガキ	
889	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	8.7	内外面にナデ	
890	〃	〃 〃	−	(5.9)	−	9.4	内面にヘラナデ，外面にハケのちナデ	
891	〃	〃 甕	17.0	(13.5)	16.5	−	口縁端部を摘み出しにより拡張し，胴部外面に摘み出しによる2条の微隆起突帯	
892	〃	〃 〃	13.5	21.3	14.9	4.0	口縁部内面と外面全体にハケ，胴部内面に指オサエとナデとハケのちヘラケズリ，胴下半部外面にナデ	
893	〃	〃 〃	12.2	(6.0)	−	−	口縁部内面と外面全体にハケ，胴部内面にハケのちナデ	
894	〃	〃 〃	13.6	(12.7)	12.7	−	口縁部内外面にハケのちナデ，胴部内面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ，外面全体に煤が付着	
895	〃	〃 〃	15.6	(10.0)	14.1	−	口縁部と胴上端部内面にハケ，胴下半部内面にヘラケズリ，胴部外面にハケのちナデとヘラナデ	
896	〃	〃 〃	−	(7.3)	−	6.0	摩耗のため調整は不明瞭だが，胴部外面にハケと指頭圧痕，底部外面にナデ	
897	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	8.0	胴部内外面にナデ，底部外面にハケのちナデ	
898	〃	〃 〃	−	(9.9)	−	6.8	胴部内外面にナデ，胴部外面下端にヨコナデ	
899	〃	〃 〃	−	(8.2)	−	−	内面にナデ，外面にタタキ	
900	〃	〃 鉢	11.8	7.7	−	2.4	体部内面に指ナデ，底部内面にヘラナデ，外面全体にタタキ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
901	第Ⅴ1層	弥生土器 鉢	15.8	6.6	−	4.8	内面全体にハケ，外面全体にタタキのちナデ，底部内面に指オサエによる凹み	
902	〃	〃 〃	18.2	10.6	−	4.3	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，底部内面にナデ調整，口縁部から体部外面にハケ調整を加える。	
903	〃	〃 〃	19.0	8.9	−	4.2	内外面にハケ，底部外面にタタキのちナデ	
904	〃	〃 〃	23.8	8.7	−	5.7	口縁部内外面にヨコナデ，体部外面にハケ，底部外面にナデ	
905	〃	〃 〃	18.0	7.1	−	−	体部内外面にハケ，底部内面にナデ	
906	〃	〃 〃	14.2	8.3	−	0.8	内面全体にハケ，外面全体にナデ，内面下半にナデ調整を加える。	
907	〃	〃 〃	−	(7.9)	−	4.4	脚付き。内面全体にハケ，外面全体にタタキ	
908	〃	〃 〃	−	(3.9)	−	2.9	脚付き。内外面にナデ	
909	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	−	脚付き。内面にハケ，外面にヘラナデ	
910	〃	〃 〃	11.0	7.2	9.9	4.6	口縁部に段を有する。口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にナデ	
911	〃	〃 〃	12.5	8.9	11.8	−	口縁部に段を有する。口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にハケ，内外面に粗いヘラミガキ	
912	〃	〃 〃	26.0	(7.3)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にナデ，体部外面にタタキのちナデ	
913	〃	〃 高杯	19.2	11.8	−	13.1	杯口縁端部内外面にヨコナデ，杯体部外面にヘラミガキ，脚部内外面にハケ，脚部外面にヘラミガキ調整を加える。	
914	〃	〃 〃	23.1	(7.7)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面にハケ，内面全体と体部外面に粗いヘラミガキ調整を加える。	
915	〃	〃 〃	−	(8.2)	−	−	杯部内面にナデ，杯部外面にハケのちナデ，脚柱部内面にハケのちナデ，脚柱部外面にハケのちヘラミガキ	
916	〃	〃 〃	−	(6.9)	−	−	外面全体にハケのちヘラミガキ，脚柱部内面にナデ	
917	〃	〃 ミニチュア	8.6	11.4	9.9	2.4	口縁部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面全体にタタキのちハケ	
918	〃	土師器 甕	12.6	12.8	13.2	2.1	ほぼ完存。内面は口縁部にハケ，胴部にナデ，外面は口縁部にヨコナデ，胴部にハケ，胴部外面下半に煤が付着	
919	〃	〃 〃	12.2	(7.3)	−	−	口縁部内面にハケ，その他の部位にナデ	
920	〃	石製品 石庖丁	5.8	3.8	0.9	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量22.6g
921	〃	〃 〃	7.8	5.7	1.2	−	両端に弱い抉り。石材は蛇紋岩	重量44.7g
922	〃	〃 〃	7.0	4.9	1.4	−	両端に弱い抉り。石材は砂岩	重量49.3g
923	〃	〃 叩石	10.9	6.4	2.0	−	片側端部に弱い敲打痕。石材は蛇紋岩	重量268.2g
924	第Ⅴ2層	弥生土器 壺	15.7	(8.2)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部内外面にハケ，胴部内外面にナデ，頸部に多重沈線	
925	〃	〃 〃	16.1	(5.5)	−	−	内外面にハケ，口縁部外面にヨコナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
926	第Ⅴ2層	弥生土器 壷	−	(3.4)	−	−	内面にヘラミガキ，外面にハケのちヨコナデ，外面に沈線と刺突文を配する。	
927	〃	〃 〃	−	(6.2)	−	−	内面にハケとナデ，外面にハケ	
928	〃	〃 〃	−	(6.3)	−	−	内面にナデ，外面にハケ，外面に多重沈線と微隆起突帯がみられる。	
929	〃	〃 〃	−	(6.8)	−	−	内外面にナデ，外面に波状文	
930	〃	〃 〃	−	(11.4)	32.2	−	内面にナデ，外面にハケのちナデ，外面に多重沈線の間を垂直の沈線で仕切り，上下弦の弧文を配する。	
931	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	2.2	内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
932	〃	〃 〃	−	(6.0)	−	9.0	内面にナデ，外面にハケ	
933	〃	〃 甕	−	(22.4)	17.6	4.0	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，胴部上半に煤が付着	
934	〃	〃 〃	−	(15.4)	20.6	4.0	内面にハケのちナデ，外面にタタキのちハケ，胴中央部外面に煤が付着	
935	〃	〃 鉢	12.8	5.6	−	4.4	ほぼ完存。口縁端部内外面にヨコナデ，体部内面にハケのちナデ	
936	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	5.6	内面にナデ，外面にタタキ	
937	〃	〃 〃	−	(4.6)	−	6.2	脚付き。脚部は摘み出しにより成形される。内面にハケ，外面にタタキ	
938	〃	石製品 石庖丁	8.3	4.2	0.8	−	両端に弱い抉り。石材は粘板岩	重量39.9g
939	〃	〃 叩石	10.1	9.2	3.3	−	両面に明瞭な敲打痕。石材は粗粒砂岩	重量451.1g
940	第Ⅴ3層	弥生土器 壷	22.0	(7.3)	−	−	口縁端部に粘土帯を貼付，口縁端部に刻目，頸部外面に簾状の沈線間に2列の波状文を配する。	
941	〃	〃 〃	−	(1.0)	−	−	器面にナデ，端部の上下に刻みと穿孔がみられる。	
942	〃	〃 〃	−	(1.2)	−	−	内面にハケ，外面に指オサエ，端部の上下にハケ原体による刻目	
943	〃	〃 〃	−	(1.2)	−	−	内面に微隆起突帯を貼付，端部の上下に刻み，外面にハケ	
944	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	7.7	内面にナデと指オサエ，外面にナデのちヘラミガキ	
945	〃	〃 甕	23.0	33.3	25.3	4.8	口縁部内外面と胴部内面にハケ，胴部外面全体にタタキのちハケ，胴部内面下半にナデ	
946	〃	〃 鉢	25.3	(8.6)	−	−	摩耗のため調整は不明瞭だが，内面にヘラミガキ，外面にハケのちヘラミガキ	
947	〃	〃 〃	−	(3.3)	−	3.0	手づくね成形。内外面にナデ	
948	〃	〃 〃	24.4	(9.6)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にヘラナデ，体部外面上端にタタキ，体部外面にヘラケズリ	
949	〃	〃 高杯	−	(6.3)	−	−	内外面にハケ	
950	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	21.3	内面にハケとヨコナデ，外面にハケのちヘラミガキ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
951	第Ⅴ3層	石製品 石庖丁	(6.1)	5.1	1.0	−	約2/3が残存。片側に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量(34.9)g
952	〃	〃 〃	8.6	4.7	1.3	−	刃部を欠損。片側に弱い抉り。石材は砂岩	重量(38.0)g
953	〃	〃 〃	9.0	7.4	1.5	−	両端に明瞭な抉り。石材は砂岩	重量112.8g
954	第Ⅴ4層	弥生土器 壺	17.0	(6.9)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部外面にハケ，胴部外面にタタキのちハケ	
955	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	−	外面に粘土帯を貼付，内面にハケ状原体による刻目を配した微隆起突帯と穿孔がみられる。	
956	〃	〃 〃	−	(26.7)	27.5	6.3	内面全体はハケ，外面全体はタタキのちハケ，胴中央部内面にナデ調整，胴下端部内面にヘラケズリ調整を加える。	
957	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	9.7	内外面にヘラナデ	
958	〃	〃 甕	15.0	(9.2)	17.4	−	口縁部内面にハケ，胴部内面に指オサエとハケ，外面全体にタタキ，口縁部外面にナデ調整を加え，外面全体に煤が付着	
959	〃	〃 〃	15.4	(6.4)	−	−	内面全体にハケ，外面全体にタタキ，胴部内面上端に指頭圧痕	
960	〃	〃 〃	−	(22.0)	16.8	−	内面にハケ，外面にタタキ，外面下半にハケ，外面に煤が付着	
961	〃	〃 〃	−	(9.6)	−	3.8	内面にナデ，外面にタタキのちハケ	
962	〃	〃 〃	−	(6.2)	−	3.8	内面にナデ，外面にハケ	
963	〃	〃 〃	16.8	(10.4)	20.6	−	内面全体と胴部外面にヘラミガキ，口縁部外面にヨコナデ	讃岐からの搬入品の可能性
964	〃	石製品 叩石	9.1	3.9	3.7	−	両端に弱い敲打痕。石材は砂岩	重量198.5g
965	第Ⅴ5層	弥生土器 壺	15.4	(2.4)	−	−	口縁端部を指オサエとヨコナデにより上下に拡張し，内外面にハケ	
966	〃	〃 〃	30.1	(4.4)	−	−	内面にヘラミガキ，外面にハケのちナデ，外面に多重沈線と列点文，内面に微隆起突帯，端部の上下に刻目を配する。	
967	〃	〃 〃	−	(2.1)	−	−	端部に2孔の穿孔がみられる。内外面にハケ	
968	〃	〃 〃	−	(5.3)	−	9.4	外面にヘラミガキ	
969	〃	〃 甕	11.7	19.6	14.6	3.0	口縁部内外面にヨコナデ，胴部内面に指オサエのちナデとハケ，ヘラケズリ，胴部外面にタタキのちハケ	
970	〃	〃 〃	15.6	21.1	18.2	1.5	口縁部内面にハケ，胴上半部内面にハケのちナデ，胴下半部内面にヘラケズリ，外面全体にタタキ，胴上半部外面に煤	
971	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	−	内面にハケのちナデ，外面にハケ，外面に沈線と列点文を配する。	
972	〃	〃 〃	−	(13.6)	18.1	−	内面にナデ，外面にタタキのちハケ，胴中央部外面には煤が付着	
973	〃	〃 鉢	23.0	(7.7)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部外面にハケ，内外面にヘラミガキ	
974	〃	〃 〃	30.0	(7.0)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，体部内面にハケのちヘラミガキ，体部外面にタタキのちハケ	
975	〃	〃 高杯	−	(5.9)	−	−	杯底部内面にヘラミガキ，脚部内面にナデ，脚部外面にハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
976	第Ⅴ5層	弥生土器 ミニチュア	9.0	(2.6)	−	−	口縁端部に粘土帯を貼付，内外面にハケ	
977	〃	石製品 叩石	11.2	8.3	3.0	−	両端と側面の一部に弱い敲打痕。石材は粗粒砂岩	重量410.8g
978	ST89	弥生土器 壷	−	(9.2)	−	5.0	内面ナデ，外面タタキのちハケ，底部は板状のものによる丁寧なナデ	
979	ST90	〃 鉢	38.4	(15.4)	33.0	−	口縁端部ハケ，面をなす。内面ハケ，外面胴部タタキのちハケ	
980	ST91 上層	〃 甕	13.4	(4.4)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，内面一部ハケが残り，外面一部タタキが残る。胴部内面ハケと指頭圧痕，タタキ	
981	〃 〃	須恵器 高杯	11.8	(4.9)	−	−	基部に凹線，内面は回転ナデ，内底部ケズリと重ね焼きの痕跡2ヵ所，外面は回転ナデ，回転ヘラケズリ	混入の可能性
982	〃 中層	弥生土器 壷	17.4	−	−	5.2	広口壷。口縁部はヨコナデ，内面肩部から胴部はナデと指頭圧痕。外面肩部から胴中央部までハケとナデ，下部ハケ	
983	〃 〃	〃 甕	14.8	(5.5)	14.5	−	口縁部内外面にヨコナデ，煤付着，内面はハケ，外面はタタキ	
984	〃 〃	〃 鉢	9.2	4.8	−	2.2	内面丁寧なナデ，外面にナデ	
985	〃 〃	〃 高杯	10.9	7.5	−	7.2	口縁部ヨコナデ，杯部内面に丁寧なナデ，外面はハケ，脚部内面の裾部にハケ。器面摩耗	
986	〃 〃	金属製品 鉄斧	9.4	5.2	0.4	−		重量112.1g
987	ST91	弥生土器 壷	21.0	(9.3)	−	−	二重口縁。受口状で端部は面をなす。外面は5条の凹線文が巡る。頸部内面は丁寧なナデ，外面は一部ハケが残るナデ	搬入品
988	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	−	外面は櫛描波状文の間に2条の刻目突帯。突帯間に櫛描直線文，ハケ，内面は磨耗	
989	〃	〃 ミニチュア	−	(6.8)	7.4	1.8	手づくね。口縁部に指頭圧痕，内外面胴部にナデ，丸底	
990	〃	土師器 甕	14.1	(11.0)	14.2	−	口縁部内面ハケ，外面はタタキ。内面は胴上部に粗いハケと指頭圧痕，胴中部はハケのちナデ。外面はタタキのちハケ	
991	ST91 ST92	弥生土器 甕	12.7	15.6	14.3	3.2	内面口縁部ハケ，胴部ナデ，外面口縁部タタキをナデ消す。胴上部タタキのちハケ。底部はタタキ，煤付着，器面摩耗	
992	〃 〃	〃 〃	−	(23.2)	24.1	−	内面ハケ・ナデ・指頭圧痕，外面胴上部から胴中央部にかけてタタキをナデ消す。底部はタタキが残る。丸底	
993	ST92	〃 壷	17.4	(6.3)	−	−	広口壷。口縁部は粘土帯貼付，頸部直下に列点状の刺突	
994	〃	〃 〃	−	(8.9)	−	6.8	内面ハケと指頭圧痕，外面はタタキをハケで消す。底部はタタキをナデ消す。煤付着	
995	〃	〃 鉢	−	(2.2)	−	7.8	脚付鉢。内面はハケと指頭圧痕，外面は脚接合部から中央部ハケ，中央部から端部ナデ。器面摩耗	
996	ST93	〃 甕	−	(10.9)	−	4.8	内面ナデ，外面タタキをハケで粗く消し，底部付近は丁寧に消す。煤付着，平底	
997	〃	〃 〃	14.8	(14.7)	19.0	−	口縁部内外面ヨコナデ，口縁端部強いナデにより凹む。内面胴上部ハケ・指頭圧痕，外面はタタキのちハケ。煤付着	
998	〃	〃 〃	−	(8.4)	−	4.5	内面強いナデ，外面タテハケ，底部は成形時のタタキが一部残る平底。煤付着	
999	〃	〃 〃	16.0	(13.0)	17.5	−	口縁端部強いナデにより凹む。内面ハケ，胴上部指頭圧痕，外面タタキ，煤付着	
1000	〃	〃 〃	14.7	21.3	16.8	4.3	口縁部内外面に指頭圧痕，内面口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧痕。外面肩部ナデ，胴部タタキ。煤付着	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1001	ST93	弥生土器 鉢	17.7	11.3	−	3.6	内面は口縁部から体部上半ハケのちナデ。外面は口縁部から体部中央までタタキ，中央部から底部までハケ。煤付着	
1002	〃	〃 〃	21.4	10.8	−	4.0	口縁部はヨコナデ，内面ヘラミガキ，外面はハケ	
1003	〃	〃 〃	29.2	(12.5)	−	−	口縁部ヨコナデ，口縁端部は面をなす。内面体部上半ハケ，下半部はヘラミガキ，外面ヘラミガキ，内外面ともに器面摩耗	
1004	ST94	〃 高杯	18.6	(6.4)	−	−	外面にハケ，器面磨耗	
1005	ST95	〃 鉢	11.6	3.9	−	3.6	内面ナデ，外面口縁部ヨコナデ，体部タタキをナデ消す。丸底に近い。器面摩耗	
1006	〃	土師器 壺	13.1	(2.1)	−	−	二重口縁。内面口縁部ナデ・ハケ，外面ナデ	搬入品
1007	〃	石製品 石庖丁	8.2	4.7	0.8	−	両側に抉り，刃部にミガキ。石材は頁岩	重量38.8g
1008	ST96	弥生土器 甕	−	(14.3)	−	−	内面口縁部ヨコハケ，胴部ナデ。外面口縁部タテハケ，肩部に2条の凹線文，凹線文内にハケ	
1009	ST97 上層	〃 壺	15.0	28.1	22.5	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面肩部接合痕顕著，頸部に何らかの道具をあてた痕跡。外面胴上部から胴部中央タタキ	
1010	〃 上・中層	〃 〃	21.6	(9.6)	−	−	広口壺。内面ナデ，外面ハケのちナデ，器面摩耗	
1011	〃 上層	石製品 石庖丁	6.3	4.5	0.8	−	石材は砂岩。両端に抉り	重量26.7g
1012	〃 〃	〃 〃	8.9	5.5	1.7	−	石材は砂岩。片刃，両端の抉りに紐状のものによるこすれの痕跡	重量111.8g
1013	〃 中層	弥生土器 甕	18.0	(3.7)	−	−	内外面ナデ，外面指頭圧痕，器面摩耗	搬入品
1014	〃 〃	〃 鉢	−	(3.6)	−	6.3	台付鉢か。外面指頭圧痕，器面摩耗	
1015	〃 〃	土師器 壺	−	(9.9)	12.5	−	内面口縁部ナデ，胴部ハケ，外面ハケをナデ消す。化粧土が施され，道具不明の圧痕がみられる。	
1016	〃 〃	〃 甕	9.8	(13.3)	12.0	−	小型甕。内面口縁部板状の工具によるナデ，胴部ヘラケズリ。外面ナデ，煤付着	
1017	〃 中・床面	〃 鉢	9.0	6.5	−	−	小型丸底。内面口縁部ヘラ状工具によるヨコナデ，胴部から底部ナデ。外面口縁部ヨコナデ，胴部から底部ナデ	
1018	〃 下層	弥生土器 甕	12.5	16.8	15.8	−	内面ナデ，外面口縁部ナデ，胴部から底部にタタキ，煤付着，丸底，器面摩耗	
1019	〃 〃	〃 〃	13.0	(9.2)	14.6	−	内面口縁部ハケ，端部ナデ，胴部は指頭圧痕・ハケ。外面は口縁部ナデ，上胴部ナデ・ハケ，下半部タタキ。煤付着	
1020	〃 〃	〃 〃	−	(2.9)	−	−	内面ナデ，外面口縁部ヨコナデ，体部ハケ	
1021	〃 ST98	〃 〃	30.0	(14.2)	25.4	−	片口。口縁部内外面にナデ・指頭圧痕，胴部内外面はナデ，外面一部煤付着	
1022	〃 下層	〃 高杯	8.6	(2.5)	−	−	分割成形，内外面ヘラミガキ	
1023	〃 〃	土師器 高杯	−	(9.8)	−	12.0	内面脚部ヘラケズリ，裾部ハケのちナデ・指頭圧痕，裾端部ヨコナデ，外面脚部・裾部ヘラミガキ，裾端部ヨコナデ	
1024	〃 〃	石製品 叩石	14.5	7.9	5.6	−	石材は砂岩。突出している所に敲打痕がみられる。	重量710.0g
1025	〃 床面	弥生土器 壺	22.8	(2.3)	−	−	口縁端部に刻目，内面ナデ・ハケ，外面ナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1026	ST97 床面	弥生土器 鉢	11.2	8.2	−	4.3	手づくね。内外面ナデ・指頭圧痕，器面摩耗	
1027	〃 〃	〃 〃	14.4	(7.9)	−	−	内面丁寧なナデ。外面胴部ハケ，器面摩耗	
1028	〃 〃	〃 〃	13.0	4.5	−	2.8	内外面ともにナデ・指頭圧痕。器面摩耗	
1029	〃 〃	〃 〃	−	(3.9)	−	−	脚付鉢，内面ナデ，外面指頭圧痕，器面摩耗	
1030	〃 〃	〃 ?	−	(4.1)	−	6.3	外面ハケ	
1031	〃 〃	〃 ミニチュア	−	(4.5)	7.0	0.5	内外面ナデ・指頭圧痕	
1032	〃 〃	土師器 壷	13.2	(11.1)	18.0	−	口縁部内外面ともにナデ，接合部に指頭圧痕。内面胴部ヘラケズリ。外面胴部ハケ・ナデ	
1033	〃 〃	〃 〃	16.0	(13.6)	23.7	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面肩部はナデ・ハケと指頭圧痕，胴部ヘラケズリ。外面肩部ヨコナデ，胴部はハケ・ナデ。煤付着	
1034	〃 〃	〃 〃	17.2	(20.7)	25.5	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面胴部ヘラケズリ，外面胴部ナデ	
1035	〃 〃	〃 高杯	−	(9.7)	−	−	杯部欠損，脚部に円孔。内面はヘラケズリ，外面は上部ナデ，下部ヘラミガキ。煤付着	
1036	〃 〃	〃 〃	15.4	14.1	−	12.6	分割成形。杯部内外面ナデ，外面接合部指頭圧痕。脚部内面ヘラケズリ，外面ヘラミガキ。裾部内面ナデ，外面ナデ・ハケ	
1037	ST97	弥生土器 壷	8.4	13.6	12.4	−	口縁部内外面ナデ・指頭圧痕，内面胴部ナデ，外面胴部タタキ，指・板状のものでナデ上げる。接合痕顕著，丸底	
1038	〃	〃 〃	−	(5.5)	−	−	内面ナデ，外面2条の突帯，爪形の圧痕文，ヘラ状工具によるナデ・ミガキ	
1039	〃	〃 〃	−	(3.7)	−	−	内外面ナデ，内面口縁部指頭圧痕，器面摩耗。口縁部外面に粘土帯貼付，上端を摘み出し刻む。	
1040	〃	〃 甕	13.8	(15.2)	16.7	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面胴部ヘラケズリ，口縁部に煤付着。外面胴部タタキのちハケ，ヘラミガキで仕上げる。煤付着	
1041	〃	〃 鉢	13.0	(5.0)	12.1	−	内外面ともに丁寧なナデ	
1042	〃	〃 〃	9.9	2.8	−	1.0	皿状，内面ナデ・ミガキ，外面ナデ・ミガキと指頭圧痕，器面摩耗	
1043	〃	土師器 甕	−	(3.8)	−	−	口縁部内外面にヨコナデ，頸部に指頭圧痕，胴部は板状のものによるナデ	搬入品
1044	ST97 P2	弥生土器 甕	−	(7.7)	−	6.1	内面ハケ・ナデと指頭圧痕，外面タタキをナデ消す。粘土帯接合痕顕著，煤付着	
1045	ST98 上層	須恵器 高杯	−	(2.3)	−	14.8	内外面回転ナデ，透かしあり。	
1046	ST99	弥生土器 壷	−	(9.5)	11.8	−	内面ナデ，接合痕顕著，内底部指頭圧痕。外面胴上部タタキのちハケ・ヘラミガキ，下半部タタキのちハケ	
1047	〃	〃 〃	21.8	(5.6)	−	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面胴部ハケ・指頭圧痕，外面胴部ナデ・ハケ	
1048	〃	〃 〃	24.4	(7.0)	−	−	外面タタキ，器面摩耗	
1049	〃	〃 〃	−	(7.9)	12.5	−	内面ハケ・ヘラ状工具によるナデ。外面タタキのちナデ，丸底	
1050	〃	〃 甕	−	(14.9)	14.9	3.6	内面ナデ，外面タタキ・ハケ，底部は成形時のタタキが残る平底。器面摩耗	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1051	ST99	弥生土器 甕	15.4	(6.8)	−	−	内面口縁部板状のもので調整し端部はハケ，接合痕顕著，胴部ハケ。外面口縁部タタキのちハケ，胴部タタキ・ハケ，煤付着	
1052	〃	〃 〃	−	(8.1)	−	2.4	内面ナデ，内底部指頭圧痕，外面タタキ・ハケ，煤付着	
1053	〃	〃 〃	21.0	(30.5)	23.3	3.2	内面ハケ・ナデ，外面タタキのちハケ・ナデ，器面摩耗，煤付着	
1054	〃	〃 〃	17.2	(14.2)	17.8	−	内面ハケ，外面タタキ・ナデ，煤付着	
1055	〃	〃 鉢	16.8	8.2	−	4.7	内面ハケ，内底部に布状の圧痕。外面タタキのちナデ，底部は板状のものによるナデ	
1056	〃	〃 高杯	23.2	(7.6)	−	−	分割成形。内面ハケ・ナデ，外面ナデ，器面摩耗	
1057	ST100	〃 壺	15.0	(5.1)	−	−	内外面ナデ，器面摩耗	
1058	〃	〃 甕	11.2	17.5	12.9	4.0	内面口縁部ハケ，胴部ナデ，外面口縁部タタキのちナデ，胴部タタキ・ハケ，底部は成形時のタタキ目が残る平底	
1059	〃	〃 高杯	−	(3.9)	−	−	内面ナデ，外面ミガキ，円孔を施す。	
1060	〃	金属製品 穂摘具	7.6	3.4	0.4	−	鉄鎌の可能性あり。	重量20.4g
1061	ST101 上層	弥生土器 壺	19.3	(12.4)	−	−	ハケをナデ消す。内面頸部ハケ，肩部から胴部にナデと指頭圧痕。外面頸部上半ハケ・下半ヨコナデ，肩部ナデ，胴部ハケ	搬入品
1062	〃 〃	〃 〃	14.6	(6.3)	−	−	内面口縁部ハケ・ナデ，胴部ヘラケズリ・ナデ。外面口縁部ヨコナデ，端部を摘み出す。頸部はナデ，胴部タタキ・ナデ	
1063	〃 〃	〃 甕	12.7	(10.0)	16.3	−	内面ナデ，外面タタキ・ナデ，器面摩耗	
1064	〃 〃	〃 〃	9.8	(9.9)	10.0	−	内面ナデ，外面口縁部ナデ，胴部タタキ・ナデ，底部ナデ	
1065	〃 〃	〃 鉢	−	(3.3)	−	−	外面ナデ，器面摩耗	
1066	〃 〃	〃 〃	7.7	3.4	−	1.5	手づくね。口縁端部面をなす。内外面ナデ・指頭圧痕	
1067	〃 〃	〃 〃	13.0	8.0	12.0	2.1	内外面ナデ，外面底部にタタキ	
1068	〃 〃	〃 甕	−	(3.6)	−	−	内面ハケ・ナデ，外面ナデ	搬入品
1069	〃 〃	土製品 支脚	−	(13.6)	−	−	内面ナデ，外面タタキのちナデ	
1070	〃 〃	土師器 壺	9.4	(3.6)	−	−	二重口縁，内外面ヨコナデ	
1071	〃 〃	須恵器 杯身	12.0	3.9	−	2.4	内面ナデ，外面口縁部ナデ，底部回転ヘラケズリ，器面摩耗	受部径14.0㎝
1072	〃 〃	石製品 石庖丁	5.5	3.0	1.0	−	石材は砂岩。打製石庖丁未成品，片面自然面が残る。	重量19.7g
1073	〃 中層	弥生土器 壺	−	(10.2)	13.9	−	内外面ナデ・指頭圧痕	
1074	〃 〃	〃 甕	14.2	(13.2)	17.1	−	内面口縁部ハケのちナデ，胴部ハケ・ナデ，接合痕顕著，外面口縁部タタキのちナデ，胴部タタキのちハケ，煤付着	
1075	〃 〃	〃 鉢	−	(2.5)	−	6.8	内面ハケ・ナデ，外面ハケのちナデ，底部に葉脈の圧痕	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1076	ST101 中層	弥生土器 鉢	14.0	(6.5)	−	−	内外面ナデ	
1077	〃 〃	〃 〃	−	(4.0)	−	−	脚付鉢。内面体部ハケ，脚部ハケ・ナデ，外面ナデ・指頭圧痕	
1078	〃 〃	〃 高杯	−	(7.8)	−	−	内外面ナデ，器面摩耗	
1079	〃 〃	〃 〃	−	(8.9)	−	8.6	内外面ナデ，杯内底部指頭圧痕	
1080	〃 〃	〃 〃	−	(7.1)	−	12.0	3ヵ所に円孔。内外面ナデ	
1081	〃 〃	〃 〃	−	(6.0)	−	16.0	内面ハケ，外面ハケ・ミガキ，裾部に2ヵ所の穿孔，器面摩耗	
1082	〃 〃	石製品 石庖丁	8.9	5.7	1.3	−	石材は砂岩。打製石庖丁未成品，片面自然面が残る。	重量83.2g
1083	〃 〃	〃 叩石	9.4	8.5	3.5	−	石材は砂岩。側面に敲打痕	重量411.6g
1084	〃 〃	〃 〃	10.5	9.6	2.4	−	石材は砂岩。両面中央部に敲打痕	重量370.2g
1085	〃 〃	〃 〃	12.9	8.6	4.2	−	石材は砂岩。両面中央・側面に敲打痕	重量710.4g
1086	〃 床面	弥生土器 甕	26.6	(8.0)	−	−	内面口縁部ハケのちナデ，外面口縁部タタキ・ナデ，胴部タタキのちハケ，器面摩耗	
1087	〃 〃	〃 〃	27.5	(28.5)	27.0	−	内面胴部ハケ・ナデ，底部ナデ，外面胴部タタキ・ナデ，底部ハケ・ナデ，器面摩耗	
1088	ST101	〃 壷	9.3	10.5	9.0	1.9	内面口縁部ミガキ，胴部ナデ，外面タタキのちナデ・ミガキ	
1089	〃	〃 鉢	8.9	3.3	−	−	内面ナデ・指頭圧痕，丸底，器面摩耗	
1090	ST101 Ⅳ層	〃 壷	21.1	52.7	38.8	4.0	二重口縁部の内外面ともにヨコナデ。胴部内面ナデ，外面上部はタタキ・ナデ，肩部に3本の斜線。底部はタタキをナデ消す。	
1091	〃 〃	土師器 壷	19.0	35.0	26.6	−	口縁部内外面ヨコナデ，内面胴部ヘラケズリ，内底部に指頭圧痕。胴部外面丁寧なハケ。丸底	
1092	〃 Ⅲ・Ⅳ層	〃 甕	11.3	(12.9)	16.6	−	口縁部ナデ，端部は面をなす。内面胴部ケズリ，外面ナデ，煤付着	
1093	ST102	弥生土器 壷	−	(22.4)	18.4	5.0	内面ハケ・ナデ，指頭圧痕，外面タタキのちハケ，頸部ヨコナデ	
1094	〃	〃 甕	−	(6.9)	−	3.7	内面ナデ，内底部指頭圧痕，外面タタキのちハケ・ナデ，煤付着	
1095	〃	〃 〃	−	(16.2)	13.3	4.4	内面ハケ・ナデ，外面タタキのちハケ，頸部ヨコナデ，底部は成形時のタタキが残る平底。器面摩耗，煤付着	
1096	〃	〃 〃	12.7	(9.9)	17.3	−	口縁部内外面ナデ，内面胴部ナデ・指頭圧痕，外面胴部ハケ，器面摩耗	
1097	〃	土師質土器 小皿	7.0	1.6	−	4.4	内外面回転ナデ，内底部中央は凸状に残る。外底部回転糸切り・板状圧痕	混入
1098	ST103	須恵器 杯蓋	−	(2.7)	−	−	内外面回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズリ	
1099	ST104	弥生土器 鉢	7.6	2.7	−	−	内面ハケ，丸底，器面摩耗	
1100	〃	〃 〃	8.8	3.6	−	−	内面ハケ，丸底，器面摩耗	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1101	ST105	弥生土器 壺	18.4	(4.6)	−	−	内面口縁部ヨコナデ，頸部板状工具によるナデ，肩部ヘラナデ	
1102	〃	〃 〃	18.4	(6.5)	−	−	内面口縁部ハケ・ヨコナデ，頸部ナデ，外面ハケのちナデ	
1103	〃	〃 〃	21.4	(3.1)	−	−	口縁部内外面ハケ・ヨコナデ，端部面をなす。	
1104	〃	〃 〃	19.4	(1.8)	−	−	口縁部内面に櫛描直線文と短沈線による施文。端部は櫛描文様を刻む。口縁部外面に粘土帯貼付。外面指頭圧痕	
1105	〃	〃 〃	−	(2.9)	−	−	内面ナデ，外面に扁平刻目突帯・ヘラ描沈線・双線による施文	
1106	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	−	内外面ハケ，外面に2条の扁平刻目突帯，突帯下に櫛描直線文	
1107	〃	〃 〃	−	(2.9)	−	−	二重口縁。外面ナデ，櫛描波状文，器面摩耗	
1108	〃	〃 甕	12.2	(3.8)	11.9	−	器面摩耗	
1109	〃	〃 〃	14.8	17.0	16.8	−	内面口縁部ハケ，胴部ナデ，内底部指頭圧痕，外面上部タタキ・ナデ，下部タタキのちハケ，丸底，煤付着，器面摩耗	
1110	〃	〃 〃	19.7	(5.0)	−	−	内外面口縁部ヨコナデ，端部に刻目。内面胴部ナデ，外面胴部タタキ	
1111	〃	〃 〃	−	(2.8)	−	−	内外面ハケ・ナデ，口縁端部を摘み出す。	
1112	〃	〃 鉢	−	(3.6)	−	3.8	内外面ともに丁寧なナデ，外底部中央凹む。	
1113	〃	〃 〃	11.0	6.3	−	2.5	内面板状工具によるナデ・指頭圧痕，外面タタキのちナデ・指頭圧痕	
1114	〃	〃 〃	11.0	6.0	−	1.6	内面ナデ，外面タタキ・ナデ，器面摩耗	
1115	〃	〃 〃	11.9	(7.4)	−	−	内外面口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	
1116	〃	〃 〃	12.9	6.8	−	3.1	内面ハケ，内底部ナデ，外面ミガキ，器面摩耗	
1117	〃	〃 〃	−	(2.8)	−	−	脚付鉢。内外面ナデ・指頭圧痕	
1118	〃	〃 高杯	13.0	(10.5)	−	−	杯部内外面ハケ，脚部内外面ナデ，器面摩耗	
1119	〃	〃 甕	15.0	(2.6)	−	−	内外面ナデ，器面摩耗	搬入品
1120	〃	〃 〃	22.0	(2.9)	−	−	内外面ナデ，器面摩耗	搬入品
1121	〃	〃 〃	−	(2.4)	−	−	内外面ともに丁寧なヨコナデ	搬入品
1122	〃	庄内式土器 甕	14.3	17.2	17.3	1.6	口縁部内外面にヨコナデ，外面煤付着。内面胴中央部から下部にヘラケズリ，外面胴上部はタタキとハケ，器面摩耗	搬入品
1123	〃	土製品 支脚	−	(4.7)	−	7.6	内外面指頭圧痕	
1124	〃	石製品 砥石	6.5	2.6	1.0	−	石材は砂岩。2面使用痕	重量29.2g
1125	〃	〃 スクレイパー	4.8	2.8	0.9	−	混入	重量13.2g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1126	ST105 SD24	弥生土器 壷	−	(3.7)	−	−	器面摩耗	
1127	〃 〃	〃 〃	16.4	(3.9)	−	−	内外面口縁部ナデ，頸部ハケ	
1128	〃 〃	〃 鉢	9.8	4.4	−	2.0	内外面ともに器面摩耗。外面胴部下半にタタキ	
1129	ST106	瓦器 椀	15.8	(4.7)	−	−	外面口縁部ヨコナデ，体部指頭圧痕，器面摩耗	
1130	SK18	石製品 叩石	11.4	11.0	3.5	−	石材は砂岩。両面と側面に使用痕	重量661.2g
1131	〃	〃 〃	13.4	8.1	5.9	−	石材は砂岩。両端・側面を使用，被熱	重量742.1g
1132	SK23	土師質土器 小皿	6.8	1.3	−	4.3	内外面ナデ，外底部回転糸切り	
1133	〃	染付 碗	11.4	7.2	−	4.9	高台畳付釉剥ぎ	近世
1134	SK29	金属製品 −	(8.3)	(4.4)	0.4	−	蓋か。	重量(38.8) g
1135	SK32	弥生土器 甕	−	(6.5)	11.4	1.0	内面ナデ，内底部指頭圧痕，外面ハケ・ミガキ，煤付着	
1136	〃	〃 鉢	16.5	4.9	−	6.1	内面ハケ，口縁部ナデ，外面口縁部タタキのちハケのちナデ，体部タタキのちナデ，底部ヘラ切りか。	
1137	SK36	陶器 鍋蓋	−	6.8	−	17.4	内外面施釉，鍔部露胎，外面笹文様，摘みは犬か獅子，二次被熱，1138の蓋	尾戸窯
1138	〃	〃 鍋	18.6	(5.6)	−	−	内面口縁受部から体部上半露胎，外面施釉，注口部を中心に笹文様，把手部斑点文様，二次被熱	尾戸窯
1139	SK38	染付 小碗	7.4	4.0	−	3.5	端反，内面口縁部帯線・見込みに草花文。高台内「サ」	能茶山窯
1140	〃	〃 碗	−	(4.5)	−	6.4	広東碗形，内面圏線，見込みに岩波文？・目痕3足。外面草花文？高台二重圏線・高台内角枠に「茶」	能茶山窯 1820年代〜幕末
1141	〃	〃 〃	−	(4.8)	−	6.1	広東碗形，内面圏線，見込みに岩波文。外面草文・高台二重圏線・高台内角枠に「茶」	能茶山窯
1142	〃	瓦 軒丸瓦	瓦当 15.5	内区 11.5	−	中房 7.0	残存長4.2㎝，三巴・珠文数(18)，残存率2/3	
1143	〃	石製品 砥石	8.7	3.3	2.3	−	石材は砂岩。4面に使用痕	重量123.6g
1144	SD15	土師質土器 小皿	7.0	0.9	−	4.6	内外面回転ナデ，外底部回転糸切り	
1145	〃	〃 杯	9.6	3.1	−	5.2	内外面回転ナデ	
1146	〃	土製品 土錘	3.4	1.1	1.2	−	外面ナデ，表面摩耗	重量3.2g 孔径0.5㎝
1147	SD24	弥生土器 壷	−	(5.3)	−	4.7	内面ナデ，外面ミガキ，器面摩耗	
1148	〃	〃 〃	13.0	(5.2)	−	−	内外面ナデ，口縁端部は面をなす。	
1149	〃	〃 〃	17.2	(7.3)	−	−	内外面ナデ，口縁端部は強いナデにより凹む。	
1150	〃	〃 〃	21.2	(2.8)	−	−	内面ヨコハケ，口縁端部はハケ状工具による刻目。外面ハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1151	SD24	弥生土器 甕	−	(4.6)	−	7.0	内外面ナデ，底部がわずかに摘み出される。煤付着	
1152	〃	〃 鉢	12.6	7.4	−	5.0	内面ハケ，外面タタキのちハケ，器面摩耗	
1153	SD24 ST105	〃 甕	14.9	19.0	17.6	−	内面口縁部ハケ，口縁端部は面をなす。胴部ナデ，接合部顕著。外面口縁部タタキ・ナデ，胴部タタキのちハケ。煤付着	
1154	SG6 ST105	〃 壺	−	(44.5)	42.0	−	内面上部ナデ，中央部から下部はハケ・ナデ。外面上部から中央部ミガキ，下部はタタキのちハケ	
1155	SG7	〃 〃	17.1	44.4	32.5	5.9	口縁端部はナデ，頸部内面は粗いヨコハケ，外面はタテハケ。胴部内面はハケ・ナデ。外面胴部はタタキとハケ。煤付着	
1156	〃	〃 甕	23.3	34.9	32.7	5.0	内面口縁部ヨコハケ，口縁端部はナデにより面をなす。胴部にハケ，内底部ナデ。外面口縁部タタキのちハケ	
1157	〃	〃 〃	30.7	42.3	34.8	7.4	口縁部内面はハケとナデ，胴部はハケとナデ。外面は口縁端部直下にタタキのちハケ，肩部までハケとナデ	
1158	P19	須恵器 高杯	−	(5.1)	−	9.1	内外面回転ナデ，透かしあり。	
1159	P20	弥生土器 甕	15.2	(7.9)	16.0	−	内面ハケ，外面口縁部タタキ，口縁端部強いナデにより凹む。胴上部タタキのちハケ，下部タタキ	
1160	P21 ST105	〃 〃	−	(15.2)	21.4	4.3	内面ハケ，外面上部タタキ，下部タタキのちナデ，煤付着	
1161	P21	〃 鉢	10.4	6.4	−	2.2	手づくね，内外面ナデ	
1162	〃	〃 器台	7.4	7.3	−	10.1	内外面ナデ，受部内底部器面摩耗，脚部に4ヵ所の円孔	
1163	〃	東阿波型土器 甕	13.2	(16.5)	21.5	−	口縁部内外面にヨコナデ，端部は緩く凹状をなす。胴部内面に指頭圧痕，胴部外面にハケ，煤付着	搬入品
1164	P22 Ⅲ層	弥生土器 壺	−	(7.8)	9.1	−	内外面ナデ・指頭圧痕，内底部ハケ，丸底，器面摩耗	
1165	P23	〃 甕	−	(3.0)	−	−	内面口縁部ミガキ，一部ハケ，口縁端部は強いナデにより凹む。外面ナデ	
1166	SX2	〃 〃	18.4	(17.5)	19.1	−	口縁部内面ヨコハケ，肩部から胴部タテハケ，外面口縁部ヨコナデ，胴部タタキのちハケ，煤付着	
1167	〃	瓦 軒丸瓦	瓦当 17.0	内区 12.1	−	中房 5.0	残存長8.1㎝，八葉複弁蓮華文，中房の蓮子は摩耗，珠文数35	
1168	トレンチ	須恵器 杯身	11.7	2.6	−	5.0	内外面回転ナデ，底部外面回転ヘラケズリ	受部径13.7㎝
1169	北 トレンチ	弥生土器 鉢	9.3	5.3	−	3.5	内面ナデ・指頭圧痕，外面ナデ，底部中央を指頭で凹ませる。	
1170	E14－15 －7	〃 甕	13.6	21.8	18.6	−	内面ナデ，外面口縁部タタキのちナデ，胴部タタキ，底部タタキのちハケ，丸底，器面摩耗	SG6の北側20㎝で出土
1171	Ⅱ層	〃 〃	17.2	(8.0)	−	−	内面口縁部ハケ，端部ナデ，胴部ナデ，外面口縁部ナデ，胴部タタキ・ハケ	
1172	〃	〃 鉢	8.6	6.0	−	3.4	内外面ナデ，内底部指頭圧痕，製塩土器の可能性があるが被熱していない。	
1173	〃	〃 高杯	12.7	(4.2)	−	−	内外面ナデ，底部ヘラケズリ	
1174	〃	〃 〃	−	(4.7)	−	6.8	内外面ナデ，裾部に3ヵ所の円孔。器面摩耗	
1175	〃	須恵器 高杯	14.9	(2.2)	−	−	内外面回転ナデ	受部径16.9㎝

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1176	Ⅱ層	須恵器 高杯	−	(3.9)	−	10.2	内外面回転ナデ，透かしあり。	
1177	〃	土師質土器 小皿	−	(0.9)	−	4.6	内外面ナデ，外底部糸切り，内底部からの穿孔	
1178	〃	〃 皿	6.7	1.4	−	4.5	灯明皿。内外面回転ナデ，外底部回転糸切り，口縁部に広い範囲でタール付着	
1179	〃	染付 碗	10.2	5.9	−	4.4	口縁部端反，畳付露胎，内側面に四方襷，見込みに圏線・文様。外側面圏線間に草花文，高台に二重圏線	
1180	〃	石製品 石庖丁	8.8	4.2	1.2	−	石材は砂岩。片側に抉りを施す。片面自然面が残る。未成品	重量59.6g
1181	〃	〃 〃	8.3	5.1	1.2	−	石材は砂岩。片側に抉りを施す。片面自然面が残る。	重量81.7g
1182	〃	〃 〃	9.4	5.1	1.6	−	石材は砂岩。両側に抉りを施す。自然面が残る。	重量89.1g
1183	〃	〃 砥石	11.5	7.0	3.6	−	3面に使用痕	重量(348.4)g
1184	Ⅲ層	弥生土器 壺	8.8	(6.4)	−	−	内面ナデ・指頭圧痕，外面ハケ，ヘラ描沈線文の下に2条の扁平刻目突帯，突帯下にヘラ描沈線文	弥生時代 前期末
1185	〃	〃 〃	−	(3.1)	−	−	内外面ナデ，口縁端部強いナデにより凹む。2ヵ所の円孔	
1186	〃	〃 〃	−	(23.7)	−	−	内面頸部ハケ，肩部指頭圧痕，胴部ハケ・ナデ，外面タタキのちハケ	
1187	〃	〃 鉢	14.2	(4.2)	−	−	内外面ハケのちナデ	
1188	〃	〃 〃	14.6	(5.3)	−	−	内面ナデ，外面口縁部ヨコナデ，体部ナデ・指頭圧痕	
1189	〃	〃 〃	16.0	4.7	−	3.0	内面ハケ・ナデ，器面摩耗	
1190	〃	〃 〃	11.2	6.3	−	1.1	内面ナデ，内底部指頭圧痕，外面タタキをナデ消す。	
1191	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	4.7	内面ナデ，外面ハケ・ナデ，底部高台状	
1192	〃	〃 高杯	15.4	(5.2)	−	−	内面ハケのちヨコナデ，外面上部タテハケのちヨコナデ，下部ヘラケズリ	
1193	〃	須恵器 高杯	−	(4.4)	−	12.7	内外面回転ナデ，透かしあり。	
1194	〃	〃 杯蓋	13.2	(2.2)	−	−	内面ナデ，外面口縁部ナデ，天井部回転ヘラケズリ	
1195	〃	〃 杯身	12.8	(3.4)	−	−	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラケズリ	受部径15.5㎝
1196	〃	土師質土器 杯	15.2	4.8	−	6.9	口縁部玉縁状，内外面回転ナデ，外底部回転糸切り	
1197	〃	〃 小皿	6.1	1.3	−	5.0	内外面ナデ，外底部回転糸切り	
1198	〃	〃 〃	−	(1.9)	−	3.4	内外面回転ナデ，外底部回転糸切り	
1199	〃	〃 〃	7.2	1.4	−	4.6	灯明皿。内面回転ナデ，内面全面・外面一部タール付着，外底部回転糸切り	
1200	〃	〃 皿	10.0	1.9	−	7.0	内外面口縁部ナデ，外面体部ハケ，底部回転糸切り	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1201	Ⅲ層	土師質土器 羽釜	23.6	(8.8)	26.6	−	口縁部内外面ヨコナデ, 内面胴部ナデ, 外面鍔直下ヨコナデ, 胴部タタキ, 煤付着	
1202	〃	瓦質土器 羽釜	全長 (10.8)	全幅 (2.1)	−	−	外面ナデ, 煤付着	
1203	〃	土製品 土錘	3.9	1.4	1.3	−	表面摩耗	重量(5.8) g 孔径0.5㎝
1204	〃	石製品 石庖丁	8.8	5.4	1.8	−	石材は砂岩。打製石庖丁未成品, 片面に自然面が残る。	重量(93.4) g
1205	〃	〃 〃	6.2	4.1	1.0	−	石材は粘板岩。両側に抉りを施す。片面に自然面が残る。	重量32.8g
1206	〃	〃 〃	7.0	5.0	1.2	−	石材は砂岩。両側に抉りを施す。片面一部に自然面が残る。	重量43.8g
1207	〃	〃 〃	(6.3)	4.4	0.7	−	石材は粘板岩。全面研磨	重量(22.6) g
1208	〃	〃 〃	7.1	3.6	1.0	−	石材は砂岩。両側に抉りを施す。片面に自然面が残る。	重量33.6g
1209	〃	〃 石斧	7.0	2.1	1.0	−	石材は緑色片岩。全面丁寧に研磨される。	重量28.8g
1210	Ⅳ層	須恵器 壷	−	(3.0)	−	−	内外面回転ナデ, 上部に爪状の圧痕, ヘラ状工具による刻目	
1211	〃	土師質土器 杯	11.9	3.9	−	7.6	内外面回転ナデ, 外底部回転糸切り・タール付着	
1212	〃	石製品 叩石	14.1	9.3	5.0	−	石材は砂岩。両側に使用痕が認められる。	重量797.9g

Ⅳ C 区

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1213	ST107	弥生土器 壷	29.4	(2.6)	−	−	貼付口縁。外面は貼付部分は指頭圧痕，ハケ。口縁端部は摩耗。内面はハケ	
1214	〃	〃 〃	17.6	(4.2)	−	−	口縁端部はやや肥厚し，平坦面を呈する。外面はハケ。内面はハケ，摩耗	
1215	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	5.4	外面はタタキのち縦位のハケ，底部外面はナデ。内面はハケとナデ	
1216	〃	〃 〃	−	(4.2)	−	7.3	外面は指頭圧痕，ナデ，一部にハケ。内面は指頭圧痕，ナデ	
1217	〃	〃 甕	13.6	(4.5)	−	−	口縁端部は上方に拡張，口縁外面は浅い凹線状を呈する。外面はナデ，ハケ。内面はナデ，頸部より下方はケズリ	
1218	〃	〃 鉢	19.4	8.6	−	5.5	外面は口縁部にナデ，底部近くに一部薄いタタキ，その他は摩耗	
1219	〃	〃 蓋	−	(2.7)	−	−	外面は指頭圧痕，ナデ。内面はナデ	
1220	〃	〃 鉢	−	(3.2)	−	1.4	外面はミガキ。内面は指頭圧痕，ナデ，一部にハケ。ミニチュアか。	
1221	〃	〃 高杯	−	(8.3)	−	−	外面はミガキ，内面はナデ，裾部にはハケ	
1222	ST108	〃 壷	22.0	(4.4)	−	−	貼付口縁を呈する。外面は貼付部分は指頭圧痕，ハケ。内面はナデ，ハケ	
1223	〃	〃 〃	17.2	(7.8)	−	−	口唇部は上方に摘み出す。外面は口唇部ナデ，口縁部はナデ，ハケ。内面は口縁部上方ハケ，頸部にかけてケズリとナデ	
1224	〃	〃 〃	16.8	(4.1)	−	−	外面は口縁端部にナデ，他は摩耗。内面は粗いハケ	
1225	〃	〃 〃	−	(6.6)	−	−	外面はハケ，頸部に列点文を施す。内面はナデ	
1226	〃	〃 〃	−	(10.2)	−	−	外面はハケのちヘラ描直線文。扁平な刻目突帯を貼付。内面はヨコ方向のハケ	
1227	〃	〃 〃	−	(9.6)	21.0	−	頸部には刺突。外面はナデ，一部ハケ。内面はナデ，指頭圧痕	
1228	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	13.0	外面は面取状を呈し，指頭圧痕。内面はナデ。底部外面は摩耗する。	
1229	〃	〃 〃	−	(5.6)	−	4.0	外面にはタタキのちハケ。内面はナデ	
1230	〃	〃 〃	−	(1.4)	−	−	口縁部は貼付。外面は指頭圧痕。内面はヘラ描文	
1231	〃	〃 〃	−	(3.8)	−	−	外面には多条のヘラ描沈線文及び斜格子文。内面はナデ	
1232	〃	〃 〃	13.8	(8.9)	−	−	外面はハケ，ナデ。内面はナデ，ハケ，指頭圧痕	
1233	〃	〃 〃	22.0	(4.7)	−	−	外面は口縁部にナデ，頸部はハケ。内面はハケ，一部摩耗	
1234	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	−	外面は突帯を貼付し刻目を施す。内面はナデ	
1235	〃	〃 〃	20.6	(4.4)	−	−	口唇部は肥厚。外面はナデ，タテ方向のハケ。内面はナデ，ヨコ方向のハケ	
1236	〃	〃 甕	24.5	(7.5)	−	−	外面は体部はタタキ，頸部に縦位のハケ。内面頸部は指頭圧痕及びナデ，体部にはケズリ	
1237	〃	〃 〃	17.6	(4.4)	−	−	外面は口縁部ナデ，頸部ハケ，体部タタキ。内面は口縁部ハケ，ナデ，頸部ヨコ方向のナデ，体部タテ方向のナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1238	ST108	弥生土器 甕	15.1	(4.2)	−	−	外面は体部から頸部までタタキ。頸部にハケ，口唇部はナデ。内面は口縁部にヨコ方向のハケ，体部はナデ，指頭圧痕	
1239	〃	〃 〃	11.6	(3.9)	−	−	外面は口縁部から頸部にナデ，体部は摩耗。内面は口縁部にナデ，体部は指頭圧痕，ナデ	
1240	〃	〃 〃	33.0	(16.5)	34.4	−	外面は口唇部から口縁部はナデ，頸部から体部はハケで一部ミガキ状。内面は口縁部にハケ，頸部から体部は摩耗	
1241	〃	〃 〃	32.6	(7.7)	−	−	口唇部は平坦面を呈し，内面はユビナデ。その他は摩耗	
1242	〃	〃 〃	−	(20.5)	32.4	5.3	外面は体部下半部から底部にハケ。内面は体部下半部から底部にユビナデ。その他は摩耗	
1243	〃	〃 〃	32.8	(9.6)	−	−	外面は口縁部にナデ，指頭圧痕，頸部から体部はハケ。内面は口縁部にハケ及びナデ，体部はケズリ	
1244	〃	〃 〃	−	(2.3)	−	3.8	外面は指頭圧痕あるいは工具状の圧痕，ナデ。内面はナデ	
1245	〃	〃 〃	−	(6.7)	−	5.1	外面内面ともに摩耗	
1246	〃	〃 鉢	14.2	10.3	−	4.4	外面はタタキ，内面は口縁部から体部にハケ，体部下半部から底部にナデ，指頭圧痕	
1247	〃	〃 〃	8.9	7.8	−	4.4	外面内面ともにナデ，指頭圧痕	
1248	〃	〃 〃	14.0	6.3	−	4.4	外面は口縁部から体部にタテ方向のハケ，底部はナデ。内面はハケ，ナデ	
1249	〃	〃 高杯	−	(8.3)	−	17.2	外面は柱部上方から裾部にかけミガキ，裾部はハケ。内面はハケ，一部はミガキ。3ヵ所に径1㎝の円孔を施す。	
1250	〃	〃 〃	−	(10.3)	−	18.1	外面はハケのちミガキ。内面はナデ，裾部はハケで端部はナデ。内面裾部には輪状に煤が付着。3ヵ所に径1.2㎝の円孔を施す。	
1251	〃	〃 〃	−	(9.1)	−	16.6	外面はミガキ，ナデ。内面は摩耗及び剥離。一部にハケがみられる。4ヵ所に円孔を施す。	
1252	〃	〃 〃	−	(6.8)	−	−	外面はミガキ。内面はハケ，ナデ	
1253	〃	〃 〃	−	(3.5)	−	−	外面内面ともにミガキ	
1254	〃	〃 〃	−	(6.8)	−	−	外面はミガキ，ハケ。杯部内面はミガキ，ナデ。脚部内面はハケ。脚部に2ヵ所の穿孔がみられる。(4ヵ所の可能性あり)	
1255	〃	土製品 支脚	−	8.9	−	−	中空。外面内面ともに指頭圧痕及びナデ	
1256	〃	弥生土器 高杯	19.2	16.7	−	18.2	杯部外面はハケ及びナデ，内面はハケ。脚部外面はハケ及びミガキ，内面はナデ，ハケ。脚部には径0.6㎝の穿孔を7ヵ所	
1257	〃	土師器 皿	9.6	2.2	−	7.7	手づくね皿。外面内面はナデ。底部外面には簀子状の圧痕がみられる。	
1258	〃	土製品 支脚	−	(4.6)	−	−	手づくね成形。外面は指頭圧痕	
1259	〃	ミニチュア土器	−	(3.4)	−	1.6	外面はタタキ。内面はナデ，指頭圧痕	
1260	〃	〃	−	(4.8)	−	−	外面はナデ，指頭圧痕，一部にハケ。内面はナデ	
1261	〃	石製品 石庖丁	8.4	5.0	1.5	−	砂岩製。打製石庖丁の未成品か。	重量64.0g
1262	〃	〃 〃	7.9	5.5	1.3	−	打製石庖丁。一面は自然面，片面は剥離面。片刃。上部には敲打痕跡。両側に抉りを施す。	重量69.3g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1263	ST108	石製品 石庖丁	8.0	6.0	1.1	−	打製石包丁。砂岩製。一面は自然面，片面は剥離面。片刃。上部には敲打痕跡。両側に抉りを施す。	重量60.6g
1264	〃	〃 〃	5.4	4.1	1.2	−	打製石庖丁。砂岩製。片面は自然面，裏面は剥離面をもつ。両側には抉りを施す。	重量31.2g
1265	〃	〃 〃	6.4	4.8	1.5	−	石庖丁の未成品か。砂岩製	重量46.8g
1266	〃	〃 〃	6.7	5.4	1.2	−	打製石庖丁。砂岩製。片刃。両側に抉りを施す。	重量53.0g
1267	〃	〃 叩石	(16.2)	7.7	3.2	−	砂岩製。周縁部に敲打痕	重量(652.3) g
1268	〃	〃 砥石	(9.0)	(2.6)	−	−	砂岩製	重量198.3 g
1269	〃	〃 台石か	36.6	23.7	8.7	−	砂岩製	重量11.8kg
1270	〃	〃 台石	26.8	23.0	6.0	−	中央部に敲打痕跡あり。周縁部にも敲打痕跡がみられる。	重量5.2kg
1271	ST109	弥生土器 壷	−	(2.9)	−	−	口縁部に粘土帯を貼付し肥厚させる。外面は指頭圧痕，一部は摩耗。内面は摩耗	
1272	〃	〃 鉢	8.3	8.2	9.7	−	外面はタタキで口縁部は指頭圧痕，ナデ。内面はナデ，指頭圧痕で，口縁部内面には粘土紐接合痕が認められる。	
1273	〃	〃 〃	7.7	5.8	6.9	2.4	小型鉢。口縁部は外面内面ともにナデ，体部下半部の外面にタタキが認められる。	
1274	〃	石製品 石庖丁	8.8	5.2	1.6	−	打製石庖丁。砂岩製。一面は自然面で片面は剥離面。側縁の片側に抉りを施す。	重量105.6 g
1275	〃	〃 〃	6.3	5.2	1.2	−	砂岩製。片面は自然面，もう一面は剥離面。両側は抉りを施し，中央部には凹みと刃部の一部は抉り。石錘として再利用か。	重量44.8 g
1276	SB1	瓦 平瓦	(18.1)	(14.8)	2.3	−	凹面は摩耗。凸面には縄目痕が認められる。	
1277	〃	〃 〃	(13.8)	(8.9)	2.4	−	凹面に布目痕。凸面はナデ	
1278	〃	石製品 台石か	22.0	19.6	5.7	−	砂岩製か。中央部と周縁部には敲打痕跡がみられる。	重量3.7kg
1279	SB2	土師質土器 椀	−	(2.0)	−	5.9	底部に断面方形の高台を貼付。外面内面ともにナデ	
1280	〃	陶器 皿	10.0	(2.5)	−	−	唐津焼。外面口縁下はケズリ。内面は施釉	
1281	〃	備前焼 擂鉢	−	(5.6)	−	−	口縁部は上方に拡張。内面は強いナデ	
1282	〃	須恵器 甕	16.4	(3.3)	−	−	口唇部は肥厚。外面内面ともに回転ナデ	
1283	〃	石製品 石庖丁	7.0	4.9	0.9	−	表面は自然面，裏面は剥離面を呈す。両側に抉り，刃部の一部に抉りを施す。	重量39.5g
1284	SB6	土師質土器 皿	7.0	1.4	−	5.0	外面底部は回転糸切り痕が認められる。外面内面ともに回転ナデ，一部摩耗	
1285	〃	須恵器 甕	13.9	(2.8)	−	−	口縁端部は外反する。外面と内面は回転ナデ	
1286	〃	〃 壷あるいは甕か	−	(3.5)	−	8.0	外面は底部にケズリ，回転ナデ。内面にナデ	
1287	SB7	弥生土器 壷	19.0	(5.1)	−	−	外面は口唇部ナデ，その他はハケとナデ，内面はハケとナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1288	SB7	弥生土器 高杯	19.8	(4.7)	−	−	有稜高杯。外面は口縁端部にナデ，下方はハケ。内面は摩耗	
1289	〃	〃 壷	29.5	(2.3)	−	−	外面は口縁端部にナデ，口縁部下方はタテ方向のハケ。内面はヨコ方向のハケとナデ	
1290	SA1	ミニチュア土器	−	(3.6)	−	2.6	外面は指頭圧痕，ナデ。内面はナデ	
1291	SK4	弥生土器 壷	−	(3.3)	−	8.2	外面はハケ，ナデ。内面は剥離	
1292	SK6	〃 甕	34.5	(24.6)	33.4	−	頸胴部間に 4 条のヘラ描直線文。口唇部に指頭圧痕。口縁から頸部は外面内面にハケ，胴部はナデで一部ミガキ状	
1293	SK11	土師質土器 鍋	−	(5.3)	−	−	断面三角形の鍔を貼付。外面はナデ，指頭圧痕。内面はナデ。外面に煤	
1294	SK13	陶器 碗	11.3	(2.7)	−	−	外面と内面には黒褐色釉を施釉	
1295	〃	〃 〃	−	(1.9)	−	5.0	高台畳付は露胎でその他は施釉。内面には目痕がみられる。	
1296	SK15	弥生土器 壷	18.0	(4.0)	−	−	貼付口縁か。口唇部は平坦面をなし，外面は指頭圧痕。内面は丁寧なナデ	
1297	〃	〃 〃	−	(3.6)	−	9.6	外面と内面はナデ，内面の一部は摩耗と剥離	
1298	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	7.2	外面にハケ及びナデ，内面は摩耗	
1299	〃	〃 高杯	−	(5.1)	−	−	外面はミガキ，ハケ。内面には絞り目が認められる。円孔を施す。	
1300	〃	〃 〃	−	(9.2)	−	−	外面はミガキ。内面にナデ，ハケ。1 ヵ所に円孔を施す。	
1301	SK18	〃 壷	14.6	(9.4)	−	−	口唇部は平坦面を呈す。口縁部外面は頸部にかけてハケ，ナデ，内面は口縁部にナデ，ハケ，頸部はハケ，ナデ	
1302	〃	〃 甕	−	(8.1)	−	−	外面はタタキ，頸部は指頭圧痕。内面は口縁部から頸部にナデ，体部にハケ	
1303	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	3.1	外面はタテ方向のハケ，内面にナデ，指頭圧痕	
1304	SK24	石製品 石庖丁	8.7	5.8	1.7	−	打製石包丁。砂岩製。片刃。両側は抉り状を施す。	重量 99.9g
1305	SK25	ミニチュア土器	−	(3.5)	−	8.2	脚部外面と内面は指頭圧痕とナデ	
1306	SK29	弥生土器 壷	−	(6.0)	−	7.4	外面はハケ，ナデ。内面にナデ	
1307	SK30	〃 〃	−	(2.8)	−	6.1	外面内面ともにナデ。外面の一部は摩耗	
1308	SK31	陶器 皿	13.2	3.9	−	6.4	輪花碗。口縁端部口錆	
1309	〃	〃 碗	11.8	(6.0)	−	−	丸型碗	
1310	SK33	弥生土器 甕	14.2	(10.0)	15.8	−	外面はタタキ。内面は頸部下に粘土紐接合痕が認められる。ナデ，指頭圧痕	
1311	〃	〃 〃	11.0	(8.0)	11.9	−	外面は体部から口縁部までタタキ。内面は口縁部にハケ，頸部と体部内面には粘土紐接合痕が認められ，段部を有する。	
1312	〃	〃 〃	16.4	(6.5)	−	−	外面は体部から口縁部までタタキ。内面は口縁端部にナデ，口縁部下半部から頸部にハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1313	SK33	弥生土器 甕	−	(11.1)	15.6	−	外面はタタキとタテ方向のハケ。内面はハケとユビナデ	
1314	〃	〃 〃	−	(7.4)	−	5.6	外面はタタキ。内面は摩耗し，一部に剥離がみられる。	
1315	SD2	瓦質土器 釜	23.4	(5.4)	26.0	−	口縁下には断面方形の鍔が付く。口縁部はナデ，他は外面内面ともに摩耗	
1316	SD7	磁器 皿	−	(1.8)	−	4.2	肥前系磁器。削り出し高台。内面見込みは蛇ノ目状に釉がはげる。	
1317	SD11	弥生土器 高杯	−	(6.5)	−	−	杯部内面はナデ。脚部外面はミガキとナデ，内面は工具状の圧痕あり。	
1318	〃	土製品 支脚	−	(6.7)	−	6.2	中空。外面は指頭圧痕と一部摩耗。内面はナデ，底部端部は指頭圧痕	
1319	〃	須恵器 甕	19.0	(5.3)	−	−	口唇部は下方に肥厚する。外面内面ともにナデ	
1320	〃	陶磁器 皿	11.8	2.4	−	5.7	灯明皿。受皿が付き，一部抉りを施す。タールが付着する。	
1321	〃	〃 〃	12.0	4.2	−	5.1	内面見込みと高台は露胎。褐釉。体部から高台近くまで回転ケズリ	
1322	〃	〃 〃	14.9	(3.4)	−	−	内面見込み釉剥ぎ。外面と内面には褐釉	
1323	〃	〃 碗	8.3	(3.7)	−	−	外面には上絵付。細かい貫入	
1324	〃	〃 〃	11.0	(4.8)	−	−	染付碗。外面は草花と山。内面は口縁部に二重圏線，見込みには1条の圏線が巡る。	
1325	〃	〃 〃	13.8	(6.0)	−	−	広東碗。外面は帯文間に波文。内面には口縁部二重圏線，見込みに1条の圏線が巡る。	
1326	〃	〃 瓶	−	(1.7)	−	6.0	筒型容器か。外面底部と内面は無釉。透明度の高い釉	
1327	〃	瓦 平瓦	(28.3)	(18.9)	3.0	−	凹面ナデ，摩耗。凸面縄目，摩耗。	
1328	SD13	土師質土器 椀	−	(1.6)	−	5.8	底部に断面方形の高台が付く。外面内面はともにナデで，一部摩耗する。	
1329	〃	〃 〃	−	(1.8)	−	6.3	底部に断面方形の高台が付く。外面内面ともにナデで一部摩耗	
1330	〃	青磁 碗	−	(2.2)	−	5.6	削り出し高台。内面から高台畳付にかけて施釉	
1331	〃	陶器 碗	12.6	(5.2)	−	−	瀬戸焼か。天目茶碗。大窯期か。1332と同一か。	
1332	〃	〃 〃	−	(1.7)	−	4.4	瀬戸焼か。天目茶碗。削り出し高台	
1333	〃	〃 皿	−	(1.9)	−	5.6	唐津焼。削り出し高台。高台は露胎。内面見込み部分には目痕	
1334	〃	磁器 筒型容器	11.6	(4.2)	−	−	口縁部は内側に屈曲する。外面は施釉，内面は口縁部より下は露胎	
1335	〃	土師器 甕	−	(2.8)	−	−	外面は指頭圧痕，ハケ，ナデ。内面にナデ	
1336	〃	土師質土器 羽釜	19.4	(4.0)	−	−	口縁下外面に断面三角形の鍔を貼付し，周辺をナデ。口縁部内面は強いナデ。外面に煤	
1337	〃	瓦質土器 釜	(10.2)	(2.6)	2.4	−	脚付羽釜の脚部分。途中欠損する。外面は指頭圧痕とナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1338	SD13	瓦 軒平瓦	(7.6)	(8.0)	(2.9)	−	瓦当部分に鋸歯文と唐草文がみられる。	
1339	〃	〃 平瓦	(11.1)	(9.8)	(2.5)	−	凹面布目痕，凸面縄目痕	
1340	SD15	陶器 碗	−	(3.5)	−	−	口縁部外面に格子状の文様を上絵付	
1341	〃	〃 〃	−	(3.2)	−	−	内面は陽刻が施される。	
1342	SD16	弥生土器 壺	21.0	(2.4)	−	−	口唇部は浅い凹状を呈する。外面は口縁端部はナデ，下方部にハケ。内面はナデ，ハケ	
1343	〃	〃 〃	−	(2.5)	−	−	口唇部は肥厚し，ハケ状工具による列点文。外面はタタキのちナデ。内面にナデ，ハケ	
1344	〃	陶器 碗	−	(3.7)	−	−	天目茶碗。外面内面ともに施釉	
1345	SX1	陶磁器 皿	19.8	(2.6)	−	−	口縁部は輪花状を呈する。(なぶり口)	
1346	〃	〃 〃	13.2	4.1	−	6.0	口縁部は輪花状。口縁端部は錆釉	
1347	〃	〃 碗	9.4	7.5	−	4.5	削り出し高台。底部側面は回転ケズリ。高台は露胎。その他は施釉	
1348	〃	〃 〃	10.4	7.5	−	5.2	削り出し高台。外面下半部に陽刻状の文様が巡る。高台畳付は露胎	
1349	〃	〃 猪口	−	(4.0)	−	4.2	高台内は施釉。畳付周辺には砂が付着。外面には３条の圏線が巡る。	
1350	〃	〃 擂鉢	29.3	(10.6)	−	−	口縁部外面には１条の沈線。内面には11条１単位の摺目を巡らす。	
1351	〃	瓦 軒平瓦	(2.7)	(9.1)	−	−	大振りの文様。ナデ	
1352	〃	〃 〃	(6.8)	(17.4)	1.5	−	中心飾りと唐草文を配する。接合部は強いナデ，一部ケズリ	
1353	〃	〃 〃	(5.1)	(12.5)	1.2	−	大振りの文様。接合部は強いナデ	
1354	〃	〃 丸瓦	(23.7)	15.5	1.9	−	凸面は工具によるナデ。凹面に布目痕，鉄線引きの痕跡	
1355	〃	〃 桟瓦	(14.6)	(12.8)	1.9	−	凹面ナデ。凸面ハケ，ナデ	
1356	〃	〃 〃	(20.7)	(18.2)	2.0	−	ナデ	
1357	〃	〃 〃	(22.4)	(13.0)	2.2	−	凹面凸面ともにナデ。桟瓦の隅部分か。	
1358	〃	金属製品 銭貨	2.4	2.0	0.1	−	寛永通寶	量目2.6g
1359	〃	〃 煙管	5.1	1.6	1.2	−	吸口部か。	
1360	SX2	土製品 支脚	−	(8.4)	−	−	中空。外面は指頭圧痕とナデ	
1361	〃	弥生土器 鉢	−	(3.7)	−	−	外面と内面には指頭圧痕とナデ。外面底部には接合痕がみられる。	
1362	SX3	須恵器 杯	10.3	(3.2)	−	−	外面内面ともにナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1363	SX3	須恵器 甕	−	(3.0)	−	−	口縁端部及び外面内面はナデ	
1364	〃	陶器 碗	9.2	5.6	−	3.2	小型丸碗。削り出し高台で高台は露胎	
1365	〃	〃 皿	−	(2.9)	−	9.5	高台内に刻印あり。内面見込みに染付	
1366	〃	〃 碗	−	(4.3)	−	4.8	陶胎染付。二次被熱の可能性あり。	
1367	〃	瓦 平瓦	(10.8)	(10.4)	1.8	−	凹面はナデ，布目痕。凸面に縄目痕	
1368	〃	陶器 鉢	23.5	11.6	−	10.2	口縁端部折縁。高台内は露胎。外面はハケ目と褐釉。内面は口縁端部を除きハケ塗り	
1369	〃	石製品 砥石か	(9.6)	(7.8)	1.3	−	4面に使用痕跡あり。1面文字を刻む。	重量(96.9) g
1370	〃	青磁 大皿	31.8	5.6	−	14.0	口縁部は折縁状。底部高台内は蛇ノ目釉剥ぎ。内面には砂目あり。	
1371	〃	陶磁器 瓶	−	(16.0)	11.8	7.4	染付。外面に圏線。内面は回転ケズリ，回転ナデ	
1372	〃	磁器 香炉	−	(5.9)	−	6.0	三足。獣形にも似ている。高台はほぼ露胎	
1373	〃	陶器 皿	11.6	2.2	−	4.2	立ち上がりの一部に抉りを施す。外面は回転ケズリ，回転ナデ。内面に回転ナデ。立ち上がりに煤	
1374	〃	〃 〃	13.1	3.6	−	4.8	削り出し高台。口縁部は輪花状を呈し，内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。褐釉	
1375	〃	磁器 瓶	−	(3.2)	−	4.3	内面と高台内は露胎	
1376	〃	陶器 碗	−	(3.3)	−	5.0	高台畳付は露胎。その他は施釉。高台内は抉り状を呈する。	
1377	〃	〃 鉢	19.5	(4.1)	−	−	口縁部は玉縁状を呈する。外面内面ともに回転ナデ	
1378	〃	〃 〃	−	(5.4)	−	9.8	外面は体部に回転ケズリ，高台は摩耗。内面に回転ナデ	
1379	〃	石製品 硯	(8.0)	7.0	1.5	−	中央部にかけて断面凹状を呈する。	重量(69.4) g
1380	〃	〃 砥石	5.9	4.5	(1.4)	−	4面に使用痕跡あり。	重量(63.5) g
1381	SX4	弥生土器 壺	15.0	(11.4)	−	−	複合口縁壺。2次口縁部外面に櫛描波状文，ナデ。1次口縁から頸部の外面と内面はハケ	
1382	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	5.4	外面は摩耗。内面は摩耗とナデ	
1383	〃	〃 鉢	10.6	4.8	−	3.6	外面は底部にタタキ，ナデ。内面にハケと底部にはナデ	
1384	P5	〃 壺	16.8	(5.5)	−	−	口縁部に粘土帯を貼付し肥厚。外面は指頭圧痕，タテ方向のハケ。内面は口縁端部摩耗，その他はミガキとヨコ方向のハケ	
1385	P7	〃 〃	−	(2.2)	−	−	口縁部は粘土帯を貼付し肥厚させる。口唇部に刻目。貼付部分は指頭圧痕及びナデ	
1386	P9	〃 〃	−	(4.7)	−	6.4	外面はタテ方向のハケ。内面にナデ	
1387	P10	〃 甕	14.9	(3.0)	−	−	外面はタタキ。内面はハケ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1388	P1	弥生土器 鉢	7.6	3.5	−	−	小型鉢。外面は摩耗。内面はナデで一部摩耗	
1389	P6	〃 高杯	17.0	(5.1)	−	−	外面は口縁部摩耗，底部にかけてハケ，ミガキ。内面は口縁部ナデ，体部から底部にミガキ	
1390	P2	〃 〃	−	(5.3)	−	10.1	外面内面ともに摩耗。円孔が施される。	
1391	P3	磁器 碗	−	(1.6)	−	5.2	肥前系磁器。内面見込みに圏線，文様あり。外面にも圏線あり。	
1392	P13	土師質土器 杯	−	(2.3)	−	5.9	底部外面は回転糸切り。外面と内面はともに回転ナデ	
1393	P4	〃 皿	6.5	1.9	−	4.4	底部外面は回転糸切り。外面内面ともに回転ナデ	
1394	P8	土師器 椀	−	(2.1)	−	6.2	断面方形の輪高台を貼付。底部は糸切り。内面にナデ	
1395	P12	陶器 碗	11.4	8.3	−	4.7	断面方形の高台。高台は露胎。その他は施釉	
1396	P11	瀬戸焼 皿	10.6	2.6	−	5.4	折縁皿。内面見込みは円形状の釉剥ぎ。体部内面は丸ノミ状のケズリが3ヵ所。高台内には窯道具の一部が付着	
1397	第Ⅱ層	弥生土器 壺か	−	(7.0)	−	9.3	外面は指頭圧痕，ナデ。内面にナデ	
1398	〃	須恵器 甕	−	(5.7)	−	−	外面は櫛描波状文，ナデ。内面は摩耗	
1399	〃	瓦質土器 羽釜	17.8	(5.0)	−	−	外面内面ともに摩耗。口縁下に断面三角形の鍔を貼付。外面の鍔と体部間に煤付着	
1400	〃	磁器 紅皿	4.8	1.3	−	1.5	外面は貝殻状の型押成形。口縁部には細礫が付着	
1401	〃	陶器 鉢	−	(7.4)	−	17.5	型紙刷りか。削り出し高台。外面に雷文と菊の文様か。高台内面に「三六」の墨書か。	
1402	〃	〃 碗	12.3	8.6	−	4.8	丸型碗。削り出し高台。高台畳付と内側にかけては露胎	
1403	〃	金属製品 銭貨	2.5	2.0	0.1	−	寛永通寶	量目3.1g
1404	第Ⅲ層	弥生土器 壺	19.2	(1.3)	−	−	粘土帯を貼付。外面の貼付部分は指頭圧痕。内面は4条の櫛描文と短沈線を巡らす。	
1405	〃	〃 〃	−	(1.1)	−	−	口唇部には竹管による施文。外面はハケ，内面にナデ	
1406	〃	土師質土器 皿	6.8	1.4	−	4.6	底部外面は回転糸切り。外面と内面はともに回転ナデ	
1407	〃	〃 杯	14.7	4.2	−	7.4	底部外面は回転糸切り。外面と内面はともに回転ナデ。体部下半部にロクロ目がみられる。	
1408	〃	青磁 皿	14.4	3.1	−	8.3	稜花皿。口縁部には抉りを施す。	
1409	第Ⅳ層	弥生土器 壺	18.0	(3.1)	−	−	口唇部は平坦面を呈する。外面内面ともにナデ，ハケ。口縁部には粘土帯を貼付する。	
1410	〃	〃 〃	23.6	(2.8)	−	−	口唇部は下方に拡張。外面には列点文。内面にナデ	
1411	〃	〃 甕	15.2	(11.6)	17.4	−	口縁部は「く」の字状で外面は体部から口縁部までタタキ，頸部にハケ。内面は口縁部から頸部にハケ，体部にナデ	
1412	〃	〃 〃	12.6	(13.6)	20.6	−	外面は体部から口縁部までタタキ，頸部と体部下半部にハケ。内面は口縁部から頸部にハケ，体部下半部にナデ	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1413	第Ⅳ層	弥生土器 鉢	10.6	3.6	−	−	外面と内面はともに指頭圧痕とナデ。口縁部の一部は指頭圧痕により波状を呈する。	
1414	〃	〃 〃	10.8	5.0	−	2.5	外面と内面はともにナデ	
1415	〃	土製品 紡錘車か	(2.0)	(2.2)	0.5	−	周縁部は剥離	
1416	〃	〃 土錘	8.8	3.7	3.8	−	外面に一部タタキ，ナデ，指頭圧痕	重量115.9g 孔径1.2㎝
1417	〃	土師質土器 羽釜	−	(4.3)	−	−	外面の口縁部下に断面三角形の鍔が巡る。外面にタタキ，内面は口縁部にナデ，口縁部下方はハケ	
1418	〃	石製品 石庖丁か	8.9	5.4	1.4	−	打製石包丁の未成品か。両側は抉りを意識したものか。	重量85.9g
1419	包含層	弥生土器 壷	−	(4.7)	−	7.3	外面はハケ，底部近くに指頭圧痕。内面はナデ，指頭圧痕	
1420	〃	ミニチュア土器	3.6	2.8	−	1.4	外面は指頭圧痕。内面にナデ	
1421	〃	土師質土器 杯	14.0	3.1	−	8.1	外面内面ともに摩耗	
1422	〃	灰釉陶器 皿	10.4	(2.5)	−	−	外面内面ともに回転ナデ	
1423	〃	土師器 鉢か	22.4	(6.1)	−	−	口唇部は平坦面を呈し，口縁部は内湾する。外面内面ともにナデ，一部摩耗	
1424	〃	須恵器 甕	−	(9.1)	−	18.4	外面内面は回転ナデ。底部外面周辺はケズリ	
1425	〃	〃 壷	−	(5.9)	−	16.3	外面はナデ。内面はタタキ状の圧痕，ナデ。二次被熱の可能性	
1426	〃	青磁 皿	14.5	(2.6)	−	−	口縁部は外反	
1427	〃	青花 皿	−	(1.4)	−	8.5	内面見込みに牡丹唐草か。外面には3条の圏線	
1428	〃	磁器 皿	−	(1.4)	−	5.5	削り出し高台。内面には東屋あるいは楼閣，樹木	
1429	〃	白磁 皿	−	(2.3)	−	3.4	削り出し高台。底部外面は露胎	
1430	〃	染付 皿	13.9	(2.5)	−	−	外面は圏線間に草花。内面の口縁部と見込みに圏線	
1431	〃	磁器 香炉か筒型容器	11.0	(3.3)	−	−	口縁端部は肥厚し，内傾する。内面は口縁下まで施釉	
1432	〃	陶器 皿	12.4	4.7	−	4.4	鉄釉。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。削り出し高台。高台は露胎	
1433	〃	青磁 碗	−	(3.9)	−	5.6	外面には鎬蓮弁か。高台内は蛇ノ目状の釉剥ぎ。内面見込みに印花	
1434	〃	陶器 鉢	−	(6.2)	−	8.0	削り出し高台。外面内面ともに回転ナデ，褐釉。外面は鉄釉流し掛け	
1435	〃	備前焼か 擂鉢	−	(4.1)	−	−	片口部分。内面に摺目	
1436	〃	備前焼 擂鉢	28.6	(10.7)	−	−	口縁部外面は2条の沈線。体部外面はケズリ，ナデ。内面は摺目。口縁下は摺目をナデ消す。	
1437	〃	〃 〃	35.6	(13.0)	−	−	口縁部外面は2条の沈線。体部外面はケズリ，ナデ。内面に摺目。口縁下は摺目をナデ消す。	

遺物観察表59

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
			口径	器高	胴径	底径		
1438	包含層	陶器 甕	25.3	(10.7)	34.6	−	外面内面ともに回転ナデ。オリーブ色の釉を施す。	
1439	〃	瓦 軒丸瓦	(3.5)	(10.2)	(1.9)	−	「王子□」の刻印が施される。□には弥か。	
1440	〃	〃 丸瓦	(6.1)	(4.9)	(1.7)	−	「ノイ千」の刻印か。	
1441	〃	石製品 石庖丁	7.0	5.5	1.5	−	打製石庖丁。砂岩製。片側に抉りを施す。	重量59.3g
1442	〃	〃 剥片	2.3	2.5	0.7	−	チャート製	重量4.1g

遺構計測表

遺構番号	調査区	平面形	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	床面標高（m）	時期	備考
ST69	ⅣB－2区	不整円形	4.9	4.6	17.7	4.1	弥生時代終末～古墳時代初頭	中央ピット・ピット・壁溝あり，ST70に切られる。
ST70	〃	多角形	6.2	5.6	27.3	4.0	〃	中央ピット・ピット・壁溝あり，ST69を切る。
ST71	〃	不整円形	4.7	4.7	17.3	4.2	〃	中央ピット・ピットあり，ST72を切る。
ST72	〃	－	－	－	－	4.2	〃	ピットあり，ST71・75に切られる。
ST73	〃	不整円形	6.2	5.8	28.3	4.0	〃	中央ピット・ピット・壁溝あり。
ST74	〃	不整隅丸方形	5.4	4.6	24.8	4.3	〃	中央ピット・ピット・壁溝・ベッドあり，ST80を切る。
ST75	〃	隅丸方形	7.5	－	－	4.3	〃	中央ピット・ピット，ST72を切り，中央部を撹乱。南側は調査区外へ。
ST76	〃	－	－	東西軸7.5	－	4.6	〃	中央ピット・ピット，南北両側が調査区外へ。ⅣB－1区のST61と同一か。
ST77	〃	－	－	－	－	4.3	〃	ピットあり，ST78に切られ，北側と西側が調査区外へ続く。
ST78	〃	－	－	3.8	－	4.2	〃	中央ピット・ピット・壁溝あり，ST77を切る。北側が調査区外へ。
ST79	〃	隅丸方形	3.6	3.4	12.3	4.2	弥生時代後期後葉	中央ピット・土坑・ピット，ST80を切る。
ST80	〃	隅丸長方形	－	2.9	－	4.3	弥生時代終末～古墳時代初頭	中央ピット・ピットあり，北側をST79，南側をST74に切られる。
ST81	〃	〃	4.8	4.0	19.2	4.3	〃	中央ピット・ピットあり。
ST82	〃	隅丸方形	3.7	3.5	13.0	4.5	〃	ピット・壁溝あり，SB3に切られる。
ST83	〃	－	－	－	－	4.1	〃	ピット・壁溝あり，SK7に切られる。削平を受ける。
ST84	〃	隅丸方形	－	東西幅4.8	－	4.4	古墳時代後期	ピットあり，削平を受ける。
ST85	〃	〃	－	－	－	4.4	〃	削平を受ける。
ST86	〃	－	－	東西幅4.9	－	4.3	〃	ピット・壁溝あり，ST87に切られる。
ST87	〃	－	－	－	－	4.4	〃	ピットあり，ST86を切る。
ST88	〃	－	－	－	－	4.5	弥生時代終末～古墳時代初頭	南側の大部分が調査区外へ続く。
ST89	〃	隅丸方形？	東西長3.9	－	－	4.6	〃	SX2に切られ，南側と北側が調査区外へ続く。
ST90	〃	〃	東西長2.5	－	－	4.6	〃	壁溝あり。SK21に切られ，南側が調査区外へ続く。
ST91	〃	〃	－	－	－	4.4	古墳時代後期	壁溝あり。ST92・93を切り，北側が調査区外へ続く。
ST92	〃	〃	－	－	－	4.4	弥生時代終末～古墳時代初頭	テラスあり，ST91・SK23・SD13に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST93	〃	－	－	－	－	4.5	〃	ベッド・壁溝あり，ST91に切られ，北側が調査区外へ続く。

竪穴建物跡計測表2

遺構名	調査区	平面形	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	床面標高（m）	時期	備考
ST94	ⅣB－2区	隅丸方形?	－	－	－	4.5	弥生時代終末～古墳時代初頭	壁溝あり，SK24に切られ，南側が調査区外へ続く。
ST95	〃	隅丸方形	3.2	3.0	9.3	4.4	〃	壁溝あり，SK25・26に切られ，複数のピットと切り合う。
ST96	〃	隅丸方形?	－	－	－	4.6	〃	SD14に切られ，南側が調査区外へ続く。
ST97	〃	〃	4.2	3.4	－	4.3	古墳時代後期	ベッド・ピット・壁溝あり，ST98を切り，SK37に切られる。
ST98	〃	－	－	－	－	4.4	弥生時代終末～古墳時代初頭	ST97に切られ，南側と西側が調査区外へ続く。
ST99	〃	隅丸長方形?	5.0	2.2	－	4.2	〃	ST100を切り，SK38･SX3に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST100	〃	隅丸方形?	－	－	－	4.2	〃	ST99とSK37・38に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST101	〃	隅丸方形	4.0	3.7	14.6	4.1	〃	ベッド・土坑・ピット・壁溝あり，ST103を切る。
ST102	〃	－	－	－	－	4.1	〃	壁溝あり。ST103を切り，ST106に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST103	〃	隅丸方形?	－	－	－	4.2	〃	ST101・102に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST104	〃	－	－	－	－	4.2	〃	南側が調査区外へ続く。
ST105	〃	隅丸方形?	東西5.0	－	－	4.0	〃	ベッド・ピット・壁溝あり，SK40～42・44とSD24・撹乱に切られる。
ST106	〃	－	－	－	－	4.2	〃	壁溝あり。ST102を切り，撹乱に切られ，北側が調査区外へ続く。
ST107	ⅣC区	－	東西長（3.4）	南北長（2.9）	－	－	弥生時代後期後葉	ピット・壁溝あり。
ST108	〃	円形～不整円形	東西長5.2	南北長（4.9）	－	－	〃	中央ピット・ピット・壁溝あり，遺構が重複している可能性あり。
ST109	〃	円形～楕円形	東西長5.0	南北長（2.6）	－	－	〃	ピットあり，ST110を切る。
ST110	〃	－	南北長（1.4）	東西長（0.8）	－	－	－	ST109に切られる。

遺構番号	調査区	規模（桁行×梁行）	面積（㎡）							
			0～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～35	35～40
SB1	ⅣB－2区	3間×3間						○		
SB2	〃	4間×3間								○
SB3	〃	4間×3間								○
SB1	ⅣC区	3間×3間							○	
SB2	〃	3間×2間以上								
SB3	〃	2間×1間			○					
SB4	〃	2間×1～2間			○					
SB5	〃	2間×1間	○							
SB6	〃	2間×1間								
SB7	〃	－								
SB8	〃	－								

土坑計測表1

遺構番号	調査区	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK1	ⅣB－2区	長方形	－	0.5	6	ST76を切る。
SK2	〃	不整長方形	1.1	－	8～16	南側を撹乱に切られる。
SK3	〃	楕円形	－	0.8	15～20	南側を撹乱に切られる。
SK4	〃	〃	1.3	0.8	8	
SK5	〃	不整形	4.2	1.7	23～37	北側は調査区外へ続く。
SK6	〃	隅丸長方形	1.2	0.6	12～16	
SK7	〃	〃	2.5	1.5	5～7	ST83を切る。
SK8	〃	〃	2.3	1.2～1.4	27～31	
SK9	〃	〃	1.9	1.3	5～15	中央を撹乱に切られる。
SK10	〃	不整楕円形	－	－	8～14	南側を撹乱に切られる。
SK11	〃	〃	－	0.8	8～10	南側を撹乱に切られる。
SK12	〃	楕円形	1.6	1.2	25	
SK13	〃	〃	1.3	0.9	13	
SK14	〃	隅丸方形	1.3	1.2	11	SD6を切る。
SK15	〃	〃	1.5	1.4	35	SD9を切る。
SK16	〃	隅丸長方形	2.0	1.3	29	
SK17	〃	不整楕円形	1.0	0.5	41	北側は調査区外へ続く。
SK18	〃	〃	1.1	0.6	9	SD12と切り合う。
SK19	〃	〃	1.3	1.0	20	SK20に切られ，北側は調査区外へ続く。
SK20	〃	不整形	0.9	0.6	22	SK19を切り，北側は調査区外へ続く。
SK21	〃	－	－	－	－	ST90を切る。
SK22	〃	不整形	0.6	0.5	24	西側は調査区外へ続く。
SK23	〃	不整長方形	2.8	1.1	13	ST92を切る。南側は調査区外へ続く。
SK24	〃	隅丸長方形	0.8	0.4	30	ST94を切る。南側は調査区外へ続く。
SK25	〃	－	－	－	－	ST95を切る。

遺構番号	調査区	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK26	ⅣB－2区	－	－	－	－	ST95を切る。
SK27	〃	不整楕円形	2.0	0.7	10	
SK28	〃	楕円形	0.8	0.7	14	
SK29	〃	円形	1.0		20	南側は調査区外へ続く。
SK30	〃	隅丸長方形？	1.3	0.9	10	南側は調査区外へ続く。
SK31	〃	不整円形	0.6	0.5	17	SD15に切られ，SD17と切り合う。
SK32	〃	不整長方形	2.2	1.7	28	ST99・100とSK35・SD15に切られる。
SK33	〃	隅丸長方形	1.4	0.8	13	
SK34	〃	不整円形	0.9		14	
SK35	〃	不整形	1.7	0.8	4	SK32を切り，SD15に切られる。
SK36	〃	円形	1.0		74	
SK37	〃	不整楕円形	1.9	1.5	55	ST97・100を切る。
SK38	〃	〃	1.3	1.0	82	ST99・100を切る。
SK39	〃	円形	0.8		40	SK44の床面で検出，撹乱
SK40	〃	円形？	1.0		127	撹乱
SK41	〃	〃	1.2		134	撹乱
SK42	〃	－	1.4	－	96	撹乱
SK43	〃	円形？	1.5		46	撹乱
SK44	〃	－	3.0	1.7	10	ST105を切る。北側と東側は調査区外へ続く。
SK45	〃	－	1.9	－	86	
SK46	〃	隅丸長方形	1.0	0.3	10	
SK47	〃	不整楕円形	1.6	1.3	26	SK49と切り合う。
SK48	〃	隅丸長方形	2.1	0.6	22	
SK49	〃	隅丸長方形？	2.9	1.0	7	SD22に切られ，ピット・SK47と切り合う。
SK1	ⅣC区	円形	1.7	1.5	8	

土坑計測表3

遺構番号	調査区	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK2	Ⅳ C区	楕円形	1.5	1.3	5	
SK3	〃	−	(1.4)	(0.6)	19	東部を試掘坑に切られる。
SK4	〃	隅丸方形	1.7	1.6	10	
SK5	〃	隅丸長方形	2.2	0.7	8	
SK6	〃	楕円形	8.0	6.0	15～18	
SK7	〃	円形	1.4	1.2	17	
SK8	〃	不整形	南北(0.9)	東西0.8	16～34	南側は調査区外へ続く。
SK9	〃	−	東西2.7	南北(1.2)	17	北部は調査区外へ続く。
SK10	〃	隅丸方形	0.9	0.8	4	北部はピットに切られる。
SK11	〃	−	東西2.0	南北(1.8)	8～14	南側は調査区外へ続く。
SK12	〃	楕円形	1.3	0.8	10	
SK13	〃	隅丸長方形	3.3	1.7	50	
SK14	〃	隅丸方形	2.6	2.0	10～15	
SK15	〃	不整楕円形	1.7	1.5	22	
SK16	〃	円形	1.5		9	
SK17	〃	不整楕円形	1.0	0.5	41	北側は調査区外へ続く。
SK18	〃	〃	1.1	0.6	9	SD12と切り合う。
SK19	〃	〃	1.3	1.0	20	SK20に切られる。北側は調査区外へ続く。
SK20	〃	不整形	0.9	0.6	22	SK19を切る。
SK21	〃	−	−	−	−	
SK22	〃	隅丸方形	1.5	(1.3)	34	
SK23	〃	不整形	1.2	(0.9)	34	
SK24	〃	〃	3.8	2.8	16	
SK25	〃	楕円形	1.0	0.6	30	
SK26	〃	円形	1.0		22	

遺構番号	調査区	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK27	ⅣC区	不整形	1.8	1.5	40～50	
SK28	〃	隅丸長方形	3.4	1.8	50	SD11を切る。
SK29	〃	楕円形	3.5	0.9	36～47	
SK30	〃	〃	4.1	0.9	5～6	
SK31	〃	溝状	2.4	0.3～0.4	17～27	ハンダ土坑1に続く。
SK32	〃	楕円形	1.8	0.9	14	
SK33	〃	〃	1.3	0.6	12	
SK34	〃	−	(0.8)	1.1	10	南側は調査区外へ続く。
SK35	〃	−	東西4.2	南北(0.9)	6～9	北側は調査区外へ続く。
ハンダ土坑1	〃	円形	1.9	1.7	28～35	
ハンダ土坑2	〃	〃	2.0		24～31	
ハンダ土坑3	〃	〃	1.7		18～20	
ハンダ土坑4	〃	不整円形	1.9	1.7	20	

図　版

Ⅳ B － 2 区

Ⅳ B － 2 区北側

調査前風景（西より）

調査前風景（東より）

図版２

調査区北壁セクション（南より）

調査区北壁セクション（南より）

調査区西部遺構検出状態（西より）

調査区西部遺構完掘状態（西より）

図版４

調査区東部遺構検出状態（東より）

調査区東部遺構完掘状態（東より）

SB2検出状態（南より）

SB2完掘状態（北より）

図版６

ST69バンクセクション（南西より）

ST70バンクセクション（南東より）

ST70遺物出土状態

ST71弥生土器（61）出土状態

ST73石製品（85）出土状態

ST74バンクセクション（北西より）

ST74遺物出土状態

ST74弥生土器（113）出土状態

ST74弥生土器（114・115）出土状態

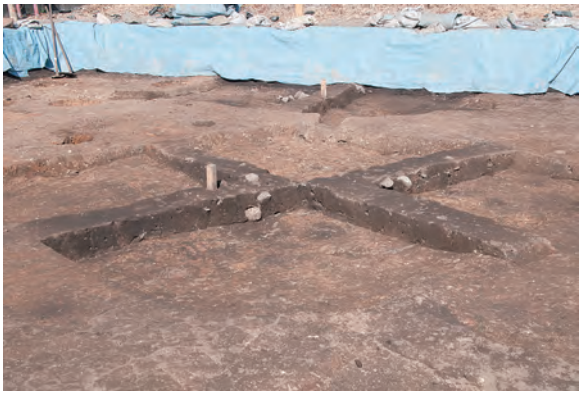
ST75バンクセクション（西より）

ST75弥生土器（132）出土状態

ST75弥生土器（133）出土状態

ST78バンクセクション（東より）

ST78弥生土器（242）出土状態



ST79バンクセクション（南より）

ST79弥生土器（319・320）出土状態

図版８

ST79弥生土器（254）出土状態

ST79石製品（314）出土状態

ST79（中央ピット）弥生土器（325）出土状態

ST81バンクセクション（北東より）

ST82土製品（347）出土状態

SB3（P10）石製品（389）出土状態

SK14弥生土器（407）出土状態

SK14弥生土器（414）出土状態

SD3須恵器（424）出土状態

SG1弥生土器（448・449）出土状態

SG2弥生土器（450・451）出土状態

SG3弥生土器（453）出土状態

SG4弥生土器（454～456）出土状態

SG5弥生土器（458・459）出土状態

P12弥生土器（483・484）出土状態

第Ⅱ層須恵器（538）出土状態

図版10

第Ⅲ層須恵器(596)出土状態

第Ⅲ層土師質土器(599)出土状態

第Ⅲ層土製品(601)出土状態

第Ⅲ層土製品(605)出土状態

第Ⅳ層弥生土器(705)出土状態

第Ⅴ層弥生土器(799・800)出土状態

第Ⅴ－1層弥生土器(913)出土状態

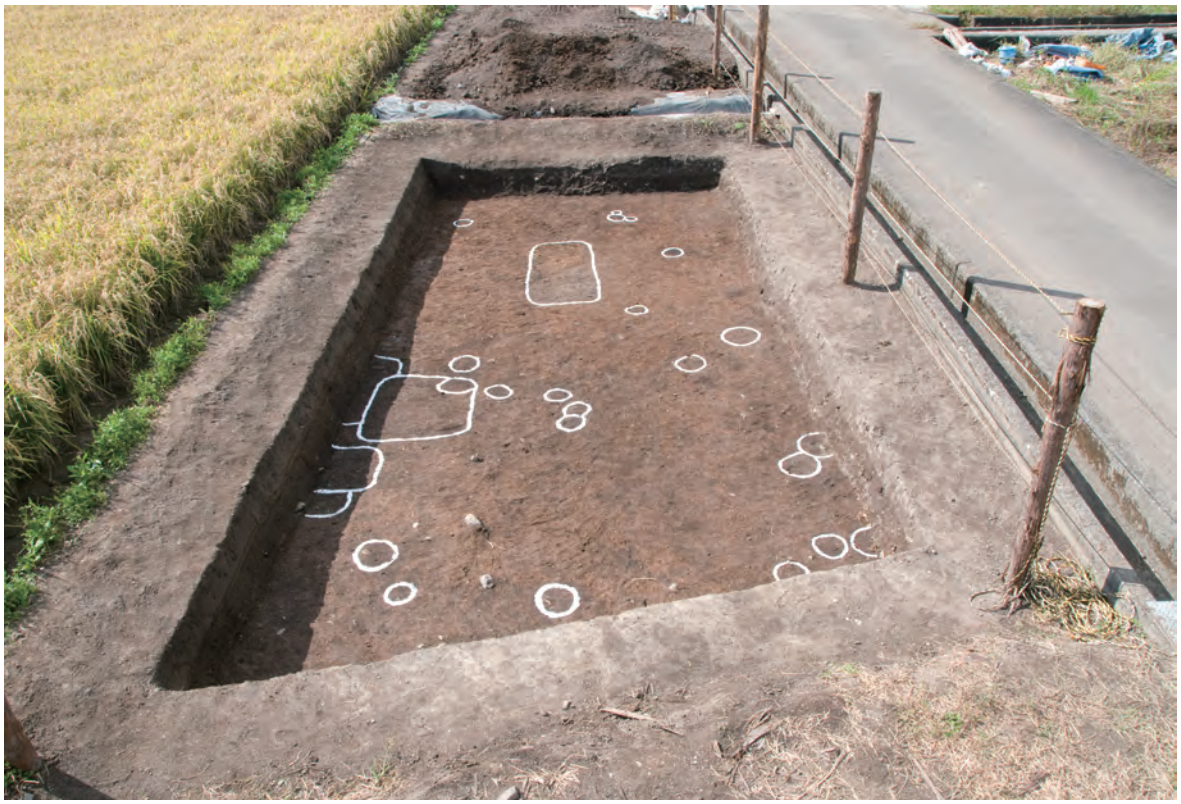
第Ⅴ－2層石製品(938)出土状態

ⅣＢ－２区南側

調査区西部遺構検出状態（東より）

調査区西部遺構完掘状態（東より）

図版12



調査区西部遺構検出状態（東より）

調査区西部遺構完掘状態（西より）

調査区中央部遺構検出状態（東より）

調査区中央部遺構完掘状態（東より）

図版14

調査区中央部遺構検出状態（西より）

調査区中央部遺構完掘状態（西より）

調査区中央拡張部遺構検出状態（西より）

調査区中央拡張部遺構完掘状態（西より）

ST92遺物出土状態

ST93遺物出土状態

ST95バンクセクション（南西より）

図版16

調査区東部遺構検出状態（東より）

調査区東部遺構完掘状態（東より）

調査区東部遺構検出状態（西より）

調査区東部遺構完掘状態（西より）

図版18

ST97バンクセクション（南西より）

ST97遺物出土状態

ST97弥生土器（1009）出土状態

ST97石製品（1012）出土状態

ST99遺物出土状態

調査区東部遺構検出状態（西より）

調査区東部遺構完掘状態（西より）

図版20

ST101 遺物出土状態

ST101 遺物出土状態

SG6 弥生土器（1154）出土状態

SG7 弥生土器（1155～1157）出土状態

図版22

SG7セクション（東より）

SG7弥生土器（1156・1157）出土状態

SG7弥生土器（1157）出土状態

ST105弥生土器（1109）・庄内式土器（1122）出土状態

P21弥生土器（1160）・東阿波型土器（1163）出土状態

P21弥生土器（1161）・東阿波型土器（1163）出土状態

P22弥生土器（1164）出土状態

第Ⅲ層石製品（1209）出土状態

ⅣＢ－２区出土遺物

弥生土器（壷）

弥生土器（壷）

図版24

土製品（支脚）

弥生土器（甕）

7

31

86

89

95

96

弥生土器（甕・ミニチュア），石製品（叩石・砥石・台石）

図版26

100

130

131

132

133

148

弥生土器（壷・甕）

234

246

253

259

265

266

弥生土器（壷・甕・鉢），石製品（叩石）

図版28

268

269

271

306

323

348

弥生土器（甕・高杯），石製品（磨石）

356

389

403

432

452

459

弥生土器（壷・甕），石製品（太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧）

図版30

482

514

560

578

579

601

弥生土器（甕），土製品（支脚），石製品（砥石・穿孔具）

605

624

626

628

641

650

弥生土器（壷・甕），土製品（支脚），石製品（叩石・母材）

図版32

652

703

732

735

735

736

弥生土器（甕），土師器（甕），瓦（丸瓦・平瓦），土製品（支脚）

737

739

740

760

786

799

弥生土器（甕），土製品（支脚），石製品（扁平片刃石斧・磨石）

図版34

800

856

858

884

891

914

弥生土器（壷・甕・高杯），土製品（支脚）

918

930

933

945

960

963

弥生土器（壷・甕），土師器（甕）

図版36

970

989

991

992

997

1000

弥生土器（甕・ミニチュア）

1009

1018

1023

1035

1036

1037

弥生土器（壷・甕），土師器（高杯）

図版38

1040

1053

1058

1088

1090

1091

弥生土器（壷・甕），土師器（壷）

1109

1118

1122

1124

1142

1143

弥生土器（甕・高杯），庄内式土器（甕），瓦（軒丸瓦），石製品（砥石）

図版40

1153

1154

1155

1156

1162

1163

弥生土器（壷・甕・器台），東阿波型土器（甕）

1164

1167

1170

1183

1202

1209

弥生土器（壷・甕），瓦質土器（羽釜），瓦（軒丸瓦），石製品（砥石・石斧）

図版42

28

29

38

39

88

106

107

108

弥生土器（鉢）

109

113

114

115

140

171

182

204

弥生土器（壷・鉢），東阿波型土器（甕）

図版44

205

209

278

297

334

345

394

414

弥生土器（甕・鉢・高杯・ミニチュア），土師器（壷）

436

483

508

508

509

513

547

562

弥生土器（甕・鉢），瓦質土器（擂鉢），瓦（平瓦），石製品（石庖丁・砥石）

図版46

586

594

603

661

666

682

683

686

弥生土器（鉢・ミニチュア），土製品（支脚）

694

728

757

769

771

817

826

827

弥生土器（鉢・器台），須恵器（転用硯），土製品（土錘），石製品（石庖丁）

図版48

828

842

859

877

910

911

913

985

弥生土器（鉢・高杯），土師器（高杯），土製品（支脚），石製品（砥石）

1001

1017

1021

1026

1031

1050

1061

1079

弥生土器（壷・甕・鉢・高杯・ミニチュア），土師器（鉢）

図版50

1092

1113

1152

1160

1161

1184

1190

1207

弥生土器（壷・甕・鉢），土師器（甕），石製品（石庖丁）

160

161

163

168

176

177

178

193

226

229

弥生土器（鉢），石製品（石庖丁），金属製品（鉄鏃）

図版52

242

294

295

298

322

326

333

347

351

354

弥生土器（鉢・高杯・ミニチュア），土製品（土玉）

369

370

486

510

545

549

551

554

596

599

須恵器（杯蓋・杯身），土師質土器（杯），瓦質土器（鍋），土製品（円盤・支脚・土錘），石製品（石庖丁）

図版54

600

637

639

640

660

662

674

675

699

700

弥生土器（壷・鉢・ミニチュア），土師質土器（小皿）

718

720

742

758

759

812

818

822

864

865

弥生土器（鉢），須恵器（杯身），土製品（支脚・盤・土錘），石製品（石鏃・石庖丁）

図版56

901

935

938

940

981

986

986

987

1003

1007

弥生土器（壷・鉢），須恵器（高杯），石製品（石庖丁），金属製品（鉄斧）

1010

1012

1014

1022

1028

1029

1042

1055

1056

1062

弥生土器（壷・鉢・高杯），石製品（石庖丁）

図版58

1066

1099

1100

1114

1116

1125

1178

1180

1182

1201

弥生土器（鉢），土師質土器（羽釜・皿），石製品（石庖丁・スクレイパー）

Ⅳ C 区

調査前風景（西より）

調査区南西部遺構検出状態（西より）

図版60

調査区北西部調査前風景（西より）

調査区北西部遺構検出状態（西より）

調査区南西部遺構完掘状態（西より）

調査区南西部遺構完掘状態（東より）

図版62

調査区東部遺構完掘状態（東より）

調査区北西部遺構完掘状態（西より）

調査区北東部北壁セクション（南東より）

調査区北西部北壁セクション（南より）

図版64

ST108完掘状態（西より）

ST108遺物出土状態1

ST108遺物出土状態2

ST108弥生土器（1256）出土状態

ST108バンクセクション（東より）

SB1完掘状態（北より）

SB2完掘状態（西より）

図版66

調査区北西部遺構完掘状態（東より）

ST107完掘状態（北より）

ST109南北セクション（東より）

ST109南北セクション（西より）

ST109石製品（1274）出土状態

ST109石製品（1275）出土状態

SK6遺物出土状態

SK13セクション（南より）

SK15完掘状態（北より）

SK18弥生土器（1301）出土状態

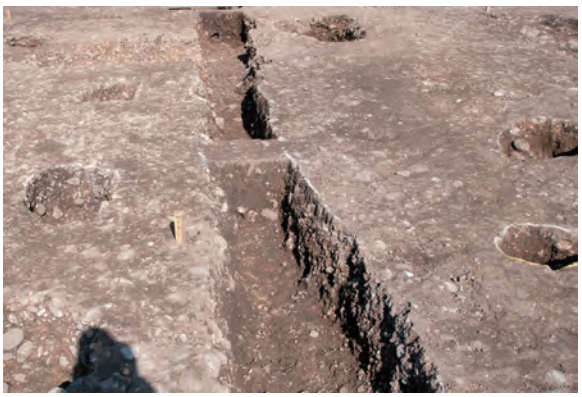
SK33遺物出土状態

SK33セクション（東より）

ハンダ土坑1完掘状態（東より）

ハンダ土坑2～4完掘状態（北より）

SD11バンクセクション（北より）



SD11完掘状態（南より）

図版68

SD13バンクセクション（北より）

SD13完掘状態（北より）

SX1完掘状態（西より）

SX2土製品（1360）出土状態

P4土師質土器（1393）出土状態

P8土師器（1394）出土状態

P11瀬戸焼（1396）出土状態

P13土師質土器（1392）出土状態

Ⅳ C 区出土遺物

1218

1240

1242

1246

1247

1249

1250

1256

弥生土器（甕・鉢・高杯）

図版70

1264

1292

1301

1304

1327

1349

1381

1402

弥生土器（壷・甕），陶器（碗），磁器（猪口），瓦（平瓦），石製品（石庖丁）

1215

1222

1248

1257

1284

1298

1307

1360

1366

1368

弥生土器（壷・鉢），土師器（皿），土師質土器（皿），土製品（支脚），陶器（碗・鉢）

図版72

1370

1370

1372

1384

1393

1396

1403

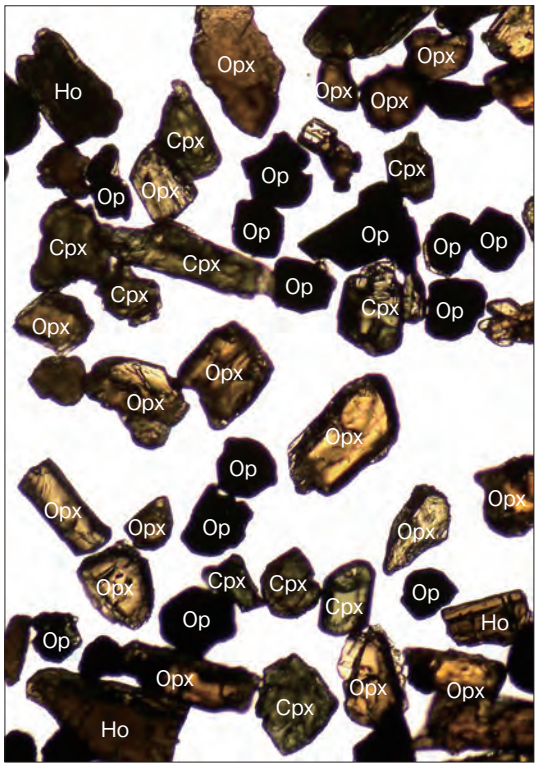
1406

1421

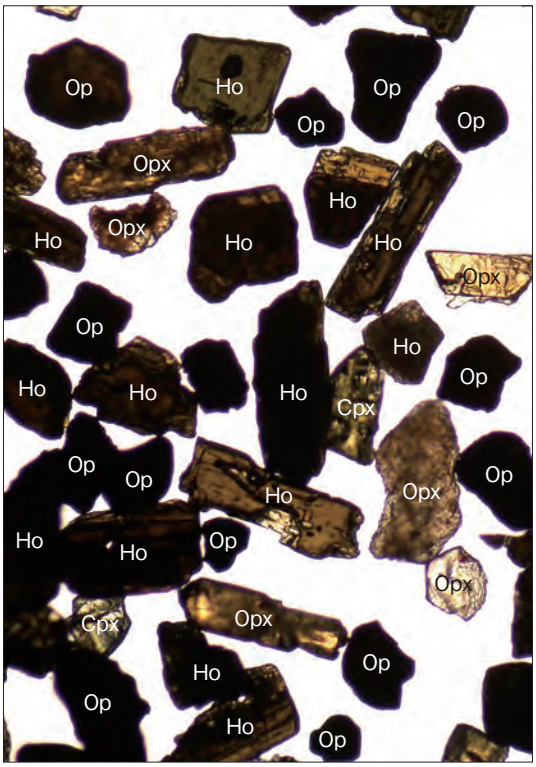
1442

弥生土器(壷), 土師質土器(杯・皿), 青磁(大皿), 瀬戸焼(皿), 磁器(香炉), 石製品(剥片), 金属製品(銭貨)

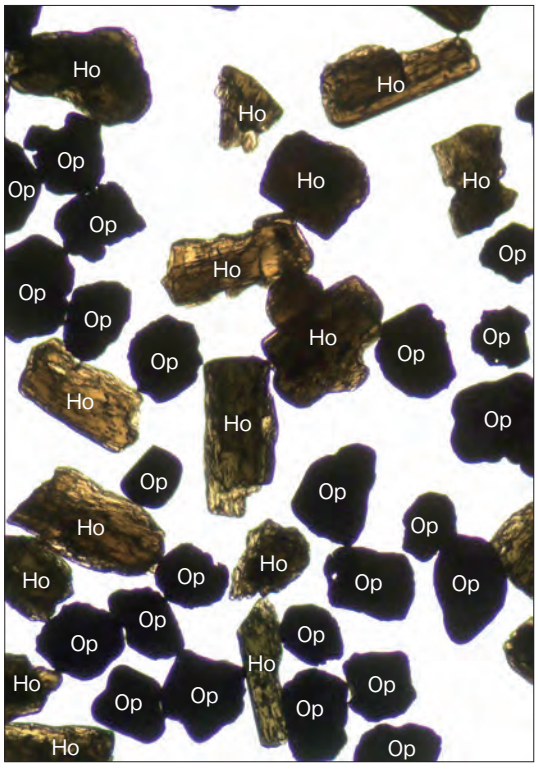
自然科学分析



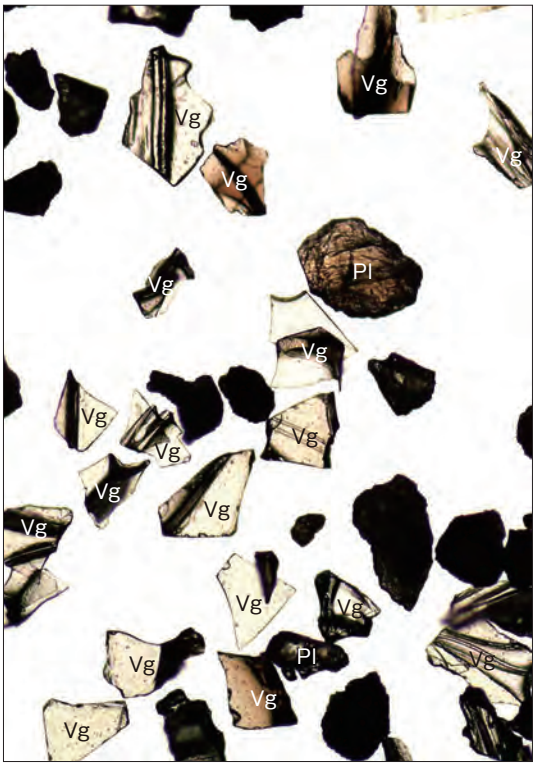
1. 重鉱物（試料番号 3）



2. 重鉱物（試料番号6）



3. 重鉱物（試料番号11）



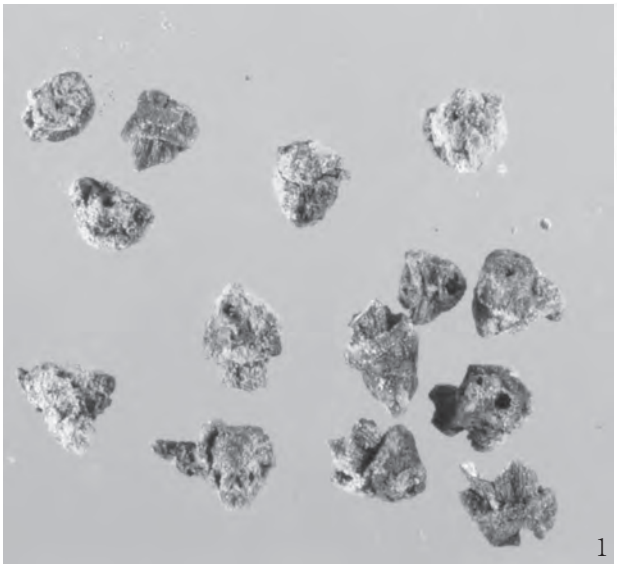
4. 軽鉱物（試料番号3）

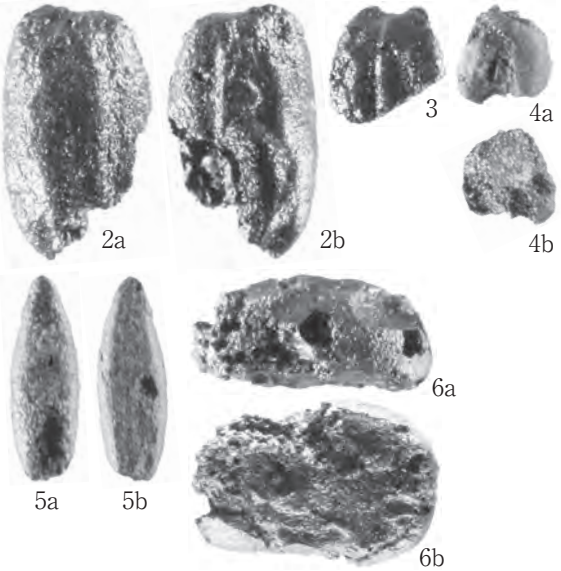
0.5mm

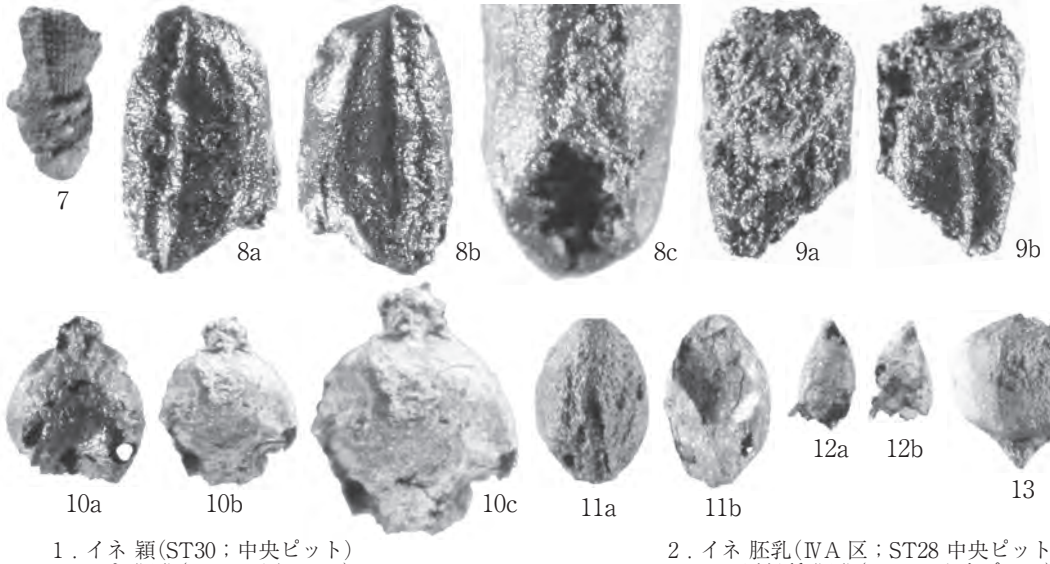
Opx:斜方輝石.Cpx:単斜輝石.Ho:角閃石.Op:不透明鉱物.Vg:火山ガラス.Pl:斜長石.

重鉱物・軽鉱物（ⅣB－1区）

図版 74

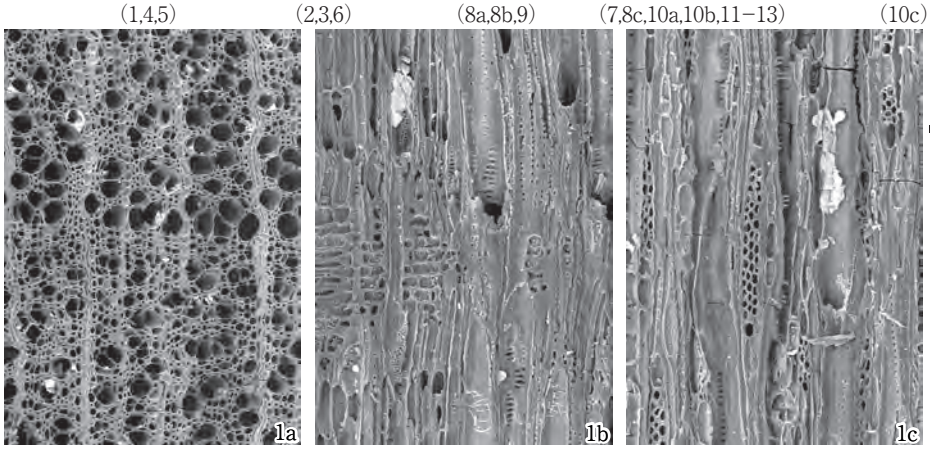






1．イネ 穎(ST30；中央ピット)
2．イネ 胚乳(ⅣA 区；ST28 中央ピット)
3．イネ 胚乳(ⅣB－2 区；SK6)
4．アワ近似種 胚乳(ST30；中央ピット)
5．イネ科 胚乳(ⅣA 区；ST28 中央ピット)
6．マメ類 種子(ⅣB－1 区；ST46 中央ピット)
7．イネ 穎(ⅢB－2 区 ST7 P1；14)
8．イネ 穎・胚乳(ⅢB－2 区 ST2 P1；11)
9．イネ 胚乳(ⅢB－2 区 ST1 P1；9)
10．アワ 穎・胚乳(ⅢB－2 区 ST2 P1；11)
11．ヒエ近似種 胚乳(ⅢB－2 区 ST7 P1；14)
12．イネ科 胚乳(ⅢB－2 区 ST2 P1；11)
13．タデ属 果実(ⅢB－2 区 ST2 P1；11)

2mm (1,4,5)　2mm (2,3,6)　2mm (8a,8b,9)　2mm (7,8c,10a,10b,11−13)　1mm (10c)



200μm (1a)
200μm (1b,c)

ツバキ属
(SK6；2 層)
a:木口,b:柾目,c:板目

種実遺体・炭化材

報告書抄録

ふりがな	ひがしのどいいせきよん
書名	東野土居遺跡Ⅳ
副書名	南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書X
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第150集
編著者名	筒井三菜, 久家隆芳, 矢野雅子, 下村裕, 白石純, パリノ・サーヴェイ㈱
編集機関	公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所在地	高知県南国市篠原1437－1
発行年月日	2018年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしのどいいせき 東野土居遺跡	〒781－5213 こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょうひがしの・どい 野市町東野・土居	39211	200039	33° 33′ 11″	133° 43′ 26″	2010.10.19 ～ 2011.3.3 2011.5.13 ～ 2011.8.30	3,242㎡	記録保存 調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東野土居遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世	竪穴建物跡　42軒 掘立柱建物跡　11棟 柵列跡　1列 土坑　88基 溝跡　34条 性格不明遺構　7基	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 近世陶磁器	弥生時代から古墳時代にかけての集落や古代の建物跡などが確認されている。

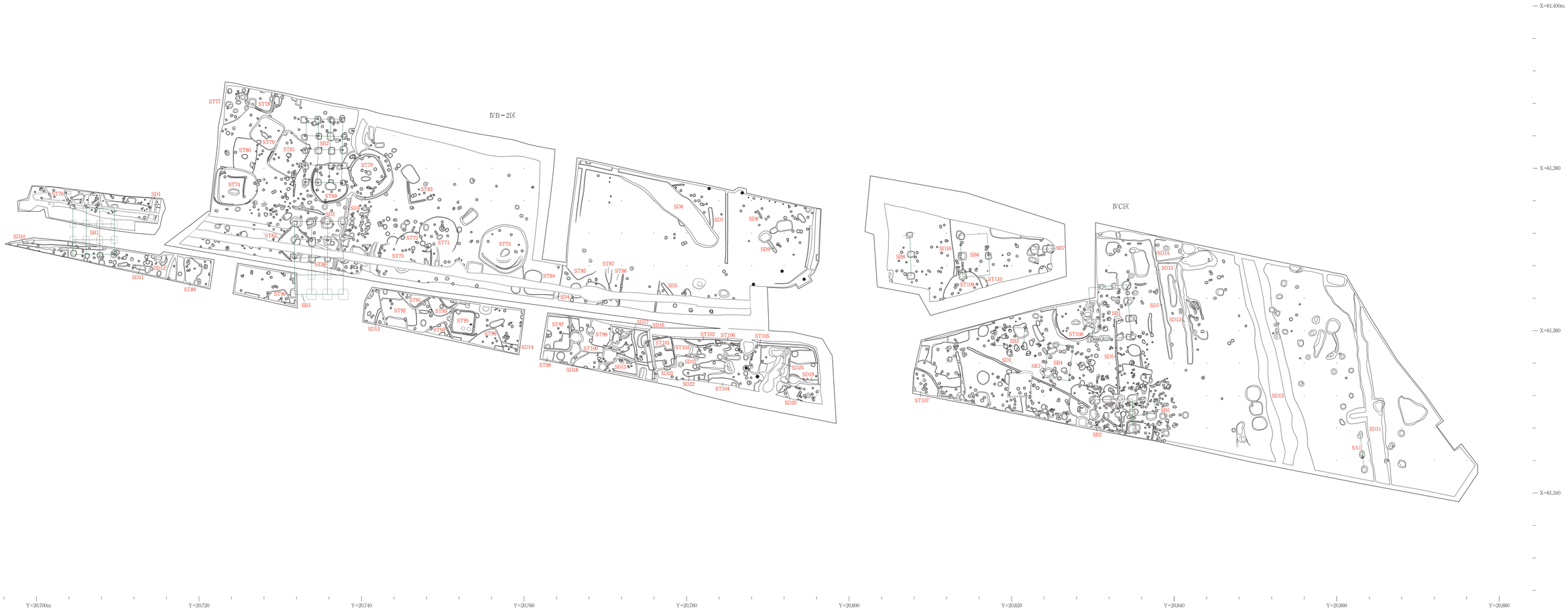
要約

本調査区は香宗川右岸の野市台地縁辺部に立地しており, 調査対象区域全域で弥生時代後葉から古墳時代初頭及び古墳時代後期の竪穴建物跡が42軒検出されており, 当該期の集落が存在していたことが明らかとなった。また, 土器棺墓も7基確認されている。

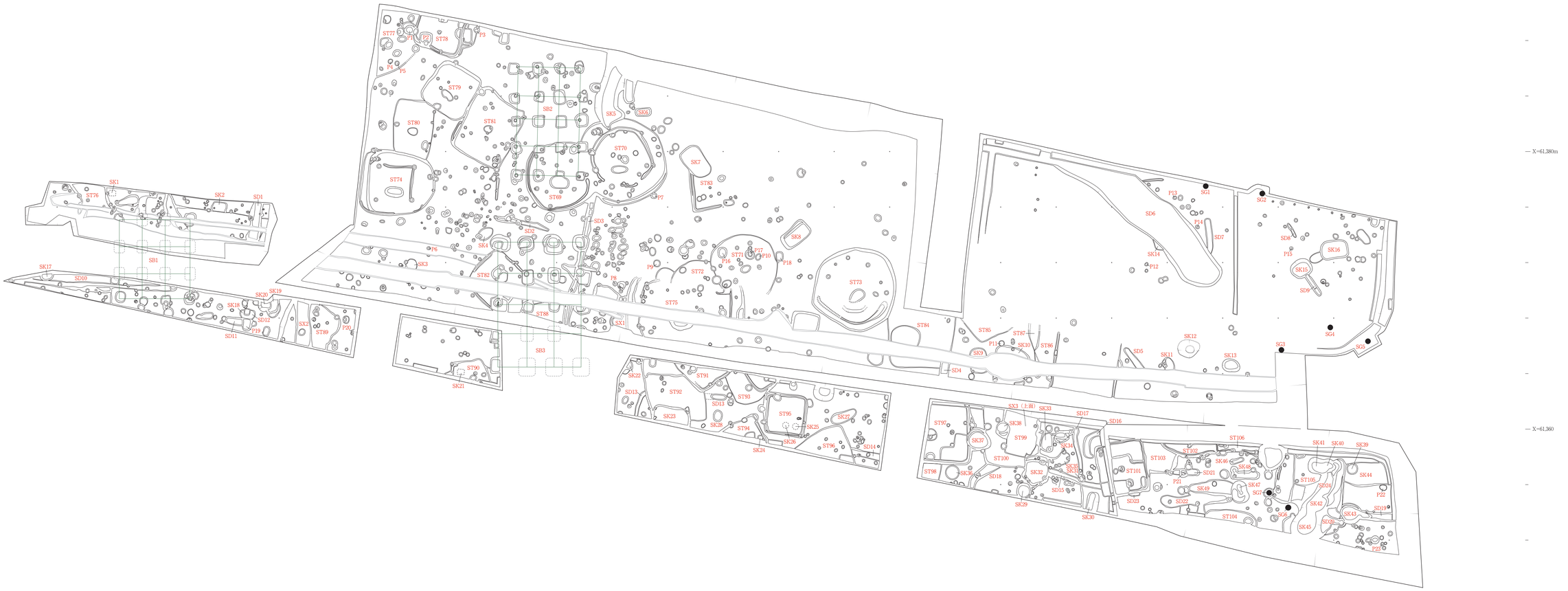
古代では調査対象区域西側で掘方が隅丸方形を呈する掘立柱建物跡が確認されている。また, 当該期の瓦片なども出土していることから当該期には官衙関連施設や寺院に関連する施設があった可能性が考えられる。

付図目次

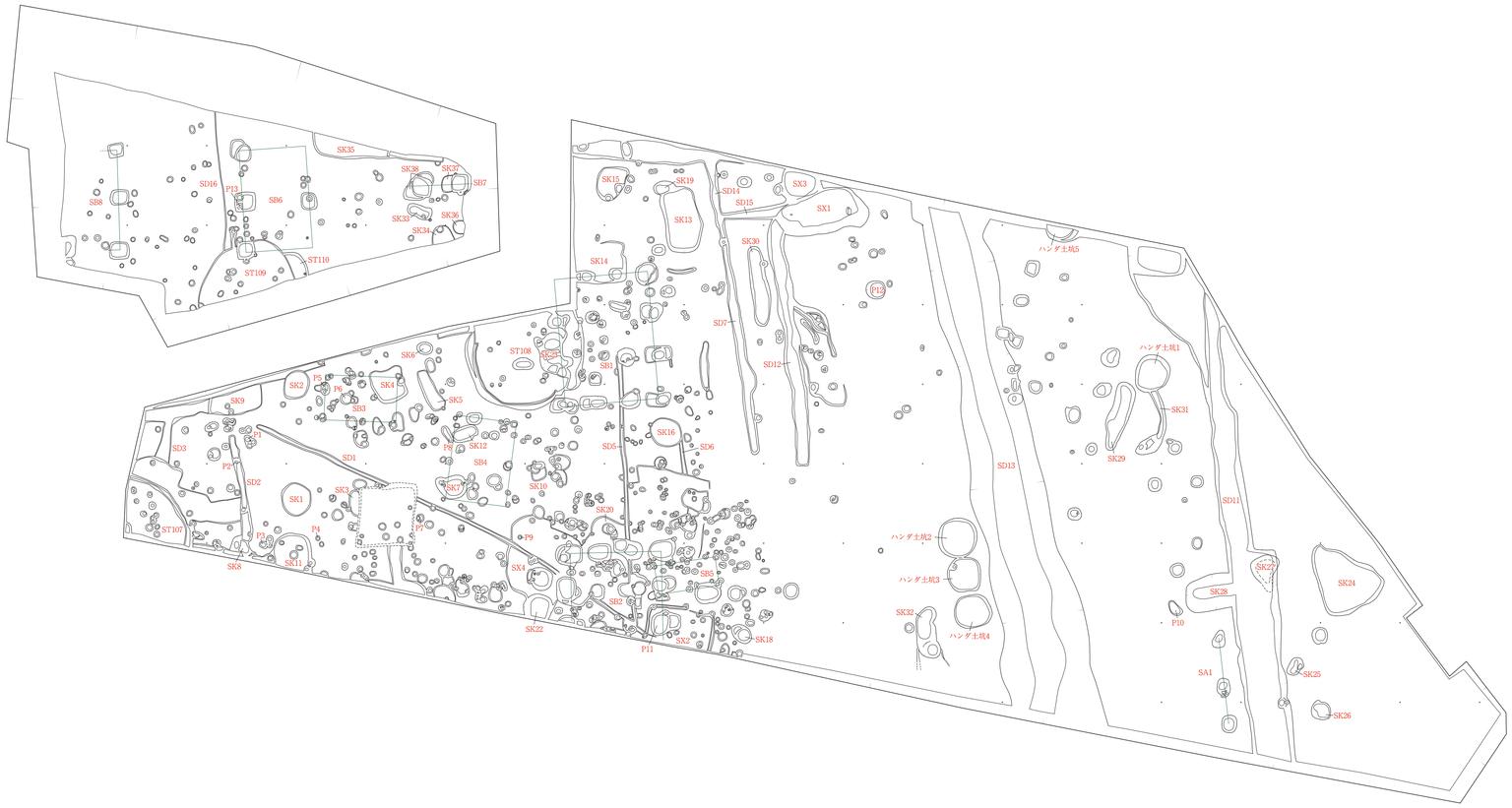
付図1　東野土居遺跡調査第ⅣB－2・ⅣC区遺構平面図（S=1/250）
付図2　東野土居遺跡調査第ⅣB－2区遺構平面図（S=1/150）
付図3　東野土居遺跡調査第ⅣC区遺構平面図（S=1/150）
付図4　東野土居遺跡遺構変遷図（S=1/2,000）
付図5　東野土居遺跡遺構変遷図（S=1/1,000）
付図6　東野土居遺跡出土土器編年試案図



付図1　東野土居遺跡調査第ⅣB－2・ⅣC区遺構平面図(S=1/250)

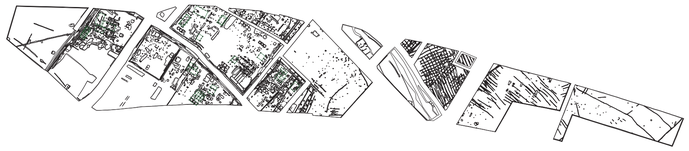


付図2　東野土居遺跡調査第ⅣB－2区遺構平面図(S=1/150)

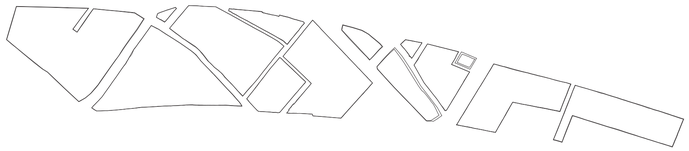


付図3　東野土居遺跡調査第Ⅳ C区遺構平面図(S=1/150)

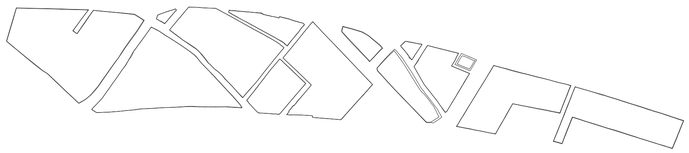
遺構全体図



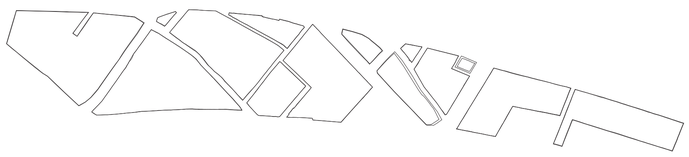
弥生時代遺構図



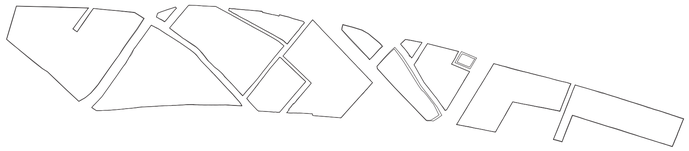
古墳時代遺構図



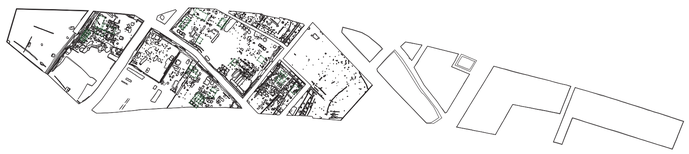
古代遺構図

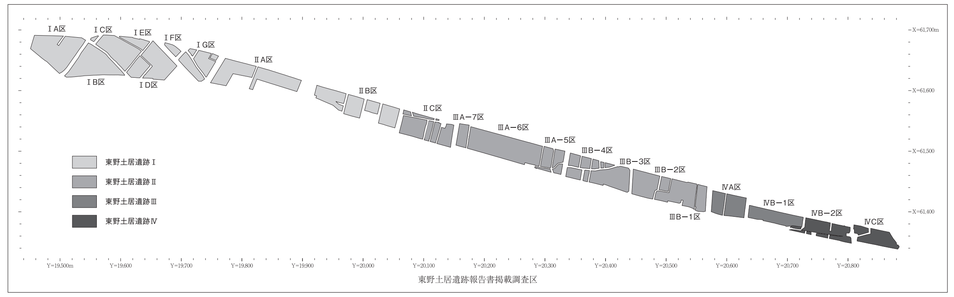


中世遺構図



近世遺構図





東野土居遺跡報告書掲載調査区

遺構全体図

弥生時代遺構図

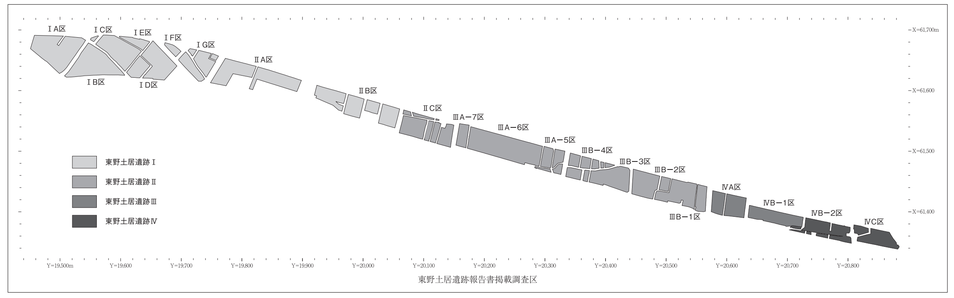
古墳時代遺構図

古代遺構図

中世遺構図

近世遺構平面図

付図4　東野土居遺跡遺構変遷図（S＝1/2,000）



東野土居遺跡報告書掲載調査区

弥生時代遺構図（ⅡC～ⅣC区）

古墳時代遺構図（ⅡC～ⅣC区）

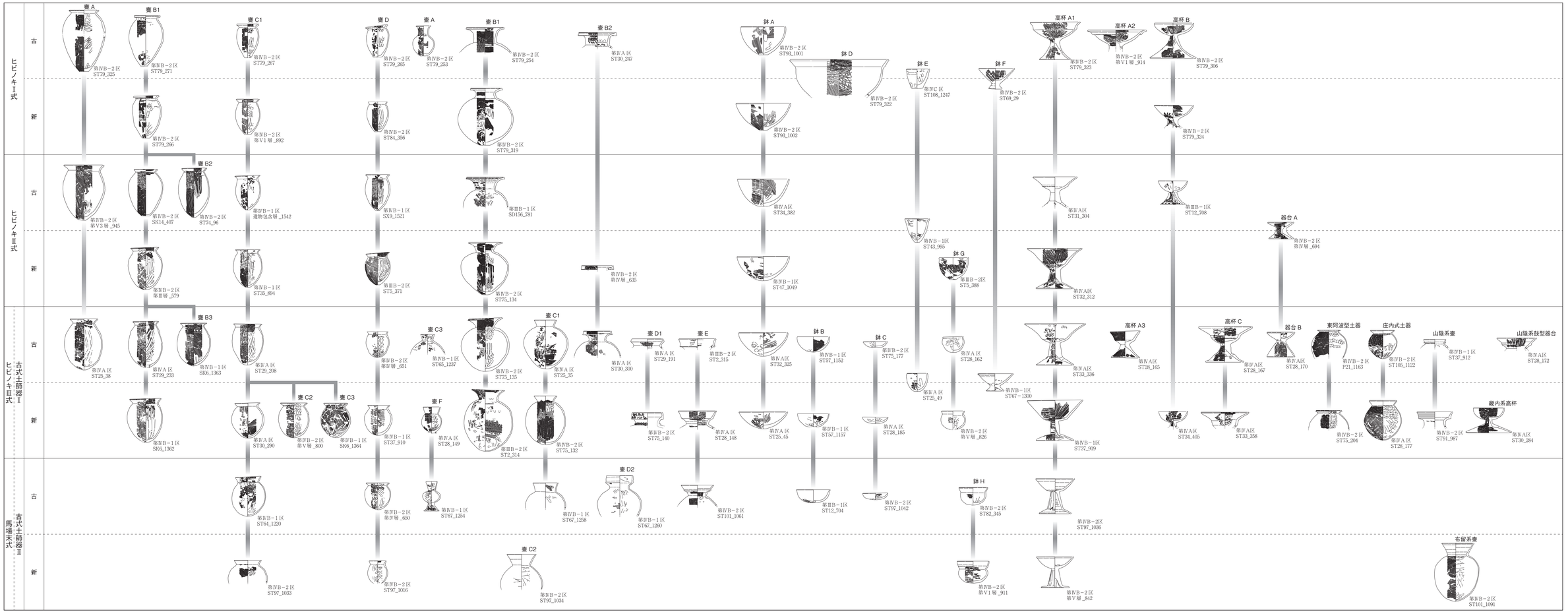
古代遺構図（ⅡC～ⅣC区）

中世遺構図（ⅡC～ⅣC区）

近世遺構図（ⅡC～ⅣC区）

近世遺構図（ⅠA～ⅠE区）

付図5　東野土居遺跡遺構変遷図（S＝1/1,000）



付図 6　東野土居遺跡出土土器編年試案図

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第150集

東野土居遺跡 Ⅳ

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書X

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ）

2018年2月28日

発行　(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437－1

Tel.088－864－0671

印刷　株式会社　飛　　鳥